常磐自動車道遺跡調査報告46

原（はら） B 遺 跡

大田切（おおたぎり）遺跡

序　　文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は，昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間，平成11年にいわき中央～いわき四倉間，平成14年にはいわき四倉～広野間，平成16年には広野～常磐富岡間が開通し，現在は富岡～相馬間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には，先人が残した貴重な文化遺産が所在しており，周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史・文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では，常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について，開発関係機関と協議を重ね，平成５年度以降，埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い，その結果をもとに，平成６年度から，現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成18年度から19年度に行った南相馬市の大田切遺跡と平成18年度に行った南相馬市の原Ｂ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が，文化財に対する御理解を深め，地域の歴史を解明するための基礎資料となり，さらには生涯学習等の資料として広く県民の皆様に活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査から報告書の作成にあたり，御協力いただいた東日本高速道路株式会社，南相馬市教育委員会，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成20年２月

福島県教育委員会

教育長　野　地　陽　一

あ　い　さ　つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託を受けて，県内の大規模開発に先立ち，開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

常磐自動車道建設に際しては，平成６年度から埋蔵文化財の調査を実施しています。南相馬市に所在する埋蔵文化財については，平成９・10年度に分布調査，平成15年度から試掘調査を実施し，平成16年度からは発掘調査を開始しました。

本報告書は，平成18・19年度に実施した発掘調査のうちの，南相馬市に所在する原Ｂ遺跡と大田切遺跡の調査成果をまとめたものです。

原Ｂ遺跡からは，縄文時代早期末葉～前期最初頭，中期前葉の竪穴住居跡が発見され，多数の縄文土器・石器などが出土しました。

大田切遺跡からは，平安時代の竪穴住居跡が発見され，縄文時代後・晩期の土器や石器なども出土しました。

今後，これらの調査成果を郷土の歴史研究の基礎資料として，さらには地域社会を理解することや生涯学習の場などで幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，この調査に御協力いただきました東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所，福島県担当部局，南相馬市並びに地域住民の皆様に，深く感謝申し上げますとともに，当事業団の事業の推進につきまして，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年２月

財団法人　福島県文化振興事業団

理事長　　富　田　孝　志

緒　　言

1　本書は，平成18・19年度に実施した常磐自動車道(相馬工区)遺跡発掘調査の報告書である。

2　本書には以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

原 B 遺 跡　　福島県南相馬市原町区馬場字原　　埋蔵文化財番号：20600288

大田切遺跡　　福島県南相馬市小高区大富字大田切　埋蔵文化財番号：56300135

3　本事業は，福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し，調査に係る費用は東日本高速道路株式会社が負担した。

4　福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査グループの下記の職員を配して調査にあたった。

平成18年度

副　主　幹　安田　　稔　　文化財主査　国井　秀紀　　文化財副主査　青山　博樹

嘱　　託　佐藤　　洋　　嘱　　託　小河　厚子　　嘱　　託　管野　和博

嘱　　託　中野　幸大

平成19年度

副　主　幹　吉田　　功　　文化財副主査　門脇　秀典　　嘱　　託　鈴木　裕一郎

嘱　　託　関根　昌毅

6　本書の執筆にあたっては，発掘調査を担当した職員が分担して行った。

7　本書に掲載した自然科学分析については，遺跡調査グループ整備保存班　文化財主事　小林　啓　が土器に付着していた赤色顔料の蛍光Ｘ線分析と執筆を行ったほか，各種分析を下記の機関に委託した。結果と考察は各編第３章に掲載している。

石器・石製品の石質鑑定　　パリノ・サーヴェイ株式会社

放射性炭素年代測定　　株式会社加速器分析研究所

出土炭化材樹種同定　　株式会社古環境研究所

8　原Ｂ遺跡から出土した石器(一部)の実測図作成は，株式会社ラングに委託した。

9　本書に使用した地図は，国土地理院長の承認を得て，同院発行の20万分の１地形図および５万分の１地形図を複製したものである。「(承認番号)平19東複第196号」

10　本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

11　発掘調査および報告書作成にあたり，次の諸機関からご協力いただいた。

南相馬市教育委員会　東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所(順不同)

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は，以下のとおりである。

（1）方　　位　　平面座標の国土座標軸を基準とした真北方向を図版の真上とした。それ以外のものは挿図中に真北方向を指す方位を示した。

（2）標　　高　　水準点を基にした海抜標高で示した。

（3）縮　　尺　　各挿図中に縮尺率を示した。

（4）土　　層　　基本土層はアルファベット大文字Ｌとローマ数字を組み合わせ，遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。

(例)基本層位－ＬⅠ・ＬⅡ…，遺構内堆積土－ℓ１・ℓ２…

なお，挿図の土層注記で使用した土色名は，『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社)に基づく。

（5）ケ　　バ　　遺構内の傾斜面は「⊤⊤」で表現したが，相対的に緩傾斜の部分は「⊤」で表している。また「⊤」は後世の撹乱が明らかである場合に使用した。

（6）線の表現　　破線は推定範囲，一点鎖線は貼床範囲を示す。

（7）網　か　け　　挿図中の網かけの用例は以下のとおり。それ以外は各図中に表示した。

焼土・酸化範囲　　還元範囲

（8）深　　さ　　ピット番号に付した(　)内の数値は，床面からのピットの深さを示す。

2　本書における遺物図版の用例は，以下のとおりである。

（1）土器断面　　須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記し，胎土中に繊維が混和されたものには▲を付した。

（2）遺物計測値　　(　)内の数値は推定値，〔　〕内の数値は遺存値を示す。

（3）縮　　尺　　各挿図中に縮尺率を示した。

（4）網　か　け　　挿図中の網かけの用例は以下のとおり。それ以外は各図中に表示した。

黒色処理　　擦り面

3　本書における本文中の遺物の番号は，挿図番号と対照できるようにして，以下のとおり記した。

(例) 図１の１番　→　図１－１

また，写真図版の遺物に付けた挿図番号は以下のとおり記した。

(例) 図１の１番　→　１－１

4　本書で使用した略号は，次のとおりである。

南相馬市…ＭＳＣ	原Ｂ遺跡…Ｈ・Ｂ	大田切遺跡…ＯＴＧ	
竪穴住居跡…ＳＩ	木炭窯跡…ＳＣ	土　坑…ＳＫ	焼土遺構…ＳＧ
土器埋設遺構…ＳＭ	溝　跡…ＳＤ	道　跡…ＳＦ	特殊遺構…ＳＸ
ピット…Ｐ	グリッド…Ｇ		

5　参考・引用文献は執筆者の敬称を省略し，各編の末にまとめて収めた。

目　　次

序　章

第１節　調査経過…… 1

第２節　地理的環境…… 3

第３節　歴史的環境…… 9

第１編　原Ｂ遺跡

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　位置と地形…… 15

第２節　調査経過…… 15

第３節　調査方法…… 18

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と基本土層…… 19

遺構の分布(19)　基 本 土 層(19)　遺跡の年代と土器の分類(22)

第２節　竪穴住居跡…… 24

１号住居跡(24)　２号住居跡(26)　４号住居跡(28)　５号住居跡(30)

６号住居跡(34)　７号住居跡(37)　８号住居跡(39)　９号住居跡(42)

10号住居跡(44)　11号住居跡(49)　12号住居跡(51)　13号住居跡(53)

14号住居跡(58)

第３節　土　　坑…… 60

１ 号 土 坑(60)　２ 号 土 坑(62)　３ 号 土 坑(62)　４ 号 土 坑(62)

５ 号 土 坑(62)　６ 号 土 坑(63)　７ 号 土 坑(63)　８ 号 土 坑(63)

９ 号 土 坑(63)　10 号 土 坑(65)　11 号 土 坑(65)　12 号 土 坑(65)

13 号 土 坑(65)　14 号 土 坑(65)　15 号 土 坑(67)　16 号 土 坑(67)

17 号 土 坑(67)　18 号 土 坑(67)　19 号 土 坑(68)　20 号 土 坑(68)

21 号 土 坑(68)　22 号 土 坑(68)　23 号 土 坑(70)　24 号 土 坑(70)

25 号 土 坑(70)　26 号 土 坑(70)　27 号 土 坑(71)　28 号 土 坑(71)

29 号 土 坑(71)　30 号 土 坑(71)　31 号 土 坑(73)　32 号 土 坑(73)

33 号 土 坑(73)　34 号 土 坑(73)　35 号 土 坑(74)　36 号 土 坑(74)

37 号 土 坑(74)　38 号 土 坑(74)　39 号 土 坑(77)

第４節　焼土遺構…… 77
１号焼土遺構(77)　２号焼土遺構(78)　３号焼土遺構(78)　４号焼土遺構(78)
５号焼土遺構(78)　６号焼土遺構(78)　７号焼土遺構(80)　８号焼土遺構(80)
９号焼土遺構(80)　10号焼土遺構(80)　11号焼土遺構(80)　12号焼土遺構(82)
13号焼土遺構(82)　14号焼土遺構(82)　15号焼土遺構(82)　16号焼土遺構(82)
17号焼土遺構(83)　18号焼土遺構(83)　19号焼土遺構(83)　20号焼土遺構(83)
21号焼土遺構(83)　22号焼土遺構(85)　23号焼土遺構(85)
第５節　土器埋設遺構…… 85
１号土器埋設遺構(85)　２号土器埋設遺構(87)
第６節　その他の遺構…… 87
１号特殊遺構(87)　２号特殊遺構(87)　ピット(89)
第７節　遺構外出土遺物…… 90
土　　器(90)　石　　器(102)
第３章　自然科学分析
第１節　赤色顔料の蛍光Ｘ線分析…… 104
第２節　出土石器石質鑑定…… 105
第３節　炭化材の樹種同定…… 109
第４節　放射性炭素年代測定(AMS測定) …… 112
第４章　ま　と　め
第１節　遺物について…… 117
第２節　遺構について…… 122
第２編　大田切遺跡
第１章　遺跡の位置と調査経過
第１節　位置と地形…… 129
第２節　調査経過…… 131
第３節　調査方法…… 132
第２章　遺構と遺物
第１節　遺構の概要と基本土層…… 134
第２節　竪穴住居跡…… 139
１号住居跡(139)　２号住居跡(142)　３号住居跡(146)
第３節　木炭窯跡…… 149
１号木炭窯跡(149)　２号木炭窯跡(153)

第４節　溝　　跡…… 156
１号溝跡(156)
第５節　道　　跡…… 158
１号道跡(158)
第６節　土　　坑…… 161
１号土坑(161)　２号土坑(161)　３号土坑(161)　４号土坑(162)
５号土坑(162)　６号土坑(162)　７号土坑(164)　８号土坑(164)
９号土坑(164)　10号土坑(166)　11号土坑(166)　12号土坑(166)
13号土坑(166)　14号土坑(167)　15号土坑(167)　16号土坑(167)
17号土坑(168)　18号土坑(168)　19号土坑(168)　20号土坑(168)
21号土坑(170)　22号土坑(170)　23号土坑(170)　24号土坑(172)
25号土坑(172)　26号土坑(172)　27号土坑(172)　28号土坑(174)
29号土坑(174)　30号土坑(174)　31号土坑(174)　32号土坑(175)
33号土坑(175)　34号土坑(175)　35号土坑(175)　36号土坑(177)
37号土坑(177)　38号土坑(177)　39号土坑(178)
第７節　特殊遺構…… 179
１号特殊遺構(179)
第８節　遺構外出土遺物…… 180
縄文土器(180)　須恵器(182)　石器・石製品(183)
第３章　自然科学分析
第１節　赤色顔料の蛍光Ｘ線分析…… 184
第４章　ま　と　め …… 186

挿図・表目次

序　章

〔挿　図〕

図１　常磐自動車道位置図…… 1
図２　常磐自動車道関連遺跡
（原町・小高区）と地形断面図…… 4
図３　南相馬市の地形と地質…… 6
図４　周辺の遺跡位置…… 10

〔　表　〕

表１　常磐自動車道（南相馬市南部）の
遺跡と立地…… 5
表２　周辺遺跡一覧…… 11

第１編　原Ｂ遺跡

〔挿　図〕

図１　原Ｂ遺跡調査区位置図…… 16
図２　グリッド配置図…… 17
図３　遺構配置図・土層観察地点(1)…… 20
図４　遺構配置図・土層観察地点(2)…… 21
図５　基本土層…… 22
図６　１号住居跡…… 24
図７　１号住居跡出土遺物…… 25
図８　２号住居跡，出土遺物…… 27
図９　４号住居跡，出土遺物…… 29
図10　５号住居跡…… 31
図11　５号住居跡出土遺物(1)…… 33
図12　５号住居跡出土遺物(2)…… 34
図13　６号住居跡…… 35
図14　６号住居跡出土遺物…… 36
図15　７号住居跡…… 37
図16　７号住居跡出土遺物…… 38
図17　８号住居跡出土炭化材…… 40
図18　８号住居跡，出土遺物…… 41
図19　９号住居跡…… 43
図20　９号住居跡出土遺物…… 44
図21　10号住居跡…… 45
図22　10号住居跡出土遺物(1)…… 46
図23　10号住居跡出土遺物(2)…… 47
図24　11号住居跡…… 50
図25　11号住居跡出土遺物…… 51
図26　12号住居跡，出土遺物…… 52
図27　13号住居跡…… 54
図28　13号住居跡出土遺物(1)…… 56
図29　13号住居跡出土遺物(2)…… 57
図30　14号住居跡，出土遺物…… 59
図31　１～５号土坑…… 61
図32　６～13号土坑…… 64
図33　14～21号土坑…… 66
図34　22～27号土坑…… 69
図35　28～34号土坑…… 72
図36　35～39号土坑…… 75
図37　土坑出土遺物(1)…… 76
図38　土坑出土遺物(2)…… 77
図39　１～９号焼土遺構…… 79
図40　10～16号焼土遺構…… 81
図41　17～23号焼土遺構，出土遺物…… 84
図42　１・２号土器埋設遺構，出土遺物…… 86
図43　１号特殊遺構…… 88
図44　２号特殊遺構…… 89
図45　ピット，出土遺物…… 90
図46　遺構外出土土器分布図…… 91
図47　遺構外出土石器分布図…… 92
図48　遺構外出土遺物(1)…… 93
図49　遺構外出土遺物(2)…… 94
図50　遺構外出土遺物(3)…… 95
図51　遺構外出土遺物(4)…… 98
図52　遺構外出土遺物(5)…… 99
図53　遺構外出土遺物(6)…… 100
図54　遺構外出土遺物(7)…… 101
図55　遺構外出土遺物(8)…… 102
図56　赤彩土器のＸ線スペクトル…… 104
図57　出土石器の岩種構成…… 108
図58　炭化材の顕微鏡写真…… 111
図59　暦年補正…… 115
図60　Ⅰ群土器…… 118
図61　Ⅱ群土器…… 120
図62　縄文早・中期の遺構…… 123

〔　表　〕

表１　７号住居跡出土石器石材別重量…… 38
表２　出土石器一覧表…… 106
表３　出土石器の器種－岩種表…… 108
表４　樹種同定結果…… 110
表５　放射性炭素年代測定結果…… 115
表６　暦年較正年代…… 115

第２編　大田切遺跡

〔挿　図〕

図１　調査区・工事計画図…… 130
図２　グリッド遺構配置図…… 133
図３　遺構配置図（Ⅰ区）…… 135
図４　遺構配置図（Ⅱ区）…… 136
図５　遺構配置図（Ⅲ区）…… 137
図６　基本土層…… 138
図７　１号住居跡…… 139
図８　１号住居跡カマド…… 140
図９　１号住居跡出土土師器…… 141
図10　２号住居跡…… 143
図11　２号住居跡カマド…… 144
図12　２号住居跡出土土師器・須恵器…… 145
図13　３号住居跡…… 146
図14　３号住居跡カマド…… 147
図15　３号住居跡出土土師器…… 148
図16　１号木炭窯跡(1)…… 150
図17　１号木炭窯跡(2)…… 151
図18　２号木炭窯跡…… 154
図19　１号溝跡…… 157
図20　１号道跡…… 159
図21　１号道跡，出土縄文土器・
　　磁器・鉄製品…… 160
図22　１～７・９号土坑…… 163
図23　８・10～14号土坑…… 165
図24　15～19・21号土坑…… 169
図25　20・22～26号土坑…… 171
図26　27～32号土坑…… 173
図27　33～37号土坑…… 176
図28　38・39号土坑，出土縄文土器・
　　土師器・かわらけ…… 178
図29　１号特殊遺構…… 179
図30　遺構外出土縄文土器…… 181
図31　遺構外出土縄文土器・
　　須恵器・石器・石製品…… 182
図32　赤彩土器のＸ線スペクトル…… 185

〔　表　〕

表１　土器計測表…… 183

写　真　目　次

第１編　原Ｂ遺跡

１　調査区遠景…… 189
２　調査区全景…… 189
３　基本土層…… 190
４　調査区南側住居跡群全景…… 190
５　調査区北側住居跡群全景…… 191
６　１号住居跡遺物出土状況…… 191
７　２号住居跡全景…… 192
８　２号住居跡細部…… 192
９　４号住居跡全景…… 193
10　５・７号住居跡全景…… 193
11　５・７号住居跡細部…… 194
12　６号住居跡全景…… 195
13　６号住居跡細部…… 195
14　８号住居跡全景…… 196
15　８号住居跡細部…… 196
16　９号住居跡全景…… 197
17　９号住居跡細部…… 197
18　10号住居跡全景…… 198
19　10号住居跡細部…… 198
20　11号住居跡全景…… 199
21　11号住居跡細部…… 199
22　12号住居跡全景…… 200
23　12号住居跡細部…… 200
24　13号住居跡全景…… 201
25　13号住居跡細部…… 201

26 14号住居跡全景…… 202
27 14号住居跡細部…… 202
28 調査区中央土坑群全景…… 203
29 １～４号土坑…… 203
30 ５～12号土坑…… 204
31 13～19号土坑…… 205
32 20～24号土坑…… 206
33 25～32号土坑…… 207
34 33～36号土坑…… 208
35 37～39号土坑…… 209
36 １～５号焼土遺構…… 209
37 ４～11号焼土遺構…… 210
38 12～19号焼土遺構…… 211
39 20～23号焼土遺構…… 212
40 １・２号土器埋設遺構…… 212
41 １号特殊遺構全景…… 213
42 ２号特殊遺構検出…… 213
43 １号住居跡出土遺物…… 214
44 ２・５号住居跡出土遺物…… 214
45 ５・６号住居跡出土遺物…… 215
46 ６・７号住居跡出土遺物…… 215
47 ９・10号住居跡出土遺物…… 216
48 ８・11号住居跡出土遺物…… 217
49 12・14号住居跡出土遺物…… 217
50 13号住居跡出土遺物…… 218
51 土坑・土器埋設遺構・ピット
出土遺物…… 219
52 土器埋設遺構出土遺物…… 220
53 遺構内出土石器(1)…… 220
54 遺構内出土石器(2)…… 221
55 遺構内出土石器(3)…… 222
56 遺構外出土土器(1)…… 223
57 遺構外出土土器(2)…… 223
58 遺構外出土土器(3)…… 224
59 遺構外出土石器(1)…… 224
60 遺構外出土石器(2)…… 225
61 縄文土器細部…… 226

第２編　大田切遺跡

1 遺跡遠景…… 229
2 調査Ⅰ・Ⅱ区全景…… 229
3 Ⅰ区全景…… 230
4 Ⅱ区全景…… 230
5 Ⅲ区全景…… 231
6 調査前近景，基本土層…… 231
7 １号住居跡全景…… 232
8 １号住居跡細部…… 232
9 ２号住居跡全景…… 233
10 ２号住居跡細部…… 233
11 ３号住居跡全景…… 234
12 ３号住居跡細部…… 234
13 １号木炭窯跡全景(第１操業面)…… 235
14 １号木炭窯跡細部…… 235
15 １号木炭窯跡各操業面…… 236
16 ２号木炭窯跡全景…… 237
17 ２号木炭窯跡細部…… 237
18 １号溝跡全景…… 238
19 １号溝跡細部…… 238
20 １号道跡完掘状況…… 239
21 １号道跡細部…… 239
22 １～７号土坑…… 240
23 ８～15号土坑…… 241
24 16～22号土坑…… 242
25 23～28号土坑…… 243
26 29～35号土坑…… 244
27 36～39号土坑，１号特殊遺構…… 245
28 １～３号住居跡出土土師器…… 246
29 １号住居跡出土土師器…… 246
30 ２号住居跡，１号道跡，
20・25号土坑出土縄文土器・
土師器・須恵器・鉄製品…… 247
31 遺構外出土縄文土器(1)…… 247
32 遺構外出土縄文土器(2)…… 248
33 遺構外出土縄文土器・須恵器・
石器・石製品…… 248

序　　章

第１節　調　査　経　過

平成17年度までの調査経過

埼玉県三郷市を起点とする常磐自動車道は，平成11年３月までにいわき四倉インターチェンジ(以下ＩＣと略す)までの供用を開始している。供用が開始された福島県内区間の四倉ＩＣまでに所在する埋蔵文化財のうち，いわき市四倉町大野地区の10遺跡の発掘調査については，福島県教育委員会が財団法人福島県文化センターに委託して実施した。さらに福島県教育委員会では，いわき四倉ＩＣ以北の路線内に所在する埋蔵文化財に関して，平成６年度より表面調査を実施し，平成10年度までに宮城県境まで終了している。

表面調査の成果を受けて，平成７年度よりいわき四倉ＩＣ～富岡ＩＣ間の試掘調査を実施し，平成９年度からは同区間に所在する遺跡の発掘調査が開始されている。平成９年度はいわき市内の５遺跡と広野町内の１遺跡の発掘調査を実施し，平成10年度はいわき市内の４遺跡，広野町内の３遺跡，楢葉町内の３遺跡，富岡町内の２遺跡の発掘調査を実施した。平成11年度は，広野町内の４遺跡，楢葉町内の５遺跡について実施した。平成12年度は，広野町内の１遺跡，楢葉町内の７遺跡，富岡町内の５遺跡について実施した。平成13年度の調査では，楢葉町内の１遺跡，富岡町内の５遺跡について発掘調査を実施し，13年度までの調査によって楢葉町大谷上ノ原遺跡のⅡ期線部を残して楢葉町以南の発掘調査を全て終了した。平成14年度は，富岡町の１遺跡，大熊町の２遺跡について発掘調査を実施した。なお，平成14年度には，当初富岡ＩＣまでについては日本道路公団東北支

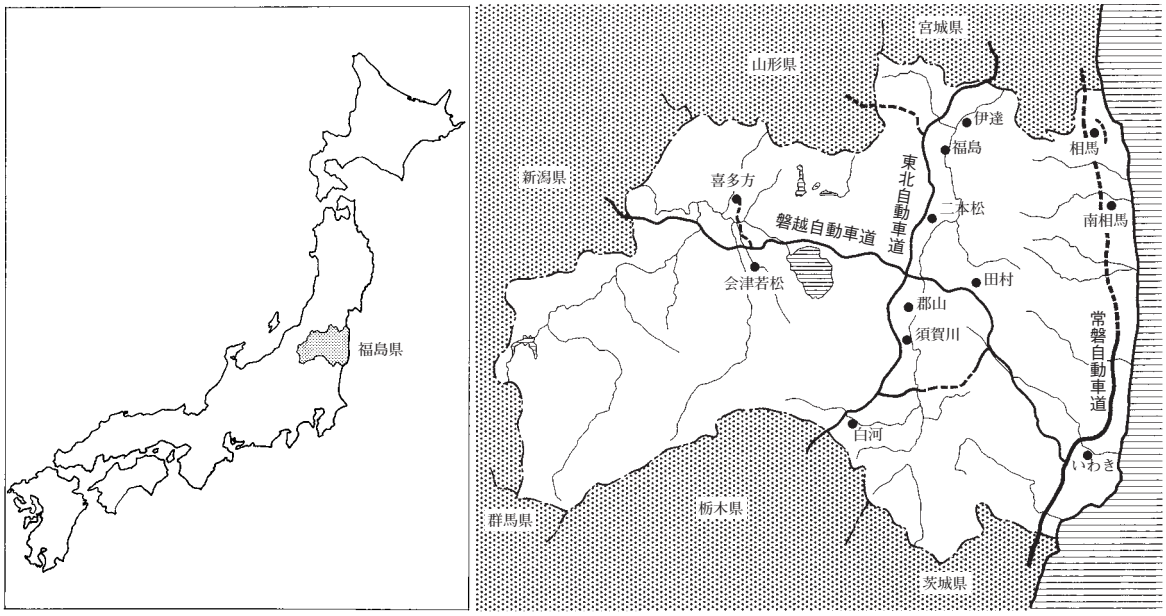


図１　常磐自動車道位置図

社いわき工事事務所，富岡ＩＣから大熊町以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが，年度途中から富岡ＩＣ～浪江ＩＣまでの区間についてもいわき工事事務所が管轄することとなった。平成15年度は，相馬工事事務所が管轄する区域でも発掘調査が実施されるようになり，相馬市の２遺跡，いわき工事事務所管轄区内に所在する浪江町の２遺跡について発掘調査を実施した。平成16年度は，いわき工事事務所管轄区域である双葉町の３遺跡，相馬工事事務所管轄の相馬市の１遺跡と南相馬市鹿島区の２遺跡について発掘調査を実施した。平成17年度の常磐自動車道関連の調査は，いわき工事事務所管轄区域である大熊町の３遺跡・双葉町の２遺跡・浪江町の２遺跡，相馬工事事務所管轄の相馬市の１遺跡・南相馬市の５遺跡である。

平成18年度の調査経過

平成18年度の相馬工事事務所管轄の発掘調査は，相馬市に所在する山岸硝庫跡・西原遺跡，南相馬市鹿島区に所在する北山下遺跡，南相馬市原町区に所在する仲山Ｂ遺跡・小池田遺跡・赤柴遺跡・原Ｂ遺跡，南相馬市小高区に所在する荻原遺跡（２次調査）・大田切遺跡・大田和広畑・広谷地遺跡の11遺跡を対象に，13名の調査員を配して実施した。

年度前半期の発掘調査は，優先順の高い北山下遺跡・赤柴遺跡・原Ｂ遺跡・大田切遺跡の４遺跡を対象に実施した。いずれも４月中旬には表土除去作業を開始し，併せて調査環境を整えた。北山下遺跡は３年目の調査となり，検出された道跡遺構から現道路が中世からの道を踏襲して設けられていることが判明した。赤柴・原Ｂ遺跡は縄文時代の集落遺跡であり，住居跡・墓坑・貯蔵穴などが検出されている。大田切遺跡からは木炭窯跡と３軒の平安時代の住居跡が検出されている。なお，大田切遺跡の当初調査指示面積は4,300㎡であったが，試掘調査結果により3,800㎡の追加指示があった。また，赤柴遺跡でも面積調整の必要から3,500㎡の当初面積に2,900㎡の追加指示があった。

北山下遺跡調査班は５月の連休前に調査を終了し，山岸硝庫跡の調査に移動した。原Ｂ・大田切遺跡調査班はお盆前に調査を終了し，試掘調査結果によって追加された大田和広畑遺跡と当初から予定の広谷地遺跡に移動した。その後，さらに試掘によって確定した仲山Ｂ遺跡と新発見となった小池田遺跡が追加されたことから，年度後半期は再編した調査班によって調査を実施した。

大田和広畑遺跡では鍛冶炉を伴う平安時代の住居跡と縄文時代の貯蔵穴が，広谷地遺跡からは縄文時代の住居跡と平安時代の土坑などが検出されている。

赤柴遺跡と山岸硝庫跡は９月下旬には調査をほぼ終了し，荻原遺跡と西原遺跡へと移動した。山岸硝庫跡は平成15年度調査に続く２次調査であり，相馬藩の火薬庫の全貌がほぼ明らかとなった。

西原遺跡は縄文時代の包含層と平安時代の土坑が検出され，仲山Ｂ遺跡では古代末と考えられる精錬鍛冶炉跡が検出された。小池田遺跡は，工事計画と調整を図りつつ今年度は1,000㎡の調査としたが，縄文時代の遺物が多量に出土した。荻原遺跡は縄文時代の集落跡と平安時代の製鉄関連遺構の調査となったが，調査終盤に旧石器時代の石器が出土し，調査終了は12月19日であった。なお，平成19年３月に小池田・広谷地遺跡の合計4,500㎡について表土掘削を実施した。

平成19年度の調査経過

平成19年度の常磐自動車道(浪江～相馬)建設予定地に関わる遺跡発掘調査は，福島県教育委員会との委託契約に基づき遺跡調査部の職員17名を配置して実施した。計画段階では南相馬市原町区の中山Ｃ遺跡を含め13遺跡，計51,040㎡の調査が予定されたが，工事計画の変更等もあり関係機関で協議した結果，調査対象遺跡および調査範囲の調整を行い，南相馬市原町区に所在する小池田遺跡(２次調査)・西内遺跡・石神遺跡・戸鳥土遺跡・赤柴遺跡(２次調査)・切付遺跡・片倉遺跡の７遺跡と同市小高区に所在する荻原遺跡(３次調査)・君ヶ沢Ｂ遺跡・大田切遺跡(２次調査)・横大道遺跡・大田和広畑遺跡(２次調査)・広谷地遺跡(２次調査)の６遺跡，計13遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は総計で51,100㎡である。

東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所(以下，相馬工事事務所と略す)との事前協議を受けて，当初，小高区内では工事着手の早い大田切遺跡と広谷地遺跡，調査予定面積の広い荻原遺跡の発掘調査を優先に計画されたが，荻原遺跡では春先にかけて調査予定地の隣接地域で，環境省公表の鳥類レッドリストの準絶滅危惧種に指定されるオオタカの営巣が確認されたことから，調査開始がオオタカの雛鳥の巣立ち以降に先送りされることとなったため，原町区内で優先度の高いとされた小池田遺跡・赤柴遺跡に加えて小高区の大田切遺跡・大田和広畑遺跡・広谷地遺跡の５遺跡について４月より発掘調査を開始した。大田切遺跡の調査は，市道の付け替え工事が終了したことを受けて４月13日から着手した。当初より予定された旧市道金谷大富３号線の道路下500㎡の調査となったが，近世以降の所産とされる道跡等を検出したほか，遺物も縄文土器・陶器のほか鉄製品が出土した。農繁期でもあり，相馬工事事務所および工事施工の共同企業体から依頼された，近接する農地への作業用通路の確保を行いつつの調査となったが，５月15日には調査を終了，同日，工事事務所立ち会いのもとに調査の終了確認・引き渡しを行って，同じ小高区内の横大道遺跡の調査へと移行した。　(吉　田)

第２節　地 理 的 環 境

福島県は東北地方南端に位置し，県土面積13,782㎢と全国で３番目の広さを有している。この内，およそ８割は山地で占められ，東部には太平洋に沿って阿武隈高地，中央部には奥羽山脈，西部には越後山脈がせまっている。これらの山地はほぼ南北に走り，県内は太平洋側より「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の三地域に区分される。この内，本報告書に掲載した原Ｂ遺跡・大田切遺跡は，浜通り地方北部の南相馬市に所在する。行政区分では原Ｂ遺跡は南相馬市原町区馬場字原に，大田切遺跡は南相馬市小高区大富字大田切に位置する。

浜通り地方の地形は，大きく阿武隈高地・河岸段丘(丘陵)地帯・海岸低地帯の３つに分けることができる。阿武隈高地は東西約50㎞，南北約200㎞の規模を有し，標高500～700ｍのなだらかな平坦面を残す隆起準平原であると考えられている。阿武隈高地の分水界には，霊山(825ｍ)，花塚山

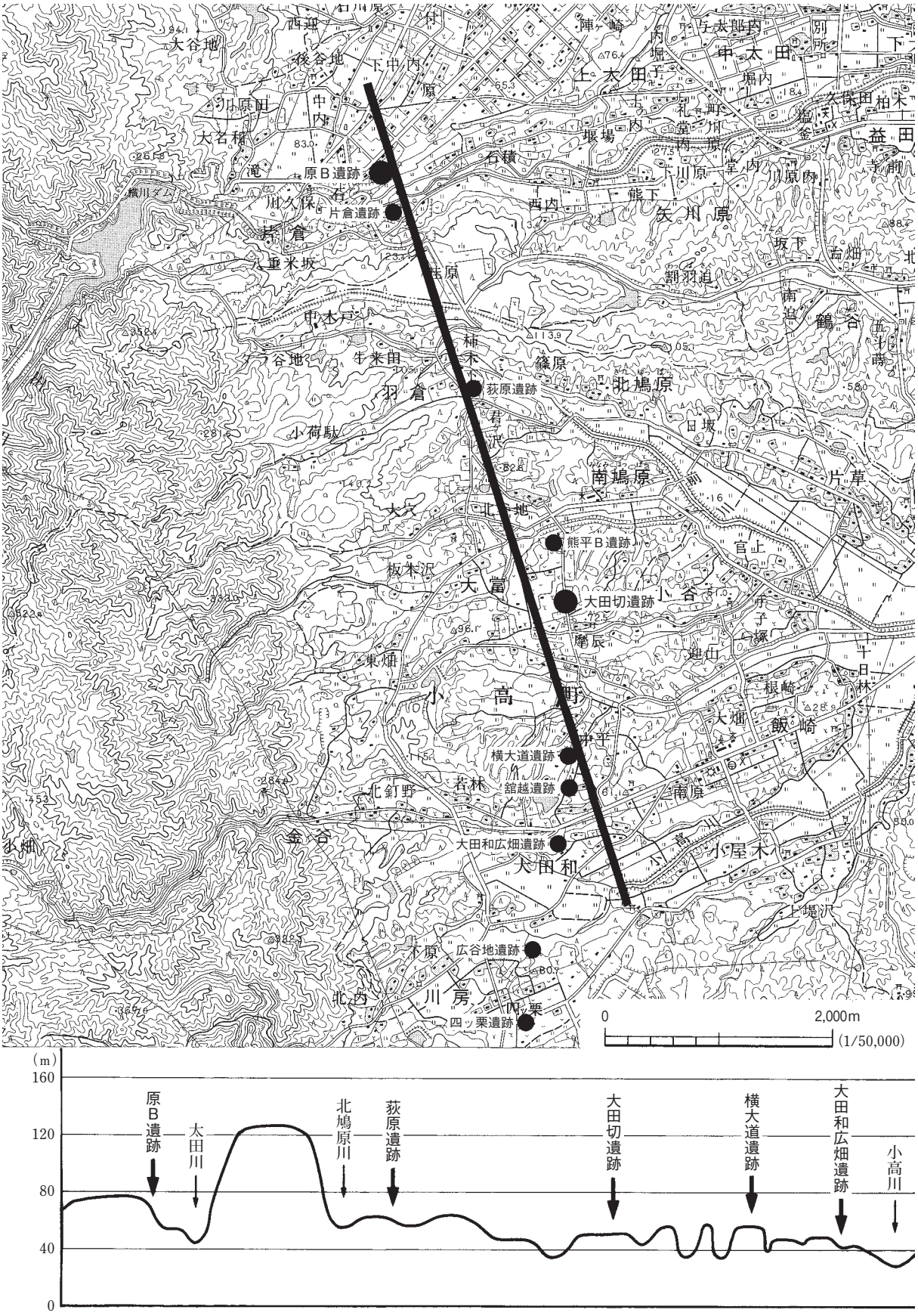


図２　常磐自動車道関連遺跡（原町・小高区）と地形断面図

(919ｍ)，日山(1057ｍ)，大滝根山(1192ｍ)などの山々があるが，どれも残丘状に散在しているにすぎない。これは吾妻山・安達太良山・那須山などの山並が連なる奥羽脊梁山脈とは対照的な山容を示している。

阿武隈高地の東縁には双葉断層(破砕帯)が北北西から南南東方向に縦走し，浜通り地方中・南部では，双葉断層崖が阿武隈高地と浜通り低地帯との境界となっている。一方，南相馬市地域においては，双葉断層に沿ってあまり断層崖は発達せず，むしろ双葉断層より東側の中生代と鮮新世の地層の境界が，阿武隈高地と浜通り低地帯との境界となっている。

双葉断層は，断層の東側に対して断層西側が相対的に高まり，断層東側が北へ，断層西側が南へずれた，左横ずれ逆断層とされている。

南相馬市原町区を流れる河川は，新田川とその支流にあたる水無川が原町区北部を，太田川が原町区南部をそれぞれ東流している。これらの河川の勾配は山間部では急傾斜であるが，双葉断層の東側に入ると緩やかになる。特に新田川上流部は河川の浸食力が強く働き，険峻で樹枝状の渓谷を刻んでいる。南相馬市小高区は小高川とその支流(北鳩原川・大穴川・前川・飯崎川・川房川)がそれぞれ東流し，小高城址付近で合流している。原Ｂ遺跡は太田川流域，大田切遺跡は飯崎川流域の遺跡である。

南相馬市地域では，これら河川の流路に平行するように標高50～100ｍの低丘陵が発達している。これらの丘陵の東側先端部は海岸まで達していて比高差10～30ｍ程の海蝕崖となっている。

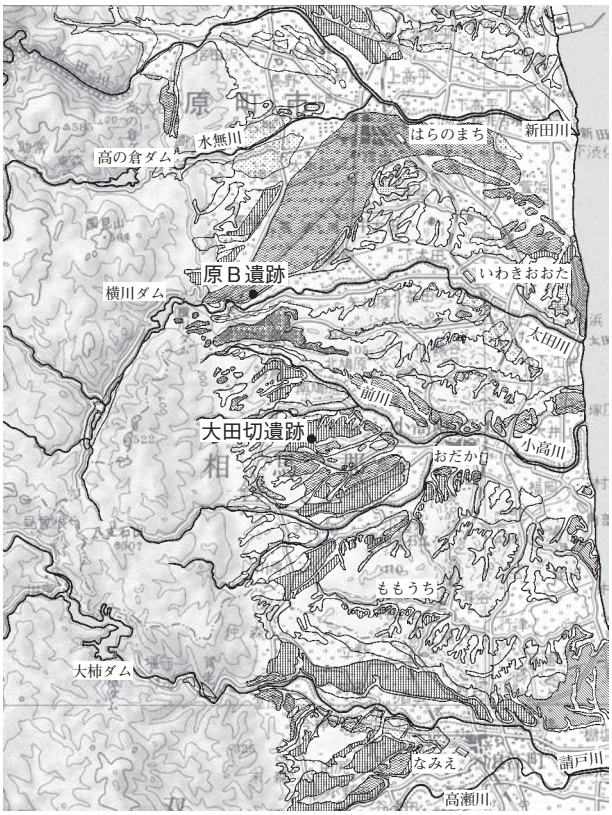
新田川・太田川・小高川の中・下流域には，低位・中位・高位段丘がよく発達し，平坦な台地を形成している。常磐自動車道関連遺跡の多くはこうした段丘面上に立地している場合が多く，原B遺跡は中位Ⅲ段丘面，大田切遺跡は中位Ⅱ段丘面上に位置している(図２・３，表１)。

福島県の地質構造は，阿武隈高地のほぼ西縁を境に，東側の非グリーンタフ地域と西側のグリーンタフ地域に大別される。非グリーンタフ地域にあたる浜通り地方は，さらに双葉断層を境として二つの地域に分けられる。双葉断層以東の太平洋沿岸の低地域には，中生代，古第三紀，新第三紀の地層が丘陵を形成し，それらが浸食された谷の中に，第四紀層が段丘地形や平野をつくって発達

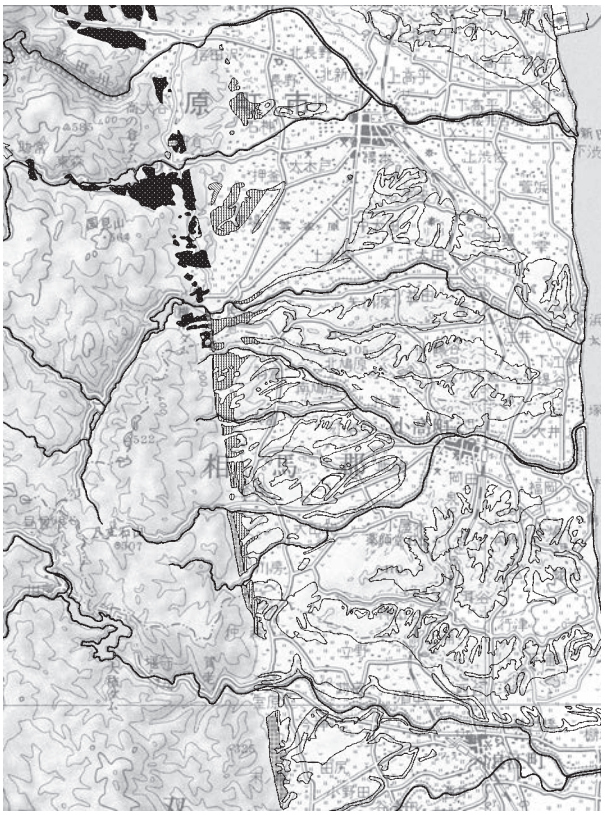
表１　常磐自動車道(南相馬市南部)の遺跡と立地

	遺　跡	所　在　地	地形区分	標　高	備　　考
1	原Ｂ	原町区馬場字原ほか	中位Ⅲ	76ｍ	
2	大田切	小高区大富字大田切	中位Ⅱ	55ｍ	
3	片倉	原町区片倉字片倉	低位Ⅱ	56ｍ	
4	荻原	小高区羽倉字荻原ほか	中位Ⅱ	52～65ｍ	旧石器出土
5	熊平Ｂ	小高区大富字熊平	低位Ⅱ	35～47ｍ	
6	横大道	小高区飯崎字横大道	中位Ⅲ	45～60ｍ	
7	舘越	小高区大田和字舘越	丘陵	62～74ｍ	
8	大田和広畑	小高区大田和字広畑ほか	中位Ⅱ	45～61ｍ	
9	広谷地	小高区川房字広谷地	沖積地・低位Ⅱ	45～62ｍ	旧石器出土
10	四ツ栗	小高区川房字四ツ栗	低位Ⅱ・中位Ⅱ	45～63ｍ	旧石器出土

地形区分は「久保和也・柳沢幸夫・吉岡敏和・高橋　浩(1994)　浪江及び磐城富岡地域の地質．地域地質研究報告(５万分の１地質図幅)，地質調査所，104ｐ.」による



1．第四期の地層



2．新第三期の地層

3．中生代～古生代の地層

1．第四期の地層
- 低位Ⅰ段丘
- 低位Ⅱ段丘
- 中位Ⅰ段丘
- 中位Ⅱ段丘
- 中位Ⅲ段丘
- 高位Ⅰ段丘
- 高位Ⅱ段丘

2．新第三期の地層
- 大年寺層
- 向山層
- 竜の口層
- 霊山層
- 天明山層
- 塩手層

3．中生代～古生代の地層
- 花崗岩層
- 高倉層
- 相馬中村層
- 相馬古生層
- 松ヶ平変成岩層

0　10km
(1/200,000)

参考文献
「久保和也・柳沢幸夫・吉岡敏和・山本孝広・滝沢文教（1990）
原町及び　大甕地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），
地質調査所，155ｐ．」

「久保和也・柳沢幸夫・吉岡敏和・高橋　浩（1994）
浪江及び磐城富岡地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），
地質調査所，104ｐ．」

図３　南相馬市の地形と地質

している。一方，双葉断層以西の阿武隈高地には花崗岩類が広く分布し，その東縁近くに古生層が発達している。

南相馬市地域には，古生代から新生代までの幅広い時代範囲の地層が分布している。それらは下位より，先デボン系時代未詳の松ヶ平変成岩類，デボン紀から二畳紀の相馬古生層(下位より合ノ沢層，真野層，立石層，上野層，大芦層，弓折沢層)に区分されている。中生代の地層は，ジュラ紀から白亜紀最前期の相馬中村層群(下位より栃窪層，中ノ沢層，富沢層，小山田層)，白亜紀前期の高倉層とその後に活動した花崗岩類を始めとする貫入岩類に区分されている。新生代の地層は，中新世の塩手層・天明山層・霊山層，鮮新世の仙台層群(下位より竜の口層，向山層，大年寺層)，更新世の段丘堆積物および沖積層に区分されている。

各地層の表層分布については，図３に示した。ここでは各層の形成過程等の議論は割愛し，各層から産出される岩石・鉱物を中心に述べる。

本地域で最も古い地層とされる松ヶ平変成岩類は，原町区新田川上流の高の倉地域に，後述する相馬古生層の周囲をとり囲むように分布している。また飯舘村松ヶ平から鹿島区上栃窪にいたる真野川中流域にも分布が見られる。松ヶ平変成岩類は主に泥質～珪質片岩からなり，これらに砂質片岩，緑色片岩，角閃岩が小規模な分布を見せる。これらの変成岩は縄文時代においては主に打製・磨製石斧などの石器石材として，また現在では庭石として珍重されている。

次に，古生代のデボン紀から二畳紀に形成された地層として相馬古生層があり，下位より合ノ沢層，真野層，立石層，上野層，大芦層，弓折沢層に区分されている。これらの地層は新田川の上・中流域に分布している。いずれも海成層で，サンゴや紡錘虫等の産出化石の研究がなされている。立石層を除いては，粘板岩・砂岩・頁岩・礫岩等の堆積岩からなる。この内，粘板岩や頁岩は，縄文時代においては打製石斧等，弥生時代においては石庖丁等の石器石材として利用されている。

中生代の地層としては，ジュラ紀後期から白亜紀最前期に形成された相馬中村層群がある。同層群は６層に区分されているが，南相馬市地域には栃窪層，中ノ沢層，富沢層，小山田層が分布している。本層群は，双葉断層に沿って，その東側に東西幅２～４㎞，南北幅約27㎞の細長い分布を見せる。その北限は相馬市初野付近，南限は原町区馬場付近とされる。本層群は，主に砂岩・頁岩からなり，一部に石灰岩や石炭薄層を含んでいる。

原町区高倉の北方地域には，白亜紀前期の火山岩類として高倉層が小規模な分布を見せる。高倉層を刻する河川は新田川と水無川の２河川に限られる。ここで産出される火山岩は，主に安山岩・流紋岩・デイサイトである。これらの岩石の内，緻密でガラス質に富むものは石器石材として利用された可能性がある。よって今後，本層起源であるかを特定するために，理化学的分析を行う必要があろう。なお現在，本層を対象とした砕石場が原町区高屋敷で稼行している。

高倉層堆積後の白亜紀前期には，浜通り地方西部は大規模な造山活動の場となり，花崗岩・閃緑岩に代表される深成岩が貫入した。阿武隈高地はこの頃に形成され，その後の長い年月の浸食と堆積によって準平原化したものと考えられている。また深成岩体の貫入に伴い，その周囲の地層では

接触変成作用が生じる。阿武隈高地では花崗岩・閃緑岩と相馬古生層・相馬中村層群の境界付近で接触変成帯が形成され，ホルンフェルス・結晶片岩・角閃岩などの変成岩が発達している。接触変成帯の一部は，スカルン鉱床を伴い，磁鉄鉱やチタン鉄鉱などの鉱物を産出する。

南相馬市地域に分布する新生代の地層は，新第三紀および第四紀に堆積したものであり，古第三紀の地層は欠層している。新第三紀層最下部は，中新世前期に堆積した塩手層である。本層は双葉断層の西側の谷を埋積するように分布し，新田川・水無川の中流域両岸に堆積している。本層は，河川堆積物，浅海成堆積物，湖成堆積物で構成され，主に礫岩・砂岩・シルト岩などの堆積岩からなる。本層で注目されるのは，堆積物の中に緻密な流紋岩質凝灰岩の地層を挟んでいることである。流紋岩質凝灰岩は，考古学分野においてはこれまで「流紋岩」と記載されてきたものと同質であると考えられる。塩手層は，いわき地方に分布する湯長谷層群椚平層（滝層）とフィッショントラック年代値（20.0±1.2Ｍａ）がほぼ一致していることから，対比関係にあるといわれている。また椚平層から産出される「流紋岩」が，石器石材として利用されていることはすでに指摘されている。この他の新第三紀中新世の地層としては，天明山層と霊山層がある。両層はともに玄武岩の溶岩流で，本地域では双葉断層西側に分布している。本層には玄武岩の他，輝石安山岩や流紋岩が含まれている。

次の新第三紀鮮新世の地層としては，仙台地域を模式地とする仙台層群があり，下位より亀山層，竜の口層，向山層，大年寺層の４層に区分されている。竜の口層・大年寺層は海成層，向山層は河川・ラグーン堆積物とされる。仙台層群の各層は主に半固結の泥岩（シルト岩）や砂岩・凝灰岩からなり，層中に多くの火山灰層を介在する。本地域では，大年寺層が丘陵および段丘面の基盤層となっている場合が多い。

第四紀更新世の地層は，本地域では真野川・上真野川・新田川・水無川に沿って分布する段丘堆積物および沖積層がある。本地域の段丘は高位Ⅰ・高位Ⅱ・中位Ⅰ・中位Ⅱ・中位Ⅲ・低位Ⅰ・低位Ⅱ段丘に区分されている。高位段丘の堆積物は礫を主とし，間にラミナのある砂層を挟んでいる。高位段丘の礫は，風化が著しく，部分的に赤色化しているものもある。その上位に風化火山灰質土壌もしくはシルト・砂層をのせる。中位段丘の堆積物も礫を主としているが風化はしていない。礫層は亜円礫から亜角礫からなり，その上に礫混じり砂層，さらに上に風化火山灰質土壌をのせる。中位Ⅰ段丘の礫層直上の砂層中には，厚さ５～10㎝の安達太良-岳軽石層（Ad-D）が認められる。低位段丘の堆積物はシルトが介在する淘汰の悪い砂礫層からなり，その上位に粘土質の砂層をのせている。

沖積層は各河川に沿って，低地を形成して分布している。本地域の沖積層の堆積は厚く，真野川と太田川の下流部では層の厚さが20m以上もある。これらの沖積層には泥炭層を挟み，Ｎ値が３以下の軟弱地盤である場合が多い。この地盤環境と地下水の汲み上げが要因となり，原町区大甕地区では1960年代頃から地盤沈下が進行している。　（門　脇）

第３節　歴 史 的 環 境

南相馬市における最も古い人間の生活痕跡は，後期旧石器時代まで遡ることができる。この時期の散布地として知られる遺跡は，原町区畦原Ａ遺跡，熊下遺跡，袖原Ａ遺跡などが太田川流域の畦原段丘上に，原町区陣ヶ崎Ａ遺跡，橋本Ａ・Ｂ遺跡，桜井遺跡などが太田川流域の雲雀ヶ原台地に立地する。この他，小高区荻原遺跡では，２カ所のブロックから剥片・石核・石刃・ナイフ形石器・削器等の石器24点が出土している。

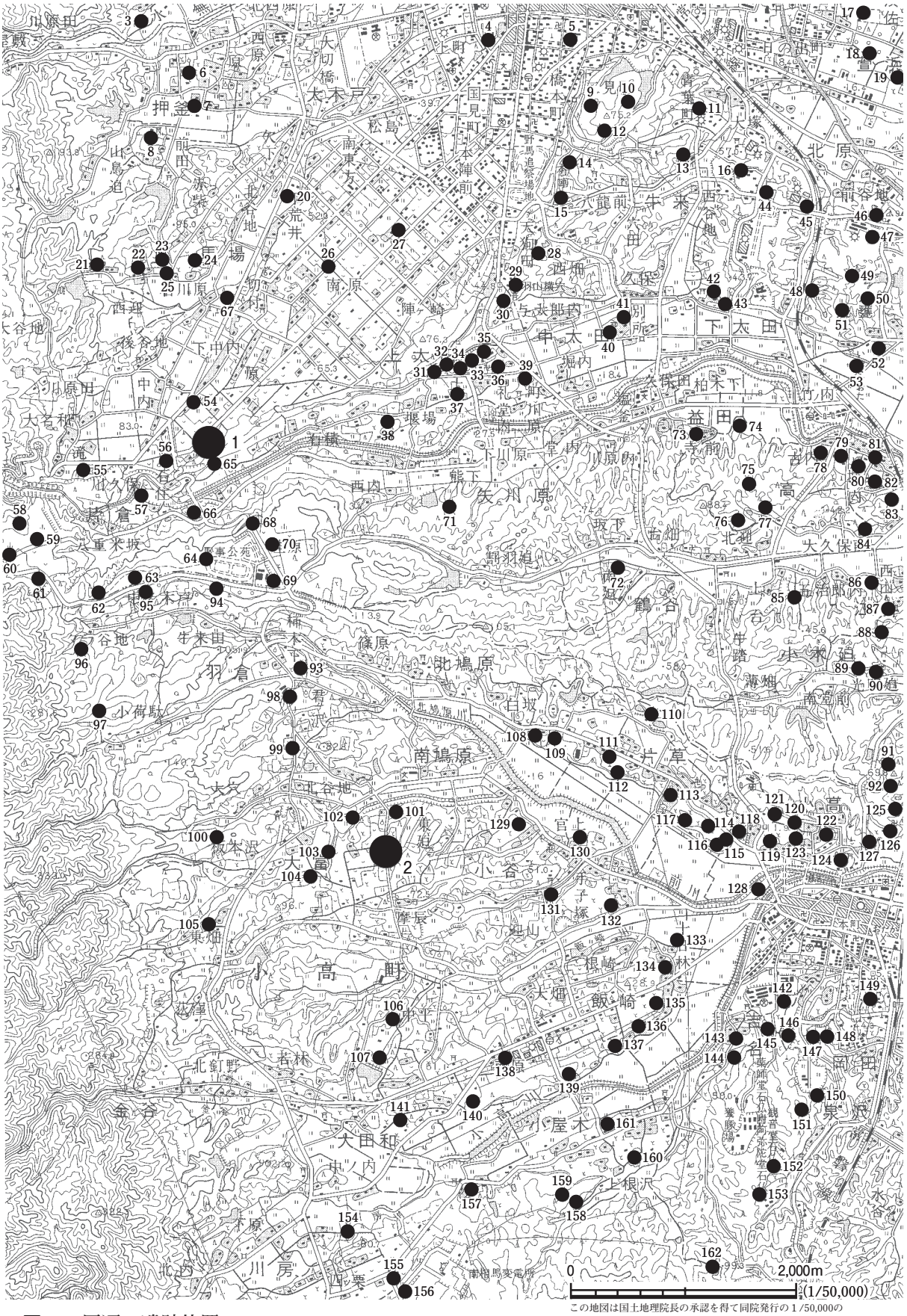
縄文時代になると遺跡数は増加する。太田川上流域には原町区畦原Ｆ遺跡，八重米坂Ａ遺跡，羽山Ｂ遺跡，原遺跡などの早期末～前期前葉の遺跡が分布している。そのうち，原遺跡では住居跡24軒，土坑27基，焼土遺構20基等が確認され，今回調査された原町区原Ｂ遺跡と接している。このことから，原遺跡と原Ｂ遺跡の関連性が考えられる。この他，小高区荻原遺跡では平面形が長方形あるいは隅丸長方形の住居跡が確認され，それに伴い口縁部に隆帯が巡る撚糸文地文の土器が多く出土している。このような土器の特徴から，原Ｂ遺跡に非常に近い時期の遺跡と考えられる。

縄文前期前葉には，海岸から4.5～５㎞内奥に立地する小高区の貝塚として，小高川流域の片草貝塚，宮田川流域の宮田貝塚がある。片草貝塚は大木２ａ式期のアサリを主体とする貝塚，宮田貝塚はキサゴ・アサリを主体とする，宮田Ⅲ群土器に代表される縄文前期初頭の遺跡であり，両者のあり方は縄文海進を考える上で重要である。この他の貝塚として，宮田川南岸の丘陵および断丘面に立地する北原貝塚，北原西貝塚，台の前貝塚，西向貝塚，小高川南岸の角部内南台貝塚などがあり，これらの縄文前期初頭～後期にわたる比較的大きな貝塚は，小高区内に集中している。

縄文中期～後期では，小高区大富西畑遺跡，大田和広畑遺跡で集落が営まれており，縄文中期末葉の住居跡からは，「複式炉」と呼ばれる特徴的な炉が確認されている。その中で大富西畑遺跡では，他地域の影響を受けた曽利系や加曽利Ｅ３式系の土器が出土していることから，地域的な交流が考えられる。縄文晩期には，小高区磯坂遺跡，小迫貝塚から海水を土器で煮詰めて塩の結晶を取り出した製塩土器が出土しており，土器製塩が行なわれたことが明らかになっている。

弥生時代になると，原町区桜井遺跡は中期末葉の桜井式土器の標識遺跡として知られている。原町区金沢遺跡群の調査による鳥打沢遺跡，長瀞遺跡，南入遺跡等からは，丘陵頂部や谷部斜面から弥生土器，石斧・石庖丁・石鏃などが出土している。また，原町区高見Ａ遺跡では十王台式期の集落が営まれており，この存在は弥生時代終焉から古墳時代への移行を知るうえで重要性が高い。

古墳時代になると，当地域最古とされる国指定史跡の原町区桜井古墳は，４世紀末～５世紀前半の前方後方墳であり，また周囲にある12基の円墳からなる古墳群である。古墳後期の７世紀には横穴墓が出現する。特異な例として，装飾壁画をもつ国指定史跡の原町区羽山装飾横穴墓群が挙げられ，ここからは金銅装大刀・銅製釧・馬具などが出土している。このような装飾横穴墓は，浜通り地方に見られる特色でもあり，画一化された墓における特殊性を示したものと考えられる。



この地図は国土地理院長の承認を得て同院発行の１/50,000の
地形図を複製したものです。（承認番号　平19東複第196号）

図４　周辺の遺跡位置

表２　周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	時　代
1	原Ｂ	縄文
2	大田切	縄文・平安
3	石神Ｂ	縄文
4	夜ノ森	縄文
5	橋本町Ａ	旧石器
6	内畑	
7	押釜原	
8	前田	縄文
9	橋本町Ｂ	旧石器
10	折ケ沢窯跡	平安
11	大塚横穴墓	古墳
12	折ケ沢	散布地
13	石橋横穴墓	古墳
14	出口	平安
15	出口Ｂ	平安
16	東谷治	平安
17	原田	平安
18	巣掛場	縄文・奈良・平安
19	巣掛場Ｂ	散布地
20	下荒井	散布地
21	川原田	縄文
22	地切	縄文
23	滝ノ原	縄文
24	赤柴	縄文
25	滝ノ原窯跡	平安
26	陣ケ崎Ａ	旧石器
27	陣ケ崎Ｂ	縄文
28	中畑横穴墓群	古墳
29	羽山横穴墓群	古墳
30	新橋横穴墓群	古墳
31	後田横穴墓	古墳
32	上大田前田	奈良・平安
33	前田横穴墓	古墳
34	重胤公御壇	中世
35	上大田前田	奈良・平安
36	上ノ内	縄文
37	坂下	奈良・平安
38	堰場	縄文・奈良・平安
39	町川原	縄文・奈良・平安
40	別所古墳	古墳
41	別所館跡	中世
42	藤沼館跡	中世
43	道内迫横穴墓群	古墳
44	小原	弥生
45	川内迫	弥生
46	東原	奈良～現代
47	川内迫Ｃ	奈良・平安
48	川内迫Ｂ	弥生・平安
49	蛭沢	縄文・弥生・平安
50	西迫東迫横穴墓	古墳
51	西迫	古墳
52	島古館跡	中世
53	塚田	奈良・平安
54	中ノ内	弥生
55	石倉	縄文
56	原	縄文
57	市渡戸	縄文
58	羽山Ｂ	縄文
59	八重米坂Ａ	縄文
60	八重米坂Ｂ	縄文
61	八重米坂Ｃ	縄文
62	畦原Ｄ	縄文
63	畦原Ｅ	縄文
64	畦原Ｆ	縄文
65	石住	平安
66	岩下	縄文
67	切付	縄文・平安
68	畦原Ａ	旧石･縄･奈･平
69	畦原Ｂ	縄文･奈良･平安
70	畦原Ｃ	旧石器･縄文
71	熊下	旧石器
72	南迫横穴墓群	古墳
73	益田館跡	中世
74	姫塚古墳	古墳
75	権現壇横穴墓群	古墳
76	高林古墳群	古墳
77	高林	弥生
78	古内	奈良・平安
79	枝の上	奈良・平安
80	城ノ内	奈良・平安
81	高館跡	中世
82	高古館跡	中世
83	大久保	縄･弥･奈･平
84	高野館跡	中世
85	五治郎内古墳群	古墳
86	西山	不明(窯跡)
87	権現山経塚	中世
88	西谷地古墳	古墳
89	堂西	奈良・平安
90	今野館跡	中世
91	勇婆ケ館跡	中世
92	館山	縄文
93	荻原	縄文
94	畦原野馬土手	近世
95	中木戸	縄文
96	菖蒲沢野馬土手	近世
97	高木戸野馬土手	近世
98	君ケ沢	不明(製鉄跡)
99	大穴	旧石器･縄文
100	板木沢	縄文
101	熊平	縄文
102	熊平Ｂ	縄文・平安
103	犬塚Ｂ	縄文
104	犬塚Ｃ	縄文
105	大富西畑	縄文・平安
106	横大道	平安
107	舘越	平安
108	北鳩原花輪	縄文・古墳
109	堤下	縄文～平安
110	行徳古墳群	古墳
111	片草南原	縄文～平安
112	片草南原古墳群	古墳
113	一里壇古墳群	古墳
114	荒神前古墳	古墳
115	片草貝塚	縄文
116	金場館跡	中世
117	荒神前	縄文～平安
118	相馬家墓地	近世
119	東広畑Ａ	縄文～平安
120	東広畑Ｂ	平安
121	相馬顕胤夫人墓跡	中世
122	相馬とも胤夫人墓跡	中世
123	西館跡	中世
124	馬場内横穴墓群	近世
125	小高城跡	中世
126	岩迫館跡	中世
127	東館跡	中世
128	堀内	中世
129	西台	古墳～平安
130	元屋敷	縄文･古墳～平安
131	渋谷迫	弥生
132	手子塚古墳	古墳
133	中島館跡	中世
134	歓請内古墳	古墳
135	十日林古墳	古墳
136	杉平古墳群	古墳
137	飯崎館跡	中世
138	飯崎南原古墳群	古墳
139	飯崎南原塚	中世・近世
140	飯崎南原	縄文･奈良・平安
141	大田和広畑	縄文
142	玉ノ木平Ａ	縄文～平安
143	中村平	弥生～平安
144	中村平古墳群	古墳
145	玉ノ木平Ｂ	縄文・平安
146	玉ノ木平Ｃ	縄文～平安
147	漆原横穴墓群	古墳
148	岩屋堂石仏	平安
149	岡田館跡	中世
150	浪岩横穴墓Ａ群	古墳
151	浪岩横穴墓Ｂ群	古墳
152	観音堂石仏	平安
153	薬師堂石仏	平安
154	広谷地	縄文～平安･近世
155	四ツ栗	縄文・平安
156	鯖沢	不明(製鉄跡)
157	栗成沢	縄文
158	堀込	奈良・平安
159	上根沢古墳群	古墳
160	原畑	弥生～平安
161	市阿弥	奈良・平安
162	上根沢	中世

この地域は，「和名抄」に記される陸奥国行方郡として律令体制に組み入れられていたと考えられる。古代行政の中心とされる郡衙として，推定されるのが県指定史跡の原町区泉廃寺跡である。この遺跡からは礎石が確認され，瓦・円面硯，焼け米などが出土しており，今後の調査により官衙域と付属寺院が確認される可能性が高い。

奈良・平安時代になると，大田切遺跡，大田和広畑遺跡，四ツ栗遺跡，広谷地遺跡では，発掘調査や試掘調査から集落が営まれていたことが確認されている。生産遺跡では，製鉄遺跡，瓦や須恵器の窯跡が知られている。原町区内金沢地区の鳥打沢Ａ・Ｂ遺跡，長瀞遺跡，南入遺跡，船沢Ａ遺跡，大船廼遺跡をはじめとする製鉄遺跡群では，製鉄炉，木炭窯，鍛冶炉，木炭焼成土坑，鋳造遺構等の製鉄関連遺構が数多く確認され，鉄生産の様相を伺うことができる。これらの製鉄遺跡は郡衙等の『官』とのかかわりが指摘されている。常磐自動車道の建設に伴う小高区の横大道遺跡・舘越遺跡・大田和広畑遺跡の試掘調査成果からは，それぞれの遺跡が隣接して製鉄関連遺構が確認されている。今後の調査成果により，これらの遺跡の関係が明らかにされるものと考えられる。原町区入道廼瓦窯跡の瓦は，植松廃寺跡に供給され，泉廃寺跡の瓦は原町区京塚沢瓦窯跡から，須恵器は鳥打沢Ａ遺跡からそれぞれ供給されたと考えられる。この他，この地域には，平安時代の『延喜式神名帳』に登載された神社(延喜式内社)が推定地として８カ所あり，これらは官社で律令政府が行う国家祭祀に組み込まれた神社である。その多くは，古代の東北経営の一つである蝦夷制圧戦争にかかわって，中央政府によって勧進されたものと考えられる。さらに，古代仏教としては，小高区の国指定史跡である平安後期の観音堂石仏や薬師堂石仏等の大悲山磨崖佛が知られており，この地が中央的な仏教を受け入れるに十分な条件が整備されていたものと考えられる。

鎌倉時代に入ると，海道方面は奥州藤原氏の討伐に功績のあった千葉常胤に所領として与えられ，その後，常胤の子息達に分与されている。常胤の二男相馬師常は，本領である下総国相馬郡とともに，新恩の陸奥国行方郡をも治めるようになった。相馬師常から数えて４代目の胤村は，領地をさらに11人に配分した。その結果，陸奥国行方郡の大部分は五男の師胤に与えられた。その後，建武３(1336)年に相馬光胤は小高中四郎内に小高城を築き，慶長16(1611)年の廃城までの約300年間相馬氏の居城となった。南北朝時代の相馬氏は北朝方に荷担し，支配地を拡大していった。

戦国時代になると，相馬氏は頻発する伊達氏の内部抗争の中で活躍し，有力武将としての地位を固めていき，豊臣秀吉の奥州仕置以後は，相馬中村藩として，宇多・行方・標葉郡の四万八千七百石の領地が確定した。この他，原町区寺家前観音堂には，鎌倉時代の優品とされる「十一面観音像」が安置され，現在でも厚い信仰を集めている。

近世の野馬土手は，本地域を代表する遺跡で，寛文年間(1666)以後に築造され，東西10㎞・南西2.6㎞の広がりをもち，木戸も数カ所設置され全国的にみても貴重な遺跡である。また，山間地では，製鉄が盛んに行なわれ，古代製鉄とは製法に違いはあるが，原町区の藩営馬場鉄山をはじめ，五台山Ｂ遺跡・羽山Ｂ遺跡など，自給的で小規模な野たたらが数多く分布していることも確認されている。

(国　井)

第１編　原（はら）Ｂ遺跡

遺跡記号　ＭＳＣ－Ｈ・Ｂ
所在地　南相馬市原町区馬場字原
時代・種類　縄文時代　集落跡
調査期間　平成18年４月11日～８月11日
調査員　国井秀紀・佐藤　洋・中野幸大

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　位 置 と 地 形

原Ｂ遺跡は，南相馬市原町区馬場字原に所在する。南相馬市原町区の南西部，ＪＲ常磐線の原ノ町駅から南西方向へ直線距離で5.7kmほど離れて位置し，遺跡の西側を主要地方道(相馬・浪江線)である県道34号線が南北方向に，北側を市道118号原町馬場線が東西方向に走っている。

遺跡は，阿武隈高地東縁部にあたる国見山山麓から北東へ緩く傾斜する，雲雀ヶ原台地と呼ばれる中位Ⅲ段丘面に立地する。この段丘は，国見山の東側の一部と南側を開析して東西方向に流れる東側の笹部川と南側の太田川に挟まれた，東西に長い台地となっている。遺跡は段丘面の南西端に位置する。遺跡の南端部は，旧太田川によって抉りとられて断崖状を呈する。現在の太田川の川床から遺跡までの比高差は約35ｍを測る。遺跡は平坦面にあるが，南西側から北東側の市街地方面に向かって標高を減じている。このため標高は遺跡の西端が標高81ｍ，東端が標高74ｍと，その比高差は約７ｍを測る。遺跡の現況は，市道に接する北側に宅地があり，それ以外は主に畑地・牧草地として利用されている。

今回の調査区は，遺跡推定範囲の中央付近，市道118号原町馬場線と市道104号上太田馬場線のほぼ中間に位置する。微地形的には標高77～78ｍの平坦面であるが，調査区の中央部付近から南側にかけて微高地となり，この微高地の範囲からは遺構が集中して検出された。

第２節　調　査　経　過

原Ｂ遺跡は，福島県教育委員会が平成10年度に実施した表面調査により確認された。その後，平成17年に，常磐自動車道建設に伴う試掘調査を実施した結果，縄文時代の集落跡と推定され，常磐自動車道の計画路線内では6,200㎡を要保存範囲と確定した。これにより平成18年度は，福島県教育委員会から委託を受けた(財)福島県文化振興事業団が，原Ｂ遺跡の調査として，5,200㎡を対象に記録保存する目的で発掘調査を実施した。以下，遺跡の調査経過の概要を記述する。

調査は４月11日から開始した。まず，現地に発掘器材の搬入を行なうとともに，調査範囲を確認し，調査区の現況写真撮影を行なった。12日には，重機を使用して表土除去作業を開始した。表土の除去作業については，調査区の中央に東西方向に走る農道を残して調査区の北側から南側への順序で行ない，排土については，運搬にクローラダンプを使用して調査区外東側の路線内に置くこととした。表土除去が終了した調査区北側から，作業員を導入して遺構検出を開始した。下旬には，調査区境の西壁で基本土層を確認した。その結果，調査区北側では第Ⅱ層が欠落しており，第Ⅰ層直下には，縄文早期末葉の土器を含む第Ⅲｂ層を確認した。遺構検出による排土は，基本的に土砂

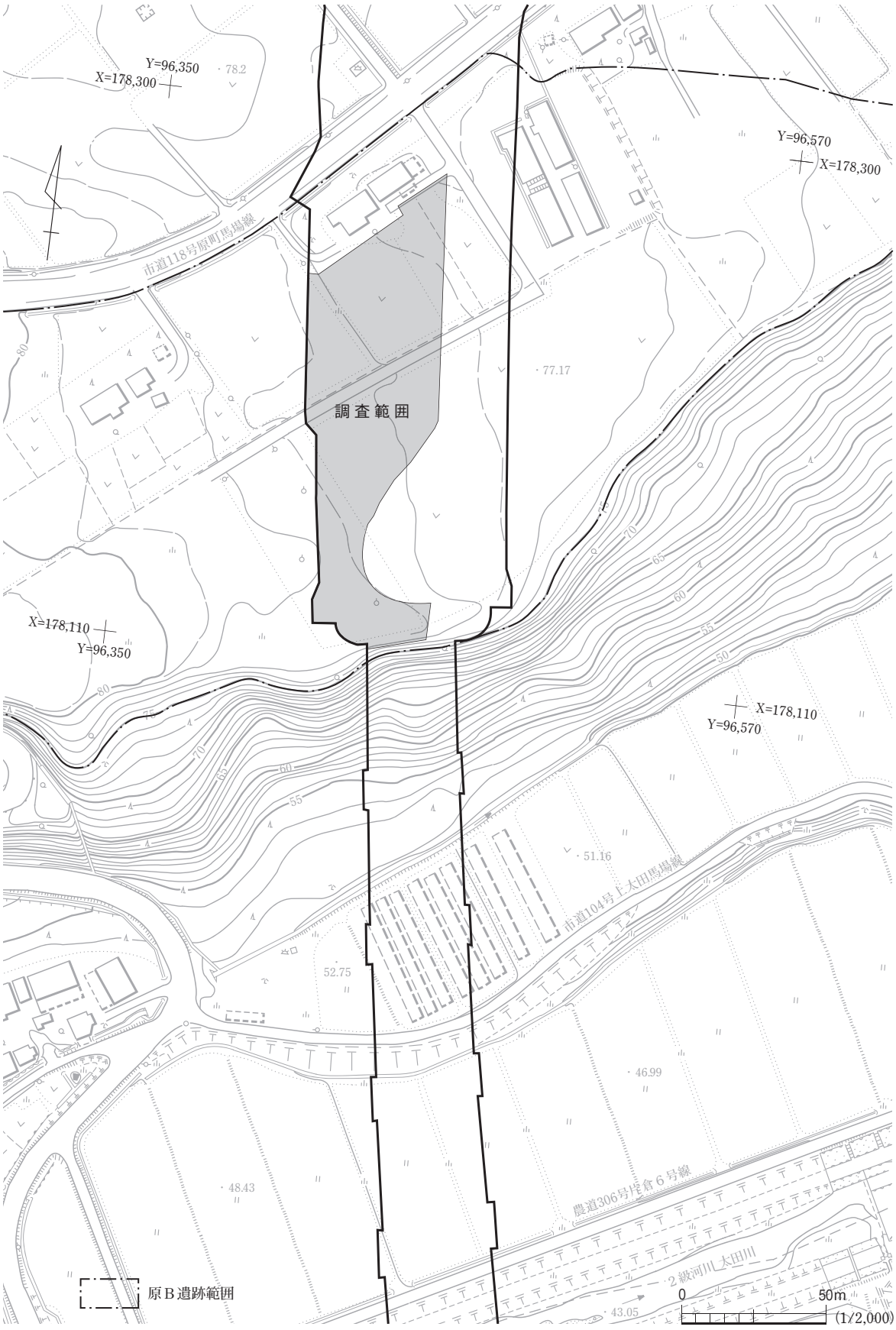


図１　原Ｂ遺跡調査区位置図

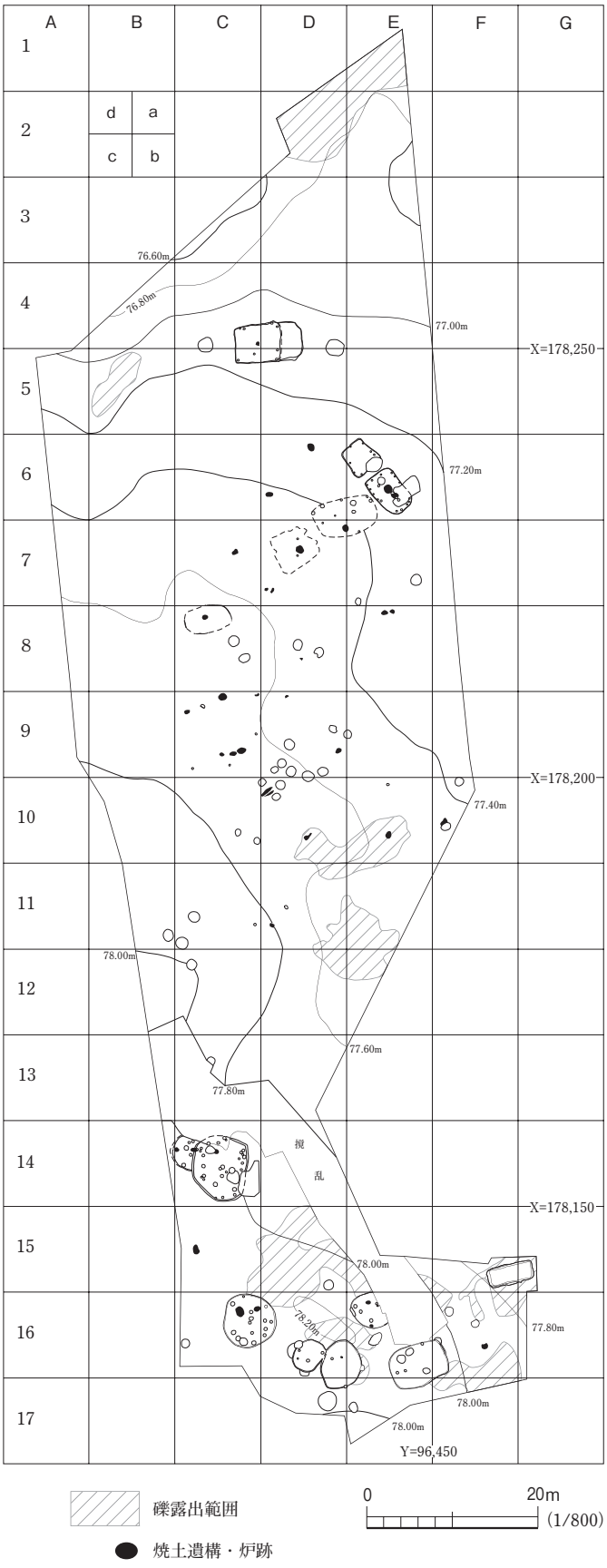


図２　グリッド配置図

運搬用のクローラキャリア2.5ｔを２台使用して，排土置き場に移動した。また，調査区内にクローラキャリアが出入りするため，作業員と機械との接触事故の防止に注意を払い，安全の確保に努めた。同月末には調査区内の表土除去が終了した。

５月上旬には，調査区北側に基準測量杭を打設した。中旬には遺構検出作業が本格化し，調査区北側では第Ⅳ層上面から，縄文早期末葉の竪穴住居跡や土坑等の遺構が検出され始めた。検出した遺構は順次掘り込みを開始した。下旬には，調査区北端では遺構や遺物が極端に少ないことが確認された。

６月上旬には，遺構検出作業を南側に展開するため，調査区南側に基準測量杭を打設した。また，縄文早期末葉の住居跡の遺構検出と精査を並行して行なった。中旬には，調査区中央部の遺構検出作業により，多数の土坑・焼土遺構等が検出された。この付近からは，縄文早期末葉の土器以外に，縄文中期前葉の土器も出土した。下旬には，調査区中央部の農道を調査区北西端に付け替え，旧農道下の遺構検出を行なった。調査区北側の縄文早期末葉の住居跡の調査が終了に近づいたため，調査区南側の遺構検出を開始した。

７月上旬には，調査区南側よりⅣ層上面で縄文中期前葉の住居跡が検出され始めた。また，調査区中央部では土坑群が確認されたため，順次遺構の掘り込みを開始した。中旬は，調査区南

側の住居跡調査を優先的に進めた。下旬に入ると，発掘調査の進捗に伴い，遺跡の様子が伺えるようになったことから，22日に「遺跡の案内人(ボランティア)」による発掘調査現地公開を行なった。さらに，28日にはラジコンヘリコプターを用いて，上空から遺跡全体や遺構集中範囲等の写真撮影を実施した。

８月上旬には，遺構精査と一部の発掘器材等の片付けを行ない，これに並行して調査区の地形測量を行なった。11日には調査区全体の写真撮影と補足調査後，発掘器材の撤収を行ない，直接調査に関わる作業を終了した。24日には，東日本高速道路株式会社，福島県教育委員会文化財グループ，(財)福島県文化振興事業団の各担当者が，調査経緯や成果，排土等の確認を行ない調査区の引渡しを行なった。

以上のように，原Ｂ遺跡の発掘調査は，４月11日から８月11日までの延べ82日をもって，その全日程を終了した。

第３節　調　査　方　法

今回の原Ｂ遺跡の調査では，遺跡の位置関係と遺構・遺物の出土位置を明示するため，調査区内に世界測地系に合わせた測量基準点を打設した。この基準杭の座標値をそのまま用い，南北の軸線を真北に合致させ10ｍ四方のグリッドを設定した。グリッドの原点は，Ｘ＝178,290，Ｙ＝96,400の交点で，Ｘは緯線，Ｙは経線を表す。各グリッドの名称は，東西方向に西から東へＡ・Ｂ…とアルファベットの大文字を，南北方向に北から南へ１・２…と算用数字を付し，Ａ１グリッド，Ｃ２グリッドなどと呼称した。遺構の記録に際しては，このグリッドを１ｍの方眼に細分し，交点を測点として用いた。また，交点の表記には座標値をそのまま使用した。

今回の調査では，表土除去作業にバックホー0.7ｔとクローラーダンプ10ｔを使用したが，それ以外は人力で遺跡基底面まで掘り下げ，層位ごとに遺構・遺物の確認に努めた。また，排土の移動には，クローラキャリア2.5ｔを使用した。遺構の調査では，土層観察用の畦を設け，堆積土の状態や遺物の出土状態に留意しながら精査・記録を行なった。遺構の記録は１/10・１/20，調査区内の地形図は１/200の縮尺で記録した。遺物の取り上げは遺構ごとに，遺構外出土遺物はグリッドごとに行なっており，いずれも出土層位を明記している。遺構外の遺物集中地点については，10ｍグリッドを５ｍ四方に４分割し，北東から時計回りにａ・ｂ・ｃ・ｄという枝番を付けて取り上げた。出土層位については，遺構外堆積土をＬとローマ数字との組み合わせによりＬⅠ・ＬⅡ等とし，遺構内はℓと算用数字の組み合わせによりℓ１・ℓ２等と表記した。また，土層の注記には新版標準土色帖を基準として使用した。記録写真は，検出状況や土層の堆積状況等に留意し，35㎜判のモノクロームとカラーリバーサルのフィルムを使用し，同一被写体を同一方向から撮影した。

(国　井)

第２章　遺 構 と 遺 物

第１節　遺跡の概要と基本土層

遺構の分布

原Ｂ遺跡で検出された遺構は，住居跡13軒，土坑39基，焼土遺構23基，土器埋設遺構２基，特殊遺構２基，ピット６基である。出土遺物は縄文土器8,213点，土製品１点，石器・剥片755点，チップ170.54ｇである。遺物の年代は，縄文早期末葉と中期前葉を主体とする。

遺跡は，太田川と笹部川により形成された段丘面に立地する。このため，調査区内は平坦地となる。遺構は，微高地となる調査区の中央付近から南側にかけて，住居跡群や土坑群等が検出されているが，僅かに低くなる調査区北端から北西端では，遺構が認められなかった。時期的に遺構を見ると，縄文早期末葉の住居跡や土坑は北側に，縄文中期前葉の住居跡は南側に，土坑と焼土遺構は調査区の全体に分布する。特に，段丘礫層の露出が著しい南側では，住居跡が礫層を避けて構築されているようである。この他に，縄文中期後葉から晩期の遺物が僅かに出土する地点が確認されている。

基 本 土 層

調査区は，南側が断崖となる段丘面縁辺部の平坦面に立地する。基本土層は，調査区北西側(図３のＡＡ′)，南西側(図４のＢＢ′)で堆積状態を観察し，５つに大別した。以下，各土層の特徴と遺構・遺物との関係について述べる。

ＬⅠは，暗褐色を呈する耕作土である。調査区全体に広がっており，調査区北側では北に向かって厚く堆積する。層厚は20～110㎝を測る。特に耕作による削平は，調査区中央から北側の範囲が著しいため，調査区北側では本層の直下がＬⅢｂ，中央ではＬⅣ上面を確認している。また，この削平により，本層から出土する遺物が多くなっている。

ＬⅡは黒褐色土である。調査区南側のＢＢ′断面の一部でのみ確認され，その大部分は耕作による削平により欠落したものと考えられる。このため，本層は薄層で層厚は最大で16㎝を測る。

ＬⅢはａ・ｂの２層に細分した。ＬⅢａは暗褐色土である。調査区北西端と南側の一部に認められるが，それ以外は耕作等の撹乱により失われたものと考えられる。本層からは縄文中期前葉の土器が多く出土している。層厚は６～38㎝を測る。ＬⅢｂはやや赤味のある褐色土である。調査区の全域で安定した堆積が確認されるが，調査区南側では層厚が薄くなる。調査区北側では，耕作の影響を受けているためＬⅠの直下に本層が確認され，層厚は15～42㎝を測る。本層の上部からは，縄文早期末葉の土器が多く出土している。また，調査区の南部では，本層から縄文中期前葉の土坑が検出されている。

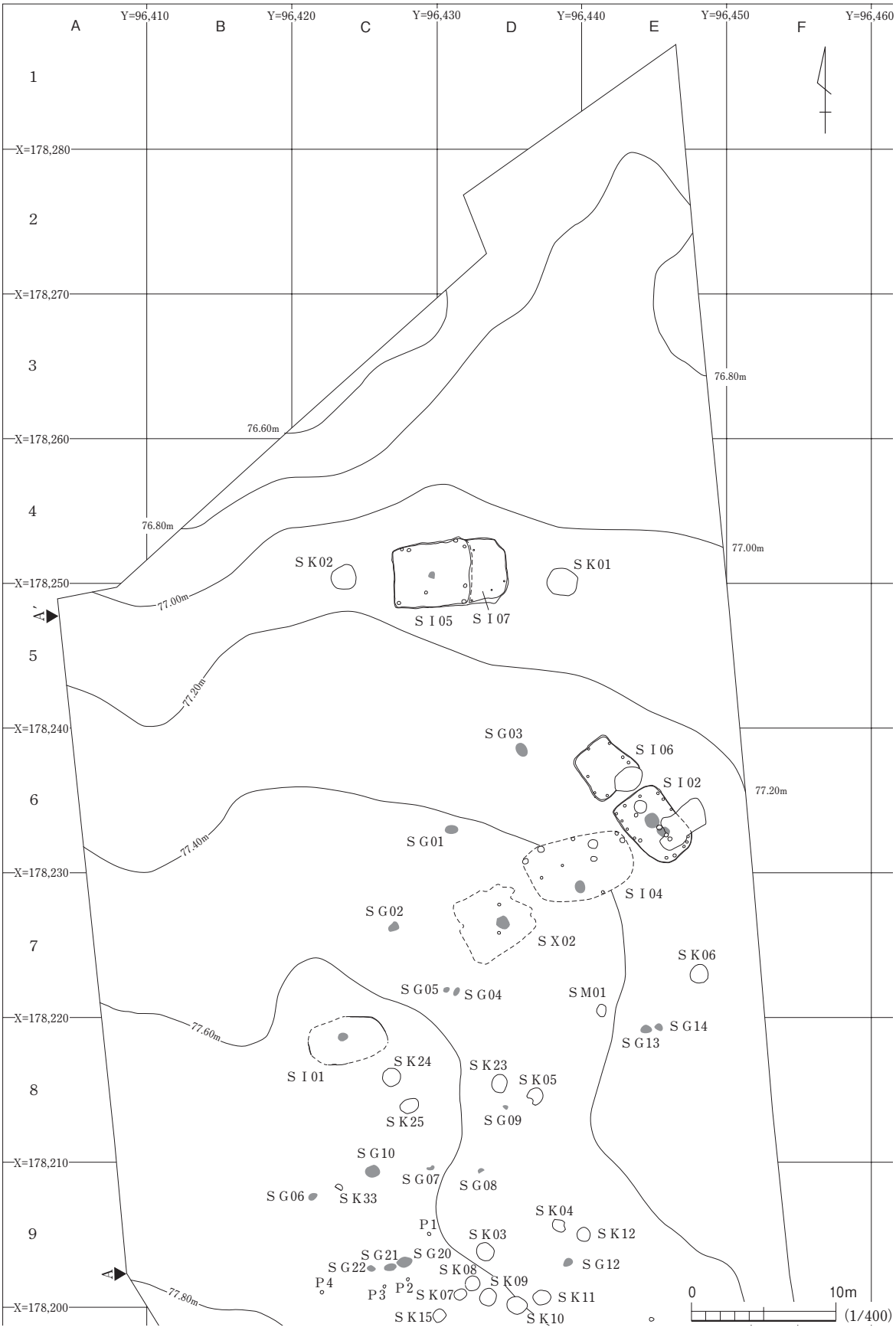


図３　遺構配置図・土層観察地点(1)

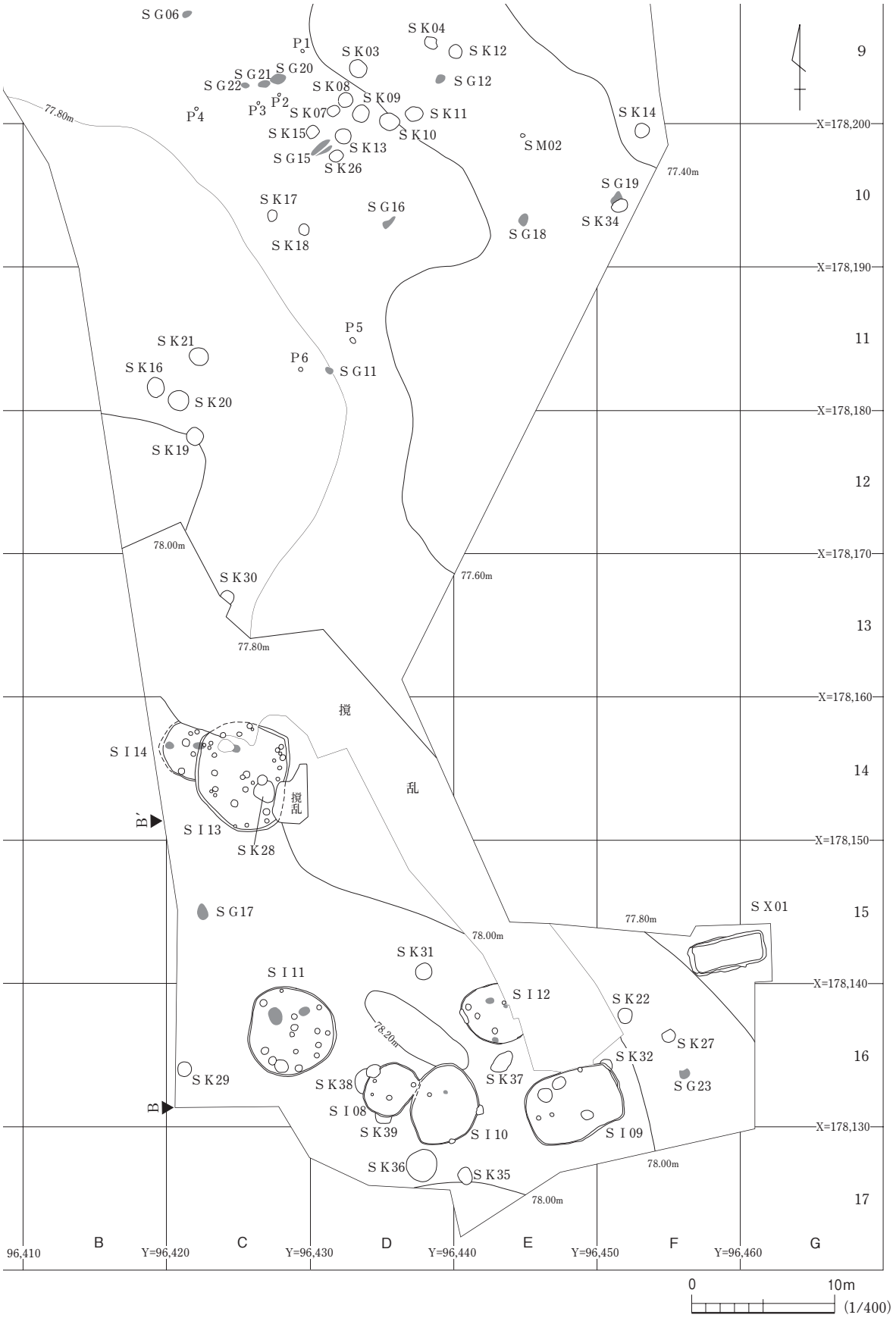


図４　遺構配置図・土層観察地点(2)

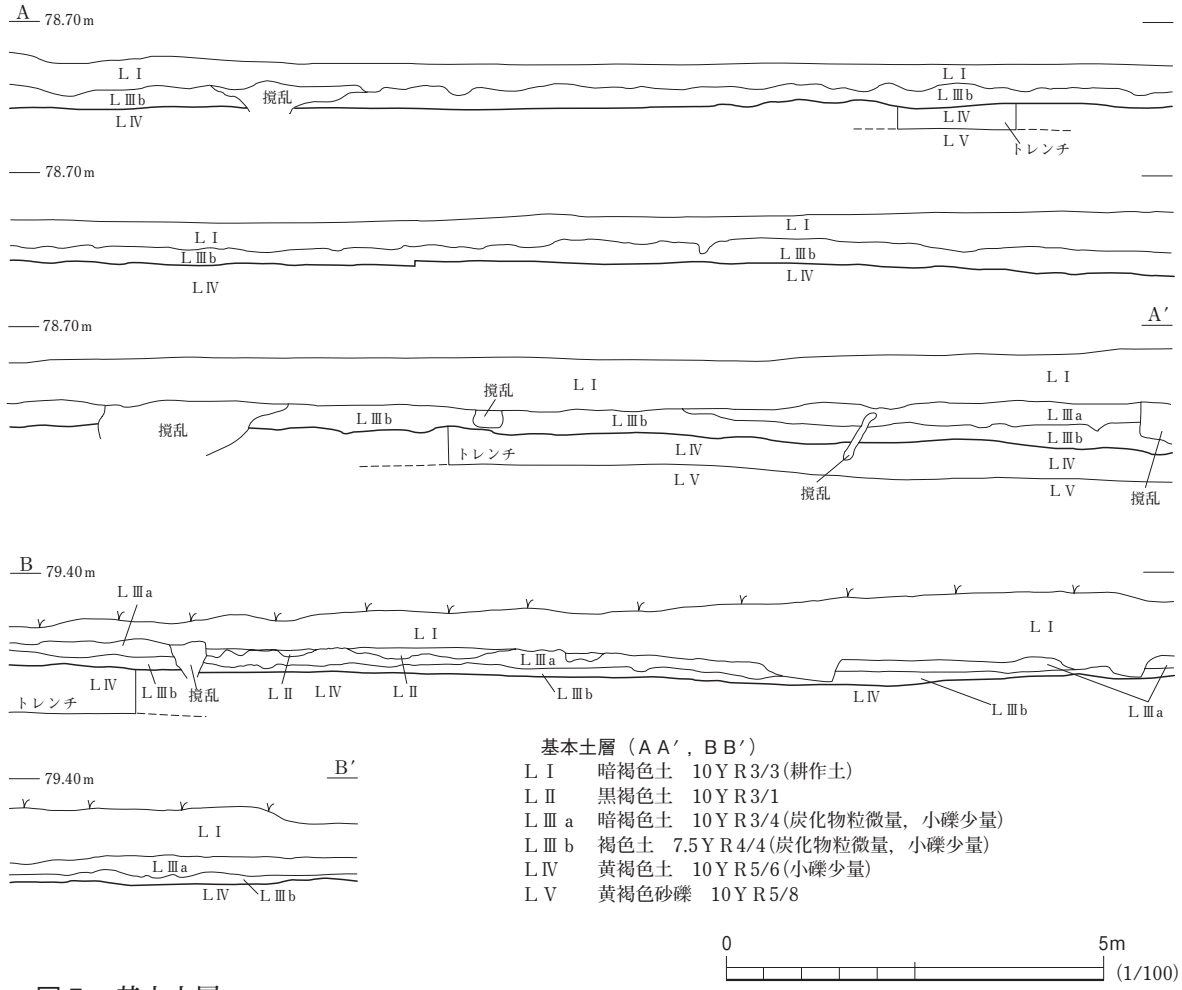


図５　基本土層

ＬⅣは黄褐色土である。いわゆるローム質の土層で，調査区全体で確認されている。本層の上面は，主に縄文早期末葉の遺構検出面となり，この時期よりも古い遺構や遺物は確認されていない。本調査区における遺跡基底面は本層上面であり，本層以下は無遺物層となる。遺跡基底面には，部分的であるがＬⅤの砂礫層が露出しており，調査区南側で顕著である。この礫層露出範囲については図２に示した。

ＬⅤは黄褐色砂礫層で，段丘礫層の一部と考えられる。調査区西側のＡＡ′断面，12号住居跡の断面(図26)や１号特殊遺構の断面(図43)等で確認している。　(国　井)

遺跡の年代と土器の分類

出土土器は便宜上，器形の特徴，文様，施文技法によって以下のように分類を行なっている。ただし，出土した遺物の多くが破片資料であるため，文様要素や施文技法に分類の基準を置いている。

Ⅰ群土器　縄文早期末葉～前期最初頭の土器群である。出土土器の半数以上が本群にあたる。特徴としては，胎土内に繊維混和痕が見られ，土器の内面に貝殻条痕が施されている。これらの土器は，器面に施された地文によって大枠で類別し，さらに文様要素によって種別した。

１類　地文に撚糸文を施すもの。

ａ種　口唇部に刻目や圧痕を持つもの。

ｂ種　口唇部直下に横位方向の隆帯を施すもの。

ｃ種　沈線を施すもの。

ｄ種　地文のみのもの。

２類　地文に縦走縄文を施すもの。

ａ種　口縁端部に刻目を施すもの。

ｂ種　横位方向に沈線を施すもの。

ｃ種　地文のみのもの。

３類　地文に斜縄文を施すもの。

ａ種　羽状縄文を施すもの。

ｂ種　斜縄文を施すもの。

４類　底部資料を一括した。

Ⅱ群土器　縄文中期前葉の土器群である。

１類　大木７ｂ式土器に相当するもの。

ａ種　隆線で区画し沈線を施すもので，隆線のみのものも含む。

ｂ種　隆線で区画し縄圧痕文を施すもの。

ｃ種　縄圧痕文を施すもの。

ｄ種　連続刺突文や交互刺突文を施すもの。

ｅ種　沈線で文様を描くもの。

ｆ種　地文のみのもの。

ｇ種　無文のもの。

２類　阿玉台Ⅰａ式に相当するもの。

ａ種　隆線で区画し有節沈線や刺突文を施すもの。

ｂ種　重層連続指圧痕文に隆線を施すもの。

ｃ種　有節沈線を施すもの。

３類　底部資料を一括した。

Ⅲ群土器　中期後葉～晩期にかけての土器群を一括した。

１類　大木９式に相当するもの。

２類　後期前葉に相当するもの。

３類　晩期に相当するもの。

４類　底部資料を一括した。

（中　野）

第２節　竪 穴 住 居 跡

今回の調査で検出された竪穴住居跡は13軒である。これらは段丘の平坦面で，数軒単位の住居跡群として，調査区北側と南側で認められた。時期的には，北側の縄文早期末葉～前期最初頭のものと，南側の縄文中期前葉のものとに分けられる。南側の住居跡群は，図２に示した礫範囲を避けて構築されているようである。３号住居跡については欠番とした。

１号住居跡　ＳＩ01

遺　　構(図６，写真６)

本遺構は，調査区北側のＣ８グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構は，調査区北側の住居跡群に位置する。他の遺構との重複関係はないが，遺構の西側と北側は風倒木痕に，南東側は耕作によって失われているため，遺存状態は悪い。

遺構内堆積土は，炭化物粒を多く含む黄褐色土の薄い単層であるため，堆積状況については不明である。

図６　１号住居跡

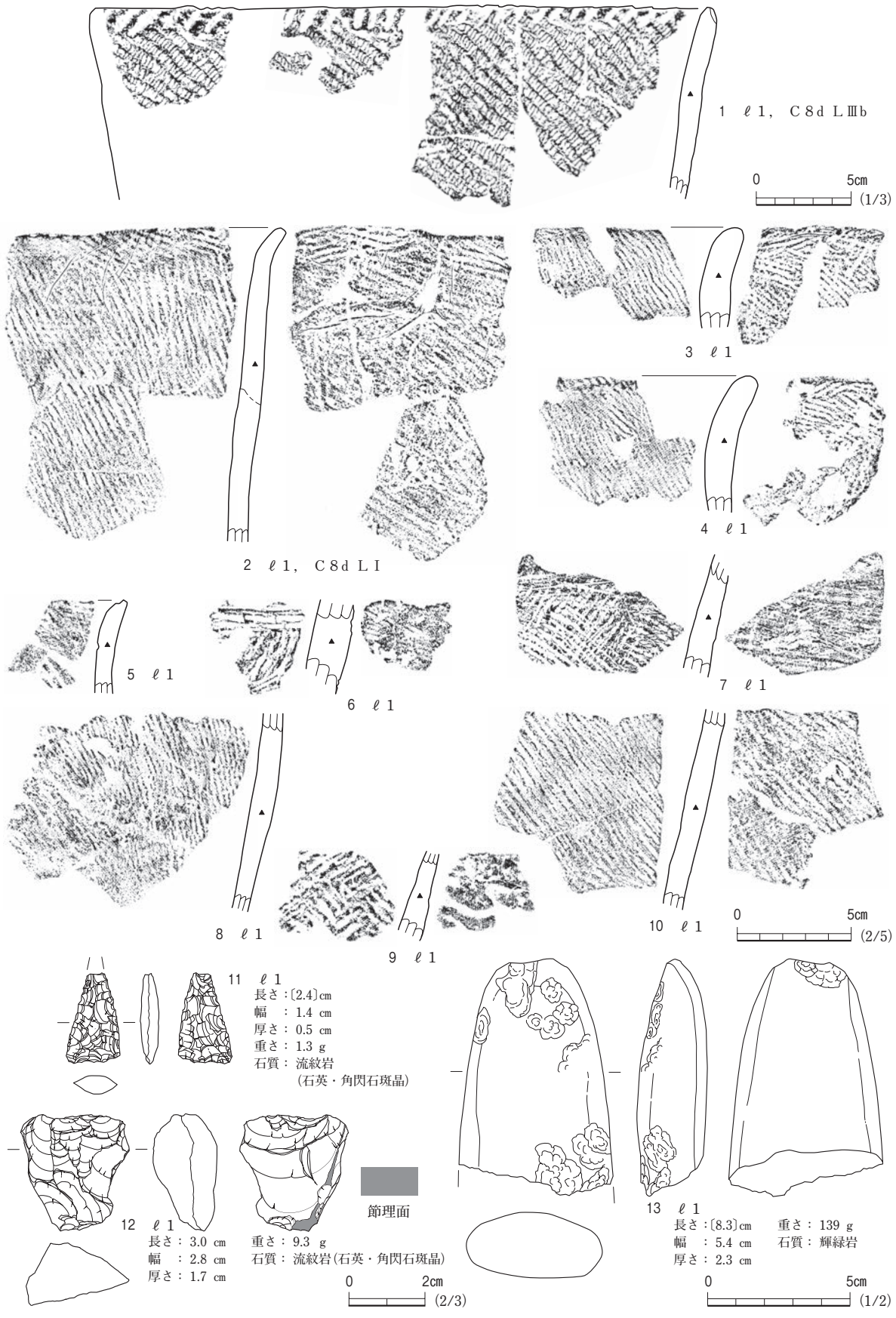


図７　１号住居跡出土遺物

本遺構の平面形は，遺存状態から楕円形と推測される。規模は東西5.40ｍ，南北3.22ｍを測る。壁高は北側壁で最大９㎝である。周壁は，西側の一部と北東側以外は失われているが，概ね70°の角度で立ち上がる。床面は平坦で，踏み締まりは見られなかった。

本遺構の施設は地床炉１基である。炉跡は住居跡の中央で確認されている。形状は楕円形を呈し，規模は長軸70㎝，短軸60㎝を測る。酸化面の厚さは最大５㎝である。全体的に酸化状態は弱いが，西側では比較的強く酸化している。炉跡の上面からは，使用面が認められない円礫が出土した。この石は約５㎝の範囲が被熱しているため，炉で使用されたものと考えられる。

遺　　物(図７，写真43・53・54)

遺物は縄文土器320点，石器９点が出土している。縄文土器は全てⅠ群土器であるが，縄文地文に比べ撚糸地文の方が多い。その多くは，北側から東側の床面付近から出土している。

図７－１～10は縄文土器である。１は縄文地文の口縁部資料で，胴部から口縁にかけて外傾気味に立ち上がる深鉢と考えられる。外面に０段多条Ｒの縄文が施文された後，口縁部上端に斜位方向の刻目が施されている。内面には横位方向の擦痕が観察される。２～10は撚糸地文の土器である。２～５は口縁部の資料で，いずれも外反し，２～４は口縁部上端の内面に横位方向の撚糸文が施されている。６・７は，撚糸地文に角状の工具による横位方向の沈線が施され，内面には横位方向の条痕が施されている。９は撚糸文が羽状に施されるものである。

図７－11～13には石器を掲載した。11は先端を欠損する石鏃で，形状は二等辺三角形を呈する。12は石核である。本資料は，石器の大きさや最終的な剥離面の状態から残核と判断した。13は先端部が欠損する石斧である。表面には自然面を残し，裏面と側面の一部には研磨痕が観察される。

ま　と　め

本遺構は楕円形の住居跡である。遺構の特徴は，炉を中央に設置していること，柱穴を持たないことである。遺構の所属時期は，出土した土器の特徴から縄文早期末葉と考えられる。　（中　野）

２号住居跡　ＳＩ02

遺　　構(図８，写真７・８)

本遺構は，調査区北側のＥ６グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。本遺構の北側には６号住居跡が近接し，遺構の一部は風倒木痕により壊されていた。

遺構内堆積土は２層に分けられ，いずれもレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

本遺構の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸5.40ｍ，短軸3.60ｍを測る。壁高は，遺存状態の良好な西壁で10㎝を測る。周壁は概ね50°の角度で立ち上がる。床面は平坦で，踏み締まりは見られない。

本遺構の施設は，地床炉２基とピット20基を検出した。炉跡は床面中央で確認され，南側を１号炉，北側を２号炉とした。１号炉の形状は楕円形を呈し，規模は長軸85㎝，短軸70㎝を測る。２号炉の形状は円形を呈し，規模は長軸103㎝，短軸96㎝を測る。いずれも焼き締まりが確認されている。

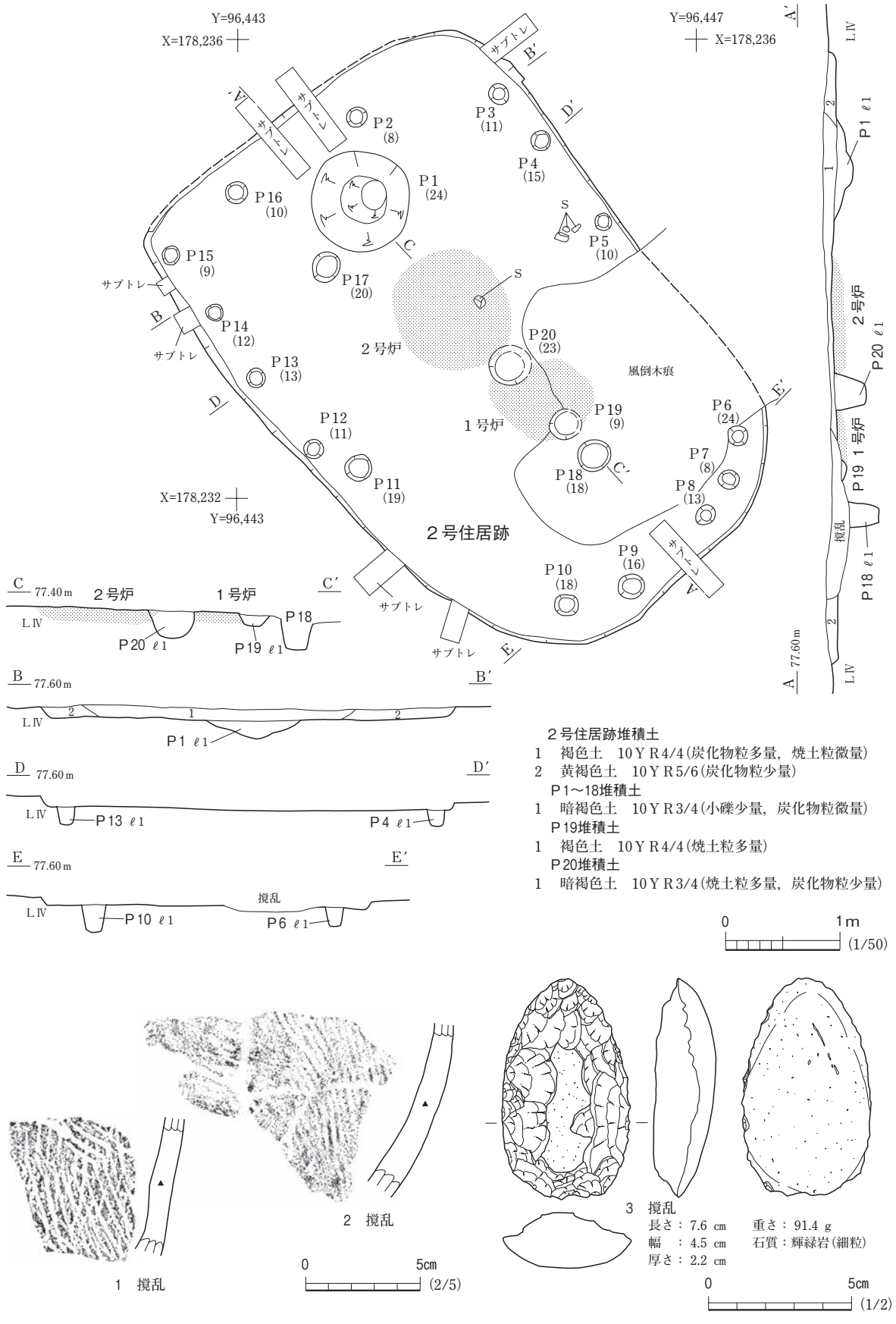


図８　２号住居跡，出土遺物

酸化面の厚さは１号炉は５㎝であるが，２号炉は８㎝まで達する。炉跡はＰ19やＰ20と重複しており，１号炉はＰ19・20より古いが，２号炉はＰ20より新しい。このため，１号炉の後に２号炉が使用され，炉の位置が南側から北側に移されたものと考えられる。また，２号炉の上面から，被熱した拳大の円礫が１点出土しているため，この石は炉の使用時に存在していたものと考えられる。

ピットは，概ね住居跡の中央に位置するものと，壁際に位置するものに分けられる。ピットの堆積土は，住居内堆積土のℓ１に近似する。住居跡の中央に位置するピットには，Ｐ17～19が相当する。これらは住居跡のほぼ中心軸上に位置し，直径20～25㎝，床面からの深さは９～20㎝を測る。このように，配置や規模等から主柱穴と考えられる。また，Ｐ19は１号炉跡より新しいことから，住居の補強等の柱穴として使用されたものと考えたい。壁際に位置するピットには，Ｐ２～16が相当する。平面形は円形ないし不整円形を呈し，規模は直径20㎝前後である。床面からの深さは８～20㎝を測る。これらは大きさが一定で，壁際に設置されていることから壁柱穴と考えられる。住居内における壁柱穴の位置関係は，東壁側に３基，西壁側に５基，南側に５基，北側に２基である。東西壁際の柱穴は，それぞれの間隔が80～100㎝を測る。壁柱穴は床面に対してほぼ垂直に掘り込まれている。壁柱穴間の距離は，Ｐ３－Ｐ４とＰ13－Ｐ14，Ｐ４－Ｐ５とＰ12－Ｐ13がほぼ同じであり，これらは東壁と西壁に対称に配列されている。

その他のＰ１とＰ20は用途が不明である。Ｐ１は住居跡の中心軸上に位置し，規模は直径90㎝，深さは22㎝を測る。断面形は擂鉢状を呈し，底面は東側が深くなる。Ｐ20は住居跡の中央に位置し，規模は直径28㎝，床面からの深さは23㎝を測る。１号炉の使用後に掘り込まれている。堆積土は炭化物粒を多く含む褐色土で，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺　　物(図８，写真44・54)

遺物は縄文土器33点，石器２点が，ℓ１から床面にかけて出土している。図８－１・２は撚糸文の縄文土器で，２には撚糸文が交差するように施されている。３は打製石斧で，裏面には自然面が残されている。

ま　と　め

本遺構は隅丸長方形を呈する住居跡である。床面中央に炉跡２基と20基のピットを検出した。炉跡は柱穴との重複関係から，各炉の使用時期が異なることが確認された。柱穴は主柱穴と壁柱穴に分かれ，企画的な構造を呈する。遺構の所属時期は，出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。

(中　野)

４号住居跡　ＳＩ04

遺　　構(図９，写真９)

本遺構は，調査区北側のＤ６・７，Ｅ６・７グリッドに位置する。本遺構の検出面は，ＬＩ直下のＬⅣ上面である。検出時には焼土範囲，踏み締まり範囲と複数のピットが確認され，その状況から住居跡と判断した。周壁が失われているため，遺存状態は悪い。隣接する遺構としては，２号住

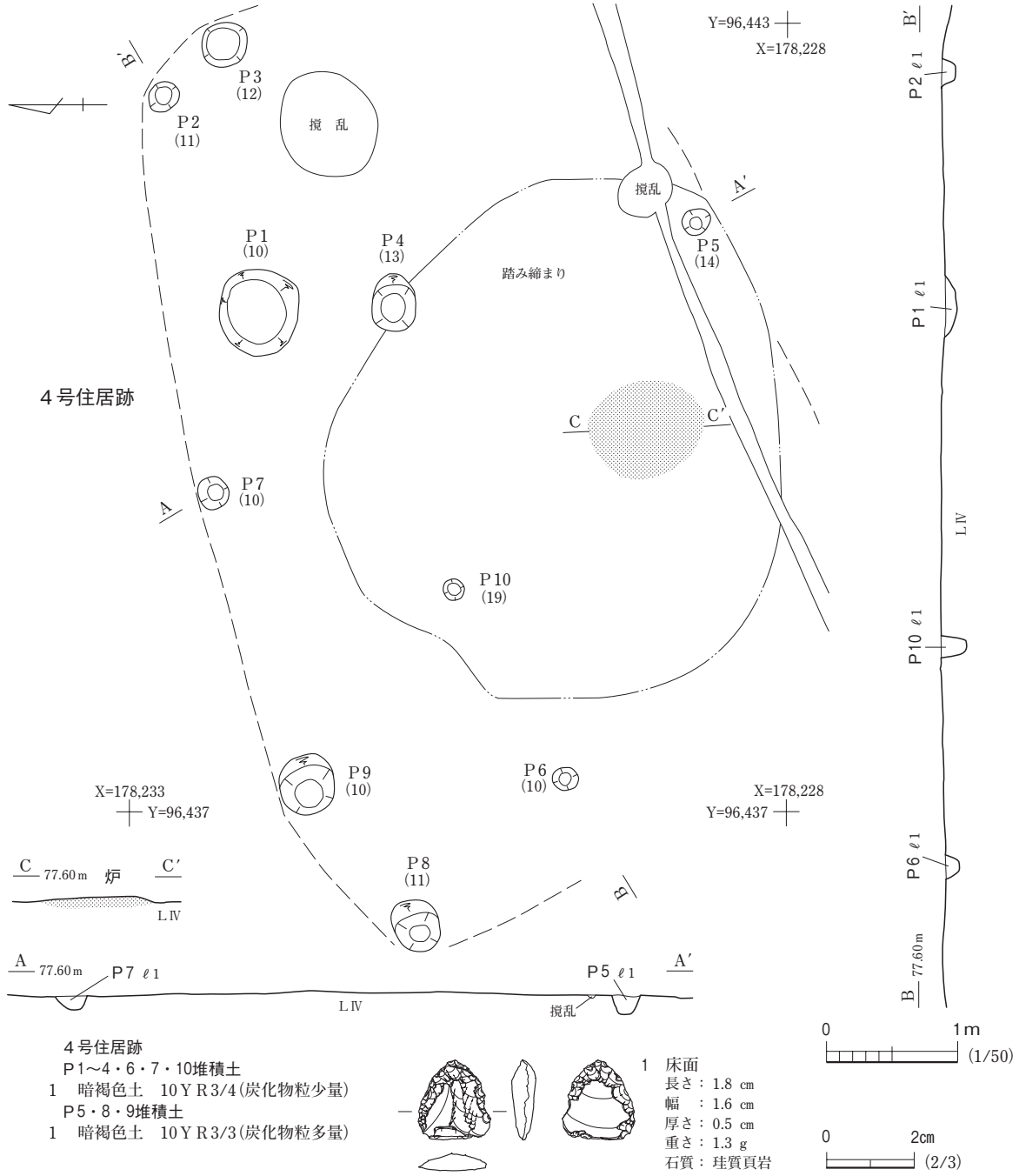


図９　４号住居跡，出土遺物

居跡が北東側に位置する。

住居の規模はピットの配置から，東西7.00ｍ以上，南北4.50ｍ以上と推定する。踏み締まり範囲は，炉を中心とした東西3.90ｍ，南北3.80ｍを測る。この範囲内では，５㎜前後の炭化物粒が僅かに認められた。床面は南西側が大きく削平を受けている。

本遺構の施設は，地床炉１基とピット10基を検出した。炉跡は，最も北側に位置するＰ２・７・９を結ぶラインを住居跡の北端と仮定すると，住居の中心から南側に偏るようである。炉跡の形状は楕円形を呈し，規模は長軸90㎝，短軸74㎝を測る。炉跡は焼き締まりが認められ，全体的に強く

酸化している。その厚さは最大８㎝を測る。

ピットは炉の北側に集中する。南側については削平を受けているためか，Ｐ５以外は検出できなかった。Ｐ４・６・10は，炉の北側２ｍ前後の位置に東西軸に並んで設置されている。おそらく住居跡の北壁より内側に分布していたと推測される。規模は直径20～45㎝，深さ10～20㎝を測る。Ｐ４は壁面の東側が緩やかに傾斜していることから，柱の抜き取り痕の可能性がある。Ｐ２・３・７～９は，北側で東西方向に並んで分布している。Ｐ２・３は住居跡の北東隅に，Ｐ８・９は北西隅に位置するものと推定される。規模は直径15～45㎝，深さ10㎝前後である。比較的大きいＰ８・９は，壁面の東側が緩やかに傾斜しており，柱の抜き取り痕の可能性がある。これらのピットは東西方向に並び，北側にピットが存在しないことから壁柱穴と推測される。この他に，Ｐ１は規模が直径65㎝，深さ10㎝を測り，断面形は擂鉢状を呈する。堆積土は炭化物粒を含む暗褐色土で，他のピットの堆積土と近似することから，本住居跡に伴うものと考えられる。用途については不明である。

遺　　物（図９，写真53）

遺物は縄文土器17点，石器４点が出土している。出土状況は，床面より疎らに出土している。縄文土器は，全て胎土に繊維を含む撚糸文のⅠ群土器で，小破片のため図示していない。

図９－１は石鏃である。表裏面の先端部と側縁の一部にのみ調整剥離が加えられている。

ま　と　め

本遺構は，地床炉周辺の踏み締まり範囲とピットの配置から，住居跡と判断した。柱穴の配置から，７ｍを超える大型の住居と推測される。遺構の所属時期は，出土土器から縄文早期末葉と考えられる。（中　野）

５号住居跡　ＳＩ05

遺　　構（図10，写真10・11）

本遺構は調査区北側のＣ４・５，Ｄ４・５グリッドに位置する。本遺跡で検出した遺構の中で最も北に位置する遺構である。遺構検出面はＬⅣ上面である。当初，１軒の住居跡として調査していたが，土層断面の観察から，東側に７号住居跡が重複することを確認した。このため，本遺構の東壁は掘りすぎてしまった。重複関係は，本遺構の方が新しい。本遺構の東側には１号土坑が，西側には２号土坑が近接する。

遺構内堆積土は４層に分けられ，いずれもレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

平面形は長方形を呈し，規模は東西5.35ｍ，南北4.70ｍを測る。検出面からの深さは10～15㎝であるが，北壁では20㎝を測る。周壁は僅かに外傾気味に立ち上がる。床面は概ね平坦であるが，中央から西側にかけて下層の礫層が露出しており，そのため西側が東側に比べ２～３㎝程度浅く構築されている。踏み締まりは確認できなかった。この他に，本遺構は重複する７号住居跡と，東西軸の方向や南北軸の長さが一致している。

住居内施設は地床炉１基，ピット８基を確認した。炉跡は住居跡の中央で確認したが，撹乱を受

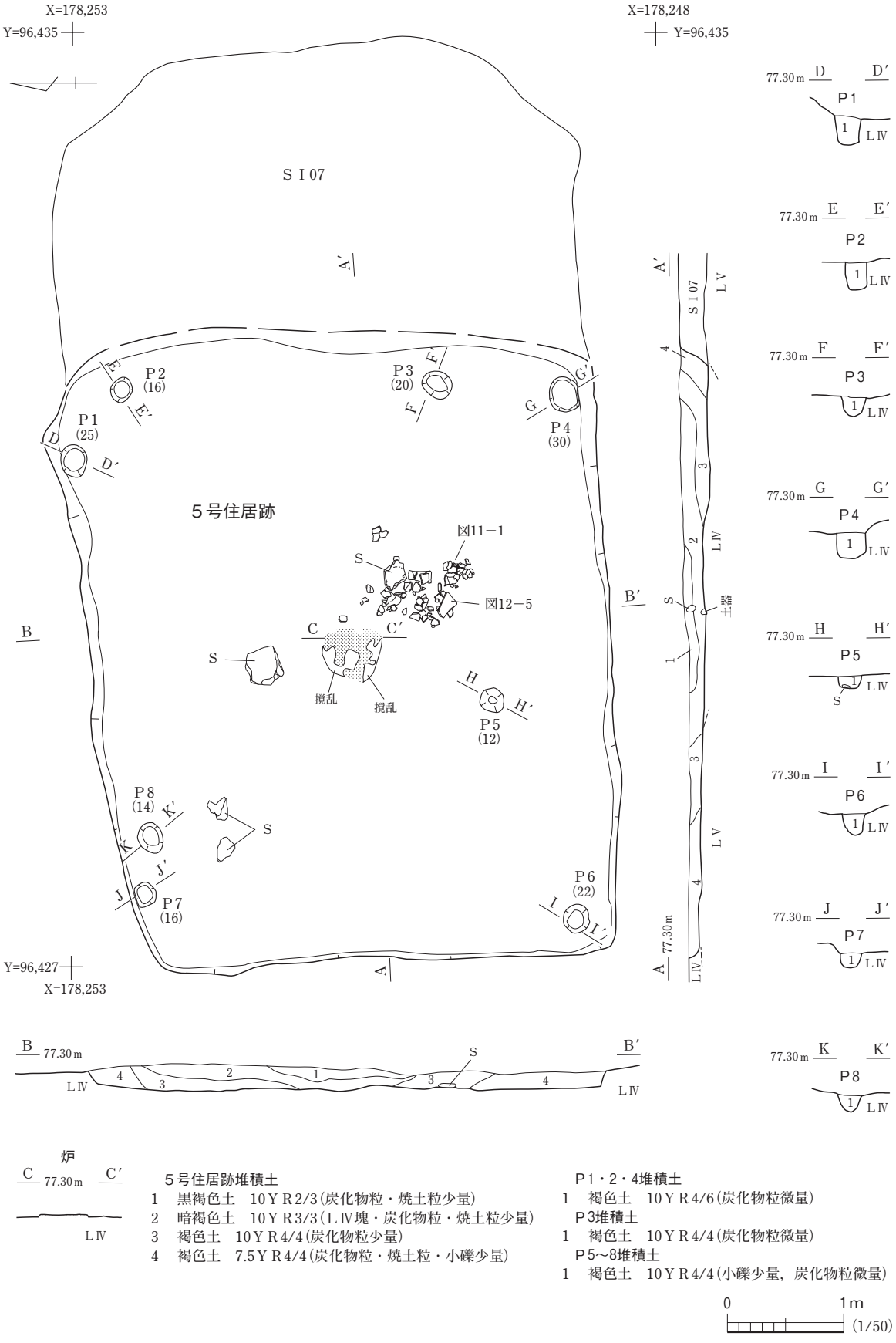

X=178,253
Y=96,435
X=178,248
Y=96,435
S I 07
A′
A
B
B′
P1
(25)
P2
(16)
P3
(20)
P4
(30)
P5
(12)
P6
(22)
P7
(16)
P8
(14)
5号住居跡
図11−1
図12−5
S
C
C′
撹乱
撹乱
土器
77.30m
LⅣ
LⅤ
炉
5号住居跡堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3(炭化物粒・焼土粒少量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3(ＬⅣ塊・炭化物粒・焼土粒少量)
3　褐色土　10ＹＲ4/4(炭化物粒少量)
4　褐色土　7.5ＹＲ4/4(炭化物粒・焼土粒・小礫少量)
P1・2・4堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物粒微量)
P3堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4(炭化物粒微量)
P5〜8堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4(小礫少量，炭化物粒微量)
0
1m
(1/50)

図10　５号住居跡

けているため，形状は不明である。規模は長軸50㎝，短軸45㎝を測る。床面の上に粘土を４㎝の厚さで貼り付けた上面を炉として使用しているため，この粘土部分のみが焼き締まり，下部の床面までは熱が及んでいなかった。ピットは８基を検出した。Ｐ５を除く７基は，それぞれ住居の四隅に位置することから壁柱穴と考えられる。床面からの深さは12～30㎝である。また，炉跡の南東側から多量の土器片が出土し，図11－１に示した土器が復元された。この土器片の上からは石皿(図12－５)が出土した。床面からはこの石皿の他に，平らな面を持つ礫３個が出土したが，磨面などの使用痕跡は確認できなかった。

遺　　物(図11・12，写真44・45・53～55)

遺物は縄文土器613点，石器69点が出土した。縄文土器はいずれもⅠ群土器で，縄文地文よりも撚糸文の方が僅かに多い。また，土器の内面には条痕が確認できるものが多い。石器は住居跡の東側から多く出土しているため，石器が多量に出土した７号住居跡から流れ込んだ可能性が高い。このうち，縄文土器10点，石器９点を図示した。

図11－１～10は縄文土器である。１は口縁部が僅かに外反し，砲弾形の器形を呈する尖底土器である。外面には斜縄文が施され，内面の上半部には横位の条痕が認められる。口唇部には刺突が施されている。また，内面の底部から15㎝上部の範囲には多量の炭化物が付着している。この炭化物については放射性炭素年代測定を実施し，その結果は第３章第４節に掲載した。さらに，外面の口縁部から頸部にかけて，部分的ではあるが炭化物の付着が認められる。２～４は口縁部資料でいずれも外反し，撚糸文が施されている。２・３の内面には条痕，４の内面には擦痕が認められる。４の口唇部には刻目が施される。５～８は胴部破片で，外面には撚糸文が施されている。５は１号土坑から出土した土器(図37－１)と同一個体と考えられ，内面の条痕は縦位，横位の順番で施されている。７は縦位の撚糸文上に，先の扁平な工具で横位の沈線が描かれている。９・10は胴部破片で，外面に縦位の縄文が施されている。

図11－11～14，図12には石器を掲載した。図11－11・12は石鏃である。11は凹基鏃，12は平基鏃で，いずれも頂部が欠損している。13・14はつまみを持つ縦型の石匙である。いずれも，表面はつまみ部から基部まで丁寧な調整が行なわれているが，裏面は側縁部にのみ微細な調整が施されている。図12－１は石べらの未製品と考えられる。表面は全面に粗い調整が施され，裏面は自然面を残して，片側縁にのみ調整剥離が見られる。２は削器の欠損品と考えられ，両面の側縁部に微細な剥離調整を施している。３・４は石核である。その大きさや遺存状態から残核と考えられる。５は石皿の欠損品で，扁平な石の片面のみが使用されている。

ま　と　め

本遺構は長方形を呈する住居跡である。炉は，床面に粘土を貼り付けて構築されていることから，特徴的な作りであることが言える。床面から出土した土器に付着していた炭化物に対し，放射性炭素年代測定を実施した結果は6240±40yrBPであった。本遺構の年代は，床面から出土した土器から縄文早期末葉と考えられる。　　(佐　藤)

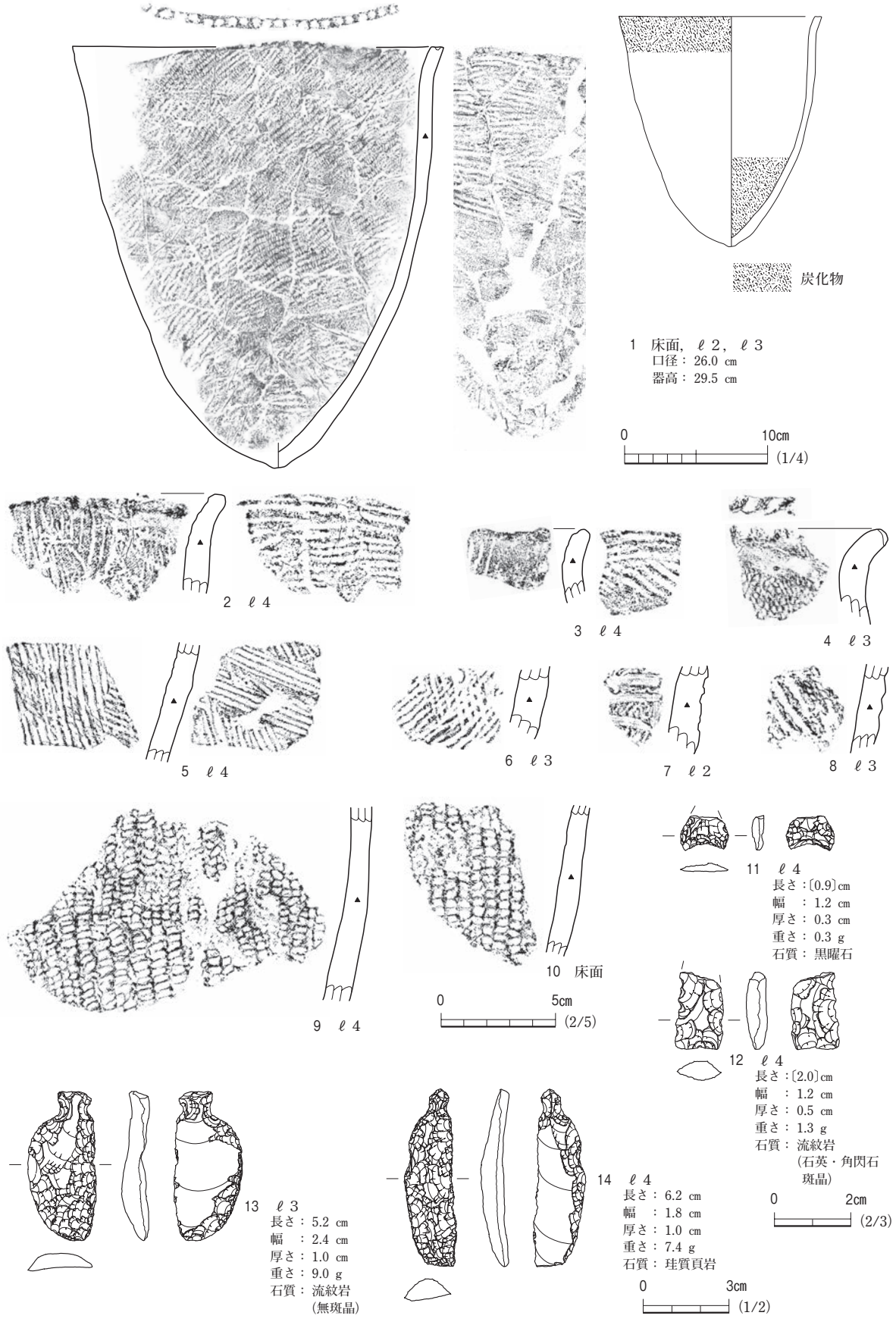


図11　５号住居跡出土遺物(1)

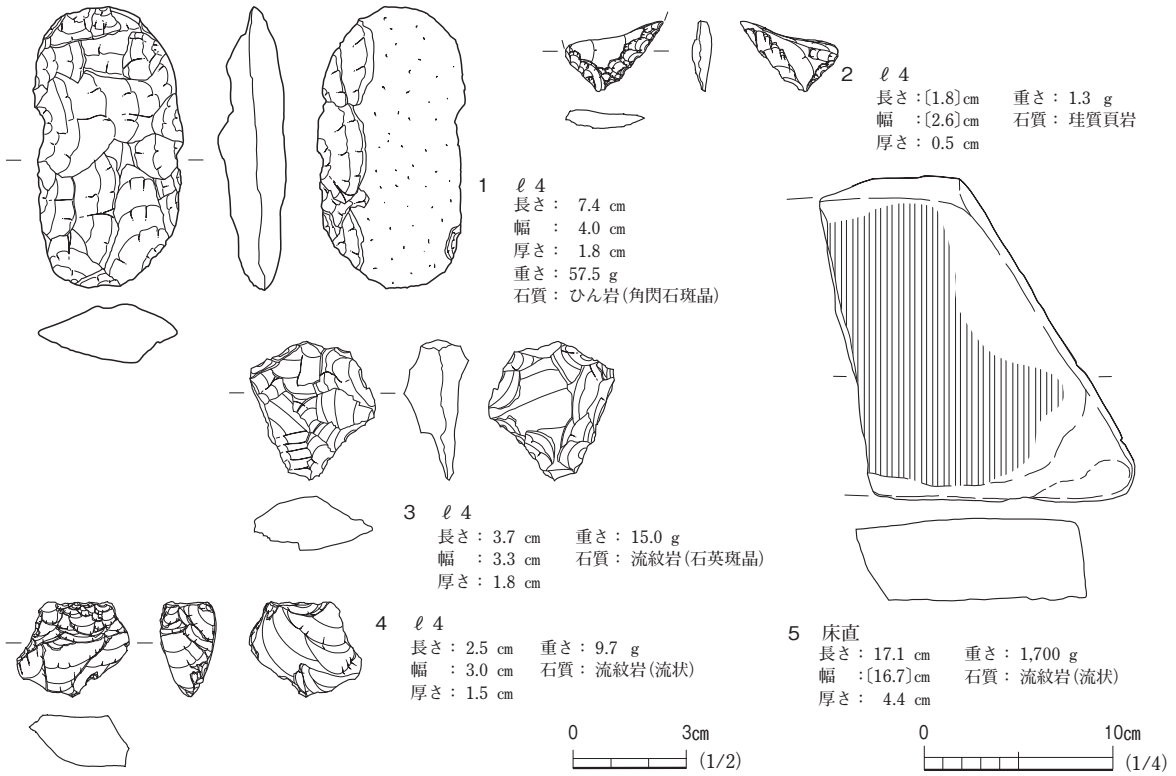


図12　５号住居跡出土遺物(2)

６号住居跡　ＳＩ06

遺　　構(図13，写真12・13)

本遺構は調査区北側のＤ・Ｅ６グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。住居跡中央部と南側の一部は風倒木痕により壊されている。本遺構の南側には２号住居跡が近接している。

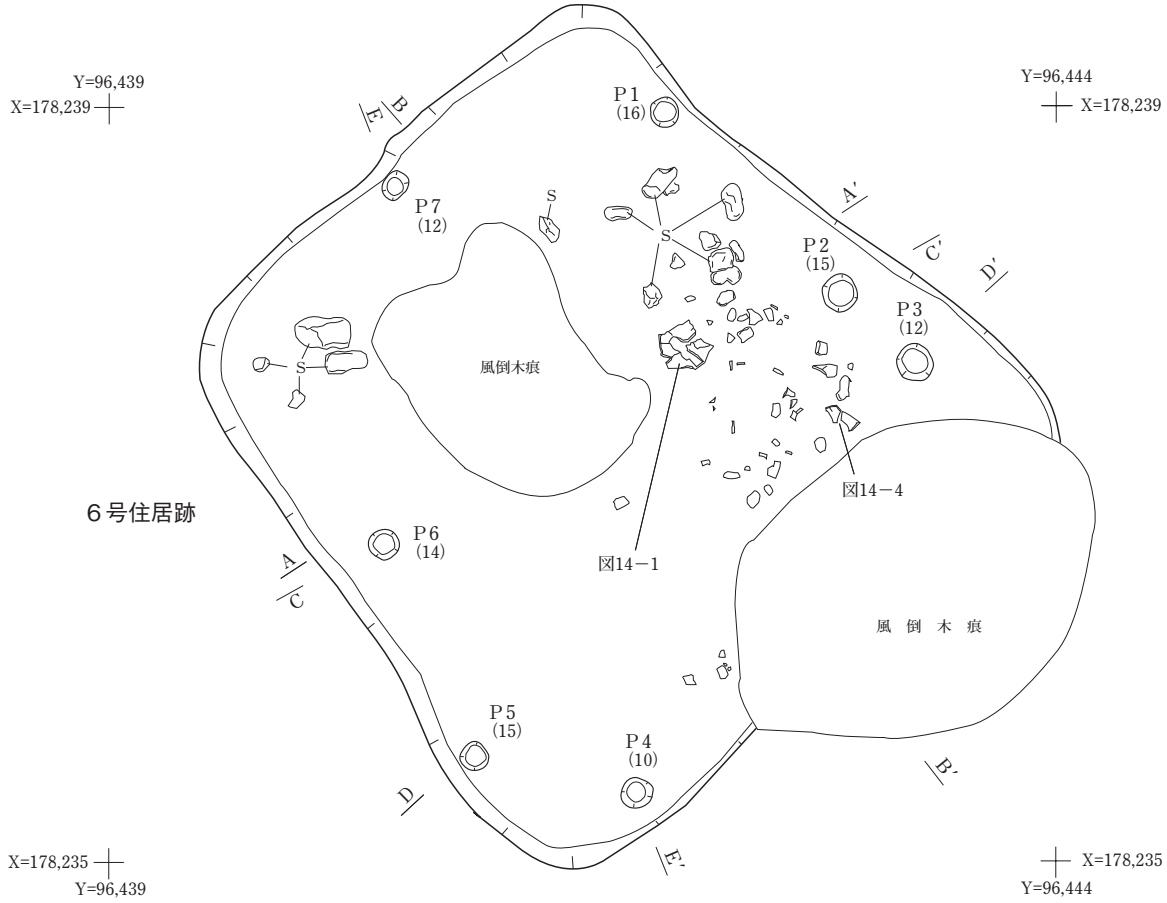
遺構内堆積土は２層に分けられ，共にレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。

平面形は，台形状の隅丸方形を呈する。規模は北辺2.90ｍ，西辺3.60ｍを測る。壁高は，遺存状態の良い北壁で12㎝である。周壁は概ね60°の角度で立ち上がる。床面は平坦であるが，踏み締まりは見られない。

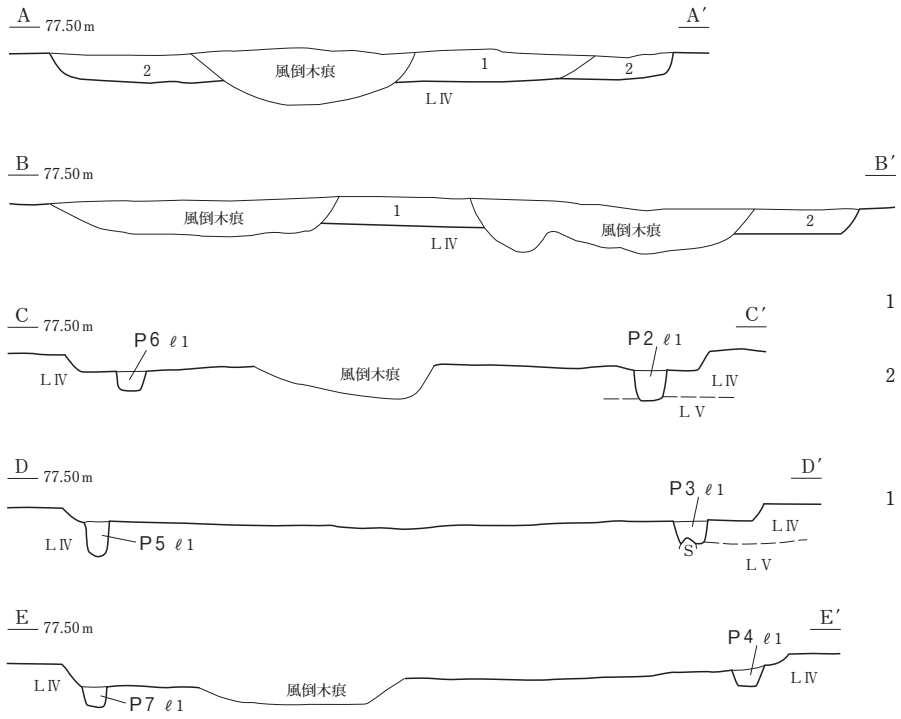
本遺構の施設はピット７基である。Ｐ１～７は規模が直径10～20㎝，深さ10～20㎝を測る。これらのピットは，壁際に位置することから壁柱穴と考えられる。いずれも床面に対してほぼ垂直に掘り込まれている。ピットの配置は東壁側に３基，西壁側に２基，南壁側に１基，北壁側に１基が認められるが，これらのピットの間隔は不規則である。ピットの堆積土は，住居跡堆積土のℓ２に近似する暗褐色土である。

遺　　物(図14，写真45・46)

遺物は縄文土器125点，石器４点が出土した。縄文土器は全てⅠ群土器である。土器の多くが，中央やや東側から集中して出土した。これらの遺物は，住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。



６号住居跡



６号住居跡堆積土
1　暗褐色土
10ＹＲ3/4
（炭化物粒多量）
2　黄褐色土
10ＹＲ5/6
（砂粒多量，炭化物粒微量）

Ｐ1～7堆積土
1　暗褐色土
10ＹＲ3/4
（砂粒多量，炭化物粒微量）

0　1m
(1/40)

図13　６号住居跡

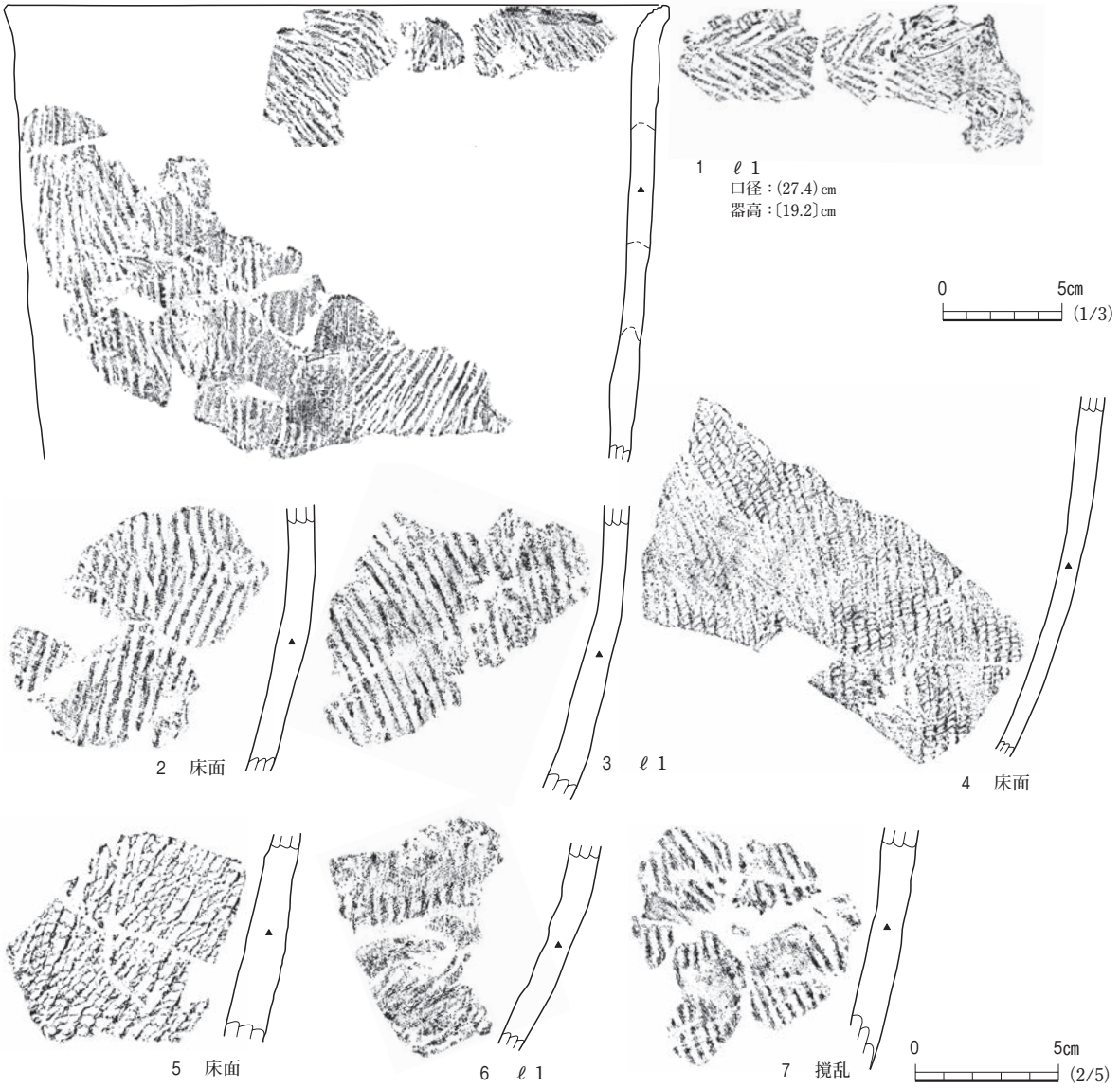


図14　６号住居跡出土遺物

図14－１～７は縄文土器である。４は縄文地文で，それ以外は撚糸地文の土器である。１は口縁部から胴部上半にかけての大破片で，口縁部がやや外反する。口縁部上端の内面には撚糸文を矢羽状に施した後，その端部に斜位方向の絡条体圧痕を連続的に施している。２・３・６・７は，原体や胎土の特徴から同一個体と考えられる。４は０段多条の原体を用いた縦走縄文が施文されている。４・５の内面には横位方向の擦痕が観察される。

ま　と　め

本遺構は隅丸方形の小型の住居跡である。炉を持たず，壁柱穴のみ７基が検出された。遺構の所属時期は，出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。　（中　野）

７号住居跡　ＳＩ07

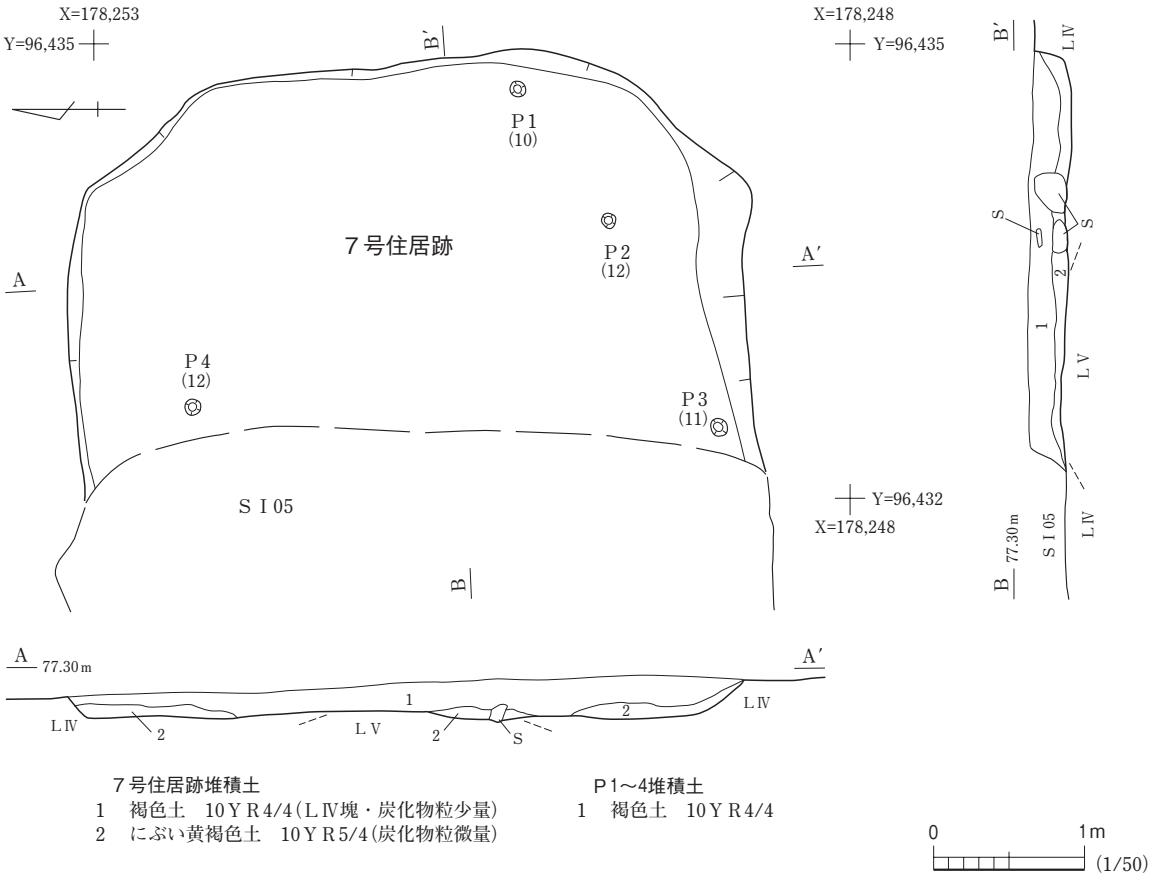
遺　　構(図15，写真10・11)

本遺構は調査区北側Ｃ４・５，Ｄ４・５グリッドに位置する。検出した遺構の中で最も北側の遺構である。遺構検出面はＬⅣ上面である。５号住居跡の土層断面観察から本遺構と重複していることが確認された。重複関係は，本遺構の方が古い。

平面形は遺存状態から隅丸方形と推定される。遺存する規模は東西4.40ｍ，南北4.70ｍである。検出面からの深さは13～23㎝である。周壁は僅かに外傾して立ち上がる。床面はＬⅣを掘り込んで構築されているが，５号住居跡の床面より僅かに浅い。本住居跡は，東西軸の方向や南北軸の長さが５号住居跡と一致している。

住居の施設としてはピットが４基確認された。Ｐ１～４は壁際に位置し，規模が直径10～12㎝，深さは10～12㎝である。ピット堆積土はいずれも褐色土である。これらのピットは，大きさや配置から壁柱穴と考えられる。

本遺構の堆積土は２層に分けられる。ℓ１はＬⅣ塊と多量の剥片・チップ類が均一に含まれていることから，埋め戻されたものと判断した。本層はＬⅢｂに近似する。ℓ２は壁の崩落による自然堆積土と判断した。ℓ１については，剥片・チップ類を回収するため，堆積土の半分に当たる土嚢



７号住居跡堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4(ＬⅣ塊・炭化物粒少量)
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4(炭化物粒微量)

Ｐ1～4堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4

図15　７号住居跡

表１　７号住居跡出土石器石材別重量

大きさ / 石材	10㎜以上			5㎜以上10㎜未満		5㎜未満		合計（g）	全重量に占める石材の割合（%）
	点数	重量（g）	割合（%）	重量（g）	割合（%）	重量（g）	割合（%）		
流紋岩（Q,Ho）	275	245.80	68.5	45.66	12.7	67.25	18.7	358.71	72.6
流紋岩（Q）	62	44.59	66.5	11.36	16.9	11.15	16.6	67.10	13.6
頁岩	44	28.21	44.5	21.99	34.7	13.13	20.7	63.33	12.8
黒曜石	2	2.98	100.0	0	0	0	0	2.98	0.6
水晶	1	1.88	100.0	0	0	0	0	1.88	0.4
合計	384	323.46	65.5	79.01	16.0	91.53	18.5	494.00	100%

＊10㎜以上の遺物については点数と重量を，10㎜未満のものについては重量のみを記載した。　　Q：石英斑晶　Ho：角閃石斑晶

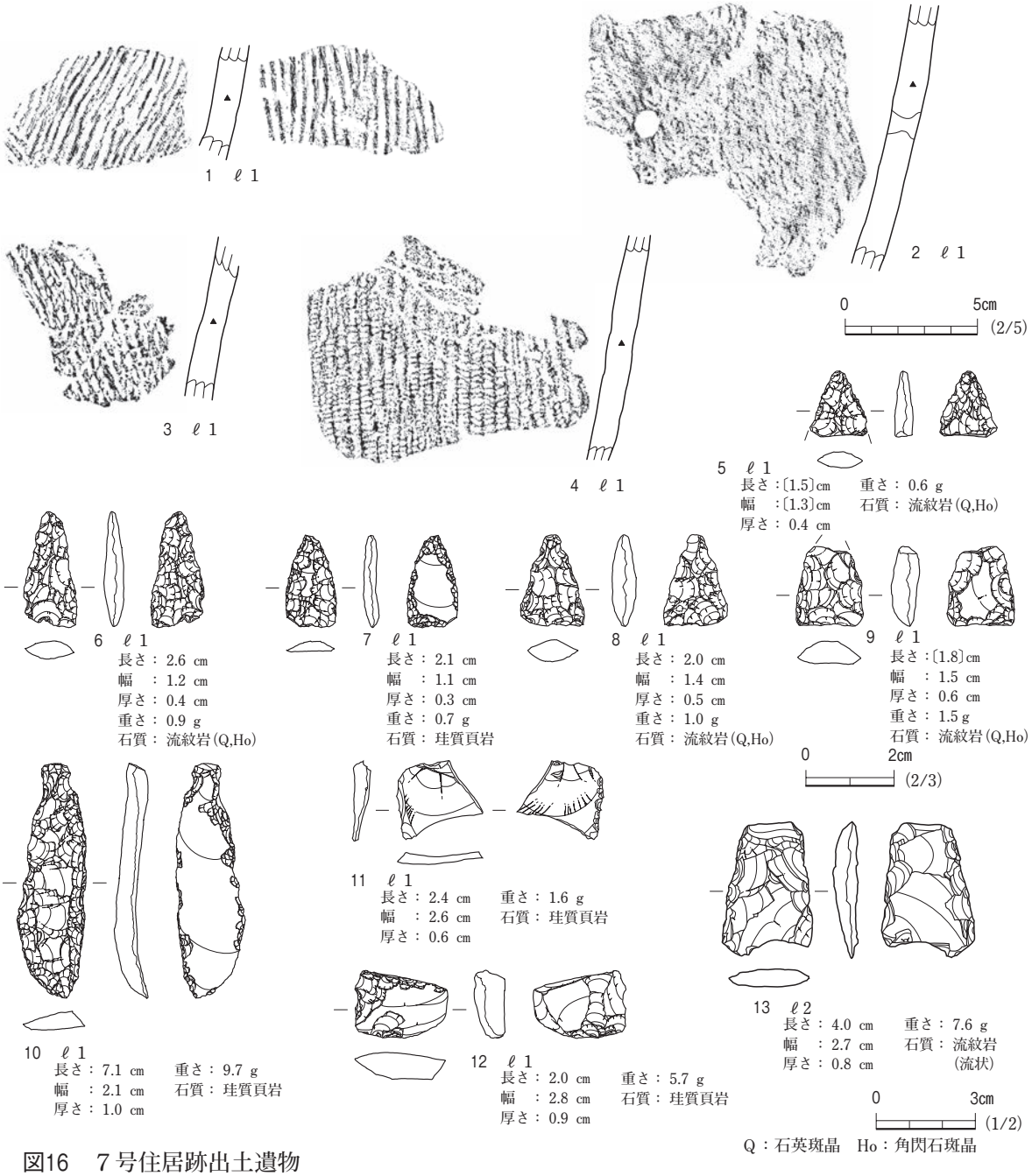


図16　７号住居跡出土遺物

約100袋分の水洗選別を行なった。回収された剥片・チップ類は，その多くが10㎜未満の石器であるため，これらについては点数ではなく重量で示した。（表１）

遺　　物（図16，写真46・53・54）

遺物は縄文土器209点，石器384点，10㎜未満の石器170.54ｇが出土した。この中から縄文土器４点，石器９点を図示した。縄文土器は縄文早期末葉のⅠ群土器と考えられ，縄文地文土器と撚糸文土器が混在している。微細石器は分類した結果，石材が大きく３種類に分けられ，中でも在地石材と考えられる石英斑晶と角閃石斑晶を含む流紋岩が目立つ。

図16－１～４は縄文土器である。１は外面に原体の細かい撚糸文が斜位に施された土器で，内面には縦位の条痕が見られる。２は外面の摩滅が著しいが，縦位の撚糸文が観察され，内面には横位の擦痕が見られる。また，補修孔が穿たれている。３は外面に縦位の撚糸文が施文され，内面には横位の擦痕が見られる。４は外面に縦位の縄文が施文され，内面には横位の擦痕が見られる。

図16－５～９は石鏃で，５は基部を欠損している。６・７は凹基鏃で，６は鏃身が長く，その中央に若干の括れが見られる。７の裏面は側面と基部のみに微細な剥離が認められる。８・９は平基鏃で，９は先端部を欠損している。10はつまみを持つ縦型の石匙である。裏面は側部に僅かな微細剥離が見られる。11・13は２次加工剥片で，11の片面の側縁部にのみ微細剥離が見られ，13は粗い調整剥離が行われている。12は石核で，その形状から残核と判断した。

ま　と　め

本遺構は炉跡が無い住居跡である。埋土には多量の剥片・チップ類が混じることから，遺構の周辺で石器製作が行なわれたものと考えられる。遺物はℓ１からの出土が多く，本遺構に伴う遺物は出土していないが，縄文早期末葉の所産であると考えている。（佐　藤）

８号住居跡　ＳＩ08

遺　　構（図17・18，写真14・15）

本遺構は調査区南側のＤ16グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。検出当初，10号住居跡の北西側で，焼土粒と炭化物粒を多く含む暗褐色土の範囲として確認した。その状況から，本遺構については焼失住居の可能性が高いものと判断し，住居跡堆積土内の焼土範囲と炭化材の位置を記録しながら調査を進めた。炭化材については，遺存状態が良好なものを樹種同定サンプルとして取り上げた。他の遺構との重複関係は，10号住居跡，38・39号土坑と重複しており，いずれも本遺構の方が新しい。

遺構内堆積土は４層に分けられた。ℓ１・２・４は自然流入により堆積した土層である。ℓ３は炭化材や焼土塊を含むことから，家屋焼失時の崩落材等が腐植したものと考えられる。ℓ３は他の土層と堆積状況が異なっているが，自然堆積によるものと考えられる。

ℓ３から出土した炭化材は，住居跡全体に分布しており，特に西側から出土した炭化材の遺存状態は良好である。これらの炭化材のうち，図17に示した12点の樹種同定を行なった。炭化材の②・

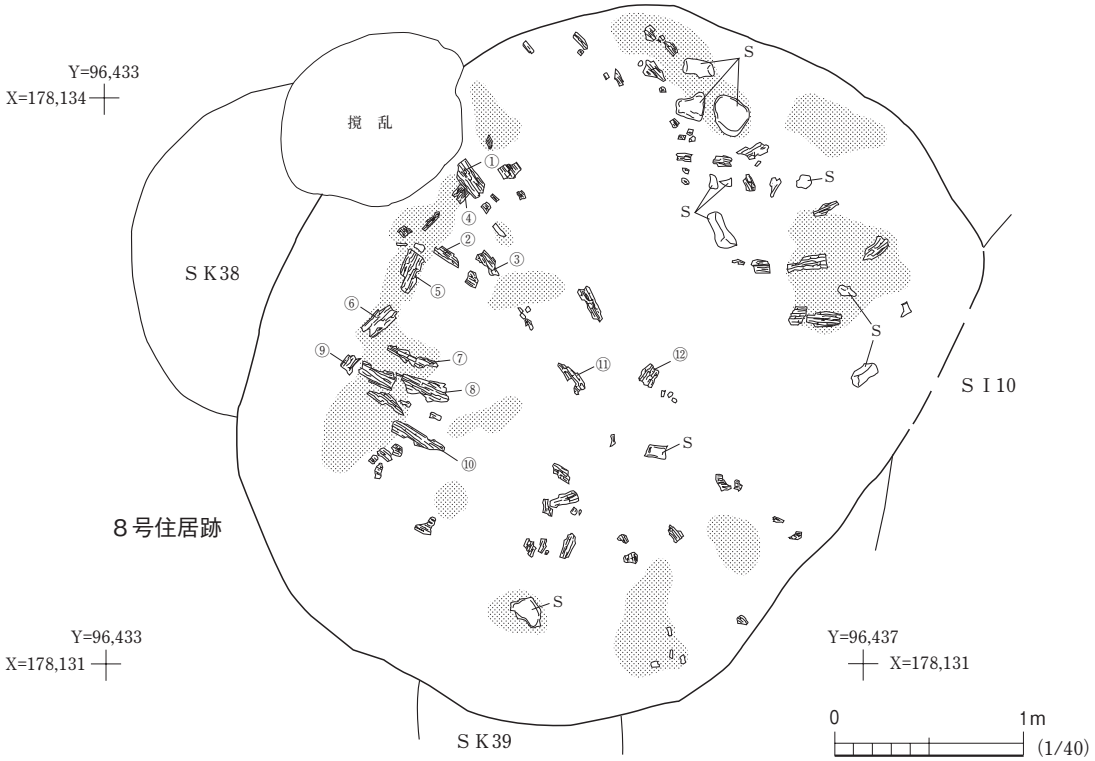


図17　８号住居跡出土炭化材

③・⑧・⑩～⑫は，概ね住居跡の中心に向かうように出土している。④～⑥・⑨は②・③・⑧・⑩～⑪の方向とほぼ直交し，住居跡の長軸に平行するようである。これらの炭化材は，出土状況から上屋構造の部材の可能性が高い。これらの部材には栗とケンポナシが使用されていた。この他，⑫については放射性年代測定を実施した。樹種同定と年代測定の結果については，第３章第３・４節に記載した。

焼土の範囲は，炭化材と同様に住居跡のほぼ全体に分布するが，その中でも集中している範囲を記録した。遺構の南側や西側では，焼土が床面上に堆積していたことが確認され，その層厚は５～10㎝を測る。これらの焼土は，住居焼失時に屋根に葺かれていた土が焼土化して堆積したものと考えられる。また，焼土は，住居の壁際に厚く堆積しているのに対し，中心部にはほとんど見られない。このため，土は屋根全体を覆っていたのではなく，屋根の周囲のみを覆っていたものと推測される。

本遺構の平面形は，南北に長い楕円形を呈する。規模は東西3.30ｍ，南北3.85ｍを測る。壁高は西壁で25㎝を測る。壁面は概ね80°の角度で立ち上がる。床面はＬⅣを使用しており，南側から北側に緩やかに傾斜している。踏み締まりは確認されていない。

本遺構の施設はピット４基が確認された。これらは，概ね主柱穴と壁柱穴に分かれるものと考えられる。堆積土はいずれも暗褐色土である。Ｐ２は住居跡のやや南側に位置し，直径40㎝，深さ60㎝を測ることから主柱穴と考えられる。Ｐ１・３・４は直径18～34㎝，深さ25～32㎝を測り，その配置から壁柱穴と考えられる。

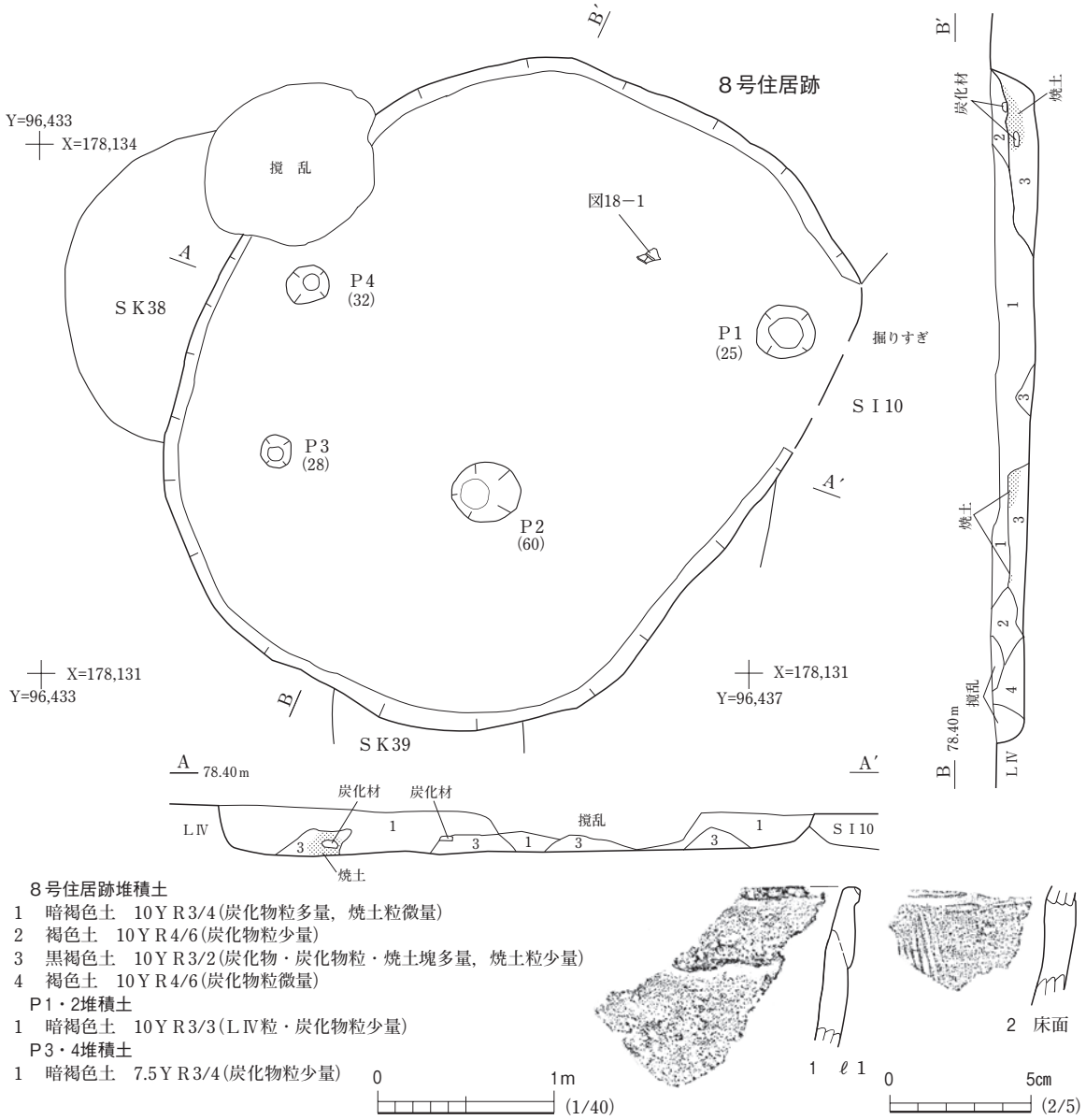


図18　８号住居跡，出土遺物

遺　　物(図18，写真48)

遺物は縄文土器８点，石器５点が出土している。図18－１・２は縄文土器である。１は口縁部破片で，外面に積み上げ痕を残すものである。口縁部上端には連続刺突が施され，その下には重層指頭圧痕文が僅かに観察される。２は縄文地文に横位の沈線が施されている。

ま　と　め

本遺構は楕円形を呈する竪穴住居跡で，炭化材と焼土塊・粒の出土状況から焼失住居と考えられる。上屋を構築していたと考えられる炭化材が出土しており，また焼土の分布から住居の屋根を土で葺いた可能性がある。遺構の所属時期は縄文中期前葉と考えられる。なお，放射性炭素年代測定においても，遺構の時期を示すおおよその値が出ており，出土遺物や重複関係からも矛盾しないと考えられる。　　(中　野)

９号住居跡　ＳＩ09

遺　　構(図19，写真16・17)

本遺構は，Ｅ16・17，Ｆ16・17グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。本遺構の西側には10号住居跡が，北西側には12号住居跡が近接する。他の遺構との重複関係は，32号土坑と重複し，本遺構の方が新しい。

遺構内堆積土は５層に分けられ，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。

本遺構の平面形は，東西に長い隅丸方形を呈する。規模は東西6.80ｍ，南北4.90ｍを測る。壁高は，遺存状態の良い南壁では35㎝を測る。壁面は概ね80°で立ち上がる。床面はＬⅣが使用されているが，東側ではＬⅤの礫層が露出している。そのため床面は，東側が西側に比べ10㎝前後高く，東から西側へ緩やかに傾斜している。床面中央付近では踏み締まりが認められ，その範囲は東西２ｍ，南北1.3ｍである。この範囲は，礫層の上に貼床を形成していたものと考えられる。

本遺構の施設としてピット６基を確認した。ピットは，礫層が露出していない床面の西側と北側に集中して検出されたが，礫の露出する南側ではＰ６のみが検出された。ピットの堆積土は，Ｐ４がにぶい黄褐色土であるが，それ以外は褐色土である。これらのピットは，大きさからＰ１・２・５とＰ３・４・６に分けられる。Ｐ１・２・５は，規模が直径25～30㎝，深さ14～22㎝を測る小型のピットである。Ｐ１とＰ５は壁際に，Ｐ２はＰ１のやや東側に位置する。Ｐ１・２・５は，規模から判断して柱穴と考えられる。Ｐ３・４・６は北側と南側に位置する。平面形は楕円形を呈し，規模は長軸90～100㎝，短軸60～96㎝を測る。床面からの深さは22～29㎝であり，用途については不明である。

遺　　物(図20，写真47・53)

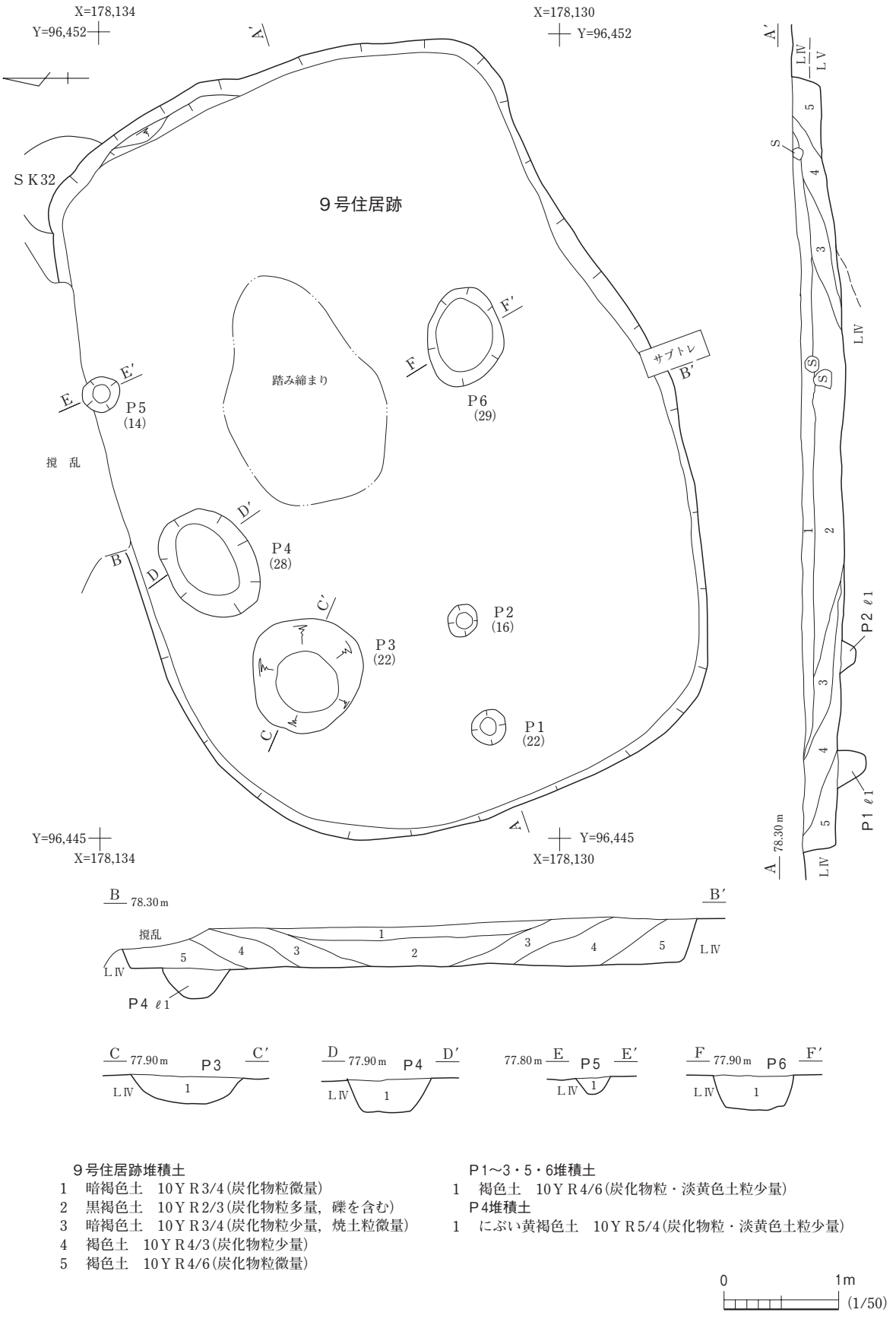
遺物は縄文土器75点，石器７点が出土している。その多くは住居跡東側のℓ４から出土し，住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。

図20－１～７は縄文土器である。１・２は波状口縁の破片であり，胎土や施文の特徴から同一個体と考えられる。それぞれ，口縁部上端と隆線に沿って１段撚りの押捺縄文が施されている。３は隆線と隆線の交点部に突起状の貼付文が取り付き，その両端には刺突が施されている。また，貼付文の下側に弧線状の平行沈線が施され，その沈線間には交互刺突が施されている。４は２条の垂下する平行沈線が施されている。５・６は，縦方向の単節縄文が間隔をあけて施された後，縦方向の結節回転文が施されていることから同一個体と考えられる。７は胎土に繊維痕が見られる無文の土器である。

図20－８は完形の石鏃である。基部に抉りが入り，形状は二等辺三角形を呈する。

ま　と　め

本遺構は楕円形を呈する大型の住居跡である。本遺構の特徴は，炉跡を持たず，柱穴も３基と少ない点が挙げられる。遺構の所属時期は，出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。　　(中　野)



９号住居跡堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物粒微量)
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3(炭化物粒多量，礫を含む)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物粒少量，焼土粒微量)
4　褐色土　10ＹＲ4/3(炭化物粒少量)
5　褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物粒微量)

Ｐ1～3・5・6堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物粒・淡黄色土粒少量)
Ｐ4堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4(炭化物粒・淡黄色土粒少量)

0　1m
(1/50)

図19　９号住居跡

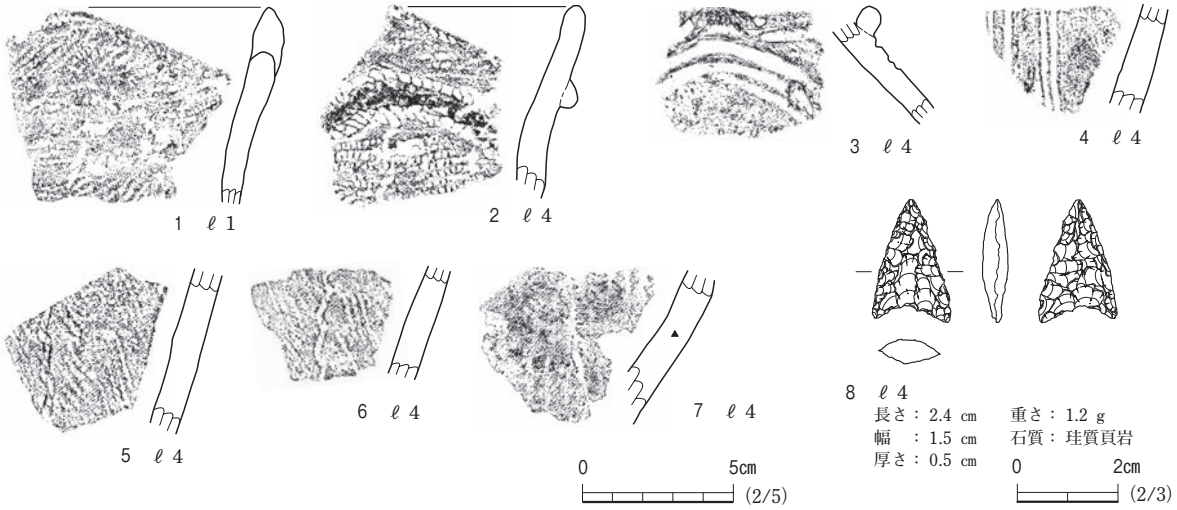


図20　９号住居跡出土遺物

10号住居跡　ＳＩ10

遺　　構(図21，写真18・19)

本遺構は調査区南側のＤ16・17，Ｅ16・17グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。平成17年に行なわれた試掘調査の１号トレンチで確認された遺構である。このトレンチ北側からは多くの縄文土器が出土したため，その周辺の精査を行なって住居跡を確認した。近隣の遺構としては９号住居跡が本遺構の東側に，12号住居跡が北東側に位置する。他の遺構との重複関係は，８号住居跡と重複しており，本遺構の方が古い。

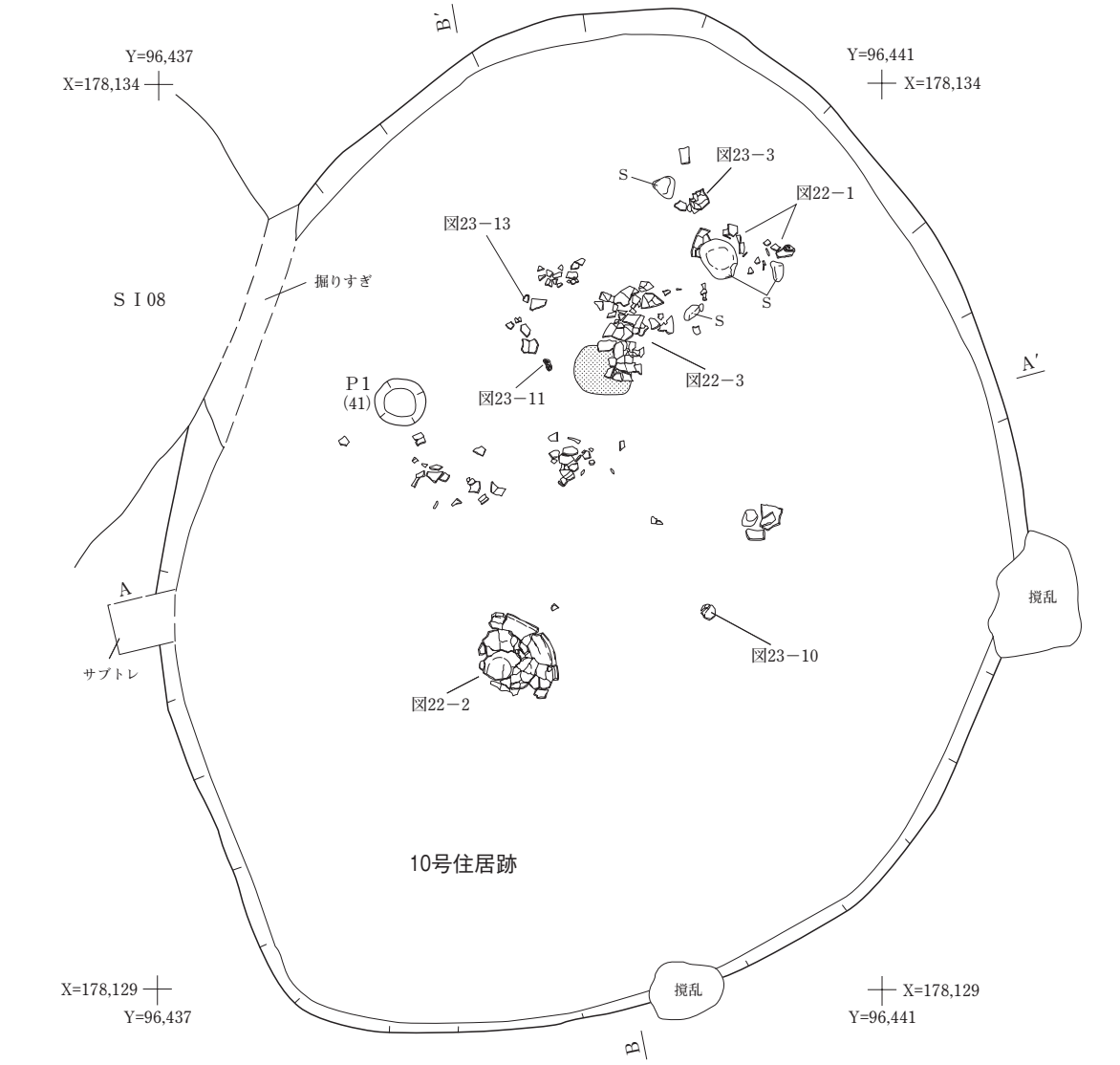
堆積土は３層に分けられ，いずれの層もレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。平面形は南北に長い楕円形を呈する。遺構の規模は東西4.75ｍ，南北5.65ｍを測る。壁高は，遺存状態の良い北壁で20㎝を測る。壁面は概ね70°で立ち上がる。床面は平坦であり，踏み締まりは見られない。

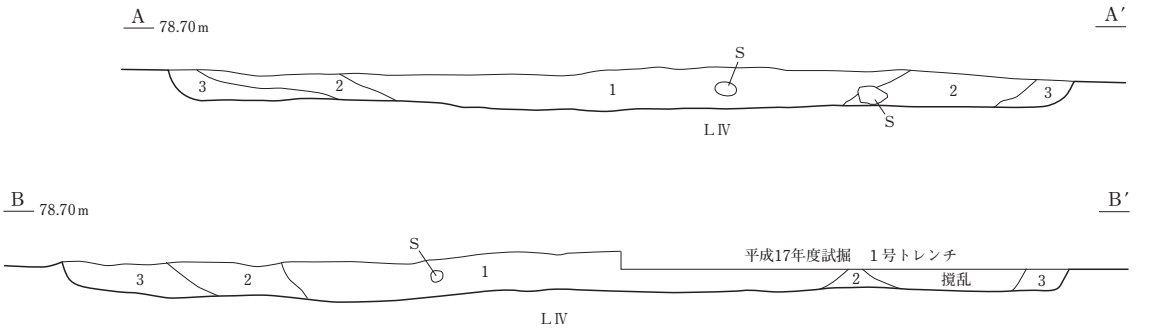
本遺構の施設は，ピット１基を検出した。Ｐ１は直径30㎝の円形を呈し，深さ41㎝を測る。堆積土は暗褐色土である。床面中央のやや北側には，東西30㎝，南北25㎝の範囲に焼土が集積していた。床面から炉は確認されなかったが，焼土の集積からこの周辺に炉が存在していた可能性が高い。

遺　　物(図22・23，写真47・54)

遺物は縄文土器113点，土製品１点，石器33点が出土している。その多くは中央北側のℓ１から集中して出土した。これらの縄文土器は，住居廃絶後に複数個体分を廃棄したものと推測され，一括性の強い遺物と考えられる。

図22・図23－１～10は縄文土器である。図22－１は，胴部上半から口縁部にかけての破片である。本資料は，膨らみのある胴部から頸部にかけて強く窄まり，頸部から口縁部が「く」の字状に開く深鉢である。口縁部は波状口縁を呈し，波頂部に横帯Ｓ字状突起が取り付き，それ以外は無文部となる。頸部には文様帯が形成され，横位隆線と沈線によって楕円形の横帯区画が描かれている。２は





10号住居跡堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物粒多量)
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3(炭化物粒微量)
3　褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物粒微量)

Ｐ1堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物粒少量)

0　1m
(1/40)

図21　10号住居跡

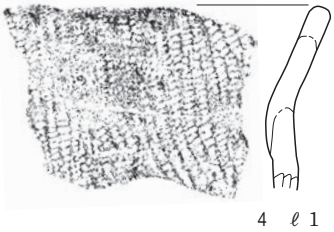
図22　10号住居跡出土遺物(1)

1　ℓ１，床面

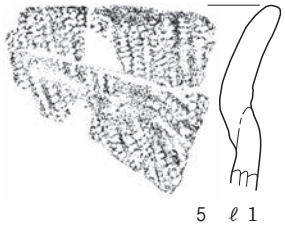
2　ℓ１

3　ℓ１
口径：7.8 ㎝
器高：9.0 ㎝
底径：5.5 ㎝

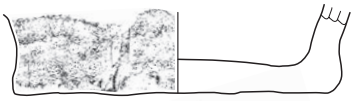
0　5cm　(1/3)
(1～3)

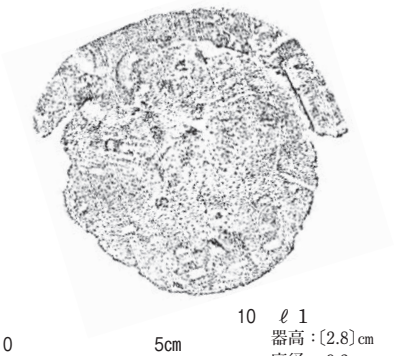


4　ℓ１



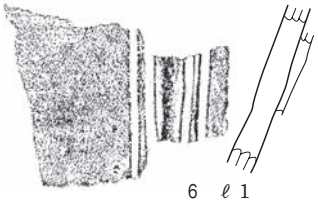
5　ℓ１



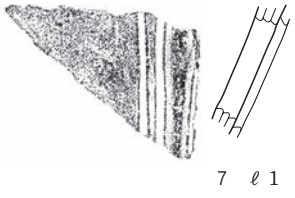


10　ℓ１
器高：〔2.8〕cm
底径：9.2 ㎝

0　5cm　(2/5)
(4～10)



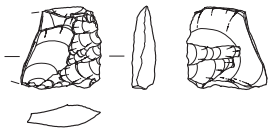
6　ℓ１



7　ℓ１

8　ℓ１

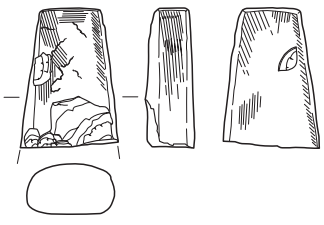
9　ℓ１



12　ℓ１
長さ：〔1.6〕cm　　重さ：1.1 g
幅　：〔1.6〕cm　　石質：珪質頁岩
厚さ：〔0.5〕cm

0　2cm　(2/3)
(12)

11　ℓ１，C15c LⅢa
長さ：〔6.2〕cm
幅　：〔7.3〕cm
厚さ：〔2.6〕cm



13　ℓ１
長さ：〔3.7〕cm
幅　：〔2.6〕cm
厚さ：〔1.3〕cm
重さ：21.9 g
石質：流紋岩
(無斑晶)

0　3cm　(1/2)
(11・13)

図23　10号住居跡出土遺物(2)

口縁部が内湾する浅鉢で，器形の約半分が遺存している。口縁部には「Ｘ」字状の橋状把手が取り付けられており，この把手は口径から見て６単位で取り付けられていたものと推測される。口唇部には部分的にベンガラが塗付されている。口縁部には沈線文で楕円形区画が描かれ，区画内には非対称の楕円文や渦巻文，弧線文が平行沈線により描かれている。また，平行沈線間には，刺突文や交互刺突文が施されている。胴部には単節縄文の施文後，縦回転による結節回転文が施されている。底部には網代痕が見られる。３は深鉢土器である。底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がり，窄まった頸部から口縁部が外傾気味に開く。約３割が遺存する。口縁部は複合口縁になり，無文帯を形成する。頸部には，刻目を持つ瘤状の貼付文が取り付き，胴部には結節文が貼付文に対応して施文されている。底部には網代痕が見られ，使用時に付着したと見られる白色の粘土が観察される。図23－１・４・５は口縁部破片である。１は波状口縁の波頂部に刻目が施され，頸部には積み上げ痕が認められる。４・５は口縁部から頸部にかけての破片である。内面の頸部の下に積み上げ痕が観察され，製作状況や胎土等の特徴から同一個体と考えられる。２は頸部が「く」の字状に括れ，肩部が張る器形を呈する。頸部には刻目を持つ瘤状の貼付文が取り付く。本資料は14号住居跡出土の土器(図30－２)と，原体の撚り方に違いがあるものの，胎土や器形の特徴が極めて近似しているため同一個体の可能性もある。３は約半分が遺存し，口縁部がやや内湾する小型の土器である。口唇部には刻目を施す。６～９は胎土や施文の特徴から同一個体と考えられる。このうち，６・７は無文地に縦方向の隆線を貼り付け，隆線沿いに平行沈線を施している。10は網代痕が見られる底部破片である。

図23－11は胴部下半から片側の脚部にかけての土偶片である。この土偶は，Ｃ15グリッドのＬⅢａから出土した脚部分と，本住居跡内から出土した胴部分が接合したものである。胴部には鋭利な工具によって沈線が放射状に描かれ，脚部には角状工具による３条の沈線が横位に深く施されている。また，胴部上端の割れ口には白色粘土が付着しており，破損時の補修剤として粘土が用いられたものと考えている。

図23－12・13には石器を掲載した。12は調整剥片である。両面とも片側からのみ調整剥離が加えられている。13は定角式の磨製石斧で，先端部が欠損している。全面に入念な研磨が施され，光沢が見られる。

ま　と　め

本遺構は，隅丸方形を呈する中型の住居跡である。遺構の特徴としては，炉跡を持たないことや柱穴が１基しか検出されない点が挙げられる。また，堆積土から複数個体の縄文土器や赤彩塗付された浅鉢，小型土器，土偶が出土している。所属時期は，出土した遺物等から縄文中期前葉と考えられる。　(中　野)

11号住居跡　ＳＩ11

遺　　構(図24，写真20・21)

本遺構は，調査区南側のＣ・Ｄ16グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。ＬⅢａ掘削時には，縄文土器と被熱した礫が比較的まとまって出土した。他の遺構との重複関係はない。

堆積土は２層に分けられ，共にレンズ状の堆積であることから自然堆積と考えられる。

本遺構の平面形は不整円形を呈する。遺構の規模は東西6.00ｍ，南北6.20ｍを測る。壁高は，最も遺存する北壁で10㎝である。周壁は概ね50°で緩く立ち上がる。床面はＬⅣに形成されており，概ね平坦である。

本遺構の施設として，地床炉２基とピット15基を検出した。地床炉は，床面の北側で２基確認され，西側を１号炉，東側を２号炉とした。いずれも酸化範囲の形状は楕円形を呈する。１号炉は規模が長軸120㎝，短軸95㎝である。北側がやや強く酸化しているが，全体的に焼き締まりは弱い。酸化面の厚さは最大７㎝である。２号炉は規模が長軸82㎝，短軸60㎝である。酸化面の厚さは最大５㎝である。中央部が強く酸化しており，焼き締まりが認められる。また，炉の検出面からは，被熱痕跡が認められない礫が１点出土した。

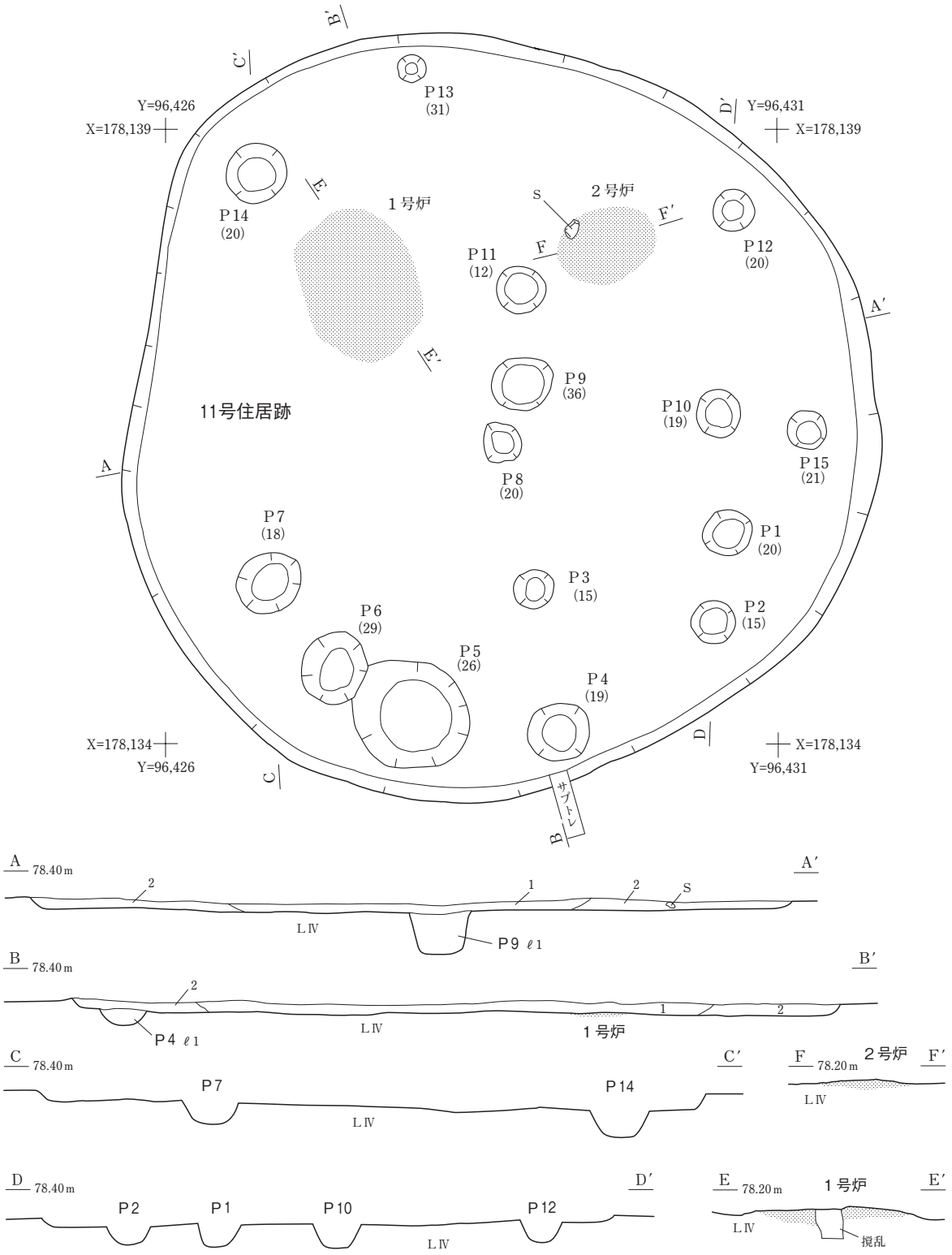
ピットは床面の中央に位置するものと，壁際に位置するものに分けられる。平面形は円形あるいは楕円形を呈する。Ｐ８・９・11は床面の中心に位置する。その中でもＰ９は住居のほぼ中心に位置し，直径50㎝，床面からの深さは36㎝を測り，ピットの中では最も深い。Ｐ１～４・６・７・10・12～14は壁際に近い位置に設置されている。規模は直径25～50㎝とやや幅がある。床面に対してほぼ垂直に掘り込まれており，床面からの深さは概ね15～20㎝を測る。Ｐ５は直径95㎝，深さ26㎝を測る。断面形は擂鉢状を呈する。住居に伴うピットと考えられるが，用途は不明である。これらの柱穴の堆積土は，住居内堆積土とほぼ同質の暗褐色土である。

遺　　物(図25，写真48・54・55)

遺物は縄文土器51点，石器６点が出土している。遺物の出土状況は，多くがℓ１から散在して出土している。

図25－１～５は縄文土器である。１は胴部が直線的に立ち上がり，口縁部が内湾する深鉢である。口縁部には有節沈線による区画文が描かれ，胴部には重層指頭圧痕が施されていることから，東関東系の阿玉台Ⅰａ式と考えられる。２は重層指頭圧痕に垂下する隆線が施されている。３は縄文地文のみのものである。４は口縁部がやや外反し，口唇部に連続的に刺突文，口縁部上端に沿って２段の押捺縄文が施されている。５には隆線が施されている。

図25－６は楕円形の礫を用いた磨石で，片側側面を主な磨面として使用している。７は石皿の欠損品である。表面の平坦面に僅かな磨面の痕跡が観察される。磨面の裏側は粗い剥離面が連続しており，安定して置けるように加工したものと考えられる。



11号住居跡堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4(炭化物粒多量，焼土粒微量)
2　にぶい褐色土　7.5ＹＲ5/4(炭化物粒多量)

Ｐ1～15堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物粒多量)

0　1m
(1/50)

図24　11号住居跡

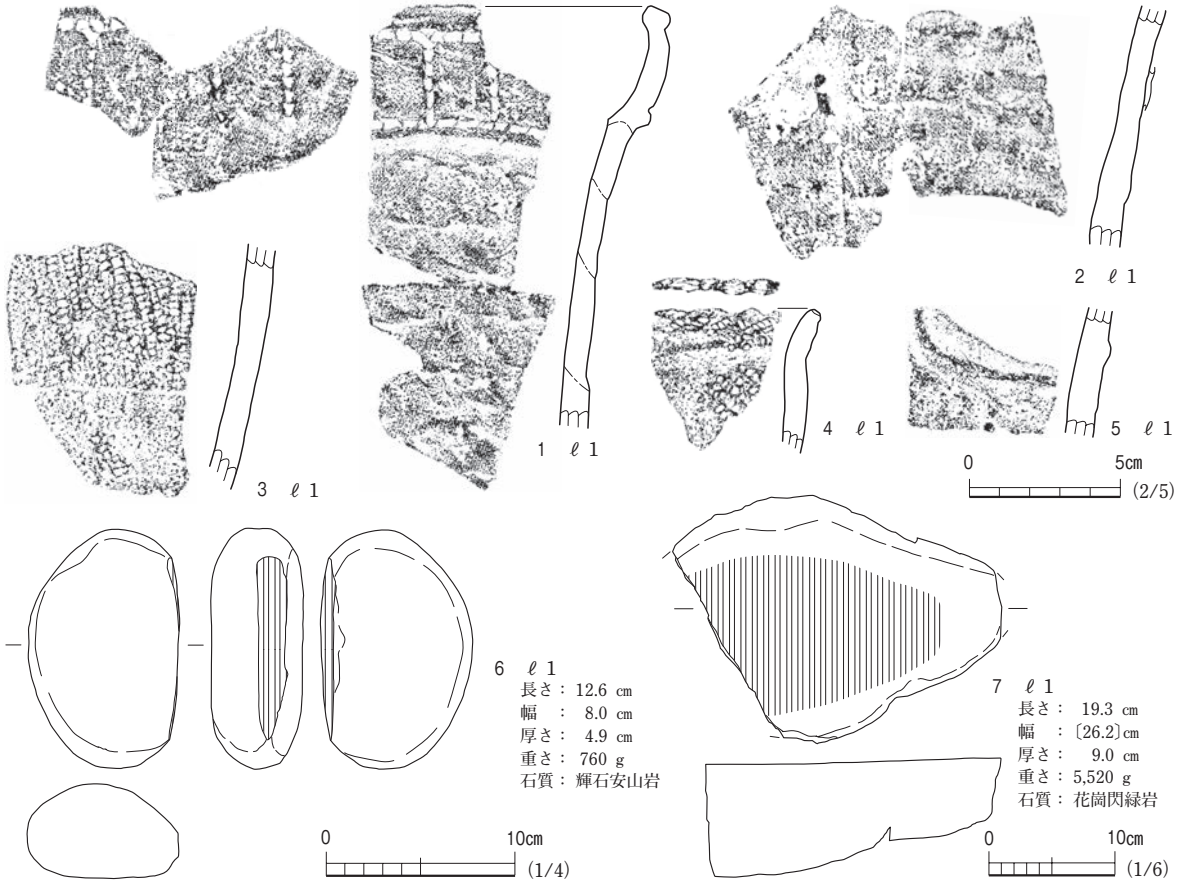


図25　11号住居跡出土遺物

ま　と　め

本遺構は，楕円形を呈する比較的大型の住居跡である。遺構の特徴として，２基の地床炉が床面北側に偏っていること，柱穴が15基検出されたことが挙げられる。遺物は，東関東系の阿玉台Ⅰａ式と，東北系の大木７ｂ式が混在して出土している。遺構の所属時期は出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。　（中　野）

12号住居跡　ＳＩ12

遺　　構（図26，写真22・23）

本遺構は，調査区南側のＥ16グリッドに位置する竪穴住居跡である。遺構検出面はＬⅣ上面である。本遺構は，東側半分が後世の撹乱により失われているため，遺存状態は悪い。南側には，同時期と考えられる８・10号住居跡が隣接する。

堆積土は単層の暗褐色土である。堆積状況については，層厚が薄いため不明である。

平面形は遺存範囲から楕円形と推測される。規模は東西3.20ｍ，南北4.20ｍを測り，検出面からの深さは最大５㎝である。周壁は床面から緩やかな角度で立ち上がる。床面は西側から東側に向かって緩やかに傾斜するが，概ね平坦である。また，床面は北側で礫の露出が認められる。踏み締まりは確認できなかった。

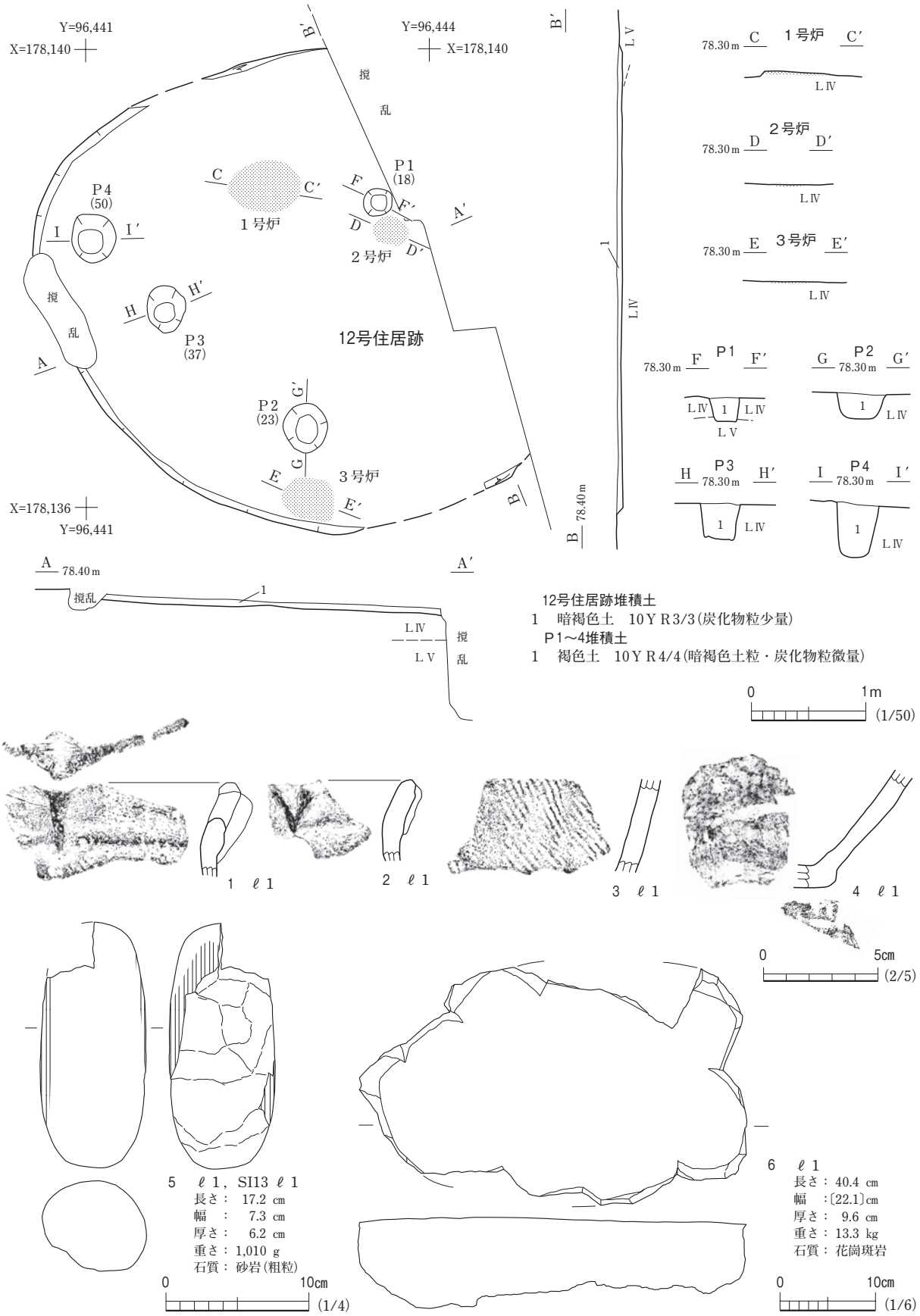


図26　12号住居跡，出土遺物

住居に伴う施設としては，床面から炉跡とピットが確認された。炉跡は赤褐色に焼土化した地床炉が３基確認され，北側から１号炉・２号炉・３号炉とした。１・２号炉は床面の北側に位置するが，３号炉は南壁側で検出された。炉の形状はいずれも楕円形を呈する。その規模は１号炉が長軸63㎝，短軸45㎝，２号炉が長軸30㎝，短軸24㎝，３号炉が長軸46㎝，短軸35㎝を測り，焼土の厚さは最大２～３㎝まで達する。ピットは４基確認され，Ｐ１が中央付近，Ｐ２～４が住居跡西側に位置する。規模はＰ１が直径25㎝，Ｐ２～４が直径40㎝前後を測り，床面からの深さは18～50㎝である。壁際に近いピットは，中央付近のＰ１に比べて規模が大きく深さもある。これらのピットについては，その形状や配列，堆積土から柱穴と考えている。

遺物は床面に近いℓ１から出土した。図26－５・６に示した石器は，住居跡西側から壊れた状態で出土し，その状況から本遺構廃絶後に投棄されたものと考えられる。

遺　　物（図26，写真49・54・55）

遺構からは縄文土器72点，石器15点が主にℓ１から出土している。縄文土器はⅠ群土器を僅かに含んでいるが，主体はⅡ群土器である。

図26－１～４は縄文土器である。１・２は口縁部資料で，１には波状口縁の頂部下に瘤状の貼付文が認められ，２にはＶ字状の隆線が取り付けられている。３は縦方向から施文された単節の斜縄文で，間隔が空く様に浅めに施文されている。４は浅鉢の胴部から底部にかけての破片で，底部には網代痕が見られる。

図26－５・６は石器を掲載した。５は縦長の河原石を使用した磨石の欠損品である。磨面が部分的に確認されている。本資料は６点の破片が接合したもので，その中には13号住居跡のℓ１から出土したものも含まれる。このため本資料については，出土量が多い本遺構に掲載した。６は台石あるいは石皿未製品と判断した。本資料は拳大の破片が接合したものである。側縁や裏面は丁寧に打ち欠いて整形されているが，表面は自然面を残しており平滑である。磨面や火を受けた痕跡は認められなかった。

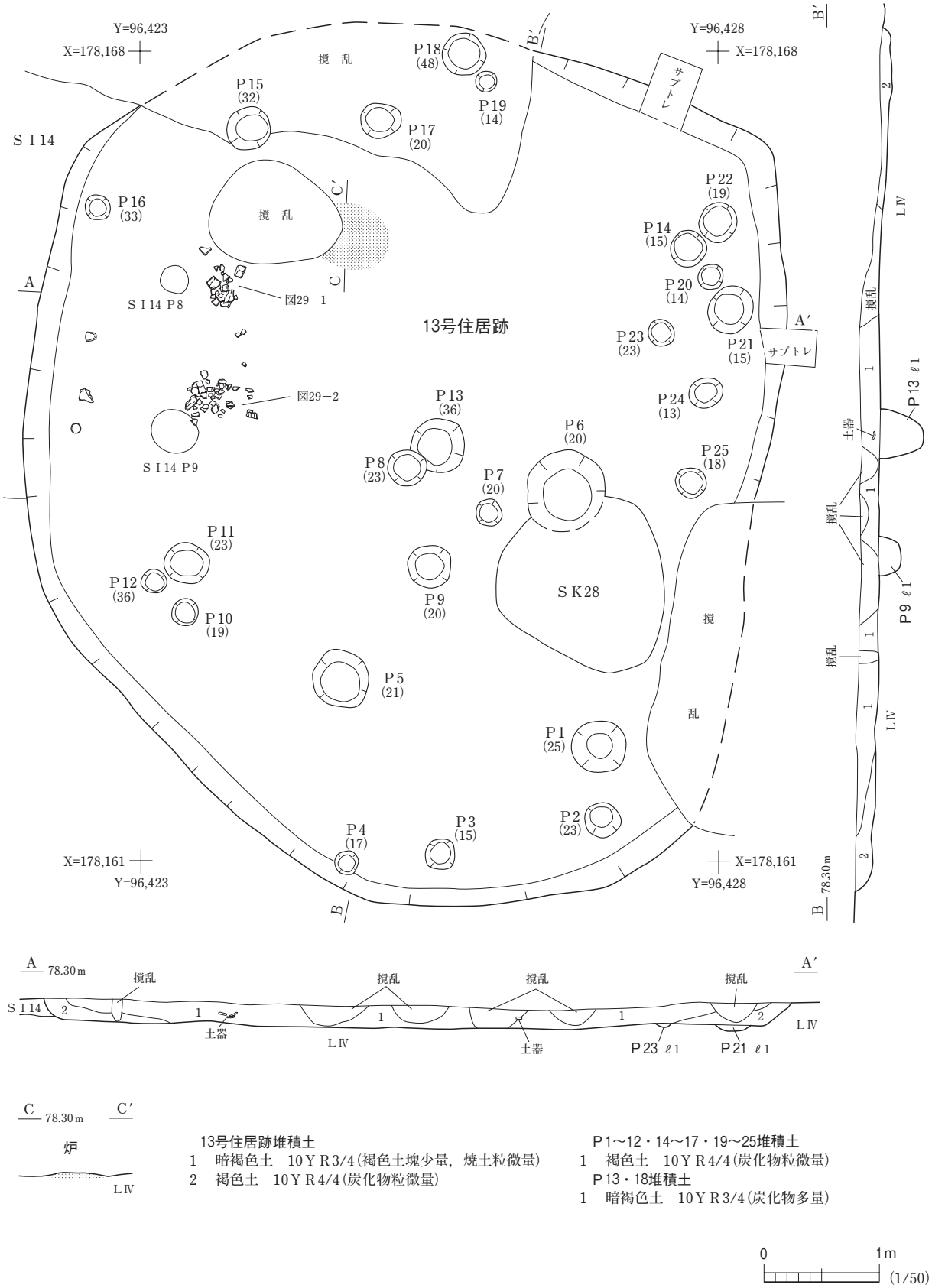
ま　と　め

本遺構は，約半分が遺存する住居跡である。壁際に位置する炉は，ほぼ同時期と考えられる14号住居跡でも確認されている。住居内から出土した磨石は，13号住居跡から出土した磨石の破片と接合するため，本遺構の廃絶時期は，13号住居跡の廃絶時期に近いものと考えられる。本住居跡の時期は，出土遺物から縄文中期前葉と考えている。（国　井）

13号住居跡　ＳＩ13

遺　　構（図27，写真24・25）

本遺構は，調査区南側のＣ14グリッドに位置する。ＬⅢａ掘削時，炭化物粒を含む不定形の暗褐色土が東西12ｍ，南北８ｍに広がることを確認し，少なくとも２軒以上の住居跡が想定された。この周辺の精査により，遺構はＬⅣ上面で検出された。しかし，平面プランでは遺構の重複関係が判



13号住居跡堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(褐色土塊少量，焼土粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/4(炭化物粒微量)

Ｐ1～12・14～17・19～25堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4(炭化物粒微量)

Ｐ13・18堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物多量)

0　1m
(1/50)

図27　13号住居跡

断できないため，東西方向に設定した土層断面で確認した。その結果，重複する２軒の住居が確認され，東側の新しい住居を本住居跡とし，西側の住居跡を14号住居跡とした。他の遺構との重複関係は，28号土坑と重複し，本住居跡の方が古い。

遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１はレンズ状の堆積，ℓ２は壁際で三角形状に堆積することから，共に自然堆積土と考えられる。

本遺構の平面形は，南北にやや長い楕円形を呈する。遺構の規模は東西6.40ｍ，南北7.50ｍを測る。壁高は遺存状態の良い南壁で20㎝を測る。壁面は概ね50°で緩く立ち上がる。床面は平坦であるが，踏み締まりは見られない。

本遺構の施設は，地床炉１基とピット25基を検出した。地床炉は，住居跡の北壁から約1.5ｍに位置し，西側が撹乱によって壊されている。形状は楕円形を呈し，規模は長軸75㎝，短軸55㎝を測る。全体的に強く酸化しており，酸化面の厚さは最大５㎝である。

ピットは25基が確認された。住居跡の中央に位置する柱穴と，壁際に位置する柱穴に分けられる。Ｐ５～９・13は中央に位置する。平面形は円形あるいは不整円形である。規模は直径20～50㎝，深さ20～36㎝を測る。Ｐ１～４・10～12・14～17・19～25は，壁際に位置する。平面形は概ね円形である。規模は20～35㎝，深さ14～23㎝を測り，大きさには幅が見られる。これらのピットは，床面に対してほぼ垂直に掘り込まれていた。また，Ｐ18は壁際に位置し，規模は直径38㎝，深さ48㎝を測る。ピットの中でも比較的大型のものである。

遺　　物（図28・29，写真50・53～55）

遺物は縄文土器439点，石器14点が出土している。遺物の出土状況は，その多くがℓ１下部から床面にかけて，住居跡の中央から北側で散在して出土している。出土状況から住居廃絶後，縄文土器片や石皿片などを廃棄したものと推測され，ある程度一括性の高い遺物と捉えている。

図28・図29－１～９は縄文土器である。図28－１は口縁部が外傾し，頸部が「く」の字状に括れる深鉢で，器形の約３割が遺存する。口縁部は波状口縁で，波頂部には刻み状の刺突が施されている。上半部には隆線が波状に描かれ，平行沈線が隆線に沿うように施されている。また，平行沈線の間には交互刺突文が施されている。２は１と同様な器形を呈し，器面には単節縄文を施す。３は，膨らみの小さい胴部から頸部にかけての大破片である。地文には無節の原体を用いた縄文を施し，胴部上半部には１段撚りの押捺縄文が不規則に施されている。

図28－４～８・10，図29－１・３は，有節沈線を多用する阿玉台Ⅰａ式のⅡ群２類土器である。図28－４～８・10は，口縁部が内湾し，波状口縁を呈する土器である。４は隆線に沿って有節沈線を施している。胴部には重層する指頭圧痕文が施され，「Ｙ」字状の隆線が垂下する。５は波状口縁の破片で，波頂部には刻目を持つ瘤が取り付けられ，波頂部と口唇部にも刻目が施されている。波頂部下には，有節沈線によって十字文が描かれ，その内面には三角形の沈刻文が施されている。６は有節沈線が横位方向と，そこから垂下するように施されている。７・８・10は，口縁部上端に沿ってペン先状工具による連続刺突文が施されている。図29－１・３は，胴部から頸部にかけての破片

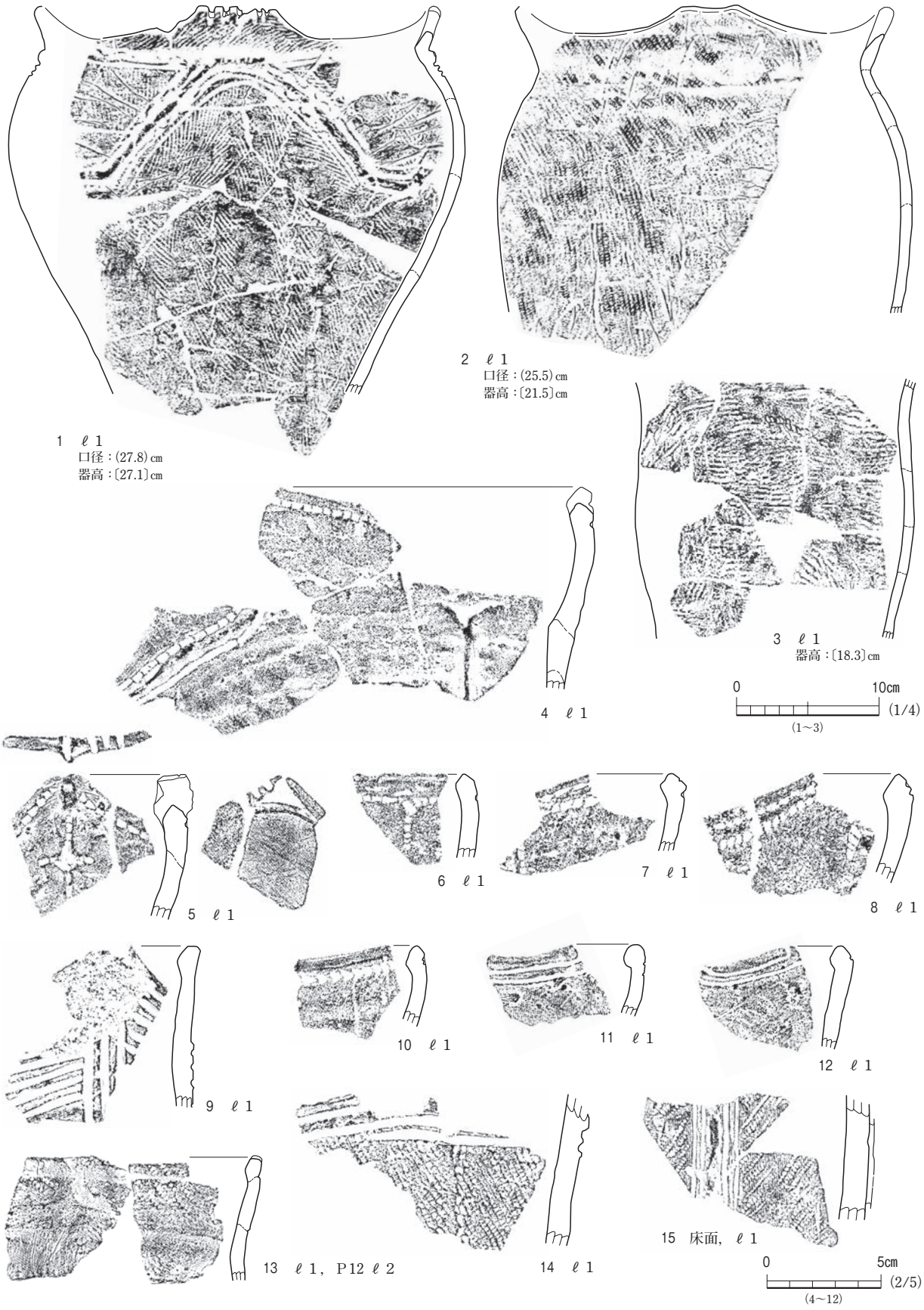


図28　13号住居跡出土遺物(1)

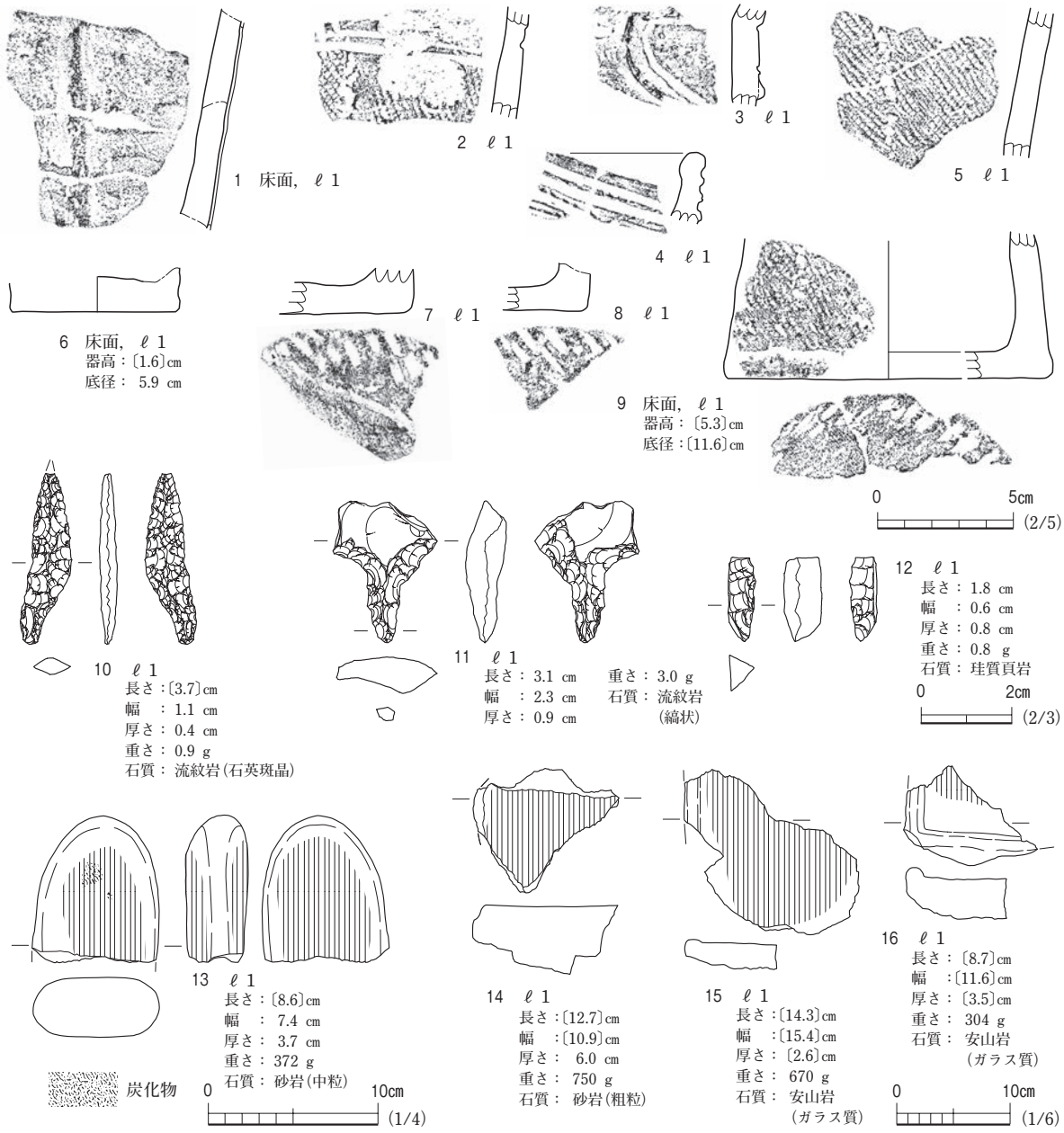


図29　13号住居跡出土遺物(2)

である。１は隆線が胴部を垂下するものである。３は頸部下に横位方向の隆線が貼り付けられ，それに沿って有節沈線が施されている。胴部には，逆「ノ」の字状隆線の片側に沿うように沈線が施されている。

図28－９・14，図29－２・４・５・９は，胎土や原体の特徴から同一個体と考えられる。これらは，底部から波状の口縁部にかけての破片であるが，復元には至らなかった。図28－９と図29－４は口縁部破片であり，９は波頂部から３条の沈線が垂下し，そこから斜位に沈線が施されている。図28－14，図29－２・５は，頸部から胴部にかけての破片で，単節の縄文地文上に結節回転が施された後，横位の沈線が施されている。図28－11・12は波状口縁の資料で，口縁部上端に沿って平行沈線が施されている。胎土や口縁部の特徴から，同一個体と考えられる。同図13は口縁部が緩やか

な波状口縁を呈し，僅かに外反する破片である。器面には積上げ痕が残され，単節縄文が施されている。同図15は，垂下する隆線に平行沈線が沿うものである。図29－６～９は底部破片であり，７～９には網代痕が見られる。

図29－10～16は石器を掲載した。10は先端が欠損する片足状の石鏃である。11はつまみ部を有する石錐である。つまみ部を除いた両面から調整剥離が加えられている。12は調整剥片である。両面から剥離を加えており，製品の破片の可能性もある。13は楕円形礫を用いた磨石である。両面に磨面が見られ，表面には黒色の付着物が見られる。14～16は石皿の欠損品である。いずれも磨面は平坦で，15・16の周縁部分は硯の縁のように一段高くなっている。この他に，本住居出土の磨石片の一部が12号住居跡出土の遺物(図26－５)と接合している。

ま　と　め

本遺構は，長楕円形を呈する大型の住居跡である。地床炉１基と柱穴が25基検出された。本遺構の特徴として，柱穴が多く検出されたことと，住居跡の規模に比べ炉が小型であることが挙げられる。柱穴の配置や炉跡の設置場所が北側に偏る点など，形態的に11号住居跡と共通点が多く，該期の住居形態の特徴と思われる。また出土遺物は，比較的まとまった東関東系の阿玉台Ⅰａ式土器と大木７ｂ式土器が混在して出土しており，関東と東北の中期前葉の編年を考える上で重要な資料である。遺構の所属時期は，出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。　　(中　野)

14号住居跡　ＳＩ14

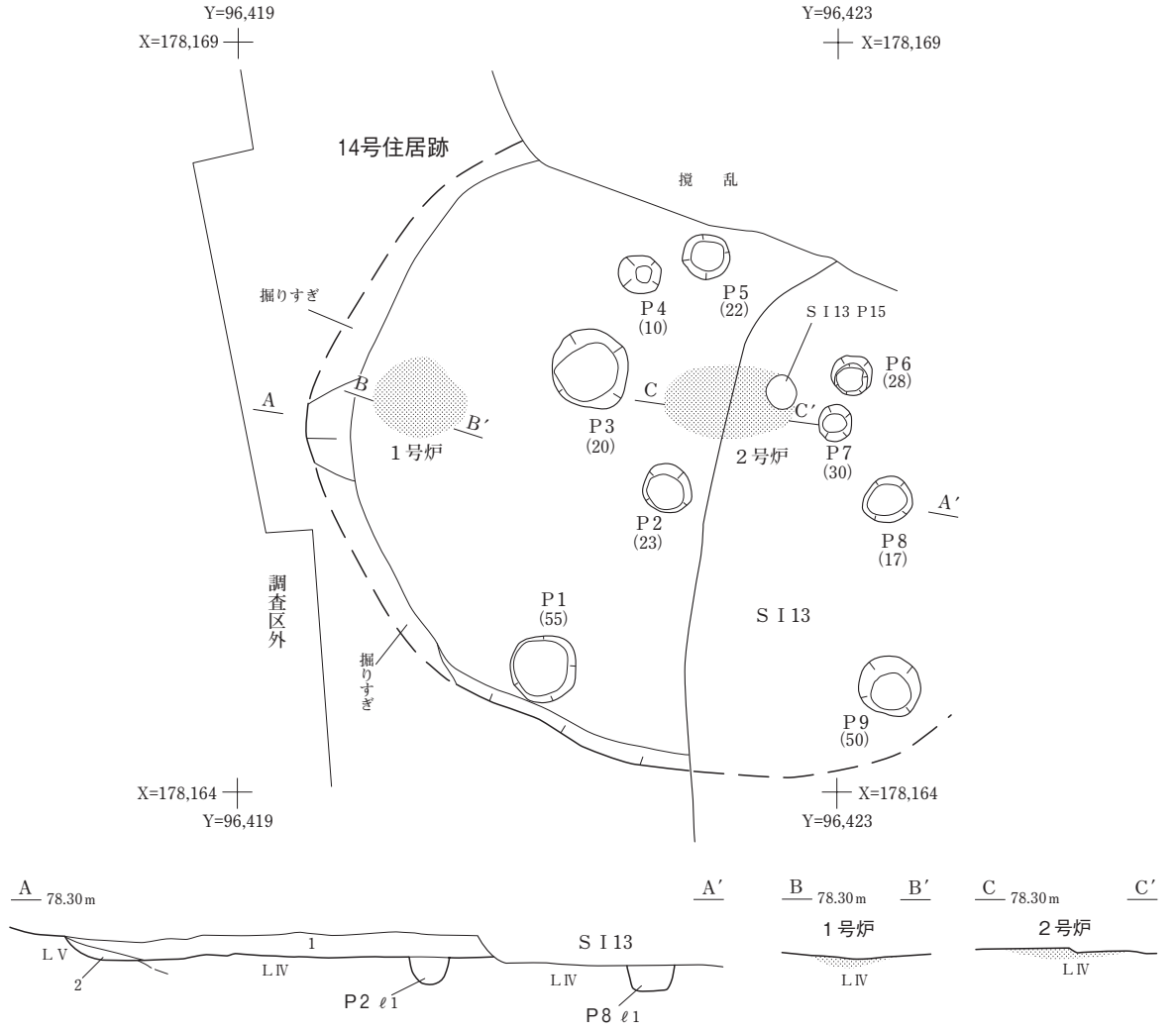
遺　　構(図30，写真26・27)

本遺構は，調査区南側のＢ・Ｃ13グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。他の遺構との重複関係は，13号住居跡と重複し，本遺構の方が古い。

遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１はレンズ状の堆積，ℓ２は壁際に三角形状に堆積していることから，共に自然堆積土と考えられる。本遺構の平面形は，不整円形もしくは楕円形を呈するものと推測される。遺存する規模は東西2.75ｍ，南北4.30ｍを測り，壁高は15㎝前後を測る。周壁は概ね50°で比較的緩く立ち上がる。

本遺構の施設は，地床炉２基と９基のピットを検出した。炉跡は西側から１号炉，２号炉とした。１号炉は長軸63㎝，短軸57㎝の楕円形を呈する。酸化面の厚さは２㎝で，床面は僅かに焼けている。２号炉は長軸87㎝，短軸50㎝の楕円形を呈する。酸化面の厚さは５㎝で，床面は全体的に強く酸化している。また，炉跡の東側は13号住居跡のＰ15により壊されている。

ピットは９基を検出した。平面形は概ね円形を呈する。Ｐ１とＰ９は南壁際に位置し，Ｐ１は直径45㎝，深さ55㎝，Ｐ９は直径42㎝，深さ50㎝を測る。この２基は大型であることから，主柱穴と考えられる。それ以外の柱穴は，Ｐ２～８が２号炉跡を囲むように配置されている。Ｐ１・９を除くピットは，直径22～35㎝，深さ20～30㎝を測る。これらのピットは大きさや深さにばらつきが見られ，小型のピットが多い。



14号住居跡堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(炭化物粒少量)
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4(小礫・砂粒少量，炭化物粒微量)

Ｐ1・9堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(炭化物粒多量)

Ｐ2・4～8堆積土
1　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4(炭化物粒微量)

Ｐ3堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(砂粒少量，炭化物粒微量)

0　1m　(1/50)

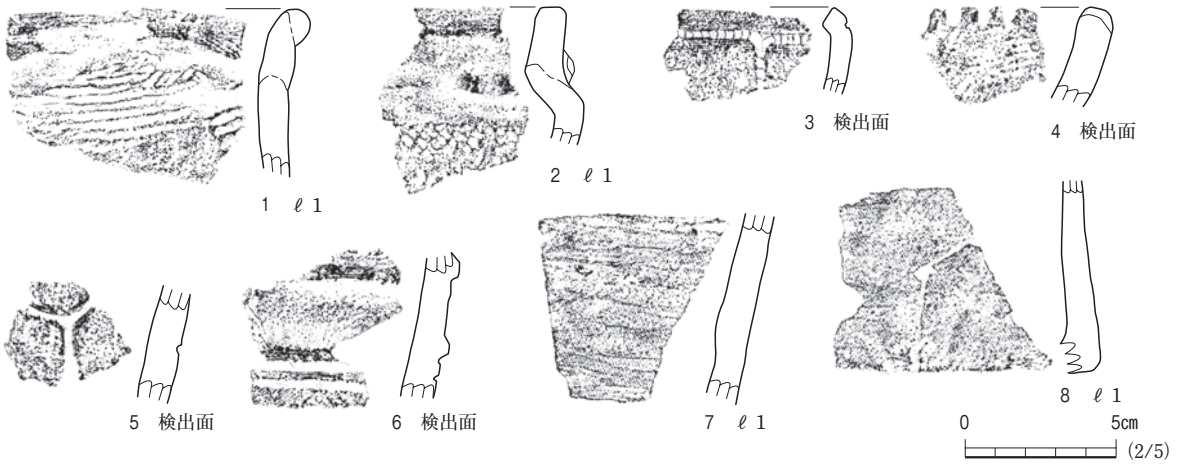


図30　14号住居跡，出土遺物

遺　　物(図30，写真49)

遺物は縄文土器47点，石器４点が出土している。遺物は多くがℓ１から散在して出土している。石器はいずれも剥片である。

図30－１～８は縄文土器である。１～４は口縁部破片，５～７は胴部破片である。８は胴部下半から底部にかけての破片である。１は複合口縁を呈し，無節の縄文が施されている。地文や胎土の特徴から，13号住居跡出土の土器(図28－３)と同一個体と考えられる。２は頸部が「く」の字状に括れ，肩部が張るものである。頸部には瘤状の貼付文が取り付けられている。３は有節沈線が口縁部に沿うように横位方向と，そこから垂下するように施されている。４は口唇部に刻み状の刺突が施されている。５・６は胎土の特徴から同一個体と思われる。５は沈線で剣先状のモチーフを描いている。６は横位の隆線に沈線が沿うように施されている。７・８は横位方向の丁寧なミガキが施された，無文の土器である。

ま　と　め

本遺構は遺存状態の悪い住居跡である。遺構の特徴として，南壁際に主柱穴が２基設置されていることと，地床炉を囲むように柱穴が配置されていることが挙げられる。13号住居跡によって壊されていることから，本遺跡で検出された縄文中期の住居跡の中で，最も古く構築された住居跡の一つと考えている。遺構の所属時期は，住居跡の重複関係や出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。

(中　野)

第３節　　土　　坑

土坑は39基検出された。これらは調査区のほぼ全域で確認され，調査区中央部に約半数が集中する一方，北側では希薄となる。規模は小型から大型まで，形状は円形や楕円形を呈するものが多い。時期的には，その大半が住居跡と同様，縄文早期末葉と中期前葉に分けられる。

１号土坑　ＳＫ01(図31・37・38，写真29・51・53)

本遺構は，調査区北側のＤ４・５グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は楕円形を呈し，規模は長径207㎝，短径184㎝を測る。検出面の深さは最大25㎝である。周壁は全体に急角度で傾斜し，底面は概ね平坦である。堆積土は２層に分けられ，ℓ１は土器片やＬⅣ塊を含むことから人為堆積の可能性が高く，ℓ２は壁際で三角形状に堆積していることから自然堆積と判断した。土坑中央部のℓ１下部からは，縄文土器がまとまって出土しており，これらの土器は出土状況から投棄されたものと判断した。

遺物は縄文土器185点，石器６点が出土した。土器はⅠ群土器に相当するもので，その多くは撚糸地文のものである。図37－１～５は縄文土器である。１～３は撚糸地文のもので，１の内面には条痕が施されている。１は５号住居跡出土の土器(図11－５)と撚糸文の原体や条痕の幅が同様であ

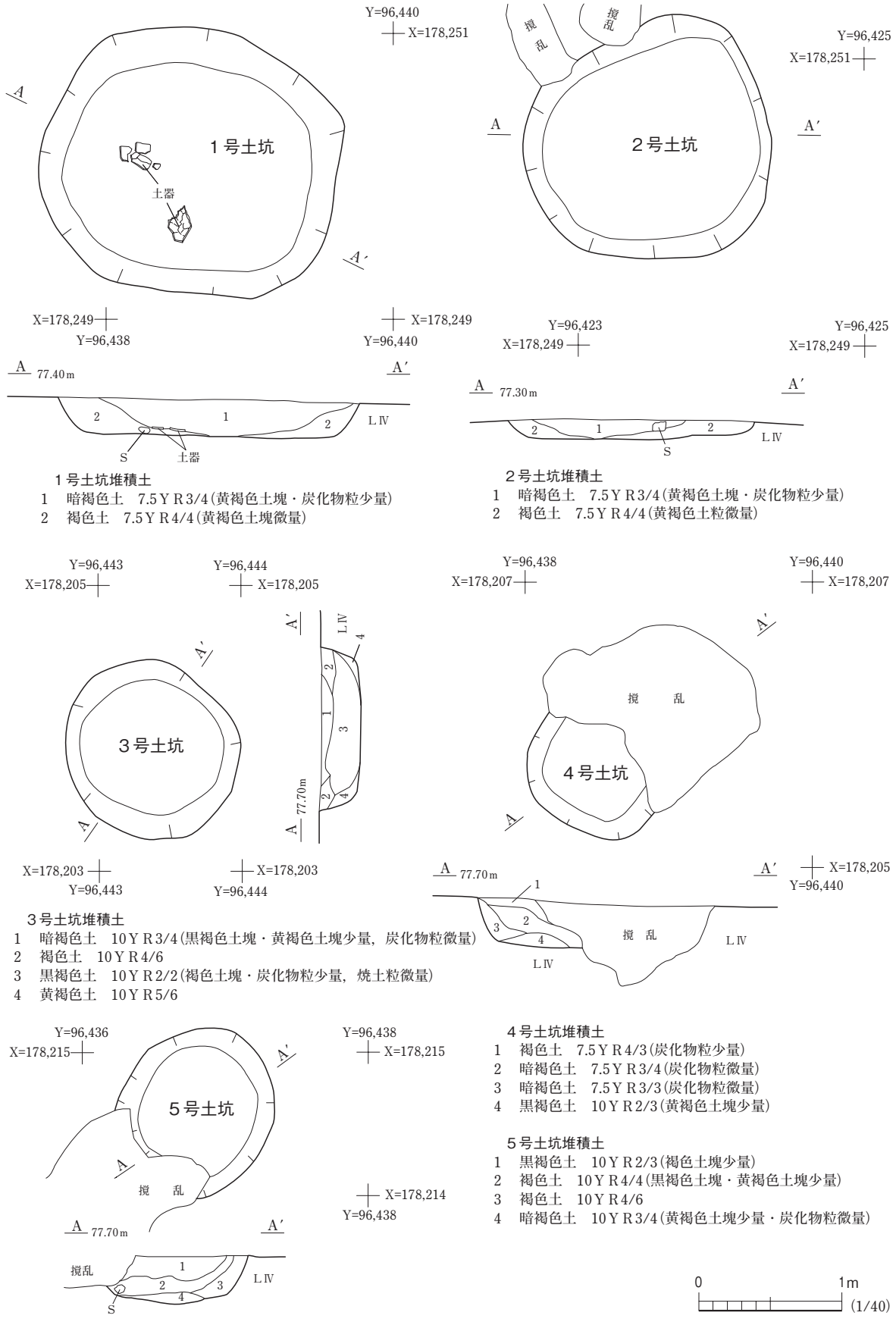

Y=96,440
X=178,251
A
A′
１号土坑
土器
X=178,249
Y=96,438
77.40m
2
1
2
LⅣ
S
土器
１号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5YR3/4(黄褐色土塊・炭化物粒少量)
2　褐色土　7.5YR4/4(黄褐色土塊微量)
撹乱
撹乱
Y=96,425
X=178,251
２号土坑
X=178,249
Y=96,440
Y=96,423
X=178,249
Y=96,425
X=178,249
77.30m
2
1
2
LⅣ
S
２号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5YR3/4(黄褐色土塊・炭化物粒少量)
2　褐色土　7.5YR4/4(黄褐色土粒微量)
Y=96,443
X=178,205
Y=96,444
X=178,205
３号土坑
77.70m
LⅣ
4
2
1
3
2
4
X=178,203
Y=96,443
X=178,203
Y=96,444
３号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4(黒褐色土塊・黄褐色土塊少量，炭化物粒微量)
2　褐色土　10YR4/6
3　黒褐色土　10YR2/2(褐色土塊・炭化物粒少量，焼土粒微量)
4　黄褐色土　10YR5/6
Y=96,438
X=178,207
Y=96,440
X=178,207
撹　乱
４号土坑
77.70m
1
3
2
4
撹　乱
LⅣ
LⅣ
X=178,205
Y=96,440
４号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/3(炭化物粒少量)
2　暗褐色土　7.5YR3/4(炭化物粒微量)
3　暗褐色土　7.5YR3/3(炭化物粒微量)
4　黒褐色土　10YR2/3(黄褐色土塊少量)
Y=96,436
X=178,215
５号土坑
撹　乱
77.70m
撹乱
1
2
3
4
LⅣ
S
Y=96,438
X=178,215
X=178,214
Y=96,438
５号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3(褐色土塊少量)
2　褐色土　10YR4/4(黒褐色土塊・黄褐色土塊少量)
3　褐色土　10YR4/6
4　暗褐色土　10YR3/4(黄褐色土塊少量・炭化物粒微量)
0
1m
(1/40)

図31　１～５号土坑

ることから，同一個体と考えている。４は縦位の縄文が施され，口唇部には縄文が回転施文されている。図38－２は石槍で周縁部に細かい調整が施されている。４は磨石の欠損品で側面に磨面が認められる。本遺構の時期は出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。　（国　井）

２号土坑　ＳＫ02（図31・37・38，写真29・51・53）

調査区北側のＣ４・５グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構の北側は，木根により一部壊されている。平面形は楕円形を呈し，規模は長径171㎝，短径169㎝を測る。検出面からの深さは最大12㎝である。周壁は西壁を除いて緩やかに立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺構内堆積土は２層に分けられ，いずれもレンズ状に堆積しており自然堆積と判断した。

遺物は縄文土器55点，石器１点が出土している。土器はℓ１から多く出土しており，全てⅠ群土器である。１号土坑と同様に撚糸地文の土器が大半を占める。図37－６～８は縄文土器である。７は無文であり，６には斜縄文，８には撚糸文が施されている。図38－３は縦長の石匙である。表面は丁寧な調整剥離を加えているが，裏面はつまみ部周辺と片側の側縁にのみ調整剥離を施している。本遺構の性格は不明であるが，時期は出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。　（国　井）

３号土坑　ＳＫ03（図31・37，写真29・51）

本遺構は，調査区中央部のＤ９グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。遺構内堆積土は４層に分けられ，ℓ１・２・４は流入や壁崩落による自然堆積，ℓ３は混入物を含むことから人為堆積と判断した。平面形は円形を呈し，規模は直径126㎝を測る。検出面からの深さは最大28㎝である。周壁は全体に急な角度で立ち上がり，底面は概ね平坦である。

遺物はℓ１から縄文土器10点が出土した。いずれも胎土中に植物繊維を含まないものである。図37－９・10は口縁部片である。９の口縁端部には刻み状の刺突が加えられ，10～12には斜縄文が施されている。本遺構の時期は出土遺物から縄文中期前葉と考えている。　（国　井）

４号土坑　ＳＫ04（図31，写真29）

本遺構は，調査区中央部のＤ９グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。本遺構は，後世の撹乱により北東側が失われていた。遺構内堆積土は４層に分けられ，いずれもレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。遺存範囲から平面形は楕円形と推定され，遺存する規模は長径101㎝，短径77㎝を測る。検出面からの深さは最大33㎝である。周壁は急角度で立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺物は出土していない。本遺構の時期は，周辺の遺構から縄文中期前葉と考えたい。　（国　井）

５号土坑　ＳＫ05（図31，写真30）

調査区中央部のＤ８グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。本遺構は，後世の撹乱

により南西側が失われていた。遺構内堆積土は４層に分けられ，いずれもレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。遺存範囲から平面形は楕円形と推定され，遺存する規模は長径107㎝，短径105㎝を測る。検出面からの深さは最大33㎝である。周壁は急角度で立ち上がり，底面は概ね平坦である。

遺物は，ℓ１・２から縄文土器３点が出土した。いずれもⅡ群土器である。本遺構の時期は，出土遺物から縄文中期前葉と考えている。（国　井）

６号土坑　ＳＫ06（図32，写真30）

本遺構は，調査区北側のＥ７グリッドに位置する。遺構の上面が農道であったため耕作による削平を受けず，ＬⅢｂで検出された。堆積土は３層に分けられ，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し，規模は直径が128㎝を測る。検出面の深さは最大62㎝である。周壁は全体に急角度で立ち上がる。底面はＬⅤの礫層を掘り込んでいるが，概ね平坦である。遺物はℓ２から縄文土器が２点出土した。いずれもⅠ群土器に該当する。本遺構の時期は，検出層位から縄文中期前葉と考えたい。（国　井）

７号土坑　ＳＫ07（図32，写真30）

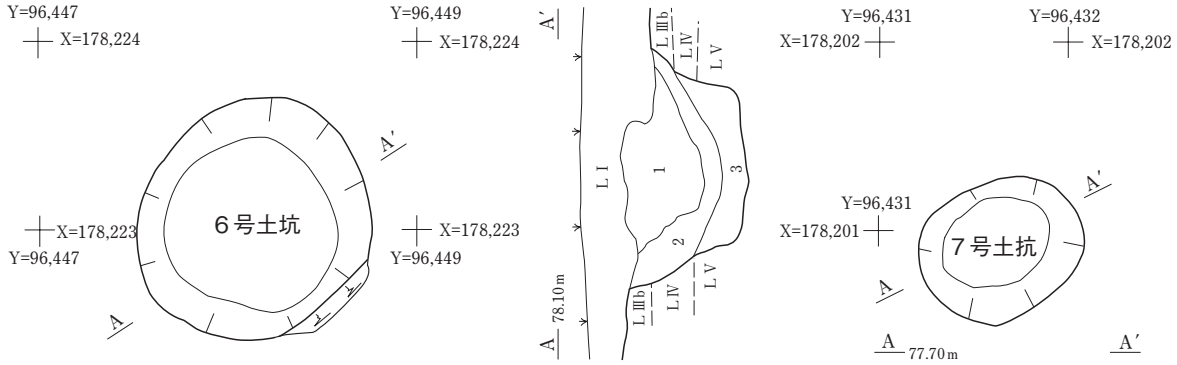
調査区中央のＤ９グリッドに位置する小型の土坑である。遺構検出面はＬⅣ上面である。平面形は楕円形を呈し，規模は長径87㎝，短径71㎝を測る。検出面からの深さは最大21㎝である。周壁は全体に急角度で立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺構内堆積土は２層に分けられ，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。ℓ１は基本層位のＬⅢａに近似する。遺物はℓ１から縄文土器が３点出土している。これらの土器は，器面が丁寧に磨かれた無文のものである。本遺構の時期は，堆積土の特徴や出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。（国　井）

８号土坑　ＳＫ08（図32，写真30）

本遺構は，調査区中央部のＤ９グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出された。遺構内堆積土は３層に分けられ，ℓ１・２は流入や壁崩落による自然堆積，ℓ３は混入物を含むことから人為堆積と判断した。平面形は円形を呈し，規模は直径100㎝を測る。検出面からの深さは最大20㎝である。周壁は，北側が急角度で立ち上がるが，南側では緩やかである。底面は概ね平坦である。遺物は出土していないが，周辺の遺構から縄文中期前葉と考えたい。（国　井）

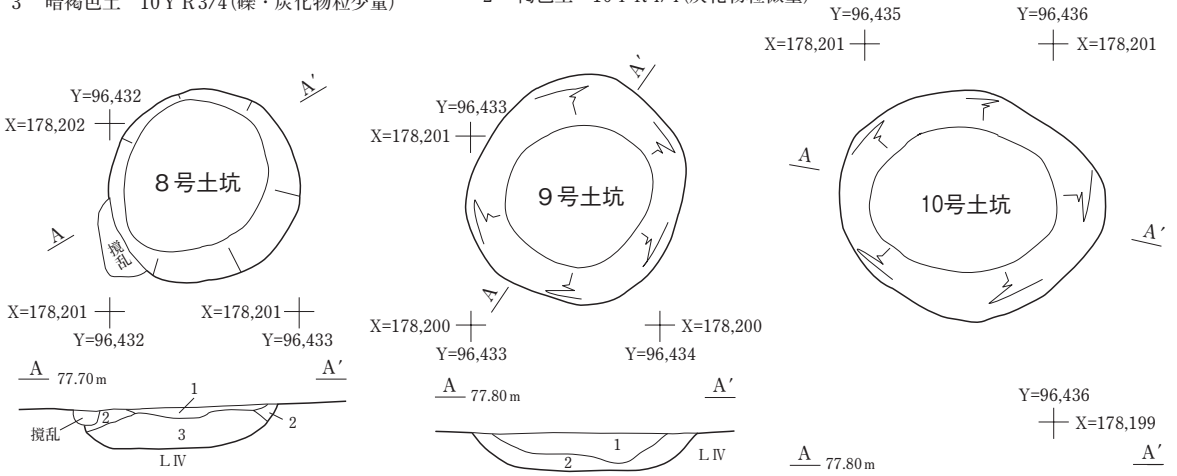
９号土坑　ＳＫ09（図32，写真30）

本遺構は，調査区中央部のＤ９グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。平面形は円形を呈し，規模は直径120㎝を測る。検出面からの深さは最大20㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺構内堆積土は２層に分けられ，レンズ状の堆積を示すことから自



6号土坑堆積土
1　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/3
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3(礫少量)
3　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(礫・炭化物粒少量)

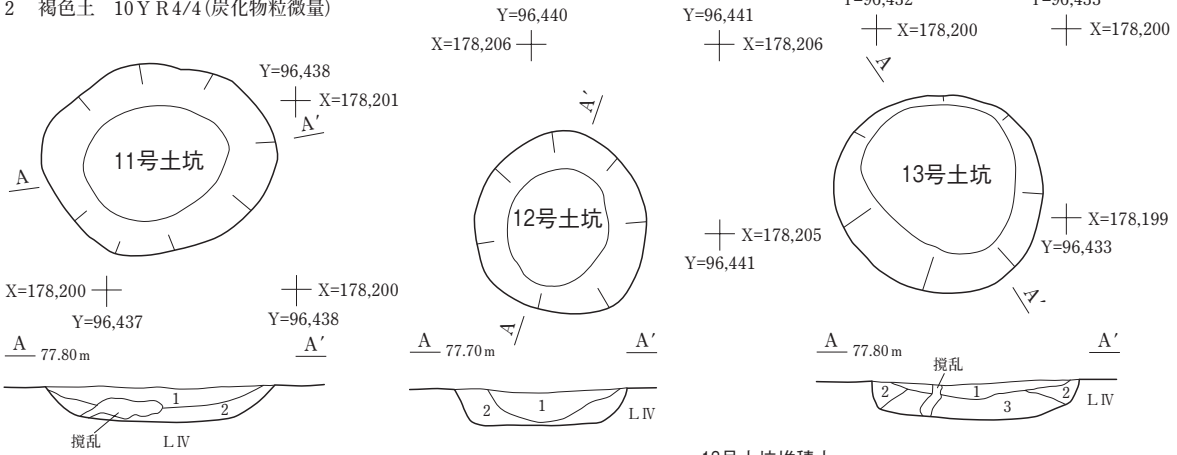
7号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3(褐色土塊・炭化物粒少量)
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4(炭化物粒微量)



8号土坑堆積土
1　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4(暗褐色土粒少量，炭化物粒微量)
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6
3　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(黄褐色土塊少量・炭化物粒微量)

9号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3(褐色土塊・炭化物粒少量)
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4(炭化物粒微量)

10号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3(炭化物微量)
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(褐色土塊・炭化物粒少量，礫・黒褐色土粒微量)
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6



11号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3(黒褐色土粒・炭化物粒微量)
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(炭化物粒微量)

12号土坑堆積土
1　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/3(炭化物粒微量)
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3(褐色土塊少量，炭化物粒微量)

13号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3(炭化物粒微量)
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4
3　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/3(褐色土塊少量，炭化物粒微量)

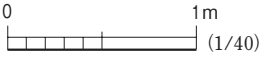


図 32　６～13号土坑

然堆積と判断した。また，７号土坑の堆積土に近似する。遺物はℓ１から縄文土器１点が出土した。細片のため土器の文様は観察できないが，胎土には繊維が混和されている。遺構の性格は不明であるが，時期は周辺の遺構から縄文中期前葉と考えている。（国　井）

10号土坑　ＳＫ10（図32，写真30）

調査区中央部のＤ９・10グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。平面形は楕円形を呈し，規模は長径140㎝，短径121㎝を測る。検出面からの深さは最大29㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺構内堆積土は３層に分けられ，いずれもレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。遺物は出土していないが，周辺の遺構から縄文中期前葉に所属するものと考えている。（国　井）

11号土坑　ＳＫ11（図32，写真30）

調査区中央部のＤ９グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は２層に分けられ，いずれもレンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。平面形は楕円形を呈し，規模は長径115㎝，短径102㎝を測る。検出面からの深さは最大22㎝である。周壁は全体に緩やかに立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺物は出土していないが，周辺の遺構から縄文中期前葉に所属するものと考えている。（国　井）

12号土坑　ＳＫ12（図32，写真30）

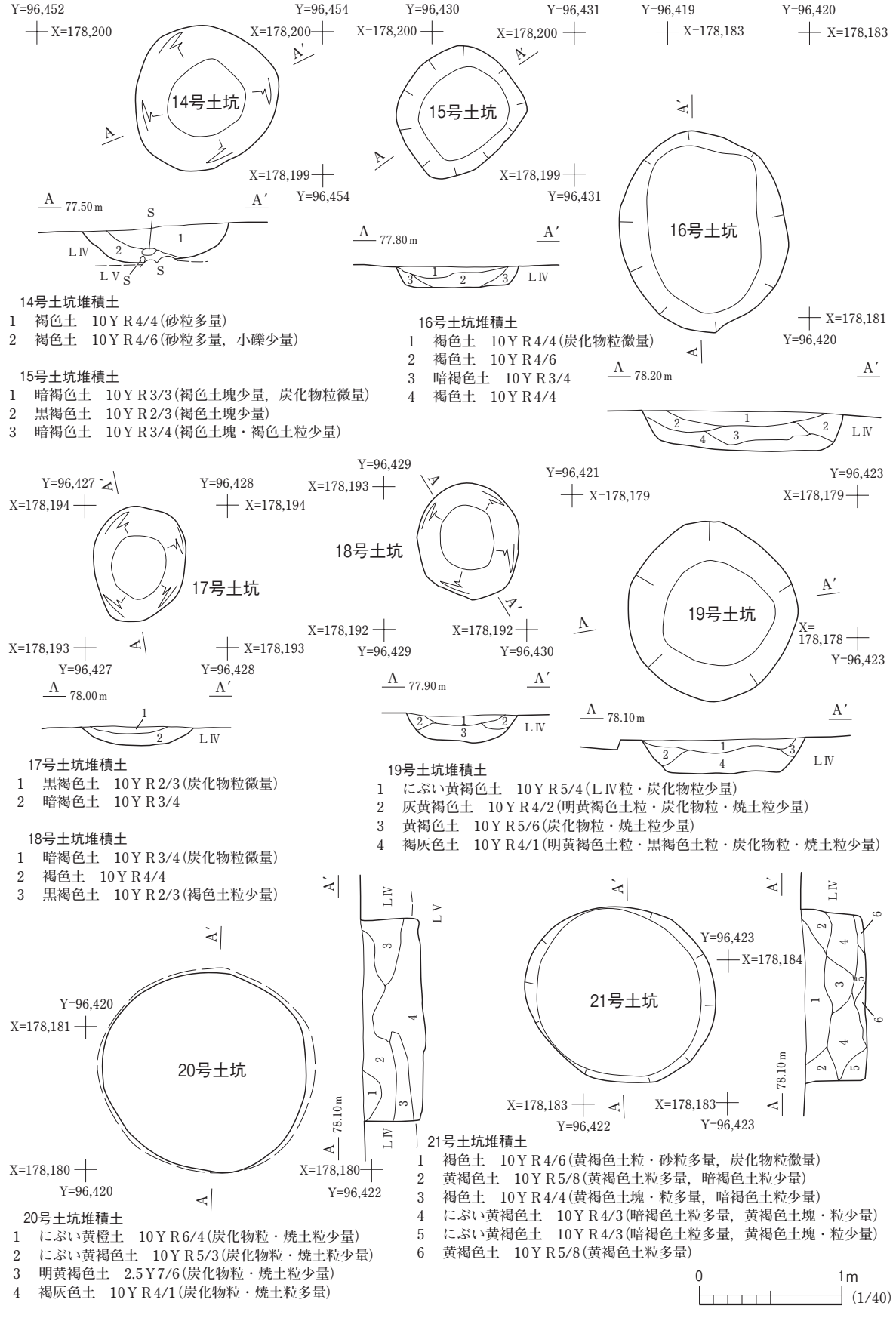
調査区中央部のＤ・Ｅ９グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は２層に分けられ，いずれもレンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。平面形は円形を呈し，規模は直径95㎝を測る。検出面からの深さは最大18㎝である。周壁は急角度で立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺物は出土していないが，周辺の遺構から縄文中期前葉に所属するものと考えている。（国　井）

13号土坑　ＳＫ13（図32，写真31）

調査区中央部のＤ10グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は３層に分けられ，いずれも流入による堆積であることから自然堆積と考えられる。平面形は円形を呈し，規模は直径110㎝を測る。検出面からの深さは最大20㎝である。周壁は南側が緩やかであるが，北側の立ち上がりは急角度である。底面は概ね平坦である。遺物は出土していないが，周辺の遺構から縄文中期前葉に所属するものと考えている。（国　井）

14号土坑　ＳＫ14（図33，写真31）

調査区中央部のＦ10グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積



14号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4(砂粒多量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(砂粒多量，小礫少量)

15号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3(褐色土塊少量，炭化物粒微量)
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3(褐色土塊少量)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4(褐色土塊・褐色土粒少量)

16号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4(炭化物粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4
4　褐色土　10ＹＲ4/4

17号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3(炭化物粒微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4

18号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/4
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3(褐色土粒少量)

19号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4(ＬⅣ粒・炭化物粒少量)
2　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(明黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒少量)
3　黄褐色土　10ＹＲ5/6(炭化物粒・焼土粒少量)
4　褐灰色土　10ＹＲ4/1(明黄褐色土粒・黒褐色土粒・炭化物粒・焼土粒少量)

20号土坑堆積土
1　にぶい黄橙土　10ＹＲ6/4(炭化物粒・焼土粒少量)
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3(炭化物粒・焼土粒少量)
3　明黄褐色土　2.5Ｙ7/6(炭化物粒・焼土粒少量)
4　褐灰色土　10ＹＲ4/1(炭化物粒・焼土粒多量)

21号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6(黄褐色土粒・砂粒多量，炭化物粒微量)
2　黄褐色土　10ＹＲ5/8(黄褐色土粒多量，暗褐色土粒少量)
3　褐色土　10ＹＲ4/4(黄褐色土塊・粒多量，暗褐色土粒少量)
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3(暗褐色土粒多量，黄褐色土塊・粒少量)
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3(暗褐色土粒多量，黄褐色土塊・粒少量)
6　黄褐色土　10ＹＲ5/8(黄褐色土粒多量)

0　1m
(1/40)

図33　14～21号土坑

土は２層に分けられ，レンズ状の堆積から自然堆積と判断した。いずれの層もＬⅢｂに近似する。平面形は円形を呈し，規模は直径106㎝を測る。検出面からの深さは最大23㎝である。周壁は全体に緩やかに立ち上がる。底面は下層のＬⅤが露出しているが，概ね平坦である。遺物は出土していない。遺構の年代は，堆積土から縄文早期末葉と推測される。（国　井）

15号土坑　ＳＫ15（図33，写真31）

本遺構は，調査区中央部のＣ・Ｄ10グリッドに位置する，小型の土坑である。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は３層に分けられ，レンズ状の堆積から自然堆積と判断した。ℓ１はＬⅢａに近似する。平面形は楕円形を呈し，規模は長径86㎝，短径80㎝を測る。検出面からの深さは最大14㎝である。周壁は全体的に急角度で立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺物はℓ１から縄文土器１点が出土した。性格は不明であるが，本遺構の時期は，周辺の遺構から縄文中期前葉と考えている。（国　井）

16号土坑　ＳＫ16（図33・37，写真31・51）

本遺構は，調査区中央部のＢ11グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は４層に分けられ，概ねレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。平面形は，長軸方位が真北を指す楕円形を呈し，規模は長径140㎝，短径117㎝を測る。検出面からの深さは最大29㎝である。周壁は急角度で立ち上がり，底面は平坦である。遺物はℓ２から縄文土器２点，石器１点が出土した。図37－13・14は，植物繊維を混和する撚糸地文の縄文土器である。14は尖底の底部資料で，その大きさから小型の土器と考えられる。遺構の年代は，出土土器から縄文早期末葉と推測される。（国　井）

17号土坑　ＳＫ17（図33，写真31）

本遺構は，調査区中央部のＣ10グリッドに位置する小型の土坑である。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は２層に分けられ，レンズ状の堆積から自然堆積と判断した。平面形は楕円形を呈し，規模は長径80㎝，短径65㎝を測る。検出面からの深さは最大13㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，全体に皿状を呈する。このため底面は中央部が最も低くなる。遺構の形状は18号土坑に近似する。遺物が出土していないため本遺構の時期は不明である。（国　井）

18号土坑　ＳＫ18（図33，写真31）

本遺構は，調査区中央部のＣ10グリッドに位置する小型の土坑である。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は３層に分けられ，ℓ２が壁の崩落土で，それ以外はレンズ状の堆積を示すことからℓ２も含め自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し，規模は直径81㎝を測る。検出面からの深さは最大19㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺構の形状は17号

土坑に近似する。遺物が出土していないため，本遺構の時期は不明である。　（国　井）

19号土坑　ＳＫ19（図33，写真31）

本遺構は，調査区中央部のＣ12グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は４層に分けられる。堆積状況は18号土坑に近似するが，自然堆積あるいは人為堆積かは不明である。平面形は円形を呈し，規模は直径125㎝を測る。検出面からの深さは最大24㎝である。周壁は急な角度で立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺物は縄文土器２点，石器２点が出土した。本遺構の時期は，出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。　（国　井）

20号土坑　ＳＫ20（図33・37，写真32・51）

本遺構は，調査区中央部のＣ11・12グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は４層に分けられる。ℓ４は山状に堆積しているが，人為堆積を示す状況は確認できなかった。平面形は円形を呈し，規模は直径143㎝を測る。検出面からの深さは最大43㎝である。周壁は僅かにオーバーハングし，直立気味に立ち上がる。このため全体に円筒形を呈する。底面はＬＶ上面を使用しており，概ね平坦である。

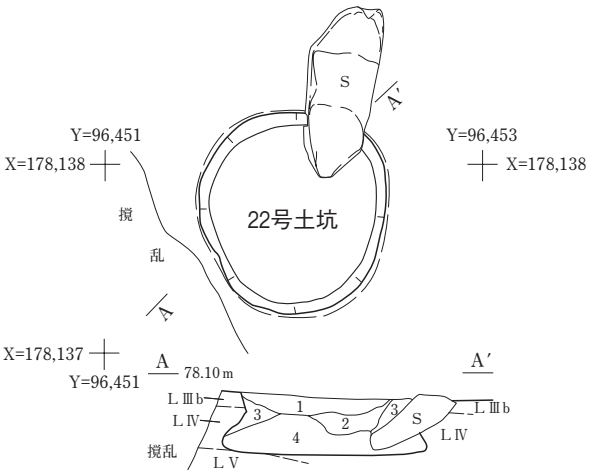
遺物は縄文土器18点が出土しており，全てⅡ群土器である。図37－15～17は縄文土器である。15・17は口縁部資料で，15の外面には斜縄文が，17の口唇部直下には２段の縄圧痕が施されている。16は胴部資料で，横位の隆帯上に刺突を施している。遺構の性格は，形状から貯蔵穴と考えられる。本遺構の年代は，遺構の性格や出土遺物から縄文中期前葉と推定される。　（国　井）

21号土坑　ＳＫ21（図33・37，写真32・51）

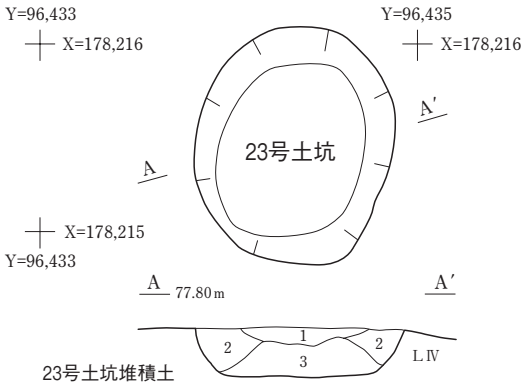
本遺構は，調査区中央部のＣ11グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は６層に細分され，いずれも壁崩落や流入によるものと考えられることから，自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し，規模は直径134㎝を測る。検出面からの深さは最大43㎝である。周壁は直立気味に立ち上がり，全体に円筒形を呈する。底面は平坦である。遺物は縄文土器12点，石器３点が出土している。土器はⅠ群とⅡ群が混在する。図37－18は撚糸地文の縄文土器であるが，本遺構に伴う遺物ではない。性格については，20号土坑と同様の形状から貯蔵穴と考えられる。本遺構の年代は，遺構の性格や出土遺物から縄文中期前葉と推定される。　（国　井）

22号土坑　ＳＫ22（図34・37，写真32・51）

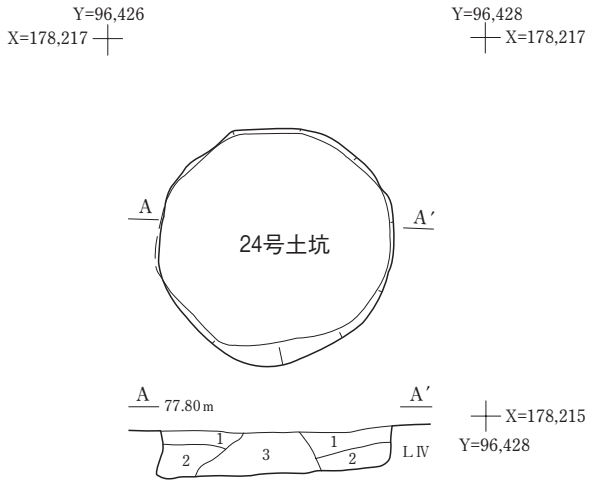
本遺構は，調査区南側のＦ16グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢｂである。堆積土は４層に分けられ，堆積状況から，いずれも流入もしくは壁崩落の様相を示す自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し，規模は直径107㎝を測る。検出面からの深さは最大31㎝である。周壁は断面形がフラスコ形を呈する。底面は，西側でＬＶの礫が露出しているが，概ね平坦である。遺物は縄文土器



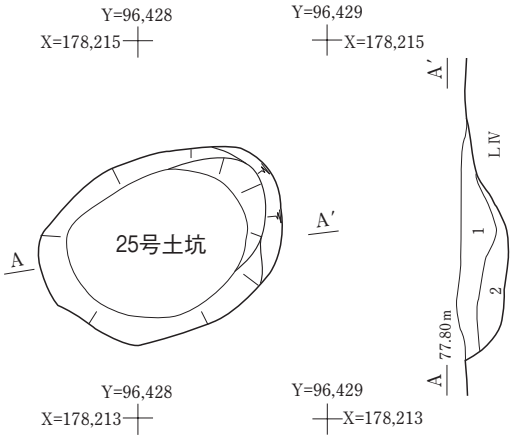
22号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3(炭化物粒少量)
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3(暗褐色土塊・炭化物粒少量)
3　褐色土　10ＹＲ4/4
4　黒色土　10ＹＲ2/1(黒褐色土塊・炭化物粒少量)



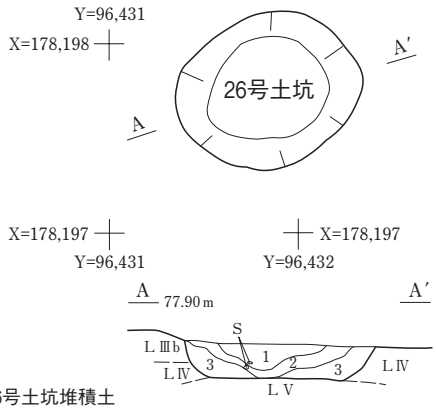
23号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
2　黒褐色土　10ＹＲ3/2(褐色土塊多量)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4(褐色土塊多量)



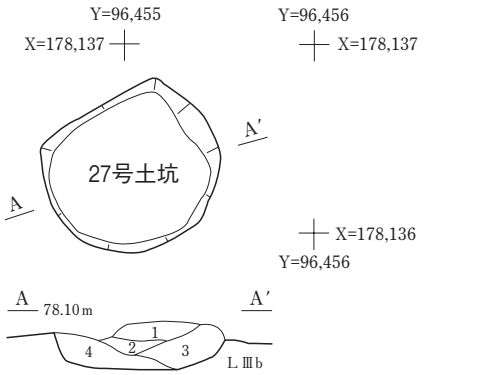
24号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物粒少量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3(炭化物粒微量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3(炭化物粒微量)



25号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6(砂粒少量，炭化物粒・焼土粒微量)
2　黄褐色土　10ＹＲ5/6(小礫少量，炭化物微量)



26号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2(炭化物粒少量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(褐色土粒・炭化物粒微量)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3(炭化物粒微量)



27号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4(焼土塊・粒多量，小礫・炭化物粒少量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(小礫少量，炭化物粒微量)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3(小礫・炭化物粒少量，焼土粒微量)
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3(小礫・炭化物粒少量)

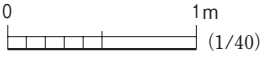


図34　22～27号土坑

１点，石器１点が出土している。図37－19は縄文土器の口縁部資料で，内湾し，口唇部下に横位の有節沈線が施されている。本遺構の性格は，形状から貯蔵穴と考えられる。年代は，遺構の性格や出土遺物から縄文中期前葉と推定される。（国　井）

23号土坑　ＳＫ23（図34・37，写真32・51）

本遺構は，調査区中央部のＤ８グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構内堆積土は３層に分けられ，ℓ１が流入，ℓ２・３が壁の崩落による自然堆積と判断した。平面形は楕円形を呈し，規模は長径125㎝，短径105㎝を測る。検出面からの深さは最大25㎝である。周壁は急な角度で立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺物はℓ３から縄文土器２点が出土しており，いずれもⅡ群土器である。図37－20は胴部破片で，器面には節の細かい斜縄文が施されている。本遺構の時期は，出土遺物や周辺の遺構から縄文中期前葉と考えている。（国　井）

24号土坑　ＳＫ24（図34・37，写真32・51）

本遺構は調査区中央部のＣ８グリッドに位置する。遺構の上部は農道による削平を受けているため，ＬⅣ上面で検出した。堆積土は３層に分けられる。ℓ３が土坑の底面中央で山状に，ℓ１・２が壁際に堆積している。平面形は円形を呈し，規模は直径125㎝を測る。検出面からの深さは最大27㎝である。周壁は垂直に近い状態で立ち上がり，西壁は僅かにオーバーハングしている。底面は平坦である。遺物は縄文土器２点，石器６点が出土した。石器はいずれも剥片である。図37－21は縄文土器で，縄文地文上に縦方向の隆線が貼り付けられている。本遺構の時期は，出土遺物や周辺遺構から縄文中期前葉と考えられる。（佐　藤）

25号土坑　ＳＫ25（図34，写真33）

本遺構は，調査区中央部のＣ８グリッドに位置する。遺構の上部は農道による削平を受けているため，ＬⅣ上面で検出した。堆積土は２層に分けられ，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。平面形は長楕円形を呈し，規模は長径134㎝，短径96㎝を測る。検出面からの深さは最大25㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面は平坦である。遺物は縄文土器７点，石器３点が出土した。縄文土器は全て小片のため図示していない。石器はいずれも剥片である。時期は，出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。（佐　藤）

26号土坑　ＳＫ26（図34，写真33）

本遺構は，調査区中央部のＤ10グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢｂである。遺構内堆積土は３層に分けられ，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。平面形は楕円形を呈し，規模は長径90㎝，短径79㎝を測る。検出面からの深さは最大23㎝である。周壁は底面より急角度で立ち上がる。底面は礫層のＬⅤ上面を使用しているが，概ね平坦である。遺物はℓ１から石器剥片

１点が出土している。本遺構の時期は，検出層位から縄文中期前葉と考えている。　（国　井）

27号土坑　ＳＫ27（図34，写真33）

本遺構は調査区南側Ｆ16グリッドに位置し，ＬⅢｂで検出した。堆積土は４層に分けられる。ℓ１は多量の焼土塊・焼土粒を含むことから人為堆積土，ℓ２～４は流れ込みの様相を示す自然堆積土と判断した。平面形は楕円形を呈し，規模は長径90㎝，短径82㎝を測る。周壁は西壁が僅かに外傾して立ち上がるが，東壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは最大26㎝である。底面は平坦に構築されている。遺物は縄文土器１点が出土した。本遺構の時期は，検出層位から縄文中期前葉と考えている。　（佐　藤）

28号土坑　ＳＫ28（図35・37，写真33・51）

本遺構は調査区南側のＣ14グリッドに位置する。遺構検出面は13号住居跡の検出面である。13号住居跡と重複し，本遺構の方が新しい。遺構内堆積土は３層に分けられる。ℓ２・３は多量の褐色土塊を含んでいるが，いずれも流入による自然堆積と判断した。平面形は楕円形を呈し，規模は長径158㎝，短径148㎝を測る。検出面からの深さは最大44㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺物はℓ２から縄文土器５点が出土している。図37－22は縄文土器の胴部破片で，器面には単節の斜縄文が浅く施されている。本遺構の時期は，重複関係や出土遺物から縄文中期前葉と考えている。　（国　井）

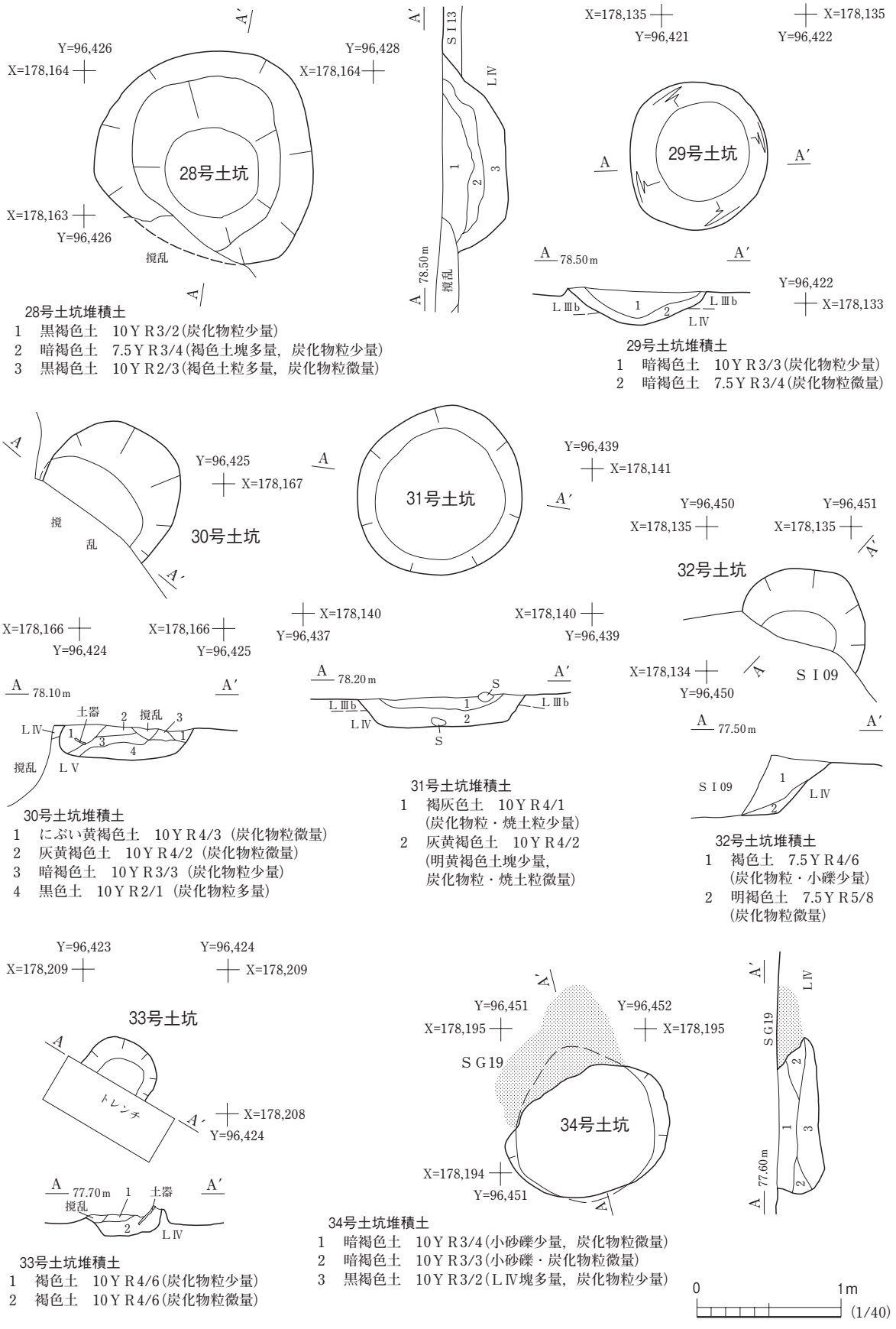
29号土坑　ＳＫ29（図35，写真33）

本遺構は，調査区南側のＣ16グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢｂである。遺構内堆積土は２層に分けられ，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。平面形は円形を呈し，規模は直径102㎝を測る。検出面からの深さは最大23㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面は中央部が最も低くなる。遺物は出土していないが，検出層位から縄文中期前葉と考えている。

（国　井）

30号土坑　ＳＫ30（図35・37，写真33・51）

本遺構は，調査区中央部のＣ13グリッドに位置する。遺構検出面は，耕作土直下のＬⅣである。遺構の西側は撹乱により失われている。遺構内堆積土は４層に分けられた。ℓ１は壁の崩落土であり，ℓ２・３は流入土である。ℓ４は，中央部が高くなる山状の堆積を示し，有機物を多く含む土層と考えられる。いずれも自然堆積の様相を示すものと考えられる。遺存状態から，平面形は楕円形と推定され，遺存する規模は長径93㎝，短径70㎝を測る。壁高は最大20㎝を測る。周壁は北西壁のみがオーバーハングし，それ以外は55°の角度で緩やかに立ち上がる。遺物は，縄文土器３点がℓ１とℓ３から出土している。図37－23の土器は，無節の縄文が施され，内面には炭化物が付着し



28号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2(炭化物粒少量)
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4(褐色土塊多量，炭化物粒少量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3(褐色土粒多量，炭化物粒微量)

29号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3(炭化物粒少量)
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4(炭化物粒微量)

30号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（炭化物粒微量）
2　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（炭化物粒微量）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒少量）
4　黒色土　10ＹＲ2/1（炭化物粒多量）

31号土坑堆積土
1　褐灰色土　10ＹＲ4/1
(炭化物粒・焼土粒少量)
2　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2
(明黄褐色土塊少量，
炭化物粒・焼土粒微量)

32号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/6
(炭化物粒・小礫少量)
2　明褐色土　7.5ＹＲ5/8
(炭化物粒微量)

33号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物粒少量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物粒微量)

34号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(小砂礫少量，炭化物粒微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3(小砂礫・炭化物粒微量)
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2(Ｌ Ⅳ塊多量，炭化物粒少量)

図35　28～34号土坑

ている。

本土坑は，北西壁がオーバーハングする点や，遺構内堆積土のℓ４が山状の堆積を示すことから，開口部の狭いフラスコ状土坑の可能性がある。遺構の所属時期は，出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。（中　野）

31号土坑　ＳＫ31（図35，写真33）

本遺構は，調査区南側のＤ15グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢｂである。遺構内堆積土は２層に分けられ，流入による自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し，規模は直径120㎝を測る。検出面からの深さは最大20㎝である。周壁は比較的緩やかに立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺物は出土していない。本遺構の時期は，検出層位から縄文中期前葉と考えている。（国　井）

32号土坑　ＳＫ32（図35，写真33）

本遺構は，調査区南側のＦ16グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣである。９号住居跡と重複しており，本遺構の方が古い。このため，遺構の南半分が失われている。遺構内堆積土は２層に分けられ，流入による自然堆積と判断した。平面形は遺存状態から楕円形と推定され，遺存する規模は長径93㎝，短径53㎝を測る。検出面からの深さは最大32㎝である。周壁は急角度で立ち上がり，底面は概ね平坦である。遺物は出土していない。本遺構の時期は，周辺の遺構や９号住居跡との重複関係から縄文中期前葉と考えられる。（国　井）

33号土坑　ＳＫ33（図35・37，写真34，51）

本遺構は調査区中央部のＣ９グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。検出時に土器片の端部が露出していたことから，土器埋設遺構と判断し断ち割りを行なったところ，堆積土中に土器を含む土坑と判明した。平面形は楕円形を呈し，遺存する規模は長径50㎝，短径32㎝を測る。検出面からの深さは最大21㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面は平坦である。堆積土は２層に分けられ，レンズ上の堆積を示すことから自然堆積と判断した。土器は非常に脆く，取り上げ時には細片になってしまった。出土遺物は縄文土器10点である。いずれも撚糸文で，内面には条痕が施されたⅠ群土器である。本遺構の時期は，出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。（佐　藤）

34号土坑　ＳＫ34（図35・38，写真34・53・54）

本遺構は調査区中央部Ｆ10グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。19号焼土遺構と重複関係にあり，本遺構の方が新しい。堆積土は３層に分けられた。ℓ１は流入，ℓ２・３は壁の崩落による自然堆積土である。平面形は楕円形を呈し，規模は長径120㎝，短径83㎝を測る。検出面からの深さは最大32㎝を測る。周壁は，南壁と北壁がオーバーハングしているが，西壁と東壁は僅かに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。遺物は縄文土器４点と石器２点が出土した。図38

－１は凹基石鏃で，形状は二等辺三角形を呈する。５は磨石の欠損品で側面に磨面が認められる。本土坑は出土遺物や周壁の状況から，縄文中期前葉のフラスコ状土坑の可能性が高い。　（佐　藤）

35号土坑　ＳＫ35（図36，写真34）

本遺構は調査区南側のＥ17グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢｂである。遺構内堆積土は４層に分けられ，流入や壁崩落による自然堆積と判断した。平面形は楕円形を呈し，規模は長径118㎝，短径92㎝を測る。検出面からの深さは最大28㎝である。周壁は急な角度で立ち上がる。底面は中央部がやや低くなるものの，概ね平坦である。遺物は出土していないが，検出層位と周辺の出土遺物から縄文中期前葉の所産と考えられる。　（国　井）

36号土坑　ＳＫ36（図36・37，写真34・51）

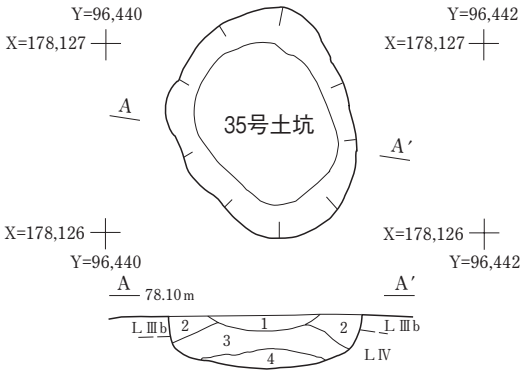
本遺構は，調査区南側のＤ17グリッドに位置する大型の土坑である。遺構検出面はＬⅢｂである。遺構内堆積土は12層に細分した。いずれも，流入や壁崩落による様相を示すことから，概ね自然堆積と判断した。平面形は円形を呈し，規模は直径220㎝を測る。検出面からの深さは最大101㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。このため，周壁は底面から中央部にかけてオーバーハングし，開口部に向かって外傾気味に立ち上がる。底面はＬⅤの砂礫を掘り込んでいるが，概ね平坦である。遺物はℓ１から縄文土器５点が出土しており，いずれもⅡ群土器である。図37－25は無文の波状口縁の資料である。遺構の性格は，形状から貯蔵穴と考えられる。時期は，検出層位と周辺の遺構から縄文中期前葉と考えられる。　（国　井）

37号土坑　ＳＫ37（図36，写真35）

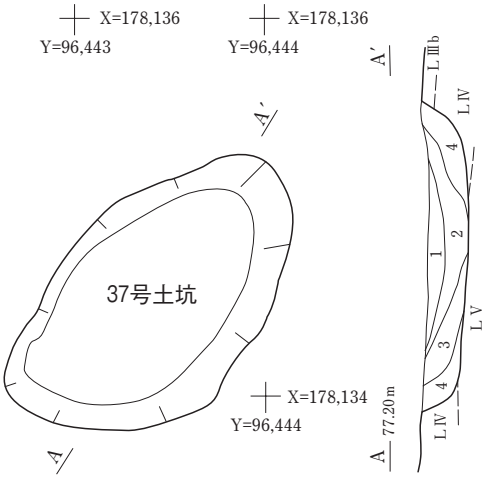
本遺構は，調査区南側のＥ16グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢｂである。北側には12号住居跡が近接する。遺構内堆積土は４層に分けられ，いずれも流入による自然堆積と判断した。平面形は不整な長楕円形を呈する。規模は長径182㎝，短径108㎝を測る。検出面からの深さは最大19㎝である。周壁は緩やかに立ち上がる。底面はＬⅤの礫層が露出するが，概ね平坦である。遺物はℓ１から縄文土器２点が出土しており，いずれもⅡ群土器と考えられる。遺構の時期は，検出層位と周辺の出土遺物から縄文中期前葉と考えられる。　（国　井）

38号土坑　ＳＫ38（図36・37，写真35・51）

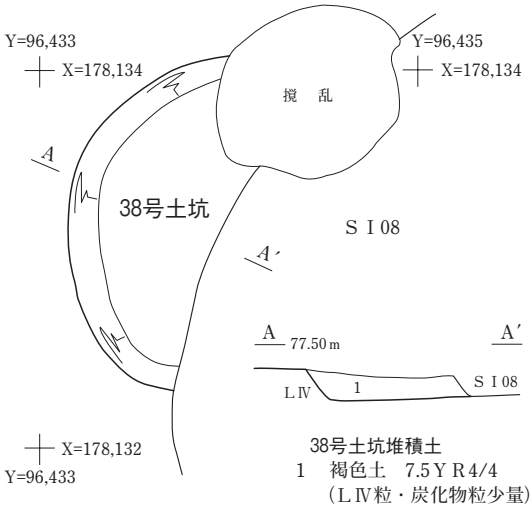
本遺構は調査区南側のＤ16グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。８号住居跡と重複しており，本遺構の方が古い。このため遺構東側の約半分が失われている。遺構内堆積土は単層で，ＬⅢｂに相当する褐色土である。堆積状況は層厚が薄いため不明である。平面形は遺存状態から楕円形と推定され，遺存する規模は長径180㎝，短径87㎝を測る。検出面からの深さは最大15㎝である。周壁は急な角度で立ち上がる。底面は重複する８号住居跡の床面とほぼ同じ高さで，概ね



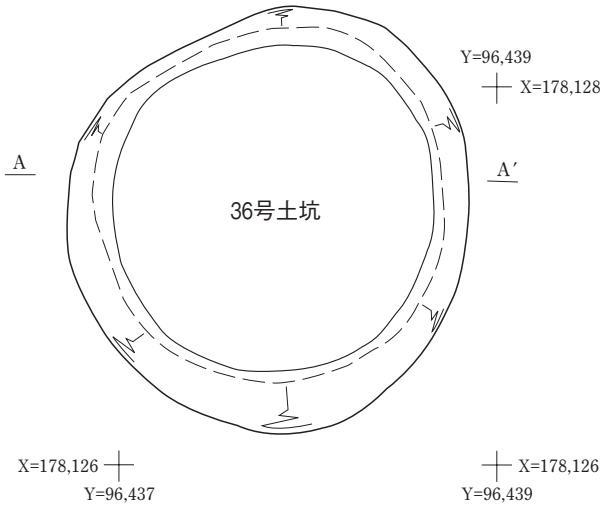
35号土坑堆積土
1　黄褐色土　10ＹＲ5/6(炭化物粒少量)
2　黄橙土　10ＹＲ8/6(炭化物粒・焼土粒少量)
3　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(褐灰色土塊・粒少量)
4　にぶい黄橙土　10ＹＲ6/3(ＬⅣ塊・炭化物粒少量)



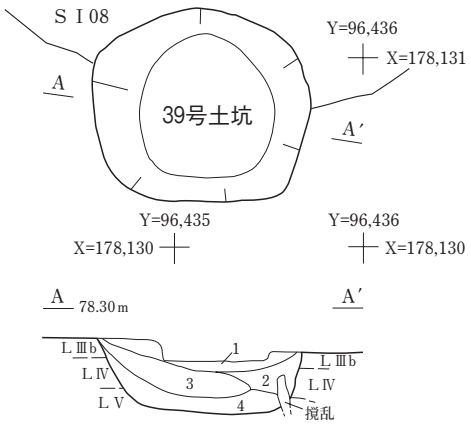
37号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3(褐色土粒・炭化物粒微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(褐色土粒・炭化物粒微量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3(炭化物粒微量)
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4(褐色土粒・炭化物粒微量)



38号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
(ＬⅣ粒・炭化物粒少量)



36号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3(炭化物粒多量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物粒少量)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3(炭化物粒少量)
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3(褐色土塊少量，炭化物粒微量)
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4(褐色土塊少量，炭化物粒微量)
6　黄褐色土　10ＹＲ5/8(小礫少量)
7　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4(黄褐色土塊少量)
8　暗褐色土　10ＹＲ3/3(黄褐色土塊少量)
9　黒褐色土　10ＹＲ3/1(褐色土塊・黄褐色土塊少量，炭化物粒微量)
10　褐色土　7.5ＹＲ4/3
11　黒褐色土　10ＹＲ2/3(褐色土粒少量)
12　黄褐色土　10ＹＲ5/8



39号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/3(炭化物粒少量)
2　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4(炭化物粒微量)
3　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3(黒褐色土塊少量，炭化物粒微量)
4　褐色土　7.5ＹＲ4/6(黄褐色土塊少量)

0　1m
(1/40)

図36　35～39号土坑

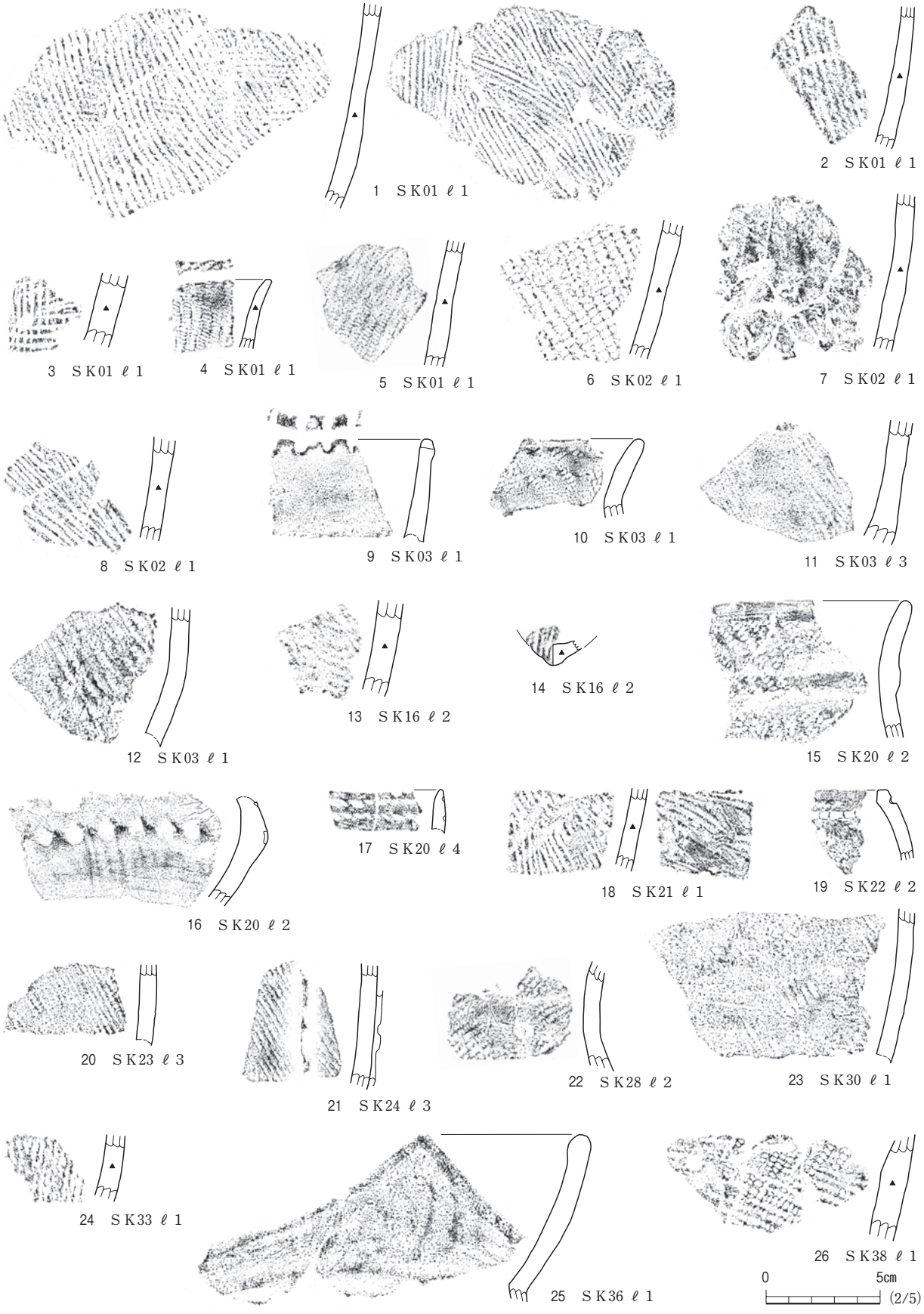

1　ＳＫ01 ℓ 1
2　ＳＫ01 ℓ 1
3　ＳＫ01 ℓ 1
4　ＳＫ01 ℓ 1
5　ＳＫ01 ℓ 1
6　ＳＫ02 ℓ 1
7　ＳＫ02 ℓ 1
8　ＳＫ02 ℓ 1
9　ＳＫ03 ℓ 1
10　ＳＫ03 ℓ 1
11　ＳＫ03 ℓ 3
12　ＳＫ03 ℓ 1
13　ＳＫ16 ℓ 2
14　ＳＫ16 ℓ 2
15　ＳＫ20 ℓ 2
16　ＳＫ20 ℓ 2
17　ＳＫ20 ℓ 4
18　ＳＫ21 ℓ 1
19　ＳＫ22 ℓ 2
20　ＳＫ23 ℓ 3
21　ＳＫ24 ℓ 3
22　ＳＫ28 ℓ 2
23　ＳＫ30 ℓ 1
24　ＳＫ33 ℓ 1
25　ＳＫ36 ℓ 1
26　ＳＫ38 ℓ 1
0
5cm
(2/5)

図37　土坑出土遺物(1)

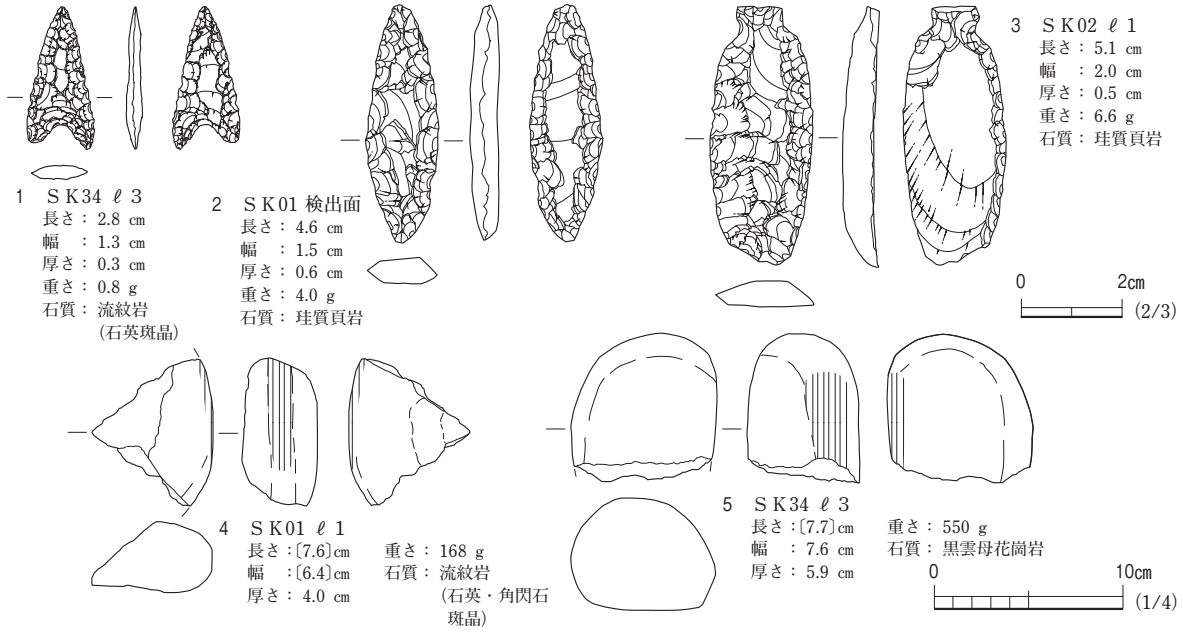


図38　土坑出土遺物(2)

平坦である。遺物はℓ１から28点出土している。いずれも斜縄文や撚糸文が施されⅠ群土器である。図37－26は縄文土器の胴部破片で，撚りが異なる２本の原体を使用して縄文を施している。本遺構の時期は，堆積土や出土遺物から縄文早期末葉と考えている。　（国　井）

39号土坑　ＳＫ39(図36，写真35)

本遺構は，調査区南側のＤ16グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢｂである。８号住居跡と重複しており，本遺構の方が古い。このため，遺構北側の周壁上半が失われている。遺構内堆積土は４層に分けられ，流入や壁崩落による様相を示すことから，概ね自然堆積と判断した。平面形は遺存状態から不整な楕円形と推測される。遺存規模は長辺115㎝，短辺101㎝を測り，検出面からの深さは最大36㎝である。周壁は比較的急な角度で立ち上がる。底面は重複する８号住居跡の床面より一段低くなり，概ね平坦である。遺物は出土していないが，重複関係や検出層位から縄文中期前葉と考えている。　（国　井）

第４節　焼　土　遺　構

今回の調査で焼土遺構は23基検出された。これらは，調査区南側に一部認められる他は，調査区中央部から北側で確認されている。

１号焼土遺構　ＳＧ01(図39，写真36)

本遺構は調査区北側のＤ６グリッドに位置する。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。平面形は楕円形を呈し，規模は長径91㎝，短径55㎝を測る。使用面は削平によって失われたと考えられる。焼

土の厚さは４～６㎝であり，焼き締まり等は確認できなかった。本遺構の時期は，検出層位や周辺遺構の状況から縄文早期末葉と考えている。（佐　藤）

２号焼土遺構　ＳＧ02（図39，写真36）

本遺構は調査区北側のＣ７グリッドに位置する。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は長径81㎝，短径59㎝を測る。使用面は削平によって失われたと考えられる。焼土の厚さは３～５㎝であり，焼き締まり等は確認できなかった。本遺構の時期は，検出層位や周辺遺構の状況から縄文早期末葉と考えている。（佐　藤）

３号焼土遺構　ＳＧ03（図39・41，写真36・54）

本遺構は調査区北側のＤ６グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。平面形は楕円形を呈し，規模は長径100㎝，短径80㎝を測る。酸化面の厚さは６㎝で，全体的に強く酸化している。遺物は，検出面や周辺から縄文土器５点，石器３点が出土している。図41－１は調整剥片である。側面全体に細かい剥離を加えることによって，刃部を作り出している。遺構の所属時期は，出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。（中　野）

４号焼土遺構　ＳＧ04（図39，写真36・37）

本遺構は調査区北側のＤ７グリッドに位置する。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。５号焼土遺構が西側に隣接している。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は長径66㎝，短径30㎝を測る。使用面は削平により失われたものと考えられる。検出面から６㎝の厚さで赤褐色に熱変化した焼土が認められ，焼き締まり等は確認できなかった。本遺構の時期は，検出層位や周辺遺構の状況から縄文早期末葉と考えている。（佐　藤）

５号焼土遺構　ＳＧ05（図39，写真36・37）

本遺構は調査区北側のＤ７グリッドに位置する。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。４号焼土遺構が東側に隣接している。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は長径48㎝，短径36㎝を測る。使用面は削平により失われたものと考えられる。検出面から５～８㎝の厚さで赤褐色に熱変化した焼土が認められ，焼き締まり等は確認できなかった。本遺構の時期は，検出層位と周辺遺構の状況から縄文早期末葉と考えている。（佐　藤）

６号焼土遺構　ＳＧ06（図39，写真37）

調査区中央部のＣ９グリッドに位置する。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。焼土化範囲は楕円形を呈し，規模は長径74㎝，短径49㎝を測る。赤褐色に焼けており，その厚さは最大４㎝を測る。西側では若干の焼き締まりが確認された。本遺構の時期は，検出層位と周辺の出土遺物から縄文早

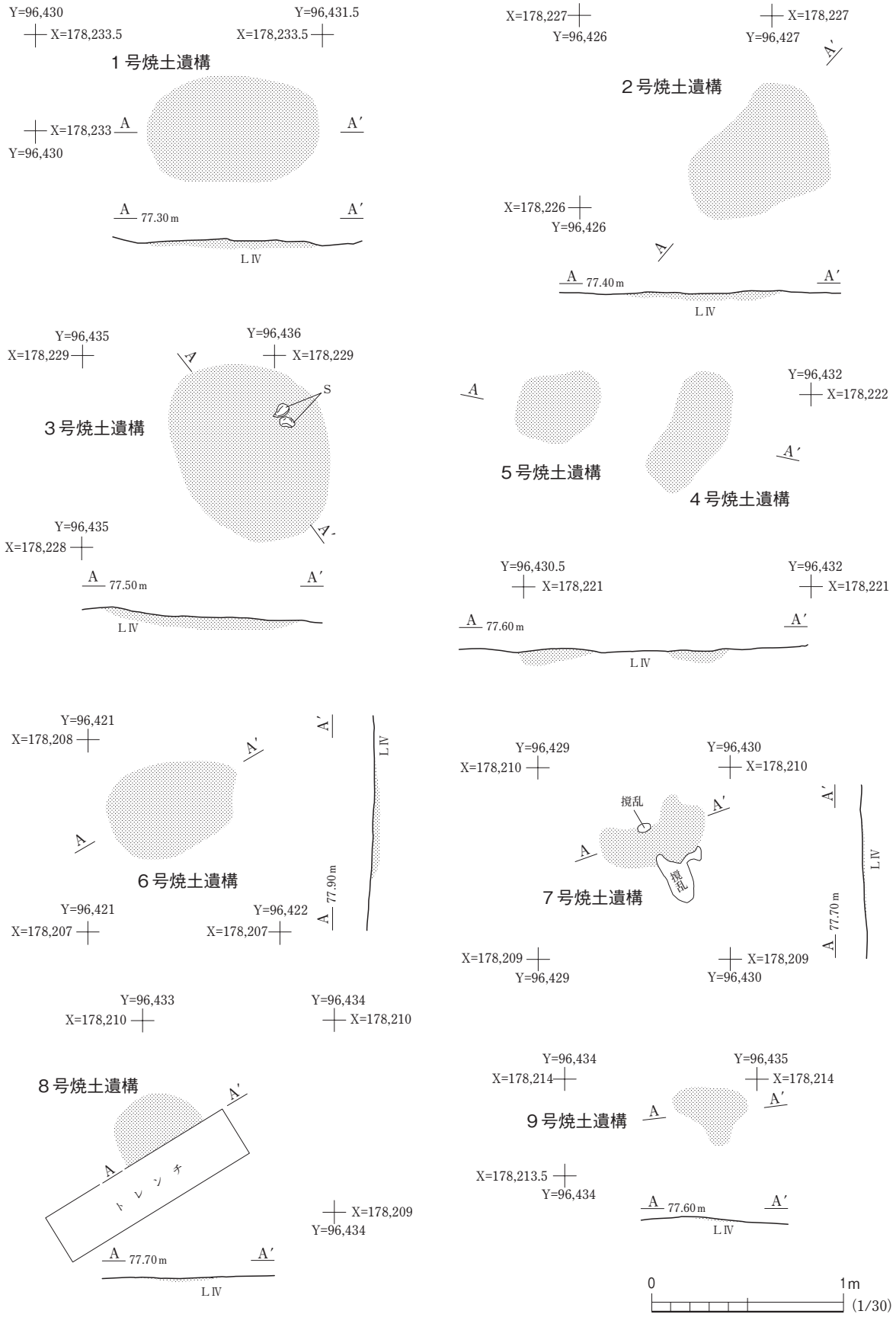

Y=96,430
X=178,233.5
Y=96,431.5
X=178,233.5
１号焼土遺構
X=178,233
Y=96,430
A
A′
77.30m
LⅣ
X=178,227
Y=96,426
X=178,227
Y=96,427
２号焼土遺構
X=178,226
Y=96,426
77.40m
Y=96,435
X=178,229
Y=96,436
X=178,229
３号焼土遺構
S
Y=96,435
X=178,228
77.50m
Y=96,432
X=178,222
５号焼土遺構
４号焼土遺構
Y=96,430.5
X=178,221
Y=96,432
X=178,221
77.60m
Y=96,421
X=178,208
６号焼土遺構
77.90m
Y=96,421
X=178,207
Y=96,422
X=178,207
Y=96,429
X=178,210
Y=96,430
X=178,210
撹乱
７号焼土遺構
77.70m
X=178,209
Y=96,429
X=178,209
Y=96,430
Y=96,433
X=178,210
Y=96,434
X=178,210
８号焼土遺構
X=178,209
Y=96,434
77.70m
Y=96,434
X=178,214
Y=96,435
X=178,214
９号焼土遺構
X=178,213.5
Y=96,434
77.60m
0
1m
(1/30)

図39　1～９号焼土遺構

期末葉と考えている。（国　井）

７号焼土遺構　ＳＧ07（図39，写真37）

調査区中央部のＣ９グリッドに位置し，耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。北側の一部と南側は撹乱を受けている。焼土化範囲は不整な楕円形であり，規模は長軸57㎝，短軸32㎝を測る。赤褐色に焼けており，その厚さは最大２㎝を測る。焼き締まりは確認されなかったが，西側に比べ東側が強く焼けている。検出層位と周辺の出土遺物から縄文早期末葉の所産と考えている。（国　井）

８号焼土遺構　ＳＧ08（図39，写真37）

調査区中央部のＤ９グリッドに位置する。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。本遺構は，平成17年度試掘調査で確認されたもので，この時の11号トレンチにより遺構の南東側が失われている。遺構の形状は，遺存状態から楕円形と推測される。遺存する規模は長径74㎝，短径49㎝を測る。暗赤褐色に焼けており，その厚さは最大３㎝を測る。焼き締まりは確認されなかったが，周縁部に比べ中央部が強く焼けている。本遺構の時期は，検出層位と周辺の出土遺物から縄文早期末葉と考えている。（国　井）

９号焼土遺構　ＳＧ09（図39，写真37）

調査区中央部のＤ８グリッドに位置する焼土遺構である。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。遺構の形状は不整な楕円形を呈する。規模は長軸39㎝，短軸30㎝を測る。赤褐色に焼けており，その厚さは最大２㎝を測る。焼き締まりは確認されなかったが，周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の時期は，検出層位と周辺の出土遺物から縄文早期末葉と考えている。（国　井）

10号焼土遺構　ＳＧ10（図40，写真37）

本遺構は調査区中央部のＣ９グリッドに位置する。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。平面形は円形を呈し，規模は長径108㎝，短径86㎝を測る。使用面は削平により失われたものと考えられる。検出面から10～20㎝の厚さで赤褐色に熱変化しており，焼き締まり等は確認できなかった。本遺構の時期は，検出層位と周辺遺構の状況から縄文早期末葉と考えている。（佐　藤）

11号焼土遺構　ＳＧ11（図40，写真37）

調査区中央部のＤ11グリッドに位置する焼土遺構である。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。焼土化範囲は長方形を呈し，規模は長辺59㎝，短辺41㎝を測る。赤褐色に焼けており，その厚さは最大２㎝を測る。焼き締まりは確認されなかったが，周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の時期は，検出層位と周辺の出土遺物から縄文早期末葉と考えている。（国　井）

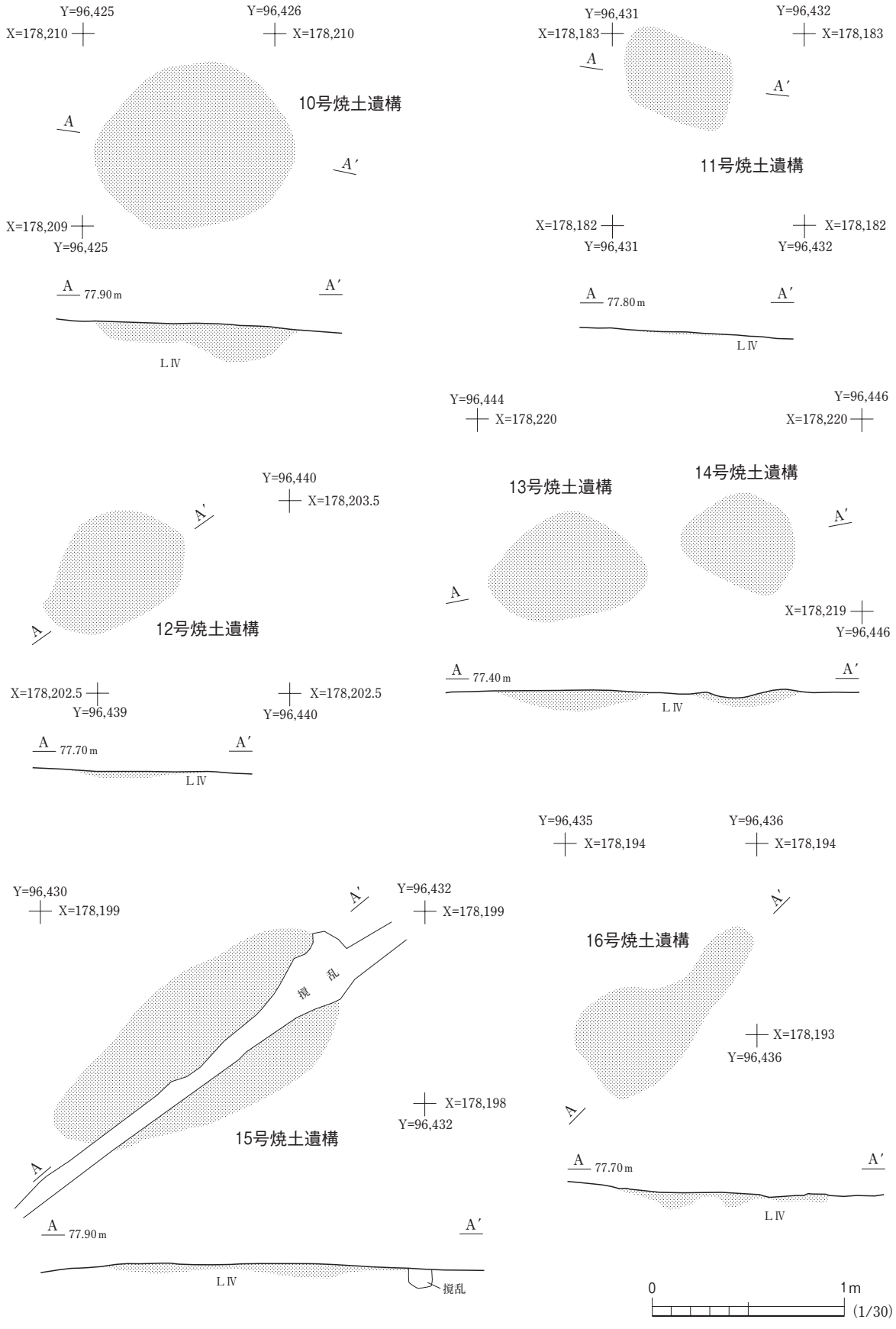


図40　10～16号焼土遺構

12号焼土遺構　ＳＧ12(図40，写真38)

調査区中央のＤ９グリッドに位置する。検出層位はＬⅣ上面である。遺構の形状は不整な楕円形を呈し，規模は長径79㎝，短径57㎝を測る。赤褐色に焼けており，その厚さは最大４㎝を測る。焼き締まりは確認されなかったが，周辺に比べ東側の酸化度合が強いようである。遺構の時期は，検出層位と周辺の出土遺物から縄文早期末葉と考えられる。　(国　井)

13号焼土遺構　ＳＧ13(図40，写真38)

本遺構は調査区中央部のＥ８グリッドに位置する。遺構の上部にはＬⅢｂが確認され，検出面はＬⅣ上面である。東側には14号焼土遺構が近接する。形状は不整な楕円形を呈し，規模は長径83㎝，短径59㎝を測る。赤褐色に焼けており，その厚さは最大11㎝を測る。遺構の中央付近では，僅かな焼き締まりが認められた。本遺構の時期は，検出層位から14号焼土遺構と同様の縄文早期末葉と考えている。　(国　井)

14号焼土遺構　ＳＧ14(図40，写真38)

調査区中央部，Ｅ８グリッドのＬⅣ上面で検出した。本遺構は，13号焼土遺構と同様の状態で確認された。形状は不整な楕円形を呈し，規模は長径63㎝，短径46㎝を測る。赤褐色に焼けており，その厚さは最大７㎝を測る。焼き締まりは確認されなかったが，周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の時期は，検出層位から13号焼土遺構と同様の縄文早期末葉と考えている。　(国　井)

15号焼土遺構　ＳＧ15(図40，写真38)

調査区中央部のＤ10グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。遺構は中央部が耕作により壊されている。焼土化範囲は，遺存状況から楕円形と推測され，長径167㎝，短径77㎝の規模で赤褐色に焼けている。特に，強く焼けた所が中央部の南西側と北東側で確認され，その厚さは最大７㎝を測る。このことから本遺構は，僅かに場所を変えて火を使用したものと考えられる。本遺構の時期は不明であるが，検出層位から縄文時代のものと考えたい。　(国　井)

16号焼土遺構　ＳＧ16(図40，写真38)

本遺構は調査区中央部のＤ10グリッドに位置する。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。平面形は無花果形を呈し，規模は長径110㎝，短径54㎝を測る。使用面は削平により失われたものと考えられる。検出面から２～９㎝の厚さで赤褐色に熱変化しており，焼き締まりは確認できなかった。本遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代のものと考えている。　(佐　藤)

17号焼土遺構　ＳＧ17(図41，写真38)

調査区南側のＣ15グリッドに位置する。本遺構は，耕作土直下のＬⅢｂで検出した。南側の一部が根による撹乱を受けている。焼土化範囲は楕円形を呈し，長径114㎝，短径73㎝を測る。全体に明赤褐色に焼けており，その厚さは最大５㎝を測る。本遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代のものと考えている。（国　井）

18号焼土遺構　ＳＧ18(図41，写真38)

本遺構は調査区中央部のＥ10グリッドに位置する。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。平面形は楕円形を呈し，規模は長径90㎝，短径68㎝を測る。使用面は削平により失われたものと考えられる。検出面から６～12㎝の厚さで赤褐色に熱変化しており，焼き締まりは確認できなかった。本遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代のものと考えている。（佐　藤）

19号焼土遺構　ＳＧ19(図41，写真38)

本遺構は調査区中央部Ｆ10グリッドに位置する。耕作土直下のＬⅣ上面で検出した。34号土坑と重複関係にあり，本遺構の方が古い。遺存状況から平面形は推測できない。遺存する規模は長軸92㎝，短軸57㎝を測る。検出面から10～19㎝の厚さで赤褐色に熱変化しており，焼き締まりは確認できなかった。本遺構の時期は，重複遺構から判断して縄文中期前葉以前と考えている。（佐　藤）

20号焼土遺構　ＳＧ20(図41，写真39)

調査区中央部のＣ９グリッドに位置する。検出面は耕作土直下のＬⅣ上面である。遺構の西側には21・22号焼土遺構が近接し，これらは本遺構を含めて一直線に並ぶ。平面形は楕円形を呈し，長径112㎝，短径73㎝にわたって焼けている。その厚さは最大４㎝を測る。焼き締まりは確認されなかったが，周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代のものと考えている。（国　井）

21号焼土遺構　ＳＧ21(図41，写真39)

調査区中央部のＣ９グリッドに位置する。遺構検出面は耕作土直下のＬⅣ上面である。遺構の東側と西側には，20・22号焼土遺構が近接する。焼土化範囲は楕円形を呈し，長径87㎝，短径50㎝を測る。赤褐色に焼けており，その厚さは最大４㎝を測る。焼き締まりは確認されなかったが，周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代のものと考えている。（国　井）

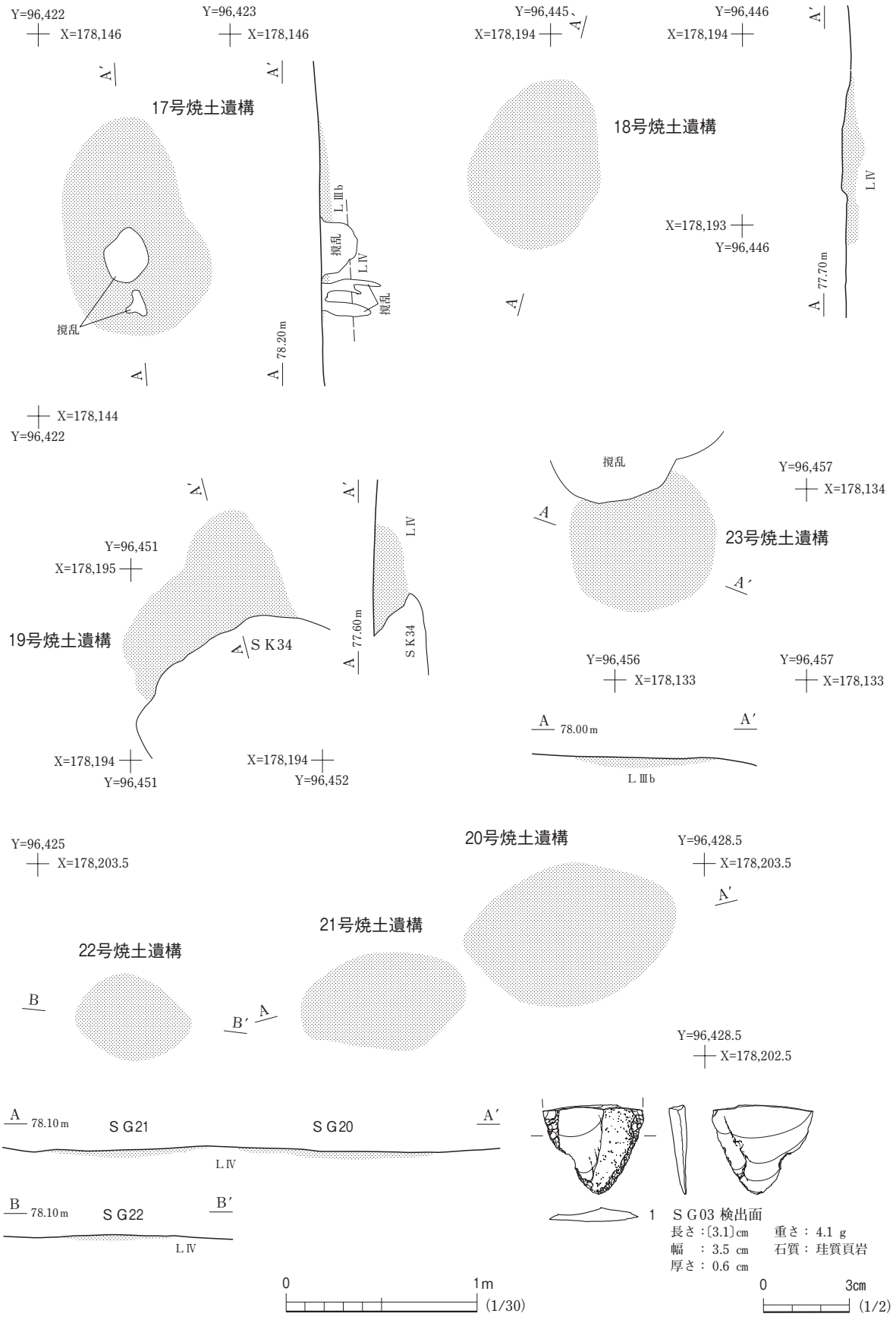


図41　17～23号焼土遺構，出土遺物

22号焼土遺構　ＳＧ22(図41，写真39)

調査区中央部のＣ９グリッドに位置する。遺構検出面は，耕作土直下のＬⅣ上面である。遺構の東側には，20・21号焼土遺構が近接する。焼土化範囲は楕円形を呈し，長径60㎝，短径45㎝を測る。赤褐色に焼けており，その厚さは最大２㎝を測る。焼き締まりは確認されなかったが，周縁部に比べ中央部が強く焼けている。遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代のものと考えている。　(国　井)

23号焼土遺構　ＳＧ23(図41，写真39)

調査区南側のＦ16グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢｂである。遺構の北側は，後世の撹乱により失われている。遺存状態から平面形は円形と推測され，遺存する規模は長径77㎝，短径59㎝を測る。赤褐色に焼けており，その厚さは最大４㎝を測る。中央部は僅かに焼き締まりが認められ，周縁部に比べ強く焼けている。遺構の明確な時期は不明であるが，検出層位から縄文時代のものと考えたい。　(国　井)

第５節　土器埋設遺構

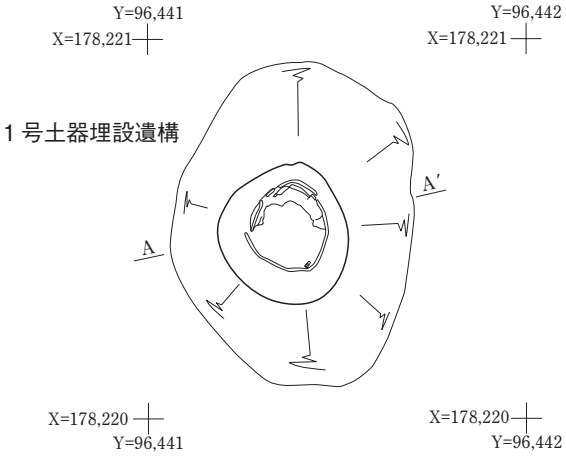
今回の調査では，２基の土器埋設遺構を検出した。いずれも調査区中央部のＬⅣ上面で確認されたが，時期は異なる。１号土器埋設遺構が縄文早期末葉，２号土器埋設遺構が縄文中期前葉の遺構と考えられる。

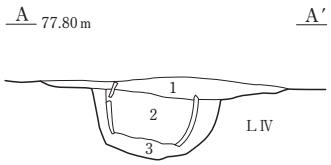
１号土器埋設遺構　ＳＭ01(図42，写真40・51・52)

本遺構は，調査区北側のＥ７グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。検出時に土器の上端が確認され，掘形と土器の状態から土器埋設遺構と判断した。

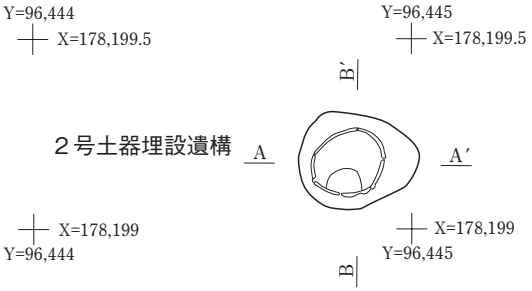
掘形の上部には，楕円形を呈する浅い窪みが見られ，規模は長径85㎝，短径65㎝を測る。掘形の平面形は円形を呈し，規模は直径30㎝を測る。検出面からの深さは22㎝である。埋設土器は，口縁部と底部を欠いた胴部のみが正位の状態で埋設されている。掘形は埋設土器より一回り大きく掘られており，土器と掘形の隙間は３～５㎝と狭く，周壁は直立気味に立ち上がる。掘形底面は丸味を持つ。堆積土は３層に分けられる。ℓ１・２は流入等による自然堆積土，ℓ３は土器埋設時の埋土と判断した。

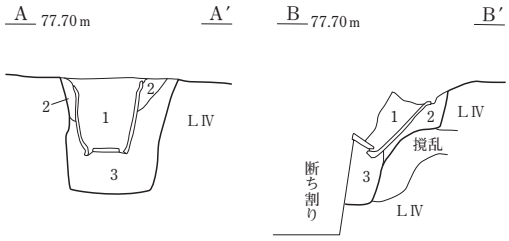
遺物は縄文土器が３点出土した。いずれもⅠ群土器である。図42－１・２は縄文土器である。２は胴部のみが遺存する埋設土器で，外面には目の細かい撚糸文が施され，内面には条痕が認められる。１は２と同様に撚糸文の土器であるが，２とは別個体の土器である。本遺構の時期は，埋設土器から縄文早期末葉と考えられる。　(佐　藤)



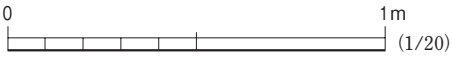


１号土器埋設遺構堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/3(炭化物粒微量)
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4(炭化物粒微量)
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6(炭化物粒微量)

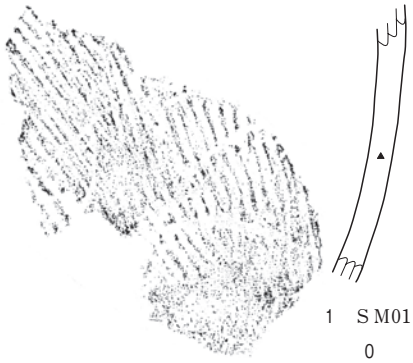




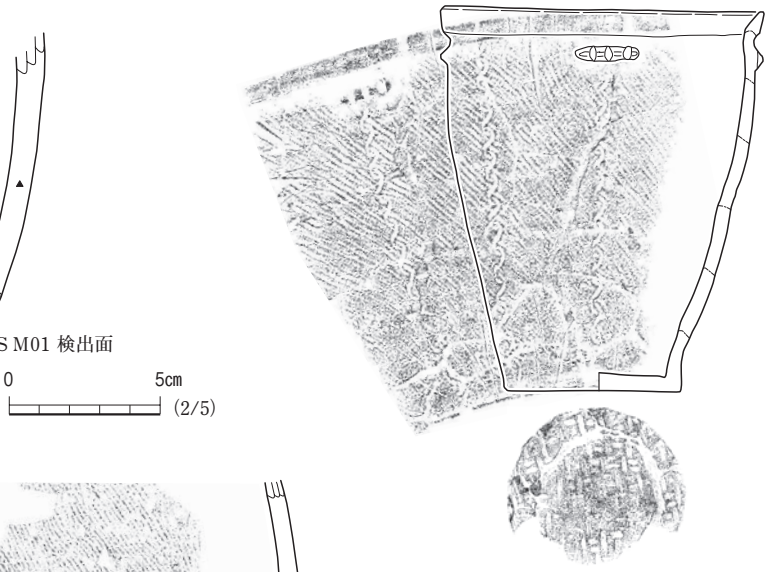
２号土器埋設遺構堆積土
1　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6(小砂礫・炭化物・炭化物粒少量)
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6(炭化物粒微量)
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/4(炭化物粒微量)



(1/20)



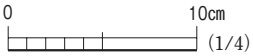
1　ＳＭ01 検出面



(2/5)

3　ＳＭ02
口径：16.6 ㎝
器高：20.1 ㎝
底径：9.0 ㎝

2　ＳＭ01
器高：〔19.0〕㎝



(1/4)

図42　１・２号土器埋設遺構，出土遺物

２号土器埋設遺構　ＳＭ02(図42，写真40・52)

本遺構は，調査区中央部のＥ10グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出された。検出時に土器の口縁部が巡っているのが確認され，掘形と土器の状態から土器埋設遺構と判断した。

掘形の形状は楕円形を呈し，規模は長径32㎝，短径25㎝を測る。周壁は僅かに外反して立ち上がり，全体に円筒形を呈する。検出面からの深さは32㎝を測り，底面は平坦に構築されている。埋設土器は，土器の底部が掘形の底面から10㎝上の位置にあり，北側に傾いた状態で埋設されていた。また，底部が本来の位置から２㎝程浮いた状態で出土している。堆積土は３層に分けられる。ℓ１は土器内堆積土，ℓ２・３は土器埋設時の埋土と判断した。

遺物は埋設土器のみで，Ⅱ群土器と考えられる。図42－３に図示した。完形の深鉢土器で，底部から外傾気味に立ち上がる器形を呈する。口縁部は無文で，胴部には単節の縄文地文が施された後，頸部の直下に４単位の貼付文が施されている。貼付文の直下と，その中間から垂下する結節文が底部付近まで施されている。底部には網代痕が見られる。本遺構の時期は，埋設土器から縄文中期前葉と考えられる。　（佐　藤）

第６節　その他の遺構

１号特殊遺構　ＳＸ01(図43，写真41)

本遺構は，調査区南側のＦ・Ｇ15グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢｂである。検出当初，竪穴住居跡として調査を行なったが，遺構に伴う施設が見られず，用途が不明であるため特殊遺構とした。遺構内堆積土は９層に分けられた。いずれにも10～30㎝の礫が多く入っており，レンズ状堆積や壁際での三角堆積を示すことから自然堆積と考えられる。本遺構の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は東西5.40ｍ，南北2.30ｍを測り，壁高は50㎝である。全体にＬⅤの礫層まで掘り込んでいる。周壁は概ね60°で立ち上がる。底面は平坦であるが，踏み締まりはみられない。遺物はℓ３から縄文土器２点，石器１点が出土しており，全て縄文中期前葉のものと考えられる。

本遺構は，隅丸長方形を呈する特殊遺構である。底面に炉跡やピットが認められないため，遺構の性格は不明である。遺構の所属時期は，出土遺物に乏しく決定材料が少ないが，堆積土にＬⅢａに相当する土層が認められる点や出土遺物から，縄文中期前葉と考えている。　（中　野）

２号特殊遺構　ＳＸ02(図44，写真42)

本遺構は，調査区北側のＤ７グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。当初，耕作土直下から焼土遺構が確認され，その周辺を精査したところ，部分的ではあるが炭化物粒を含む踏み締まり範囲とピットが確認された。本遺構は検出段階では，削平により壁が失われた住居跡と判断していたが，調査の進行に伴い，住居跡とする根拠に欠けるため特殊遺構としたものである。隣接

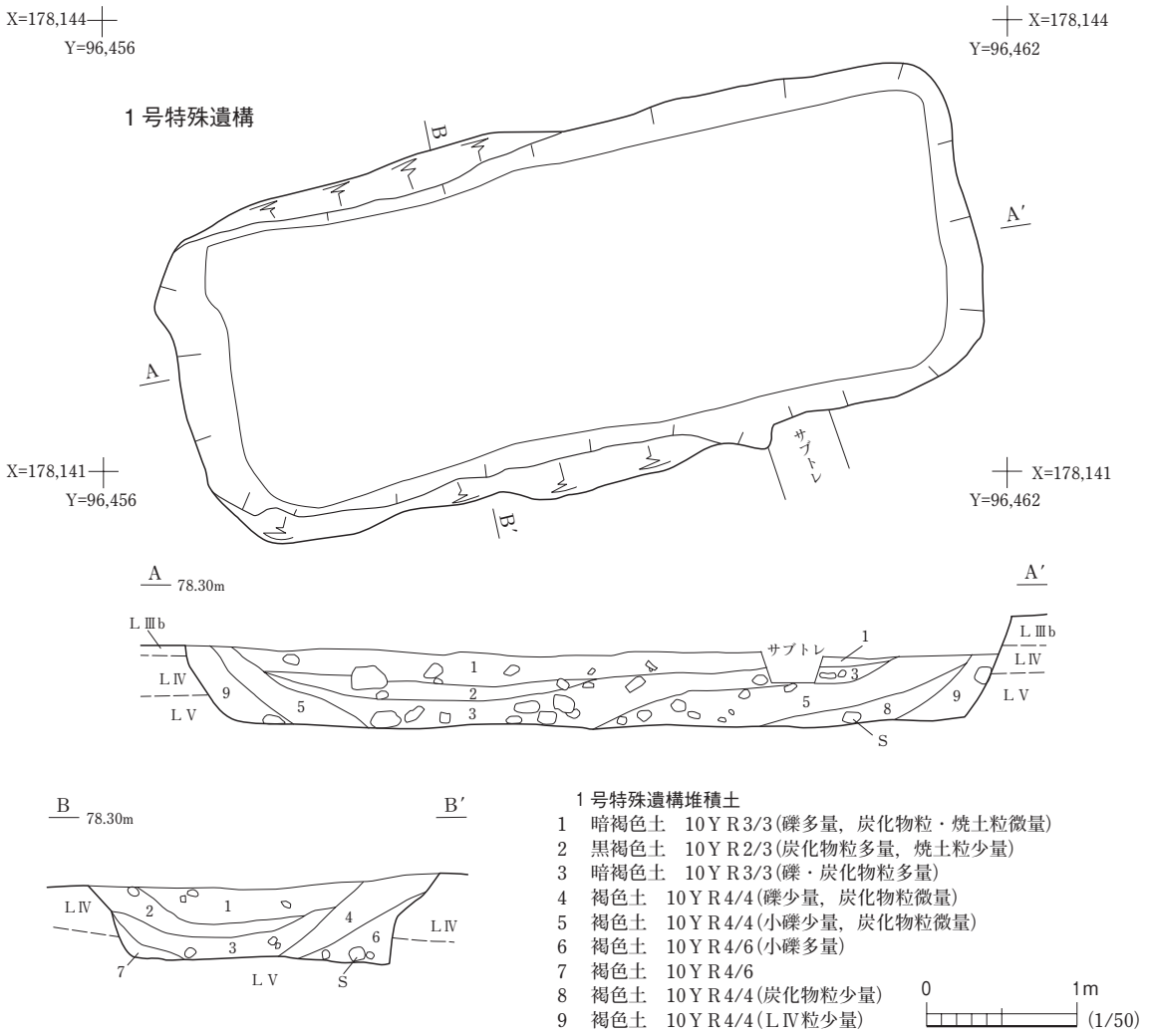


図43　１号特殊遺構

する遺構としては，４号住居跡が本遺構の東側に位置する。他の遺構との重複関係はない。遺構は耕作による削平を受けているため，遺存状態が悪い。

踏み締まりの範囲は，一辺4.00ｍ前後の隅丸正方形を呈し，焼土遺構を中心に形成されている。また，この範囲では，５㎜前後の炭化物粒が確認されている。焼土遺構は１基確認され，形状は楕円形を呈する。規模は長軸100㎝，短軸90㎝を測る。全体に強く酸化しており，酸化面の厚さは最大８㎝である。ピットは焼土遺構を南北に挟んだ対角線上に２基検出された。Ｐ１・２共に直径20㎝，深さ10㎝を測る。Ｐ２の北側で，15㎝四方，厚さ10㎝の範囲で白色の粘土塊が検出された。

遺物は縄文土器12点，石器６点が出土している。遺物の多くは焼土遺構の周辺から出土している。全てⅠ群土器で，撚糸地文のものが多い。いずれも小破片のため図示していない。

本遺構は焼土遺構，踏み締まり範囲，ピットからなる特殊遺構である。東側に近接する４号住居跡は，周壁が失われた住居跡で，確認された柱穴を除くと本遺構の状況に近似するものである。本遺構の性格については不明であるが，明確な柱穴の掘り込みを持たない，周壁が失われた住居跡とも考えている。遺構の所属時期は，出土土器から縄文早期末葉と考えられる。　　（中　野）

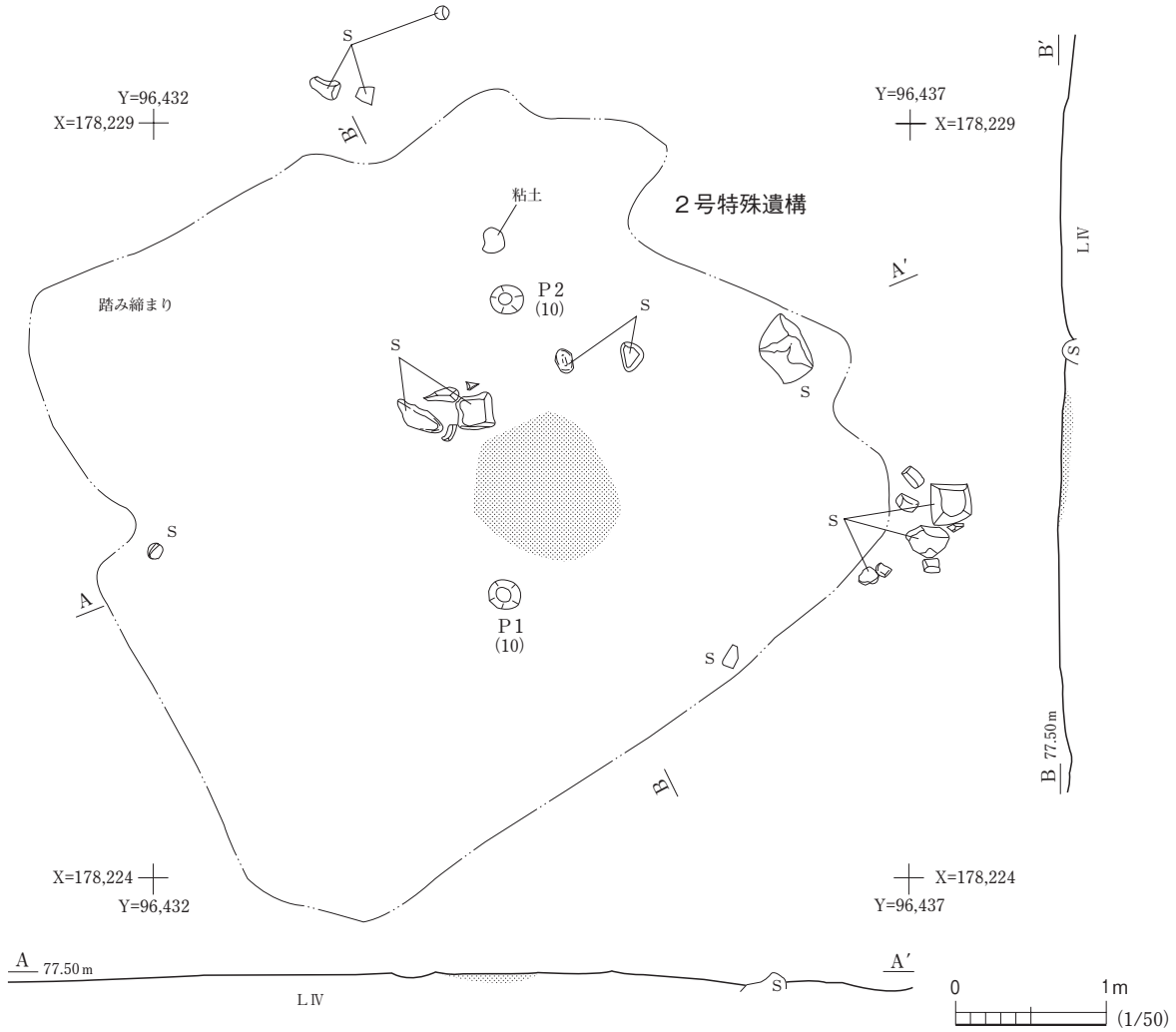


図44　２号特殊遺構

ピット（図45，写真51）

調査区中央部のＣ９・C11・D11グリッドに位置する。ピットは総計６基がＬⅣ上面で検出され，大きく２地点に分けられる。Ｐ１～４は20～22号焼土遺構に，Ｐ５・６は11号焼土遺構に近接し，特にＰ１～４は，20～22号焼土遺構を東側から南側にかけて囲むように配置されている。ピットの平面形はいずれも円形を呈し，規模は直径20～49㎝を測る。検出面からの深さは24～49㎝である。ピット内堆積土は，Ｐ１～４がＬⅢｂに近似する褐色土，Ｐ５・６は黒褐色土や暗褐色土である。

遺物は，Ｐ６から縄文土器１点が出土している。図45－１は縄文土器片で，口縁部と胴部の境部分と考えられる。口縁部には横方向のナデ調整が認められ，胴部には単節の斜縄文が施されている。縄文晩期のものと考えられる。

Ｐ１～４は，堆積土やその配置からも関連が深いものと思われ，堆積土の特徴から縄文早期末葉～前期最初頭の所産と考えられる。Ｐ５の時期は不明である。Ｐ６は縄文晩期以降のものと考えられる。（国　井）

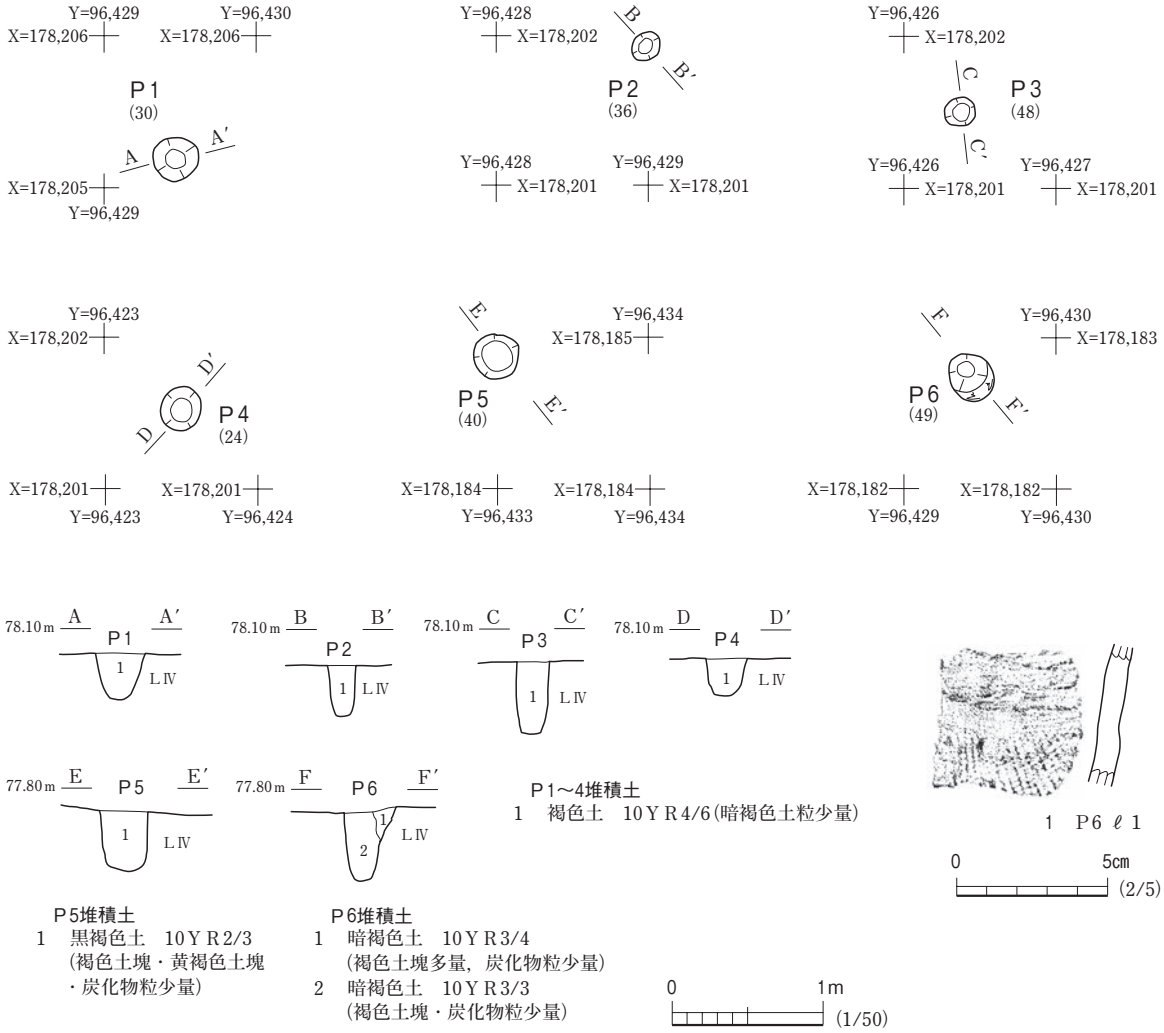


図45　ピット，出土遺物

第７節　遺構外出土遺物

遺構外からは縄文土器3,377点，土製品１点，石器225点が出土している。全て縄文時代の遺物と考えている。各地点の出土量を図46・47に示した。時期ごとの分布をみると，縄文早期末葉～前期最初頭の遺物が調査区北側から，同中期前葉の遺物が調査区南側と北側から出土している。

土　　器(図46・48～53，写真56～58)

出土した土器は縄文早期末葉から同晩期までのものである。このうち，縄文早期末葉～前期最初頭の土器はＬⅢｂから，同中期前葉の土器はＬⅢａから多く出土している。本節においては，第２章第１節の分類基準に遵って記述する。

Ⅰ群土器

縄文早期末葉～前期最初頭の土器群で，図48～50が該当する。Ⅰ群土器は本遺跡出土土器の中で

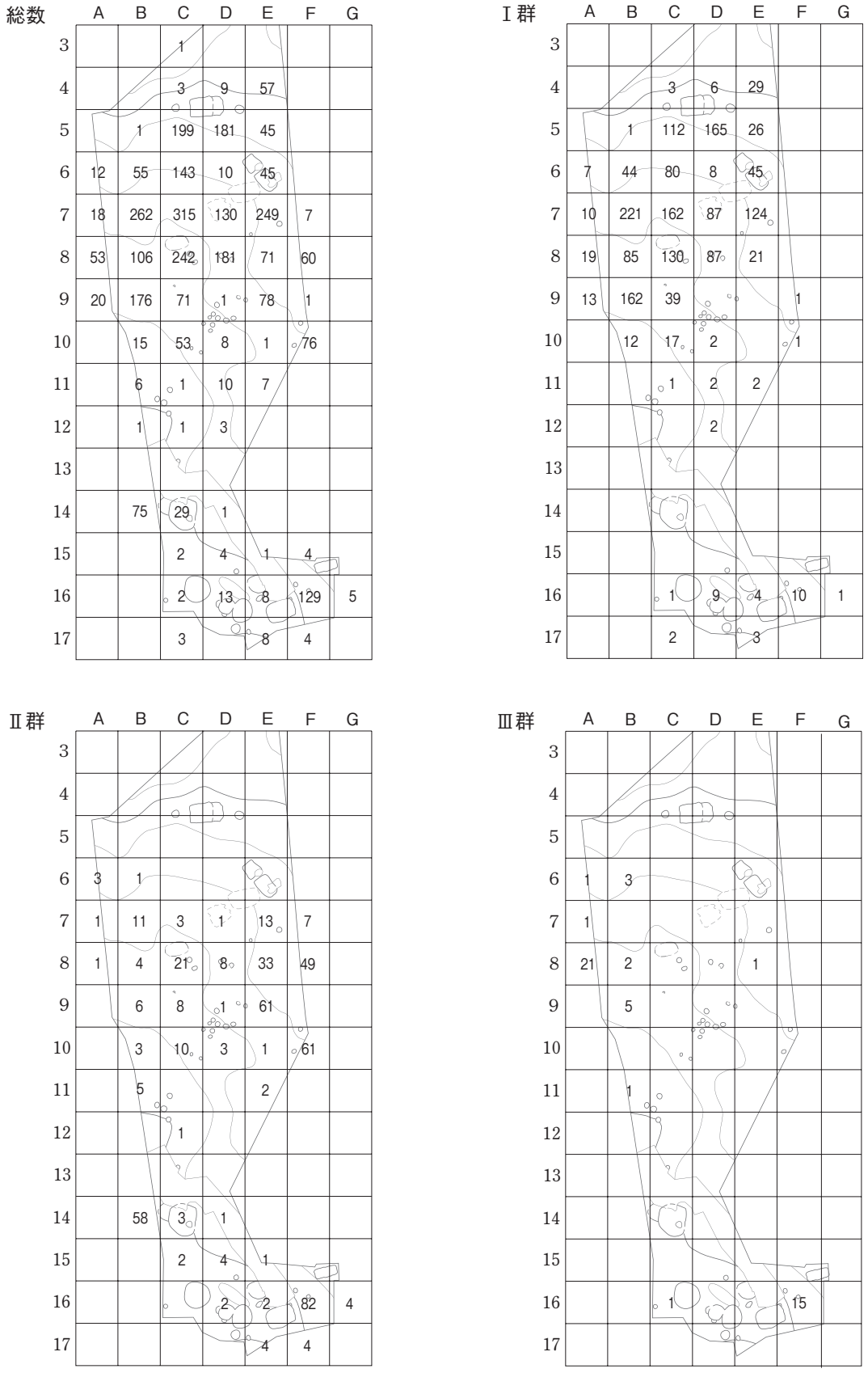


図46　遺構外出土土器分布図

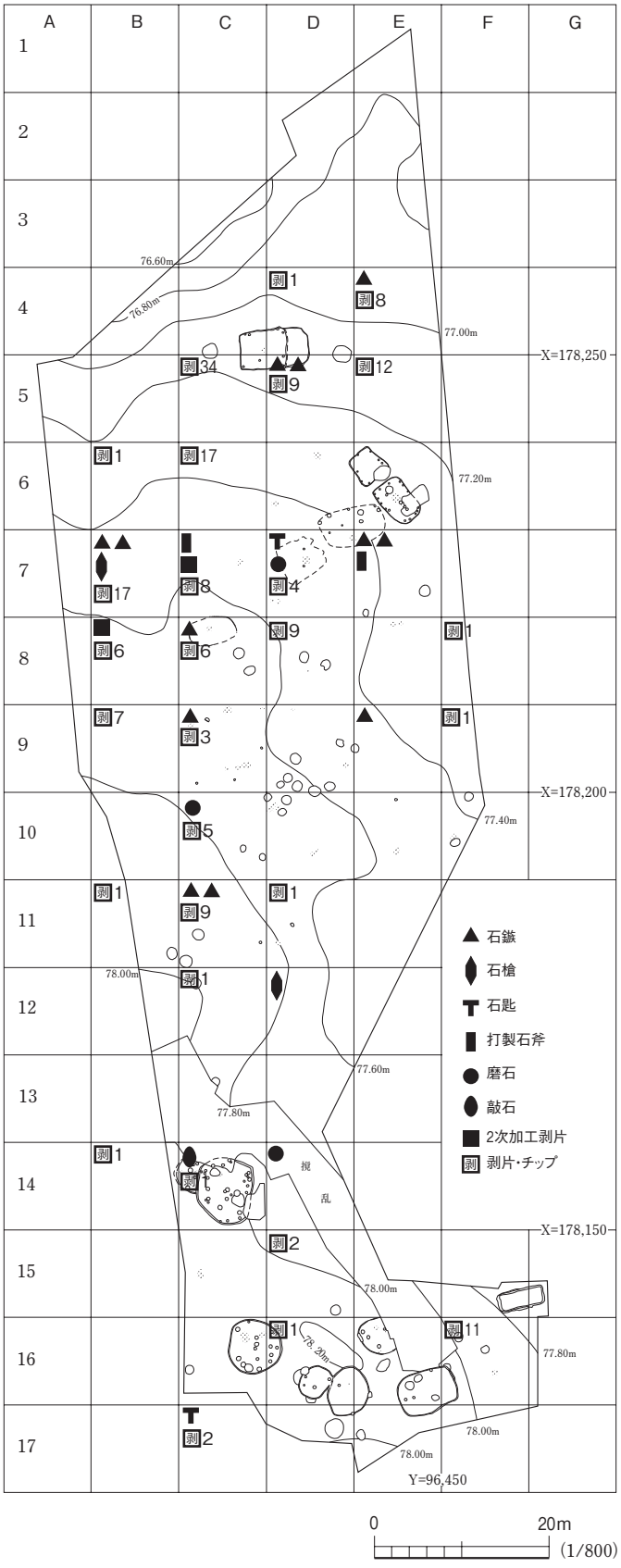


図47　遺構外出土石器分布図

最も多く，特に１類が約８割を占める。

１　類　地文に撚糸文を施すものである。口縁部は緩やかに外傾するものが多い。原体はＲ撚りのものが８割を占め，条間は密なものが多い。条間を３～５㎜空けたものも少量あり，その中には条を交差させたものが見られる。内面調整は条痕やナデ，擦痕状のものが見られる。条痕は，口縁部から胴部上半で横位方向に，胴部下半で縦位や斜位方向に施されている。調査区北側のＬⅢｂから，また，遺構内やＬＩなどからも多く出土している。第１節では本類を４種別しているが，遺構外からはｃ種に該当する遺物が確認されなかった。

ａ種　口唇部に刻目や圧痕を持つもので，図48－１・２・５・８が該当する。口縁部が外傾するものが多い。１・２は口唇部に刻目が，内面に横位方向の撚糸文が施されている。５は口唇部に貝殻圧痕文が，内面に斜位方向の撚糸文が施されている。８は，口唇部表面に先端の鋭利な施文具で，裏面に先端がささくれた角状の施文具で刺突文が施されている。

ｂ種　口唇部直下に横位方向の隆帯を施すもので，図48－３・４・６・７が該当する。３は口縁部が外反する。６の口唇部は撚糸文の後に刺突文が施され，内面は横位方向の条痕が施されている。４・７は口唇部が剥離しており，隆線上まで撚糸文が施されている。

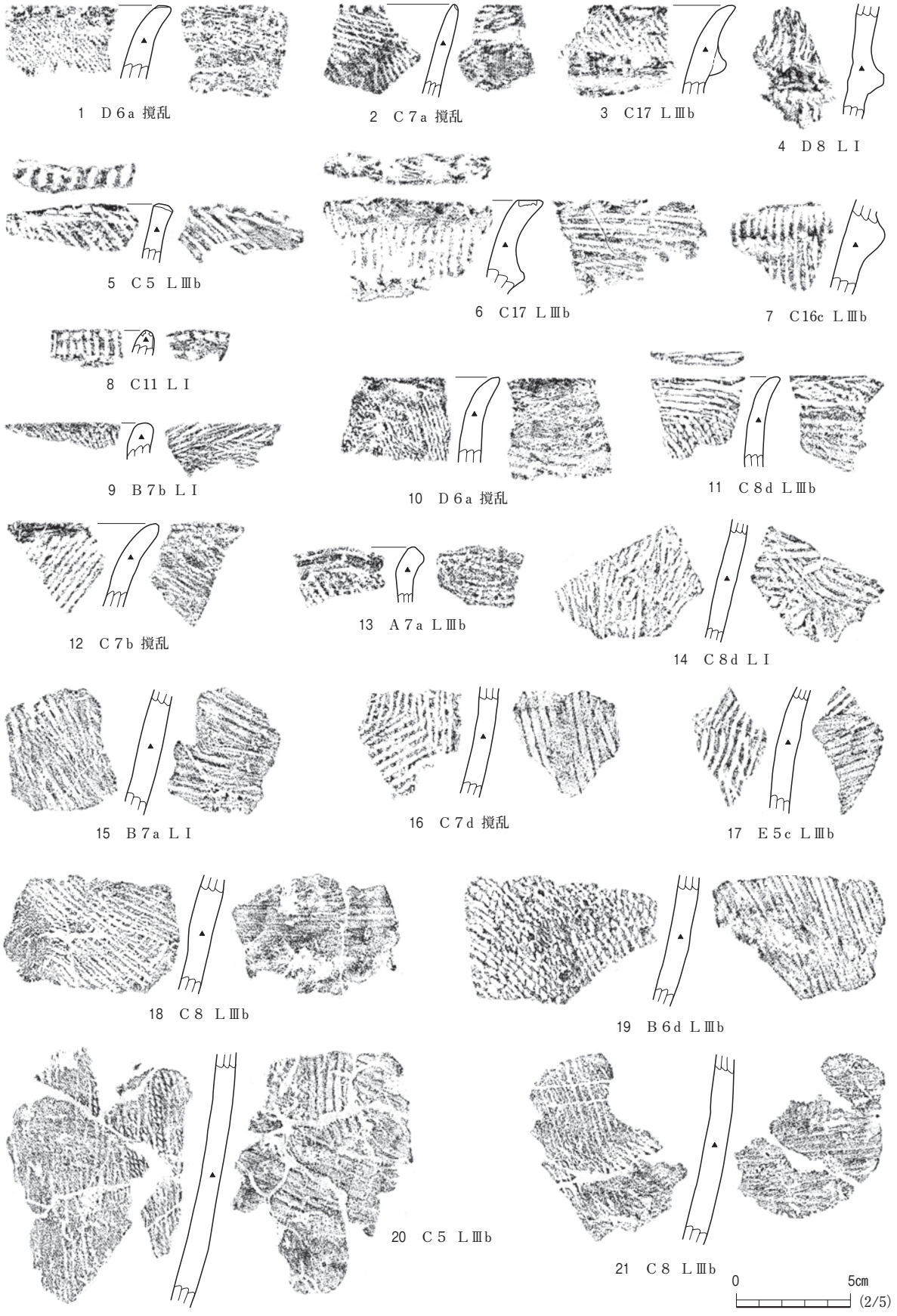


図48　遺構外出土遺物(1)

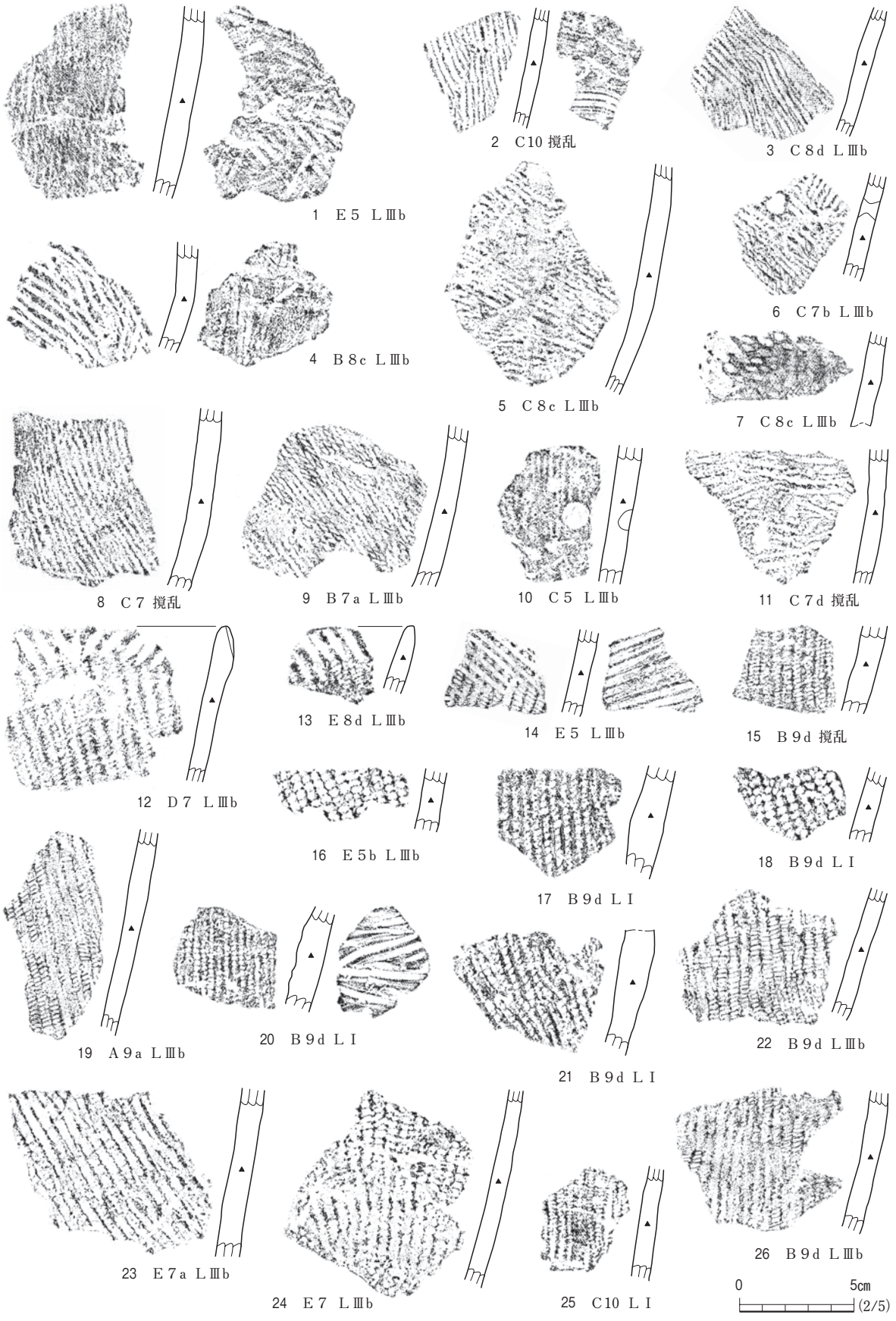


図 49　遺構外出土遺物(2)

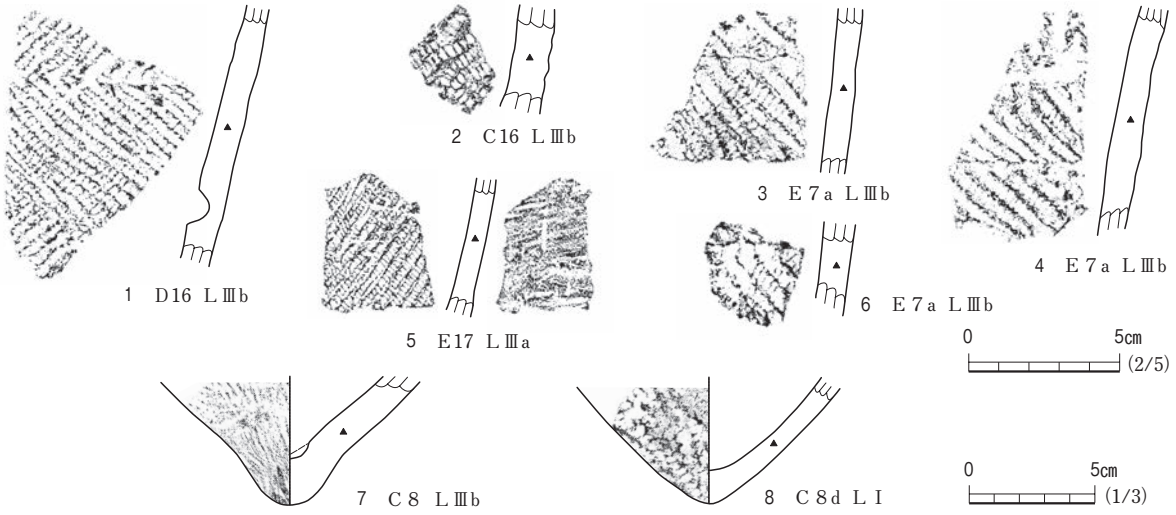


図50　遺構外出土遺物(3)

ｄ種　地文のみのものである。図48－９～21，図49－１～11，図50－７・８が該当する。図48－９～13は口縁部破片であり，９以外は外反する。内面には，横位や斜位方向に撚糸文が施されている。10は節の細かい撚糸文が施されている。11は，まず縦位方向に，次に口縁部に沿って横位方向に撚糸文が施されている。図49－１～11は胴部破片で，１・２・４の内面には横位方向や斜位方向の条痕がみられる。６・10には補修孔が見られるが，10は途中で放棄されている。７は幅４㎜前後の太い原体で施文されている。

２　類　地文に縦走縄文を施文するものである。地文に０段多条の縄文や単節縄文によって縦走する縄文を表出するものである。０段多条原体が使用されているものが約８割を占める。内面は条痕のものは少なく，ナデ調整や擦痕のあるものが多い。出土位置は，１類とほぼ同様に調査区北側のＬⅢｂから多く出土している。

ａ種　口縁端部に刻目を施すもので，図49－12・13が該当する。口縁部がやや外傾する器形である。口唇部に縦位や斜位方向の刺突文を施す。内面には横位方向の擦痕がみられる。

ｂ種　横位方向に沈線を施すもので，図49－14が該当する。半截竹管状工具によって平行沈線が施されている。

ｃ種　地文のみのもので，図49－15～26が該当する。いずれも単節縄文が斜位方向に施されている。15・19・22・23・25・26は０段多条の原体で施文されている。内面は，20に横位方向の条痕が見られるが，それ以外は概ねナデ調整である。

３　類　地文に斜縄文を施すもので，図50－１～６が該当する。出土量は少ない。原体は０段多条が約８割を占める。内面は条痕のものは少なく，ナデ調整や擦痕のあるものが多い。出土位置は，ａ種が調査区南側であるのに対し，ｂ種の多くは調査区北側である。

ａ種　羽状縄文を施すもので，図50－１・２が該当する。これらは，異なる撚りの単節縄文を横方向回転で施文することによって羽状縄文を表出している。

ｂ種　斜縄文を施すもので，図50－３～６が該当する。５は０段多条原体を用いて横位方向に施

文されており，内面は横位方向に浅い条痕が施されている。３・４・６は，縄文が器面に強く施文されている。胎土は，Ⅰ群１類や２類に比べ繊維の量が少ない。

４　類　底部資料である。図50－７・８が該当する。共に撚糸文が施され底部が尖底となる。

Ⅱ群土器

中期前葉の土器群で，図51・52，53－１～３・11～13・15が該当する。本遺跡では主体となる大木７ｂ式に，少数ながら関東系の阿玉台式が共伴して出土している。

１　類　大木７ｂ式に相当するもので，図51・52が該当する。土器は頸部から口縁部にかけて「く」の字状に括れ，口縁部が緩やかに外傾する深鉢土器が主体を占める。浅鉢土器は極めて少ない。胎土は雲母や白色砂粒を比較的多く含み，焼成は良好なものが多い。内面はミガキも見られるが，丁寧なナデ調整が施されたものが多い。地文は単節縄文が多く使用され，その上に部分的に結節回転文が施されたものも見られる。文様は，隆線と沈線が平行して描かれたものが多く，交互刺突文や刺突文が施されたものも見られる。縄圧痕文は刺突文に比べて少ない。Ⅱ群土器は，中期前葉の住居跡群が見られる調査区南側，Ｂ14・Ｆ16グリッドのＬⅢａからまとまって出土している。

ａ種　隆線文で区画し沈線を施すもので，隆線のみのものも含めた。図51－３・６，図52－１～４・６～８・11・16が該当する。図51－３は波状口縁を呈し，波頂部は楕円形の区画内に沈線が施されている。また，波頂部下に隆線が垂下する。同図６は波状口縁を呈し，口縁端部に沿って半截竹管による平行沈線が施文されている。図52－１は隆線と沈線で対弧線文が描かれ，その交点にボタン状の貼付文が取り付けられている。同図２・８・11は隆線が垂下するものである。同図３は横位方向の隆線に沿って平行沈線が施され，横帯楕円区画文が描かれており，区画文内には刺突文が施されている。同図６・７・16は隆線が施されたもので，６は楕円形の横帯区画文が描かれ，７は横位方向の隆線上に縄文が施されている。16は地文に，縦方向回転による縄文が間隔を空け浅目に施されている。また，焼成後に補修孔が穿たれている。

ｂ種　隆線で区画し縄圧痕文を施すもので，図51－１・８，図52－10・12が該当する。１は頸部が「く」の字状に括れ，胴部がやや膨らむ深鉢土器である。波状口縁を呈し，隆線が波頂部から垂下し，頸部では横位に巡る。また，隆線に沿って縄圧痕文が施されている。胴部には，波状口縁に対応したＹ字状の隆線が施されている。底部には網代痕が見られる。図51－８と図52－10は同一個体であり，頸部の横位隆線に沿って縄圧痕文が施されている。また，８には縦位方向の縄圧痕文が施される。図52－12は，横位の隆線に沿って縄圧痕文が施されている。

ｃ種　縄圧痕文を施すもので，図51－７・９・10が該当する。７は波状口縁を呈する小型の土器である。内外面共に丁寧なミガキ調整を行なっている。９・10は口縁端部に沿って縄圧痕文が施されている。

ｄ種　連続刺突文や交互刺突文を施すもので，図51－２のみが該当する。２は波状口縁を呈し，口縁端部に沿って隆線と沈線が施されている。頸部にも同様な横位の隆線が施され，その下側に「ハ」の字状の刺突が施されている。

ｅ種　沈線で文様を描くもので，図52－５・９が該当する。５は上部に楕円文が，下部に波線が描かれている。９は平行沈線が３条垂下するものである。

ｆ種　縄文のみのもので，図51－16，図52－13～15・17～19・21が該当する。単節縄文が縦方向回転で施文されたものが多い。図51－16は口縁部が内湾するもので，口縁端部に横方向回転の縄文が施されている。図52－14は結節縄文が縦位方向に施されている。同図18は縦方向回転で施文した羽状縄文である。同図21は無節縄文が施されている。

ｇ種　無文のものを一括した。図51－４・５・11～15，17～21，図52－20・22・23が該当する。図51－４・５・13・14は複合口縁で口縁部に無文帯を持ち，４・５・14は外側に，13は内側に折り返されている。同図11・12は口唇部に刻目が施されている。同図20・21は内面に丁寧なナデ調整が施されており，21の口縁部内面には段が見られる。図52－23は胴部が内湾する破片で，表面にはミガキ調整が施されている。図51－20・21，図52－23は器形や器面調整から浅鉢土器と考えられる。

２　類　阿玉台Ⅰａ式に相当するものである。出土量は少ない。第１節では本類を３種別したが，遺構外からはｂ種に該当する遺物は確認されていない。

ａ種　隆線で区画し有節沈線や刺突文を施すもので，図53－１・３が該当する。１は瘤状の隆線が垂下し，口縁端部に沿って有節沈線が施されている。３は半截竹管状工具を用いた連続刺突文が隆線に沿って施されている。阿玉台式の範疇に入るものと推測される。

ｃ種　有節沈線を施すもので，図53－２に該当する。波状口縁を呈し，波頂部には刻目が，口縁端部に沿って有節沈線が施されている。

３　類　底部資料を一括したもので，図53－11～13・15が該当する。11は底面に網代の痕跡が見られ，その底径から比較的小型の土器と考えられる。12・13・15は無文で，丁寧なナデ調整が施されている。

Ⅲ群土器

縄文中期後葉～晩期の土器を一括した。図53－４～10・14が該当する。出土量は極めて少ない。そのほとんどがＬＩから出土したものである。

１　類　大木９式に相当するもので，図53－４が該当する。調査区内からは１点のみ出土した。口縁部が内湾する破片で，横位の太沈線が施され段が見られる。

２　類　縄文後期前葉に相当するもので，調査区内からは２点が出土した。図53－５が該当する。沈線文が施され，縄文地文が磨消されている部分も見られる。

３　類　縄文晩期に相当するもので，図53－６～10が該当する。全て半精製あるいは粗製土器であるが，概ね晩期中葉～後葉頃と思われる。６は網目状撚糸文が縦方向回転で施文され，下側には単節縄文が施されている。７・８は単節縄文を地文とするものである。９・10は，網目状撚糸文が縦方向回転で施された胴部破片である。

４　類　底部資料である。図53－14が該当する。14は単節縄文を地文にもつ。

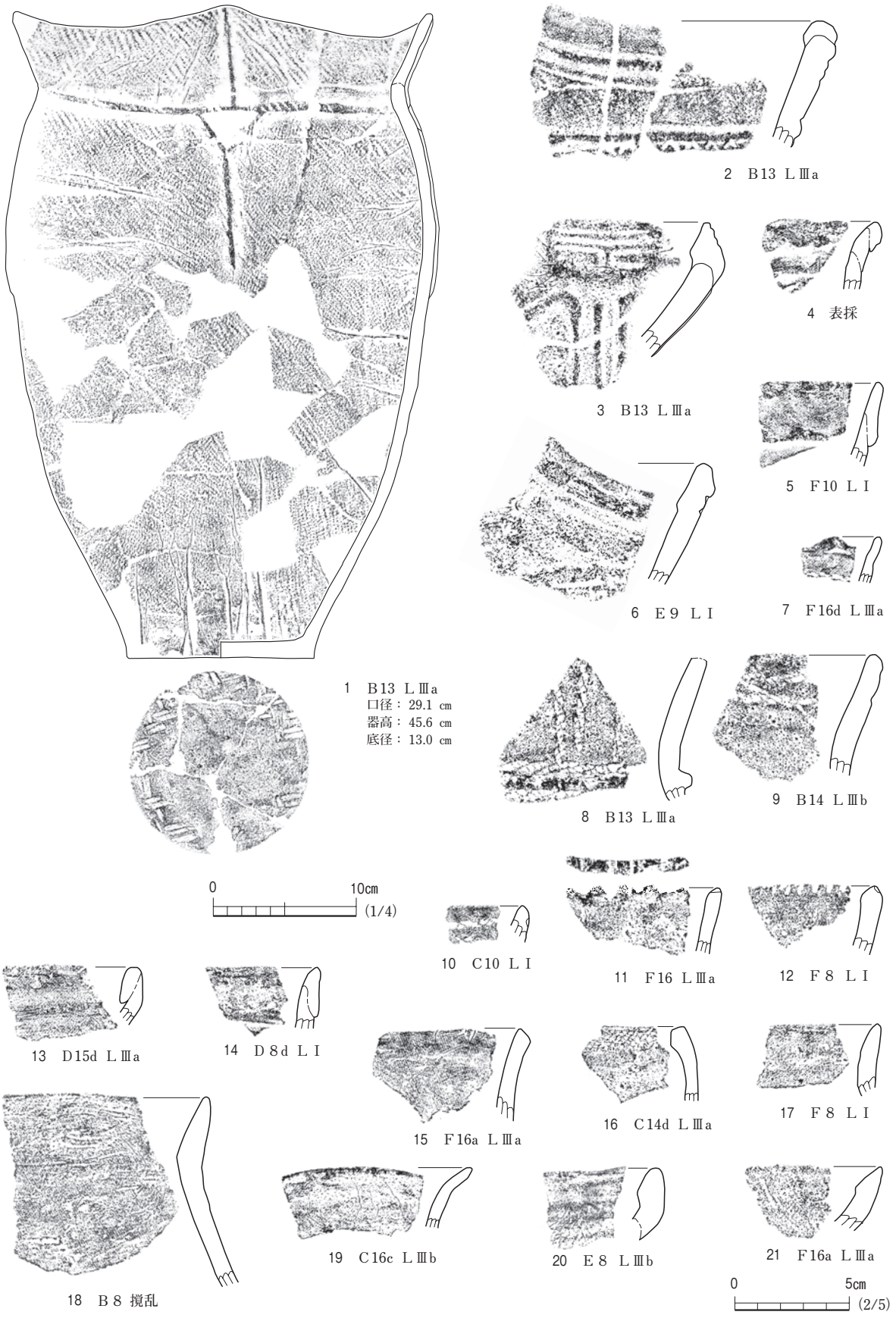


図51　遺構外出土遺物(4)

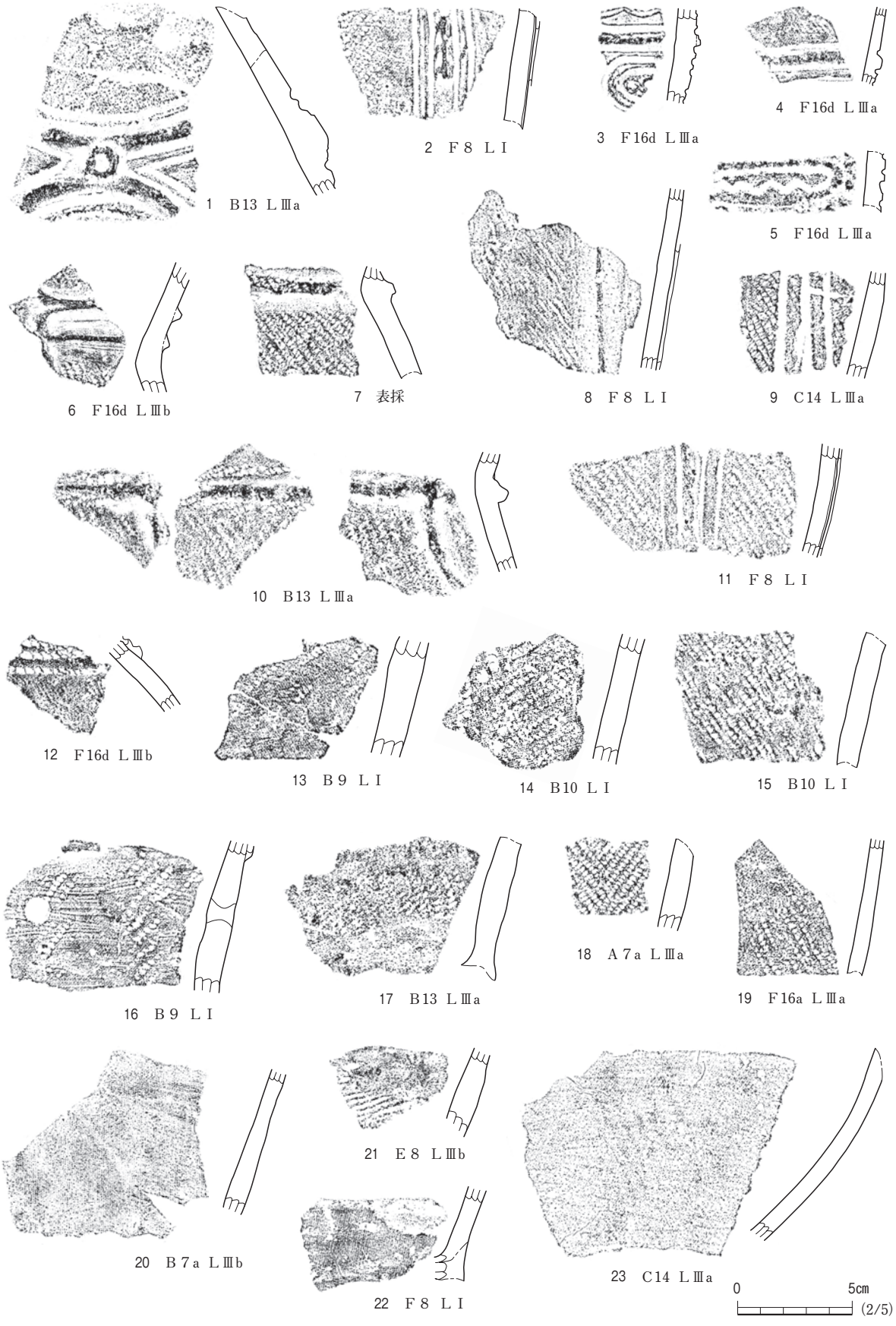
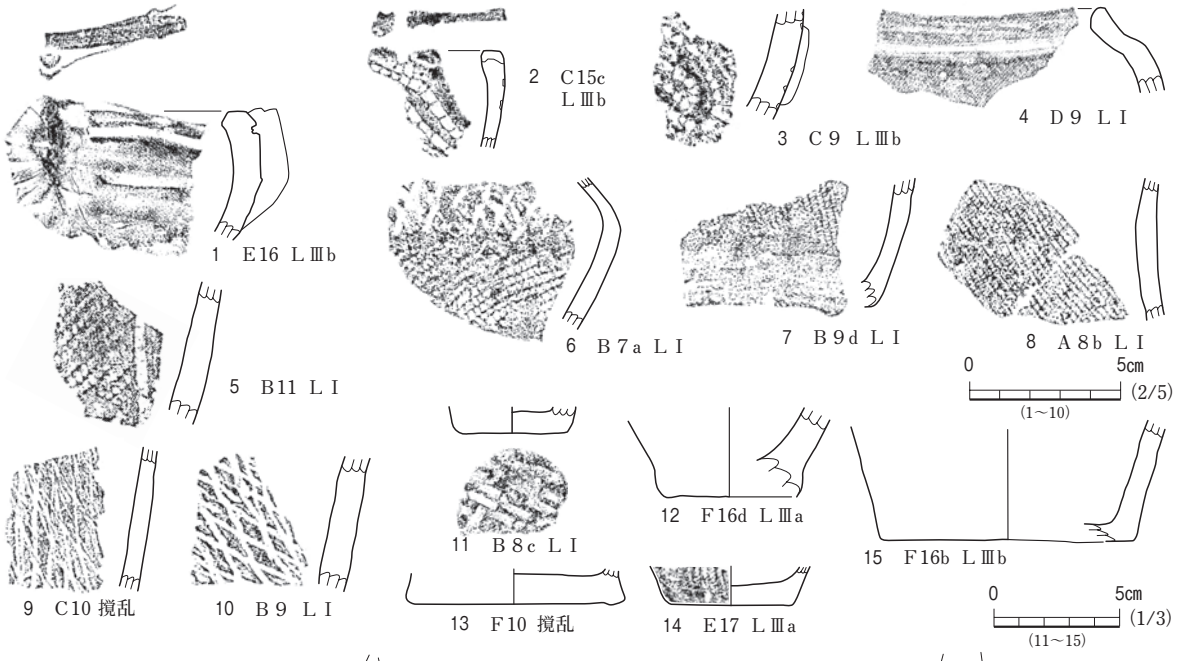


図52　遺構外出土遺物(5)



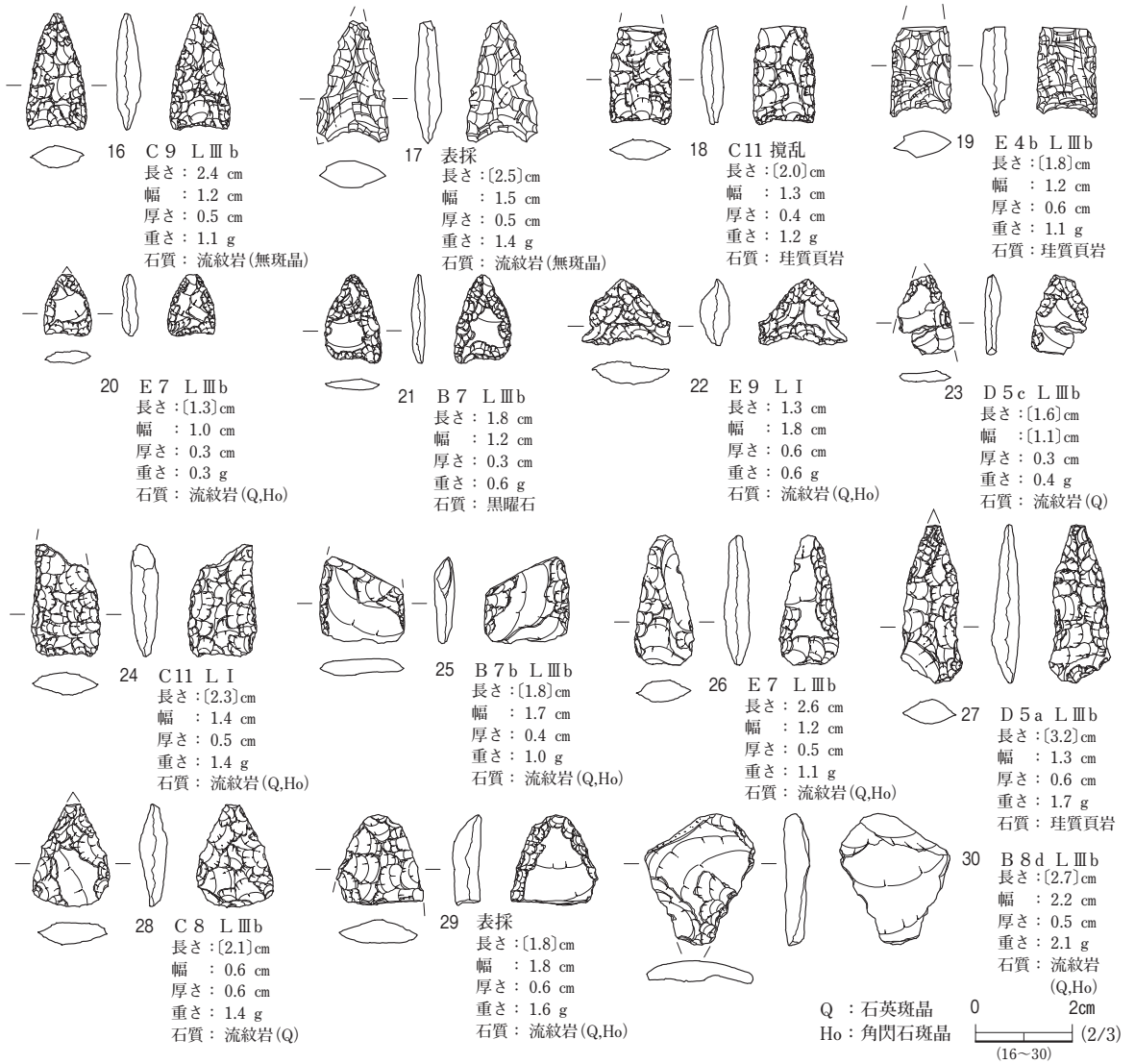


図53　遺構外出土遺物(6)

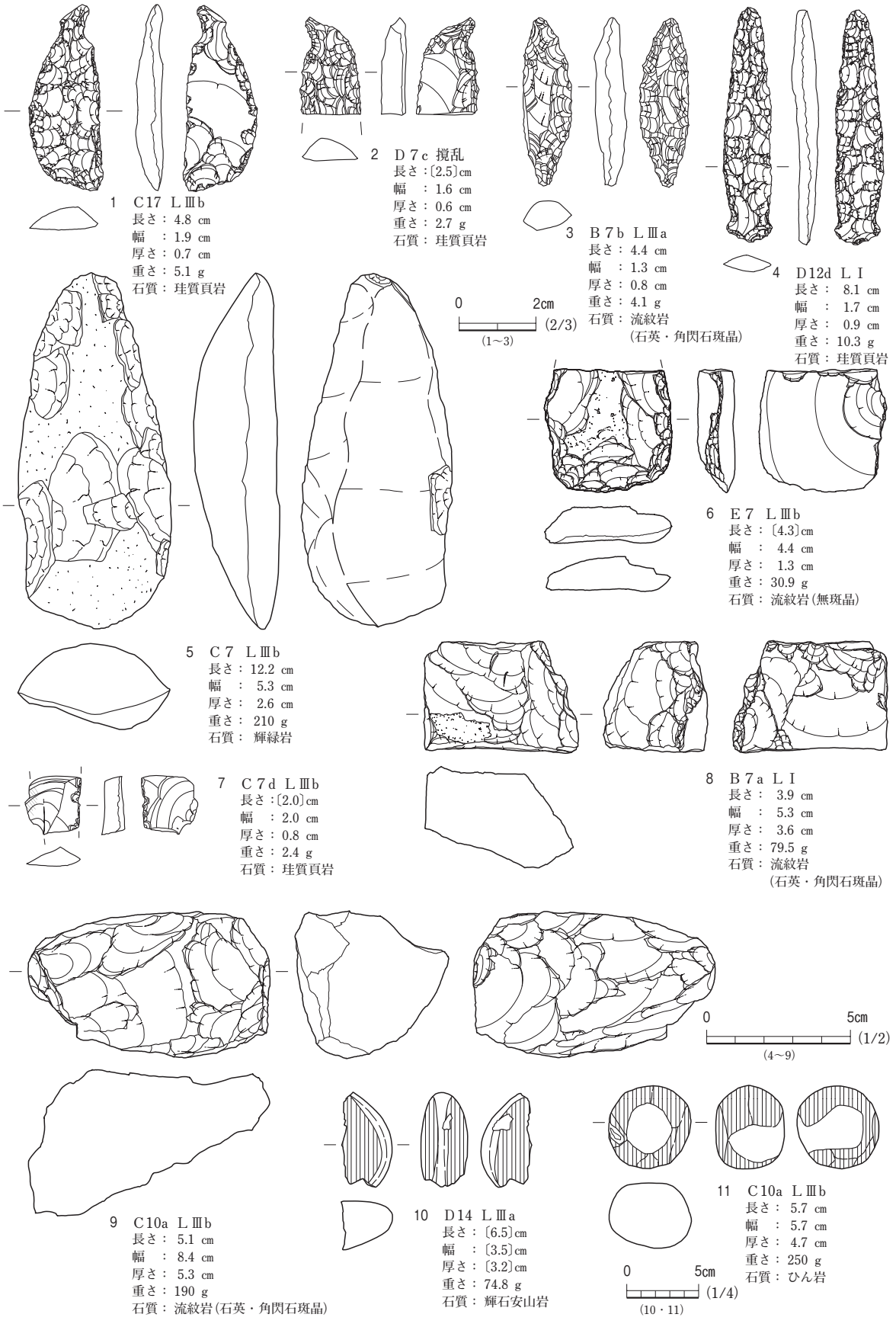


図 54　遺構外出土遺物(7)

石　　器(図47，図53～55，写真59・60)

出土石器の内訳は，製品や２次加工されたものが30点，剥片・チップ類が195点である。特に，調査区北側の縄文早期末葉の住居跡群周辺から多く出土している。

石　鏃　出土石器の中で最も多く，図53－16～29が該当する。16～22は基部の抉りが浅い凹基鏃である。このうち17～20は先端部が欠損している。20～22は小型の石鏃であり，22は鏃身が厚く不整形である。23～26は平基鏃である。23は先端部と基部の一部が欠損し，24・25は先端部が欠損している。25は基部が無加工で側縁部のみに調整が施されている。26・27は細身の石鏃で，26の側縁には無調整部分が見られる。27は胴部が僅かに括れ，基部に向かって鏃身がやや広がる。28は円基鏃である。29は基部が失われているため，その形状が不明である。裏面には側縁部のみに調整が見られる。

石　錐　図53－30と図54－３が該当する。図53－30は表面の両側縁に調整剥離が施され，基部と裏面は無調整である。形状や調整から石錐のつまみ部と考えている。図54－３は一側縁部に厚みが残るため調整が施されていない。この厚さから石鏃には含めなかった。

石　匙　図54－１・２が該当する。縦型の石匙であり，裏面に比べ表面に丁寧な調整剥離が施されている。

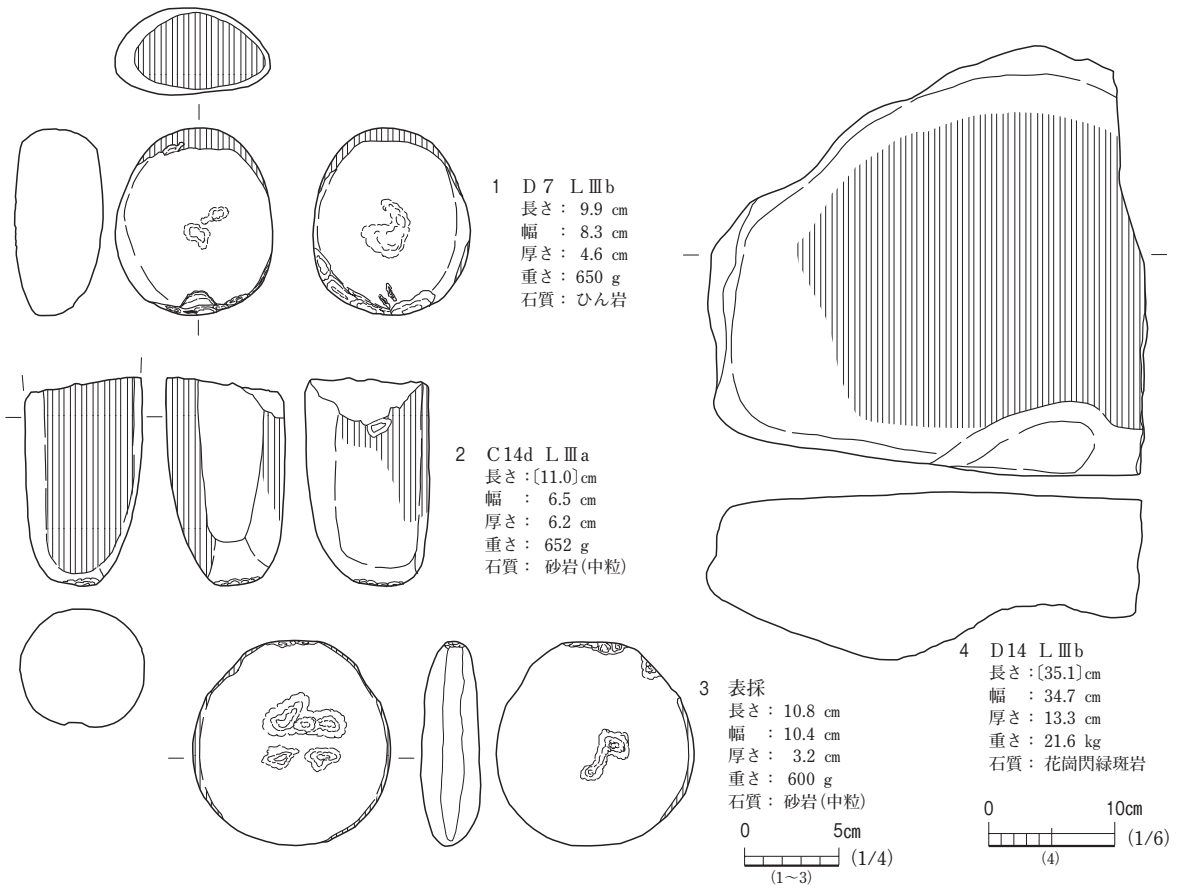


図55　遺構外出土遺物(8)

石　槍　図54－４が該当する。４は細身で長く，つまみ状の基部をもつ。

打製石斧　図54－５・６が該当する。５は表面の側縁部に調整が集中し，裏面は無調整に近い。刃部は自然面を使用したものと考えられる。６は欠損品で，表面には粗い調整が施されているが，裏面にはほとんど調整が見られない。

２次加工剥片　図54－７が該当する。７は上下の両端を欠損しているが，一側縁部に表裏面からの微細な調整剥離がみられる。

石　核　図54－８・９が該当する。いずれも各方向から剥片を採取した痕跡が確認される。８は大きさや形状から，これ以上剥片を取ることが難しいため残核と考えられる。

磨石・凹石・敲石　図54－10・11，図55－１～３が該当する。図54－10は磨石の破片資料で，表裏面に磨面が認められる。同図11は球状の磨石で，表裏面に多数の磨面が形成されている。図55－１は凹石で下部側面に敲打痕があり，上部側面には粗い磨面が形成されている。同図２は上半部が欠損する磨石で，両側面部に磨面，下端部に敲打痕が見られる。同図３は凹石で，表裏面の中央に凹部が見られる他，側面部には磨面，上端部には敲打痕が認められる。

石　皿　図54－４は大型の石皿で，表面に磨面が形成されている。また，裏面は粗い調整が施されており，安定して置けるように整形したものと考えられる。　（佐　藤）

第３章　自然科学分析

第１節　赤色顔料の蛍光Ｘ線分析

小林　啓（福島県文化振興事業団）

１．はじめに

縄文時代に使用されていた赤色顔料はベンガラ（Fe_2O_3）と水銀朱（HgS）の２種類であり，各々その発色原因となる金属元素が異なる。土器に付着した赤色顔料の種類を明らかにするため，Ｘ線分析顕微鏡（エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置）による元素定性を行った。

２．試料

縄文土器片１点。（図22－２，縄文中期前葉の所産）文化財の分析は非破壊を原則とするため，分析用サンプルは採取せず土器そのものを分析した。

３．方法

試料の元素分析はＸ線分析顕微鏡を用いて以下の条件により行った。

【分析条件】Ｘ線分析顕微鏡（堀場製作所製XGT-2700），Ｘ線管球：ロジウム（Rh），検出器：半導体検出器，測定雰囲気：大気，管電圧：50kv，管電流：1.0ｍA，分析径：100μm，測定時間：120秒

４．結果

分析の結果，赤色顔料が付着する箇所から鉄（Fe）が顕著に検出された。（図56）鉄（Fe）の検出は，

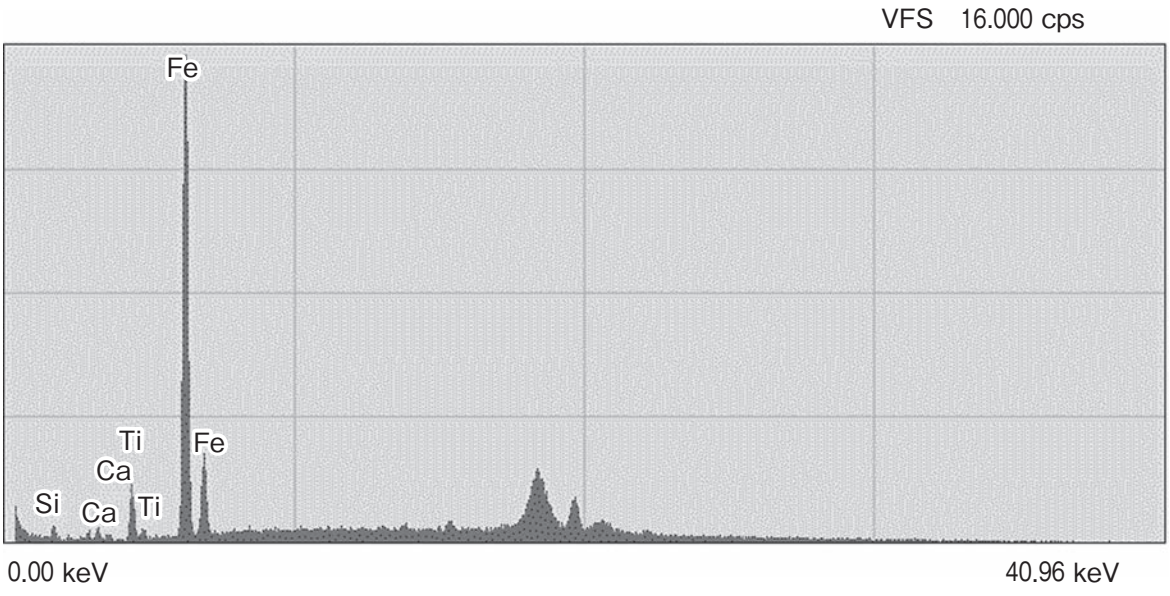


図56　赤彩土器のＸ線スペクトル

土器本体より顔料付着箇所において優位である。また，いずれの分析箇所からも水銀(Hg)が検出されないことから，付着する顔料は鉄由来の赤色顔料「ベンガラ」である可能性が高い。今後，顕微鏡観察による赤色顔料の粒形確認やＸ線回折分析による結晶構造の解析などが望まれる。

参考文献

成瀬正和1988「薄磯貝塚出土の赤色顔料関係遺物」『薄磯貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第19冊
松井敏也ほか1998「赤色顔料成分分析」『桜井古墳群上渋佐支群７号墳』原町市埋蔵文化財報告書第27集

第２節　出土石器石質鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．はじめに

常磐自動車道相馬工区の建設に伴う遺跡発掘調査で，原Ｂ遺跡からは縄文時代の各種の遺構や遺構外より石器が多数出土している。

本報告では，これらの石器類を対象として肉眼による石質鑑定を行い，器種と岩種の関係や，石材の産地について検討する。

２．試料

今回鑑定した石器は原Ｂ遺跡出土試料73点である。各試料の遺物番号，種別，出土位置，層位等の詳細は，表２に示す。

３．分析方法

当社技師１名が平成19年３月13日，財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部遺跡調査グループにおいて実施した。野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し，五十嵐(2006)に示される分類基準に従って肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。

４．結果

肉眼鑑定による結果を表２に示す。本遺跡における石材組成は円グラフとして図57に示す。器種および岩種についての集計結果は表３に示した。

原Ｂ遺跡においては，石器原石として火山岩類がもっとも多く使用され，流紋岩と黒曜石が合計34試料，次いで珪質頁岩が20点を占める。この３岩種の合計は54試料で今回調査した試料(73試料)の74.0％となる。

表２　出土石器一覧表

遺物番号	種別	出土位置	層位	石質	備考
1	石鏃	Ｂ７	ＬⅢｂ	黒曜石	
2	石鏃	Ｅ７	ＬⅢｂ	流紋岩	石英・角閃石含む
3	石鏃	Ｅ７	ＬⅢｂ	流紋岩	石英・角閃石含む
4	石鏃	Ｅ９	ＬⅠ	流紋岩	石英・角閃石含む
5	石鏃(欠)	Ｃ11	ＬⅠ	流紋岩	石英・角閃石含む
6	石鏃(欠)	Ｃ11	撹乱	珪質頁岩	
7	石鏃	Ｄ５ａ	ＬⅢｂ	珪質頁岩	
8	石鏃(欠)	Ｄ５ｃ	ＬⅢｂ	流紋岩	石英含む
9	石鏃	Ｃ８	ＬⅢｂ	流紋岩	石英含む
10	石鏃	Ｃ９	ＬⅢｂ	流紋岩	無斑晶
11	石鏃	ＳＩ04	床面	珪質頁岩	
12	石鏃	ＳＩ05	ℓ４	流紋岩	石英・角閃石含む
13	石鏃	ＳＩ05	ℓ４	黒曜石	
14	石鏃	ＳＩ07	ℓ１	珪質頁岩	
15	石鏃	ＳＩ07	ℓ１	流紋岩	石英・角閃石含む
16	石鏃	ＳＩ07	ℓ１	流紋岩	石英・角閃石含む
17	石鏃	ＳＩ07	ℓ１	流紋岩	石英・角閃石含む
18	石鏃	ＳＩ07	ℓ１	流紋岩	石英・角閃石含む
19	石鏃	ＳＩ09	ℓ４	珪質頁岩	
20	石鏃	ＳＩ13	ℓ１	流紋岩	石英含む
21	石鏃	ＳＫ34	ℓ３	流紋岩	石英含む
22	石鏃(欠)		表採	流紋岩	石英・角閃石含む
23	２次加工剥片	ＳＩ05	ℓ４	珪質頁岩	
24	石槍	Ｄ12ｄ	ＬⅠ	珪質頁岩	
25	石匙	ＳＩ05	ℓ３	流紋岩	無斑晶
26	石匙	ＳＩ05	ℓ４	珪質頁岩	
27	石匙	ＳＩ07	ℓ１	珪質頁岩	
28	石匙	Ｃ17	ＬⅢｂ	珪質頁岩	
29	石錐	ＳＩ13	ℓ１	流紋岩	縞状
30	２次加工剥片	ＳＩ13	ℓ１	珪質頁岩	
31	２次加工剥片	ＳＩ10	ℓ１	珪質頁岩	
32	石核	ＳＩ07	ℓ１	珪質頁岩	
33	石核	Ｂ７ａ	ＬⅠ	流紋岩	石英・角閃石含む
34	石核	ＳＩ05	ℓ４	流紋岩	流状
35	石核	ＳＩ01	ℓ１	流紋岩	石英・角閃石含む
36	石核	Ｃ10ａ	ＬⅢｂ	流紋岩	石英・角閃石含む
37	石鏃(欠)	Ｂ７ｂ	ＬⅢｂ	流紋岩	石英・角閃石含む

遺物番号	種別	出土位置	層位	石質	備考
38	石錐(欠)	Ｂ８ｄ	ＬⅢｂ	流紋岩	石英・角閃石含む
39	打製石斧	Ｅ７	ＬⅢｂ	流紋岩	無斑晶
40	２次加工剥片	ＳＧ03	検出面	珪質頁岩	
41	石鏃	ＳＩ01	ℓ１	流紋岩	石英・角閃石含む
42	石鏃		表採	流紋岩	無斑晶
43	石鏃(欠)	Ｅ４ｂ	ＬⅢｂ	珪質頁岩	
44	石錐	Ｂ７ｂ	ＬⅢａ	流紋岩	石英・角閃石含む
45	石槍	ＳＫ01	検出面	珪質頁岩	
46	石匙	ＳＫ02	ℓ１	珪質頁岩	
47	石匙(欠)	Ｄ７ｃ	撹乱	珪質頁岩	
48	磨製石斧	ＳＩ01	ℓ１	輝緑岩	
49	打製石斧	ＳＩ02	撹乱	輝緑岩	細粒
50	打製石斧	ＳＩ05	ℓ４	ひん岩	角閃石含む
51	磨製石斧	ＳＩ10	ℓ１	流紋岩	無斑晶
52	打製石斧	Ｃ７	ＬⅢｂ	輝緑岩	
53	石核	ＳＩ05	ℓ４	流紋岩	石英含む
54	磨石	Ｄ７	ＬⅢｂ	ひん岩	
55	磨石	ＳＩ11	ℓ１	輝石安山岩	
56	磨石	ＳＩ12 ＳＩ13	ℓ１ ℓ１	砂岩	粗粒
57	磨石	ＳＩ13	ℓ１	砂岩	中粒
58	石皿	ＳＩ13	ℓ１	砂岩	粗粒
59	磨石	ＳＫ01	ℓ１	流紋岩	石英・角閃石含む
60	磨石	ＳＫ34	ℓ３	黒雲母花崗岩	
61	磨石	Ｄ14	ＬⅢａ	輝石安山岩	
62	敲石	Ｃ14ｄ	ＬⅢａ	砂岩	中粒
63	磨石	Ｃ10ａ	ＬⅢｂ	ひん岩	
64	凹石		表採	砂岩	中粒
65	石皿(欠)	ＳＩ05	床直	流紋岩	流状
66	石皿(欠)	ＳＩ11	ℓ１	花崗閃緑岩	
67	石皿(欠)	ＳＩ12	ℓ１	花崗斑岩	
68	石皿(欠)	ＳＩ13	ℓ１	安山岩	ガラス質
69	石皿(欠)	ＳＩ13	ℓ１	安山岩	ガラス質
70	石皿	Ｄ14	ＬⅢｂ	花崗閃緑斑岩	
71	２次加工剥片	ＳＩ07	ℓ２	流紋岩	流状
72	２次加工剥片	ＳＩ07	ℓ１	珪質頁岩	
73	２次加工剥片	Ｃ７ｄ	ＬⅢｂ	珪質頁岩	

５．考察

(１)地質の概要

原Ｂ遺跡は阿武隈山地の東縁に位置する南相馬市原町市街の西郊丘陵にある。本地域の西方には阿武隈山地東縁を構成する先デボン系から完新統まで幅広い地質系統が分布している。大局的には遺跡西方約１～２㎞を南北に走る双葉断層を境に西側に中・古生界，東側には一部に中生界，大部分は新生界が分布する。当地方の中・古生界は双葉断層とさらにその西方約８㎞を双葉断層と平行に走る畑川破砕帯に挟まれ，この地帯に分布する変成岩類や堆積岩類は岩質的な特徴から南部北上帯からの延長部と考えられている。

１)双葉断層以西の中・古生界

畑川破砕帯と双葉断層に挟まれた地域には苦鉄質変成岩を主とする助常変成岩類,泥質岩･砂岩・石灰岩よりなる相馬古生層，下部白亜系とみなされる流紋岩質の火砕流堆積物，安山岩溶岩とデイ

サイト溶岩で構成される高倉層および白亜紀前期の貫入とされる中－粗粒黒雲母花崗岩体と中粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩体が分布する。

２）双葉断層以東の中生界（相馬中村層群）

双葉断層の東側に沿って分布し，もっとも厚い部分で約３㎞の幅を示すが，大谷地付近以南には露出していない。相馬中村層群はジュラ紀-白亜紀に堆積した地層で，７層から構成されるが，久保ら（1990）によると赤柴地域では上位４層の栃窪層・中の沢層・富沢層・小山田層が露出する。栃窪層・中の沢層・富沢層はいずれも砂岩優勢の堆積層で，アルコース質の砂岩に富み，一部に頁岩を挟在する。地域北方の小池に露出する中の沢層の上部には「鳥の巣型石灰岩」の小池石灰岩が存在するが，当地域では欠如している。

相馬中村層群の最上部の小山田層は海成黒色頁岩で構成される地層である。

３）新生界

中新統・鮮新統で構成される新第三系とこれを覆って第四系が分布している。新第三系はおもに双葉断層の西側に分布する中新統の名取層群塩手層と天明山層，および双葉断層東側に分布する鮮新統の仙台層群亀岡層，辰の口層，向山層および大年寺層が堆積している。

久保ら（1990）によると本地方に分布する地層の主な構成物は次のとおりである。最下部層の亀岡層は青灰色の泥岩を主とし，亜炭層と酸性凝灰岩層を挟在する。竜の口層は貝化石を含む塊状の泥岩，向山層は礫岩・砂岩・泥岩・亜炭および凝灰岩で構成され，本層の一部の石英質砂岩相は珪砂として採掘された。大年寺層は，下部は砂岩，上部は泥岩で構成される。

第四紀は高位－低位段丘堆積物として海岸に近い丘陵地に広く堆積している。

（２）原Ｂ遺跡

１）岩種と器種の関係

石鏃には流紋岩が最も多く使用されて18点，次いで珪質頁岩６点および黒曜石が２点用いられる。いずれも堅硬緻密な岩質を有している。

石匙・石錐・石槍はいずれも石鏃と同じで流紋岩と珪質頁岩が使用される。石匙は全６試料中の５点が珪質頁岩，石錐は逆に全３試料が流紋岩である。石槍は２試料で珪質頁岩である。２次加工剥片と石核にも流紋岩と珪質頁岩がみられる。２次加工剥片は全７試料中６試料が珪質頁岩で１試料が流紋岩，石核では全６試料中の５点が流紋岩で１試料が珪質頁岩となっている。石鏃・石匙・石錐・石槍・石核・２次加工剥片の岩種構成は図57に示されるとおりであり，流紋岩および珪質頁岩が大部分を占める。

これら石器に使用されている流紋岩は次の５種に細区分される。（１）黒曜石：流紋岩のガラス岩が黒曜石である。２試料検出され，石鏃に用いられている。（２）無斑晶流紋岩：白色緻密質で堅硬な岩質を示す。全部で５試料が検出されている。石鏃に２点，石匙，磨製石斧および打製石斧各１点に使用されている。（３）石英斑晶を有する流紋岩：基質は無斑晶流紋岩と類似し，堅硬緻密質である。石鏃に４試料用いられるほかに，石核１点に認められた。（４）石英・角閃石斑晶を含む流紋

表３　出土石器の器種－岩種表

		石鏃	石匙	石錐	石槍	磨製石斧	打製石斧	石核	石皿	２次加工剥片	敲石	磨石	凹石	計
堆積岩類	珪質頁岩	6	5	0	2			1		6				20
	砂岩								1		1	2	1	5
火山岩類	黒曜石	2												2
	流紋岩	18	1	3	0	1	1	5	1	1		1		32
	安山岩								2			2		4
半深成岩類	花崗斑岩								2					2
	ひん岩						1					2		3
	輝緑岩					1	2							3
深成岩類	花崗岩											1		1
	花崗閃緑岩								1					1
計		26	6	3	2	2	4	6	7	7	1	8	1	73

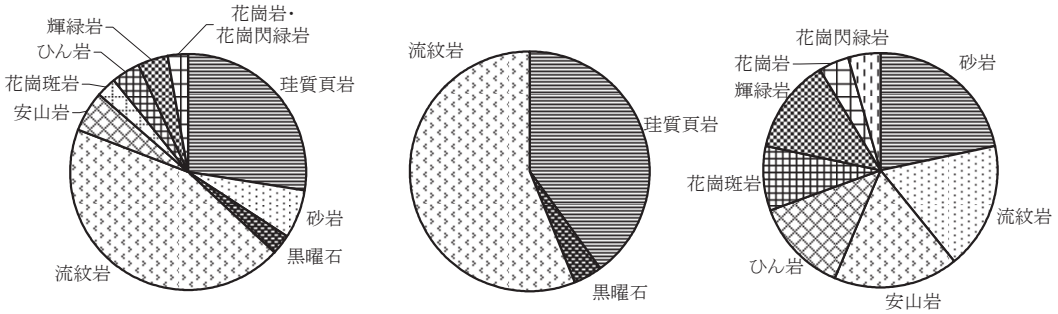


図57　出土石器の岩種構成

岩：石英と角閃石の斑晶が明瞭に認められる流紋岩。前記石英斑晶を有する流紋岩中にも微晶の角閃石が認められることからこの両岩は互いに漸移する関係にある可能性がある。12試料が石鏃に，３試料が石核として検出されている。(５)縞状の流状組織を有するガラス質流紋岩。４点検出され，石錐１点，石皿１点，２次加工剥片および石核１点である。

石鏃・石匙・石錐・石槍・石核・２次加工剥片が珪質頁岩と流紋岩を用いているのに対し，石斧・石皿・磨石は前者とは異なる岩種の組み合わせがみられる(図57)。

磨製石斧は全２試料のうち１試料が輝緑岩，１試料は無斑晶流紋岩と判定された。打製石斧はひん岩・無斑晶流紋岩が各１試料，輝緑岩が２試料認められた。

石皿はガラス質安山岩が２試料見られるほかは，粗粒砂岩・花崗斑岩・花崗閃緑斑岩・花崗閃緑岩・流状組織を示す流紋岩を原料とする。

敲石は中粒砂岩，磨石は輝石安山岩・ひん岩が各２点，粗粒砂岩と中粒砂岩・黒雲母花崗岩および石英・角閃石斑晶を含む流紋岩が各１試料と認められた。凹石１試料は中粒砂岩と判定される。

２)岩石の産地推定

遺跡が分布する地域は阿武隈山地の東縁にあり，阿武隈山地の岩石が在地性の原料として供給されやすい環境にあるが，阿武隈山地の岩石と認識されるものは少ない。

ａ）異地性の岩石

珪質頁岩，黒曜石，流紋岩は54試料で調査を行った試料の74.0％を占める。これらはいずれも原町地域には産地が見られない岩種である。ここで，相馬中村層の最上部にある小山田層は黒色頁岩を主とするが，しばしば珪質頁岩を挟在する。しかし，本遺跡から出土する珪質頁岩とは岩相を異にする。出土した珪質頁岩は新第三系中新世に産し，硬質頁岩あるいは硬質泥岩・珪質泥岩とも呼ばれる岩石である。秋田県の女川層，山形県の草薙層，新潟県の七谷層およびその相当層に広汎に分布し，その産地を特定することはできない。また，流紋岩については，郡山市北西の高玉地域，福島市飯坂地域から宮城県刈田郡七ヶ宿町にかけての地域，および，宮城県白石市などにその分布が知られている。また，石斧に使用されている輝緑岩は阿武隈山地にも産する岩石であるが，搬入されることの多い器種であり，その判定は難しい。

ｂ）在地性の岩石

遺跡群の東方には阿武隈山地を形成する変成岩類・花崗岩類・中・古生層・斑れい岩等が分布する。これらの岩石は小型の精巧な石器に使用されることは少なく，比較的大型の石器に使用される。石皿・敲石・磨石・凹石に用いられている砂岩・安山岩・ひん岩・花崗岩・花崗閃緑岩はいずれも双葉断層西側の阿武隈山地に産する在地性の岩石と判定される。

引用文献

久保和也・柳沢幸夫・吉岡敏和・山元孝広・滝沢文教，1990，原町及び大甕地域の地質，地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）．地質調査所，155p.

柳沢幸夫・山元孝広・坂野靖行・田沢純一・吉岡敏和・久保和也・滝沢文教，1996，相馬中村地域の地質，地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）．地質調査所，144p.

五十嵐俊雄，1986，福島県相馬地区の粘土鉱床，陶磁器原料資源調査報告書（昭和60年度）．工業技術院地質調査所，p.41-56.

五十嵐俊雄，2006，考古資料の岩石学．パリノ・サーヴェイ株式会社，194p.

第３節　炭化材の樹種同定

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，解剖学的形質から，概ね属レベルの同定が可能である。木材は，花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから，比較的近隣の森林植生の推定が可能であり，遺跡から出土したものについては，木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

表４　樹種同定結果

番号	資料番号	遺構	出土地点・層位	種別	備考	結果(学名／和名)	
1	ＦＢ2006.Ｈ01	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№２	*Hovenia*	ケンポナシ属
2	ＦＢ2006.Ｈ02	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№３	*Hovenia*	ケンポナシ属
3	ＦＢ2006.Ｈ03	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№４	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
4	ＦＢ2006.Ｈ04	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№５	*Hovenia*	ケンポナシ属
5	ＦＢ2006.Ｈ05	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№６	*Hovenia*	ケンポナシ属
6	ＦＢ2006.Ｈ06	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№７	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
7	ＦＢ2006.Ｈ07	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№８	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
8	ＦＢ2006.Ｈ08	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№９	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
9	ＦＢ2006.Ｈ09	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№10	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
10	ＦＢ2006.Ｈ10	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№12	*Hovenia*	ケンポナシ属
11	ＦＢ2006.Ｈ11	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№16	*Hovenia*	ケンポナシ属
12	ＦＢ2006.Ｈ12	ＳＩ08	ℓ３	炭化材	№19	*Hovenia*	ケンポナシ属

２．試料

試料は，縄文時代中期前葉の焼失した住居跡(８号住居跡)より出土した，柱，屋根等の住居の構築材と考えられる炭化材12点である。

３．方法

試料を割折して新鮮な横断面(木口と同義)，放射断面(柾目と同義)，接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し，落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は，解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

結果を表４に示し，主要な分類群の顕微鏡写真を図58に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図58－１

横断面：年輪のはじめに大型の道管が，数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が，火炎状に配列する。早材から晩材にかけて，道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で，通常高さ20ｍ，径40㎝ぐらいであるが，大きいものは高さ30ｍ，径２ｍに達する。耐朽性が強く，水湿によく耐え，保存性の極めて高い材で，現在では建築，家具，器具，土木，船舶，彫刻，薪炭，椎茸ほだ木など広く用いられる。

ケンポナシ属　*Hovenia*　クロウメモドキ科　図58－２・３

横断面：大型で厚壁の丸い道管が，単独あるいは２～３個放射方向に複合して配列する環孔材である。晩材部では小型で厚壁の道管が単独あるいは放射方向に２～３個複合してまばらに散在する。

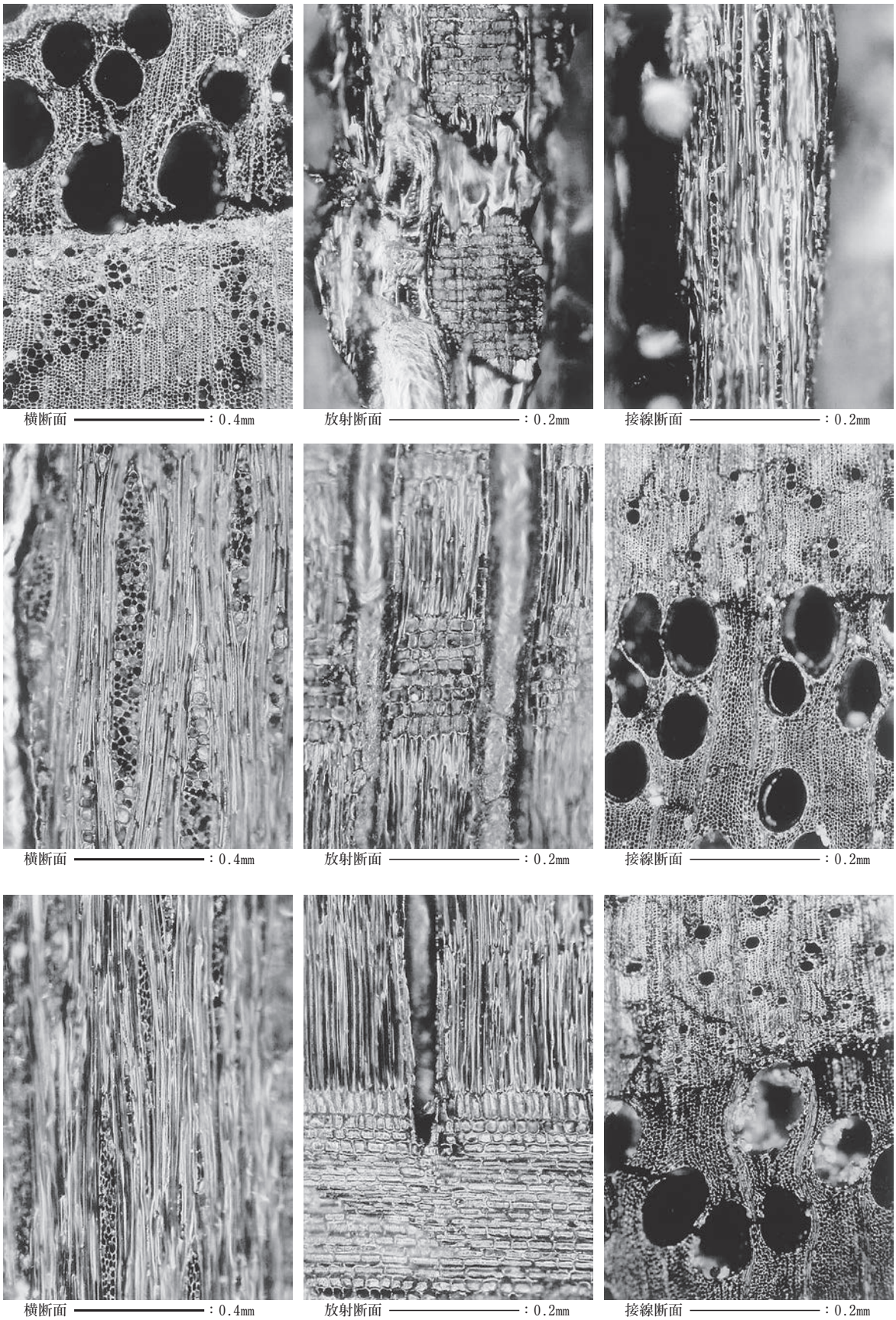


図58　炭化材の顕微鏡写真

１．３　ＦＢ2006.Ｈ03　№４　クリ
２．２　ＦＢ2006.Ｈ02　№３　ケンポナシ属
３．11　ＦＢ2006.Ｈ11　№16　ケンポナシ属

道管の径は早材から晩材にかけて徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は異性である。軸方向柔細胞は周囲状を示す。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で，１～６細胞幅である。

以上の形質よりケンポナシ属に同定される。ケンポナシ属には，ケンポナシ，ケケンポナシがあり，ケンポナシは北海道(奥尻島)，本州，四国，九州に分布する。ケケンポナシは本州(西部に多い)，四国に分布する。どちらも落葉高木である。材は建築，家具，楽器，器具など広く用いられる。

５．所見

同定の結果，原Ｂ遺跡の炭化材は，クリ５点，ケンポナシ属７点であった。クリは温帯に広く分布する落葉高木で，暖温帯と冷温帯の中間域では，純林を形成することもあり，乾燥した台地や丘陵地を好み，二次林要素でもある。材質は重厚で保存性が良く，柱材などの建築材などに適する。ケンポナシ属は温帯に広く分布する落葉高木で山野に生育する。材質は強さ中庸で，切削，加工は容易である。いずれの樹種も広葉樹ではあるが，高木であり大きな材が取れ，住居の構築材に適する。いずれも当時，遺跡の周辺に分布していたと考えられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242

第４節　放射性炭素年代測定(AMS測定)

株式会社　加速器分析研究所

(１)遺跡の位置

原Ｂ遺跡は，福島県南相馬市原町区馬場字原(北緯37°36′41″，東経140°55′47″)に所在し，太田川北側の段丘面上に立地する。

(２)測定の意義

遺跡内に位置する複数の住居跡の前後関係および集落の継続期間を明らかにする。

(３)測定対象試料

測定対象試料は，２号特殊遺構底面直上から出土した土器付着炭化物(FB2006.001)，５号住居跡床面直上から出土した土器付着炭化物(FB2006.002)，８号住居跡覆土３層から出土した炭化物

(FB2006.003)，合計３点である。

（４）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。

３）試料を酸化銅１gと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

（５）測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron ９SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C／^{12}Cの測定も同時に行う。

（６）算出方法

１）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

２）BP年代値は，過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

３）付記した誤差は，次のように算出した。
複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

４）δ^{13}Cの値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。
δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰；パーミル)で表した。

$\delta^{14}C=[(^{14}A_S-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times1000$　　（１）

$\delta^{13}C=[(^{13}A_S-^{13}A_{PDB})/^{13}A_{PDB}]\times1000$　　（２）

ここで，$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$は，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度($^{13}A_S=^{13}C/^{12}C$)を測定し，PDB(白亜紀のベレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し，標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，$\Delta^{14}C$は，試料炭素が$\delta^{13}C=-25.0$(‰)であるとしたときの^{14}C濃度($^{14}A_N$)に換算した上で計算した値である。(１)式の^{14}C濃度を，$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2$ ($^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき)

または

$=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$ ($^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき)

$\Delta^{14}C=[(^{14}A_N-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times1000$(‰)

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC(percent Modern Carbon)がよく使われており，$\Delta^{14}C$との関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C=(pMC/100-1)\times1000$(‰)

$pMC=\Delta^{14}C/10+100$(%)

国際的な取り決めにより，この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより，放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age；yrBP)が次のように計算される。

$T=-8033\times\ln[(\Delta^{14}C/1000)+1]$

$=-8033\times\ln(pMC/100)$

表５　放射性炭素年代測定結果

試料番号	遺跡名	遺構	層位	形態	Libby Age (yrBP)	δ^{13}C (‰) (加速器)	Δ^{14}C (‰)	pMC (%)
ＦＢ2006.001	原Ｂ	ＳＸ02	底面	炭化物	6320±40	−21.53±0.58	−544.7±2.2	45.53±0.22
ＦＢ2006.002	原Ｂ	ＳＩ05	床直	炭化物	6240±40	−26.92±0.56	−539.9±2.2	46.01±0.22
ＦＢ2006.003	原Ｂ	ＳＩ08	ℓ３	炭化物	4420±40	−27.65±0.60	−423.4±2.7	57.66±0.27

表６　暦年較正年代

試料番号	δ^{13}Cの補正無し			暦年較正年代用 (yrBP)	暦年較正年代（１σ）	暦年較正年代（２σ）
	δ^{14}C (‰)	pMC (%)	Age (yrBP)			
ＦＢ2006.001	−541.4±2.2	45.86±0.22	6260±40	6319±38	5330ＢＣ−5220ＢＣ (68.2%)	5370ＢＣ−5210ＢＣ (95.4%)
ＦＢ2006.002	−541.7±2.2	45.83±0.22	6270±40	6235±39	5300ＢＣ−5200ＢＣ (53.4%) 5160ＢＣ−5110ＢＣ (9.4%) 5100ＢＣ−5070ＢＣ (5.3%)	5310ＢＣ−5190ＢＣ (58.5%) 5180ＢＣ−5060ＢＣ (36.9%)
ＦＢ2006.003	−426.6±2.6	57.34±0.26	4470±40	4423±37	3270ＢＣ−3240ＢＣ (6.1%) 3100ＢＣ−3000ＢＣ (46.1%) 2990ＢＣ−2930ＢＣ (15.9%)	3330ＢＣ−3210ＢＣ (19.8%) 3180ＢＣ−3150ＢＣ (2.1%) 3130ＢＣ−2910ＢＣ (73.5%)

【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】

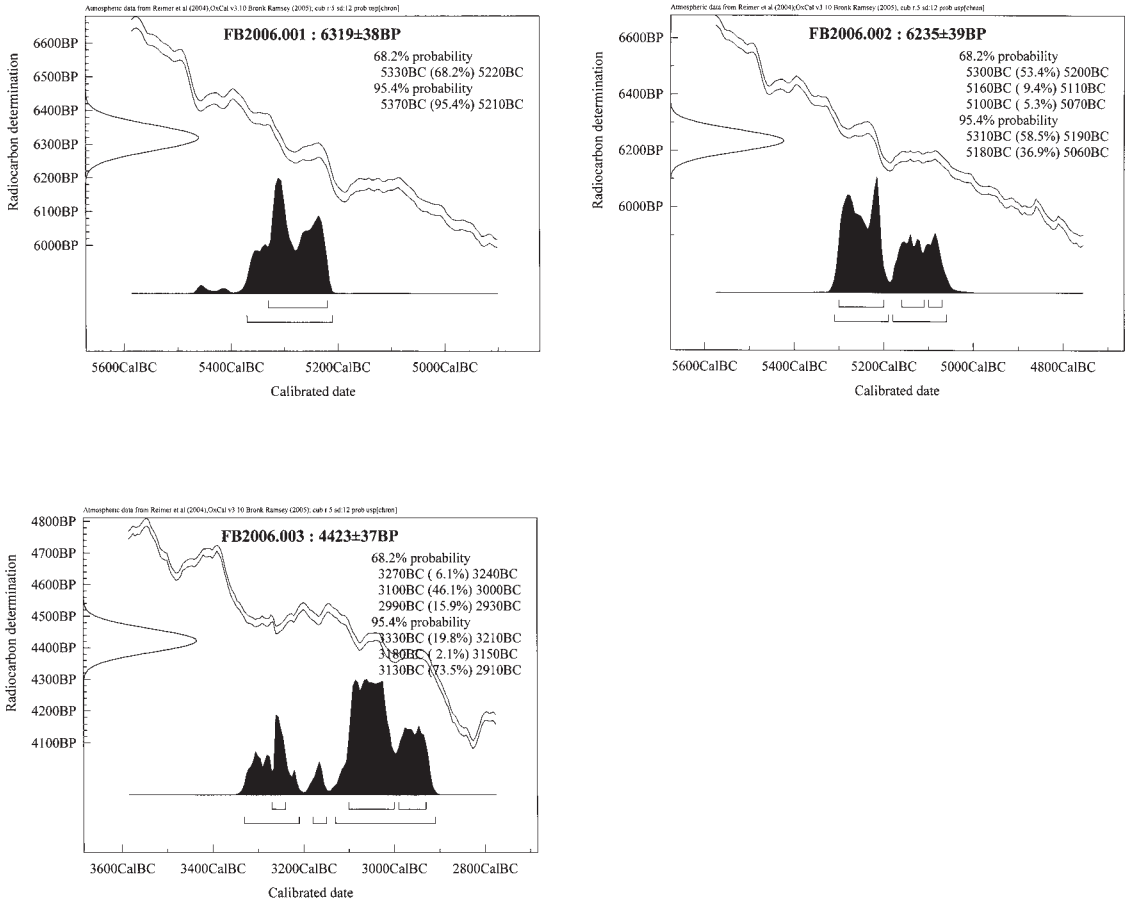


図59　暦年補正

５）^{14}C年代値と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

６）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い，OxCalv3.10較正プログラム(Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

(７)測定結果

２号特殊遺構出土の土器付着炭化物(FB2006.001)が6320±40yrBP，５号住居跡出土の土器付着炭化物(FB2006.002)が6240±40yrBP，８号住居跡出土の炭化物(FB2006.003)が4420±40yrBPの^{14}C年代である。暦年較正年代(１σ＝68.2％)は，２号特殊遺構出土試料が5330BC ～5220BC，５号住居跡出土試料が5300BC ～5200BC(53.4％)・5160BC ～5110BC(9.4％)・5100BC ～5070BC(5.3％)であり，縄文時代早期末に相当する。８号住居跡出土試料は，3270BC ～3240BC(6.1％)・3100BC ～3000BC(46.1％)・2990BC ～2930BC(15.9％)であり，縄文時代中期前葉から中葉にかけての年代である。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。(図59，表５・６)

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995)　Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy： the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37 (２) 425-430

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (２A) 355-363

Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 43 (２A) 381-389

Reimer et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

第４章　　ま　と　め

第１節　遺物について

土　　器

ここでは，本遺跡から出土したⅠ・Ⅱ群土器について若干のまとめを試みる。

Ⅰ群土器

縄文早期末葉～前期最初頭に位置づけられる土器群である。今回の調査では土器群の中で最も多く，2,000点以上出土している。本群は４類10種別し，主なものを図60に集成した。器形は口縁部が外反し，底部が尖底を呈するものが主体を占める。胎土には多くの繊維混入痕が見られる。内面調整は，貝殻条痕が施されたものが約半数を占めるが，ナデ調整や擦痕のあるものも比較的多く見られる。

１類ａ種は口縁端部に刻目や圧痕を施すものである。６号住居跡の図14－１は絡条体圧痕が口縁上端内面に斜位方向に施され，図48－５は貝殻圧痕が施されている。

ｂ種は口縁端部直下に横位方向の隆帯を施すものである。隆帯は断面が三角形を呈し，器面に強く貼り付けられている。主に調査区南端からまとまって出土しており，この地点からは，前期最初頭まで下る可能性のある３類ａ種も共に出土している。調査区北側では１・２類土器が多く出土しているが，１類ｂ種はほとんど出土していない。このため，１類ｂ種と他の１・２類土器との間には時期差がある可能性も考えられる。

ｃ種は沈線を施すもので，出土量が少なく，１・５号住居跡のみから出土している。図７－６・７と図11－７は大畑Ｇ式に近い特徴が見られ，先端が幅広の工具による沈線で施文されている。

ｄ種は地文のみのもので，縄文早期末葉の土器の約８割を占める。器形は，尖底の底部から胴部が内湾気味に立ち上がり，口縁部が外反する。地文の撚糸文は，胴部に斜位や縦位方向で施文され，一部格子目状に交差させたものも見られる。このため施文法は乱雑な印象を受ける。口縁上端の内面には，横位や斜位方向に撚糸文が施されている。

２類土器も１類と同様，地文のみのｃ種が多数を占める。口縁端部に刻目や沈線を施したａ・ｂ種は極めて少なく，中でもｂ種は図49－14に示した１点のみである。本類土器は，いわゆる日向前Ｂ式に比定される土器群と考えられる。本遺跡の５・６号住居跡と遺構外のＬⅢｂからは，１・２類土器が共伴して出土しており，このような例は，上田郷Ⅵ遺跡包含層や中ノ沢Ａ遺跡４号住居跡でも見られる。上田郷Ⅵ遺跡１次調査報告の中でそれらの土器の共伴関係について本間宏氏が指摘しているが，本遺跡の共伴関係でも同様のことが言えよう。

３類は羽状縄文や斜縄文を施すもので，図50－１・２のように，原体の施文方向を変えて羽状縄文を施したものや，図50－３・４・６のように器面に原体を強く押し当て施文したものが見られる。

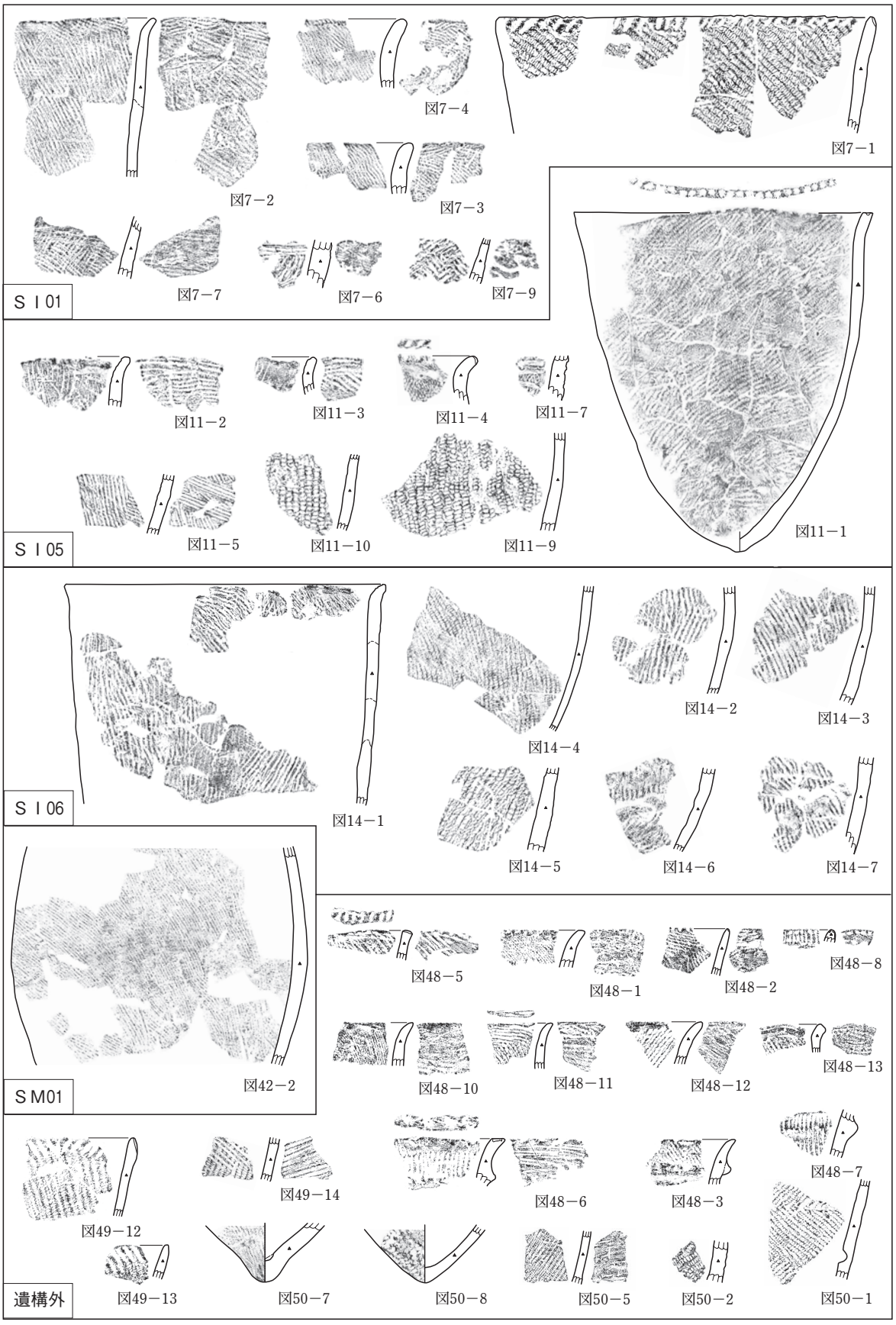


図7－4
図7－1
図7－2
図7－3
図7－7
図7－6
図7－9
ＳＩ01
図11－2
図11－3
図11－4
図11－7
図11－1
図11－5
図11－10
図11－9
ＳＩ05
図14－1
図14－4
図14－2
図14－3
ＳＩ06
図14－5
図14－6
図14－7
図42－2
ＳＭ01
図48－5
図48－1
図48－2
図48－8
図48－10
図48－11
図48－12
図48－13
図49－14
図48－6
図48－3
図48－7
図49－12
図49－13
図50－7
図50－8
図50－5
図50－2
図50－1
遺構外

図60　Ⅰ群土器

これらは，縄文原体の施文技法や胎土に混和される繊維の量が１・２類土器に比べて少ない点から，前期初頭の花積下層式に近い特徴を持つと考えられる。ｂ種は，０段多条原体で施文され，内面に条痕や擦痕の見られる土器である。出土量は少ないものの，１号住居跡の図７－１や５号住居跡の図11－１など，器形を復元できる資料が出土している。口縁端部に刻目（スリット）や刺突を持つ点，０段多条原体を用いる点など，２類ａ種に非常に近い特徴を持つ。おそらく，原体を施文する際に２類土器が変異したものと考えられる。また，この類型は羽白Ｄ遺跡５号住居跡の例でも見られるように，後続する花積下層式まで残るものと考えられる。

以上のように本群土器は，器形の特徴や撚糸文を主体とする点等，大畑Ｇ式に近い特徴が強く見られる。しかし，大畑Ｇ式に特徴的な沈線が描かれた土器が極めて少数である点や，地文主体の土器が多数を占める点など，大畑Ｇ式とは異なる点も見られる。このことは地域差，もしくは時間的な差異を意味するものと考えられる。

本遺跡と同様の土器組成を示す福島県の代表的遺跡としては，いわき市中ノ内Ｃ遺跡14・15号住居跡，南相馬市荻原遺跡３号住居跡，中ノ沢Ａ遺跡４号住居跡などが挙げられる。これらの遺跡の中には，前述した大畑Ｇ式土器の分布範囲と重なるものもあり，このことから地域的な差異とは言い切れないようである。また，３類ｂ種には後続する花積下層式の特徴が見られる。このことからも本群土器は，縄文早期末葉から前期最初頭への過渡期に位置づけられるものと考える。

本群土器の中では，１類ｂ種とした隆帯を口縁端部直下に貼り付ける土器が，他の１・２類の土器とは別の地点から出土している点に留意する必要がある。このような差異が段階的な差によるものなのかが，今後の重要な検討課題となろう。

Ⅱ群土器

本群土器は，大木７ｂ式と阿玉台Ⅰａ式に比定される。図61に本群土器の主なものを集成した。１類は，頸部が「く」ノ字状に括れ，胴部が緩く膨らむ深鉢土器が主体を占める。浅鉢土器は少ない。文様はａ～ｇ種に区分した。隆線で区画し沈線を施すもの（ａ種），隆線で区画し縄圧痕文を施すもの（ｂ種），縄圧痕文を施すもの（ｃ種），連続刺突や交互刺突を施すもの（ｄ種），沈線で文様を描くもの（ｅ種）が本群土器の文様を構成する主な要素である。この他，粗製な土器として縄文地文のみのもの（ｆ種）と無文のもの（ｇ種）がある。今回の調査において，10・13号住居跡やＢ14グリッドⅠⅢａから比較的まとまって出土しており，これらは若干の差異が見られるものの，ほぼ同時期の土器群と考えられる。

10号住居跡の土器は，図22－１がａ種，図22－２がｄ・ｅ種，図22－３・図23－１～３がｆ種に該当する。図22－３は刻目を持つ瘤と結節縄文を特徴とするもので，図42－３の２号埋設土器に共通する。図22－２は大型の浅鉢土器で福島県内では類例が少ないが，宮城県嘉倉貝塚446号住居跡からは同様な浅鉢土器が出土している。図22－１は波頂部にＳ字状の横位渦巻が施され，頸部に隆線や沈線で楕円形横帯区画が描かれている。このような土器は法正尻遺跡，上ノ台Ａ遺跡，上ノ台Ｂ遺跡，大平・後関遺跡など県内全域で出土しており，仙台湾岸地域では類例が少ないことから，

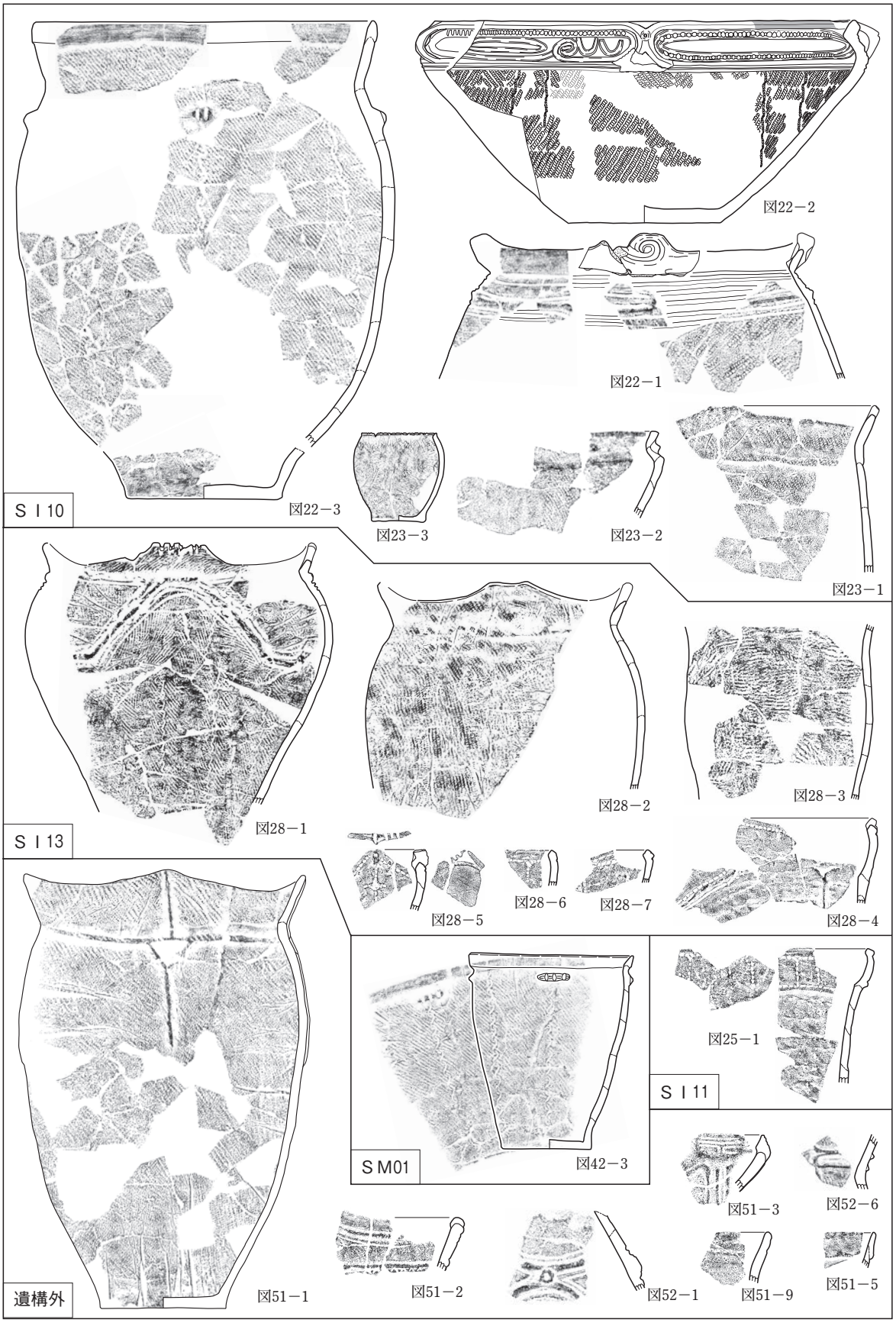

ＳＩ10
図22－3
図22－2
図22－1
図23－3
図23－2
図23－1
ＳＩ13
図28－1
図28－2
図28－3
図28－5
図28－6
図28－7
図28－4
ＳＭ01
図42－3
ＳＩ11
図25－1
図51－3
図52－6
図51－2
図52－1
図51－9
図51－5
遺構外
図51－1

図61　Ⅱ群土器

福島県内の大木７ｂ式の代表的な類型と考えられる。

13号住居跡の土器組成は，図28－１のｄ種，図28－２・３のｆ種，図28－４～７のⅡ群２類からなる。図28－１は，隆線で弧線を描いた上下に並行沈線を施し，一部に交互刺突を加えている。このような土器は，宮城県小梁川遺跡包含層に類例が多く見られ，仙台湾岸地域の影響を受けたものと考えている。図28－５～７は阿玉台Ⅰａ式の特徴を持つもので，有節沈線やＹ字状垂下隆線が施されている。これらの胎土は雲母を含むものが多い。これに対し，同じ阿玉台Ⅰａ式である図28－４や11号住居跡の図25－１には，大木７ｂ式と同様に雲母の少ないきめ細かな胎土が使用されており，興味深い。

遺構外ではＢ14グリッドＬⅢａから多く出土している。これらは住居内から出土した土器に比べ，図51－１・９のように，縄圧痕文が施されたものが多い。

本群と同様な土器組成が報告されている福島県内の遺跡として，上ノ台Ｂ遺跡，大平・後関遺跡，月崎Ａ遺跡，法正尻遺跡等が挙げられる。法正尻遺跡からは該期の土器が多く出土しているが，基準とされた415号土坑出土土器は，口縁部に波状口縁から変形した突起が貼付されている点や，沈線で文様が描かれている点が本群土器と異なっている。また，阿玉台Ⅰｂ式が共伴することから，これらの土器は本群土器より新しいものと考えられる。大平・後関遺跡の10号住居跡と上ノ台Ｂ遺跡包含層から出土した土器は，交互刺突文や隆線に沈線を沿わせて描いた区画文，頸部に刻目を施した瘤，結節縄文，複合口縁等が文様構成の主な要素である。これに阿玉台Ⅰａ式が伴う点は，本群土器に最も近い内容である。

本遺跡は，上ノ台Ｂ遺跡や大平・後関遺跡と同様，福島県北部に位置し，仙台湾岸地域に多く見られる対弧文を特徴とする土器群の影響を強く受けているものと考えられる。その一方で，東関東を中心に分布する阿玉台Ⅰａ式と大木７ｂ式が共伴することから，南北の文化の接点に位置すると言える。

本遺跡から出土した土器は，これまで不明瞭であった大木７ｂ式と阿玉台Ⅰａ式の共伴関係を明らかにするだけでなく，関東地域と福島県地域，そして仙台湾岸地域を結ぶ広域編年に大きな役割を果たす資料となると考えられる。（中　野）

石　　器

本遺跡から出土した石器は755点である。この他に，７号住居跡から出土した微細剥片については，表１に示したとおりである。石器の内訳は石鏃26点，石錐３点，石槍２点，石匙６点，石斧６点，磨石・凹石・敲石10点，石皿類７点，２次加工剥片７点，石核６点で，それ以外は剥片である。これらの石器は，概ね縄文早期末葉～前期最初頭と縄文中期前葉に所属するものと考えている。石器の器種組成は，一般的な縄文集落で認められるものである。ここでは，出土量の多い縄文早期末葉～前期最初頭の特徴的な石器についてまとめる。

石鏃の多くは三角形を呈する。無茎で，基部の形状が平らなもの，抉りが入るもの，丸くなるも

のに分けられる。このうち，基部が平らなものと基部に僅かな抉りが入るものが多い。縦長の石鏃は，器面全体に調整剥離が施されているが，それ以外は周縁部に簡単な調整剥離が行なわれたのみで一次剥離面が残されている。

石匙は全て縦長である。表面は全面に調整剥離が施され，右側縁が直線的に，左側縁が弧を描くように整形されている。裏面は一側縁に調整剥離が加えられただけで主要剥離面は残されている。

石斧は打製石斧４点と磨製石斧１点である。打製石斧は撥形・木葉形・短冊形に分けられ，小型のものが多い。小型の３点は，礫や厚手の剥片に粗雑な加工を施した片刃石斧で，裏面には自然面や主要剥離面が残されている。図54－５は大型の石斧で，側縁部に僅かな調整を加えただけで，先端の尖った自然面を両刃としている。打製石斧の刃部は，大型が両刃の丸刃に，小型が丸刃と直刃に分けられる。図７－13の磨製石斧は刃部が欠損しているが，形状は撥形を呈する。部分的に磨いて形状を整えたものである。基部には敲打痕が認められることから，楔あるいはノミ等に使用されたものと考えられる。これらの石斧は，刃部に使用痕が認められないため，縦斧あるいは横斧の判断ができなかった。

剥片石器の石材としては，石英と角閃石斑晶を含む白色の流紋岩が多用されている。この流紋岩は，いわき市連合遺跡で露頭が確認されていることから，この遺跡の周辺から持ち込まれたものと考えられる。この他に，特徴的な石材として黒曜石が挙げられるが，産地は不明である。石鏃２点と小剥片２点だけが出土し，量が少なく製品や剥片が小さいことから，製品あるいは小さな原石として搬入された可能性が高い。

以上のことから，本遺跡の縄文早期末葉～前期最初頭の石器の特徴として，石鏃や石匙の形状に統一性が見られること，石斧は非常に簡素な作りであることが挙げられる。石材は，石英と角閃岩を含む白色の流紋岩が石器全体の約７割を占めることから，この流紋岩がこの地域で最も入手しやすい石材であったと考えられる。また，黒曜石の出土は，当時の広域的交流を示す貴重な資料と言える。

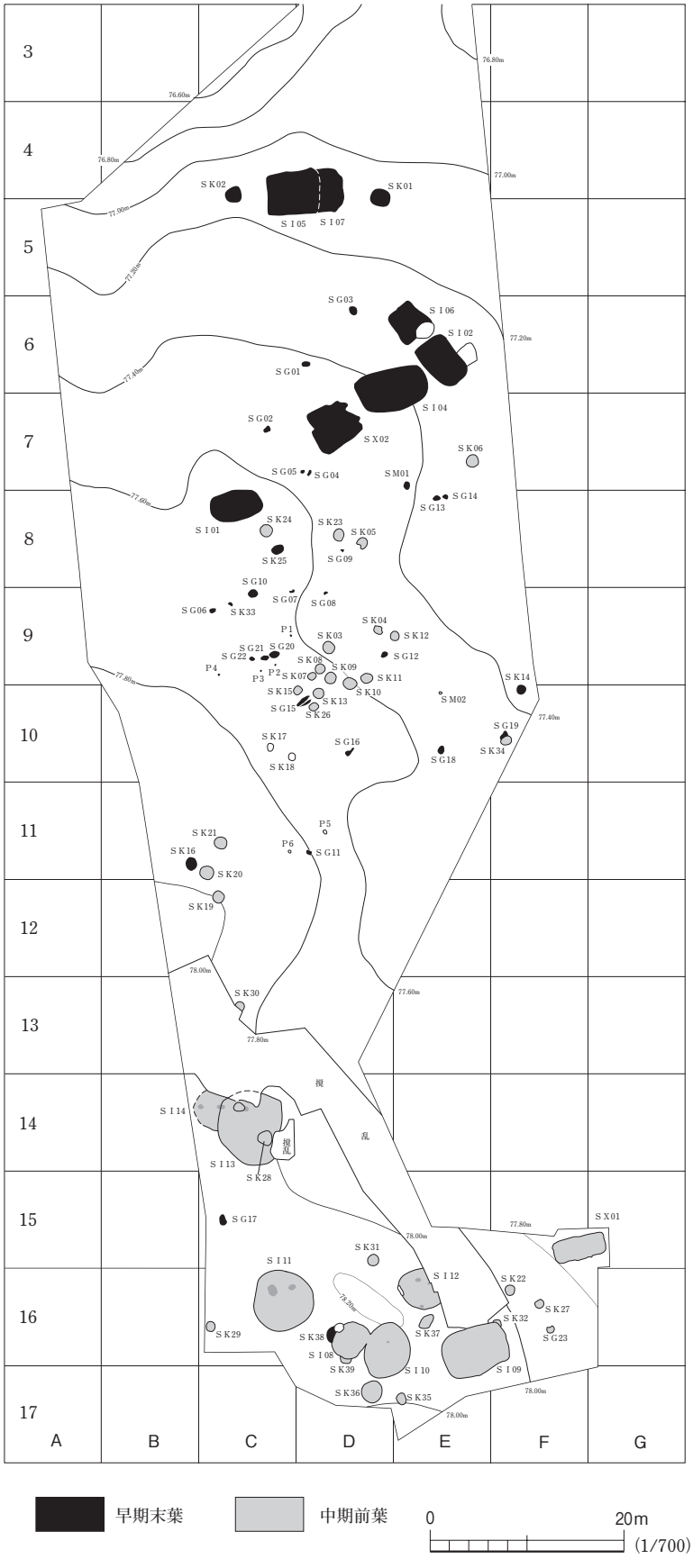
（国　井）

第２節　遺構について

原Ｂ遺跡からは竪穴住居跡13軒，土坑39基，焼土遺構23基，土器埋設遺構２基，特殊遺構２基，ピット６基の縄文時代の遺構が検出された。これらの遺構は，概ね縄文早期末葉～前期最初頭と縄文中期前葉の２時期に分けられ，各時期の遺構が分かるように図62に示した。本節では，これらの遺構の構造や機能等の特徴についてまとめる。なお，今回の調査では，各時期の遺構が調査区外に広がりを示すことや，後世の削平や調査区南縁の段丘崖崩落等によって遺構が消失している可能性が高いことから，集落の全貌が明らかになったとは言えない。

縄文早期末葉～前期最初頭の遺構

該期の遺構には，竪穴住居跡６軒（１・２・４～７号），土坑７基（１・２・14・16・25・33・38号），



早期末葉　中期前葉　0　20m　(1/700)

図62　縄文早・中期の遺構

焼土遺構22基(１～22号)，土器埋設遺構１基(１号)，特殊遺構１基(２号)，ピット４基(１～４号)が挙げられる。これらの遺構の多くは，段丘縁辺部よりやや奥まったところで確認されている。遺構の分布は，主体となる住居跡が調査区北側に集中し，その南側に焼土遺構や土器埋設遺構，ピットが見られる。この他，特殊遺構は住居跡群の中に位置し，土坑は少なく散漫である。この時期の集落は，遺構の配置や出土土器の分布から，東側に広がるようである。

竪穴住居跡は，平面形が長方形や隅丸長方形のもので，規模は長軸が5.4ｍ前後のものが多い。軸方向は一定していない。柱穴は，１号住居跡を除く住居跡で確認されている。主柱穴は２号住居跡で確認され，長軸線上に位置することから，棟に相当する部分が高くなるものと考えられる。壁柱穴は径10～20㎝程の柱穴が壁際に巡るように確認されている。炉は地床炉であるが，他の住居跡の規模に比べてやや小型の６号住居跡では認められない。これは大きさに関係があるのではないだろうか。炉の位置は床面の中央に多く見られ，２号住居跡では，住居の長軸線上に複数の炉があること

から，炉の移転が考えられる。炉は焼き締まりが認められ，焼土の厚さが５～８㎝まで達することから，使用頻度が高かったと推測される。

土坑は平面形が楕円形で，断面形が鍋底状のものが多い。規模は長径130～200㎝で，掘り込みが浅く，底面が平坦になるものが多いようである。該期の一般的な集落に比べ，住居跡の割合に対して土坑数が少なく，調査区外に存在するものと考えられる。

焼土遺構はⅬⅣで検出したものを該期のものと判断した。この多くは屋外炉と考えられるが，中には，住居跡の地床炉も含まれているものと考えている。このように，該期の焼土遺構が多く確認されることは，本遺跡の特徴と考えられる。

この他，土器埋設遺構では土器の中から副葬品を確認できず，また，この時期の類例が少ないため，現時点では本遺構が埋葬形態の一つとは判断できない。特殊遺構や20～22号焼土遺構，１～４号ピットについては，住居跡と判断する根拠が乏しいため住居跡として扱わなかったものである。

遺構の重複関係は，５号住居跡が７号住居跡より新しいことが確認されている。この他，１号土坑には，５号住居跡から出土した土器と同一のものが投棄されていたため，１号土坑と５号住居跡はほぼ同時期に存在していた可能性が高い。

以上のことから，遺構は２期以上の変遷が考えられるが，住居跡の構造に時間差は認められない。また，出土土器は撚糸地文のものが主体となり，少数の破片資料からいくつかの土器形式の特徴が認められるが，この時期の集落は，比較的短い時期に限定されるものと考えている。

縄文中期前葉の遺構

該期の遺構には，竪穴住居跡７軒（８～14号），土坑30基（３～13・15・19～24・26～32・34～37・39号），焼土遺構１基(23号)，土器埋設遺構１基（２号），特殊遺構１基（１号）が挙げられる。これらの遺構は，段丘縁辺部と調査区中央で確認されている。住居跡は段丘縁辺部にまとまり，その付近に土坑の一部や焼土遺構，特殊遺構が見られる。土坑の多くは，調査区中央に集中することから，住居跡群域と土坑群域は，区別する傾向があったと思われる。住居跡群と土坑群の間には空白部が見られ，集落内の広場であったとも考えられる。この時期の集落は，住居跡の配置や土器分布から，調査区外の南西側や東側の一部に広がるものと考えられる。

竪穴住居跡は平面形が楕円形を呈するものが最も多く，隅丸長方形と円形のものが各１軒ずつである。一般的に後続する時期の住居跡の平面形は，円形になる傾向が強いことから，該期は楕円形から円形に変化する過渡期と考えられる。柱穴は，住居の中央部や壁際で主柱穴が確認されているが，配列に規則性が認められないため上屋構造については不明である。炉は地床炉で，住居跡の約半数で認められ，住居のやや北側と壁際に位置する。

土坑は調査区南側の住居跡付近と調査区中央に２分される。平面形は円形と楕円形からなる。20～22・34・36号土坑のように，フラスコ形や円筒状の土坑は，その形態から推測して貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴の中でも，22・36号土坑は住居跡に近接するが，20・21・34号土坑は土坑群から南西側や南東側に離れて確認されている。このうち，大型の36号土坑は，住居の近くに存在している。

このように，大型と小型の貯蔵穴では構築地点に違いが認められる。また，貯蔵穴以外の土坑は，平面形が円形と楕円形を呈するが，性格は不明である。これらの土坑の多くは，調査区中央で重複することなくまとまっている。

その他，土器埋設遺構は，住居跡群から離れた調査区中央に単独で存在する。土器の中からは，副葬品は出土していないが，これまでの事例から埋葬形態の一つと推測される。また，特殊遺構は，底面から炉や柱穴が確認されなかった竪穴状の遺構で，軸方向は９号住居跡と一致するが，性格については不明である。

遺構の重複関係や出土土器からは，38・39号土坑⇒10号住居跡⇒８号住居跡，14号住居跡⇒13号住居跡のように数期の変遷が認められる。

以上のことから，遺構は３時期以上の変遷が考えられるが，遺構の単位集団として捉えることはできなかった。また，出土土器に大きな変遷が認められないことから，この時期の集落は，大木７ｂ式と阿玉台Ⅰａ式土器が並行関係にある限られた期間に営まれたものと考えられる。　（国　井）

参考文献

相原　淳一　　1986　『小梁川遺跡』宮城県教育委員会

相原　淳一　　1990　「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉土器群の様相について」『第７回縄文セミナー　早期終末・前期初頭の諸問題』縄文セミナーの会

猪狩　英究　　1995　「大平・後関遺跡」福島市教育委員会・(財)福島市振興公社

井　憲治他　　2001　「上田郷Ⅵ遺跡(第２次)」『常磐自動車道遺跡調査報告18』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団

今村　啓爾　　1985　「五領ヶ台式土器の編年－その細分および東北地方との関係を中心に」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要　第４号』

押山　雄三他　1999　「大槻八頭遺跡」社会福祉法人くわの福祉会・福島県郡山市教育委員会・(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

新海　和弘　　2002　「本町西Ｃ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告36』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団

鈴鹿　良一他　1984　「上ノ台Ａ遺跡(第１次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅴ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

鈴鹿　良一他　1988　「羽白Ｄ遺跡(第２次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

鈴鹿　良一他　1988　「羽白Ｃ遺跡(第１次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅻ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

鈴鹿　良一他　1988　「福島県の早期後半から前期初頭の土器について」『第４回縄文文化検討会シンポジウム資料』

西村　正衛　1984　『石器時代における利根川下流域の研究　－貝塚を中心として－』早稲田大学出版部

丹羽　茂　1981　「大木式土器」『縄文文化の研究４』　雄山閣

丹羽　茂　1989　「大木式土器様式」『縄文土器大観』１　小学館

藤谷　誠　1995　「荻原遺跡」『請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

古川一郎他　1987　「中の内Ａ遺跡」『中の内Ａ遺跡・本屋敷遺跡他』宮城県教育委員会

堀　耕平　1995　「原遺跡－遺構編－」『県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書』福島県原町市教育委員会

本間　宏他　1989　「中ノ沢Ａ遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告４』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団

本間　宏他　1999　「上田郷Ⅵ遺跡(第１次)」『常磐自動車道遺跡調査報告18』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団

松本　茂他　1991　「法正尻遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告11』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団

松本　茂　1995　「福島県における中期初頭の様相」『第８回縄文セミナー　中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会

馬目　順一他　1975　「大畑貝塚」いわき市教育委員会

山内　幹夫　1984　「一斗内遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告16』　福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

山内　幹夫　1983　「阿武隈山地を中心とした縄文前期初頭土器編年について－牡丹平２群１類土器を中心として」『しのぶ考古８』

山内　幹夫他　1990　「上ノ台Ａ遺跡(第２次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告ⅩⅣ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・福島県土木部

山元　出他　2005　「堂田Ａ遺跡・西田Ｈ遺跡」『こまちダム遺跡発掘調査報告３』福島県教育委員会・(財)福島県文化振興事業団・福島県土木部

第２編　大田切（おおたぎり）遺跡

遺跡記号　ＭＳＣ－ＯＴＧ
所在地　福島県南相馬市小高区大富字大田切
時代・種類　縄文・平安時代　集落跡
調査期間　（１次）平成18年４月11日～８月10日
（２次）平成19年４月12日～５月15日
調査員　（１次）青山　博樹・小河　厚子・管野　和博
（２次）門脇　秀典・鈴木裕一郎・関根　昌毅

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　位 置 と 地 形

大田切遺跡は，福島県南相馬市小高区(旧小高町)大富字大田切に所在している。阿武隈高地の東麓には，太平洋に向かって東流する諸河川が形成した台地・段丘と沖積平野が広がり，本遺跡はこれらの台地のうち，小高川とその支流である前川・北鳩原川・大穴川・飯崎川などが開析している「摩辰ヶ原(まだつがはら)」と通称される台地の中央部に位置する。

序章の図３に示した『地形地質図』にしたがえば，摩辰ヶ原と呼称される台地のほとんどは阿武隈高地の東麓に取り付く「中位Ⅱ段丘」に属し，この中に阿武隈高地から太平洋に向かって舌状に張り出す丘陵が点在している。本遺跡の大部分はこの「中位Ⅱ段丘」に立地する。遺跡の南側には舌状に張り出す丘陵尾根があり，本遺跡の南部はこの尾根の北側斜面にまで延びている。標高は，台地の上面で約45～50ｍ，南側の丘陵の頂部で約60ｍである。本遺跡から海岸線までの距離は約7.3㎞である。

遺跡は，きわめて緩やかな起伏の台地に位置している。調査を開始する前は畑・牧草地であり，一部が宅地・水田であった。調査区周辺は，畑・牧草地，南側の丘陵は自然林と杉の人工林である。丘陵の最高所には山津見神社がある。遺跡内の南部の丘陵裾に，小水路が西から東に流れているほか，前川の支流となる小谷が本遺跡付近を起点として開析を始め，遺跡の北縁と中央を横断している。地元住民はこの小谷を「サク」と呼称している。遺跡の中央には市道赤坂摩辰線が南北方向に走り，遺跡を東西に分断している。

遺跡の西側には阿武隈高地の東縁が望見される。本遺跡から望めるもっとも高い山は標高522ｍの「懸の森山」で，本遺跡のほぼ真西に位置する。頂上部が円錐形に盛り上がってみえ，ふくしま百名山のひとつに選ばれている。山頂には大山祇神社が祀られ，現在も信仰の対象となっている。

周囲の大字は，北西側が羽倉，北東側が南鳩原，南東側が飯崎，南西側が金谷である。遺跡周辺の小字は，角間沢，一ノ関，赤坂，摩辰，犬塚，向田，東迫，熊平などである。

通称「摩辰ヶ原」と呼ばれる台地上にある遺跡の多くは，小高川や前川が形成した沖積平野に面した縁辺部にもっとも多く，次いで台地西部の阿武隈高地東麓に多く分布している。本遺跡が位置する台地の中央部に立地する遺跡は少ない。

台地の縁辺に立地する遺跡には，熊平Ｂ遺跡，西台遺跡・元屋敷遺跡・飯崎南原遺跡・大田和広畑遺跡などの縄文時代・古代の散布地，手子塚古墳・歓請内古墳・十日林古墳・杉平古墳群などの古墳，飯崎館跡などがある。阿武隈高地の東麓に立地する遺跡には，板木沢遺跡・大富西畑遺跡・犬塚Ａ遺跡・犬塚Ｂ遺跡・犬塚Ｃ遺跡がある。いずれも，縄文時代と平安時代の散布地である。台地の中央部には，本遺跡のほか横大道遺跡など古代の製鉄に関わる遺跡がある。　　(青　山)

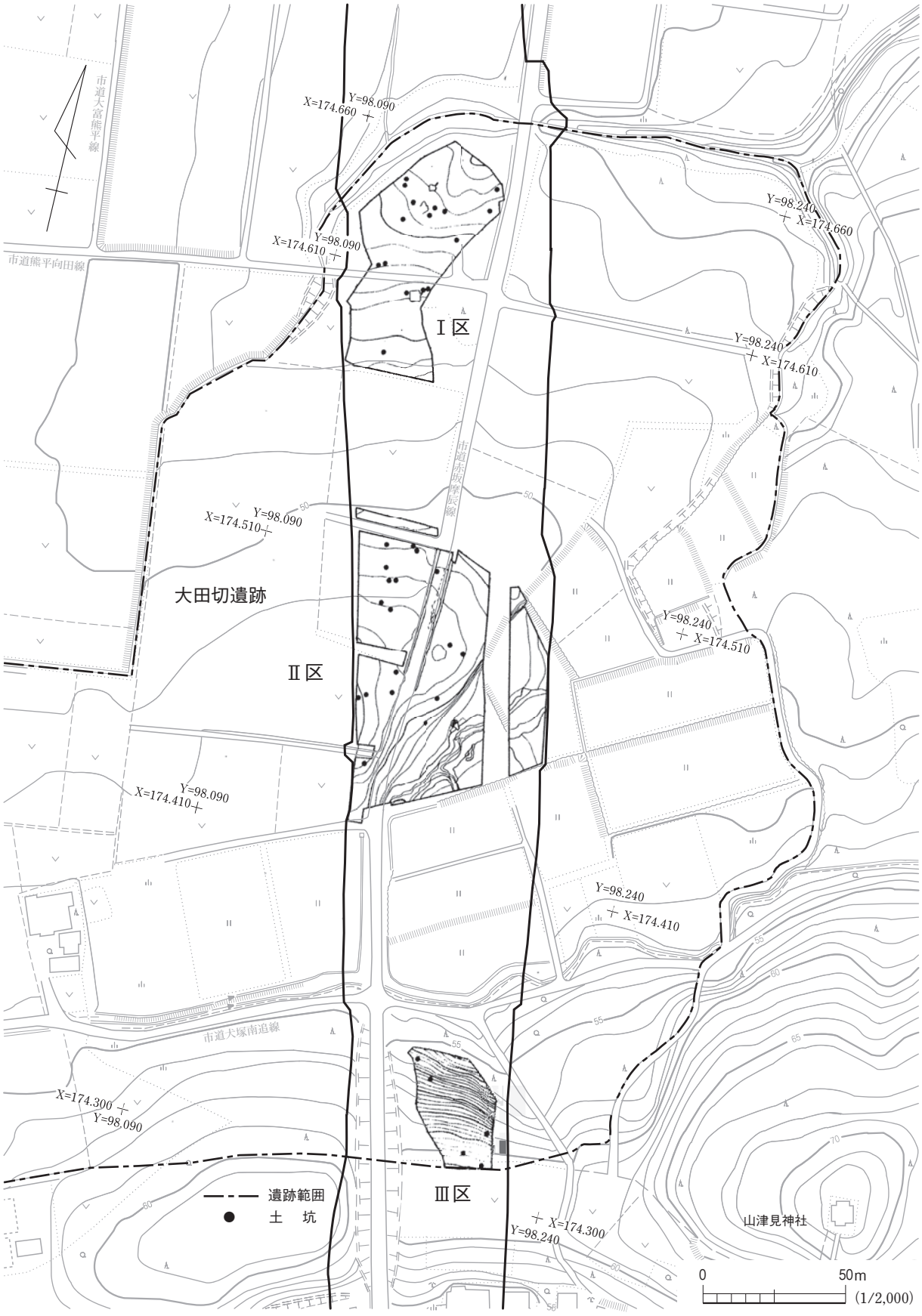

市道大富熊平線
市道熊平向田線
市道赤坂峯辰線
市道犬塚南追線
X=174.660 Y=98.090
X=174.610 Y=98.090
Y=98.240 X=174.660
Y=98.240 X=174.610
X=174.510 Y=98.090
Y=98.240 X=174.510
X=174.410 Y=98.090
Y=98.240 X=174.410
X=174.300 Y=98.090
X=174.300 Y=98.240
Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ区
大田切遺跡
山津見神社
遺跡範囲
土　坑
0
50m
(1/2,000)

図１　調査区・工事計画図

第２節　調　査　経　過

大田切遺跡は平成９年度に実施した表面調査によって発見された遺跡である。平成16年に行われた試掘調査は，15,200㎡を試掘対象とし，このうち5,800㎡が要保存面積となった。試掘調査では２基の木炭窯跡と木炭焼成土坑が検出されていた。

発掘調査は，平成18～19年度の２カ年にわたって行った。平成18年度は，遺跡内を通る町道部分を除いた部分，平成19年度は，町道の付け替え工事を行ったのち，その真下の部分500㎡の発掘調査を行った。

以下に，年度ごとの調査経過を述べる。

平成18年度

平成18年度の調査は，福島県教育委員会による４月６日の指示を受け，財団法人福島県文化振興事業団が調査員３名を配置し実施した。まず調査の指示が出されたのは遺跡中央部の4,300㎡である。

４月11日から，プレハブ用地の造成とプレハブの設置，表土剥ぎ，機材搬入など発掘調査の準備を行った。同14日からは作業員40名を雇用し，遺構の検出作業を開始した。４月18日には，調査区の南部に戦後の水田造成の際に埋め立てられた最大幅約13ｍの谷が埋没していることが判明し，この谷を埋めていた客土を機械力を用いて除去することとした。谷は最も深い部分で５ｍの深さに達し，調査区壁などの崩落防止，安全作業対策，湧水と周辺から流入する雨水の排水に時間を費やした。試掘の時に検出されていた２基の木炭窯跡は，この谷の斜面を利用して掘り込まれていることがわかった。

４月27日には測量基準杭の打設が完了し，検出された遺構の掘り込みと記録を開始した。５月24日には南相馬市教育委員会の川田・荒・佐川の三氏が来跡した。

本遺跡の本調査と平行して行われていた平成16年度未試掘部分の試掘調査の成果を受けて，５月29日には遺跡北側の2,900㎡，６月８日には遺跡南側の900㎡の調査指示が出された。これらをそれぞれⅠ区・Ⅲ区と呼称することとし，すでに調査を行っていた調査区をⅡ区とした。各調査区の間は試掘で遺構・遺物とも確認されず要保存範囲から除外された部分で，同じ遺跡の中ながら３つの調査区は分断された形となった。Ⅰ区・Ⅲ区ともそれぞれ表土剥ぎを開始し，次いで遺構の検出作業と掘り込みに移行した。

本年度の梅雨は本格的なものとなり，６月中旬から７月中旬は雨が多く，連日谷に流れ込む雨水の排水作業に追われた。谷が完全に水没したことも一度や二度ではなく，谷の中で見つかった２基の木炭窯跡の調査は滞りがちであった。Ⅱ区で検出された遺構の調査が終了したのは，６月下旬であった。

７月はⅠ区の調査が中心となり，同下旬にはⅢ区の調査に移行した。７月26日にはラジコンヘリ

コプターによる空中撮影を行った。８月10日をもってすべての調査が完了し，東日本高速道路株式会社への引渡しを行った。（青　山）

平成19年度

平成19年度の調査は，福島県教育委員会による４月６日の指示を受け，財団法人福島県文化振興事業団が調査員３名を配置し実施した。調査の指示が出されたのは，旧町道219号金谷・大富３号線の道路部分500㎡である。

４月12日から，プレハブ用地の造成とプレハブの設置，機材搬入など発掘調査の準備を行った。同13日からは作業員19名を雇用し，16日から重機により表土掘削を行った。その後，遺構の検出作業を開始し，４月下旬にはおおよその遺構の配置状況が明らかになった。調査期間中は晴天に恵まれ，順調に遺構検出が進行した。５月に入ってからは調査区の南部の検出に移行し，北部の１号道跡の調査を実施した。

５月上旬には遺構の精査および遺跡全体の写真撮影を終了したため，平成19年５月15日に東日本高速道路株式会社への引渡しを行った。（門　脇）

第３節　調　査　方　法

大田切遺跡の調査方法は，財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部がこれまで行ってきた調査の方法をおおむね踏襲した。表土の除去は機械力を用いて行い，各遺構・遺物包含層の掘り込みは人力で行った。

遺構の掘り込みに際しては，遺構の全体を検出したのちに，その遺構の堆積土の状況をもっともよく示すと思われた位置に土層観察用の畦を残すこととした。

基本土層の把握に際しては，深く掘り込まれた土坑や溝跡，撹乱坑などの壁のほか，調査区内に数カ所の土層観察用の深掘りを行って土層を観察した。

調査記録に際しては，遺構・遺物の位置を表示するためのグリッドで遺跡全体を覆い，このグリッドを基準に行った。グリッドの方位・座標・単位は世界測地系座標に一致させ，グリッドは，一辺10ｍとした。グリッドの名称は，西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…，北から南へ１・２・３…とし，これを組み合わせて「Ｇ７グリッド」などと呼称した。

グリッドの境界は，木杭を用いて標示した。グリッドの設定に際しては，調査区内に国家三角点をもとにした３級基準点を３カ所打設し，これを基準とした。各基準点には，標高を表示した。基準点の打設は，測量会社に委託し，ＧＰＳ測量を行った。各遺構の位置は，世界測地系座標で示している。

遺構の記録は，実測による作図，観察所見の註記，写真撮影によって行った。各遺構につき，平面図，断面図を作成し，必要に応じて立面図を作成した。平面図作成のための計測はグリッド杭を基準に光波測距儀で行い，断面図作成のための計測は基準点の標高をもとに水平に張った水糸から

コンベックスを用いて行った。

平面図・断面図は方眼紙に１/20の縮尺で鉛筆を用いて記録し，遺物出土状況図などは必要に応じて１/10で作図した。断面図の作成に際しては，層ごとの土色・包含物・しまりの有無などを註記した。土色の判定に際しては，土色帖を用いた。

写真撮影には35㎜カメラを常用し，必要に応じて６×4.5カメラを使用した。フィルムは，モノクロームとリバーサルフィルムを使用した。

遺物の取り上げは，出土した遺構，層位ごとに行い，必要に応じて出土地点の記録，出土状況図を作成した。出土したすべての遺物について水洗いし，出土地点と層位のネーミングと接合を行ったうえで，報告書に掲載する遺物を選び出した。選び出した遺物は１/１の縮尺で実測し，方眼紙に記録した。

なお，出土した遺物と調査記録一式(図面と写真)については，福島県文化財センター白河館に保管している。　　(青　山)

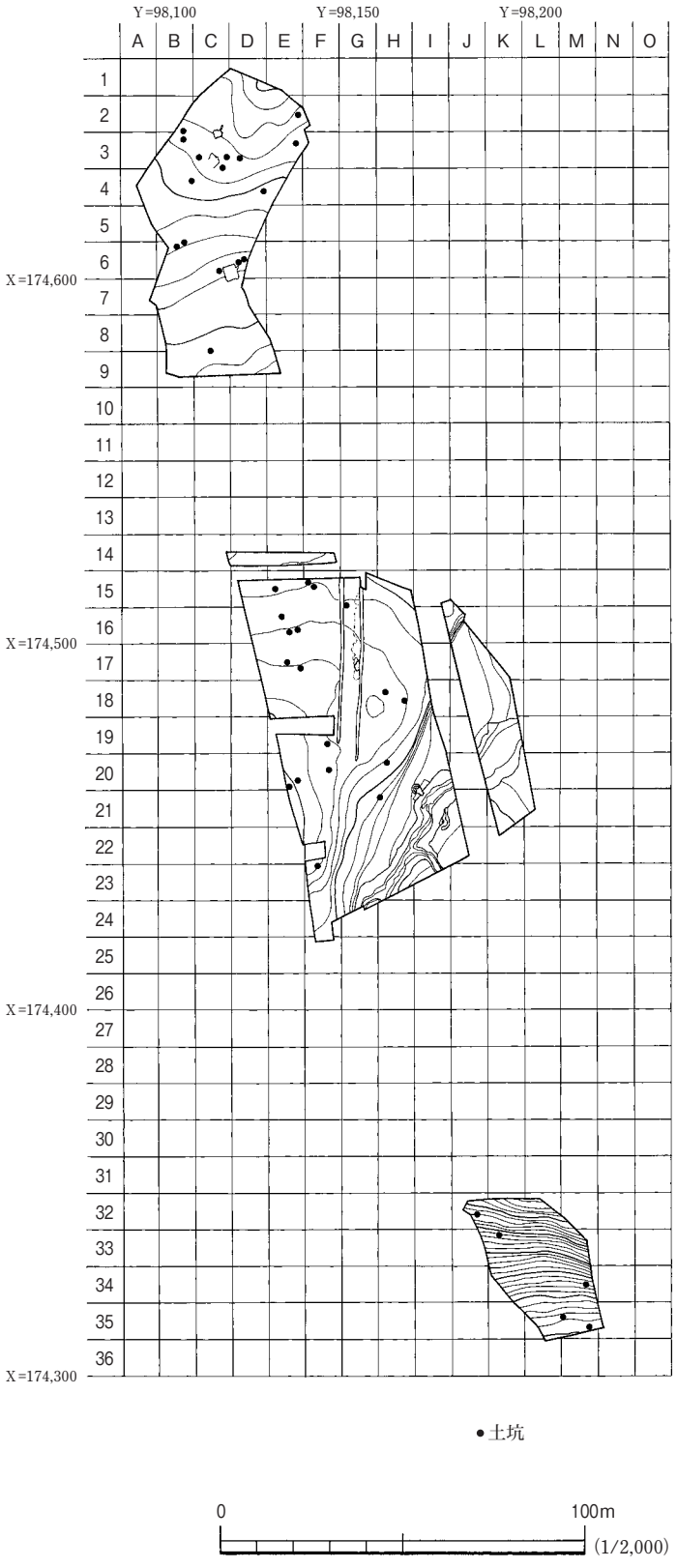


図２　グリッド遺構配置図

第２章　遺 構 と 遺 物

第１節　遺構の概要と基本土層

遺構の分布（図３～５，写真３～５）

本遺跡の調査で発見された遺構は，３つの調査区をあわせて，竪穴住居跡３軒，木炭窯跡２基，溝跡１条，道跡１条，土坑39基，特殊遺構１基である。

Ⅰ区で検出されたのは，竪穴住居跡３軒，土坑16基である。Ⅰ区には遺構の密度が高い部分が２カ所認められる。一つは調査区北部のＢ～Ｄの２～４グリッド付近，もう一つは中央部のＣ・Ｄの６～７グリッド付近である。いずれも竪穴住居跡とその周囲に複数の土坑が分布する。調査区北端の小谷に面した部分では縄文土器が多数出土している。

Ⅱ区で検出された遺構は，溝跡１条，道跡１条，木炭窯跡２基，土坑18基である。溝跡としたのは，台地を開析する自然の小谷で，調査区の最南部に位置する。２基の木炭窯跡はこの溝跡の斜面に掘り込まれている。これらを除くと遺構の分布に偏りはなく，散漫である。

Ⅲ区で検出された遺構は，土坑５基である。斜面の上方にあたる南部に３基，下方にあたる北部に２基が位置する。

出土した遺物は，縄文土器1,533点，土師器973点，須恵器42点，かわらけ１点，陶磁器１点，石器２点，石製品１点，鉄製品１点，炉壁片8,006ｇである。これらの遺物の年代は，縄文時代と平安時代，近現代の３時期である。

基 本 土 層（図６，写真６）

『表層地質図』にしたがえば，本遺跡の地盤の大部分は，「礫・砂・泥」の「未固結堆積物」で，遺跡南部の丘陵斜面にあたる部分が「中粒～粗粒砂岩・凝灰岩」の「半未固結堆積物」からなっている。調査区でいえば，前者がⅠ区とⅡ区，後者はⅢ区に対応する。

「礫・砂・泥」の「未固結堆積物」を地盤とするⅠ・Ⅱ区は，Ⅱ区のほぼ中央部を最高点に南北に緩やかに傾斜し，斜面下方に行くにしたがい表土が厚く堆積している。頂部付近では40㎝，斜面の下部では100㎝以上の厚さをもつ。ただし，Ⅰ区はゴミ穴や廃材坑などによる撹乱のため表土の残りが悪く，残りのよい部分でも厚さ10～20㎝程度であった。これはⅠ区が宅地だったことによるものと考えられる。これらを含めて表土に含められるものをＬⅠとした。

ＬⅠ直下には地点によって異なる土層が堆積している。Ⅰ区の南部を除いた大部分には，厚さ15㎝ほどの明黄褐色砂質土が堆積している。これをＬⅡとした。ＬⅡのうち調査区北側の小谷に接した部分には，縄文時代晩期の遺物を包含していた。Ⅱ区付近のもっとも標高が高い部分には明褐色のロームの堆積がみられた。これをＬⅢとした。ＬⅢの厚さは，もっとも厚い部分で100㎝である。

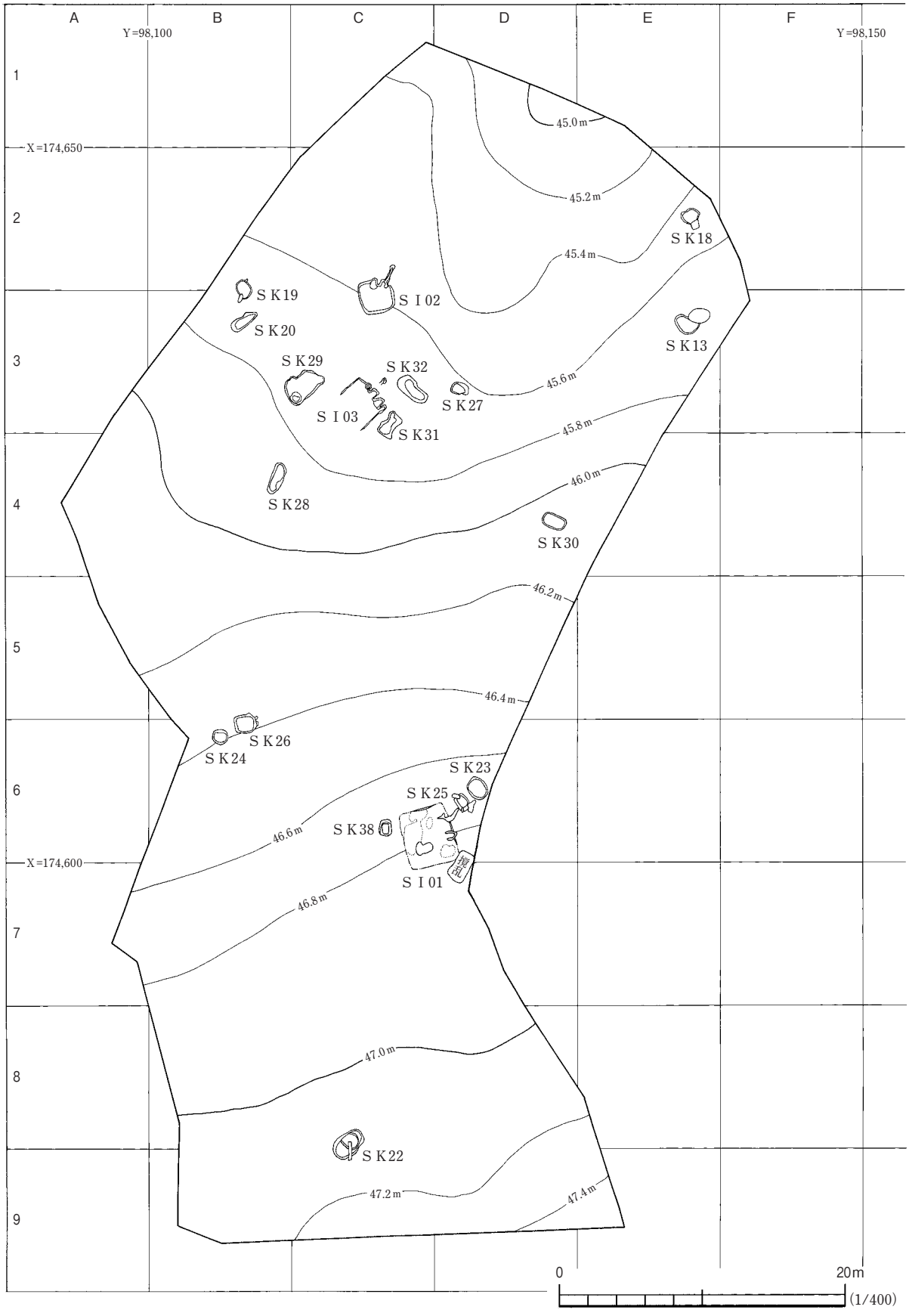

A
B
C
D
E
F
Y=98,100
Y=98,150
X=174,650
X=174,600
1
2
3
4
5
6
7
8
9
45.0m
45.2m
45.4m
45.6m
45.8m
46.0m
46.2m
46.4m
46.6m
46.8m
47.0m
47.2m
47.4m
SK18
SK19
SK20
SI02
SK13
SK29
SK32
SK27
SI03
SK31
SK28
SK30
SK26
SK24
SK23
SK25
SK38
SI01
SK22
0
20m
(1/400)

図３　遺構配置図（Ⅰ区）

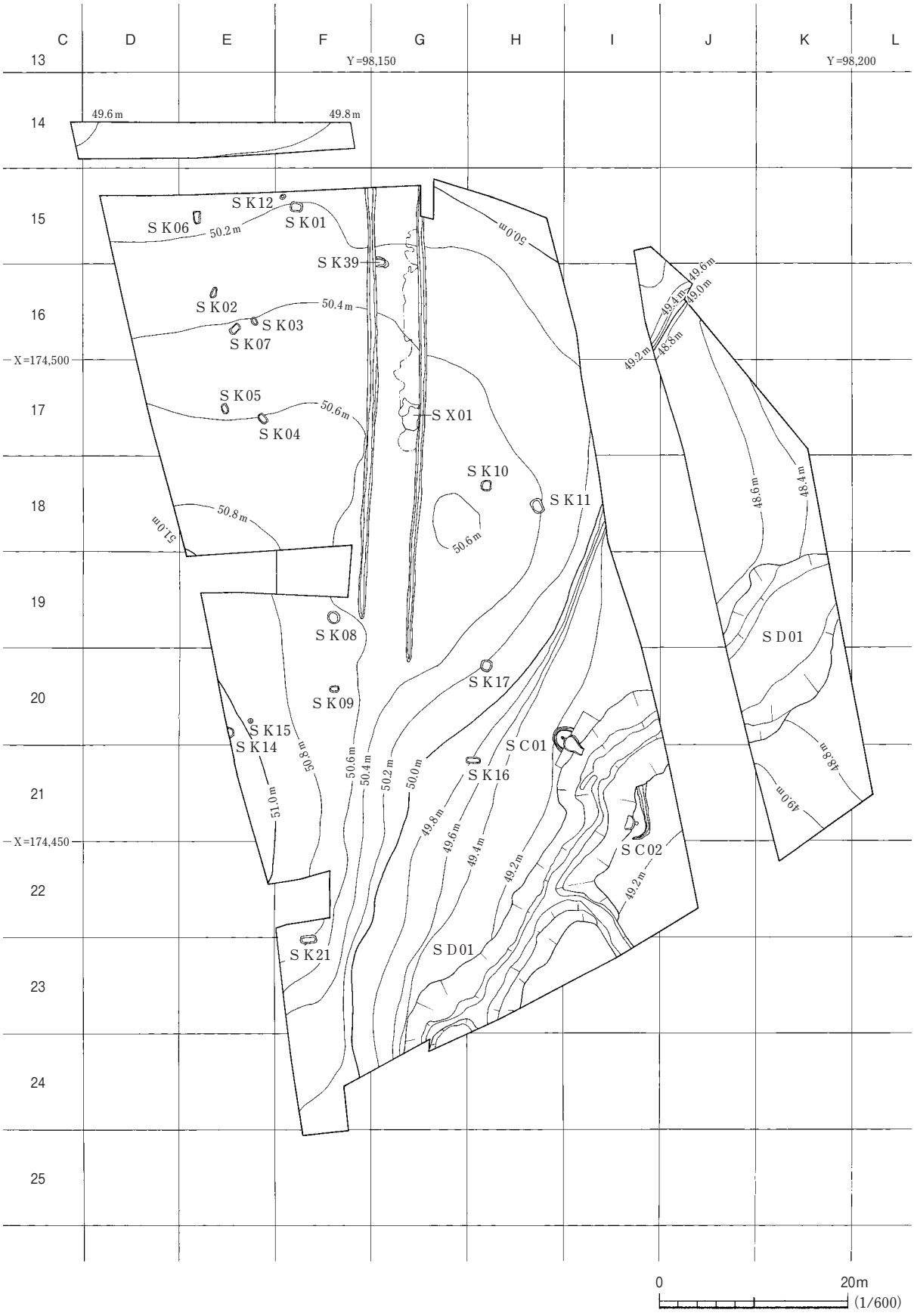

C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
Y=98,150
Y=98,200
X=174,500
X=174,450
49.6m
49.8m
S K12
S K06
S K01
50.2m
S K39
50.0m
S K02
50.4m
S K03
S K07
S K05
50.6m
S K04
S X01
S K10
S K11
50.8m
51.0m
50.6m
S K08
S K09
S K17
S K15
S K14
S C01
S K16
50.8m
50.6m
50.4m
50.2m
50.0m
51.0m
49.8m
49.6m
49.4m
49.2m
S C02
S K21
S D01
49.6m
49.4m
49.0m
49.2m
48.8m
48.6m
48.4m
48.8m
49.0m
S D01
0
20m
(1/600)

図４　遺構配置図（Ⅱ区）

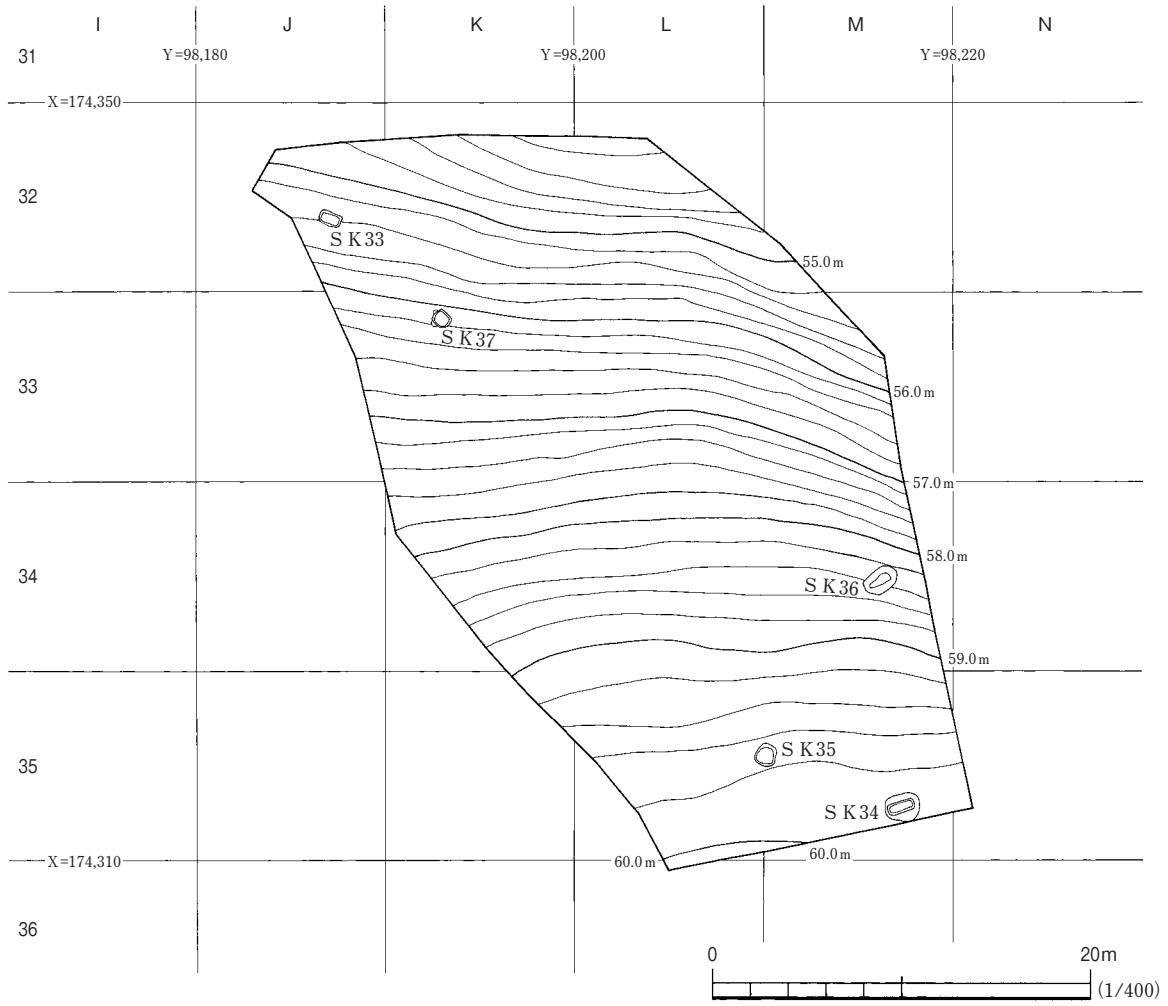


図５　遺構配置図（Ⅲ区）

ＬⅡ・Ⅲは調査区内に部分的に堆積しているのみである。ＬⅡ・Ⅲの下には，にぶい黄橙色粘土が堆積している。これをＬⅣとした。ＬⅣは，Ⅰ区の北端部分を除いた部分からⅡ区の北端部分にかけてとⅡ区の南端部では，ＬⅠの直下に堆積している。いずれも緩やかな起伏をもつ台地の頂部付近からやや下った部分である。本遺跡で見つかった遺構は，すべて表土直下で検出され，ＬⅡ・Ⅲ・Ⅳのいずれかの上面を検出面としている。

ＬⅣ以下には，ＬⅤ・Ⅵが堆積している。ＬⅤは浅黄橙色砂層で，白色の小礫と礫を多く含んだしまりの強い層である。ＬⅥは灰黄褐色粘土層である。Ⅱ区の小谷の掘削の際，底面付近でのみ確認された。

「中粒～粗粒砂岩・凝灰岩」の「半未固結堆積物」を地盤とするⅢ区では，表土であるＬⅠの厚さが約30㎝で，その下に明褐色のローム層が堆積している。この層はⅡ区のＬⅢに対応するものと考えられる。Ⅲ区の遺構検出面はこのＬⅢ上面である。ＬⅢの下には，黄褐色土層が堆積している。この層はＬⅣに対応するものと思われるが，色調と土質に違いがあることからＬⅣ′とした。

（青　山）

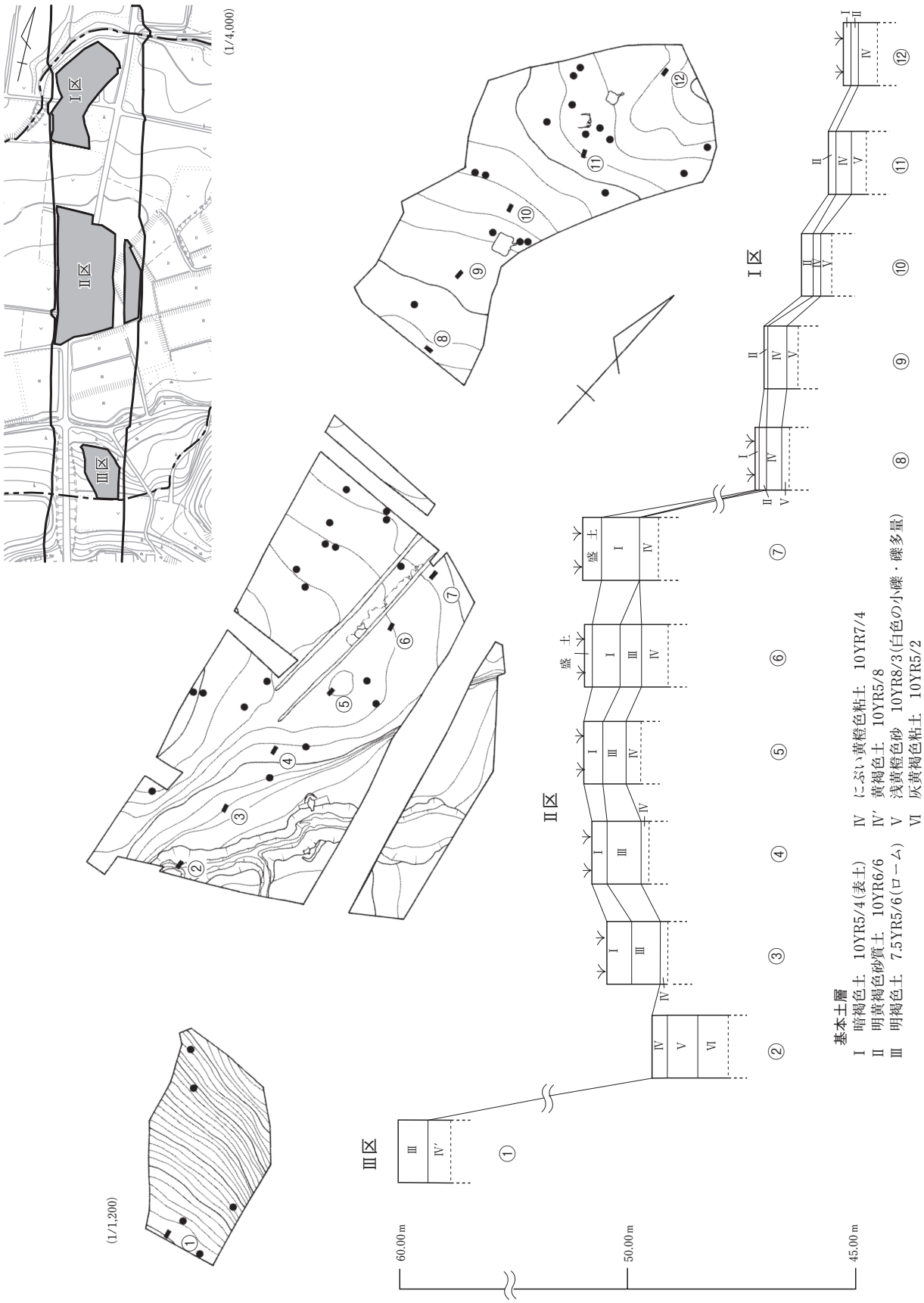

(1/4,000)
Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ区
(1/1,200)
Ⅲ区
Ⅱ区
Ⅰ区
盛土
60.00m
50.00m
45.00m
基本土層
Ⅰ　暗褐色土　10YR5/4(表土)
Ⅱ　明黄褐色砂質土　10YR6/6
Ⅲ　明褐色土　7.5YR5/6(ローム)
Ⅳ　にぶい黄橙色粘土　10YR7/4
Ⅳ′　黄褐色土　10YR5/8
Ⅴ　浅黄橙色砂　10YR8/3(白色の小礫・礫多量)
Ⅵ　灰黄褐色粘土　10YR5/2

図６　基本土層

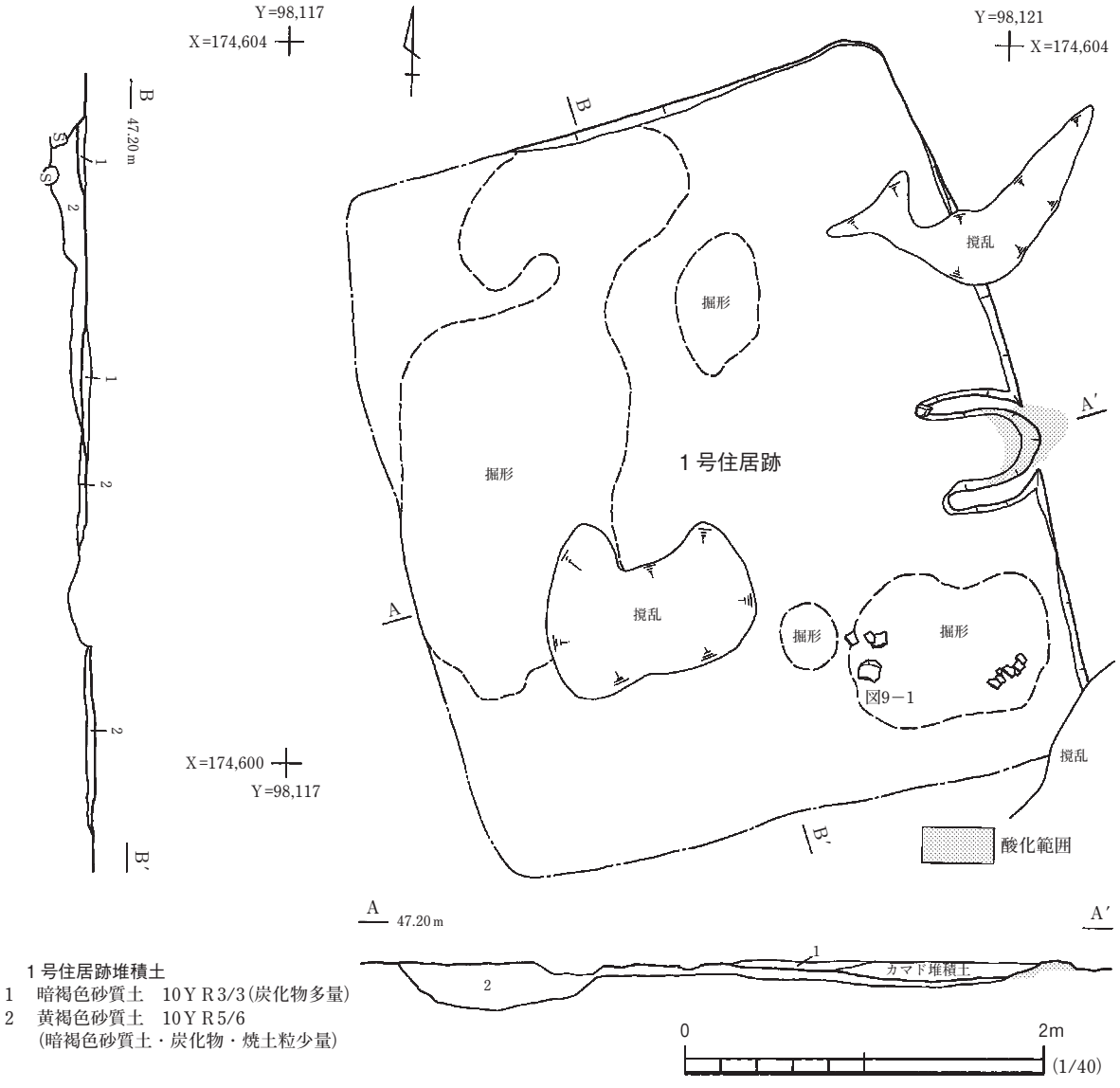
第２節　竪 穴 住 居 跡

１号住居跡　ＳＩ01

遺　　構(図７・８，写真７・８)

本遺構は調査Ｉ区中央部のＣ６・７，Ｄ６・７グリッドに位置する。表土層であるＬＩを除去した時点で本住居跡の床面が露出し，土器片や焼土粒が散見していた。また，遺構の存在は容易に把握できたが，遺構の内外に木の根や後世の撹乱，さらにＬⅡに部分的に含まれていた礫層などの存在から検出は困難であった。遺構の輪郭を確定できたのはＬⅡを少し掘削した段階であった。重複する遺構はないが，北東側にＳＫ23・25，西側にＳＫ38がそれぞれ位置する。

遺構内堆積土は２層のみである。ℓ１は暗褐色土で，焼土・炭化物を多く含む遺構廃絶後の堆積



１号住居跡堆積土
1　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3(炭化物多量)
2　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6
(暗褐色砂質土・炭化物・焼土粒少量)

図７　１号住居跡

土である。カマド周辺と北辺のみに残存していた。ℓ２はしまりのややある黄褐色土で，この上にカマドなどが構築されていた点などから貼床と判断した。

平面形はやや歪んだ方形を呈し，西辺と東辺の中点を結んだ線はＮ74°Ｅを指す。貼床の残存範囲での規模は長軸401㎝，短軸354㎝，残りのよい北壁付近の検出面から床面までの深さ８㎝をそれぞれ測る。周壁は北壁とカマドのある東壁のみ残存しており，本来の形状は不明であった。遺存高は北壁で８㎝，東壁で６㎝をそれぞれ測る。床面はほぼ全面に貼床が施され平坦化していたものの，堅固な踏みしまりなどは認められない。

この床面からは柱穴などは検出されず，カマドのみが確認された。カマドは東壁の中央やや南側に位置する。遺存状態は悪く，両袖と煙出しの痕跡がわずかに確認された。カマドの規模は長さ62㎝，幅70㎝を測る。両袖はＬⅢ起源の明黄褐色土とにぶい黄褐色土の混土で構築され，袖の長さは，右袖で56㎝，左袖で58㎝を測る。袖の床面からの高さは両方とも６㎝程度の残存であった。

燃焼部の範囲は奥行き61㎝，最大幅40㎝で特に煙道付近が被熱により強く酸化していた。煙道は基底面のみの検出で，本来の長さやその形状は不明である。

カマド堆積土は３層からなる。最上層のℓ１は住居内堆積土と共通し，ℓ３は焼土塊を多く含むことからカマド天井の崩落土と考えられる。

なお，貼床除去後に掘形を確認した。掘形は住居の各コーナー部のみが高く，中央部にかけて３～５㎝ほど掘り込まれて低くなる。さらに一部を小穴状に掘り込んだ痕跡が４カ所認められた。堆積土はいずれも貼床と同じℓ２で，掘り込んですぐ埋められており，このことから掘形と判断した。また，小穴の位置からは建て替えられた古い住居が存在した可能性も有するが，基盤層のＬⅡは礫が多く，居住に適さないことから貼床を施したものと考えられる。

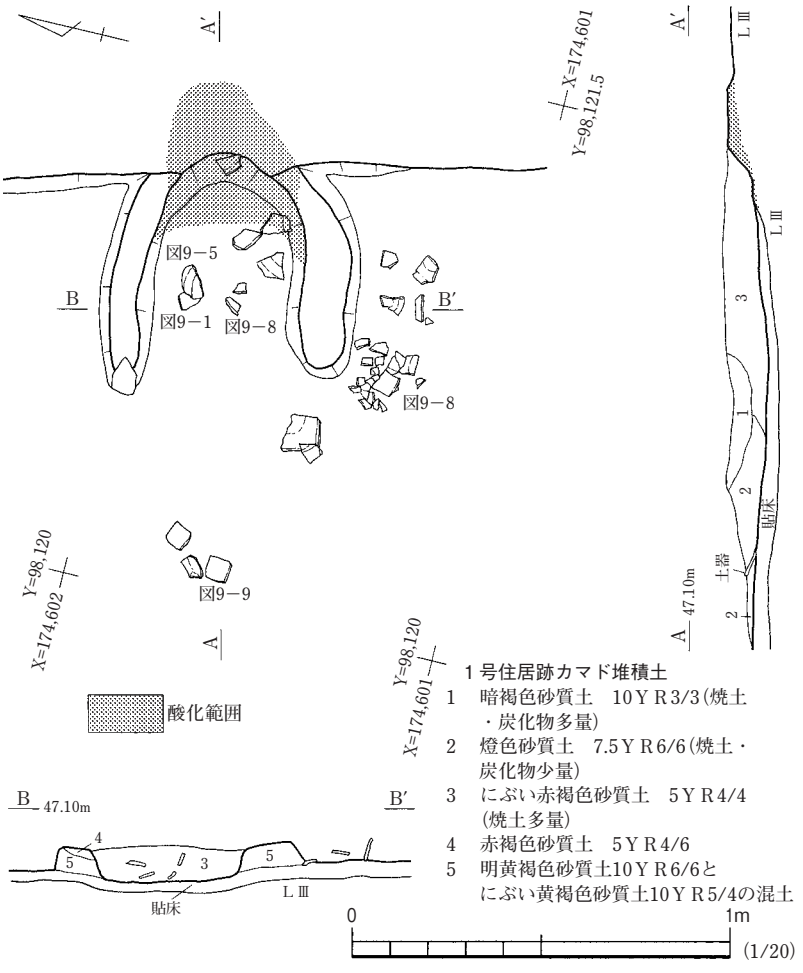


図８　１号住居跡カマド

遺　　物(図９，表１，写真28・29)

遺物は，床面や貼床を中心に土師器593点，須恵器２点，炉壁片2,446ｇが出土し，このうち図示したものは18点である。筒形土器を除く土師器はすべてロクロ成形で，甕類が大半を占める。瓶ないし壺の須恵器胴部片や炉壁片の大半は掘形内から出土した。

図９－１～６はロクロ成形の土師器杯で，すべて内面黒色処理されている。１は住居内で唯一完形の杯である。底部から体部下端に回転ヘラケズリが施され，体部外面中半から口縁部にかけて油煙の付着が観察される。３は底部が15％残存する資料で，体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが観察される。４・５は底部切り離しが回転糸切りとなる。６は25％の残存で口縁部が欠損する資料である。全体的に摩滅が著しく底部切り離しは不明，体部外面下端に手持ちヘラケズリが観察され，内面は被熱により焼けはぜている。なお，体部外面には一部墨書がかすかに確認できるが，判読は不可能であった。

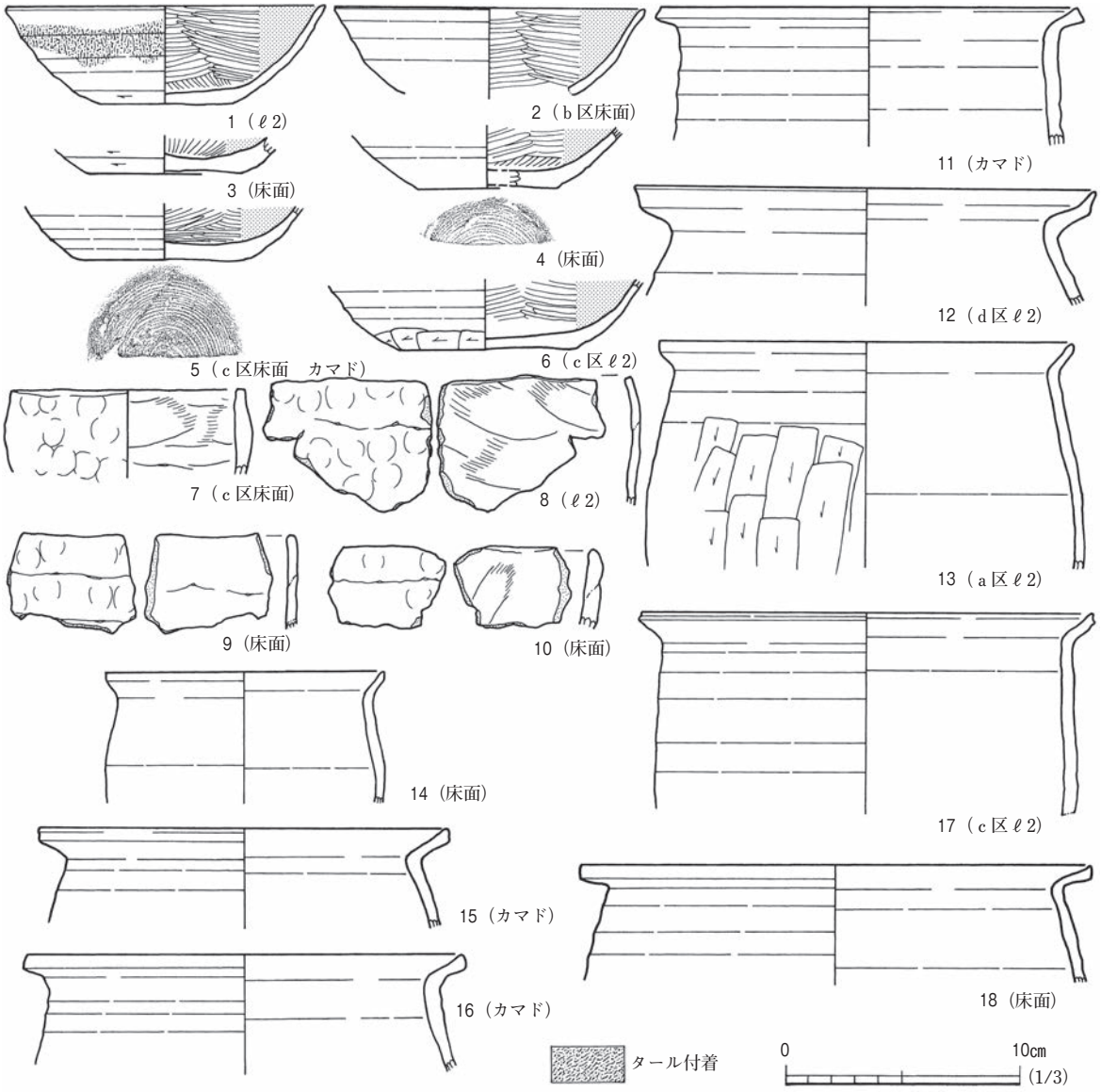


図９　１号住居跡出土土師器

７～10は筒形土器である。いずれの資料も粘土紐積み上げ後，外面が指頭痕，内面ナデによって整形している。特に８・９はカマド右袖脇から集中して出土したものの一部である。全体的に多く出土したものの，土器間の接合はほとんどなかった。

11～18はロクロ成形の甕となる。12は，直立気味につまみ出した口縁端部を有する。13は，「く」の字状の口縁部と胴部外面に下方向のヘラケズリが観察される資料である。14は小型の甕で，口縁部は頸部から引き出されるように移行し，口縁端部はやや直立する器形となる。15～18は11と同様に，口縁部が肥厚し，端部が短く直立する形態を示す甕となる。

ま　と　め

本住居跡は一辺４ｍ弱の住居跡である。柱穴は確認されなかったが，東側にカマドを有する。出土土器の年代観から９世紀中頃の所産と考えられる。（管　野）

２号住居跡　ＳＩ02

遺　　構（図10・11，写真９・10）

本遺構は，調査Ｉ区の北部，Ｃ２・３グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。本遺構の堆積土の上部は黒色であったのに対し，下部は検出面であるＬⅡの土色に近い褐色で，当初は上部の黒色土の範囲のみを土坑と判断したが，掘り込みの途中で住居跡であることが判明した。検出された場所は平坦であるが，南から北に向かってきわめて緩やかに下っている。南方約５ｍにはＳＩ03とＳＫ29・32，西方約８ｍにはＳＫ19・20がある。

平面形は，隅がやや丸く，各辺がやや外側に湾曲した方形で，東西側の辺は北から15～25°西にふれている。規模は西辺で2.0ｍ，南辺で2.1ｍである。各辺のもっとも張り出した部分の間で計測すると，それぞれ2.5ｍである。壁の高さは各辺ともほぼ同じで，23㎝である。

住居内堆積土は，３層がレンズ状に堆積していた。ℓ１は黒色土であるのに対し，ℓ２・３は基本土層のＬⅡに近い褐色土と暗褐色土であった。

北東隅にはカマドが敷設され，煙道が北東方向に伸びる。カマドは床面上に構築され，幅110㎝である。カマドの底面は皿状に浅く掘りくぼめられていた。左右の袖が遺存し，左袖の長さは60㎝，右袖の長さは39㎝である。袖は，カマド底面から最大30㎝の高さで遺存していた。袖の大部分はにぶい黄褐色土の盛土で構築され，床面直上のみ炭化物粒と焼土粒を多く含んだ暗褐色土が薄くみられた。袖の中には構築材と考えられるこぶし大ほどの川原石が多く，鉄滓の溶着した製練炉の炉壁片を少量含んでいた。カマド内の堆積土からも，川原石が多く出土した。カマドの底面に，焼土化した部分は認められず，カマド内の堆積土にも焼土粒や炭化物はほとんど含まれていなかった。これらのことから，このカマドはほとんど使用されなかったものと思われる。ただし，左袖の燃焼室側に偏平な面を露出していた１個の川原石だけは，一部が赤変していた。

煙道はやや幅を狭めながらほぼ直線的に伸び，先端には煙出し穴が煙道より深く掘り込まれている。煙道の長さは，煙出し穴を含めて133㎝である。煙道の幅は，最も広い部分で25㎝，最も狭い

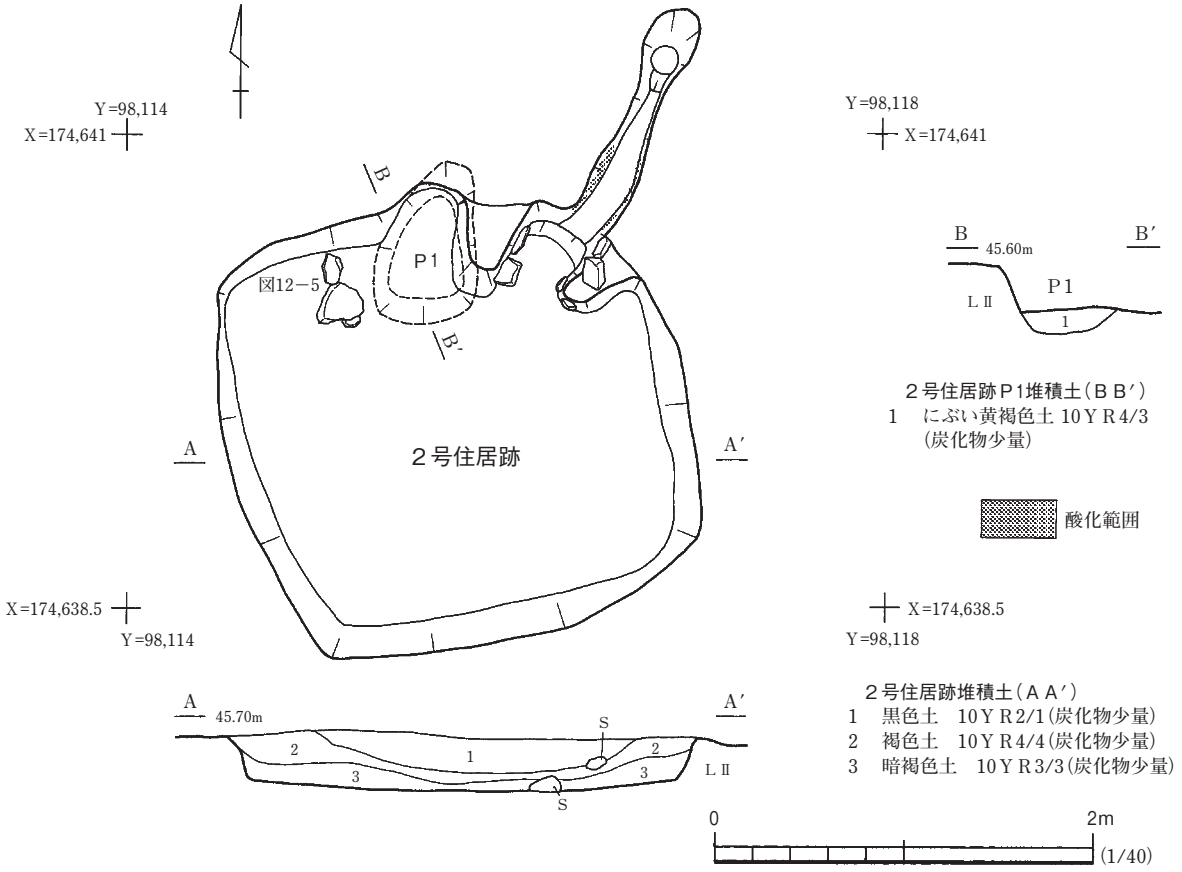


図10　２号住居跡

部分で14㎝である。煙道の底面はカマドの底面より７㎝高く，両者は緩やかなスロープでつながっている。煙道の底面はほぼ平坦で水平に伸び，深さはもっとも深い部分で22㎝である。煙出し穴の深さは34㎝で，煙道の底面との差は17㎝ある。煙道のうち，カマドに近い部分のみが被熱のため赤変硬化していた。赤変硬化していた部分は，両側壁のカマドに接する部分から45㎝ほどの範囲で，底面は赤変硬化していなかった。

北壁際のほぼ中央，カマド左袖の脇の床面からピットが検出された。これをＰ１とした。Ｐ１の掘り込みの時，その堆積土の一部がカマド左袖の下に延びていくことがわかった。カマド袖との上下関係を検討した結果，カマドの左袖の一部は，Ｐ１の堆積土の上面に構築されていることがわかった。このことはＰ１の埋没ののち，カマドが構築されたことを示している。

Ｐ１の平面形は南北方向にやや長い楕円形で，長径44㎝，短径29㎝，床面からの深さ７㎝である。北壁に接する部分では壁の一部を10㎝ほど横穴状に掘り込んでいる。

カマドとＰ１の関係は，カマドには火が焚かれた痕跡がないにもかかわらず，カマド袖構築土の下部に炭化物と焼土を多く含み，煙道にも被熱の痕跡があること，カマド袖に含まれる川原石の一つだけが被熱しているという前述の所見から，カマドが一定期間使用されたのちに造り替えが行われたことが示唆される。造り替えの時に，カマド底面を掘りくぼめることによる焼土面の除去と，Ｐ１を埋めた上への新しいカマド袖の構築が行われたものと考えられる。壊されたカマドの構築材

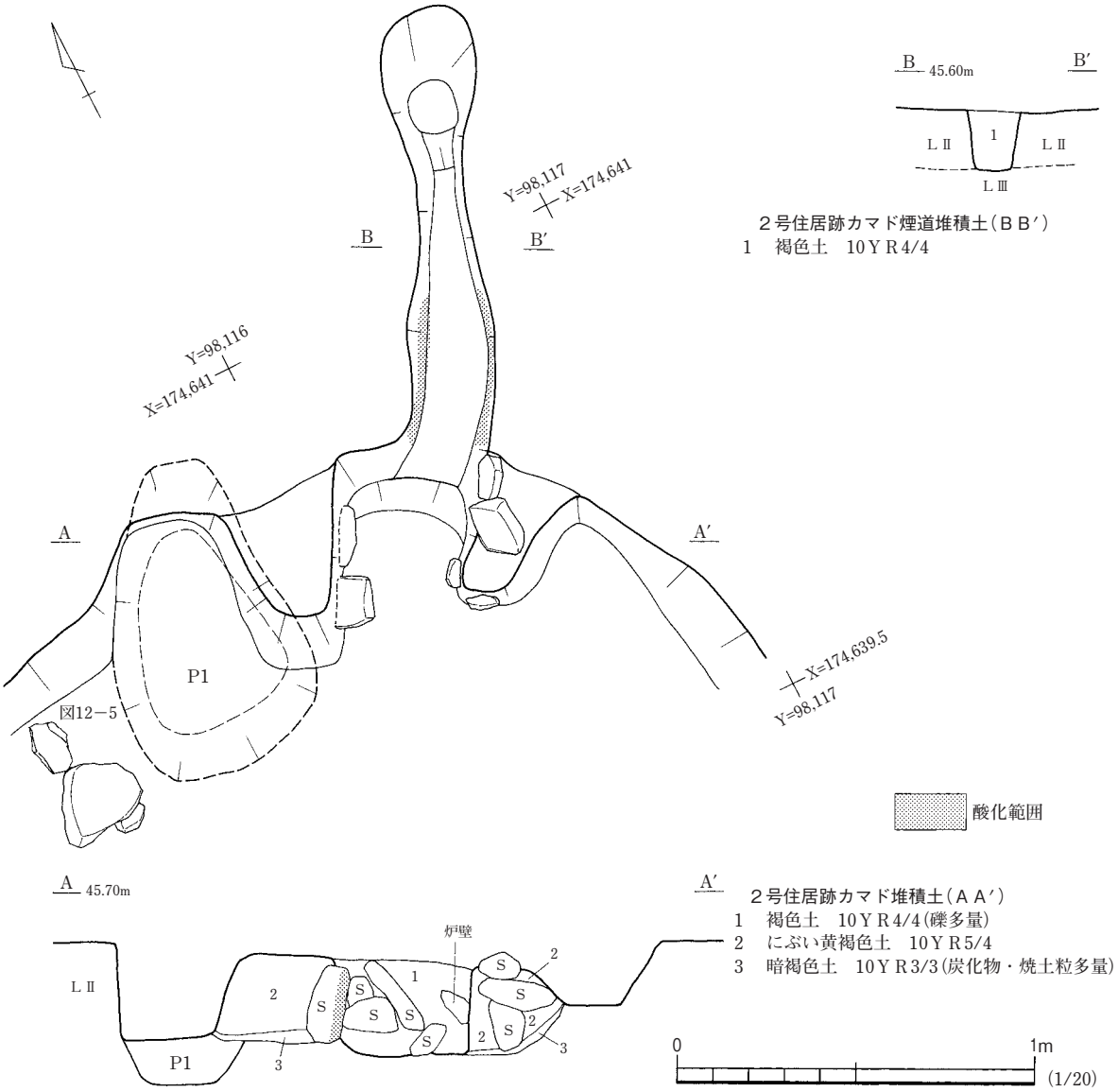


図11　２号住居跡カマド

に使われ被熱した川原石が，新しいカマドの構築に際して再利用されたものと思われる。ただし，新しく構築されたカマドは何らかの理由でほとんど使用されなかったようである。

北壁際のＰ１西側の床面には，やや扁平な自然石が置かれていた。大きさは，長軸25㎝，短軸20㎝，厚さ10㎝ほどであった。この自然石と北壁の間の床面から，土師器の壺が１点出土している。このほか床面，カマド内，堆積土から土師器と須恵器が出土している。

床面から柱穴は見つからなかった。床面の断ち割りを行ったが，貼床は確認できなかった。

遺　　物(図12，表１，写真28・30)

本住居跡からは，土師器175点，須恵器34点，縄文土器４点，カマド構築材に使われた製錬炉の炉壁片が2,750ｇ出土している。このうち土師器５点，須恵器４点を図示した。

図12－１～４は，土師器の杯である。いずれもロクロ成形で，外面底部付近に回転ヘラケズリによる再調整が，内面はミガキののち黒色処理が施されている。

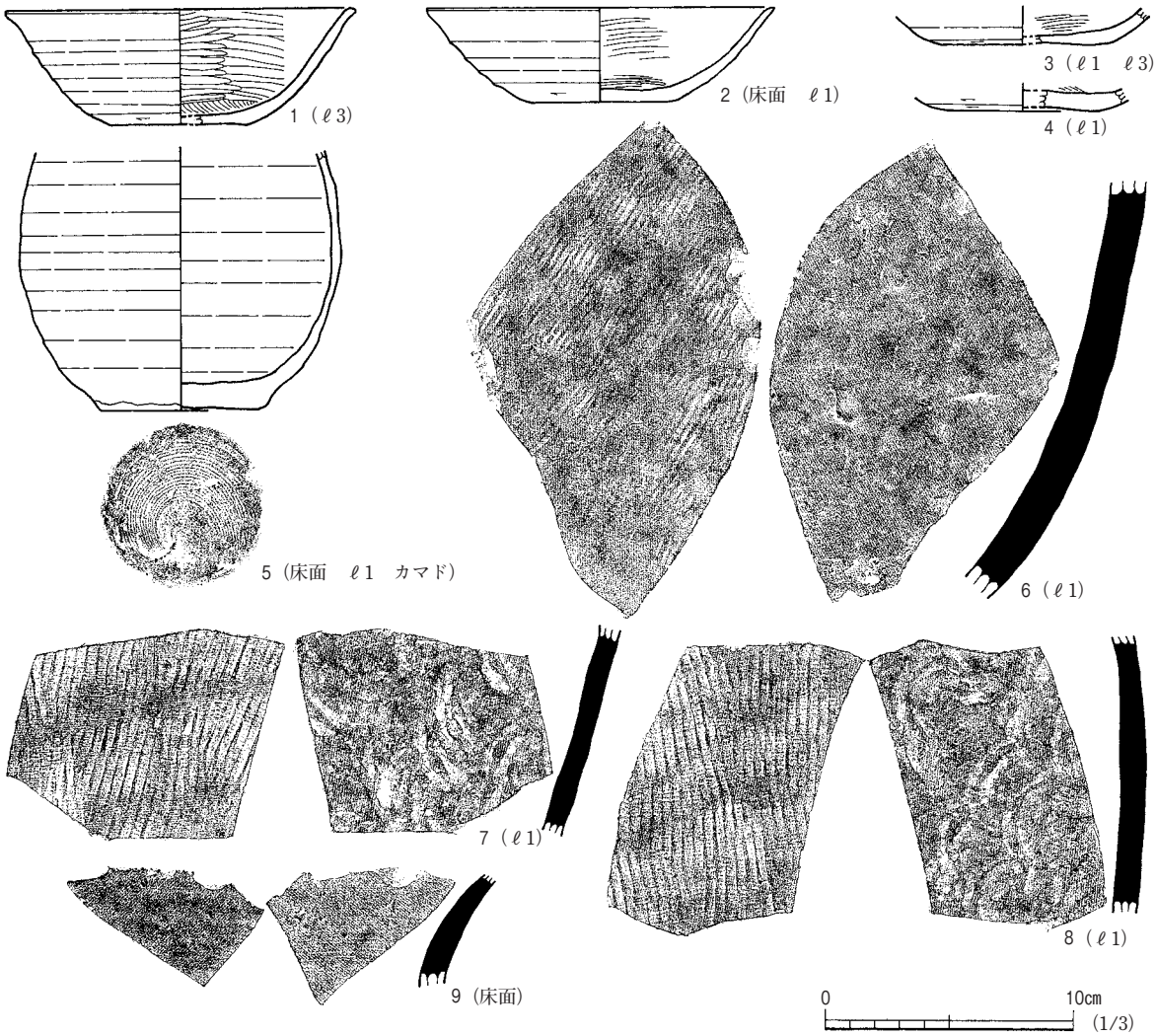


図12　２号住居跡出土土師器・須恵器

１は全体の30％ほどが遺存している。床面に近いℓ３から出土した。平底の底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。２は全体の70％ほどが遺存している。床面から出土した。平底の底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。全体的に被熱のために赤変劣化している。特に内面の底部付近は器面の剥落が激しく，黒色処理がとんでいる。３・４は底部のみの破片である。

５は，土師器の壺である。床面とカマド内から出土した破片が接合した。平底の底部と内湾する体部をもつ。体部上半と口縁部を欠損する。内外面ともロクロナデが施され，底部外面は糸切り痕が残されている。

６～９は，須恵器の大甕である。６～８は堆積土から，９は床面から出土し，いずれも破片である。６～８は体部の一部で，いずれも外面にタタキメが施されている。内面は，６が指頭圧痕とナデが，７・８はアテ具痕がみられる。７と８は，胎土・色調・調整が似ていることから同一個体と思われる。９は頸部の破片である。内外面にロクロナデが施されている。

ま　と　め

本遺構は，一辺２ｍほどの小型の竪穴住居跡である。北東隅の壁にカマドを設けている。カマド

は造り替えが行われているようであるが，造り替え後のカマドはあまり使用されなかったようである。時期は出土した土器から，およそ９世紀の前半頃と思われる。　（青　山）

３号住居跡　ＳＩ03

遺　　構(図13・14，写真11・12)

本遺構は，調査Ｉ区の北部，Ｃ３グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。本遺構の堆積土の上部は黒色であったのに対し，下部は検出面であるＬⅡの土色に近い灰黄褐色で，当初は上部の黒色土の範囲のみを土坑と判断したが，掘り込みの途中で住居跡であることが判明した。検出された場所は平坦であるが，南西から北東に向かってきわめて緩やかに下っている。本遺構の周辺には遺構が比較的多い。北方約５ｍにはＳＩ02，東側約１ｍにはＳＫ31，北東約２ｍにはＳＫ32，西側約２ｍにはＳＫ29がある。

本住居跡は遺存状態が悪く，西側の約半分は遺存していなかった。平面形はほぼ方形であったものと思われる。住居跡の向きはふれが大きく，東南辺と北西辺で測れば北から約50°東にふれている。規模は，四辺のうち唯一全体が遺存している北東辺で長さ283㎝である。東南辺は235㎝，北西辺は175㎝のみがそれぞれ遺存していた。南西辺はまったく遺存していなかった。壁の高さは，もっとも残りのよい東隅で14㎝である。

住居内堆積土は，２層に分けられ，これらは自然堆積と判断した。ℓ１は黒褐色土であるのに対し，ℓ２は基本土層の土色に近い灰黄褐色土であった。いずれの層にも，こぶし大までの大きさの礫を少量含んでいた。

北東辺のほぼ中央部の壁にはカマドが付されている。

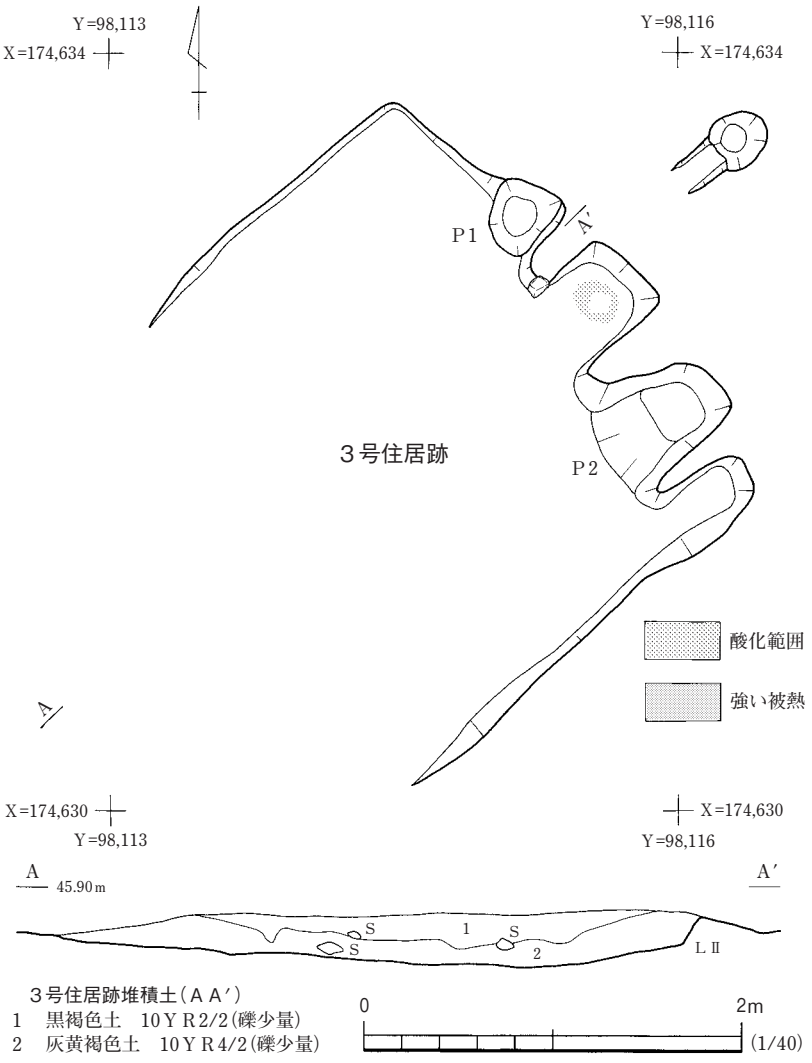


図13　３号住居跡

カマドは床面上に構築され，幅110㎝である。左右の袖が遺存し，左袖の長さは49㎝，右袖の長さは72㎝である。袖は，床面から最大19㎝の高さで遺存していた。袖は暗褐色土の盛土で構築され，左袖の中には構築材と考えられるこぶし大ほどの川原石を数個含んでいた。カマドの底面のほぼ中央は，被熱のため楕円形に赤変硬化していた。範囲は，長軸26㎝，短軸21㎝ほどで，中央部がより強く赤変硬化していた。カマド底面を断ち割ったところ，赤変硬化した部分は２㎝の厚さに及んでいることがわかった。カマド内の堆積土は，２層からなる。ℓ１は灰黄褐色土，ℓ２は褐色土で，いずれにも焼土粒と炭化物粒をやや多く含んでいた。

カマドからは煙道は取り付かないが，カマドの奥壁から北東方向へ75㎝のところにピットと，このピットからカマド方向に25㎝ほど伸びる短い溝が検出された。ピットの平面形はややいびつな円形で，直径29㎝，深さ22㎝，溝は幅19㎝，深さ８㎝で，ピットの底面と溝の底面との高低差は14㎝である。このピットと溝の堆積土には焼土粒と炭化物粒が含まれていた。これらが煙道と煙出し穴と考えられる。

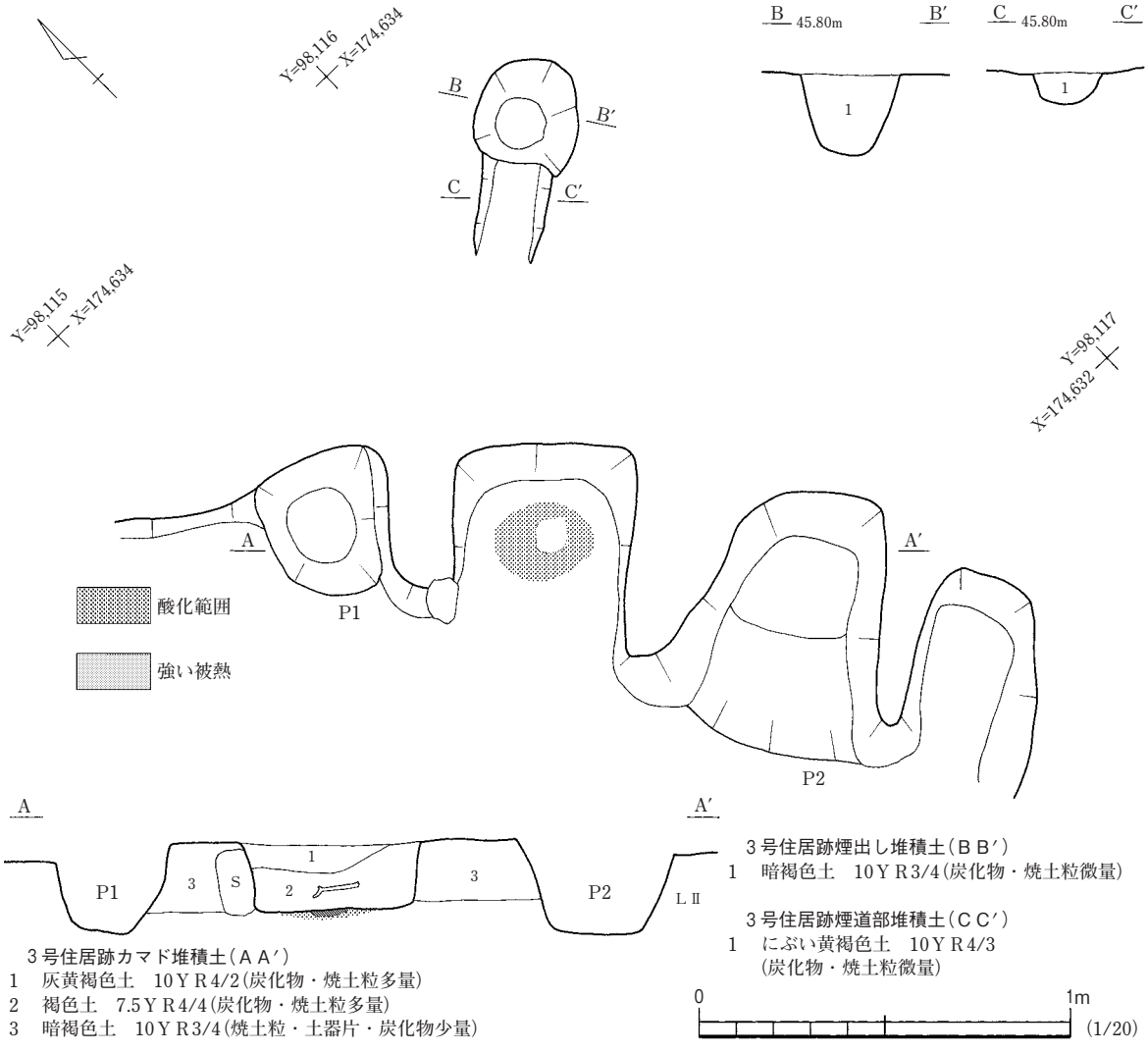


図14　３号住居跡カマド

北東壁際からは，２基のピットが検出された。ピットはカマドの両脇に掘り込まれ，それぞれカマドの袖に接していた。左袖に接するピットをＰ１，右袖に接するピットをＰ２とした。

Ｐ１の平面形はいびつな円形である。径は，最も大きい部分で33㎝を測り，もっとも小さい部分で20㎝，床面からの深さは10㎝である。壁は比較的急な角度をもって立ち上がる。Ｐ２の平面形は，床面中央に向かってわずかに開く台形で，壁に向かって右側に土手状の高まりをもつ。この高まりは，地山を掘り残して作られ，壁から直線的に伸びている。長さ60㎝，幅はもっとも広い部分で22㎝，高さ８㎝である。壁は，北東壁とカマド袖と土手状の高まりに接した部分は急な角度で立ち上がるものの，床面に接する部分のみはスロープ状のきわめて緩やかな角度をもって立ち上がる。規模は，北東壁から床面までが72㎝，カマド袖と土手状の高まりの上場までが最大で56㎝である。

床面から柱穴は見つからなかった。床面の断ち割りを行ったが，貼床は識別できなかった。

遺物は，Ｐ２からややまとまって出土したほか，カマド内から出土した。Ｐ２からは，ほぼ完形の土師器の杯が底面から１点出土したほか，底面と堆積土中から土師器の杯と甕が破片の状態で出土した。カマドからは，堆積土の中から甕の破片が複数個出土した。

遺　　物(図15，表１，写真28)

本住居跡からは，土師器128点が出土している。このうち土師器４点を図示した。

１は，ロクロ成形の杯である。体部から口縁部にかけて一部欠損するほかは，ほぼ完形である。平底の底部からやや内湾しながら立ち上がり，口縁部にいたる。体部の外面にはロクロナデ，底部には回転糸切り痕が付され，底部付近に手持ちヘラケズリによる再調整が施されている。内面には，ミガキののち黒色処理が施されている。

２～４は甕である。２は，粘土紐の積み上げにより成形されている。口縁部と体部上半の一部のみ遺存する。ほぼ直立する体部と，短く外反する口縁部をもつ。外面は，強い被熱のため赤変と器面の剥落が激しく調整は明らかでないものの，体部の

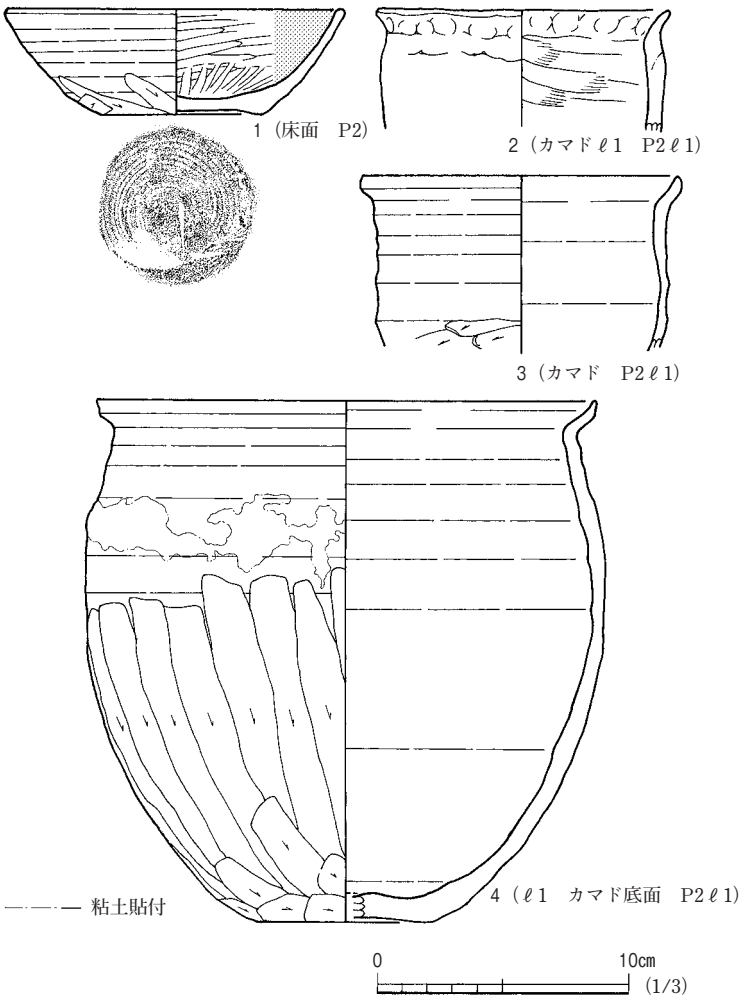


図15　３号住居跡出土土師器

一部に粘土紐の積み上げ痕を残す。口縁部には，内外面に指頭圧痕が残されている。体部内面は，横方向のナデが施されている。３はロクロ成形である。口縁部から体部上半の一部が遺存する。体部上半はほぼ直立し，短く外傾する口縁部をもつ。口縁端部は上方につまみ出されている。体部下半は遺存しないものの，底部に向かってすぼまるものと考えられる。調整は，内外面ともロクロナデの後，外面の体部下半にヘラケズリが施されている。被熱のため，外面の一部が赤変している。４は全体の約４分の１が遺存する。平底の底部と上半に最大径をもつ体部，外傾する口縁部をもつ。口縁端部は上方につまみ上げられている。内外面ともロクロナデが施された後，外面の体部下半にヘラケズリが施されている。外面の体部上半と底面の一部には泥土が固着している。

ま　と　め

本遺構は遺存状態が悪いものの，遺存していた北東辺で2.8ｍの規模をもつ住居跡である。北東辺の壁にカマドを設けている。時期は，出土した土器からおよそ９世紀と思われる。　（青　山）

第３節　木　炭　窯　跡

本遺跡からは，２基の木炭窯跡が検出された。いずれもⅡ区の南部に位置する自然の小谷であるＳＤ01の斜面の両側を利用して，互いに向かい合うように構築されていた。

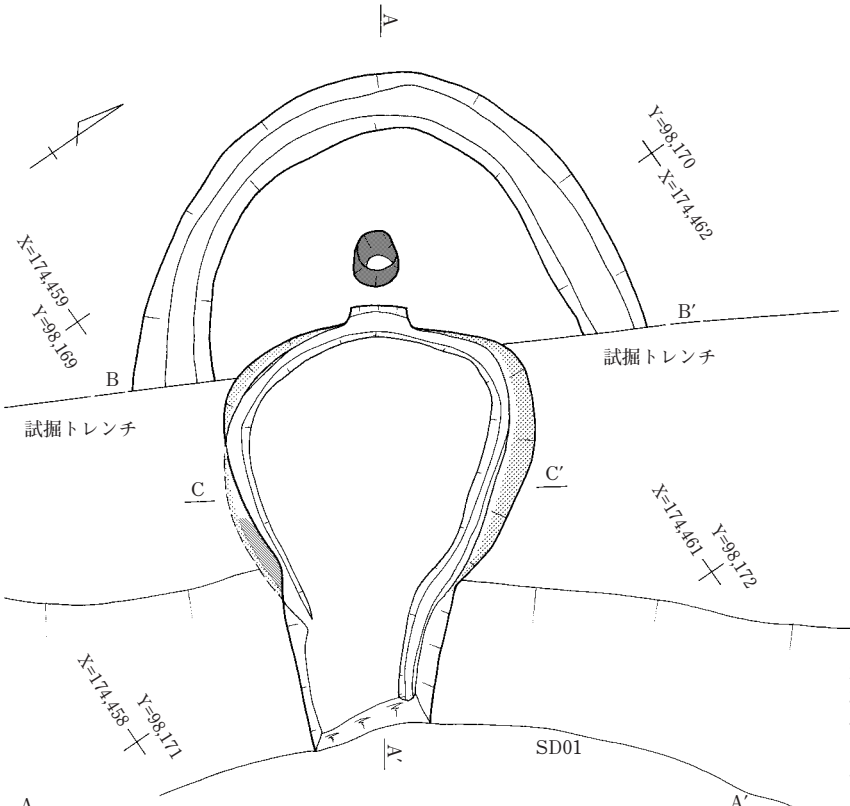
１号木炭窯跡　ＳＣ01（図16・17，写真13～15）

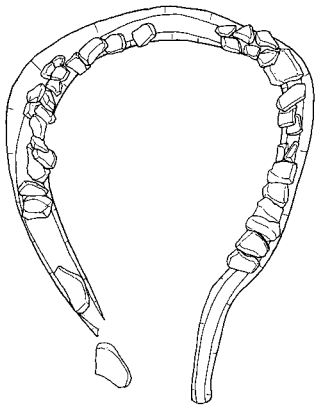
本遺構は，Ⅱ区の南部，Ｈ・Ｉの20・21グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。本遺構の本体の大部分は，試掘調査の時にすでに検出されていた。これに加え，今回の本調査における本体周辺の精査によって，煙出し穴とその周辺を囲む１条の溝跡を検出した。この溝跡を，１号木炭窯跡付属溝とした。木炭窯跡の本体には，焼土粒と炭化物を含んだ極暗褐色土，１号木炭窯跡付属溝には黒褐色土が堆積し，ＬⅣとの識別は容易であった。

本木炭窯跡の本体が検出されたのはＳＤ01の南西斜面の上部で，煙出し穴と１号木炭窯跡付属溝が検出されたのはＳＤ01北西側の平坦面である。本木炭窯跡南方約９ｍのＳＤ01の対岸にあたる斜面には，本木炭窯跡と向かい合うようにＳＣ02が位置する。

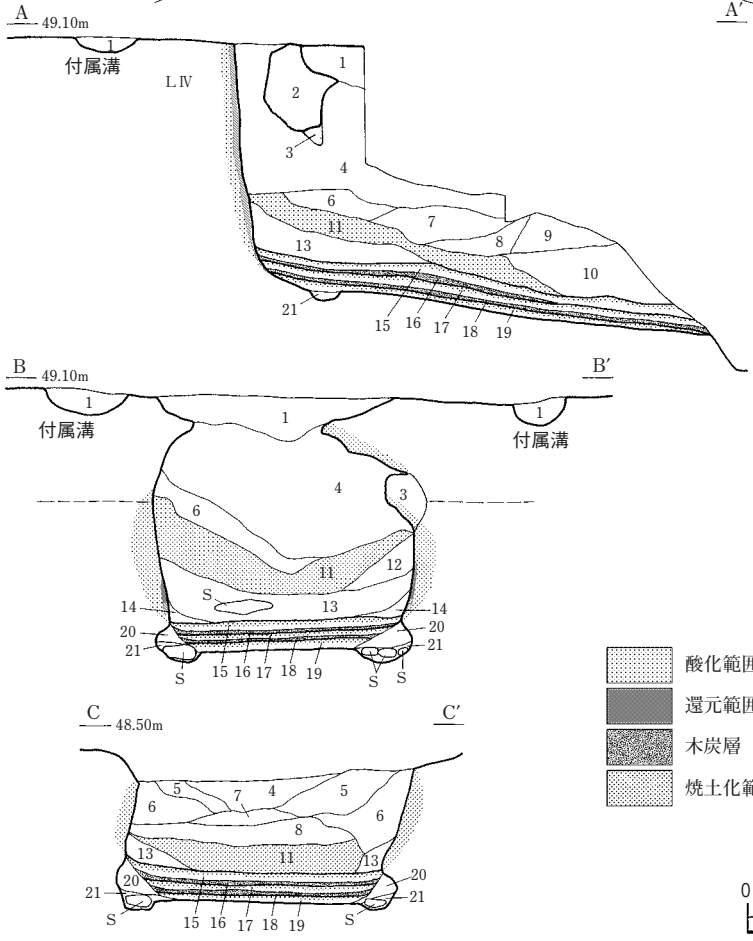
本木炭窯跡は，焼成室，焚口，煙道，煙出し穴からなる。焼成室と焚口の天井はすでに崩落して木炭窯跡内に落ち込んでいた。焚口の両側壁と焼成室の奥壁と両側壁はいずれも遺存し，奥壁上部のみは天井の一部が崩落せずに遺存していた。焼成室の天井の崩落後にできたと考えられる陥没孔には，黒褐色や暗褐色の土が堆積していた。以上のように天井部は遺存していないため旧状は不明であるものの，ＳＤ01の斜面に露出した基本土層のＬⅣ～Ⅵにかけての地盤を等高線に直交するようにトンネル状にくりぬいて窯体とした，半地下式の木炭窯であったと考えられる。

焼成室と焚口の平面形は，イチジク形である。壁は床からほぼ垂直に立ち上がるものの，外傾する箇所や内傾する箇所が部分的に認められる。奥壁と両側壁との境は明瞭ではない。底面はほぼ平





１号木炭窯跡礫出土状況



１号木炭窯跡堆積土

1　黒褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/2(焼土粒少量)
2　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4(焼土粒少量)
3　にぶい黄橙色粘質土
4　極暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ2/3
(暗褐色土小塊少量)
5　明黄橙色土　10Ｙ Ｒ7/6
(にぶい黄橙色土斑状)
6　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/6
(焼土塊やや多量)
7　暗褐色土　7.5Ｙ Ｒ3/4
(褐色土の小塊少量)
8　明褐色土　7.5Ｙ Ｒ5/6
(褐色土の小塊少量)
9　明褐色土　10Ｙ Ｒ6/6
10　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4
(焼土粒・炭化物粒多量)
11　赤褐色土　5Ｙ Ｒ4/8
(焼土粒・炭化物粒多量)
12　褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/4(焼土粒多量)
13　赤褐色土　5Ｙ Ｒ4/8(焼土塊多量)
14　黒色土　7.5Ｙ Ｒ2/1(炭化物多量)
15　黄褐色土　10Ｙ Ｒ5/6
(こぶし大の礫少量，上面焼土化)
16　黒色土　7.5Ｙ Ｒ1.7/1
(茎状・粒状炭化物多量)
17　黄褐色砂質土　10Ｙ Ｒ5/6(上面焼土化)
18　黒色土　7.5Ｙ Ｒ1.7/1(炭化物粒多量)
19　黄褐色砂質土　10Ｙ Ｒ5/6(焼土塊多量)
20　黄褐色砂質土　10Ｙ Ｒ5/6
(焼土粒・炭化物粒少量)
21　暗赤褐色砂質土　2.5Ｙ Ｒ3/6
(焼土粒・炭化物粒多量)

酸化範囲
還元範囲
木炭層
焼土化範囲

１号木炭窯跡付属溝堆積土

1　黒褐色土　7.5Ｙ Ｒ3／2
(炭化物粒やや多量)

0　2m
(1/40)

図16　１号木炭窯跡(1)

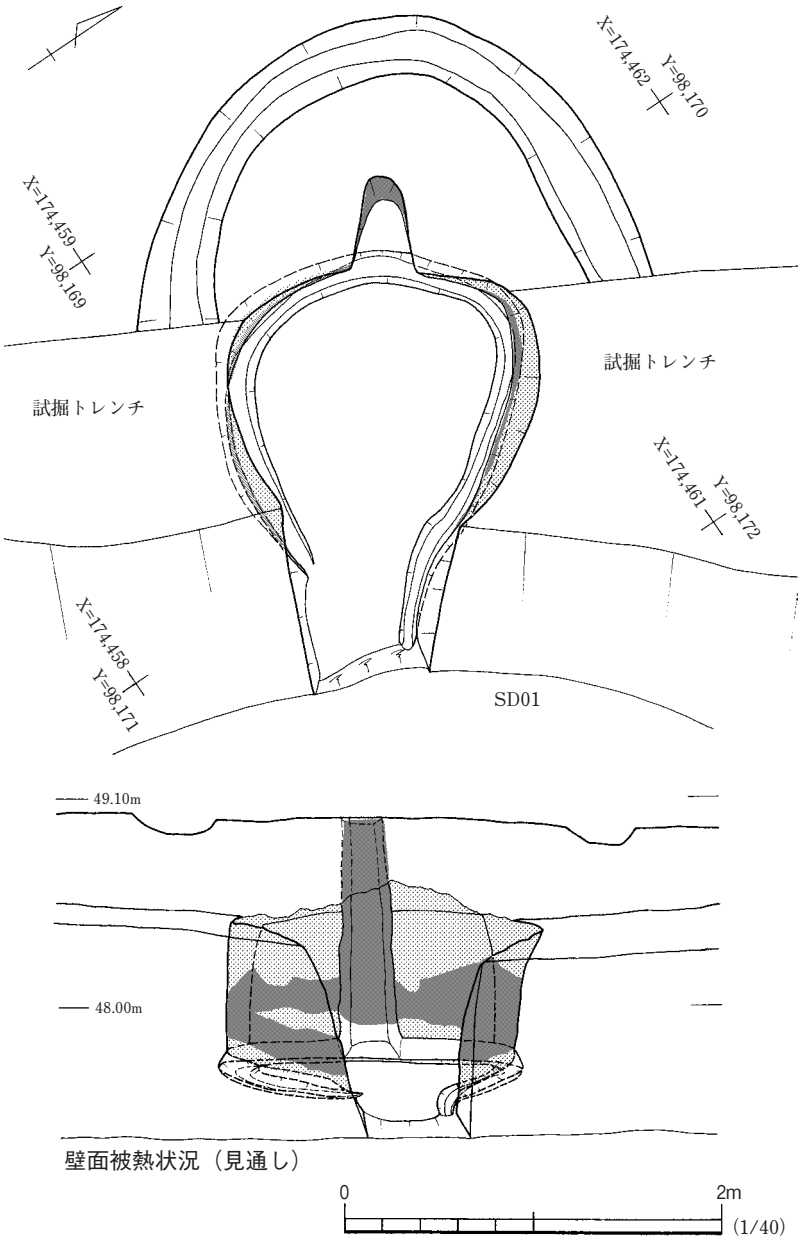


図17　１号木炭窯跡(2)

坦であるが，奥壁から焚口に向かって５～10°の角度の緩やかな下り勾配がつけられている。焼成室の奥壁のほぼ中央には奥壁を半円柱形に掘りくぼめた煙道が垂直方向に伸び，その上部の天井には地表に開口する煙突状の煙出し穴がほぼ垂直方向に穿たれている。焚口と煙出し穴の中心を結んだ線は，北から55°西にふれている。

煙出し穴の開口部の平面形は不整な円形で，径24㎝である。煙出し穴の開口部の周囲の一部は，皿状に掘りくぼめられている。焼成室の幅は最大で172㎝，焚口の幅は62㎝，焚口から奥壁までの長さは234㎝，煙道の奥壁を含めると278㎝，煙道の幅は34㎝である。

本木炭窯跡内に堆積していた土は，陥没孔堆積土，天井崩落土，窯内堆積土の３つに大別できる。陥没孔堆積土はℓ１～４で，ℓ１・２・４には少量の焼土粒が含まれる。ℓ３は天井崩落後も残っていた側壁の一部が再び崩落し，陥没孔内に落ち込んだものである。ℓ５～11が天井崩落土である。ℓ11は，被熱のため強く赤変していることから，本来はこの層の下面が本木炭窯跡の天井であったものと考えられる。ℓ５～10までの各層には，塊状の土が多く含まれている。

ℓ12～14は，本木炭窯跡の操業停止から天井の崩落までの間に窯跡内に流入し堆積した層と考えられる。焼土と炭化物を多く含んでいる。奥壁側が厚く焚口に向かって次第に薄く堆積していることから，土砂は主に煙出し穴から流入したものと考えられる。ℓ13内からは底面からやや浮いた状態で扁平な礫が１点出土している。

焼成室の底面と壁は，被熱のため全面が強く赤変硬化していた。また煙道の壁の全面と焼成室の壁面の下半が，黒変していた。これは，本木炭窯跡で焼成された木炭に由来する炭素が壁面に吸着したことによって生じたものと考えられる。よって，壁面が黒変している部分は木炭が置かれていた高さを示しているものと思われる。奥壁と側壁の角の部分がほかの部分に比べて若干高い位置まで黒変している。側壁と煙道の壁を断ち割った結果，赤変した範囲は最大で13㎝の厚さに及んだ。黒変した部分の厚さは最大で２㎝であった。

床面を断ち割ったところ，窯内堆積土直下の赤変硬化した面と本木炭窯跡の掘形底面との間に，炭化物をきわめて多く含んだ層と上面を赤変硬化した盛土層が何層か互層をなして堆積していることがわかった。この赤変硬化した面はより古い操業面で，その直上にそれぞれの操業によって堆積した炭化物をきわめて多く含む土が堆積しているものと考えられた。この断ち割り断面を精査したところ，このような面がさらに２面あることがわかり，すでに調査した本窯跡廃絶直前の操業面を合わせると本木炭窯跡の操業面は３面あることがわかった。新たに見つかった操業面は，廃絶直前の操業面をＡ面とし，その下位で見つかった操業面をＢ・Ｃ面と呼ぶことにした。

Ａ面は，こぶし大の礫を少量含む厚さ５㎝の黄褐色土の客土によって全面がほぼ平坦に整地され，その上面は厚さ３㎝にわたって赤変硬化していた。この層を除去すると，奥壁から焼成室にかけての底面に粒状・茎状の炭化物を多く含む黒色土が堆積していた。これをℓ16とした。この層の厚さは，１～1.5㎝である。

この層を除去すると，Ｂ面の赤変硬化した面が検出された。Ｂ面は，厚さ５㎝の黄褐色砂質土の客土によって全面がほぼ平坦に整地され，その上面は厚さ２㎝にわたって赤変硬化していた。これをℓ17とした。

この層を除去すると，奥壁から焚き口にかけての底面に炭化物を多く含む厚さ２㎝の黒色土が堆積していた。これをℓ18とした。ℓ18を除去すると，Ｃ面の赤変硬化した面が検出された。Ｃ面は，厚さ５㎝の黄褐色砂質土の客土によって全面がほぼ平坦に整地され，その上面は厚さ２㎝にわたって赤変硬化していた。これをℓ19とした。ℓ19を除去すると掘形の底面が検出された。掘形の底面は，基本土層のＬⅥの中にある。掘形の底面はほぼ平坦で，奥壁から焚口に向かって５～10°の角度の緩やかな下り勾配がつけられている。

掘形底面の精査をしたところ，扁平な自然礫が壁際に一巡して並べられた状態で検出された。さらに精査を進めると，壁際に沿って最大幅13㎝の溝が掘られ，その中に扁平な自然礫がほぼ隙間なく並べられていることがわかった。溝は焚口にまで伸び，側壁と奥壁の下部はえぐられてオーバーハングしていた。溝に堆積していた土は，焼土粒と炭化物粒を含んだ黄褐色から暗赤褐色土で，Ｃ面の底面の整地層に覆われていた。これらのことから，この溝は窯体内の排水を目的とした暗渠と考えられる。

１号木炭窯跡の付属溝は，煙出し穴の周囲で検出された。煙出し穴からは55～70㎝離れて，これを囲むように半円形に巡る。本溝の両端のＳＤ01に接する部分は，試掘トレンチの掘削の時に掘り

とばされたが，本来の平面形はＵ字形で，両端はＳＤ01に注ぐように接続していたものと考えられる。溝の幅は最大で43㎝，深さは最大で10㎝である。

焚口前面のＳＤ01の斜面中腹は，犬走り状の平坦面となっている。平坦面の幅は50～90㎝で，等高線にほぼ平行しながら伸びている。平坦面の北東端は，常磐自動車道の二期工事区，つまり今回の調査では未調査の部分に伸びている。南西側はＳＤ01の蛇行に沿って，約11ｍのところで自然に消滅している。

本木炭窯跡前面のＳＤ01には土層観察用の畦を残しながら掘り込みを行ったものの，本木炭窯跡に伴うような作業面は検出されなかった。図19に示したＳＤ01のＡ－Ａ′断面図でいえば，ℓ１・２に焼土粒が含まれており，本木炭窯跡から流れ込んだものと判断された。このことから本木炭窯跡の前面には広い面積の作業面は確保できず，ＳＤ01の斜面に犬走り状の狭い平坦面を設けてこれを作業面としたものと考えられる。

本遺構からは，２点の製錬炉の炉壁片が底面の整地層の中から出土したほかは，遺物は出土しなかった。炉壁片は，複数の整地層にまたがっていたため，どの操業面に伴うものかは判断しがたい。いずれも手のひら大の扁平なもので，胎土にスサの痕跡を含み，鉄滓が溶着している。

本遺構は形態や規格から大竹式木炭窯と推察され，近代以降の所産と考えられる。ＳＣ02と同じ時期に操業されたものと考えられる。ただし，出土した製錬炉の炉壁片については古代の所産である。これらの遺物については，搬入物と推察される。　（青　山）

２号木炭窯跡　ＳＣ02（図18，写真16・17）

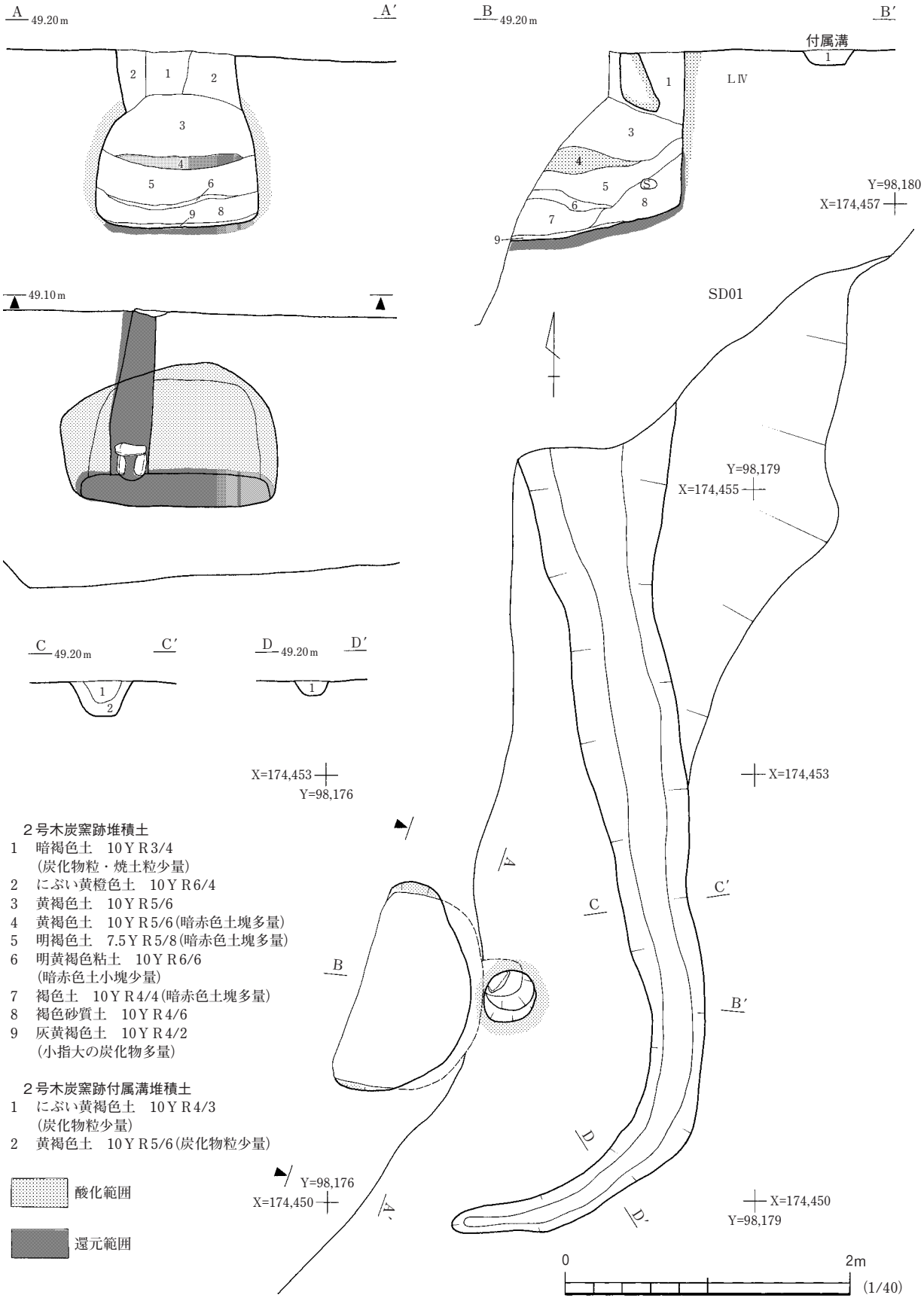
本遺構は，Ⅱ区の南部，Ｉ21グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。試掘調査の時に，本遺構の煙出し穴がすでに検出されていた。今回の本調査ではこれに加え，ＳＤ01の掘削によって露出したＳＤ01の斜面に，焼成室の断面が検出された。また，煙出し穴の周囲の精査によってこの周囲を巡る１条の溝跡が検出された。これを２号木炭窯跡付属溝とした。煙出し穴の周囲は被熱により赤変硬化していたため，検出は容易であった。

本木炭窯跡の本体が検出されたのはＳＤ01の東斜面の上部で，煙出し穴と２号木炭窯跡付属溝が検出されたのはＳＤ01東側の平坦面である。本木炭窯跡北方約９ｍのＳＤ01の対岸にあたる斜面には，本木炭窯跡と向かい合うようにＳＣ01が位置する。

本木炭窯跡は，焼成室，煙道，煙出し穴が遺存していた。焚口から焼成室の約半分はＳＤ01の斜面の崩落によってすでに失われていた。焼成室の天井は崩落して木炭窯跡内に落ち込んでいた。燃焼室の奥壁から両側壁の一部が遺存し，奥壁上部のみは天井の一部が崩落せずに遺存していた。

以上のように天井部は遺存していないため旧状は不明であるものの，ＳＤ01の斜面に露出した基本土層のＬⅣ～Ⅴにかけての地盤を等高線に直交するようにトンネル状にくりぬいて窯体とした，半地下式の木炭窯であったと考えられる。

平面形は不明であるが，遺存していた部分で弧を奥壁側とした半円形である。壁は床からほぼ垂



２号木炭窯跡堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
　(炭化物粒・焼土粒少量)
2　にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/4
3　黄褐色土　10ＹＲ5/6
4　黄褐色土　10ＹＲ5/6(暗赤色土塊多量)
5　明褐色土　7.5ＹＲ5/8(暗赤色土塊多量)
6　明黄褐色粘土　10ＹＲ6/6
　(暗赤色土小塊少量)
7　褐色土　10ＹＲ4/4(暗赤色土塊多量)
8　褐色砂質土　10ＹＲ4/6
9　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2
　(小指大の炭化物多量)

２号木炭窯跡付属溝堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
　(炭化物粒少量)
2　黄褐色土　10ＹＲ5/6(炭化物粒少量)

酸化範囲
還元範囲

図18　２号木炭窯跡

直に立ち上がるものの，一部に外傾する箇所がある。底面はほぼ平坦であるが，奥壁から焚口方向に向かって約10°の角度の緩やかな下り勾配がつけられている。焼成室の奥壁には，向かってやや左に寄った位置に奥壁を半円柱形に掘りくぼめた煙道が垂直方向に伸び，その上部の天井には地表に開口する煙突状の煙出し穴がほぼ垂直方向に穿たれている。煙出し穴と遺存していた底面のそれぞれ中心を結んだ線は，北から105°東にふれている。

煙出し穴の開口部の平面形は不整な円形で，径35㎝である。煙出し穴の開口部の周囲の一部は，皿状に掘りくぼめられている。焼成室の幅は最大で151㎝，遺存した底面の先端部から奥壁までの長さは87㎝，煙道の幅は29㎝である。

煙道の基部には，やや扁平な手のひら大の川原石を３個用いた，鳥居形の吸煙口が設けられていた。２個の石は煙道基部の両側壁側に立位に置いて立石とし，その上に１個の石が横位に置かれていた。立石と煙道側壁との間には，黄褐色の土が充填されていた。吸煙口に用いられた石と煙道の奥壁との間隔は15㎝であった。

本木炭窯跡内の堆積土は，陥没孔堆積土，天井崩落土，窯内堆積土の３つに大別できる。陥没孔堆積土はℓ１である。ℓ２～４が天井崩落土である。ℓ４は，被熱のため強く赤変していることから，本来はこの層の下面が本木炭窯跡の天井であったものと考えられる。ℓ４には，塊状の土が多く含まれていた。ℓ５～９は，本木炭窯跡の操業停止から天井の崩落までの間に窯跡内に流入し堆積した窯内堆積土と考えられる。窯内堆積土は最大で50㎝の厚さをもつことから，天井は比較的長期間崩落しなかったものと考えられる。また，窯内堆積土は奥壁側がやや厚いことから，土砂は主に煙出し穴から流入したものと考えられる。

遺存していた焼成室の壁は，被熱のため全面が強く赤変硬化していた。底面と煙道は，全面が黒変していた。側壁と煙道の壁を断ち割った結果，赤変した範囲は最大で12㎝の厚さに及んだ。黒変した部分の厚さは最大で７㎝であった。

床面を断ち割ったが古い操業面は確認できず，掘形の底面がそのまま操業面になっていることがわかった。掘形の底面は，基本土層のＬⅤである。

２号木炭窯跡付属溝は，煙出し穴の周囲を巡るように検出された。溝は煙出し穴の南方1.3ｍに起点をもち，煙出し穴を取り囲むようにカーブを描きながら煙出し穴の東方に至り，そこからほぼ北にまっすぐ伸び，ＳＤ01に接続する。幅は起点部分で18㎝，ＳＤ01との接合部分で118㎝，深さは起点部分で３㎝を測り，ＳＤ01との接続部分に向かって深さを増している。

煙出し穴からは，製錬炉の炉壁の破片と思われるものが60ｇ出土している。胎土にスサの痕跡があるものの，鉄滓などは溶着していない。その他には遺物はまったく出土しなかった。

本遺構は形態や規格から大竹式木炭窯と推察され，近代以降の所産と考えられる。ＳＣ01と同じ時期に操業されたものと考えられる。ただし，出土した製錬炉の炉壁については古代の所産である。

（青　山）

第４節　　溝　　跡

本遺跡からは，１条の溝跡が検出された。Ⅱ区の南部に位置する自然の流路跡で，樹枝状に連なる２条の支流がある。

１号溝跡　ＳＤ01(図19，写真18・19)

本遺構は，Ⅱ区の南部，Ｇ～Ｋの19～24グリッドに位置する。検出面はＬⅣ上面である。

本遺構は，調査前にあった水田が造成された時の埋め立てによって，検出面の土層であるＬⅣに由来する客土が堆積土の上部に厚く堆積していたため，当初はＬⅣとの見分けがやや困難であった。精査の結果，この客土の広がりが南西から北東に向かって溝状に伸びていることから，客土を機械力によって除去したところ，下層から自然に堆積したと考えられる砂質土を検出し，自然の溝跡であることが判明した。

本溝跡の中央部やや東よりの部分は，工事側の都合によって設定された二期工事部分の未調査部分にあたり調査ができなかった。また機械力によって客土を掘り下げると，現地表から３ｍほどの深さにまで達したこと，湧水が多かったことから，作業の安全を考慮してこの未調査部分の両側を法面としたため，法面下の堆積土の掘削を断念した。溝跡の東端部分も，調査区の広さに対して溝がかなり深くなることと湧水のため掘削を断念し，溝跡の両側面の精査のみを行った。

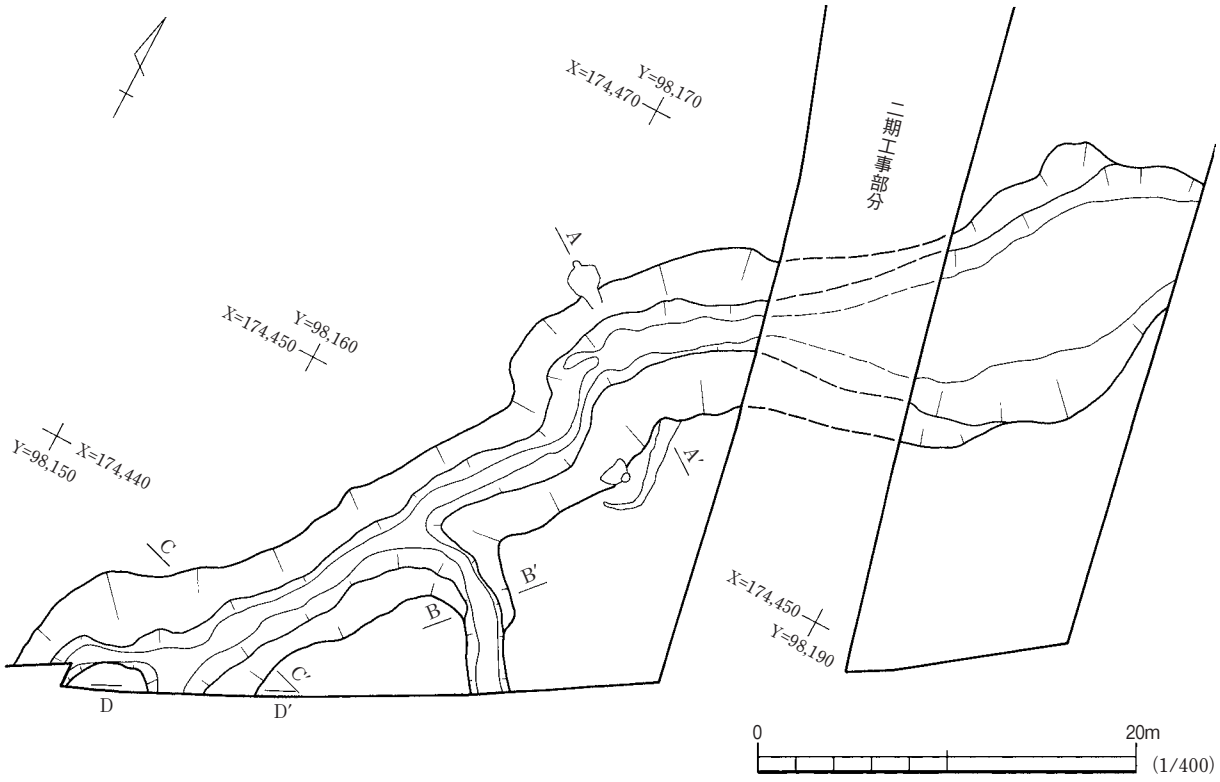
検出された場所は，東に向かってきわめて緩やかに下っている。また本溝跡の壁面中には，ＳＣ01・02の２基の木炭窯が掘り込まれている。

溝の平面形は，南西側が狭く北東に向かって幅を広げながら，緩やかに蛇行して伸びている。南西端が最も狭く1.7ｍ，北東端部付近がもっとも広く14.5ｍである。底面は南西端が最も浅く64㎝，北東に向かうにつれて深くなり，計測はできなかったものの最も深い北東端で3.5ｍほどであった。溝の幅と深さから判断すると，上流は南西側となる。

本溝跡内の堆積土の状況は，地点によって一様ではないものの砂質土とシルトが交互に堆積していた。４層からなる堆積層は，水流による侵食と堆積作用を頻繁に受けた，自然堆積の様相を呈する。いずれの層もグライ化していた。堆積土内には，こぶし大から人頭大の礫を多く含んでいた。底面と堆積土中から，自然木が少量出土した。

本溝跡からは，製練炉の炉壁の破片が1,200ｇ出土した。大きさは，細片から手のひら大である。いずれも，前述したＳＣ01前面から下流にかけて出土している。

本溝跡は，自然の流路跡で，本遺跡の周辺から開析を始める小谷の一つであったものと考えられる。第二次世界大戦後の水田造成の時に埋め立てられるまでは，自然流路として機能していたと推察される。　　（青　山）


X=174,470
Y=98,170
二期工事部分
A
A′
X=174,450
Y=98,160
X=174,440
Y=98,150
C
B
B′
C′
D
D′
X=174,450
Y=98,190
0
20m
(1/400)

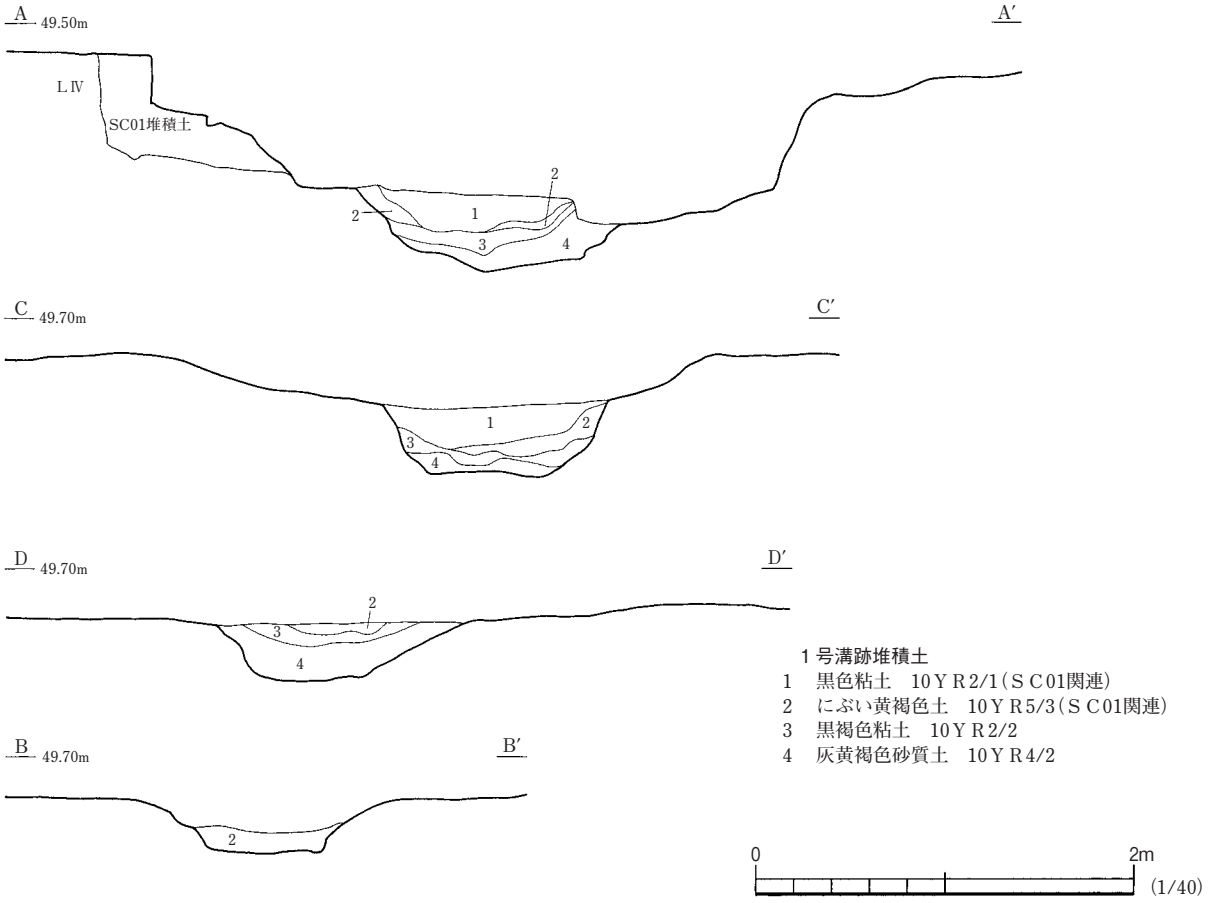

A 49.50m
A′
LⅣ
SC01堆積土
C 49.70m
C′
D 49.70m
D′
B 49.70m
B′
1号溝跡堆積土
1　黒色粘土　10ＹＲ2/1（ＳＣ01関連）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3（ＳＣ01関連）
3　黒褐色粘土　10ＹＲ2/2
4　灰黄褐色砂質土　10ＹＲ4/2
0
2m
(1/40)

図19　１号溝跡

第５節　　道　　跡

本遺跡からは，１条の道跡が検出された。平成19年度に調査をしたⅡ区の中央部で確認した。

１号道跡　ＳＦ01

遺　　構(図20・21，写真20・21)

本遺構は，Ⅱ区の中央部，Ｇ15～19グリッドに位置する。平成19年度に調査した旧町道219号金谷・大富３号線の道路部分の直下から検出された遺構である。舗装道路の砂利を除去した段階では確認できなかったが，旧表土層であるＬＩを取り除いていく段階で検出された。本遺構に伴う溝跡２条の最終的な確認面はＬⅢ上面である。

本遺構は，道跡の側溝と考えられる２条の並行する溝跡からなる。主軸方位はほぼ南北で，旧町道219号金谷・大富３号線と一致する。溝の間の道路部分の幅は4.5ｍであり，これも旧町道と一致する。東西の溝跡は，深いところで40㎝の深さがあるが，南に行くにしたがって深さが減じている。このため，Ⅱ区南部では溝跡が消失している。これは旧町道を建設する時に，削平された可能性が高い。溝跡の断面形は壁面の立ち上がりが緩やかなＵ字形を呈しており，溝の底面から垂直に立ち上がる箇所はない。溝の幅は東側の溝で60㎝，西側の溝で70～80㎝である。

この溝跡の堆積土は２層に分けられ，基本的にはＬＩと同じ土で埋まっていた。堆積土は撹拌された状況ではなかったが，土層にしまりがなかった。堆積状況から，溝跡は周囲からの流入土で埋まったものと判断される。堆積土には砂利等は混じっていないことから，舗装道路建設時にはすでに溝は埋まっていたと考えられる。

道跡の中央部は基本的にはＬⅢ上面が露出していたが，一部では粘土を貼って平坦に整えている箇所もあった。道跡の東半部で掘形とした部分であり，図中では二点鎖線で示している。この掘形部分ではℓ３とした黄褐色粘土は１～３㎝の厚さがあり，堅く踏みしまっている。ℓ４ａ～ｄは掘形の埋土である。東半部の低い部分を埋めて平坦に整えている。この土でＳＸ01も最終的に埋没したと推察される。

遺　　物(図21，表１，写真30)

図21－１・３は西側の溝跡から，２は東側の溝跡から出土している。

１は縄文時代後期の土器片である。波状口縁を有する口縁部から胴部にかけての資料である。波状口縁部には，２カ所の盲孔がある。沈線で区画された胴部には波状の沈線が垂下する。２は近代の磁器片である。

３は茎部を有する鉄製品である。図の右側が窄まるように整形されている。両側縁は平坦に整えられている。図の左側には径５㎜の孔が穿たれている。詳細はわからないが，何かの部品の一部であろうか。

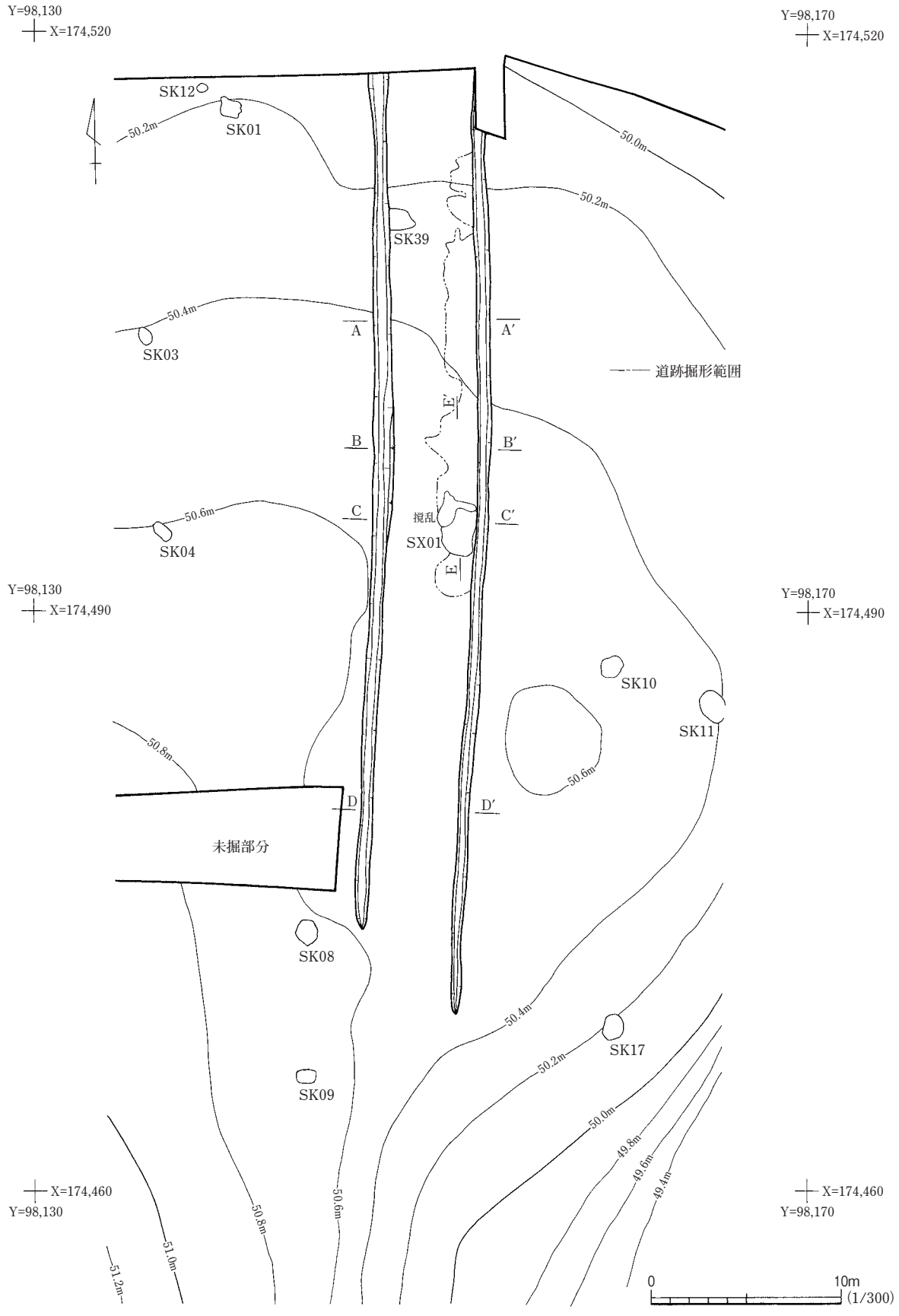
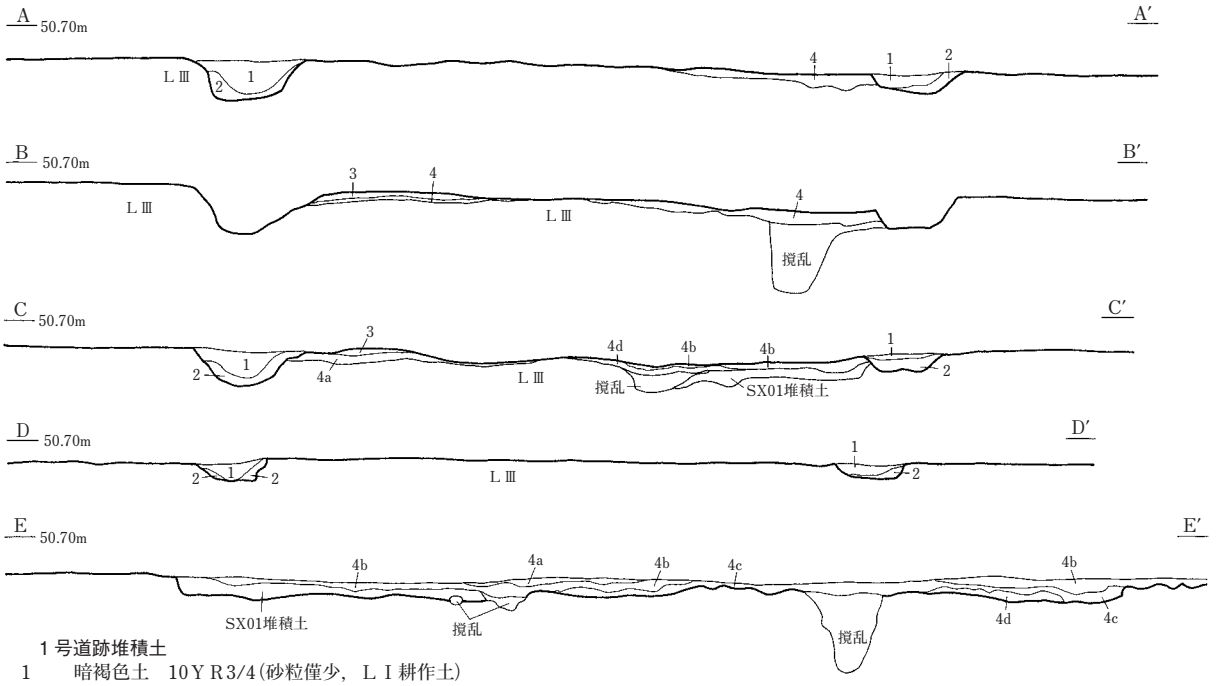
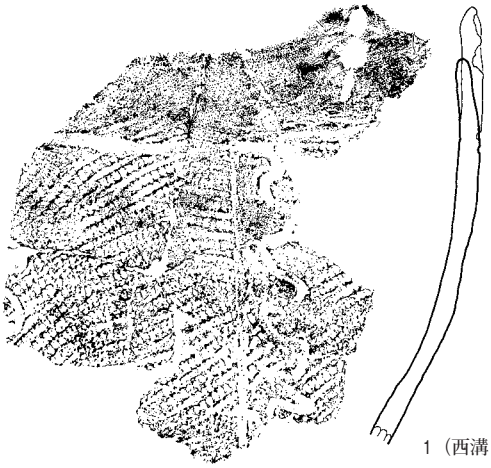

Y=98,130
X=174,520
Y=98,170
X=174,520
SK12
SK01
50.2m
50.0m
50.2m
SK39
50.4m
SK03
A
A′
道跡掘形範囲
E′
B
B′
C
C′
50.6m
SK04
攪乱
SX01
E
Y=98,130
X=174,490
Y=98,170
X=174,490
SK10
SK11
50.8m
50.6m
D
D′
未掘部分
SK08
50.4m
SK17
50.2m
SK09
50.0m
49.8m
49.6m
49.4m
X=174,460
Y=98,130
X=174,460
Y=98,170
50.8m
50.6m
51.0m
51.2m
0
10m
(1/300)

図20　１号道跡

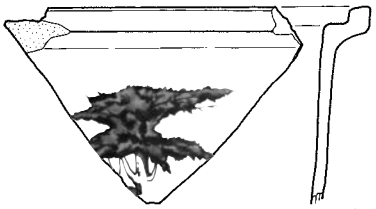


１号道跡堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(砂粒僅少，ＬⅠ耕作土)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(ＬⅢ粒多量)
3　黄褐色粘土　10ＹＲ5/6
4ａ　褐色土　10ＹＲ4/4と黄褐色土　10ＹＲ5/6の混土
4ｂ　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3と褐色土　10ＹＲ4/6の混土
4ｃ　暗褐色土　10ＹＲ3/4と褐色土　10ＹＲ4/6の混土
4ｄ　黄褐色粘土　10ＹＲ5/6とにぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3の混土

0　2m　(1/60)

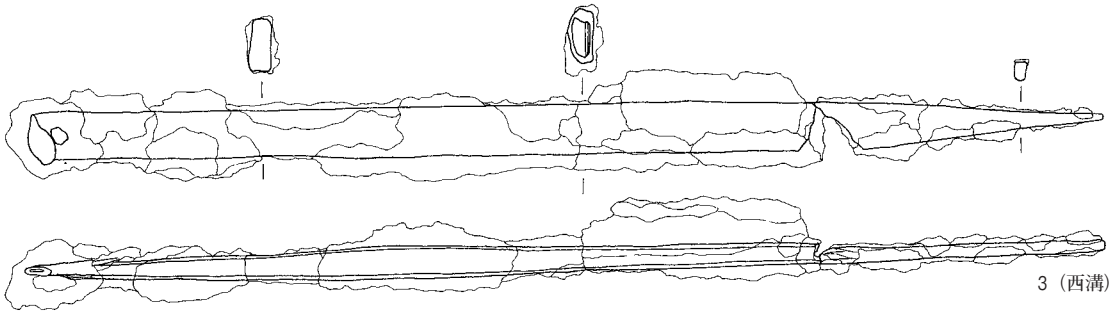


1（西溝　ℓ1）



2（東溝　ℓ1）

0　10cm　(1/3)



3（西溝）

0　10cm　(1/2)

図21　１号道跡，出土縄文土器・磁器・鉄製品

ま　と　め

本遺構は幅4.5ｍの道跡であり，両側には素掘りの溝を有する。堆積土の状況や出土遺物から近代以降の所産と考えられる。（門　脇）

第６節　　土　　坑

本遺跡からは39基の土坑が検出された。調査区ごとの内訳は，Ⅰ区が16基，Ⅱ区が18基，Ⅲ区が５基である。

１号土坑　ＳＫ01（図22，写真22）

本土坑はⅡ区北西部のＦ15グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないが，西側にＳＫ12が位置する。

遺構内堆積土は３層からなる。ℓ１は灰黄褐色土，ℓ２は褐色土，ℓ３は黒褐色土で，特にℓ３はＬⅢ塊や炭化物・焼土などを多く含み，人為堆積と判断した。

平面形は東西方向にやや長い隅丸長方形を呈し，短軸の中点を基準とした主軸方位はＮ75°Ｗである。規模は長軸116㎝，短軸94㎝，検出面からの深さ18㎝を測る。底面の形状は凸凹で，周壁は各壁とも40～45°前後で立ち上がるが，南東壁のみ緩やかな段差が認められる。

本土坑から遺物は出土しなかった。このため，その年代については不明である。土坑の形状や内容物などから木炭焼成土坑の可能性が高い。（管　野）

２号土坑　ＳＫ02（図22，写真22）

本土坑はⅡ区北西部のＥ16グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの，南東側にＳＫ03・07がある。

遺構内堆積土は２層からなり，堆積状況は不明である。上層のℓ１には炭化物を多量に含む。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈し，南側は北側に比して幅が広い。規模は長軸106㎝，短軸50㎝，検出面からの深さ９㎝を測り，短軸の中点を基準とした主軸方位はＮ15°Ｅである。底面は平坦で，周壁は各壁とも底面から45～50°と緩やかに立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代については不明である。土坑の形状や内容物などから木炭焼成土坑の可能性が高い。（管　野）

３号土坑　ＳＫ03（図22，写真22）

本土坑はⅡ区北西部のＥ16グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの，西側にＳＫ07がある。

遺構内堆積土は３層からなり，最下層のℓ３はＬⅢなどをブロック状に含むことから人為堆積と

判断した。ℓ１・２の堆積状況は不明であるが，２層とも少量の炭化物を含む。またℓ１は焼土粒を少量含む。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。規模は長軸89㎝，短軸59㎝，検出面からの深さ23㎝を測り，短軸の中点を基準とした主軸方位はＮ30°Ｗである。周壁は西壁を除く各壁が60°前後で，西壁のみ約50°とやや緩やかに立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。このため，その年代については不明である。土坑の形状や内容物などから木炭焼成土坑の可能性が高い。（管　野）

４号土坑　ＳＫ04（図22，写真22）

本土坑はⅡ区北西部のＥ17グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの，西側にＳＫ05がある。

遺構内堆積土は３層で，ℓ３に炭化物，焼土粒を多量に含む。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈し，規模は長軸114㎝，短軸69㎝，検出面からの深さ15㎝を測り，短軸の中点を基準とした主軸方位はＮ45°Ｗである。底面はほぼ平坦であり，周壁は各壁とも急斜に立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。このため，その年代については不明である。土坑の形状や内容物などから，木炭焼成土坑の可能性が高い。（管　野）

５号土坑　ＳＫ05（図22，写真22）

本土坑はⅡ区北西部のＥ17グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの，東側にＳＫ04が位置する。

遺構内堆積土はにぶい黄褐色土が薄く堆積していたことから，自然堆積であるか人為堆積であるかは判断できなかった。

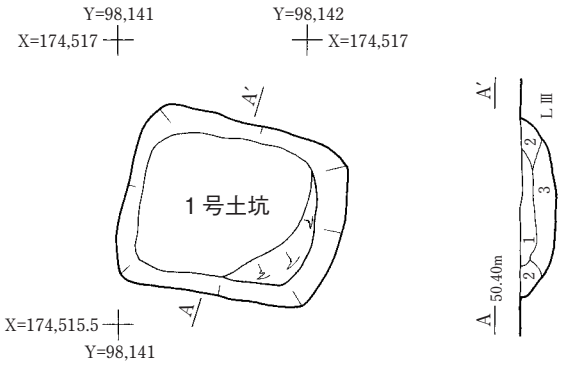
平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し，規模は長軸103㎝，短軸67㎝，検出面からの深さ５㎝をそれぞれ測り，短軸の中点を基準とした主軸方位はＮ25°Ｗを指す。底面は一部掘りすぎてしまったもののおおむね平坦で，断面形は浅い皿状を呈する。

本土坑から遺物は出土しなかったため，年代は不明である。土坑の形状や内容物などの特徴から木炭焼成土坑の可能性が高い。（管　野）

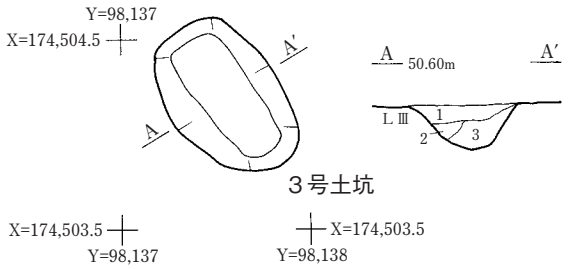
６号土坑　ＳＫ06（図22，写真22）

本土坑はⅡ区北西部のＥ15グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないが，東側にＳＫ12が位置する。

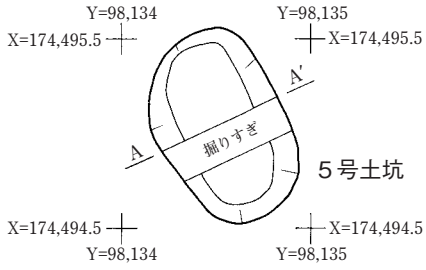
遺構内堆積土は４層に分けられ，ℓ１とℓ３が褐色土系，ℓ２とℓ４が黒褐色土に大別される。おのおのの堆積状況は不明であるが，ℓ２は炭化物由来の層で木炭が多く堆積していた。

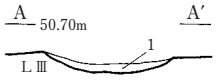


１号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(にぶい黄褐色土・炭化物・焼土粒少量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(Ｌ Ⅲ塊少量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2(Ｌ Ⅲ塊・炭化物・焼土粒多量)

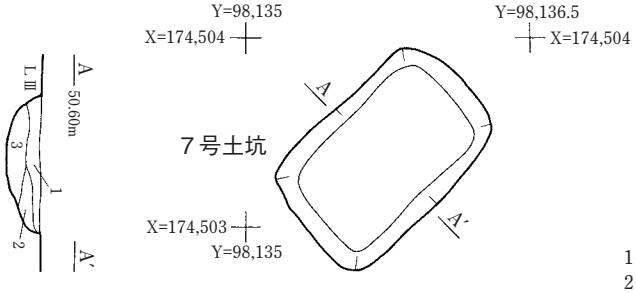


３号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(炭化物・焼土粒少量)
2　明黄褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物少量)
3　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(黒褐色土塊・Ｌ Ⅲ塊・炭化物・焼土粒少量)

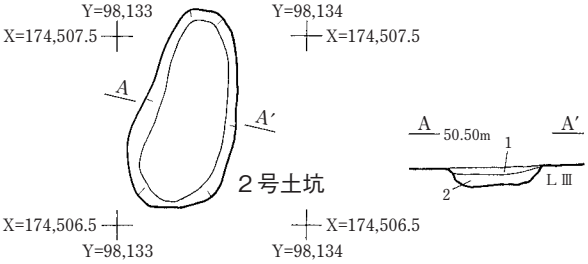




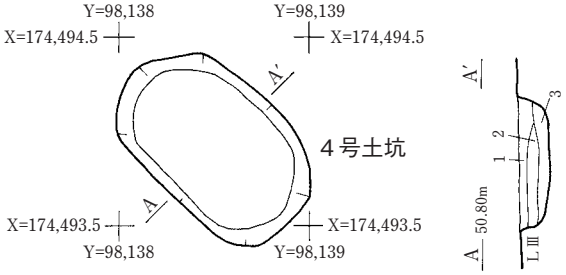
５号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土
10ＹＲ5/3(炭化物・木炭少量)



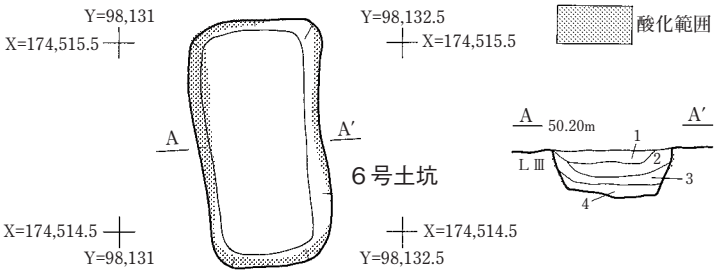
７号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3(炭化物・焼土粒少量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(焼土粒少量)
3　黒褐色土　10ＹＲ3/1(にぶい黄褐色土・炭化物・焼土多量)



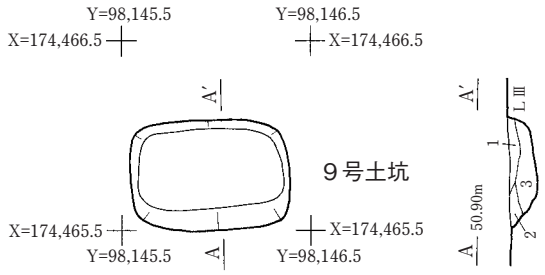
２号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1(炭化物多量，褐色土・焼土粒少量)
2　明黄褐色土　10ＹＲ6/6(炭化物粒少量)



４号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(にぶい黄褐色土・炭化物・焼土粒少量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(Ｌ Ⅲ塊少量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2(Ｌ Ⅲ塊・炭化物・焼土粒多量)



６号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(にぶい黄褐色土・炭化物・焼土粒少量)
2　黒褐色土　10ＹＲ3/1(褐灰色土・炭化物・焼土粒多量)
3　にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/3(焼土少量)
4　黒褐色土　10ＹＲ2/2(炭化物・焼土粒少量)



９号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(にぶい黄褐色土・炭化物・焼土粒少量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(Ｌ Ⅲ塊少量)
3　褐色土　7.5ＹＲ4/6(焼土粒少量)

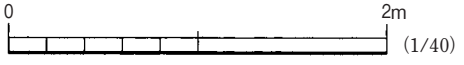


図22　１～７・９号土坑

平面形は整った隅丸長方形を呈し，規模は長軸130㎝，短軸63㎝，検出面からの深さ26㎝をそれぞれ測り，短軸の中点を基準とした主軸方位はＮ５°Ｗを指す。底面はほぼ平坦で，周壁は各壁とも底面から急に立ち上がる。各壁とも焼土化しており，特に北西壁で顕著であった。

本土坑内から遺物は出土しなかったため，その年代は不明である。土坑の形状や内容物，さらに焼土化などの所見から木炭焼成土坑の可能性が高い。（管　野）

７号土坑　ＳＫ07（図22，写真22）

本土坑はⅡ区北西部のＥ16グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの，北西側にＳＫ02，東側にＳＫ03がそれぞれ位置する。

遺構内堆積土は３層からなり，堆積状況は不明である。おおむねℓ１・２の褐色系土とℓ３の黒褐色土に大別され，最下層のℓ３は炭化物や焼土を層状に多く含んでいた。

平面形は整った隅丸長方形を呈し，短軸の中点を基準とした主軸方位はＮ45°Ｅを指す。規模は長軸114㎝，短軸73㎝，検出面からの深さ18㎝をそれぞれ測る。底面はほぼ平坦で，周壁は各壁とも緩やかに立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。土坑の形状や内容物などの特徴から木炭焼成土坑の可能性が高い。（管　野）

８号土坑　ＳＫ08（図23，写真23）

本土坑はⅡ区南西部のＦ19グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの，南側にＳＫ09が位置する。

遺構内堆積土は６層からなり，その堆積状況などから自然堆積と判断した。おおむねＬⅢやＬⅣ由来の黄褐色系土が主体を占めるが，ℓ５のみが炭化物粒を含む黒褐色土である。

平面形は円形を呈し，長軸122㎝，短軸125㎝，検出面からの深さ49㎝をそれぞれ測る。底面はＬⅣまで掘り込まれており，若干の凹凸がみられた。周壁は西壁のみ65°前後と急峻に立ち上がるほかは55°前後で立ち上がり，断面形態は鍋底形を呈する。

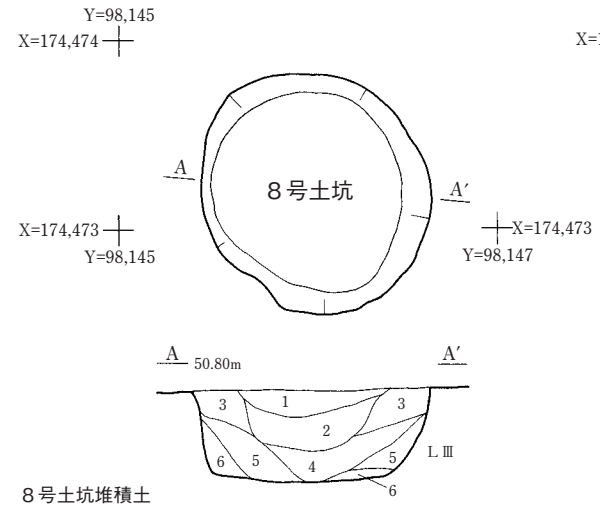
本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。土坑の形状や堆積土の特徴などから縄文時代の土坑の可能性がある。（管　野）

９号土坑　ＳＫ09（図22，写真23）

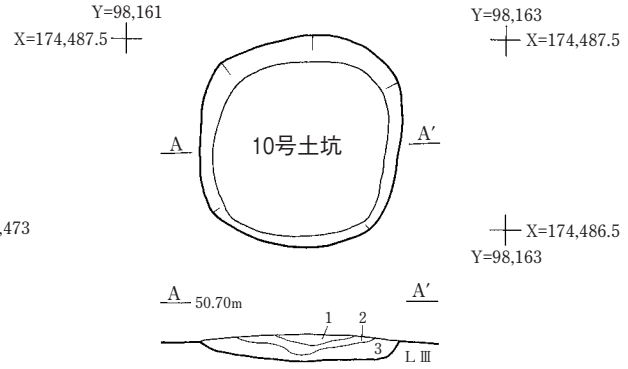
本土坑はⅡ区南西側のＦ20グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの，北側にＳＫ08が位置する。

遺構内堆積土は３層からなり，上層のℓ１・２はその堆積状況や土質などから自然堆積と判断した。ℓ３は褐色土で炭化物が上層に比して少ない特徴を有する。

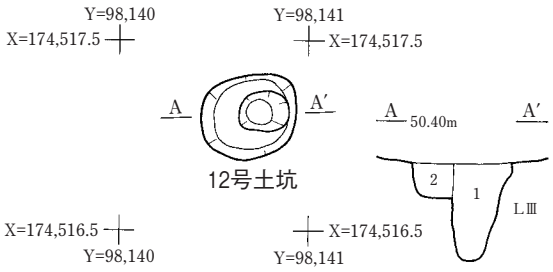
平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し，短軸の中点を基準とした主軸方位はほぼ東西方向を



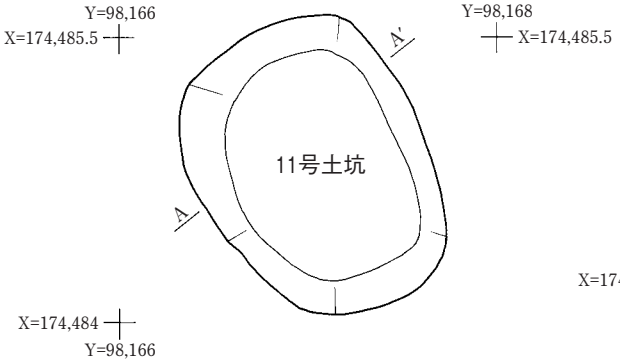
８号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(炭化物粒・焼土粒少量)
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3(炭化物粒・焼土粒少量)
3　にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/3(にぶい黄橙色土少量)
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3(明黄褐色土少量)
5　黒褐色土　10ＹＲ2/2(明黄褐色土少量)
6　黄褐色土　10ＹＲ5/8(炭化物少量)



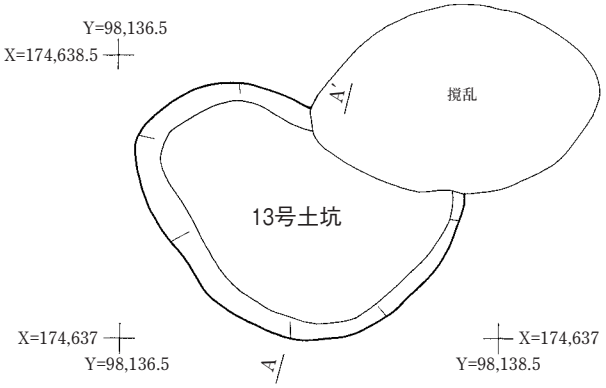
10号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物粒少量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物粒少量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3(炭化物粒多量)

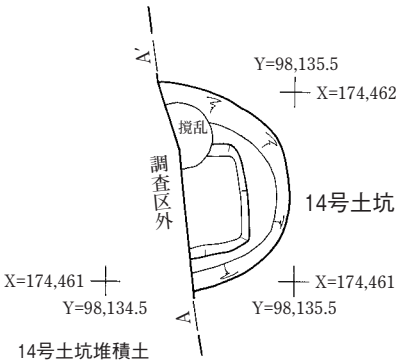


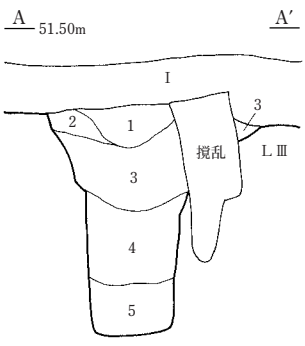
12号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(炭化物多量)
2　にぶい黄橙色土　10ＹＲ5/4(明黄褐色土塊少量)



11号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物粒・焼土粒少量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(褐色土粒少量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3(炭化物少量)







13号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3(角礫少量)

14号土坑堆積土
1　浅黄色土　2.5Ｙ7/4(にぶい黄橙土少量)
2　褐色土　10ＹＲ4/4(炭化物・焼土粒少量)
3　褐色土　10ＹＲ4/4(暗褐色土塊・浅黄色土塊多量，焼土粒少量)
4　褐色土　10ＹＲ4/6(Ｌ Ⅲ塊少量)
5　黒褐色土　10ＹＲ3/2(Ｌ Ⅲ塊少量)

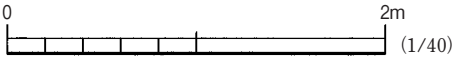


図23　８・10～14号土坑

指す。規模は長軸84㎝，短軸58㎝，検出面からの深さ15㎝をそれぞれ測る。底面は平坦であるが，東側に移行するにしたがって若干低くなる。周壁は南壁が緩やかな他は急に立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。土坑の形状や内容物などの特徴から木炭焼成土坑の可能性が高い。（管　野）

10号土坑　ＳＫ10（図23，写真23）

本土坑は，Ⅱ区中央部のＨ18グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はない。東側にＳＫ11が位置する。

平面形は不整な円形で，径106㎝，深さ９㎝である。遺構内堆積土は３層からなり，自然堆積で，いずれも炭化物粒を含んでいた。底面の一部が弱く赤変していたことから，木炭焼成土坑であると考えられる。本土坑から遺物は出土しなかった。年代は不明である。（青　山）

11号土坑　ＳＫ11（図23，写真23）

本土坑は，Ⅱ区中央部のＨ18グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はない。西側にＳＫ10が位置する。

平面形は不整な楕円形で，長軸160㎝，短軸120㎝，深さ18㎝を測る。底面はほぼ平坦である。

遺構内堆積土は３層からなる。いずれも自然堆積で，ℓ１には炭化物粒と焼土粒を含み，ℓ３には炭化物粒が少量含まれていた。底面の一部が弱く赤変していたことから，木炭焼成土坑であると考えられる。本土坑から遺物は出土しなかった。年代は不明である。（青　山）

12号土坑　ＳＫ12（図23，写真23）

本土坑はⅡ区北西部のＦ15グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの，南東側にＳＫ01が位置する。

遺構内堆積土は２層からなる。ℓ１は炭化物を多量に含む，しまりのない灰黄褐色土，ℓ２はにぶい黄橙色土と明黄褐色土との混土である。堆積状況からℓ１が柱穴の抜取り痕，ℓ２が掘形埋土と判断した。

平面形は，やや東西方向に長い楕円形を呈し，長軸51㎝，短軸43㎝，検出面からの深さ50㎝を測る。また，底面東側には長軸26㎝，短軸22㎝の小穴を有し，ＬⅣまで掘り込まれていた。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。その形状などから柱穴状のピットと判断したが，周辺にピットがないことから単独で存在していた可能性が高い。（管　野）

13号土坑　ＳＫ13（図23，写真23）

本土坑はⅠ区北東部のＥ３グリッドに位置する。検出面はＬⅡである。

平面形は不整な楕円形を呈し，北東隅は撹乱を受けている。長軸方位はＮ33°Ｗで，長軸156㎝，

短軸130㎝，検出面からの深さは最大で16㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。堆積土は１層で，現況から堆積過程は判断できない。出土遺物はなく，本土坑の性格・年代は不明である。（小　河）

14号土坑　ＳＫ14（図23，写真23）

本土坑はⅡ区南西部のＥ20グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。遺構の東側のみの検出で，大半は西側の調査区外に伸びる。一部後世の撹乱によって破壊を受けていたが，残存状況は良好であった。

遺構内堆積土は５層からなる。ℓ３は褐色土と暗褐色土と浅黄色土の混土で２～４㎝大のブロック状に堆積していることから，人為堆積と判断した。その他の各層については，その堆積状況を明確に判断できなかったが，少なくとも土坑廃絶後に下層のℓ４とℓ５が堆積してそれほど時間がたっていないうちにℓ３を投入して地面を平坦にしたものと推定される。

検出面における平面形は大半が調査区外に伸びるため不明であるが，土坑上位は楕円形，土坑中位から下半にかけては長方形を呈するものと思われる。確認された範囲での規模は東西軸で55㎝，南北軸で115㎝，検出面からの深さ121㎝をそれぞれ測る。周壁は土坑中位から下位にかけては垂直に，中位から上位にかけては緩やかに立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえに時期については不明である。堆積土や土坑の形状などから縄文時代の落とし穴状土坑の可能性が高い。（管　野）

15号土坑　ＳＫ15（図24，写真23）

本土坑はⅡ区南西部のＥ20グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はないものの，南西側にＳＫ14が位置する。

遺構内堆積土はしまりのない灰黄褐色土の単層で，堆積状況は不明である。平面形は整った円形をなし，直径40～45㎝，検出面からの深さ86㎝をそれぞれ測る。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。その形状などから柱穴状のピットと判断されるが，時期については言及できない。（管　野）

16号土坑　ＳＫ16（図24，写真24）

本土坑はⅡ区南部のＧ・Ｈ21グリッドに位置し，検出面はＬⅣである。他の遺構との重複関係はないが，南側にＳＤ01，東側にＳＣ01が位置する。

遺構内堆積土はＬⅡに類似するしまりの強い黒褐色土の単層で，堆積状況は不明である。平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し，規模は長軸144㎝，短軸58㎝，検出面からの深さ11㎝をそれぞれ測る。底面は平坦である。周壁は西壁のみ60°前後とやや急であるが，ほかは30°前後と底面から緩やかに立ち上がる。主軸方位はＮ83°Ｗでほぼ東西方向を指す。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。その性格についても言及できないが，堆積土の状況から縄文時代の土坑の可能性が高い。（管　野）

17号土坑　ＳＫ17（図24，写真24）

本土坑はⅡ区中央部のＨ20グリッド，標高50.1ｍ付近の微高地上に位置し，検出面はＬⅢ上面である。他の遺構との重複関係はない。

遺構内堆積土は２層からなり，ℓ１は黒褐色土で炭化物や焼土粒を多く含み，ℓ２は黄褐色土で前者に比して炭化物が少ない。おのおのの堆積状況は不明である。

平面形は隅丸方形を呈し，短軸の中点を基準とした主軸方位はＮ12°Ｅを指す。規模は長軸112㎝，短軸102㎝，検出面からの深さ26㎝をそれぞれ測る。底面はほぼ平坦で，周壁は50°前後とやや急斜に立ち上がる。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。土坑の形状や内容物などの特徴から木炭焼成土坑の可能性が高い。（管　野）

18号土坑　ＳＫ18（図24，写真24）

本土坑はⅠ区北東部のＥ２グリッドに位置する。検出面はＬⅡである。

平面形は不整な楕円形を呈し，南隅は撹乱を受けている。長軸方位はＮ65°Ｅ，長軸128㎝，短軸100㎝，検出面からの深さは最大で16㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面には若干の凹凸が認められる。堆積土は２層に分けられる。ℓ１・２ともに炭化物を多量に含み，さらにℓ２は焼土塊も多量に含むことから，人為堆積と考えられる。出土遺物はなく，本土坑の性格・年代は不明である。（小　河）

19号土坑　ＳＫ19（図24，写真24）

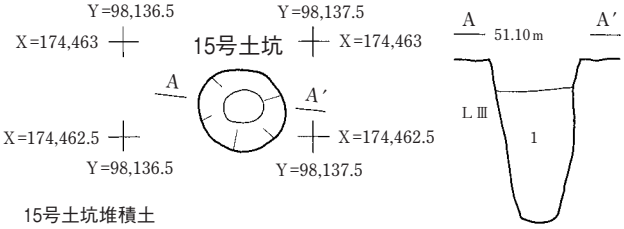
本土坑はⅠ区北西部のＢ２・３グリッドに位置する。検出面は，ＬⅡである。

平面形は楕円形を呈し，北側と南側の一部は撹乱を受けている。長軸方位はＮ40°Ｗを指し，長軸128㎝，短軸92㎝，検出面からの深さは最大で24㎝である。周壁は緩やかに立ち上がる。底面には若干の凹凸が認められ，中央部に楕円形のくぼみがある。堆積土は１層で，現況から堆積過程は判断できない。出土遺物はなく，本土坑の性格・年代は不明である。（小　河）

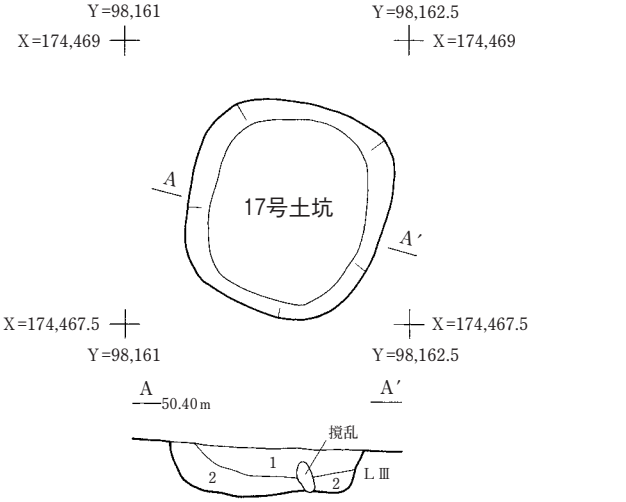
20号土坑　ＳＫ20（図25・28，写真24・30）

本土坑はⅠ区北西部のＢ３グリッドに位置する。検出面はＬⅡである。

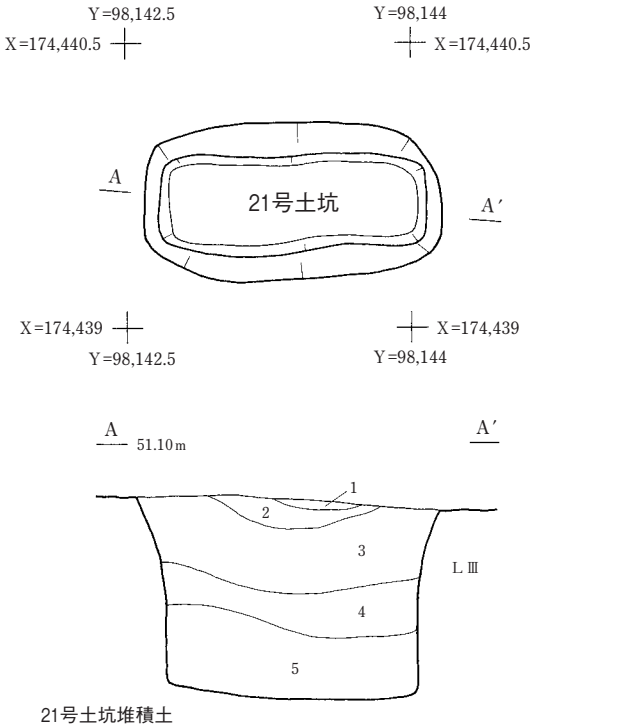
平面形は不整な楕円形を呈し，長軸方位はＮ50°Ｅである。規模は，長軸196㎝，短軸80㎝，検出面からの深さは最大で12㎝を測る。周壁はやや急傾に立ち上がり，底面はほぼ平坦である。堆積土は１層で，現況から堆積過程は判断できない。



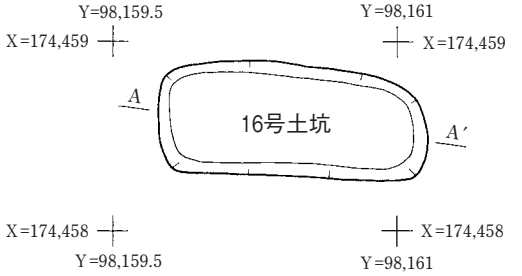
15号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2(明黄褐色土粒・炭化物少量)



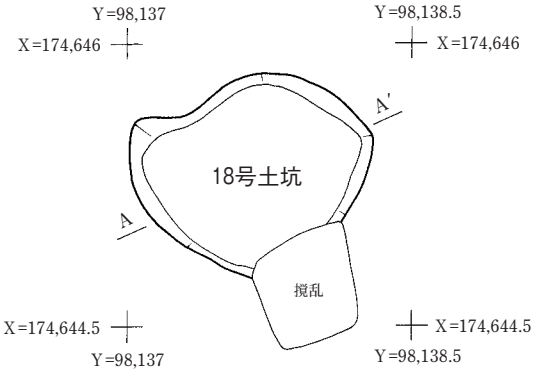
17号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1(炭化物・焼土粒多量)
2　黄褐色土　10ＹＲ5/6(黒褐色土粒・灰黄褐色土粒・炭化物少量)



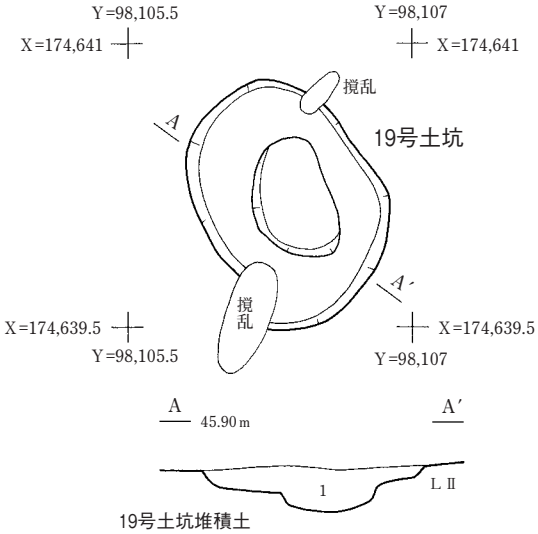
21号土坑堆積土
1　浅黄色土　2.5Ｙ7/4
2　褐色土　10ＹＲ4/4(浅黄色土微量)
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3(浅黄色土少量，炭化物・ＬⅢ塊微量)
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3(ＬⅢ塊少量)
5　黄褐色土　10ＹＲ5/6



16号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3(ＬⅢ塊少量)



18号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物多量)
2　黒色土　10ＹＲ2/1(炭化物・焼土塊多量)



19号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3(炭化物粒微量)

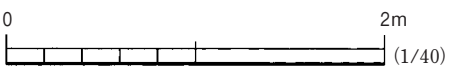


図24　15～19・21号土坑

検出面から縄文土器片44点が出土し，そのうち５点を図示した。図28－１は口縁部片である。隆帯に網目状撚糸文が施されている。図28－２～５は深鉢の胴部片である。２には網目状撚糸文が施文され，３～５には地文に撚糸文が施文されている。なお，１・２・４の内面は赤彩されており，蛍光Ｘ線分析の結果，赤色顔料はベンガラである可能性が指摘された(第３章参照)。

本土坑の年代は，出土遺物から縄文時代晩期頃と考えられる。性格は不明である。　　(小　河)

21号土坑　ＳＫ21(図24，写真24)

本土坑はⅡ区南西部のＦ22・Ｆ23グリッドに位置する。周辺の地形は，南方向に緩やかに傾斜している。検出面は，ＬⅢ上面である。

平面形は隅丸長方形を呈する。長軸は真北方向に直交する。長軸156㎝，短軸84㎝，検出面からの深さは最大で108㎝である。底面はほぼ平坦で，周壁は底面から72㎝程のところまでほぼ直角に立ち上がり，そこから逆ハの字状に急傾に立ち上がる。この形状は，本遺跡ＳＫ34と同様のものである。堆積土は５層に分けられる。壁際からの流入状況が認められることから，いずれも自然流入土と考えられる。本土坑の性格は断面の形状と深さから，落とし穴状土坑と考えられる。出土遺物はなく，年代は不明である。　　(小　河)

22号土坑　ＳＫ22(図25，写真24)

本土坑はＩ区南部のＣ８・９グリッドに位置し，検出面はＬⅢである。他の遺構との重複関係はなく，周囲は遺構が希薄な地点となる。

遺構内堆積土は３層からなる。ℓ１はにぶい黄褐色土で灰に由来する層，ℓ２は黒褐色土で炭化物や焼土を多量に含む。ℓ３は灰黄褐色土と明黄褐色土の混土で炭化物はきわめて少ない。このことから堆積状況はℓ１・２が自然堆積，ℓ３が人為堆積と判断した。特に後者は湧水が著しい箇所ゆえの掘形と考えられる。同時に，ℓ１は東側に厚く堆積し，西側に移行するにしたがって層厚が薄くなる。

検出面における平面形は一部試掘時のトレンチで削平されているものの，南北方向に長い楕円形を呈し，長軸228㎝，短軸158㎝，検出面からの深さ23㎝をそれぞれ測る。土坑中位～下半にかけては長軸119㎝，短軸110㎝，底面からの深さ約10㎝内外のくぼみを有し，短辺の中点を基準とした主軸方位はＮ46°Ｗを指す。掘形底面は若干の凹凸が認められた。

本土坑から遺物は出土しなかった。ゆえにその年代は不明である。土坑の形状や内容物などの特徴から，掘形を有する木炭焼成土坑の可能性が高い。　　(管　野)

23号土坑　ＳＫ23(図25，写真25)

本土坑はＩ区南東部のＤ６グリッドに位置する。南西側35㎝にはＳＫ25，同じく220㎝にはＳＩ01が近接する。検出面はＬⅡである。

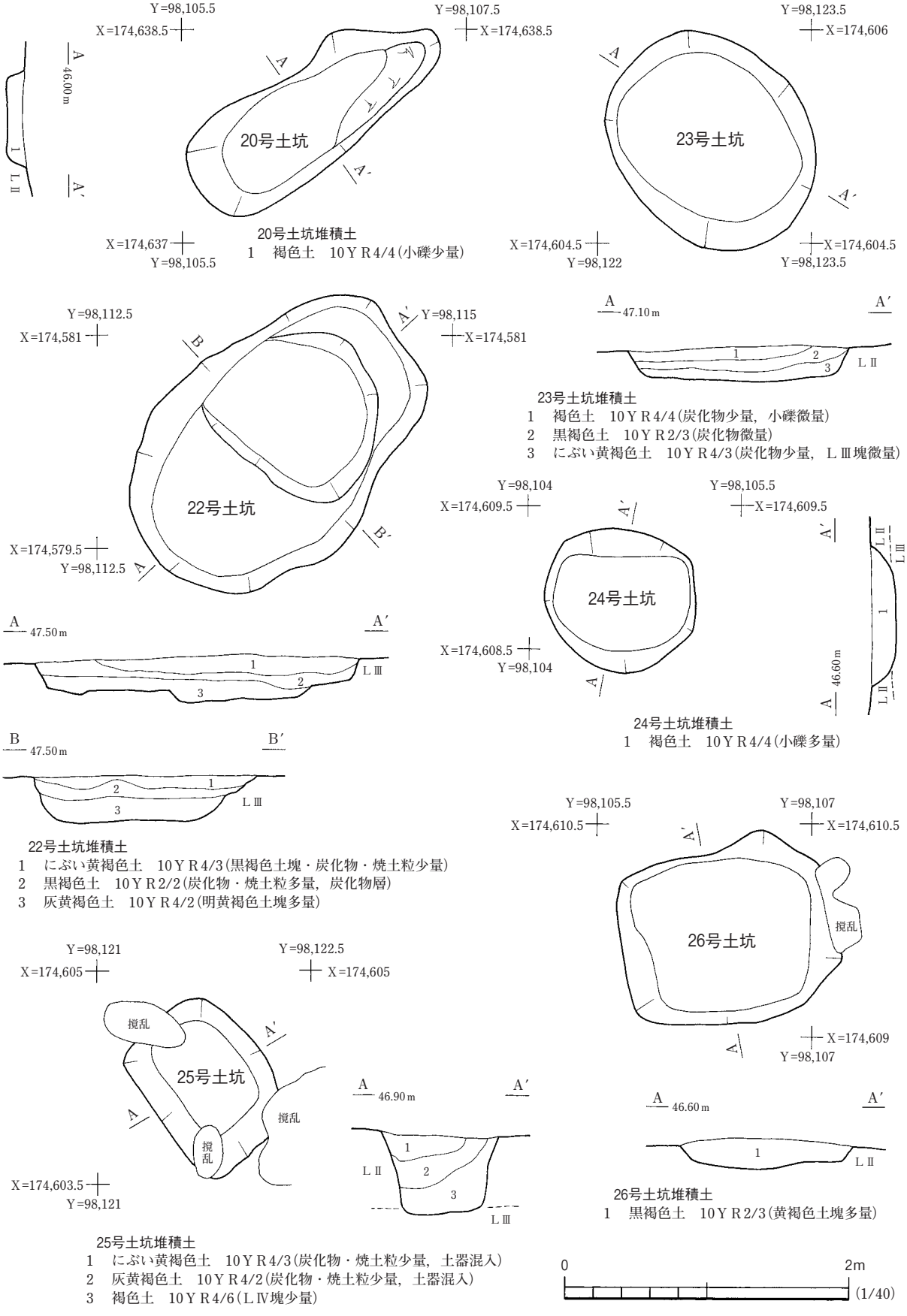


図25　20・22～26号土坑

平面形は楕円形を呈する。長軸方位はＮ35°Ｗで，長軸160㎝，短軸132㎝，検出面からの深さは最大で24㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。堆積土は３層で，炭化物を少量含んでいる。いずれも周囲からの自然流入土と考えられる。出土遺物はなく，本土坑の性格・年代は不明である。（小　河）

24号土坑　ＳＫ24（図25，写真25）

本土坑はⅠ区南西部のＢ６グリッドに位置する。検出面はＬⅡである。

平面形は不整な円形を呈する。長軸方位はＮ82°Ｗで，長軸104㎝，短軸100㎝，検出面からの深さは最大で16㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面には若干の凹凸が認められる。

堆積土は１層で，現況から堆積過程は判断できない。

本土坑からの出土遺物はなく，性格・年代は不明である。（小　河）

25号土坑　ＳＫ25（図25・28，表１，写真25・30）

本土坑はⅠ区中央部のＤ６グリッドに位置し，検出面はＬⅡである。検出時にはすでに木の根による撹乱で壁面などが消失していた。また，西側にＳＩ01，北側にＳＫ23がそれぞれ位置する。

遺構内堆積土は３層からなり，堆積状況は不明である。３層とも褐色系土で，最上層のℓ１には土器が多く含まれていた。

検出面における平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し，短軸の中点を基準とした主軸方位はＮ38°Ｗを指す。規模は長軸117㎝，短軸85㎝，検出面からの深さ54㎝をそれぞれ測る。底面はほぼ平坦をなし，周壁は急に立ち上がる。

遺物はℓ１からロクロ成形の土師器が24点出土し，このうち１点を図示した。図28－６は遺存度25％の胴部下半から底部を欠損するロクロ土師器の甕で，外面には粘土の固着が認められる。

本土坑は出土遺物から平安時代の所産と推定される。その性格は近接するＳＩ01と軸線がほぼ平行することからこの関連施設の可能性がある。（管　野）

26号土坑　ＳＫ26（図25，写真25）

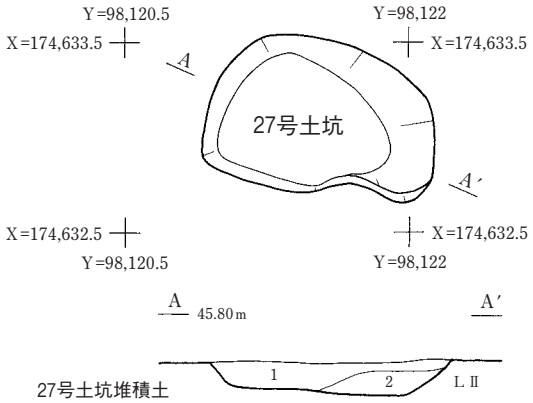
本土坑はⅠ区南西部のＢ５・６グリッドに位置する。検出面はＬⅡである。

平面形は不整な隅丸長方形を呈する。長軸方位はＮ82°Ｅで，長軸152㎝，短軸132㎝，検出面からの深さは最大で20㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面には凹凸が認められる。

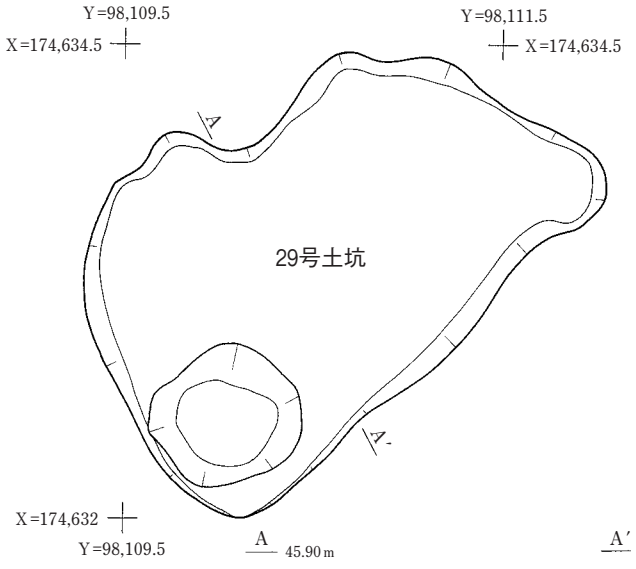
堆積土は１層で，黄褐色土塊を多量に含むことから人為堆積と考えられる。出土遺物はなく，本土坑の性格・年代は不明である。（小　河）

27号土坑　ＳＫ27（図26，写真25）

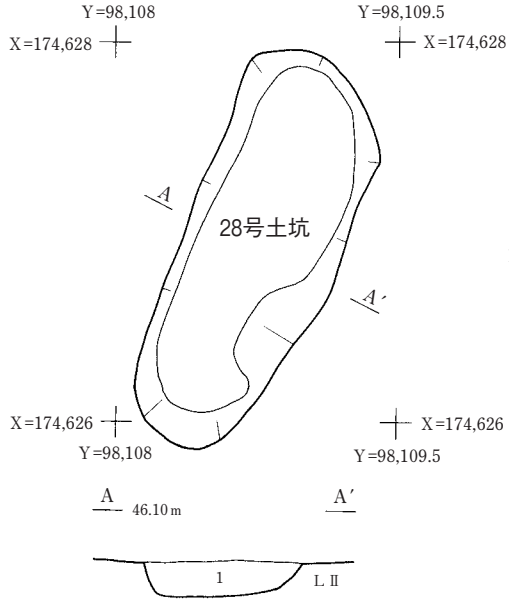
本土坑はⅠ区北東部のＤ３グリッドに位置する。検出面は，ＬⅡである。



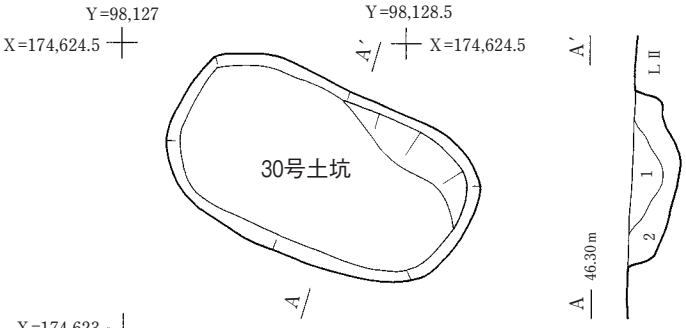
27号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4(小礫少量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(小礫少量)



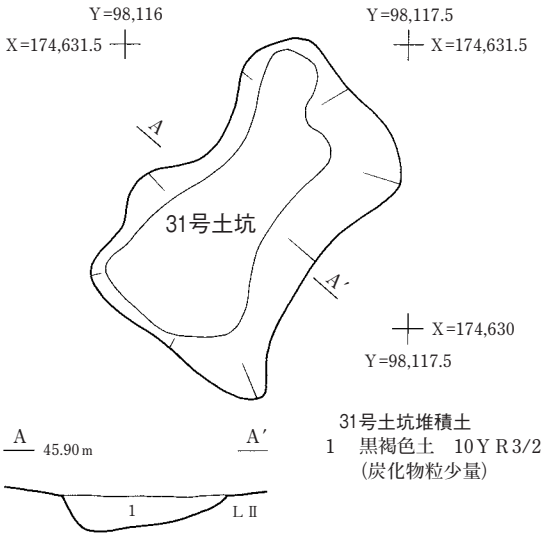
29号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3(礫微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/4(礫微量)
3　黄褐色土　10ＹＲ5/6(礫微量，砂質)



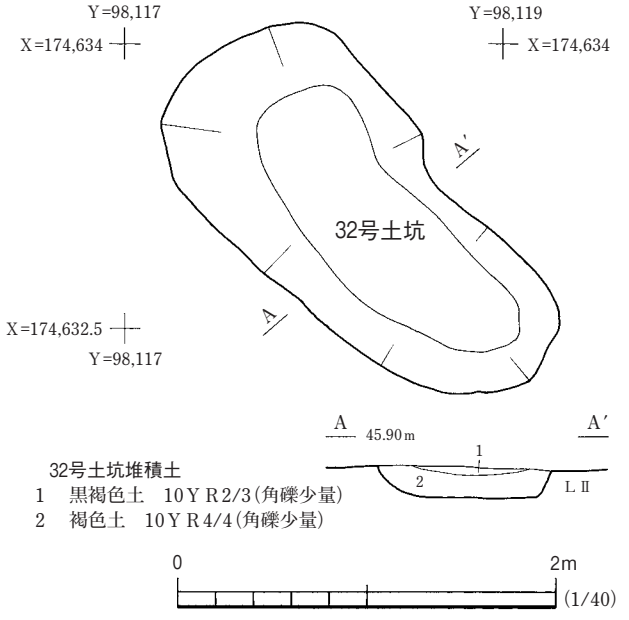
28号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3(Ｌ Ⅱ塊多量，小礫少量)



30号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(黄褐色土塊少量)
2　黄褐色土　10ＹＲ5/6(暗褐色土塊少量)



31号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2
(炭化物粒少量)



32号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3(角礫少量)
2　褐色土　10ＹＲ4/4(角礫少量)

図26　27～32号土坑

平面形は不整な楕円形を呈する。長軸方位はＮ70°Ｗで，長軸124㎝，短軸88㎝，検出面からの深さは最大で16㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がり，底面には若干の凹凸が認められる。

遺構内堆積土は２層で，いずれも自然流入土である。本土坑からの出土遺物はなく，性格・年代は不明である。（小　河）

28号土坑　ＳＫ28（図26，写真25）

本土坑はＩ区北西部のＢ４グリッドに位置する。検出面はＬⅡである。

平面形は不整な楕円形を呈する。長軸方位はＮ20°Ｅで，長軸220㎝，短軸84㎝，検出面からの深さは最大で18㎝である。周壁は，西・北側の壁はやや急な角度で立ち上がるが，他の壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は１層で，ＬⅡ塊を多量に含むことから，人為堆積と考えられる。出土遺物はなく，本土坑の性格・年代は不明である。（小　河）

29号土坑　ＳＫ29（図26，写真26）

本土坑はＩ区北西部のＣ３グリッドに位置し，東側1.7ｍにはＳＩ03が近接する。検出面はＬⅡである。

平面形は不整な隅丸長方形を呈する。長軸方位はＮ48°Ｅで，規模は長軸280㎝，短軸184㎝を測り，検出面からの深さは最大で16㎝である。周壁は，やや急な角度で立ち上がる。底面には若干の凹凸が認められ，南隅に円形のくぼみがある。

遺構内堆積土は３層で，いずれも自然流入土である。出土遺物はなく，本土坑の性格・年代は不明である。（小　河）

30号土坑　ＳＫ30（図26，写真26）

本土坑はＩ区北東部のＤ４グリッドに位置する。検出面は，ＬⅡである。

平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方位はＮ65°Ｗで，長軸164㎝，短軸92㎝，検出面からの深さは最大で24㎝である。周壁は，やや急な角度で立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。

堆積土は２層で，いずれも自然流入土である。本土坑からの出土遺物はなく，性格・年代は不明である。（小　河）

31号土坑　ＳＫ31（図26，写真26）

本土坑は，Ｉ区北東部のＣ３・４グリッドに位置する。西側35㎝にはＳＩ03が近接する。検出面は，ＬⅡである。

平面形は不整な隅丸長方形を呈し，長軸方位はＮ41°Ｅである。長軸172㎝，短軸124㎝，検出面からの深さは最大で20㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がる。底面は西側に緩やかに傾斜している。

堆積土は１層で，現況から堆積過程は判断できない。出土遺物はなく，本土坑の性格・年代は不明である。（小　河）

32号土坑　ＳＫ32（図26，写真26）

本土坑はＩ区北東部のＣ３グリッドに位置し，南西側1.5ｍにはＳＩ03が近接する。検出面はＬⅡである。平面形は不整な隅丸長方形を呈する。長軸方位はＮ49°Ｗで，長軸240㎝，短軸120㎝を測る。検出面からの深さは最大で16㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。堆積土は２層で，いずれも自然流入土である。出土遺物はなく，本土坑の性格・年代は不明である。（小　河）

33号土坑　ＳＫ33（図27，写真26）

本土坑はⅢ区北西部のＪ32グリッドに位置する。検出面は，ＬⅢ上面である。

平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方位はＮ68°Ｗで，長軸112㎝，短軸68㎝，検出面からの深さは最大で28㎝である。周壁はやや急傾に立ち上がる。南東壁以外の壁面に被熱による酸化面が認められ，その厚さは１～２㎝である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は３層に分けられる。ℓ１・２は自然流入土，ℓ３は遺構底面に堆積する炭化物層で，使用時の堆積と考えられる。

本土坑は，底面上に炭化物層があり，壁面に熱変化が認められることから，木炭焼成土坑と判断した。出土遺物はなく，年代は不明である。（小　河）

34号土坑　ＳＫ34（図27・28，表１，写真26）

本土坑はⅢ区南東部のM35グリッドに位置する。北方向に傾斜する斜面頂部の平坦面に立地している。検出面はＬⅢ上面である。

平面形は楕円形を呈する。長軸方位はＮ76°Ｅで，長軸184㎝，短軸144㎝を測り，検出面からの深さは136㎝である。底面はほぼ平坦である。周壁は底面から100㎝程のところまでほぼ直角に立ち上がり，そこから逆ハの字状に急な角度で立ち上がる。この形状は，本遺跡Ⅱ区検出のＳＫ21と同様のものである。堆積土は６層で，壁際からの流入状況が認められることから，いずれも自然流入土と考えられる。本土坑の断面の形状と深さから，落とし穴と考えられる。

ℓ１から，かわらけの高台付杯の底部が出土している（図28－７）。内外面ともにロクロナデ整形され，底面には回転糸切り痕が観察される。本土坑の年代は，出土遺物から11世紀以前の所産であると考えられる。（小　河）

35号土坑　ＳＫ35（図27，写真26）

本土坑はⅢ区南東部のＬ・M35グリッドに位置する。検出面は，ＬⅢ上面である。

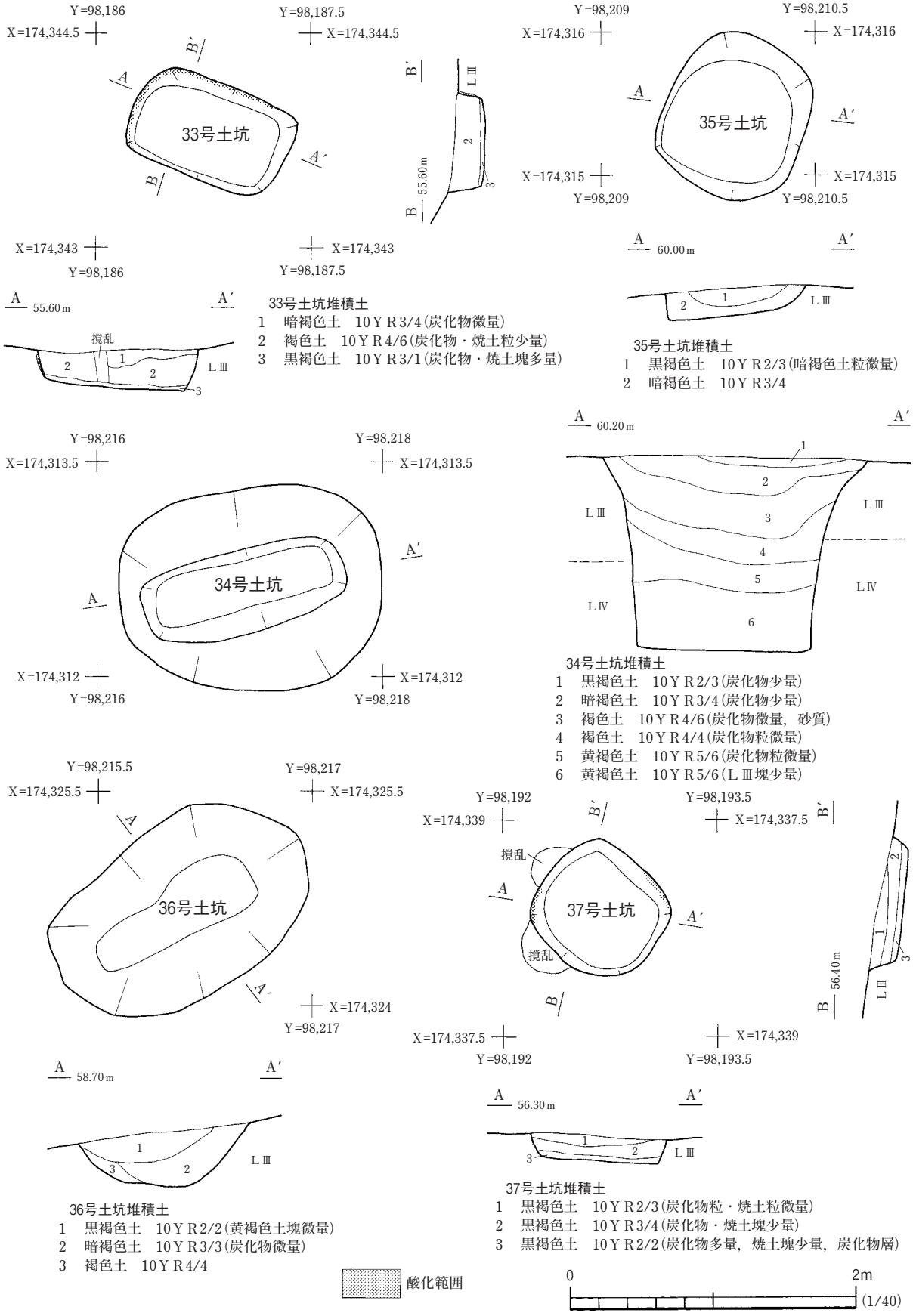

Y=98,186
X=174,344.5
Y=98,187.5
X=174,344.5
33号土坑
A
A′
B
B′
55.60m
L Ⅲ
Y=98,209
X=174,316
Y=98,210.5
X=174,316
35号土坑
X=174,315
Y=98,209
Y=98,210.5
X=174,315
X=174,343
Y=98,186
X=174,343
Y=98,187.5
60.00m
33号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物・焼土粒少量)
3　黒褐色土　10ＹＲ3/1(炭化物・焼土塊多量)
撹乱
35号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3(暗褐色土粒微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4
Y=98,216
X=174,313.5
Y=98,218
X=174,313.5
34号土坑
X=174,312
Y=98,216
X=174,312
Y=98,218
60.20m
L Ⅳ
34号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3(炭化物少量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物少量)
3　褐色土　10ＹＲ4/6(炭化物微量，砂質)
4　褐色土　10ＹＲ4/4(炭化物粒微量)
5　黄褐色土　10ＹＲ5/6(炭化物粒微量)
6　黄褐色土　10ＹＲ5/6(Ｌ Ⅲ塊少量)
Y=98,215.5
X=174,325.5
Y=98,217
X=174,325.5
36号土坑
X=174,324
Y=98,217
Y=98,192
X=174,339
Y=98,193.5
X=174,337.5
37号土坑
X=174,337.5
Y=98,192
X=174,339
Y=98,193.5
56.40m
58.70m
56.30m
36号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2(黄褐色土塊微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3(炭化物微量)
3　褐色土　10ＹＲ4/4
37号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3(炭化物粒・焼土粒微量)
2　黒褐色土　10ＹＲ3/4(炭化物・焼土塊少量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2(炭化物多量，焼土塊少量，炭化物層)
酸化範囲
0
2m
(1/40)

図27　33～37号土坑

平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方向はＮ20°Ｅで，長軸116㎝，短軸100㎝，検出面からの深さは最大で20㎝である。周壁は，西側の壁がやや急傾に立ち上がるが，他の壁は緩やかに立ち上がる。底面には凹凸が認められる。堆積土は２層で，いずれも自然流入土である。出土遺物はなく，本土坑の性格・年代は不明である。（小　河）

36号土坑　ＳＫ36（図27，写真27）

本土坑はⅢ区南東部のＭ34グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面である。周辺の地形は，北方向にやや急に傾斜している。

平面形は楕円形を呈する。長軸方向はＮ48°Ｅで，長軸188㎝，短軸120㎝，検出面からの深さは最大で40㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，底面には凹凸が認められる。堆積土は３層でいずれも自然流入土である。本土坑からの出土遺物はなく，性格・年代は不明である。（小　河）

37号土坑　ＳＫ37（図27，写真27）

本土坑はⅢ区北西部のＫ33グリッドに位置する。周辺の地形は，北に向かってやや急に傾斜している。Ｋ33グリッド北部のＬⅢ上面に炭化物の広がりを確認し，ベルトを設定して10㎝ほど掘り下げたところ，本土坑を検出した。

平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方向はＮ45°Ｗで，長軸92㎝，短軸84㎝，検出面からの深さは最大で20㎝である。周壁は緩やかに立ち上がる。北西壁隅と北東壁の一部に被熱による酸化面が認められ，その厚さは１～２㎝である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は３層に分けられる。ℓ１・２は自然流入土，ℓ３は底面に堆積する炭化物層で使用時の堆積と考えられる。

本土坑は，底面上に炭化物層があり，壁面に熱変化が認められることから，木炭焼成土坑と判断した。出土遺物はなく，年代は不明である。（小　河）

38号土坑　ＳＫ38（図28，写真27）

本土坑は，Ⅰ区中央部のＣ６グリッドに位置し，検出面はＬⅡである。重複する遺構はないものの，東側にＳＩ01が位置する。

遺構内堆積土は２層からなり，堆積状況は不明である。土質からはＳＫ25との共通性が高く，同時期に機能していた可能性が高いと判断した。

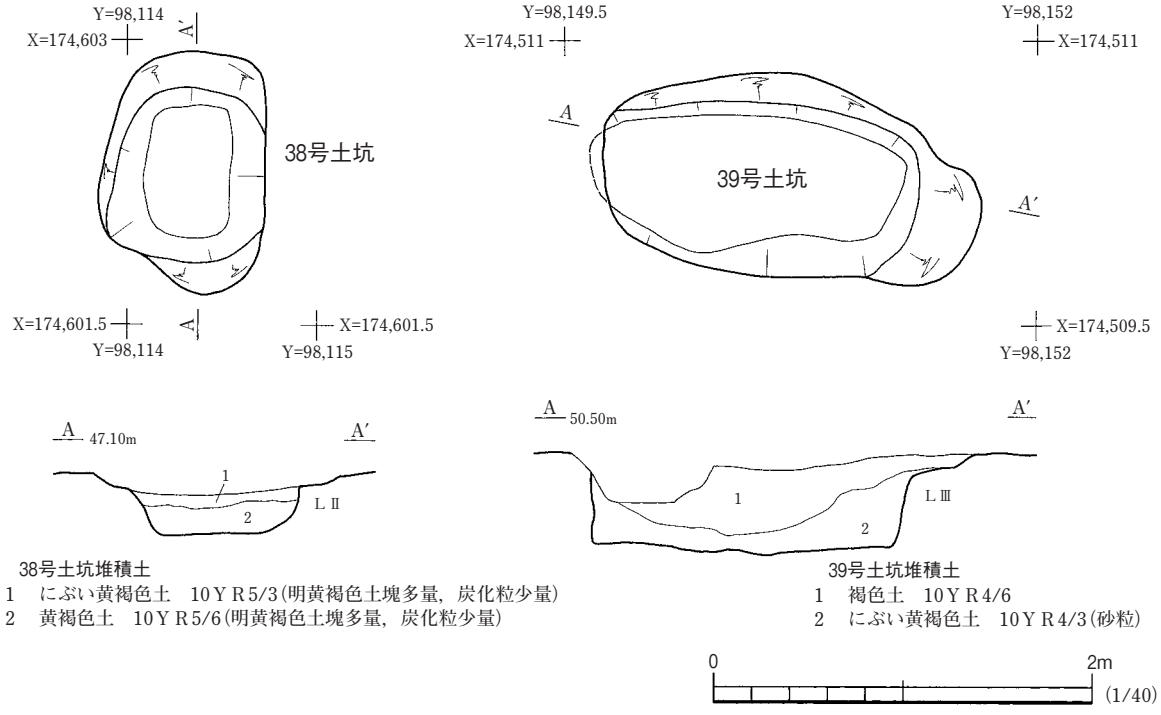
検出面における平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈するが，南側および北側は緩やかに傾斜し段差が生じる。長軸126㎝，短軸85㎝，検出面からの深さ30㎝をそれぞれ測り，短軸の中点を基準とした主軸方位はＮ７°Ｅを指す。底面はほぼ平坦をなし，断面形は鍋底形を呈する。

本土坑から遺物は出土しなかった。したがってその年代は不明である。土坑の形状や内容物などはＳＫ25と類似し，ＳＩ01の関連施設の可能性が高い。（管　野）

39号土坑　ＳＫ39(図28，写真27)

本土坑はⅡ区中央部のＦ15・16，Ｇ15・16グリッドに位置し，検出面はＬⅢである。本土坑の西側はＳＦ01の西溝により一部が壊されていた。したがってＳＦ01より古い年代の土坑といえる。

堆積土は２層からなり，レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と判断される。特にℓ１は褐色土でＬⅡ基調の堆積土で，この点で他の木炭焼成土坑とは状況が異なることが指摘できる。ℓ２はＬⅢ基調で，壁の崩落土が主であると考えられる。



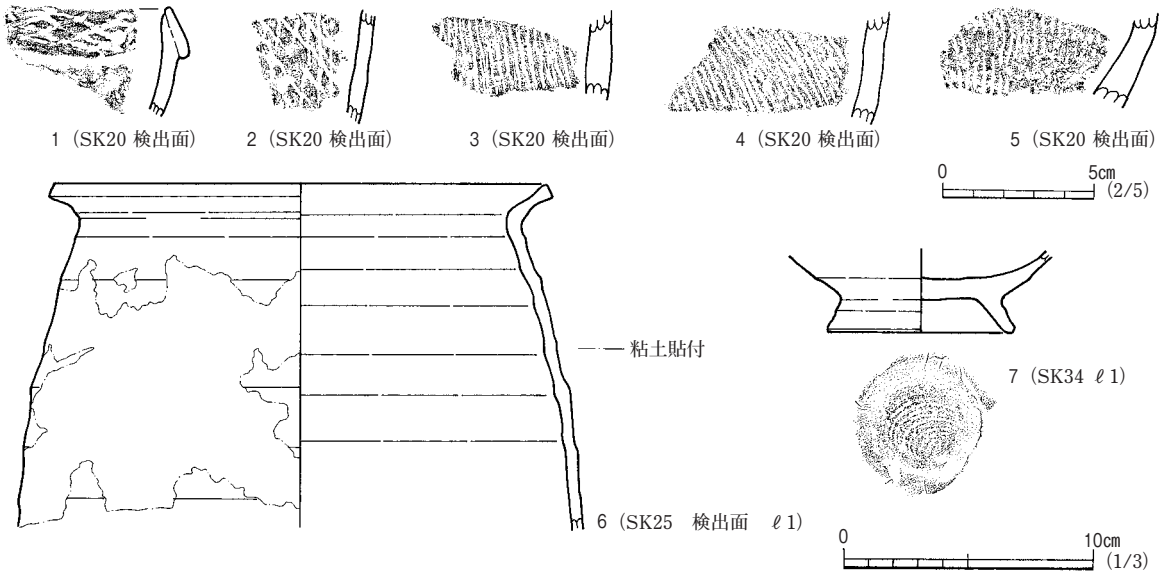


図28　38・39号土坑，出土縄文土器・土師器・かわらけ

遺構の平面形は隅丸長方形を呈するが，上端の東側を中心に崩落している。周壁は80°程度と急斜に立ち上がり，底面は平坦である。西壁では周壁の下部が抉れている。中端での平面規模は長軸172㎝，短軸92㎝で，検出面から底面までの深さは最大52㎝を測る。本土坑の上端はＳＦ01により削平を受けた可能性があり，元来はもう少し深さのある土坑であったと推察される。

本土坑からは遺物は出土しなかった。したがって年代は不詳であるが，平面形や規模などから落とし穴状土坑の可能性が考えられる。（門　脇）

第７節　特　殊　遺　構

ここでは竪穴状に掘り込んでいるが，竪穴住居跡よりも規模が小さく，カマドや柱穴などの付属施設が認められなかった遺構について述べる。本遺跡ではこのような遺構は１基のみである。

１号特殊遺構　ＳＸ01（図29，写真27）

本遺構はⅡ区中央部のＧ17グリッドに位置し，ＳＦ01の掘形埋土を精査していく過程で検出された遺構である。本遺構の北東部はＳＦ01の東溝によって壊されていることから，本遺構が古いことがわかる。また遺構の北側は風倒木痕であるために，本遺構では北壁の状態が不明である。ここで

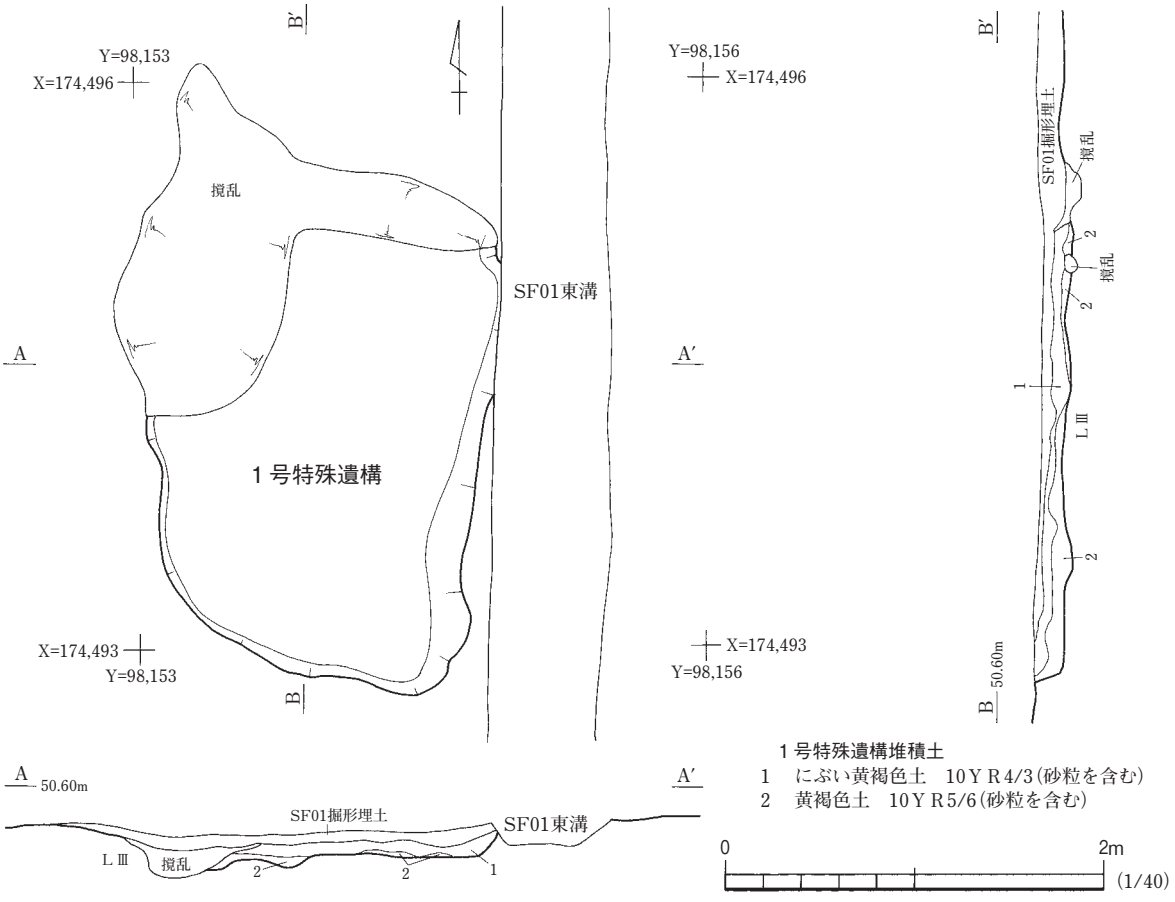


図29　１号特殊遺構

遺構の新旧関係を整理すると，ＳＦ01が最も新しく，次に風倒木痕，最も古いのが本遺構となる。

堆積土は２層からなり，いずれもＬⅢ由来の黄褐色土粒を多く含むことから自然堆積と考えられる。またℓ１はＳＦ01の掘形埋土と混じったような堆積状況であることから，完全に埋まりきらない段階でＳＦ01が構築されたと考えられる。

平面形は長方形を基調としているが，先述のように遺構の北側に様相が不明である。底面での規模は現状で長軸228㎝以上，短軸164㎝を測り，一般的な土坑の大きさよりも大きく，竪穴住居跡よりは小さい。通常の竪穴住居跡の４分の１位の規模を考えてよい。底面は一部，凹凸があるが，おおむね平坦である。周壁は60°位の傾斜があり，平面形の確認は比較的容易であった。

遺物は出土しておらず，年代についての詳細は不明である。ただ近世以降と考えられるＳＦ01の構築段階では本遺構は完全に埋まりきっていないことから，近接した年代の所産と推察される。遺構の性格についても不明である。（門　脇）

第８節　遺構外出土遺物（図30・31，表１，写真31～33）

本遺跡の遺構外からは，縄文土器1,484点，土師器49点，須恵器６点，石器３点，石製品１点が出土している。このうち，縄文土器58点，須恵器３点，石器２点，石製品１点を図示した。

遺構外から出土した遺物の多くは，Ⅰ区の北端部に接する小谷に面したきわめて緩やかな緩斜面のＬⅡから出土した。ＬⅡの層厚は15㎝ほどで，遺物が多く包含されていたのは，Ｂ～Ｄの１・２グリッドであった。

縄 文 土 器

図30と図31－１～４は縄文土器である。

図30－１は沈線で変形工字文が，２は横方向の沈線が施されている。３は変形工字文と突起をもつ体部に，外反する無文の口縁部がつく。４は突起をもつ口縁部の下の内外面に横位の沈線を施し，外面に撚糸が施されている。

５～８は，外反し，外面を肥厚させた口縁部で，８を除いて肥厚した部分に地文を施す。６と７は胎土・焼成・色調が類似することから，同一個体と考えられる。

９・10は，粘土の貼り付けによって外面を肥厚した口縁部で，肥厚した部分に横位の沈線を巡らす。口縁端部は面取りされ，内面は横方向の条痕が施される。胎土・焼成・色調が類似することから，同一個体と考えられる。

11～15は，外面が肥厚した口縁部で，肥厚した部分に横位の沈線を巡らす。

16～18は，やや内湾する口縁部で，外面に地文を施す。

19～39は，外面に撚糸文を施すもので，36を除いていずれも体部の破片である。36は，平底の底部である。

40～46は外面に網目状の撚糸文を施すものである。45が外面を肥厚させた口縁部であるほかは，

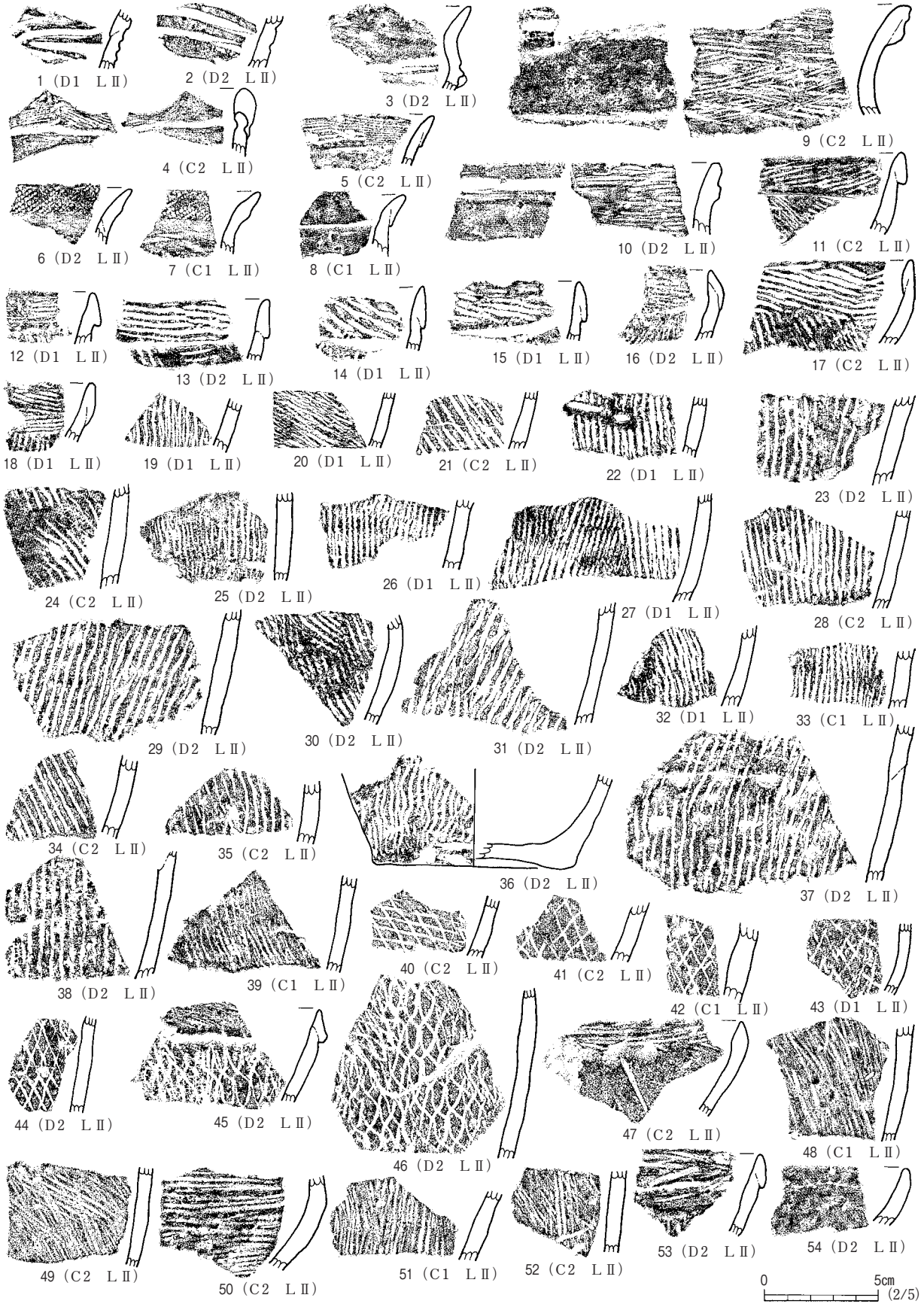


図30　遺構外出土縄文土器

いずれも体部の破片である。

47～53は，外面に条痕を施すものである。47が内湾する口縁部，53が外面を肥厚させた口縁部であるほかは，いずれも体部の破片である。

54は，やや内湾する無文の口縁部の破片である。

図31－１は外面に縦走する撚糸文が施されている。２は縦方向の条線を施す口縁部の破片である。３は磨消縄文が施されたもの，４は波状口縁の下に沈線と隆帯をもつ注口土器の破片である。

須　恵　器

図31－５～７は須恵器の甕である。５は体部～口縁部の破片で，体部は外面にタタキメ，内面に同心円状のアテ具痕，口縁部は内外面ともロクロナデが施されている。

６・７は体部の破片で，外面にタタキメ，内面に同心円状のアテ具痕が施されている。これらの

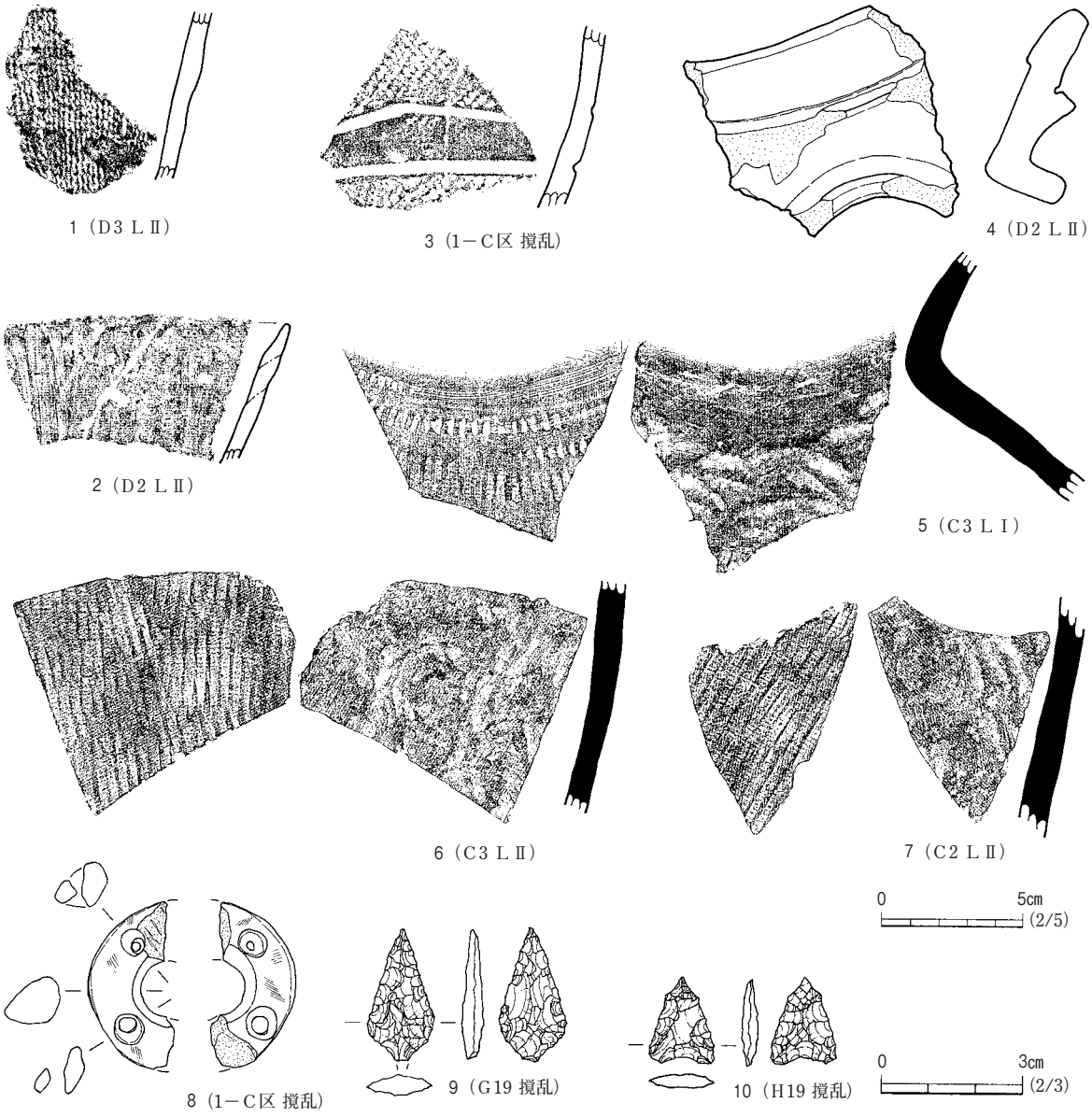


図31　遺構外出土縄文土器・須恵器・石器・石製品

須恵器は胎土・色調・焼成が２号住居跡から出土した須恵器と似ていること，出土位置が近いことから，同一個体の可能性がある

石器・石製品

図31－８は玦状耳飾である。２カ所で折損し，それぞれに両面穿孔の補修孔が穿たれている。遺存長3.6㎝，厚さ1.0㎝，重さ5.7ｇである。色調は淡黄色で，石質は玉髄である。

同図９・10は石鏃である。９は基部が突出し，長さ2.8㎝，幅1.4㎝，厚さ0.4㎝を測る。重さは1.2ｇである。石質は珪質頁岩である。10は基部がくぼみ，長さ1.8㎝，幅1.3㎝，厚さ0.3㎝を測る。重さは0.6ｇである。石質は流紋岩である。（青　山）

表１　土器計測表

図番号	出土位置	出土層位	器　種	口径(㎝)	底径(㎝)	器高(㎝)	遺存度(％)
９－１	ＳＩ01	ℓ２	土師器杯	13.2	5.3	4.1	99
９－２	ＳＩ01	ｂ区　床面	土師器杯	(12.9)	－	〔3.6〕	20
９－３	ＳＩ01	床面	土師器杯	－	(6.4)	〔1.5〕	15
９－４	ＳＩ01	床面	土師器杯	－	(5.8)	〔2.5〕	20
９－５	ＳＩ01	ｃ区　床面　カマド	土師器杯	－	(6.6)	〔2.2〕	20
９－６	ＳＩ01	ｃ区　ℓ２	土師器杯	－	(7.0)	〔2.9〕	25
９－７	ＳＩ01	ｃ区　床面	筒形土器	(9.8)	－	〔3.4〕	
９－８	ＳＩ01	ℓ２	筒形土器	－	－	〔5.6〕	
９－９	ＳＩ01	床面	筒形土器	－	－	〔3.9〕	
９－10	ＳＩ01	床面	筒形土器	－	－	〔3.4〕	
９－11	ＳＩ01	カマド	土師器甕	(17.4)	－	〔5.8〕	12
９－12	ＳＩ01	ｄ区　ℓ２	土師器甕	(19.3)	－	〔4.5〕	5
９－13	ＳＩ01	ａ区　ℓ２	土師器甕	(17.3)	－	〔9.4〕	15
９－14	ＳＩ01	床面	土師器甕	(11.6)	－	〔5.5〕	15
９－15	ＳＩ01	カマド	土師器甕	(17.0)	－	〔4.1〕	10
９－16	ＳＩ01	カマド	土師器甕	(18.2)	－	〔4.9〕	10
９－17	ＳＩ01	ｃ区　ℓ２	土師器甕	(18.6)	－	〔8.4〕	15
９－18	ＳＩ01	床面	土師器甕	(21.4)	－	〔4.9〕	15
12－１	ＳＩ02	ℓ３	土師器杯	(13.6)	(5.4)	4.6	30
12－２	ＳＩ02	床面 ℓ１	土師器杯	(13.8)	(5.3)	3.8	70
12－３	ＳＩ02	ℓ１　ℓ３	土師器杯	－	(6.8)	〔1.5〕	
12－４	ＳＩ02	ℓ１	土師器杯	－	(6.0)	〔0.9〕	
12－５	ＳＩ02	床面　ℓ１　カマド	土師器壺	－	6.2	〔10.3〕	40
15－１	ＳＩ03	床面　Ｐ２	土師器杯	13.1	6.3	4.2	75
15－２	ＳＩ03	カマドℓ１　Ｐ２ℓ１	土師器甕	(11.4)	－	〔4.8〕	12
15－３	ＳＩ03	カマドＰ２　ℓ１	土師器甕	(12.4)	－	〔7.0〕	20
15－４	ＳＩ03	ℓ１　カマド底面　Ｐ２ℓ１	土師器甕	(19.6)	(6.5)	20.5	25
21－１	ＳＦ01	西溝　ℓ１	縄文土器	(21.4)	－	〔17.3〕	
21－２	ＳＦ01	東溝　ℓ１	陶磁器	(25.8)	－	〔7.7〕	
28－６	ＳＫ25	検出面　ℓ１	土師器甕	(19.3)	－	〔13.7〕	25
28－７	ＳＫ34	ℓ１	かわらけ高台付杯	－	(7.3)	〔3.7〕	30
30－36	Ｄ２ＮＷ	ＬⅡ	縄文土器	－	8.6	〔4.2〕	

第３章　自然科学分析

第１節　赤色顔料の蛍光Ｘ線分析

小林　啓(福島県文化振興事業団)

１．はじめに

大田切遺跡からは，土器の内外面及び破断面に赤色顔料が付着する縄文土器が数点出土している。これまで福島県内において，赤色顔料の付着した土器について数件の分析事例が報告されているが(成瀬1988)，その数はあまり多くはない。

縄文時代に使用されていた赤色顔料はベンガラ(Fe_2O_3)と水銀朱(HgS)の２種類であり，各々その発色原因となる金属元素が異なっている。そこで，土器に付着した赤色顔料の種類を明らかにするため，Ｘ線分析顕微鏡(エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置)による元素分析を行った。

２．試　　料

縄文土器片３点である。(図28－２，図28－１，図28－４，いずれも縄文晩期の所産)文化財の分析は非破壊分析を原則とするため，試料を採取せずに土器そのものを分析試料とした。

３．方　　法

試料の元素分析はＸ線分析顕微鏡を用いて，以下の条件により行った。

【分析条件】Ｘ線分析顕微鏡(堀場製作所製XGT-2700)，Ｘ線管球：ロジウム(Rh)，検出器：半導体検出器，測定雰囲気：大気，管電圧：50kv，管電流：1.0ｍA，分析径：100μm，測定時間：120

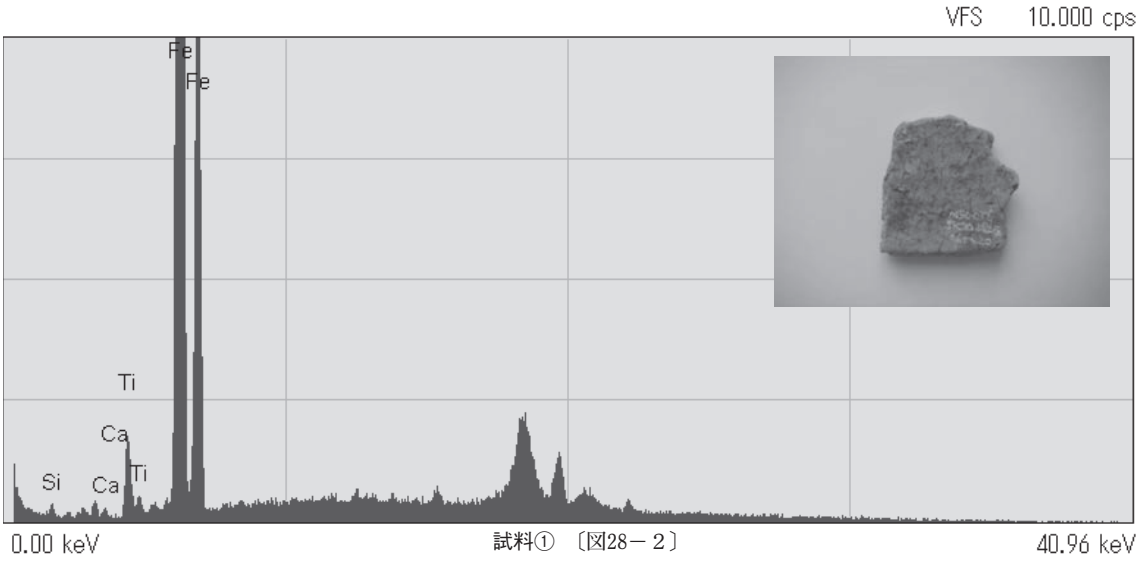
４．結　　果

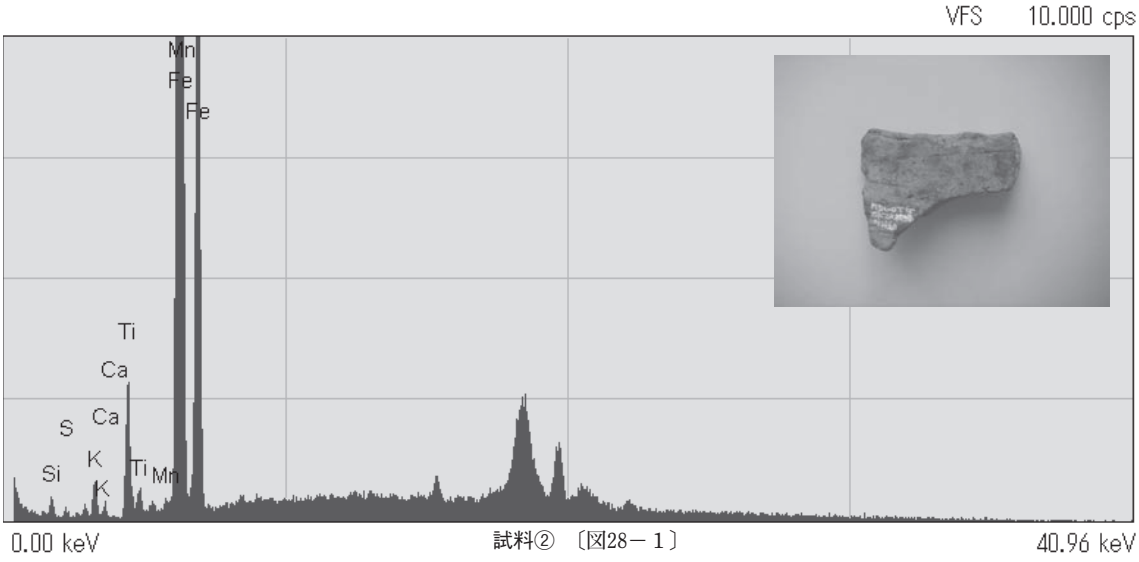
分析の結果，赤色顔料が付着する全ての土器から鉄(Fe)が顕著に検出された(図32)。また，いずれの分析箇所からも水銀(Hg)が検出されていないことから，付着する顔料は鉄由来の赤色顔料「ベンガラ」である可能性が高い。これまでの分析事例から，福島県浜通り地方において縄文後期には水銀朱，縄文時代晩期から弥生時代初頭にはベンガラが優勢に使用されるとの報告がある。(奥山2004)未だ分析例が乏しい現状ではあるが，今回の分析結果はこれを補強するかたちとなる。

ただし，鉄は土器の胎土にも多く含まれていることから，今後，赤色顔料の粒形確認やＸ線回折分析による結晶構造の解析などを行うことが望まれる。

参考文献

成瀬正和　1988　「薄磯貝塚出土の赤色顔料関係遺物」『薄磯貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第19冊
成瀬正和　1993　「赤彩土器・漆塗土器」『久世原館・番匠地遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第33冊
松井敏也ほか　1998　「赤色顔料成分分析」『桜井古墳群上渋佐支群７号墳』原町市埋蔵文化財報告書第27集
奥山誠義　2005　「赤彩土器顔料の蛍光Ｘ線分析」『研究紀要2003』福島県文化財センター白河館研究紀要2003





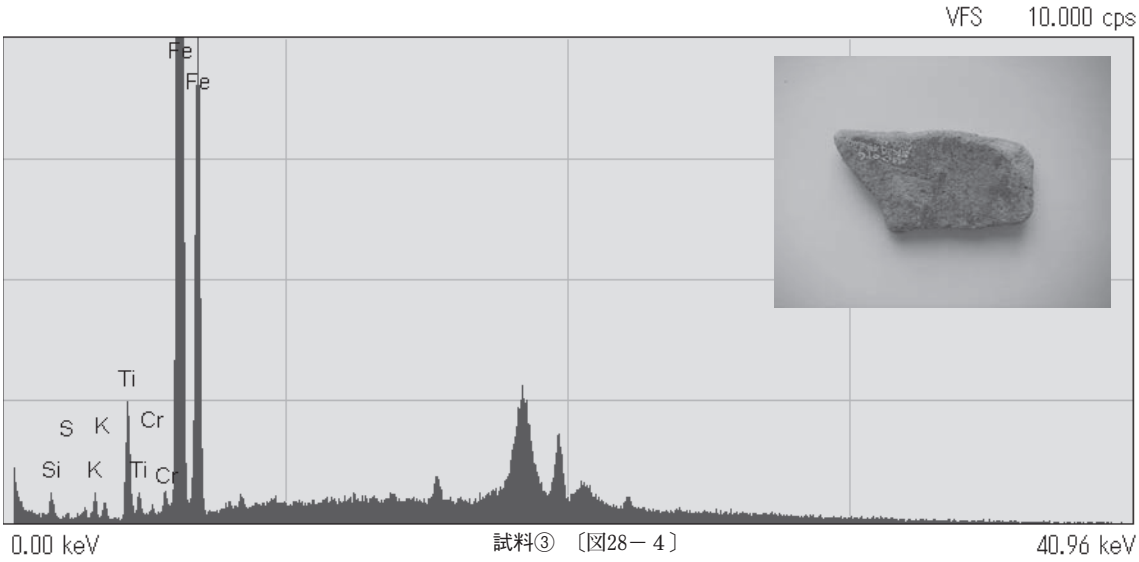


図32　赤彩土器のＸ線スペクトル

第４章　　ま　と　め

本遺跡は，台地の中央部に立地している。周辺に遺跡は少なく，表面調査によって遺跡とされた範囲内で行われた事前の試掘調査によっても，遺構の分布の見られない部分があって要保存範囲から除外されたため，本調査に際しては調査区がⅠ～Ⅲ区の３カ所に分断される結果となった。

本遺跡におけるもっとも古い人の活動の痕跡は，図30－１・２に示した土器から，縄文時代早期にさかのぼる。ただし，この時期の遺構は検出されず，少量の土器片が出土したのみである。同様に，縄文時代後期の土器が少量出土しているが，遺構は検出されなかった。

ついで見られる人類の活動の痕跡は，Ⅰ区の北端部を東西に流れる小谷に接して検出された縄文時代晩期末葉の土器の集中地点から，縄文時代晩期のことと考えられる。この時期の土器を出土した土坑にＳＫ20がある。

このほか，Ⅱ区のＳＫ14などが縄文時代の落とし穴であると推定される。

次に人の活動の痕跡が現れるのは，平安時代である。３軒の住居跡とＳＫ25などの土坑からなる。この時期に小規模な集落が形成されたものの，短期間で終焉する。これらの住居跡のうちＳＩ01とＳＩ02からは，カマドの構築材や堆積土から製鉄炉跡の炉壁片が複数出土している。このほかＳＣ01とＳＤ01からも炉壁の破片が出土している。ＳＤ01から出土した炉壁片はＳＣ01からの流れ込みと考えられ，木炭窯の焚口の閉塞に用いられたものと思われる。

本遺跡内から製鉄炉跡は検出されなかったものの，周辺にこの時期の製鉄炉跡が存在していることを示唆し，これらの住居跡に居住した人物が，付近の製鉄と何らかの関わりを持っていたことを示唆する。本遺跡の北方約600ｍにある熊平Ｂ遺跡でも，平成17年度の調査で平安時代の羽口や製鉄炉跡が出土している。

また，本遺跡の南方1200ｍにある横大道遺跡からは大規模な廃滓場跡が見つかっており，製鉄炉跡の存在が予想される。横大道遺跡の操業時期は今後の調査で明らかになると思われるが，平安時代頃と推察される。したがって，本遺跡の機能時期と一致しており，関連が指摘できよう。これらのことから摩辰ヶ原と呼ばれる台地一帯を舞台とした鉄生産が，平安時代に行われていたことは確実である。今後，調査が行われる横大道遺跡などの成果をもとに議論をする必要があろう。

本遺跡で検出された２基の半地下式木炭窯跡は，近代まで作られていた大竹式炭窯と考えられる。また，Ⅱ区の中央部には道跡も見つかっており，近代においても製炭を中心とした痕跡が認められた。

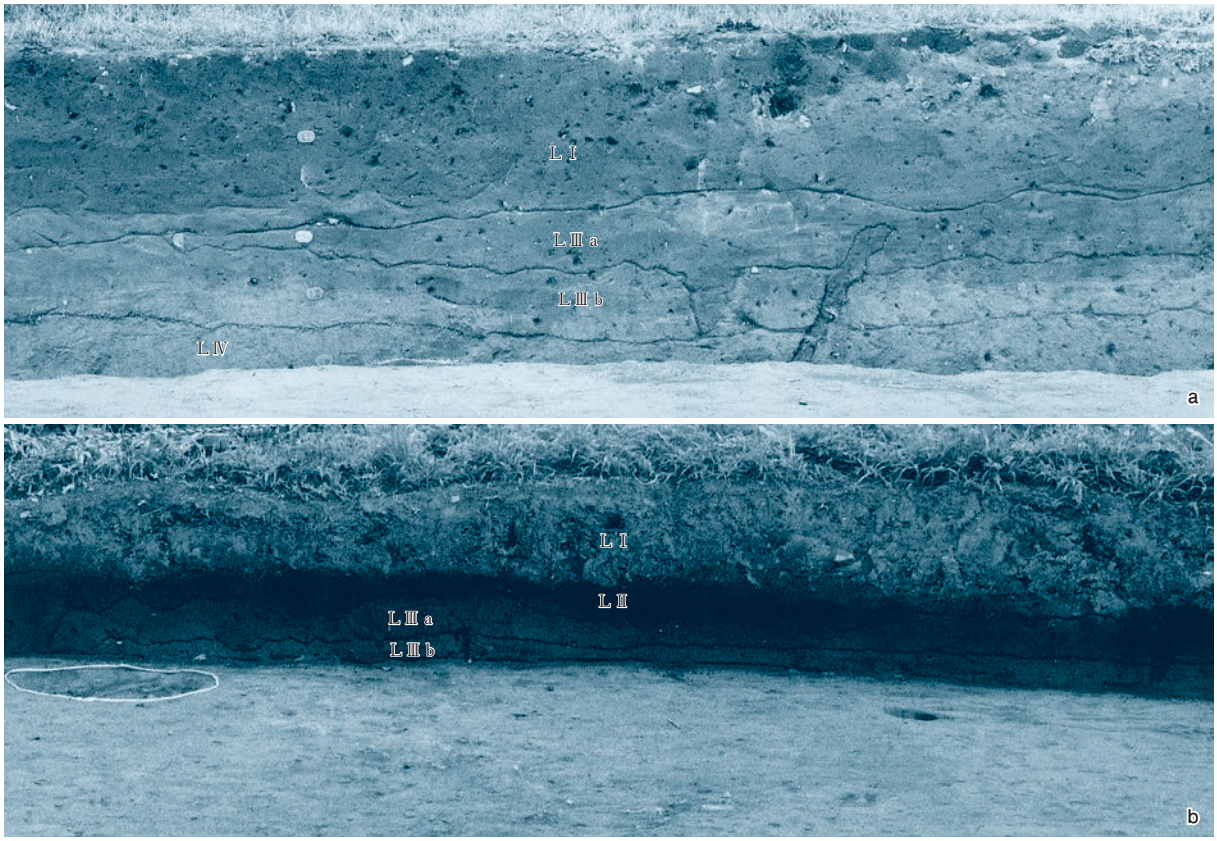
（青　山）

写　真　図　版

第１編　原（はら）Ｂ 遺 跡

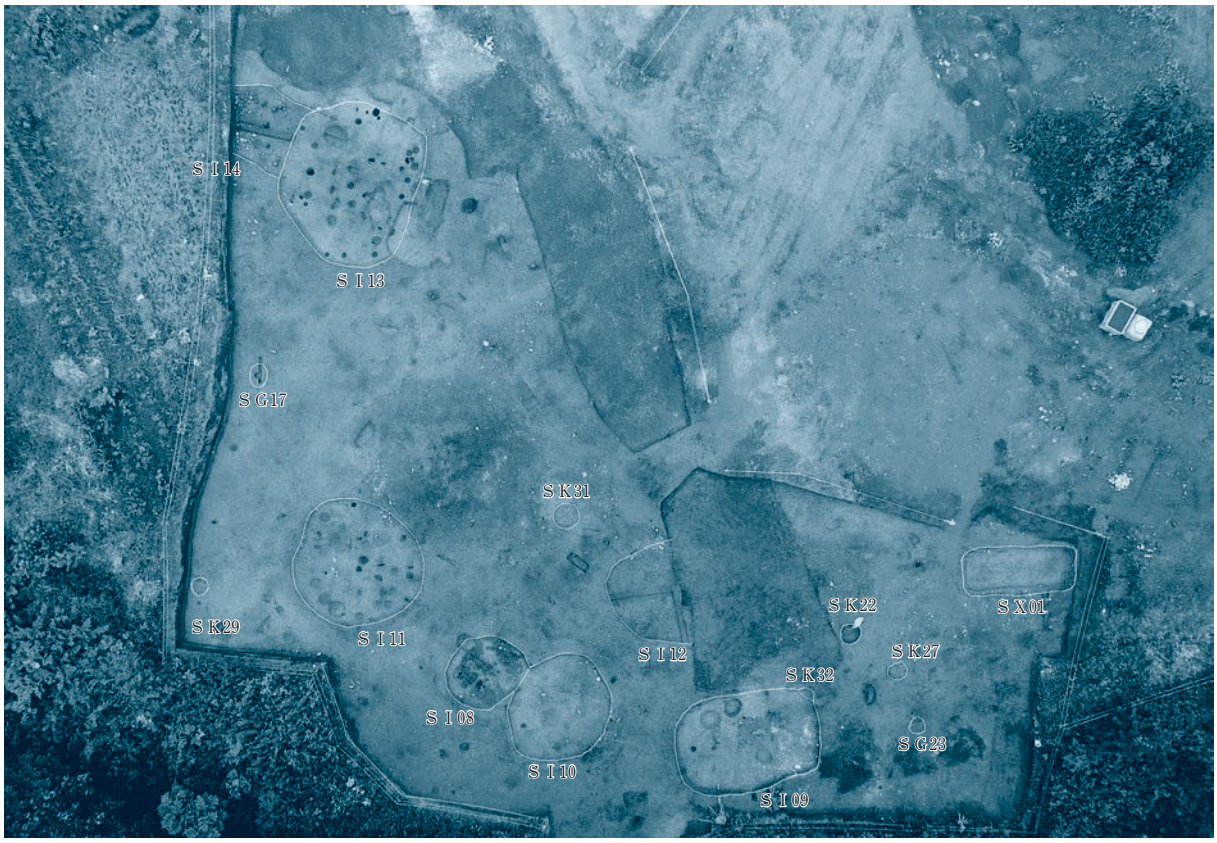
1　調査区遠景（南から）

2　調査区全景（真上から）

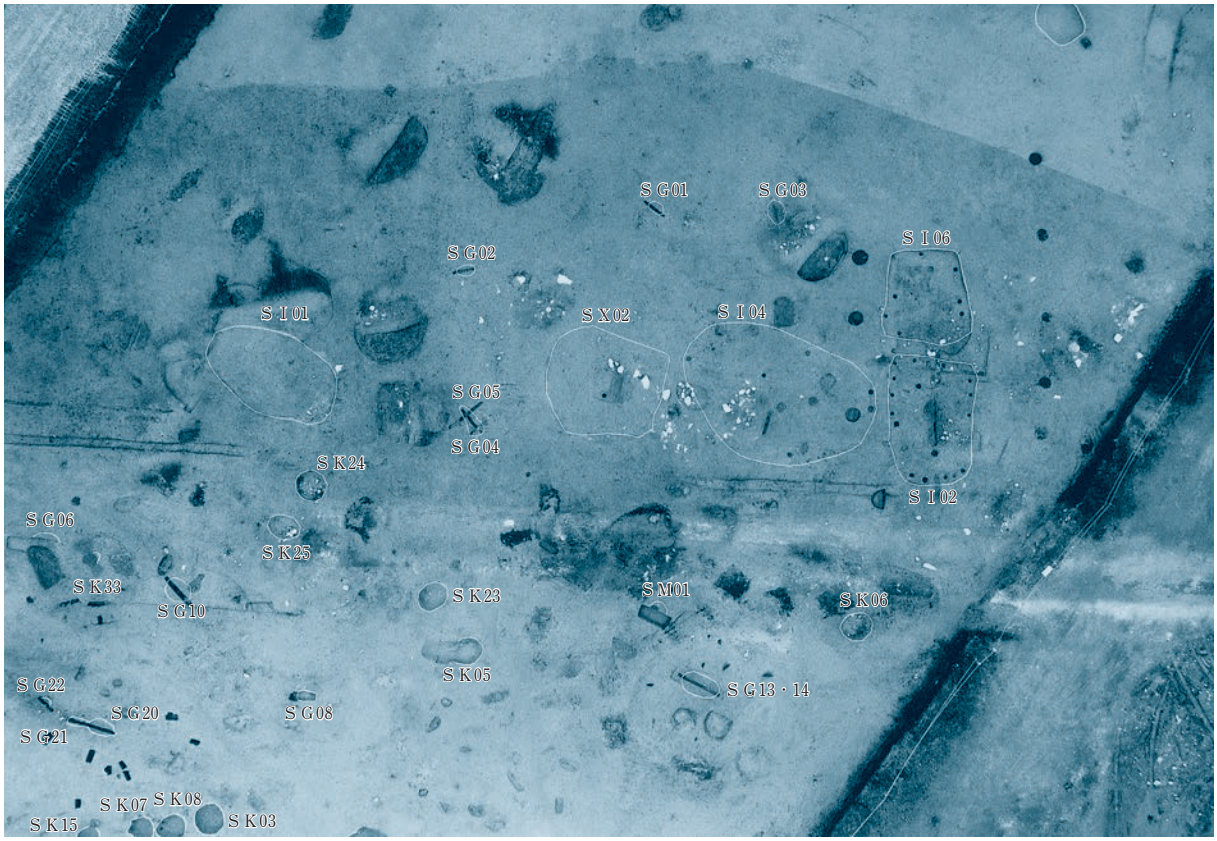


３　基本土層

a　ＡＡ′（東から）　b　ＢＢ′（東から）



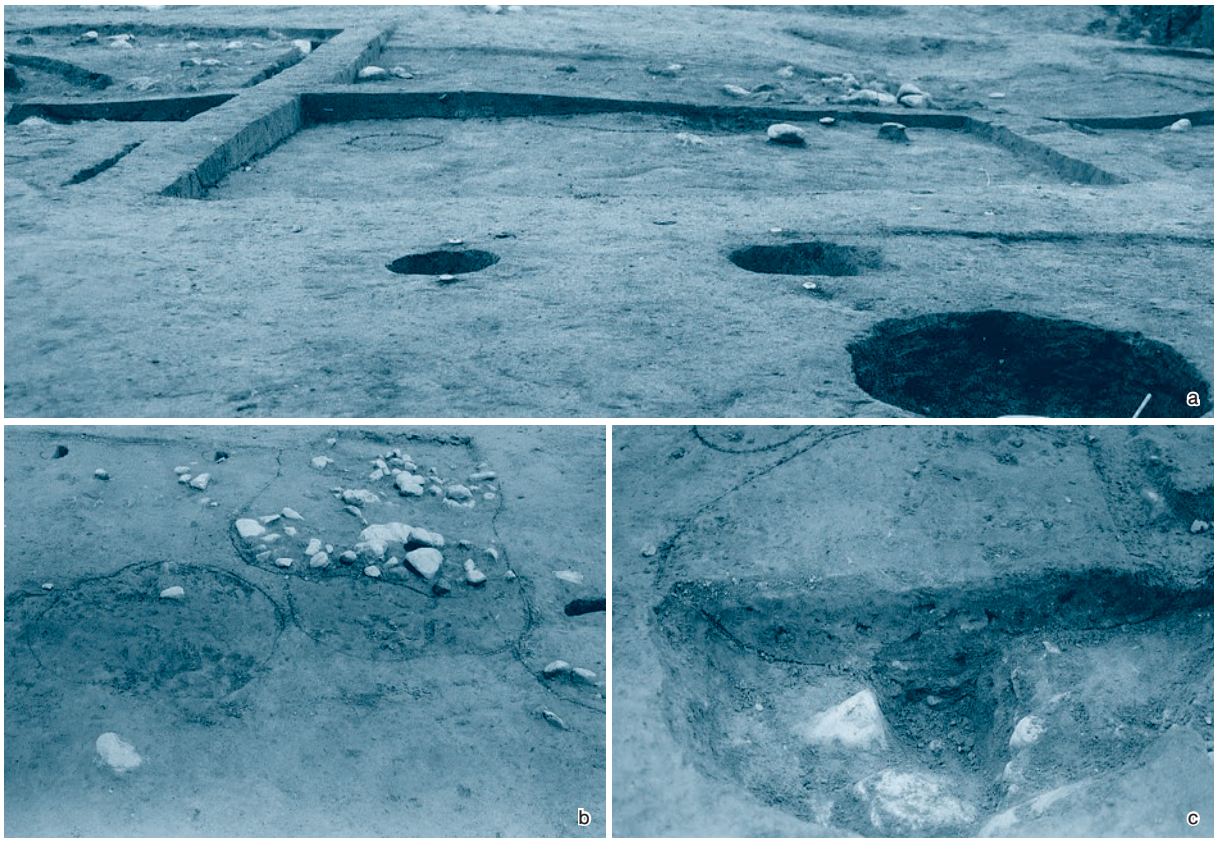
４　調査区南側住居跡群全景（真上から）



５　調査区北側住居跡群全景（真上から）

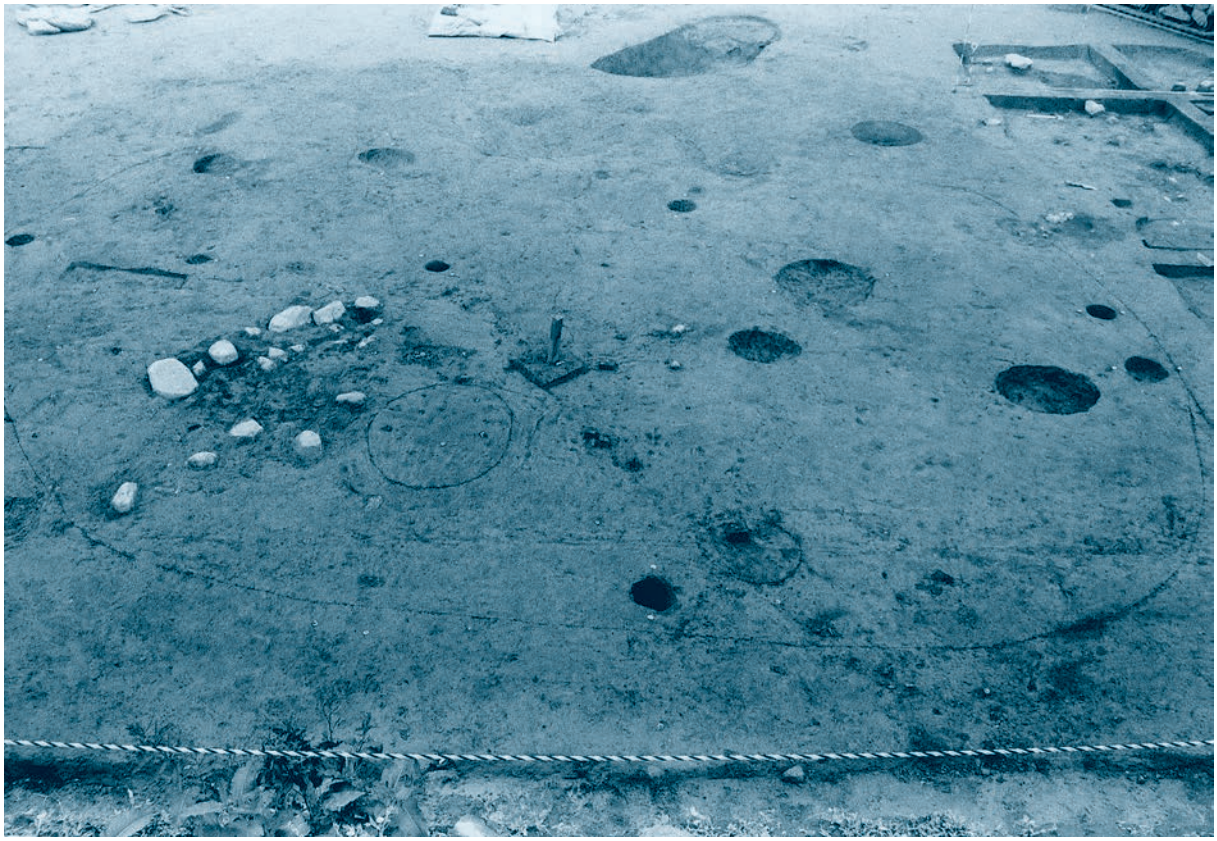
６　１号住居跡遺物出土状況（東から）

７　２号住居跡全景（東から）

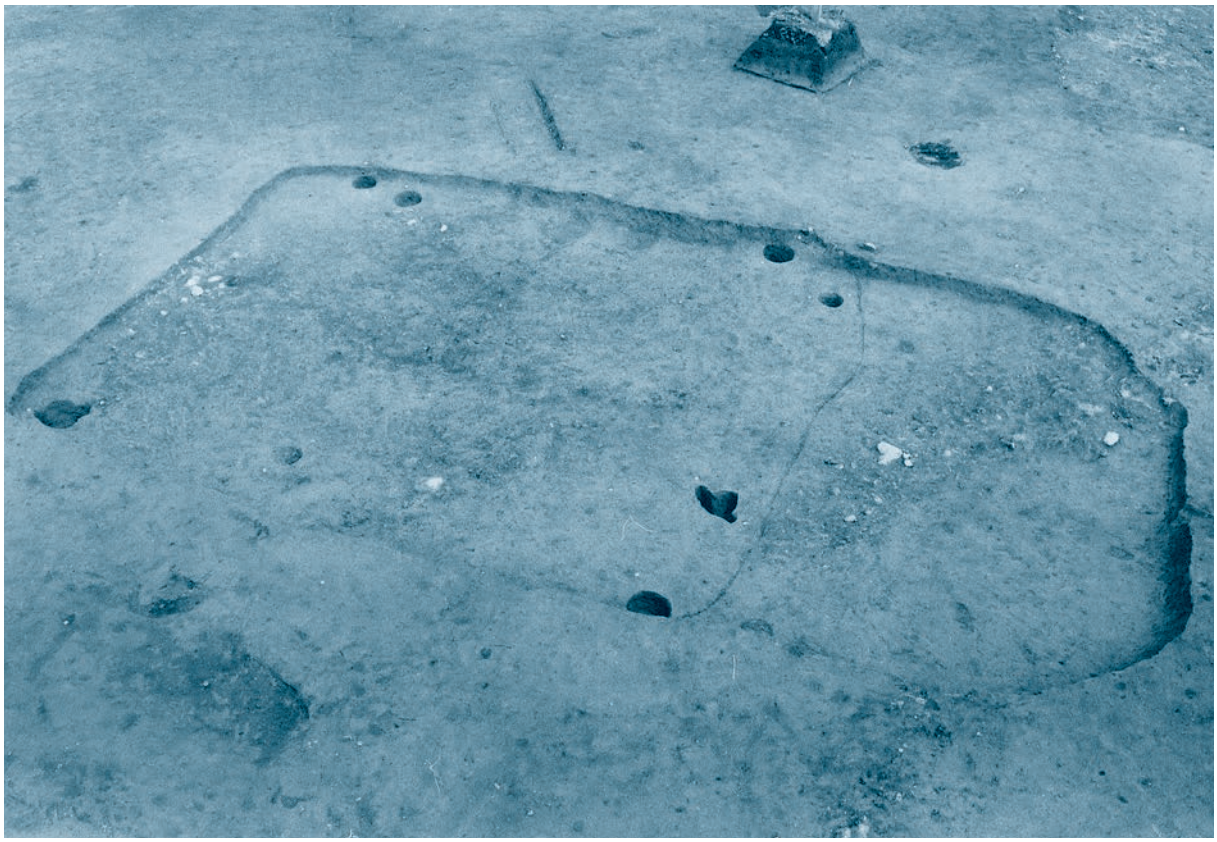


８　２号住居跡細部

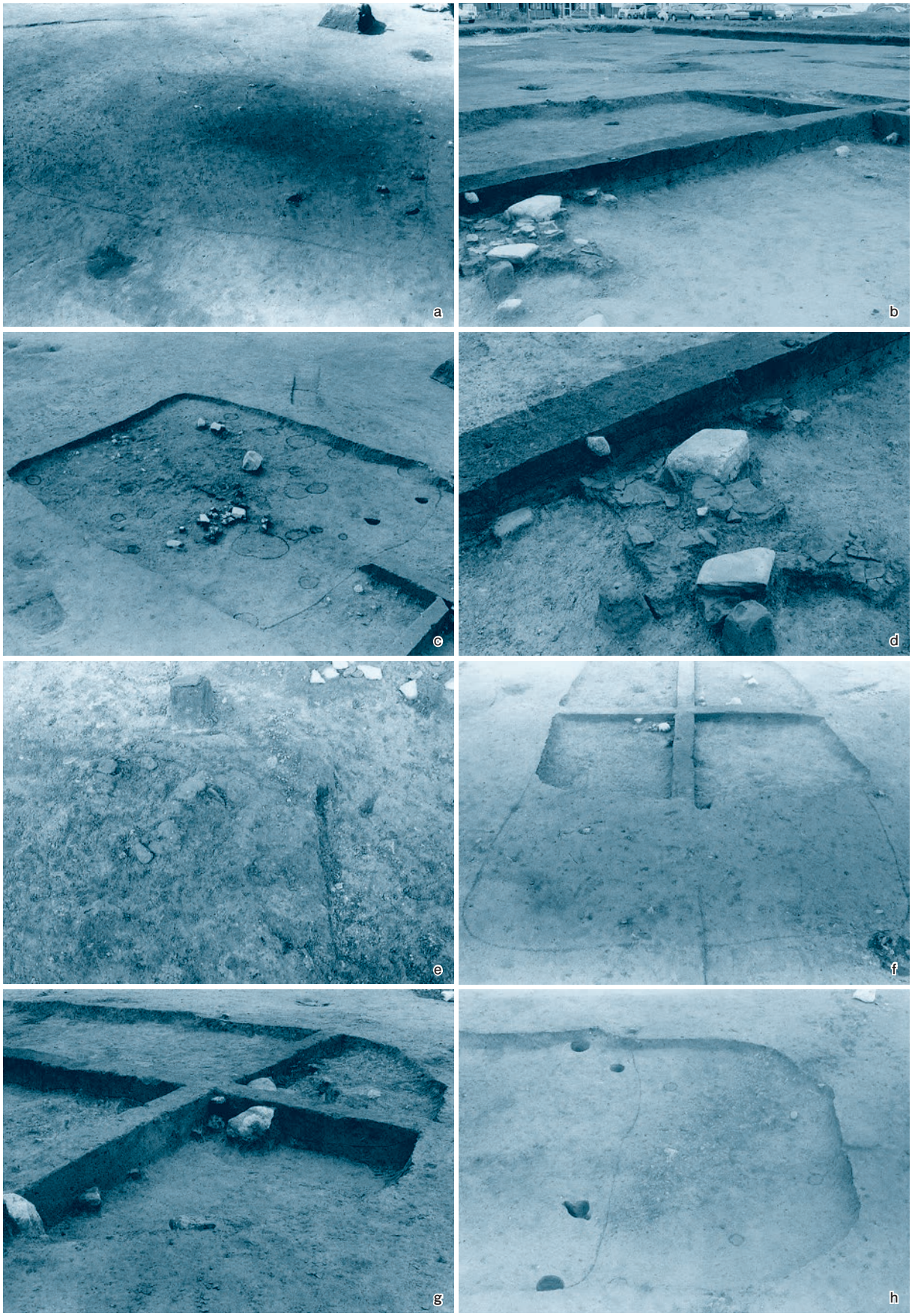
a　断面（西から）
b　炉検出（西から）　c　Ｐ１断面（西から）



9　４号住居跡全景（南から）



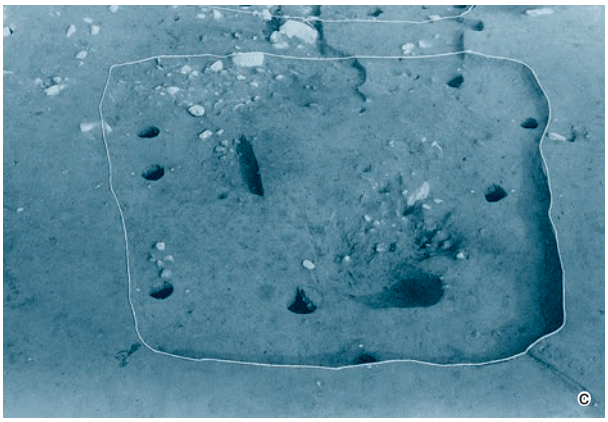
10　５・７号住居跡全景（南東から）



11　５・７号住居跡細部

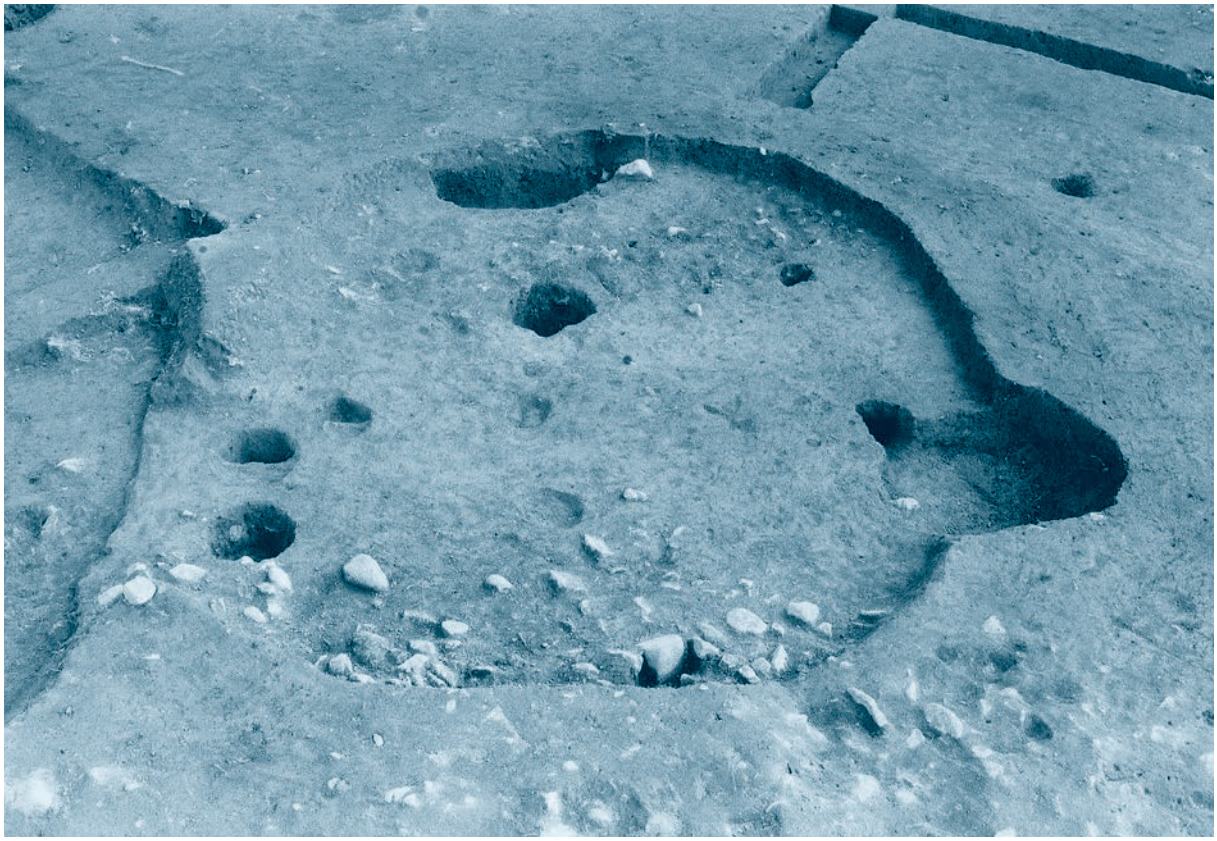
a　５号住居跡検出（南から）　b　５号住居跡断面（南西から）　c　５号住居跡ピット検出（南東から）
d　５号住居跡（南西から）　e　５号住居跡炉検出（西から）　f　７号住居跡検出（東から）
g　７号住居跡断面（南東から）　h　７号住居跡全景（南東から）

12　6号住居跡全景（東から）

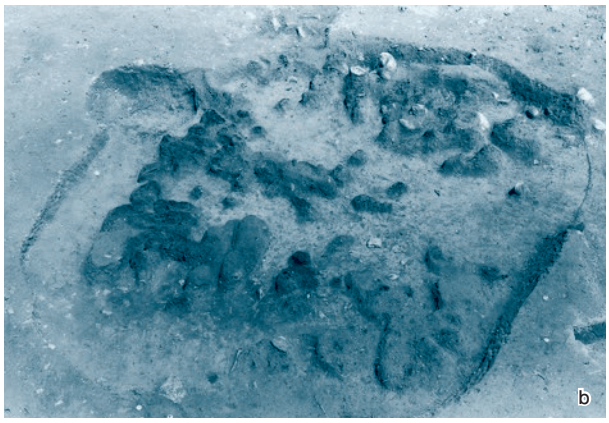


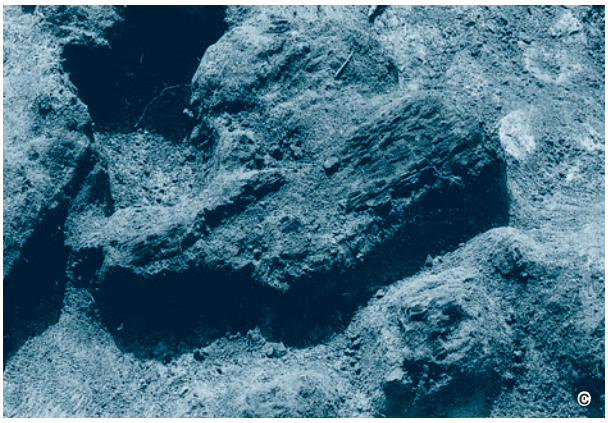
13　6号住居跡細部

a　断面（西から）
b　遺物出土状況（北東から）　c　全景（北西から）



14　８号住居跡全景（北から）

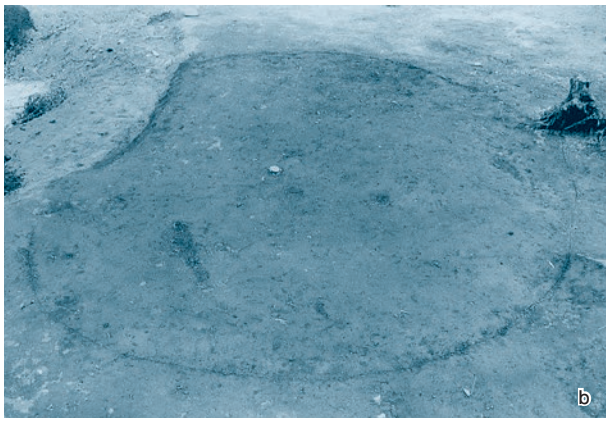


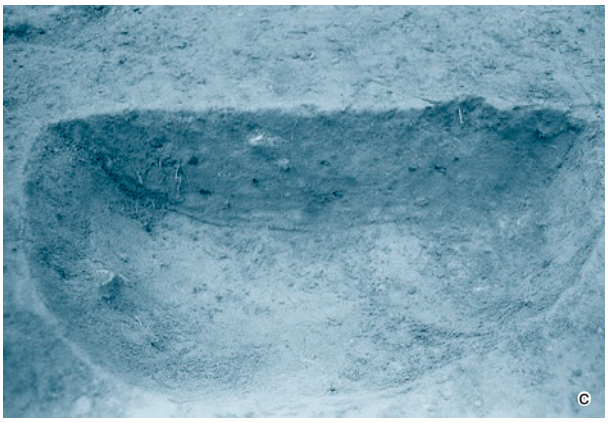


15　８号住居跡細部

a　断面（東から）
b　炭化材・焼土出土状況（南から）　c　炭化材出土状況（南から）

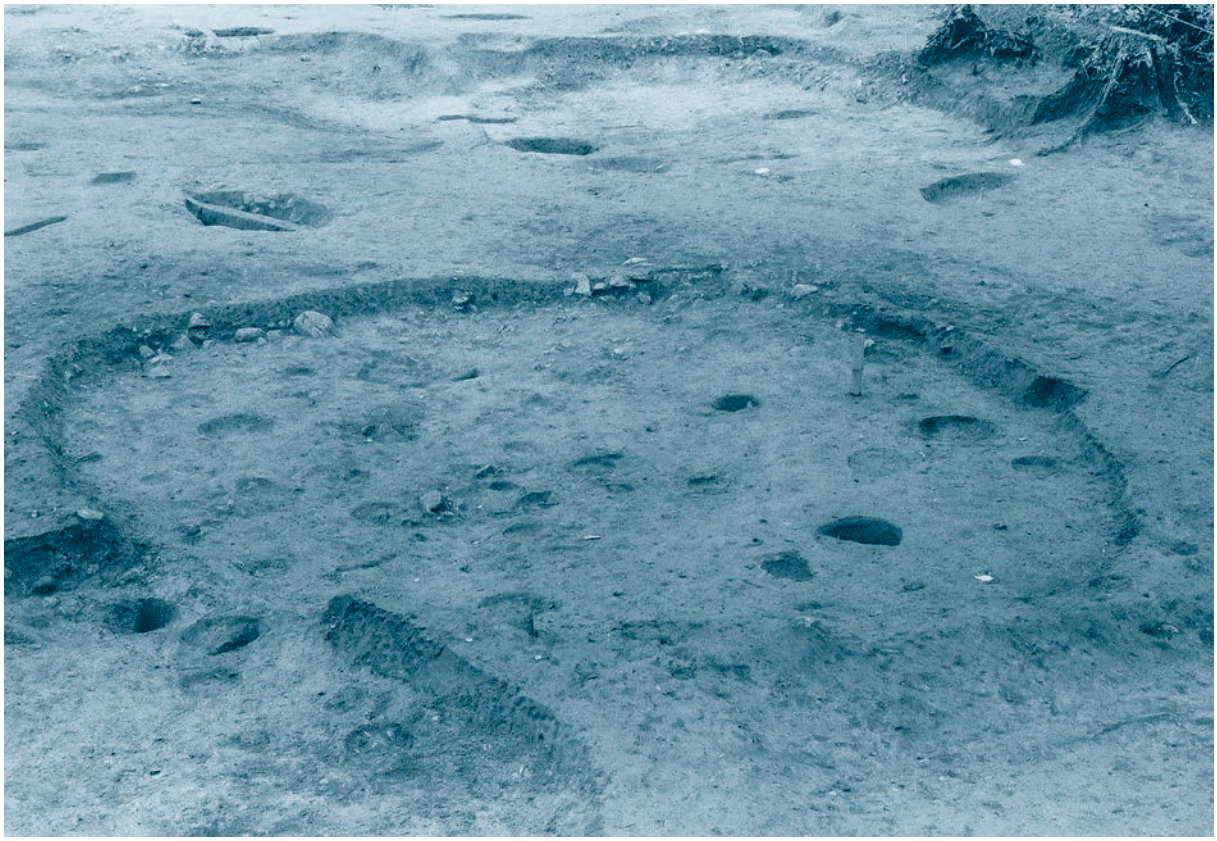
16　９号住居跡全景（東から）



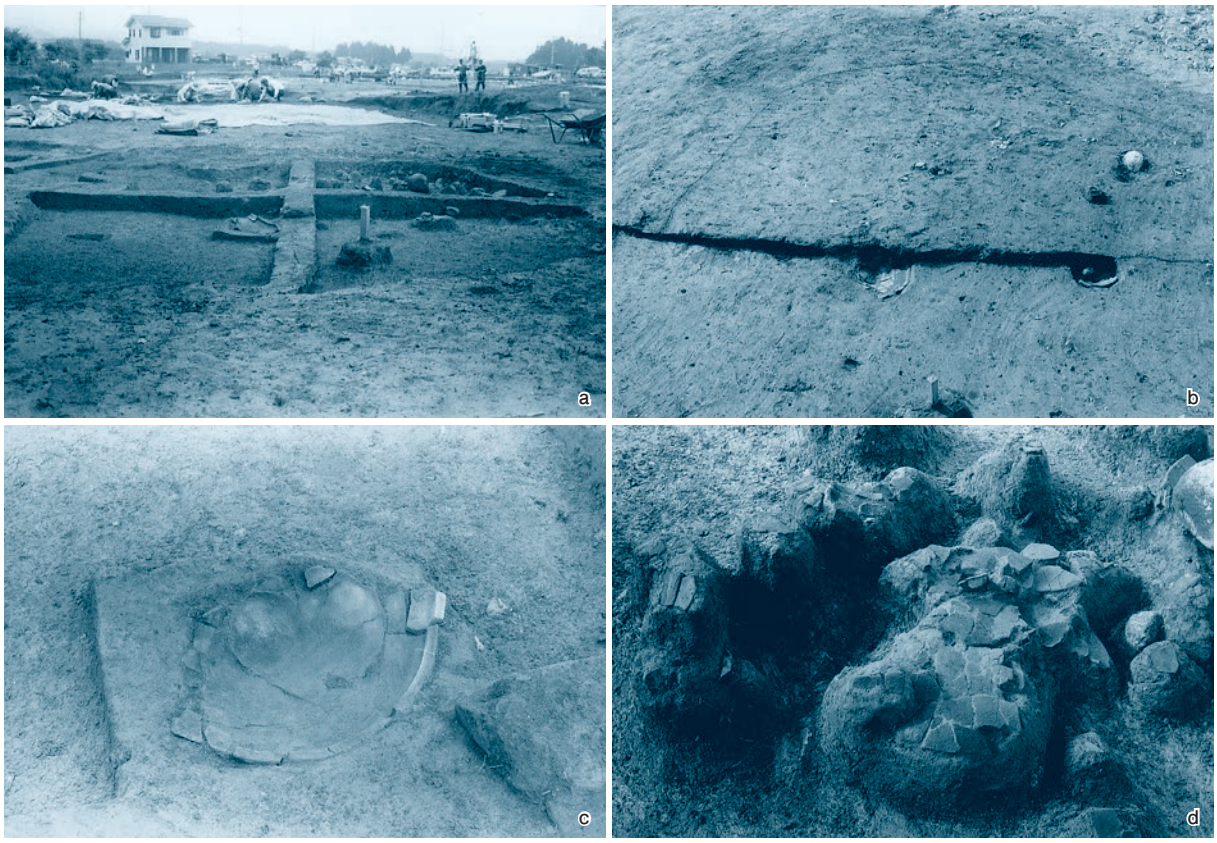


17　９号住居跡細部

a　断面（北から）
b　検出（南西から）　c　Ｐ３断面（南東から）

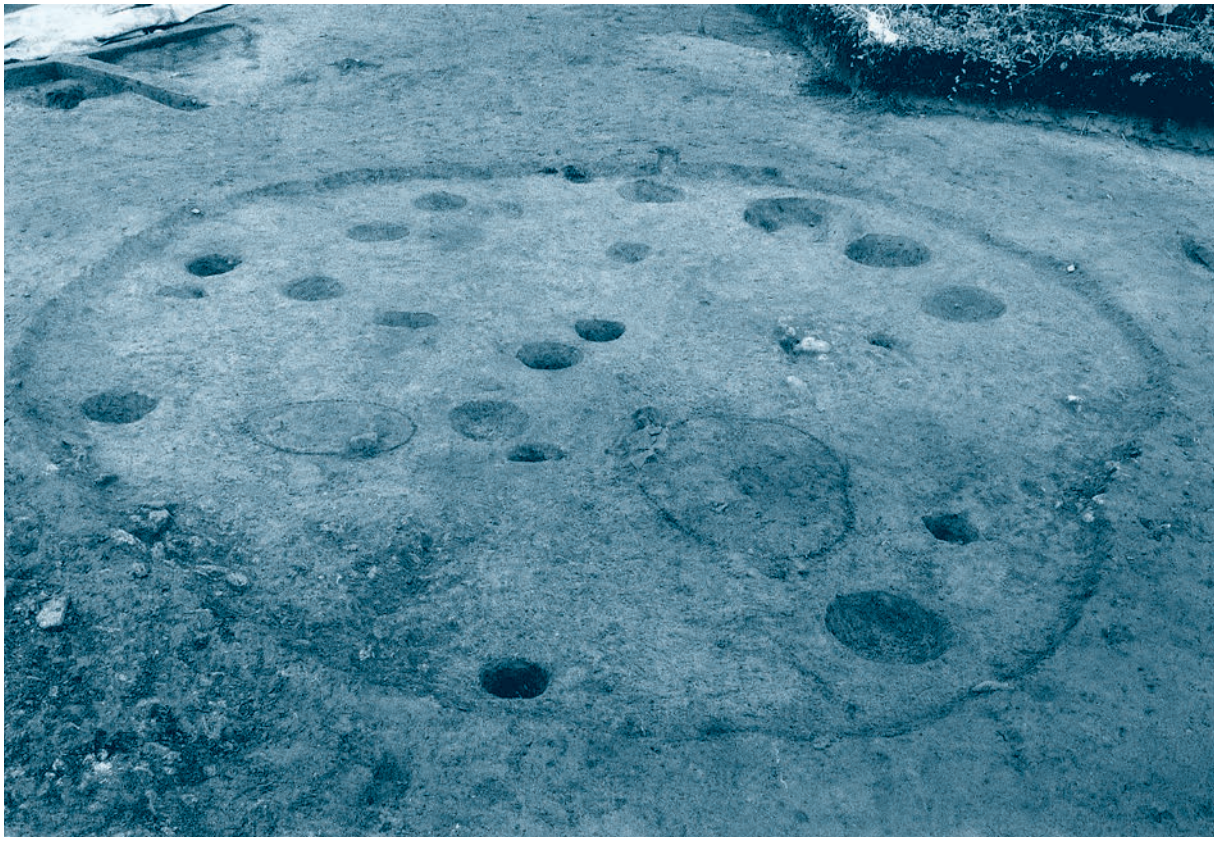


18　10号住居跡全景（南西から）



19　10号住居跡細部

a　断面（南から）　　b　検出（南から）
c　遺物出土状況（東から）　　d　遺物出土状況（南から）

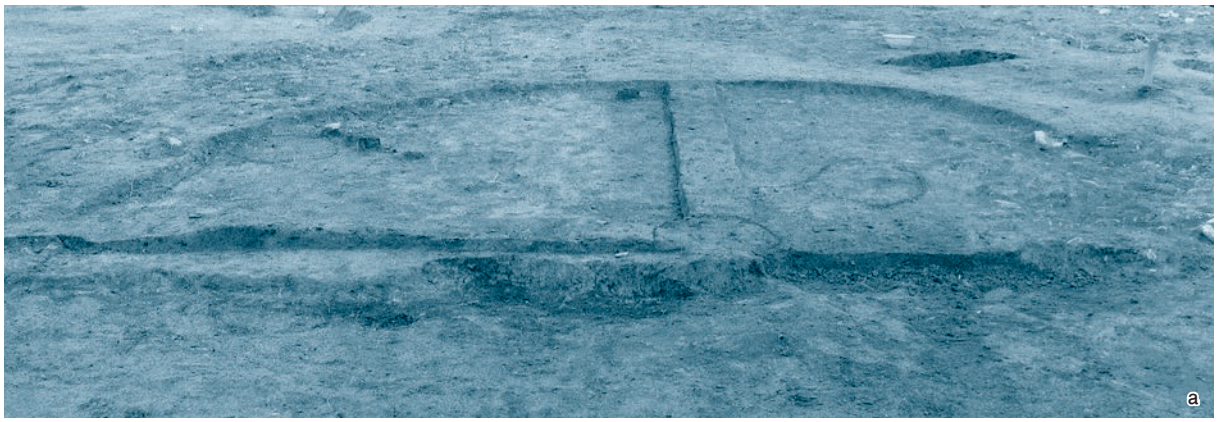


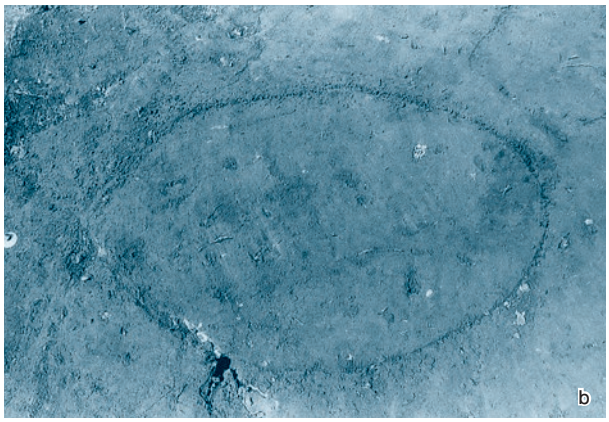
20　11号住居跡全景（北から）

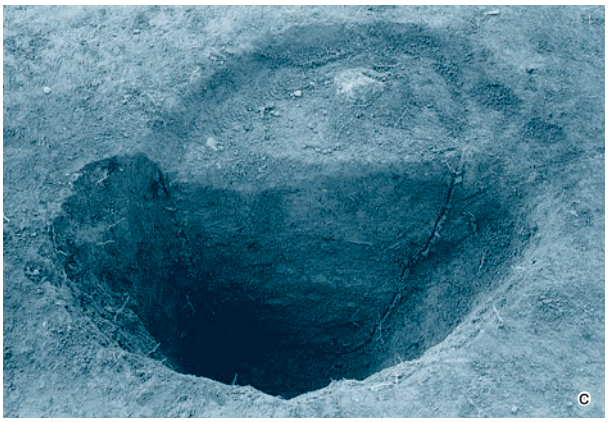
21　11号住居跡細部

a　断面（南から）
b　遺物出土状況（東から）　c　Ｐ９断面（南から）

22　12号住居跡全景（東から）



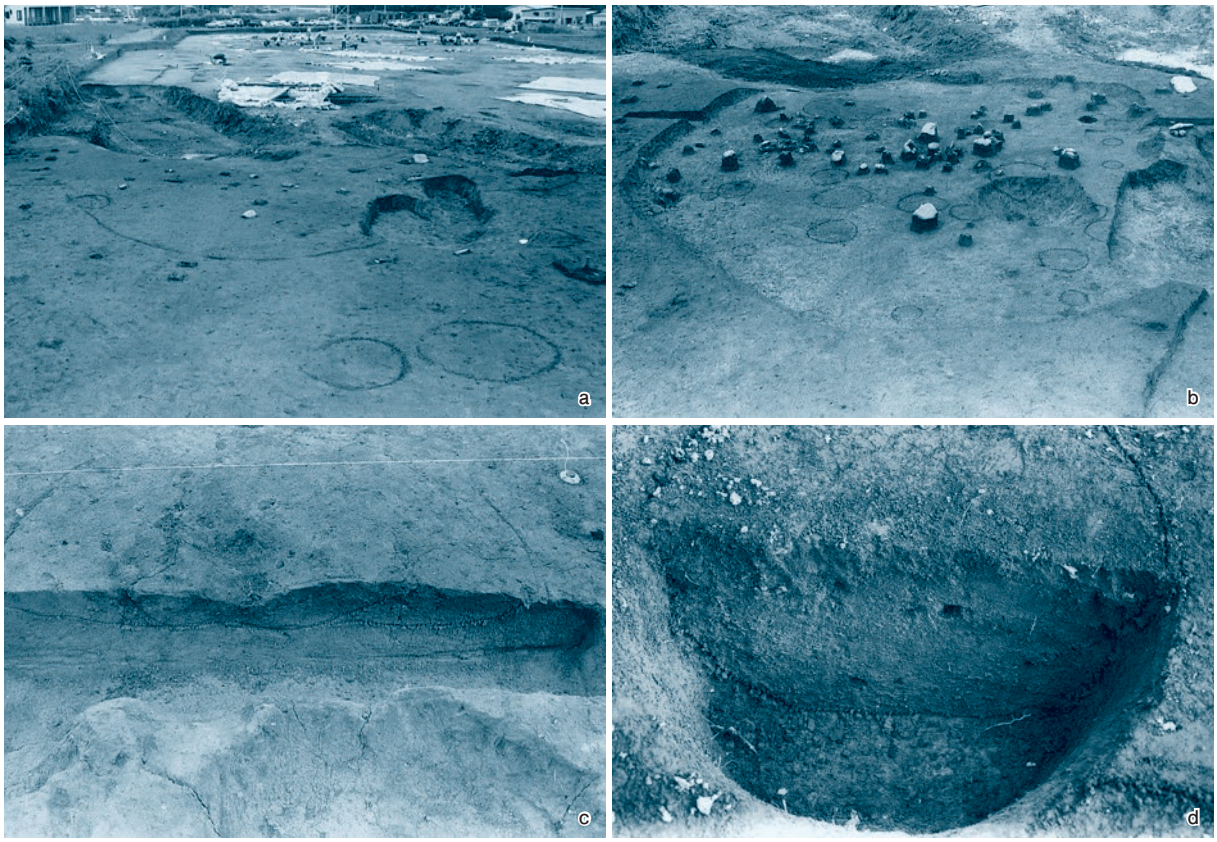




23　12号住居跡細部

a　断面（東から）
b　炉検出（南から）　c　Ｐ３断面

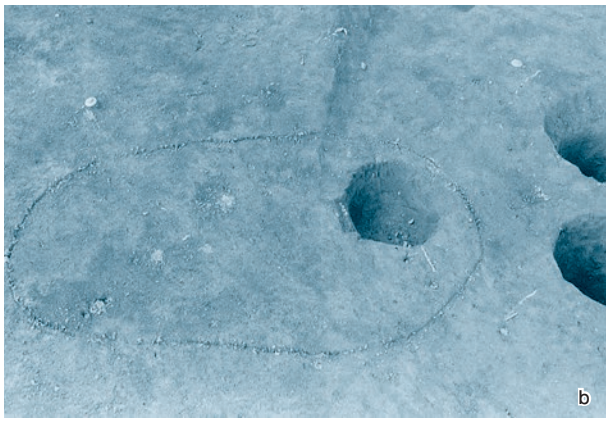
24　13号住居跡全景（北から）

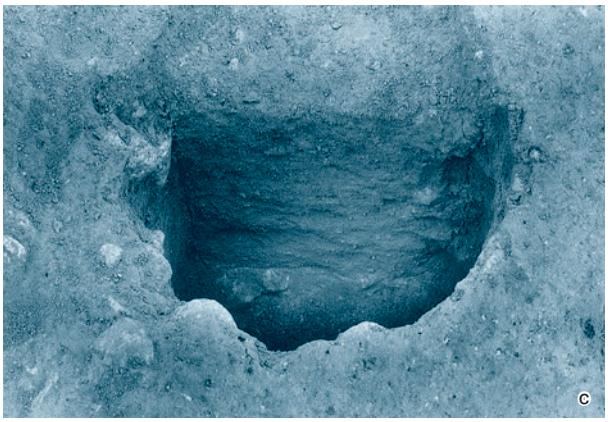


25　13号住居跡細部

a　検出（南から）　b　遺物出土状況（南から）
c　炉断ち割り（西から）　d　P21断面（西から）

26　14号住居跡全景（東から）

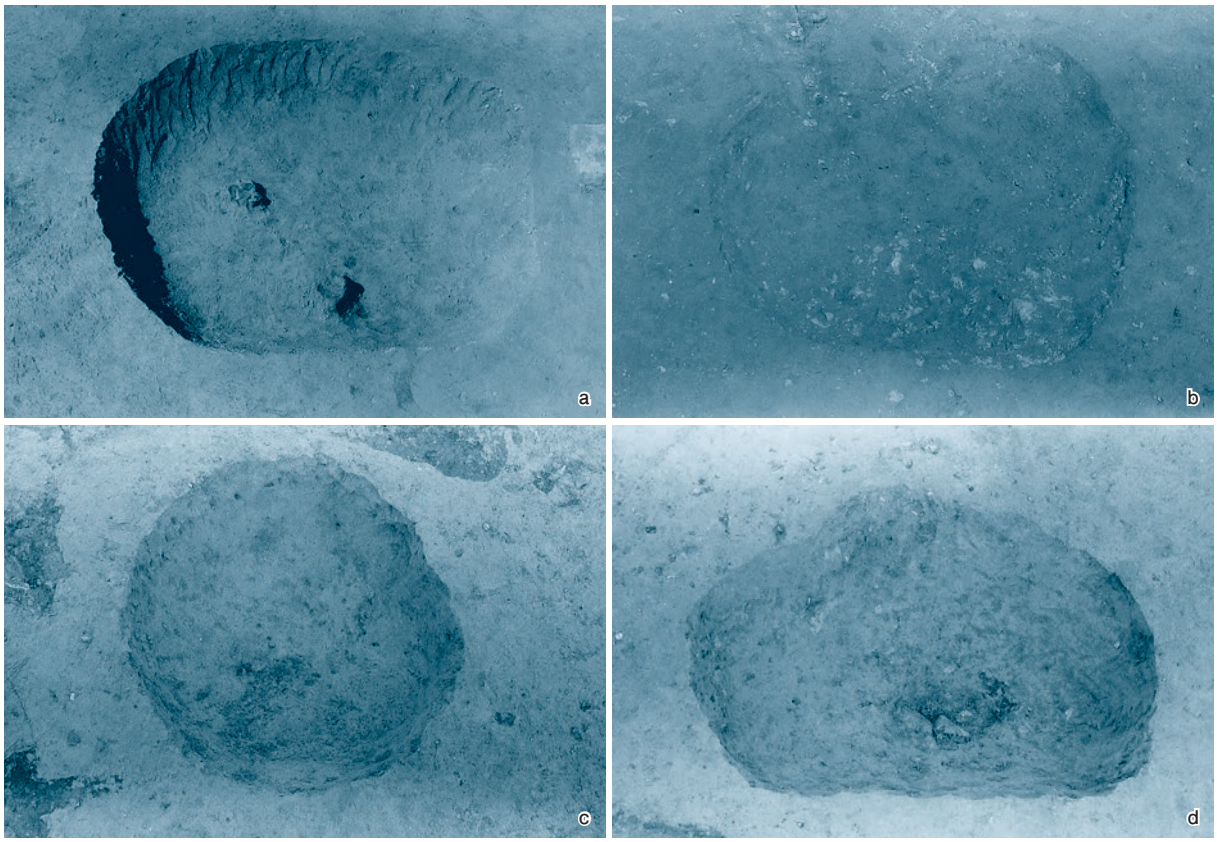




27　14号住居跡細部

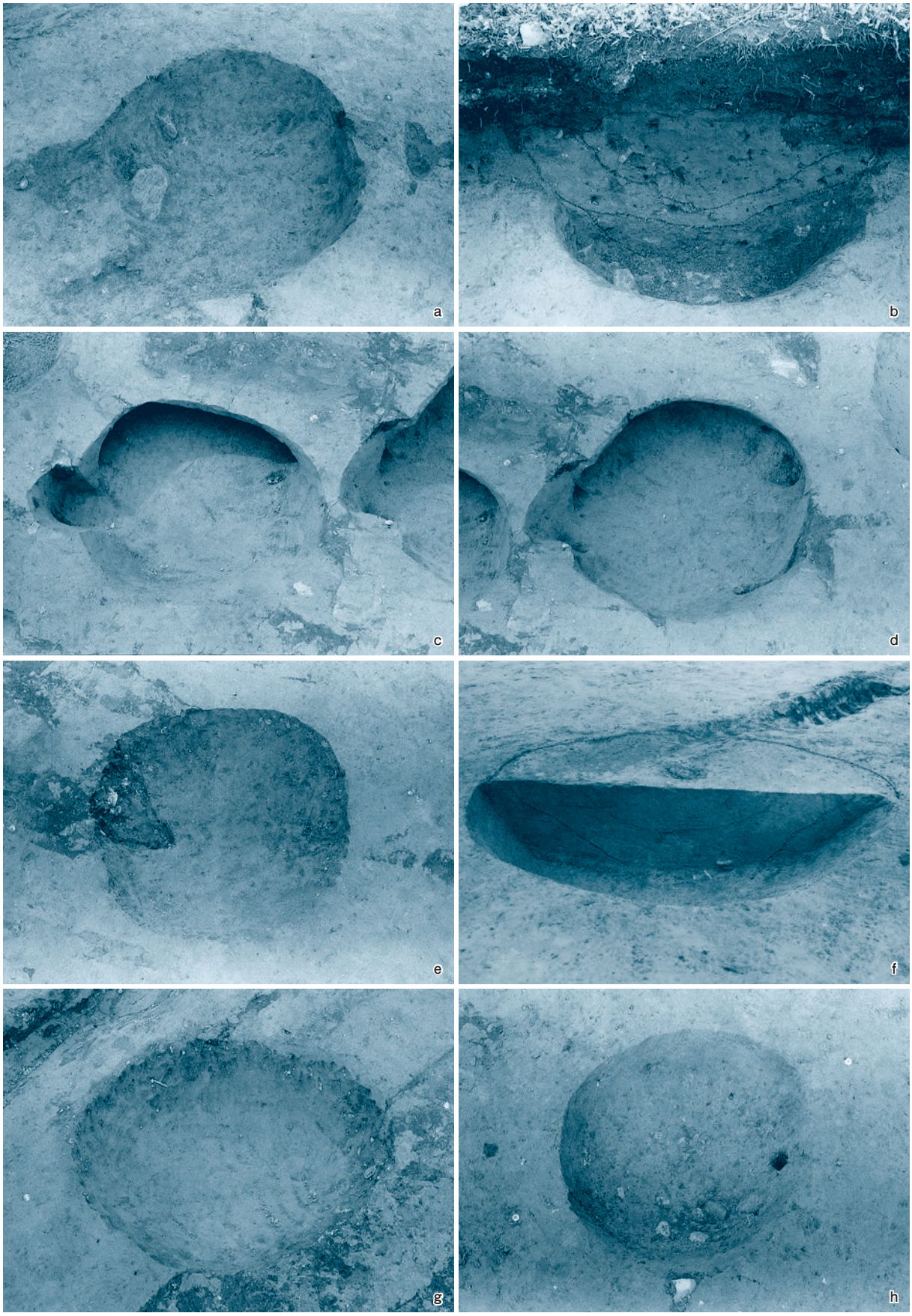
a　断面（南から）
b　２号炉検出（南から）　c　Ｐ１断面（東から）

28　調査区中央土坑群全景（南西から）



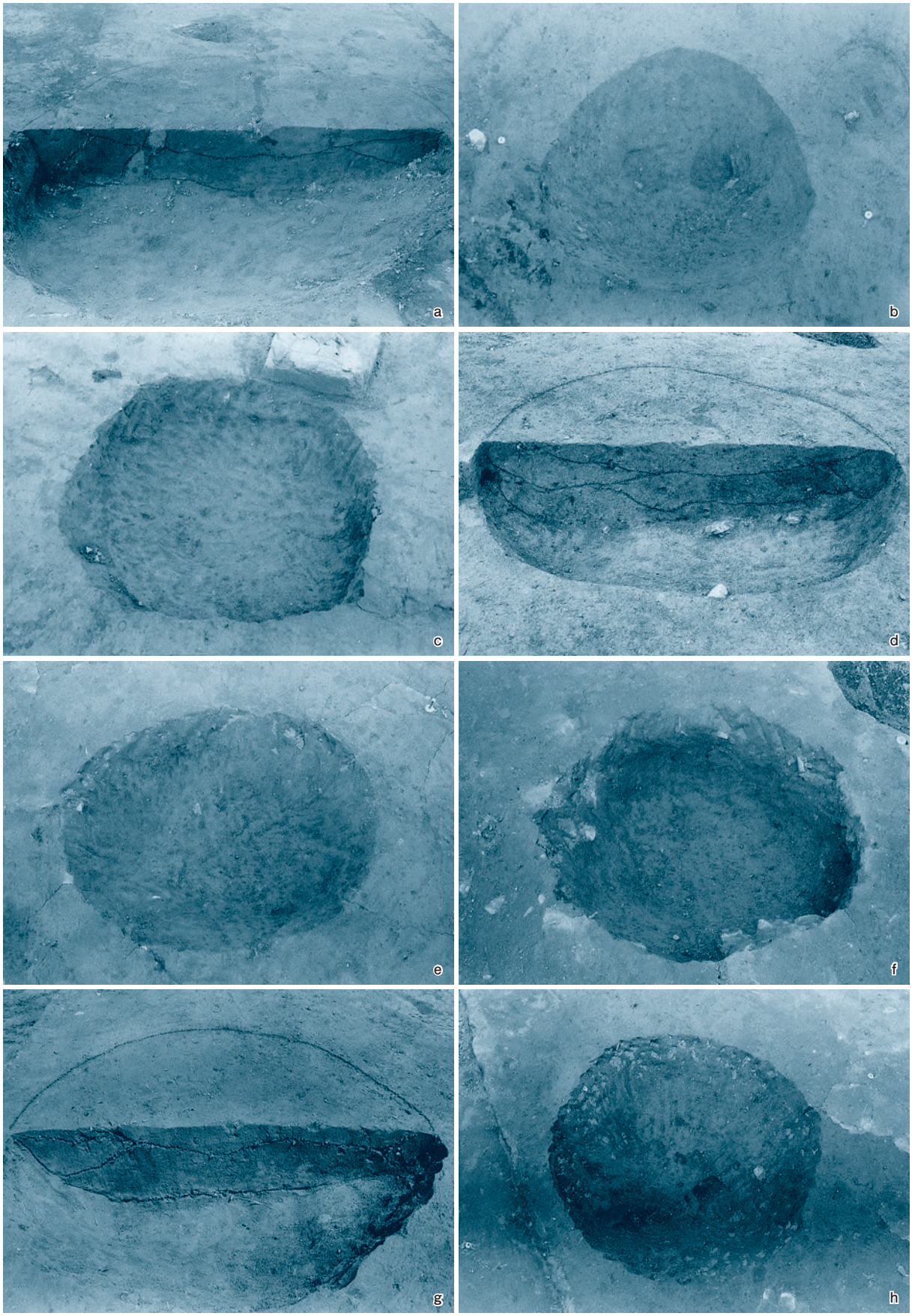
29　1～4号土坑

a　1号土坑全景（南から）　b　2号土坑全景（西から）
c　3号土坑全景（南から）　d　4号土坑全景（南東から）



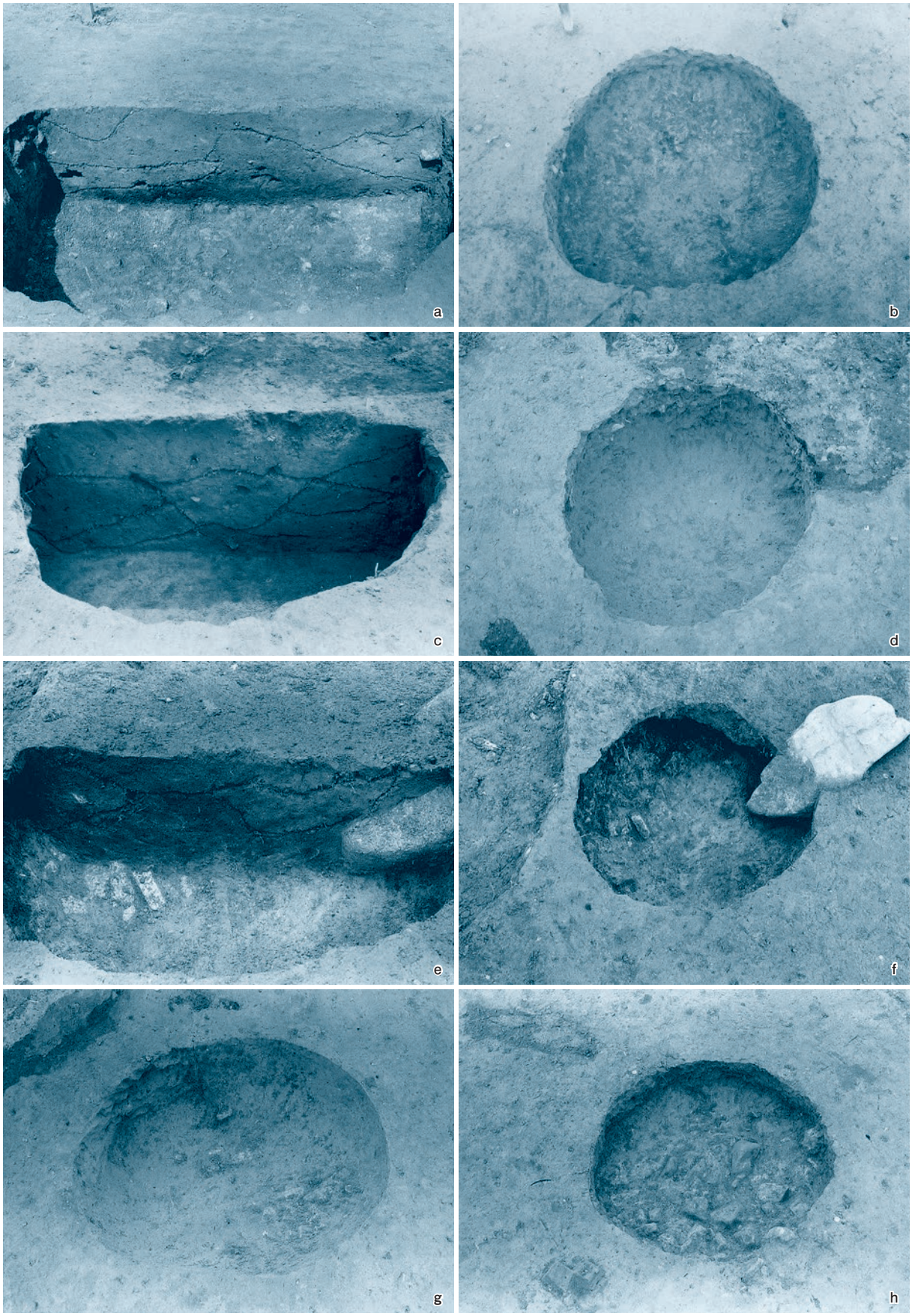
30　５～12号土坑

a　５号土坑全景（南から）　b　６号土坑断面（南東から）　c　７号土坑全景（南東から）
d　８号土坑全景（南東から）　e　９号土坑全景（南東から）　f　10号土坑断面（南東から）
g　11号土坑全景（南から）　h　12号土坑全景（南東から）



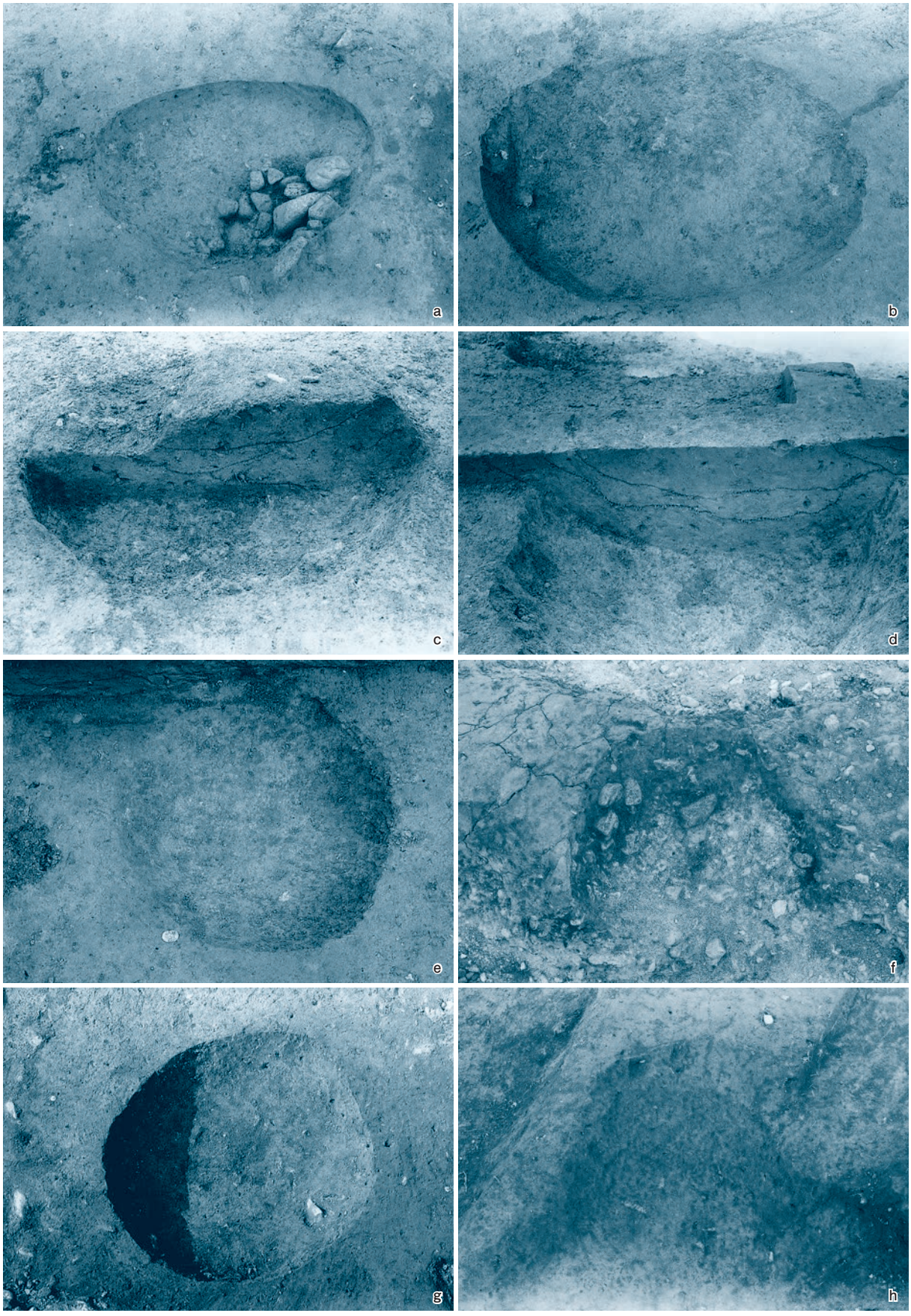
31　13～19号土坑

a　13号土坑断面（南西から）　b　14号土坑全景（南東から）　c　15号土坑全景（南東から）
d　16号土坑断面（東から）　e　17号土坑全景（東から）　f　18号土坑全景（東から）
g　19号土坑断面（南から）　h　19号土坑全景（南から）



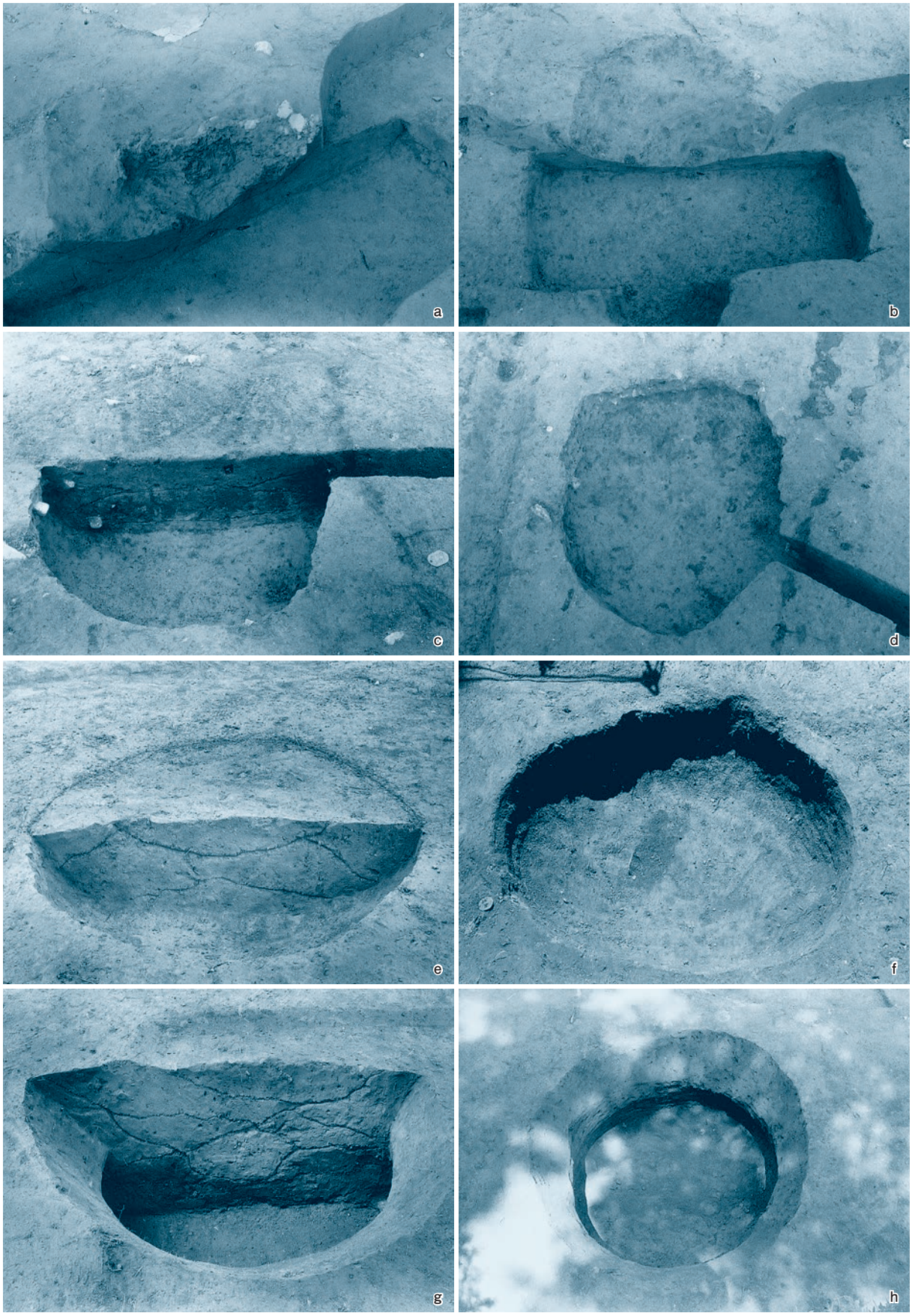
32　20～24号土坑

a　20号土坑断面（東から）　b　20号土坑全景（東から）　c　21号土坑断面（西から）
d　21号土坑全景（西から）　e　22号土坑断面（南西から）　f　22号土坑全景（南から）
g　23号土坑全景（東から）　h　24号土坑全景（南東から）



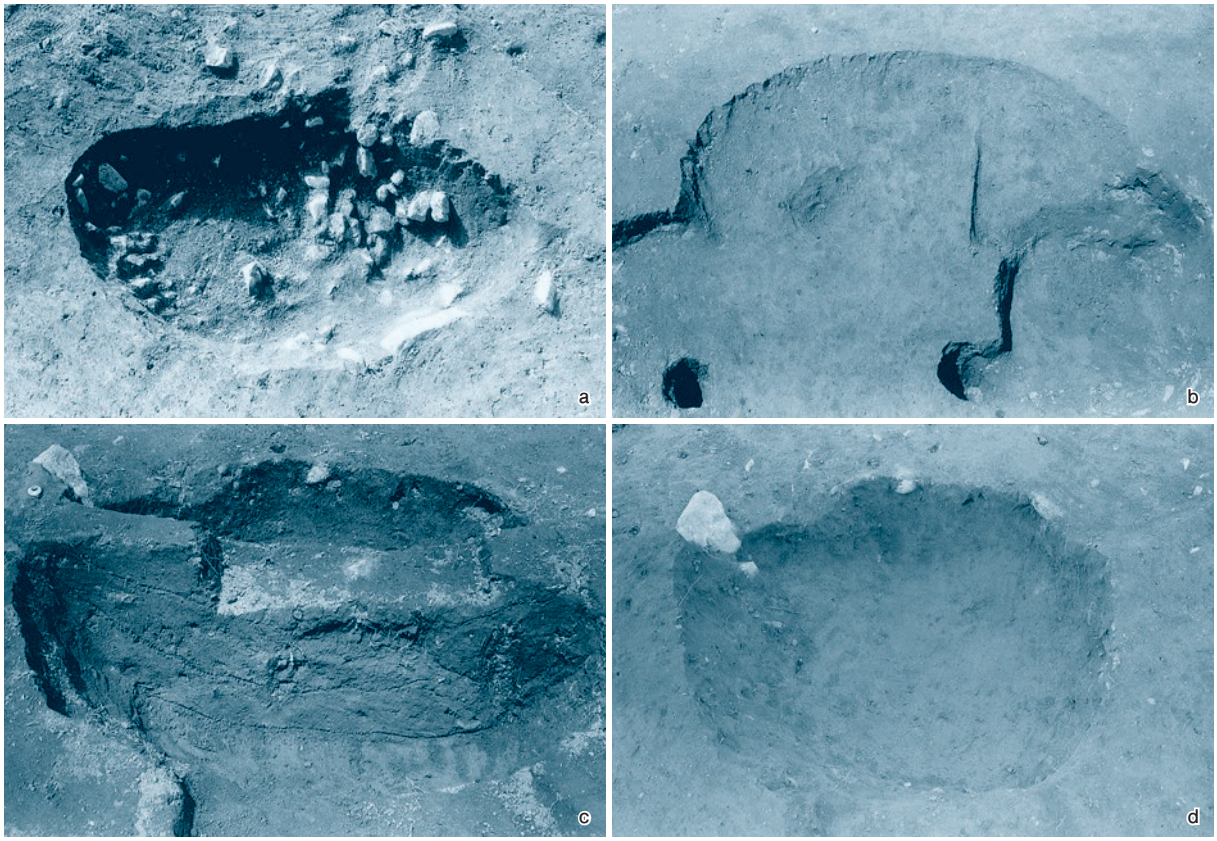
33　25～32号土坑

a　25号土坑全景(南から)　b　26号土坑全景(南から)　c　27号土坑断面(南から)
d　28号土坑断面(西から)　e　29号土坑全景(東から)　f　30号土坑全景(西から)
g　31号土坑全景(南から)　h　32号土坑全景(南から)



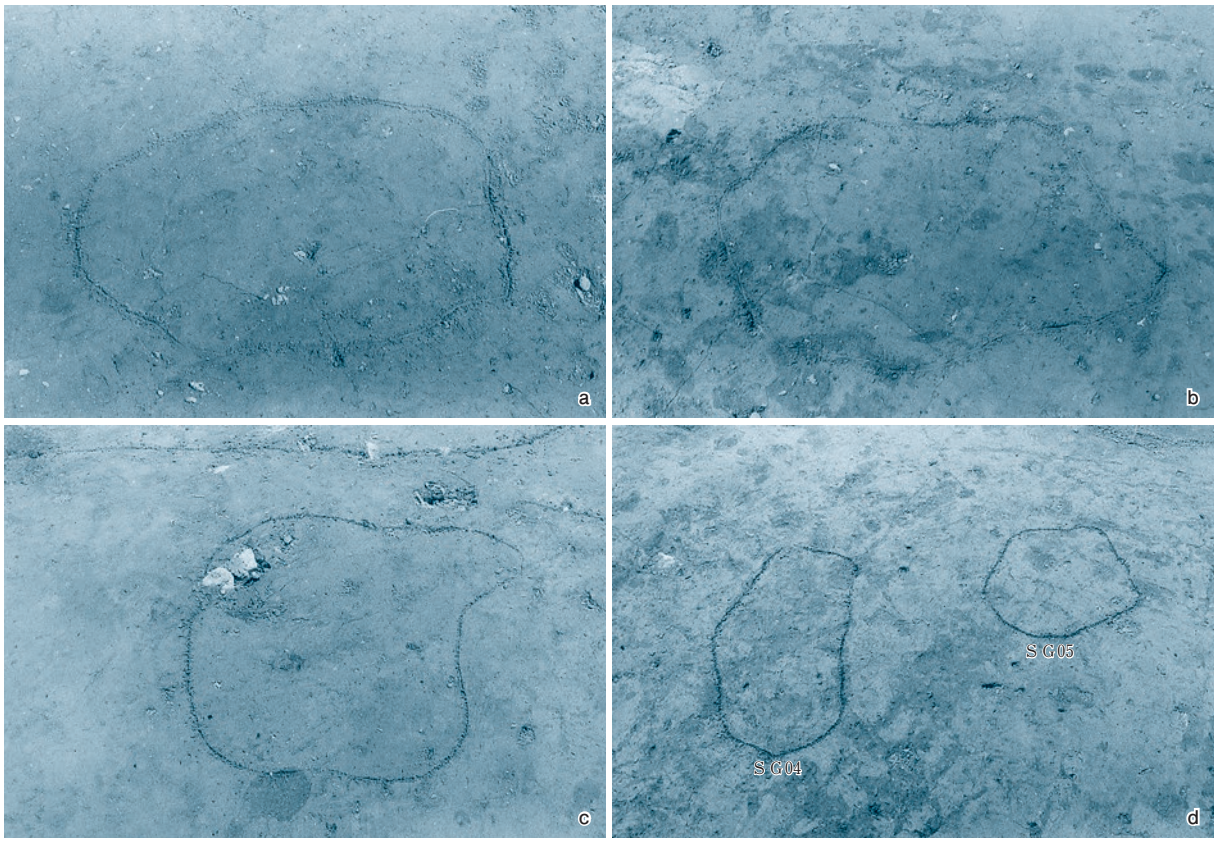
34　33～36号土坑

a　33号土坑遺物出土状況（西から）　b　33号土坑全景（南西から）　c　34号土坑断面（東から）
d　34号土坑全景（東から）　e　35号土坑断面（南から）　f　35号土坑全景（東から）
g　36号土坑断面（南から）　h　36号土坑全景（南から）



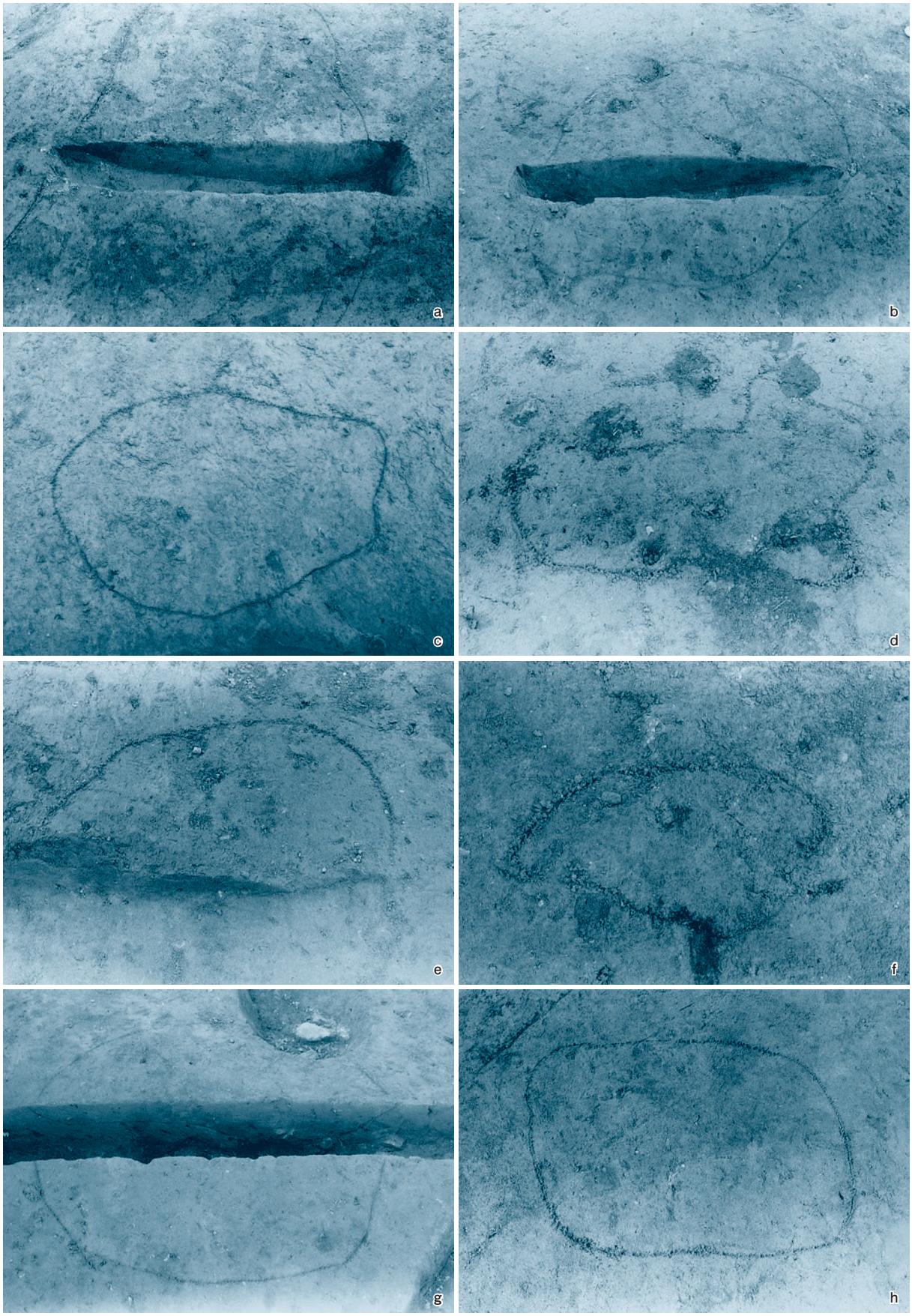
35　37～39号土坑

a　37号土坑全景(南東から)　b　38号土坑全景(東から)
c　39号土坑断面(南から)　d　39号土坑全景(南から)



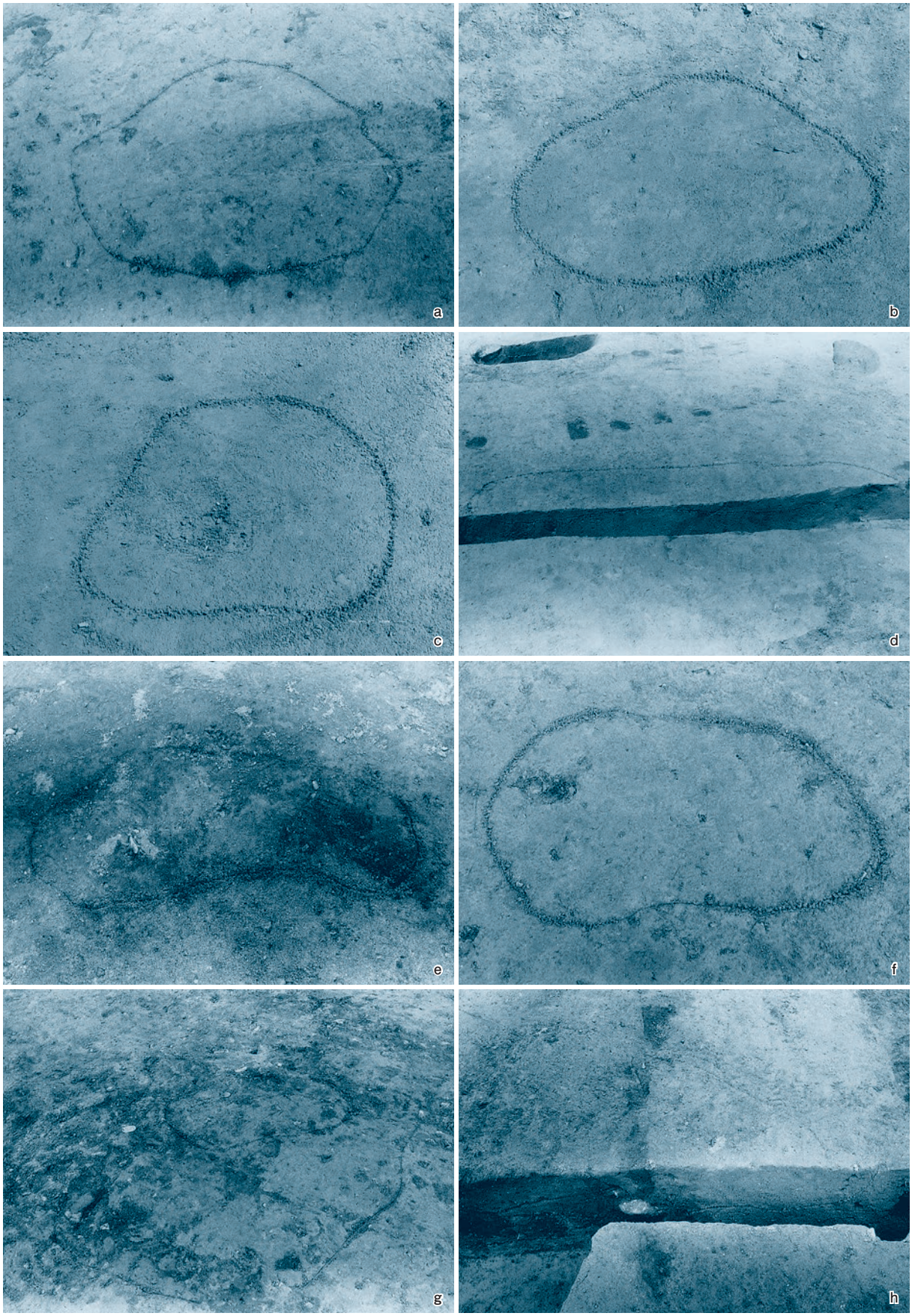
36　1～5号焼土遺構

a　1号焼土遺構検出(南から)　b　2号焼土遺構検出(東から)
c　3号焼土遺構検出(西から)　d　4・5号焼土遺構検出(北東から)



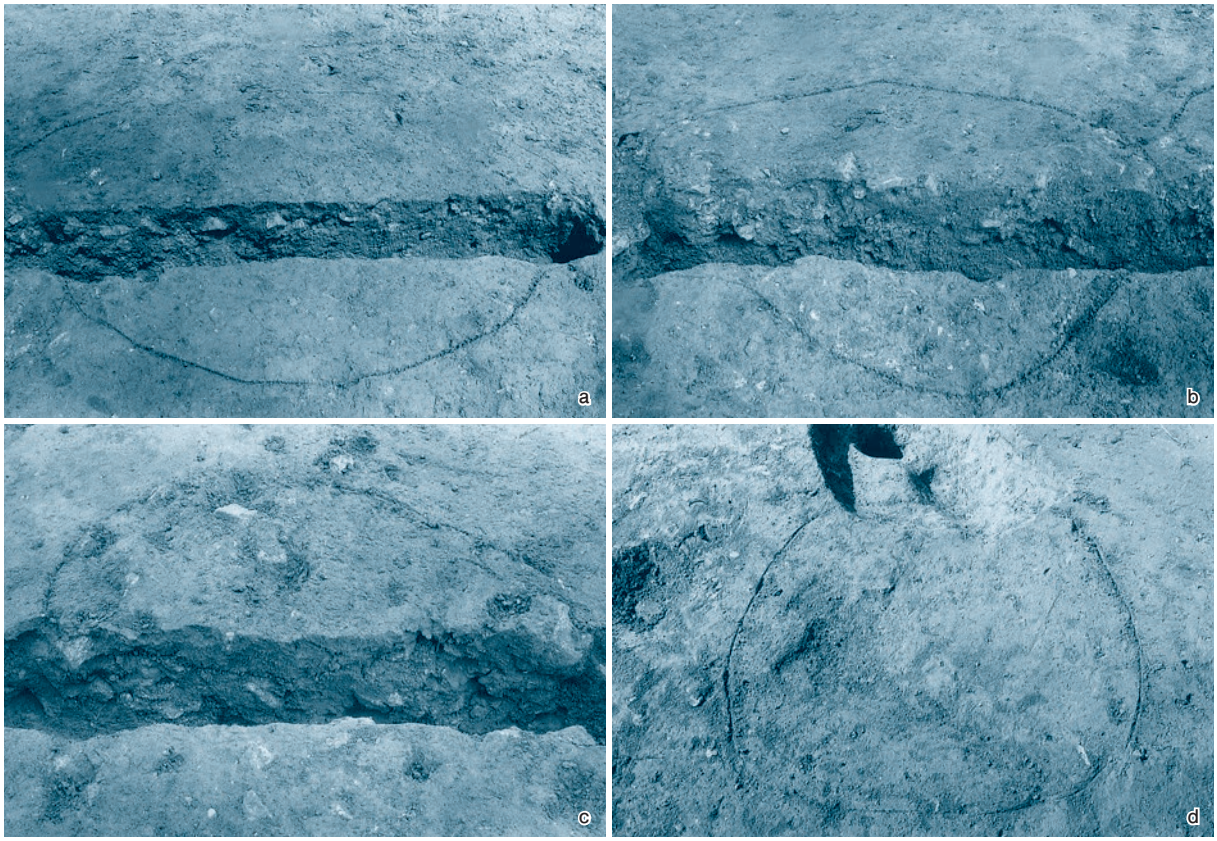
37　４～11号焼土遺構

a　４号焼土遺構断ち割り（南から）　b　５号焼土遺構断ち割り（南から）　c　６号焼土遺構検出（南から）
d　７号焼土遺構検出（南西から）　e　８号焼土遺構検出（南から）　f　９号焼土遺構検出（南から）
g　10号焼土遺構断ち割り（南西から）　h　11号焼土遺構検出（南から）



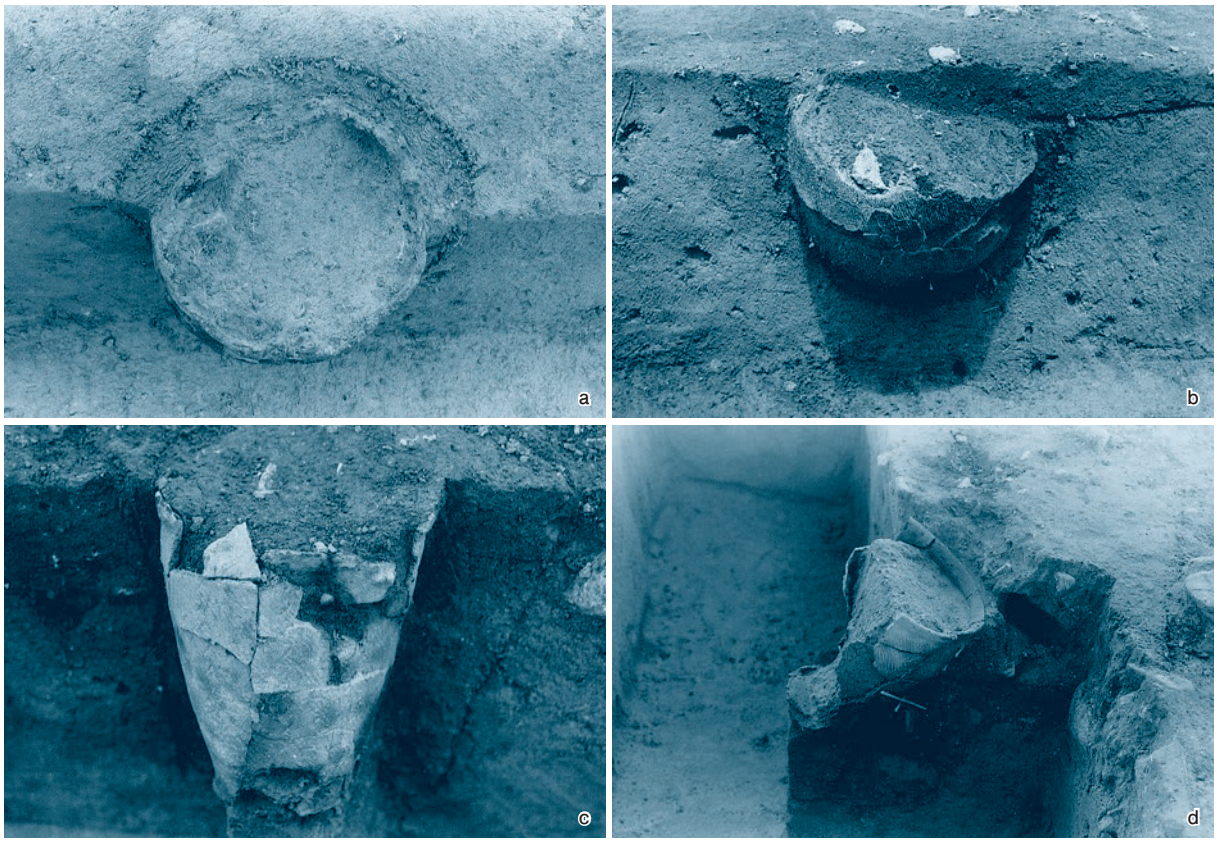
38　12～19号焼土遺構

a　12号焼土遺構検出(南東から)　b　13号焼土遺構検出(南から)　c　14号焼土遺構検出(南から)
d　15号焼土遺構断ち割り(南東から)　e　16号焼土遺構検出(南東から)　f　17号焼土遺構検出(東から)
g　18号焼土遺構検出(南東から)　h　19号焼土遺構断ち割り(東から)



39　20～23号焼土遺構

a　20号焼土遺構断ち割り（南東から）　b　21号焼土遺構断ち割り（南東から）
c　22号焼土遺構断ち割り（南から）　d　23号焼土遺構検出（南から）

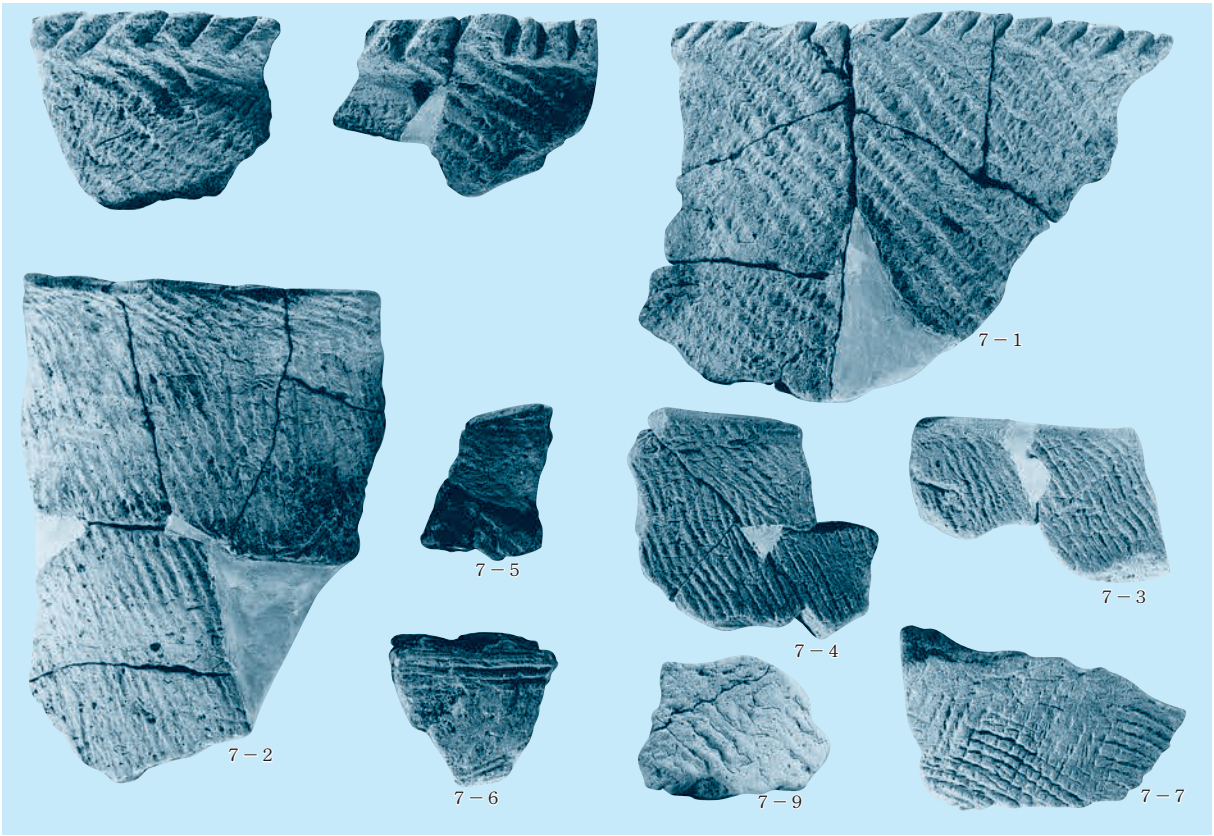


40　１・２号土器埋設遺構

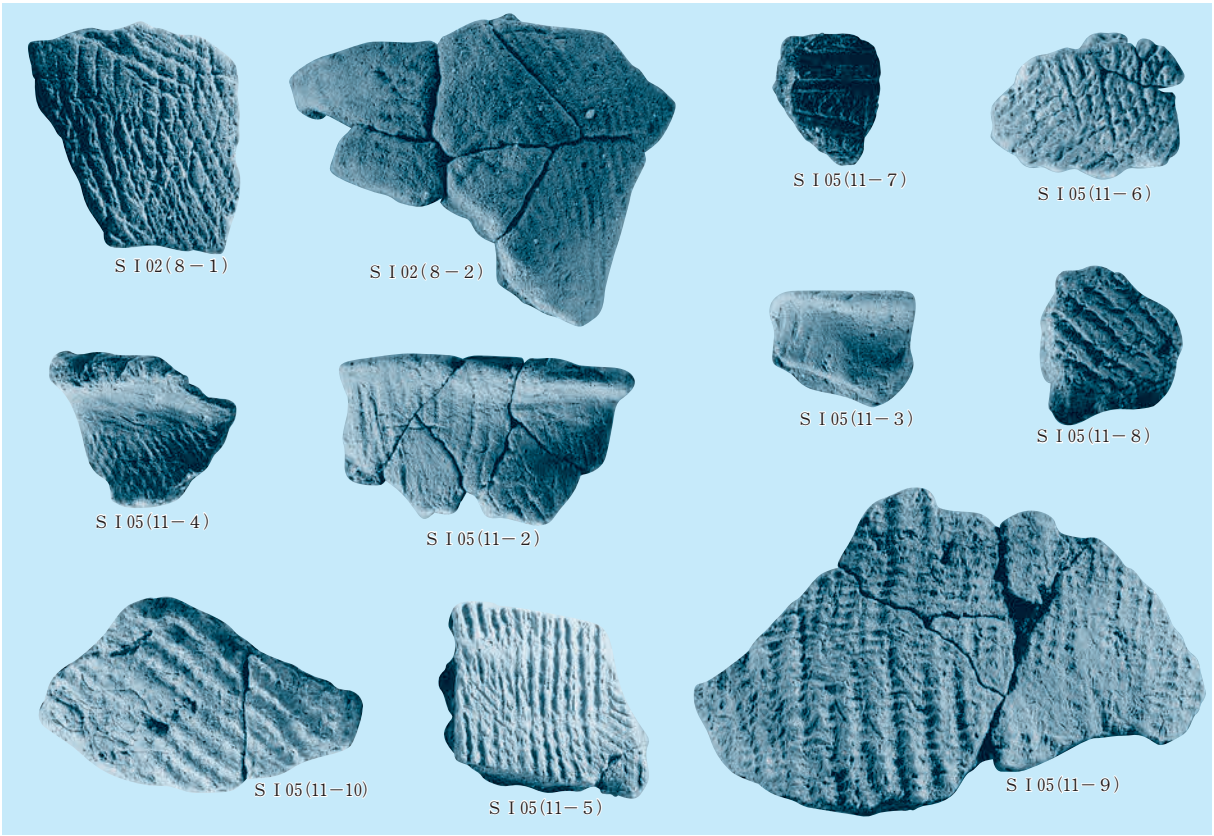
a　１号土器埋設遺構検出（南から）　b　１号土器埋設遺構断ち割り（南から）
c　２号土器埋設遺構断ち割り（南から）　d　２号土器埋設遺構断ち割り（東から）

41　１号特殊遺構全景（北から）

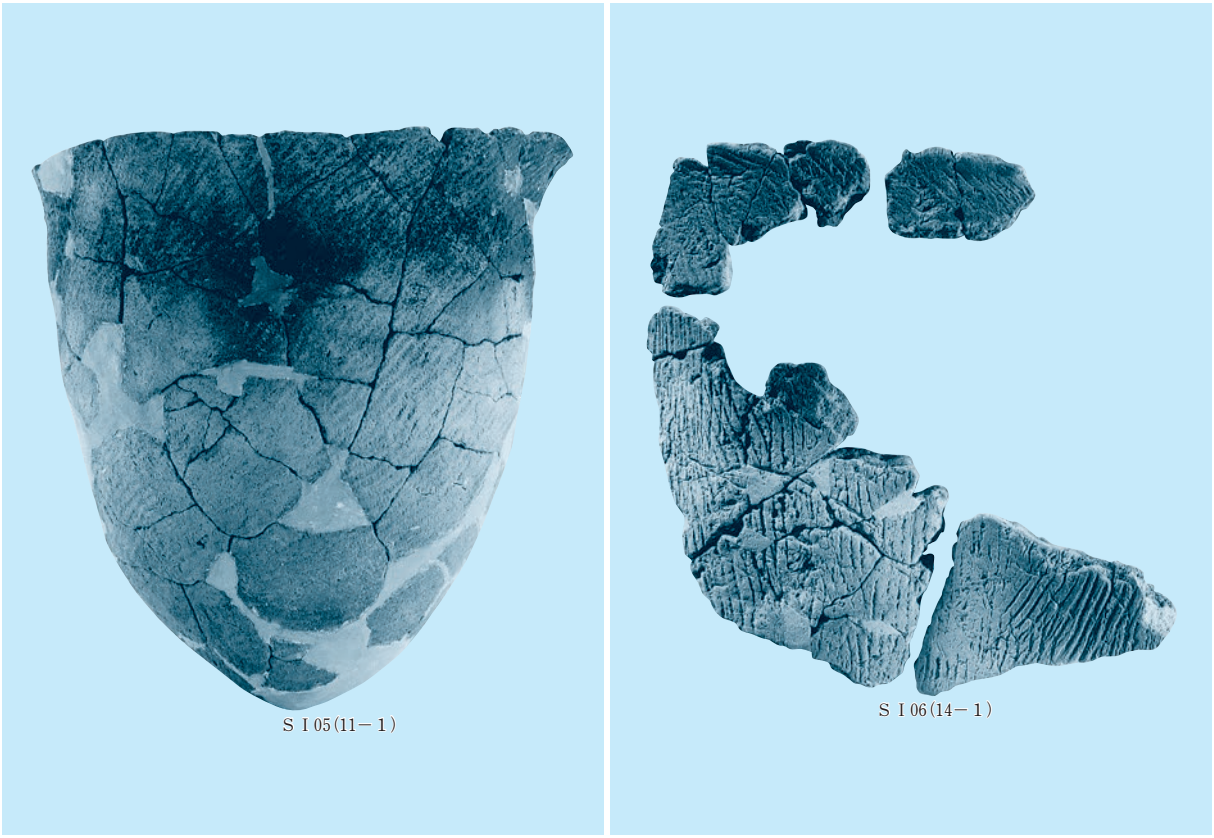
42　２号特殊遺構検出（南から）



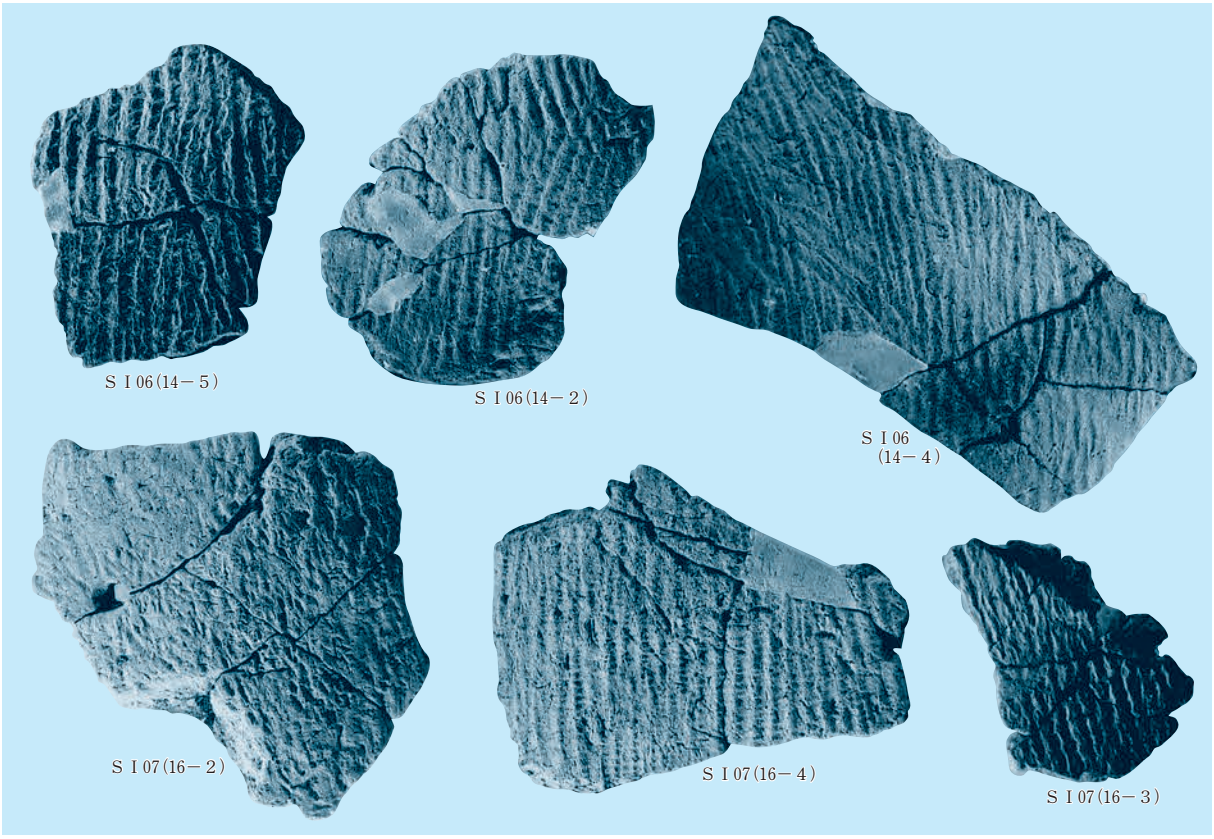
43　１号住居跡出土遺物



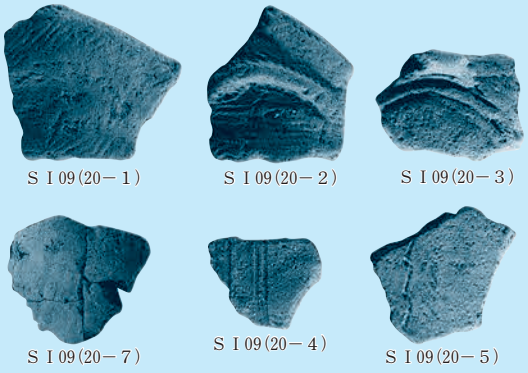
44　２・５号住居跡出土遺物



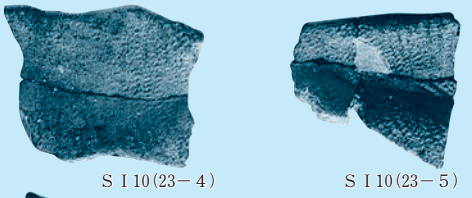
45　5・6号住居跡出土遺物

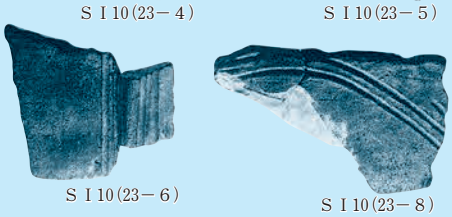


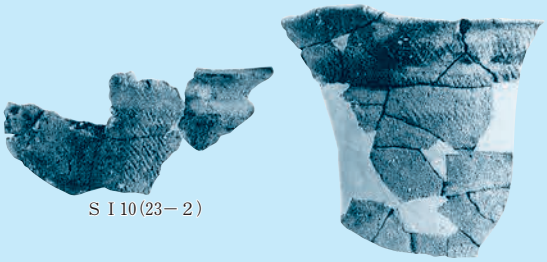
46　6・7号住居跡出土遺物


ＳＩ09(20－１)　ＳＩ09(20－２)　ＳＩ09(20－３)

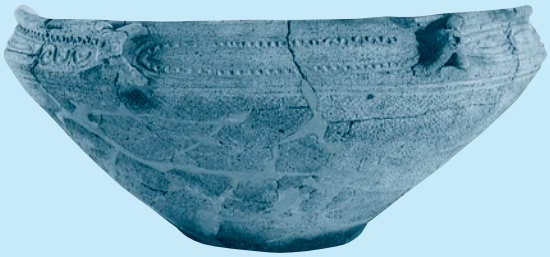
ＳＩ09(20－７)　ＳＩ09(20－４)　ＳＩ09(20－５)

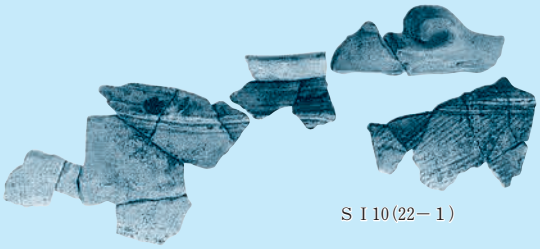

ＳＩ10(23－４)　ＳＩ10(23－５)

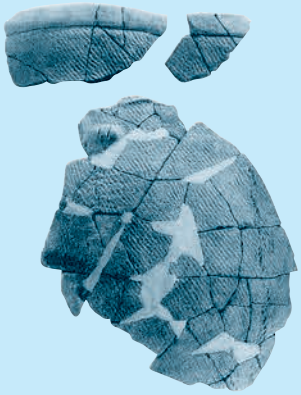

ＳＩ10(23－６)　ＳＩ10(23－８)

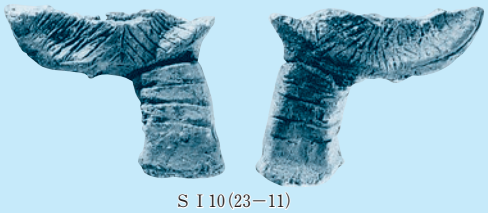

ＳＩ10(23－２)　ＳＩ10(23－１)

ＳＩ10(23－３)

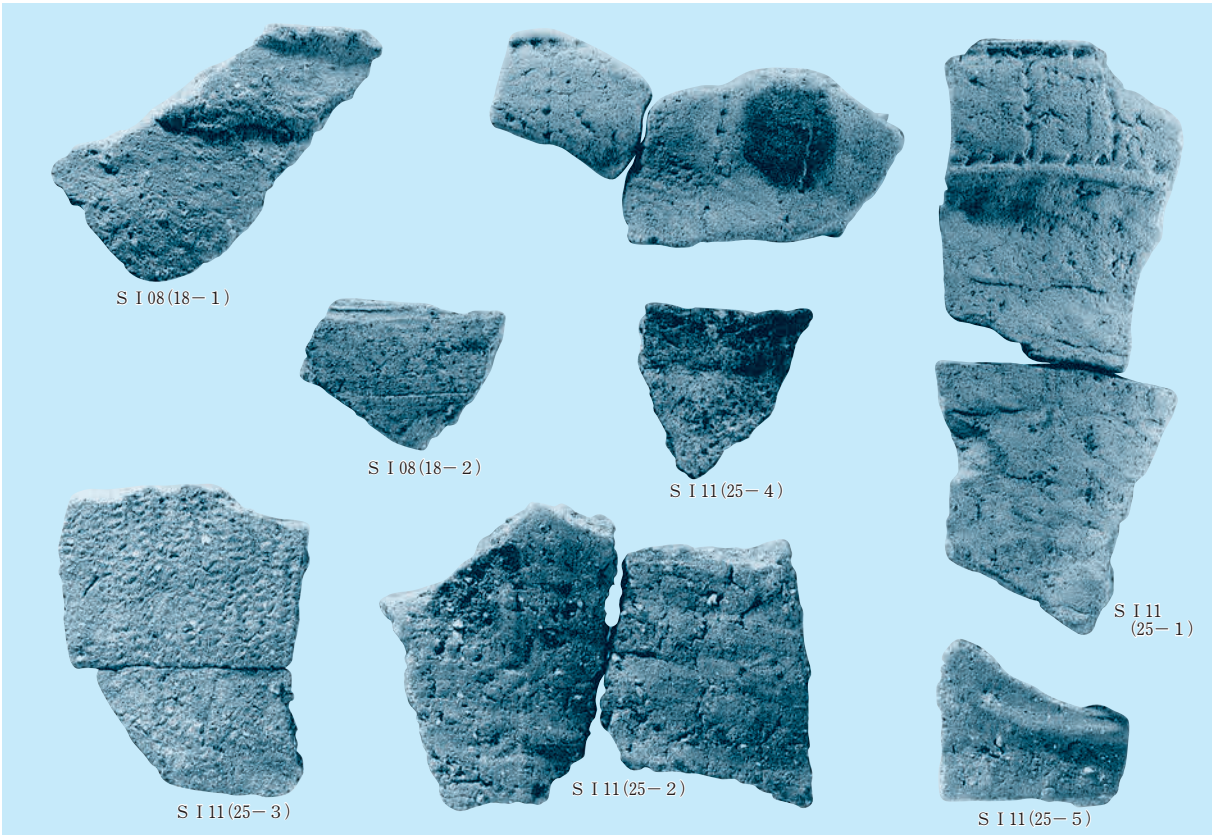

ＳＩ10(22－２)


ＳＩ10(22－１)

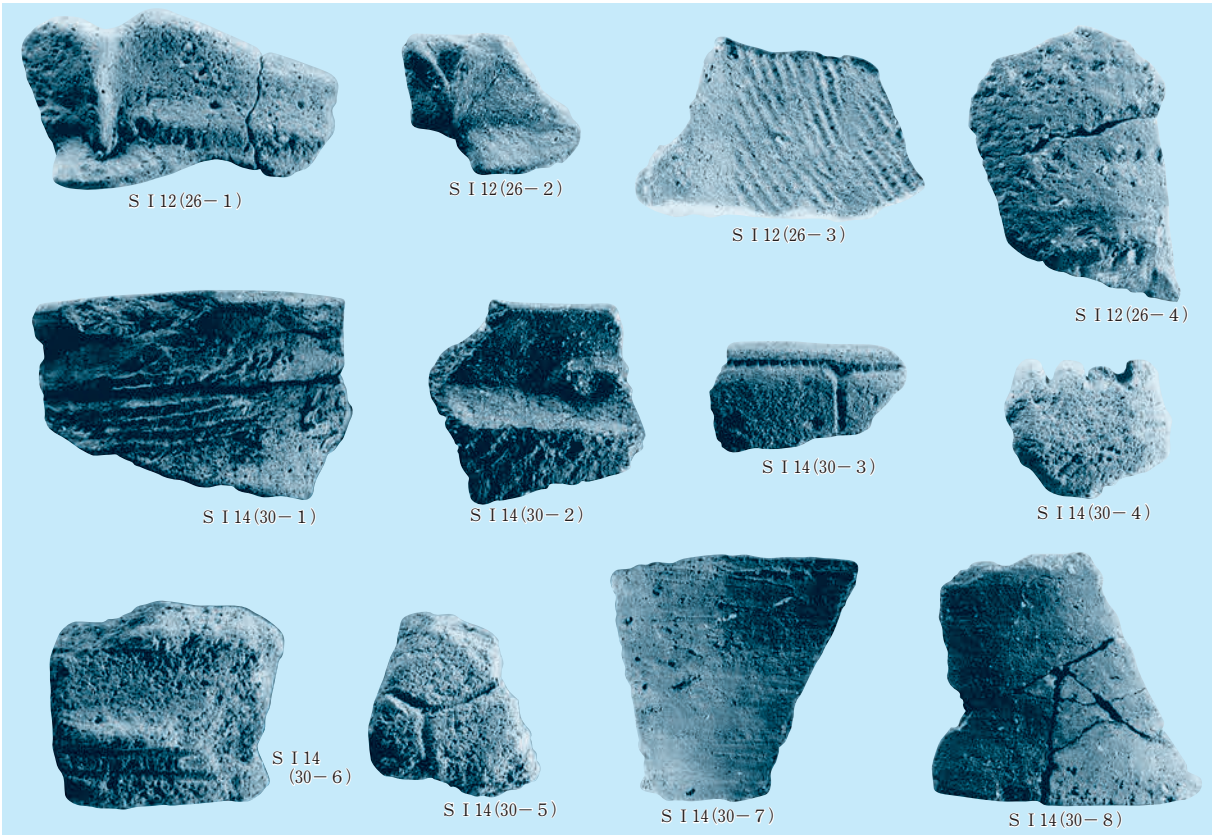

ＳＩ10(22－３)


ＳＩ10(23－11)

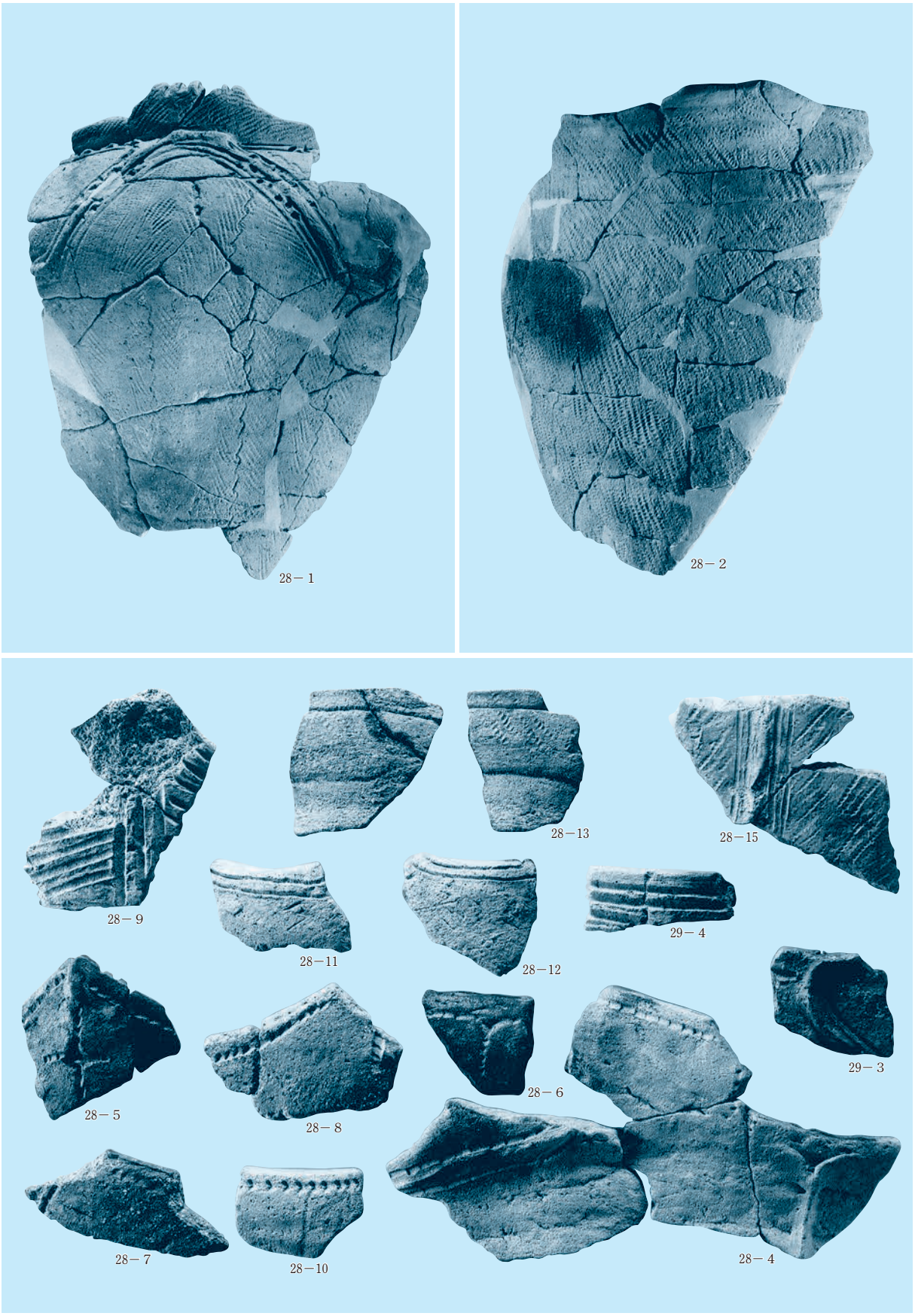
47　９・10号住居跡出土遺物



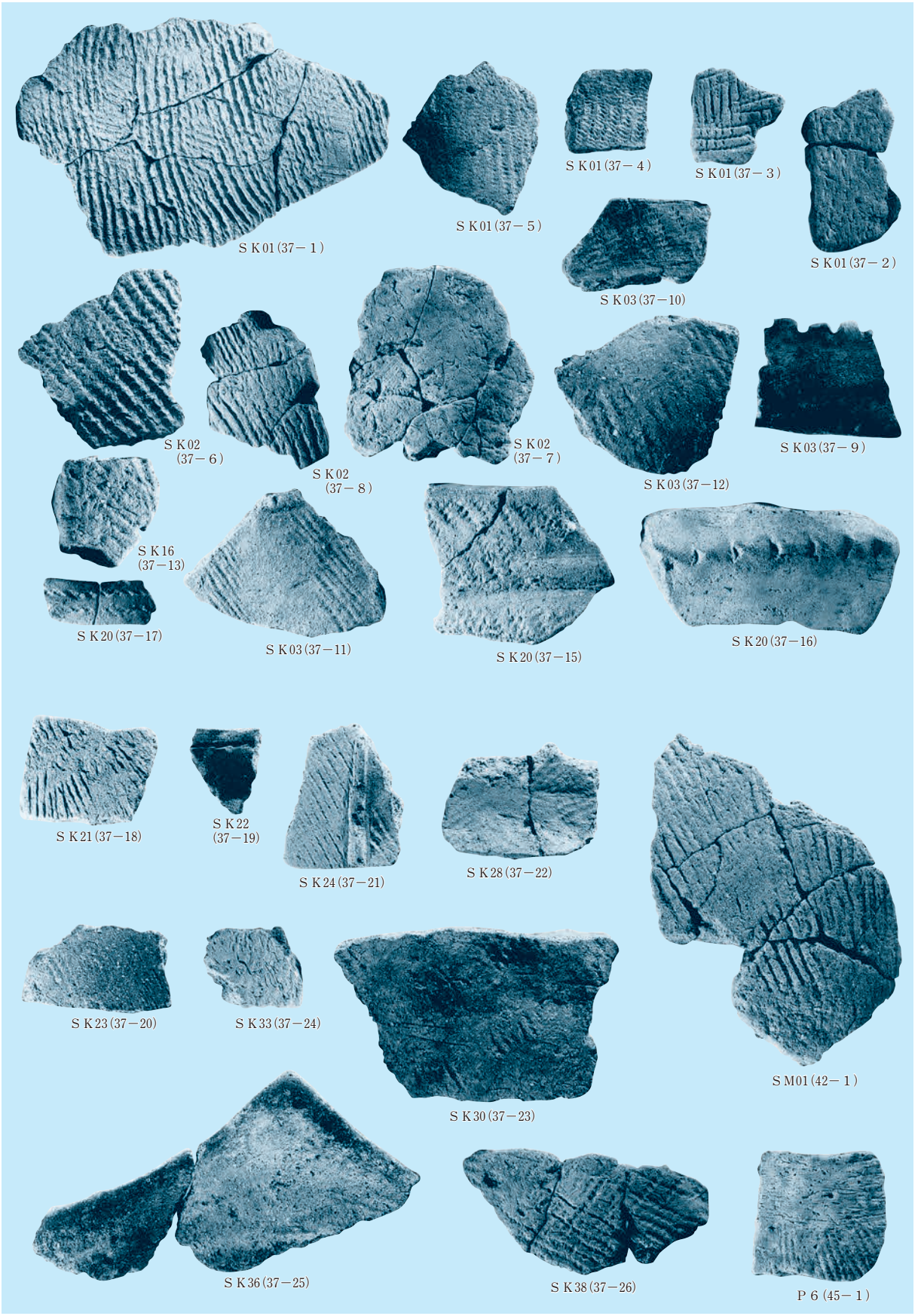
48　8・11号住居跡出土遺物



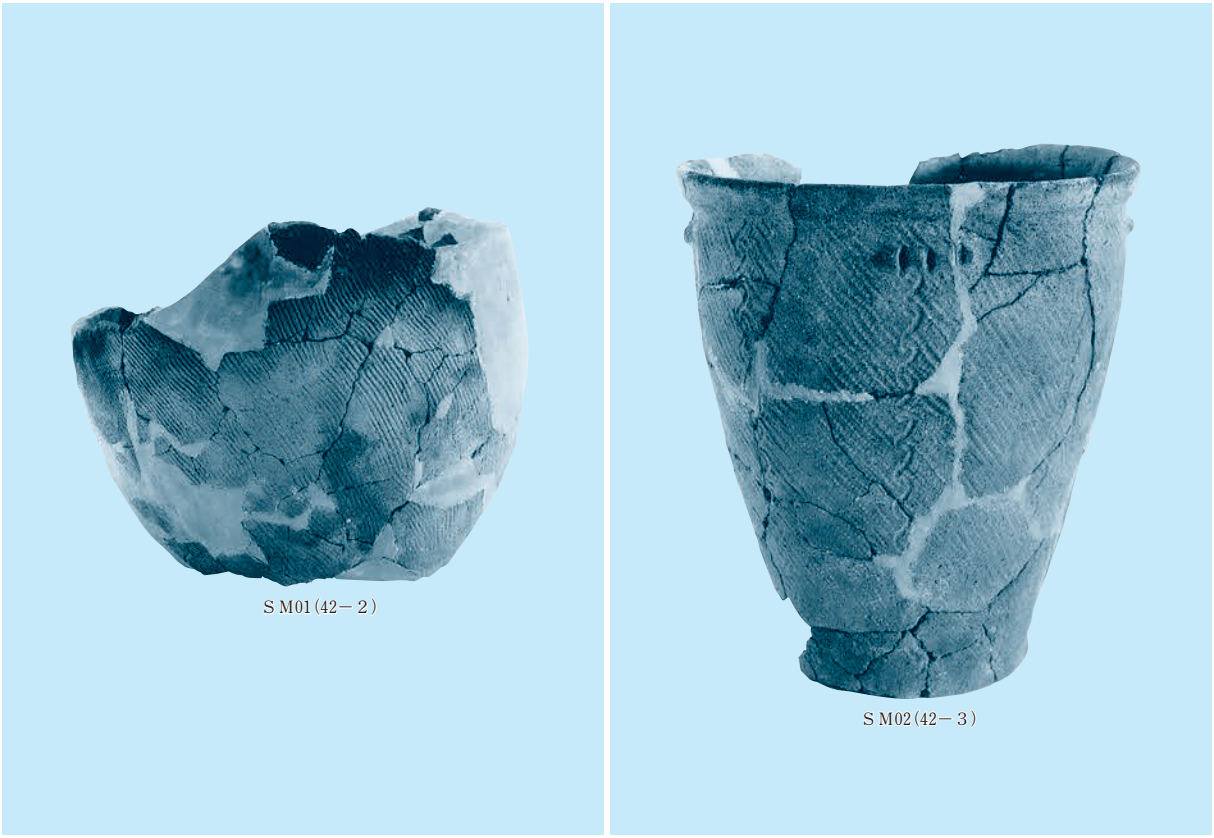
49　12・14号住居跡出土遺物



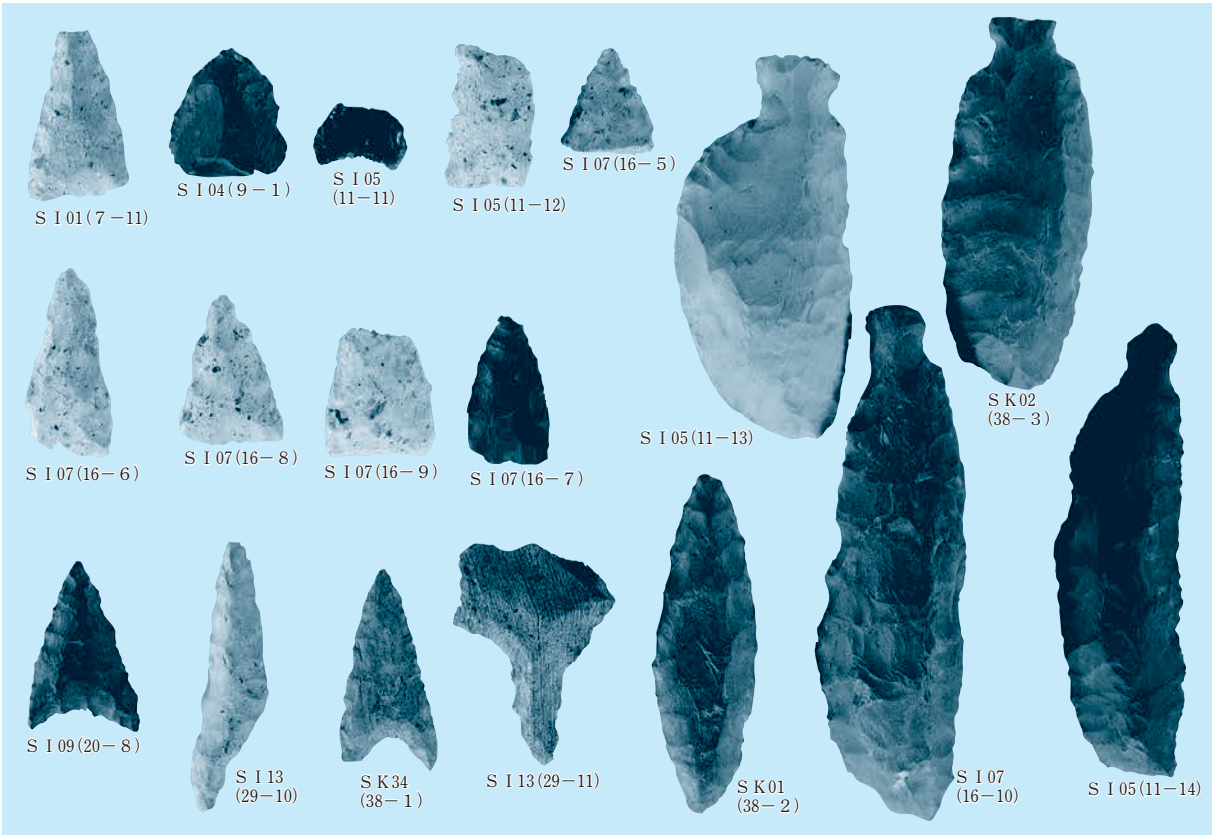
50　13号住居跡出土遺物



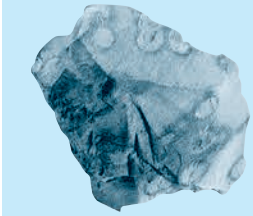
51　土坑・土器埋設遺構・ピット出土遺物



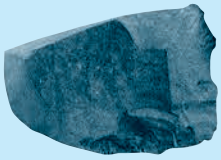
52　土器埋設遺構出土遺物



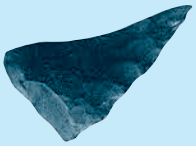
53　遺構内出土石器（1）



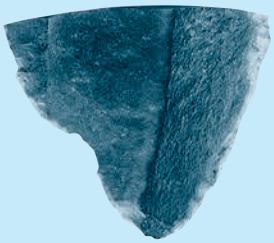
S I 05(12－3)



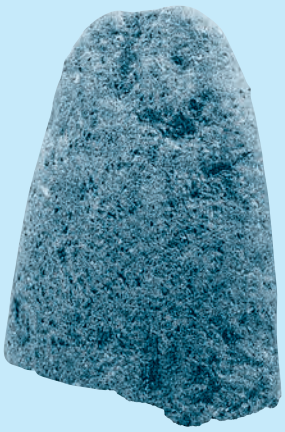
S I 07(16－12)



S I 05(12－2)



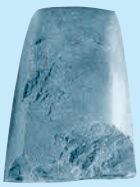
S G 03(41－1)



S I 01(7－13)

S I 02(8－3)

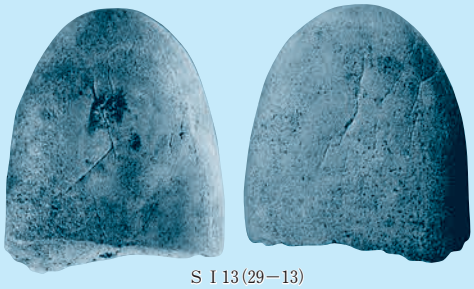
S I 05(12－1)



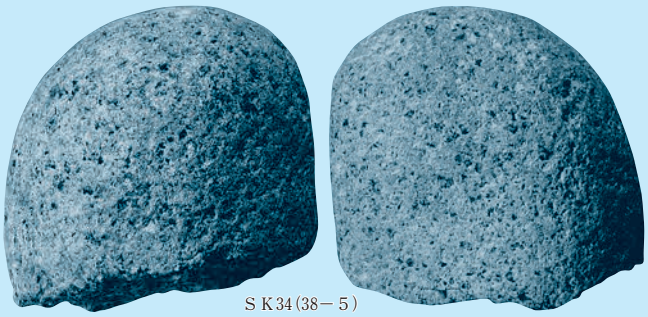
S I 10(23－13)

S I 11(25－6)

S I 12
(26－5)

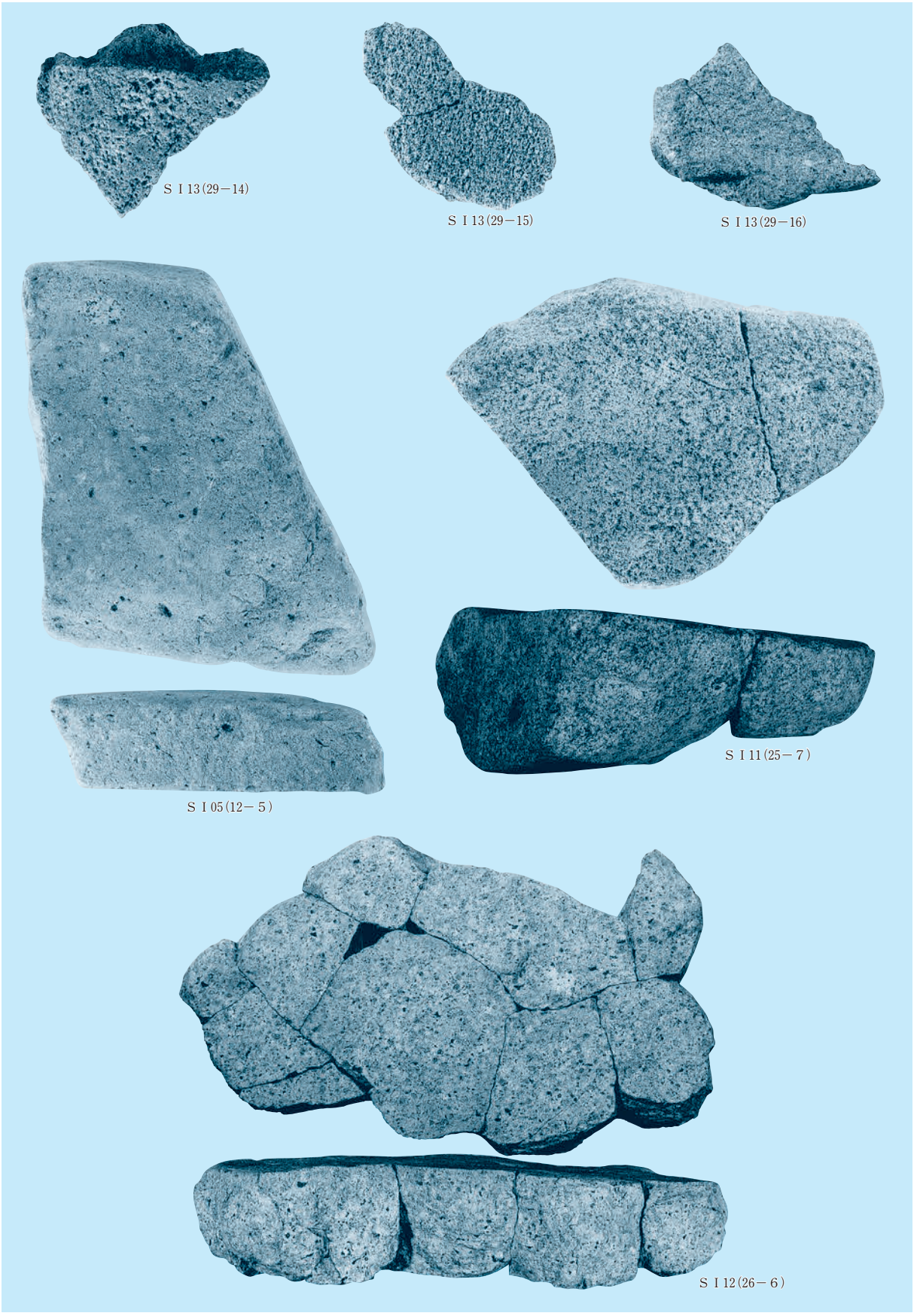


S I 13(29－13)

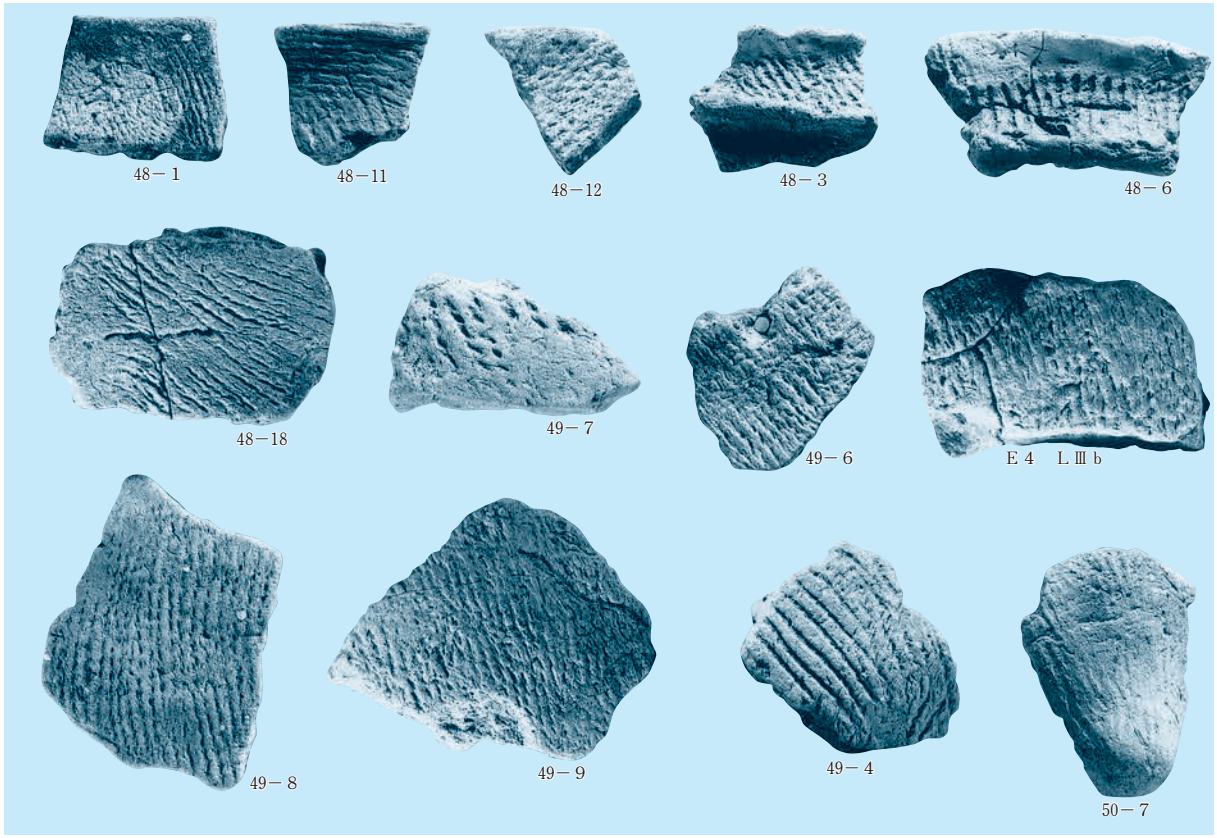


S K 34(38－5)

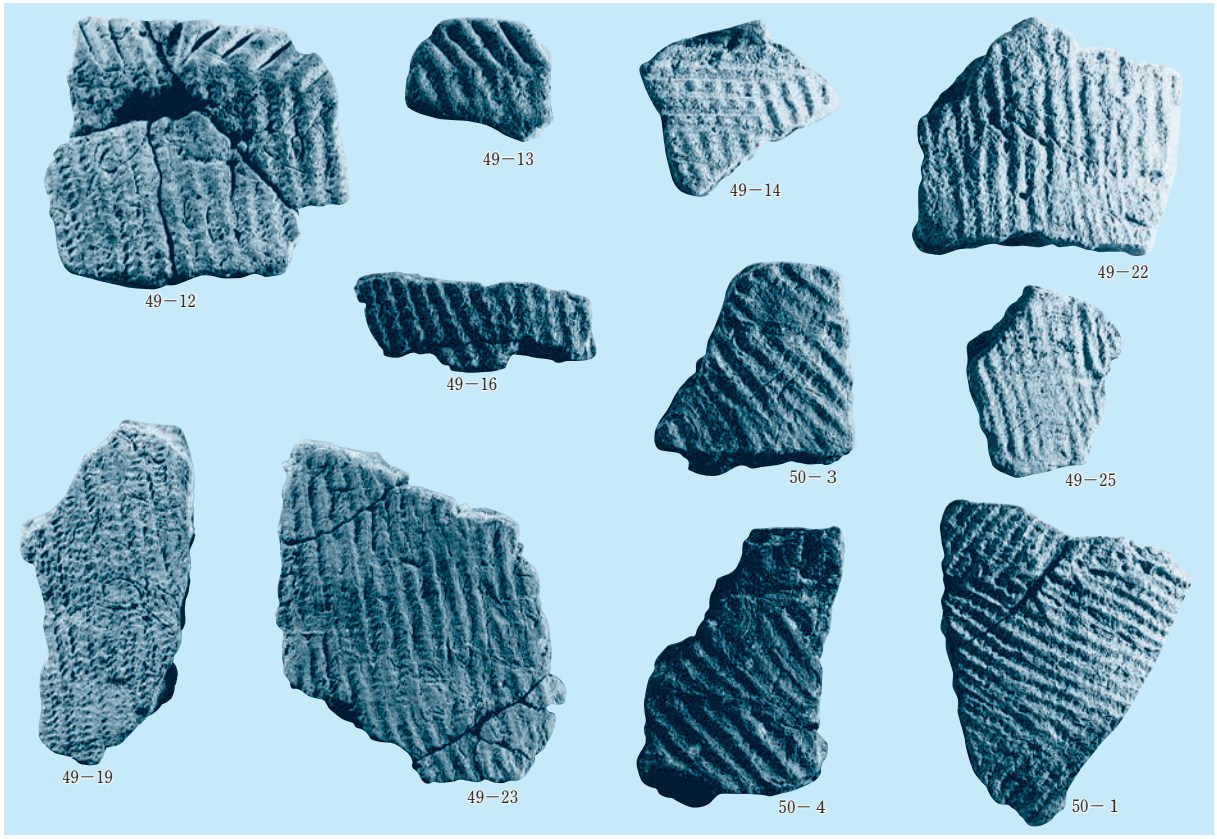
54　遺構内出土石器(2)



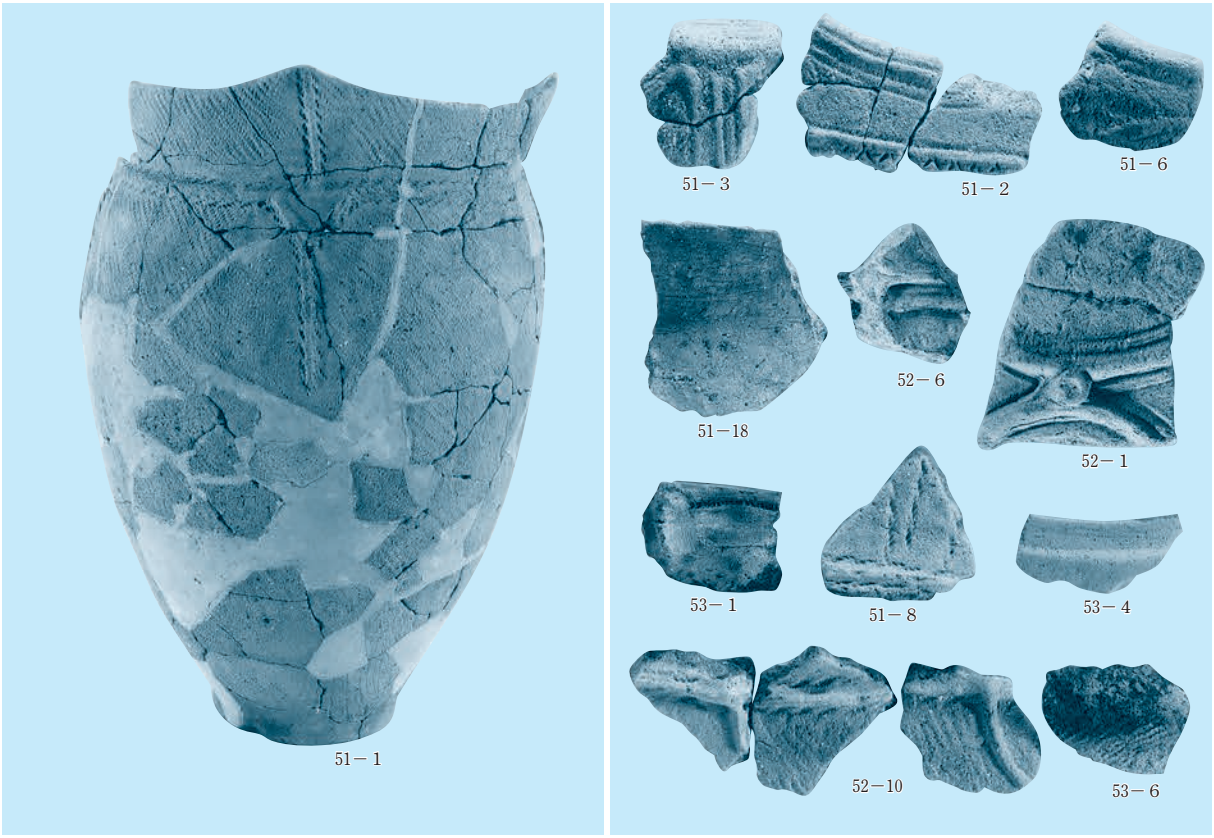
55　遺構内出土石器(3)



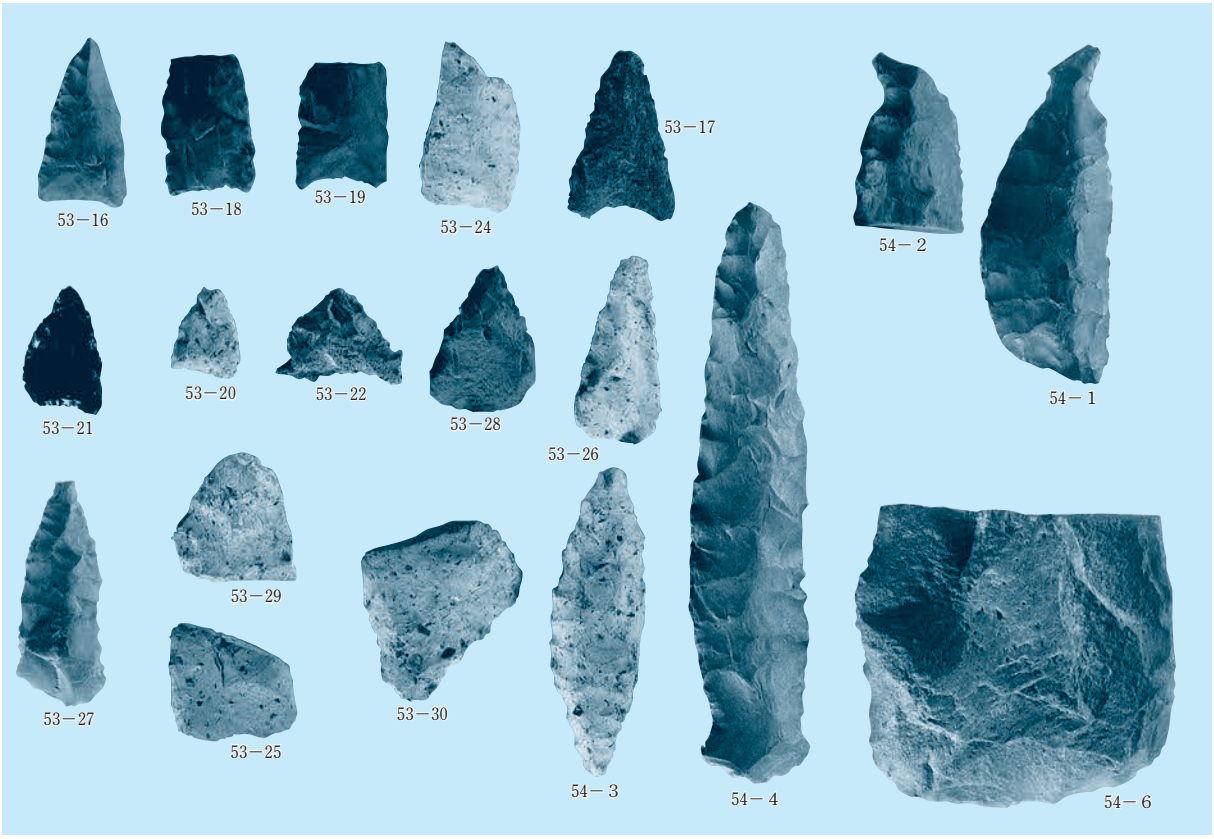
56　遺構外出土土器(1)



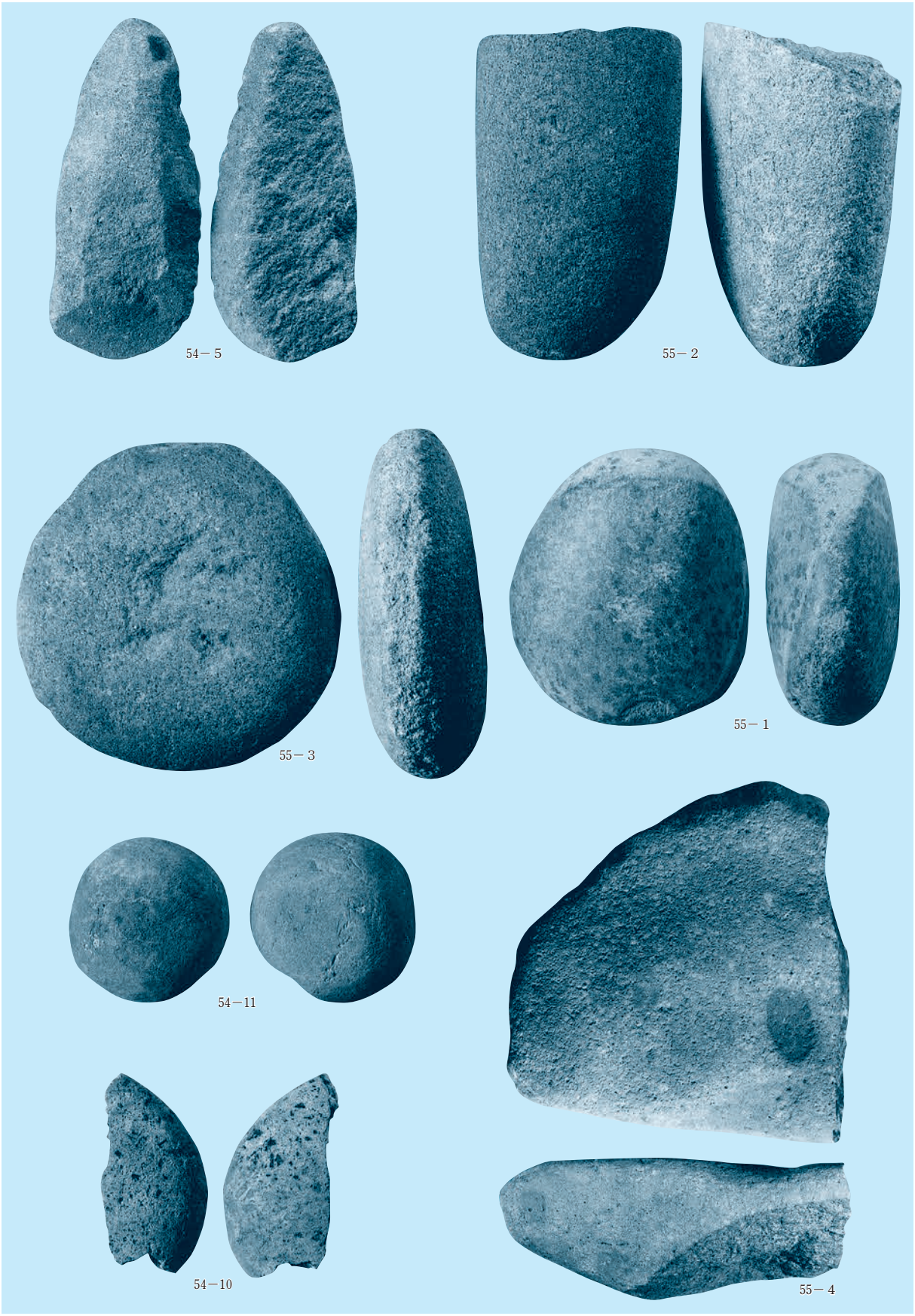
57　遺構外出土土器(2)



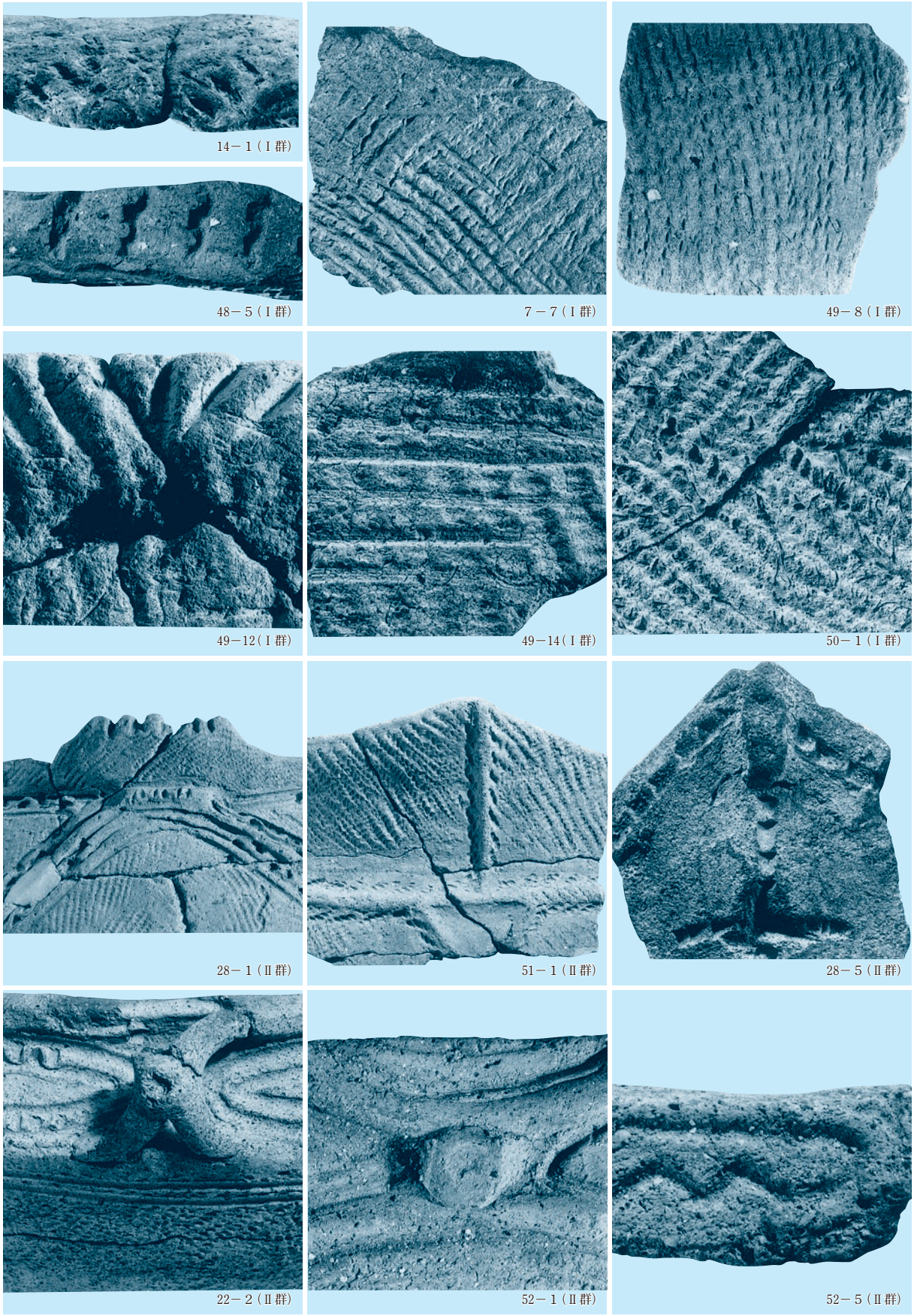
58　遺構外出土土器(3)



59　遺構外出土石器(1)



60　遺構外出土石器(2)


14－１（Ⅰ群）
48－５（Ⅰ群）
７－７（Ⅰ群）
49－８（Ⅰ群）
49－12（Ⅰ群）
49－14（Ⅰ群）
50－１（Ⅰ群）
28－１（Ⅱ群）
51－１（Ⅱ群）
28－５（Ⅱ群）
22－２（Ⅱ群）
52－１（Ⅱ群）
52－５（Ⅱ群）

61　縄文土器細部

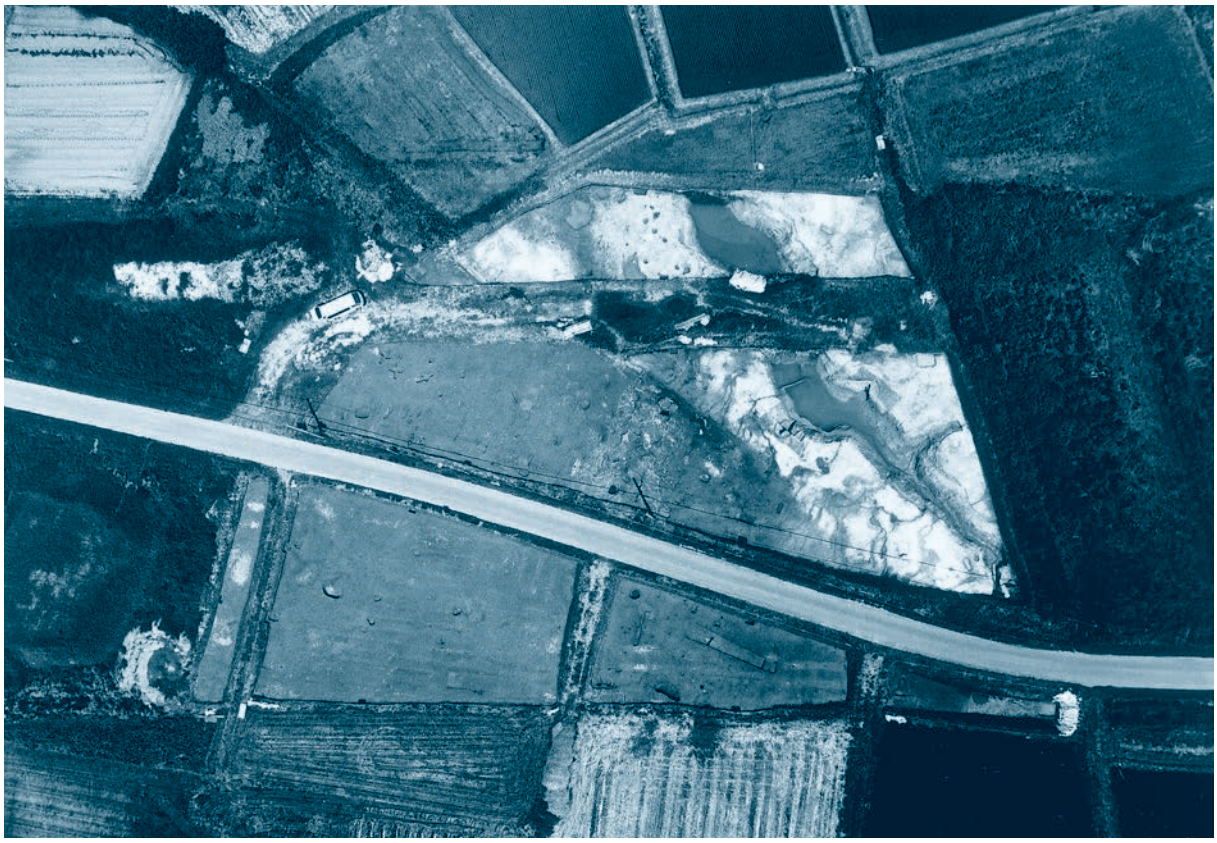
写　真　図　版

第２編　大田切（おおたぎり）遺跡

1　遺跡遠景（北上空から）

2　調査Ⅰ・Ⅱ区全景（南東上空から）

３　Ⅰ区全景



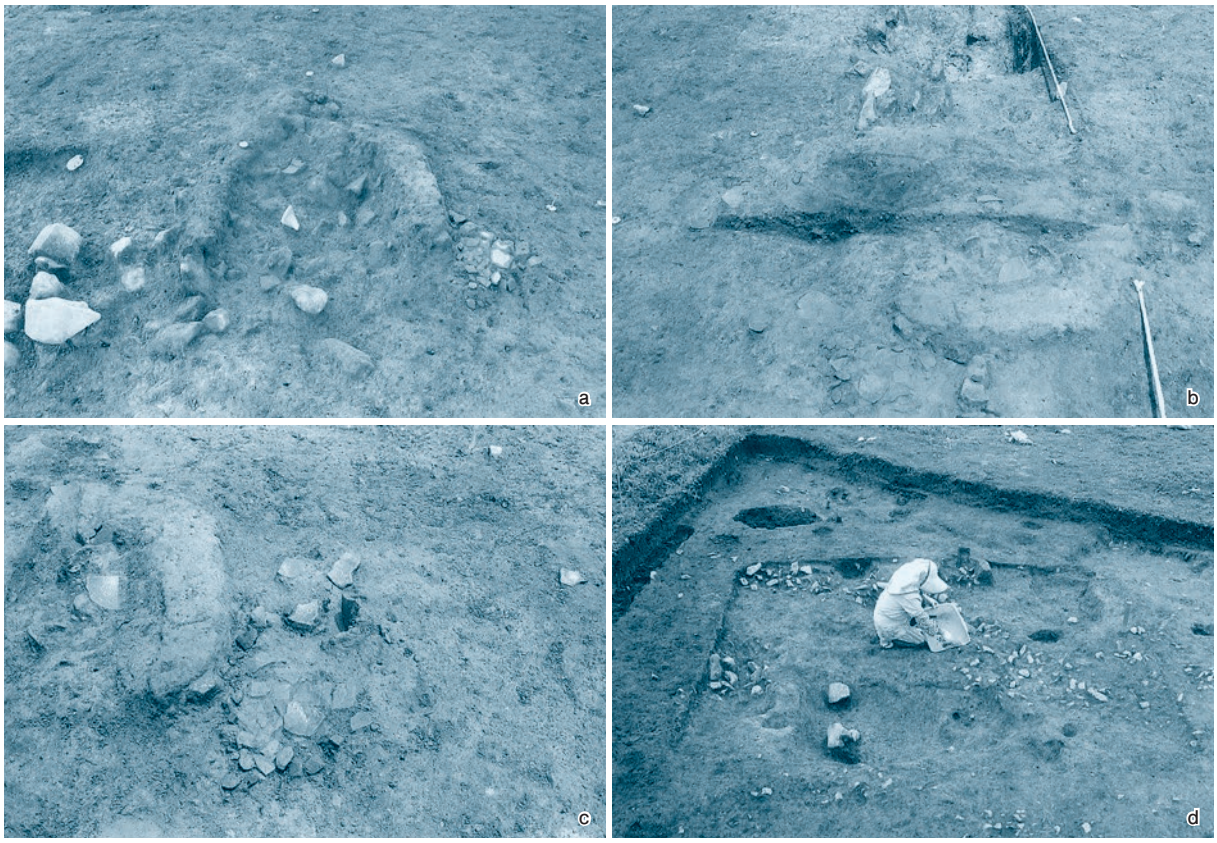
４　Ⅱ区全景

5　Ⅲ区全景

6　調査前近景，基本土層

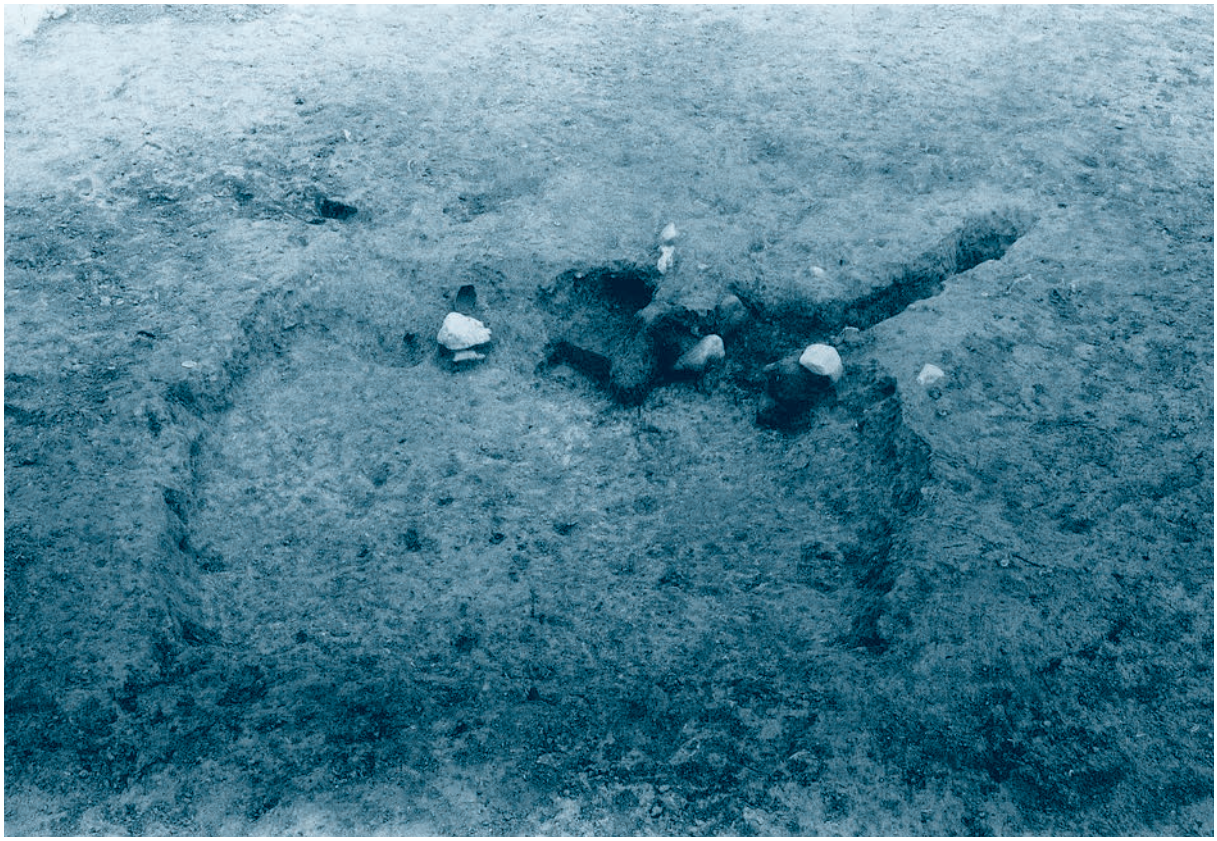
a　調査前近景（北西から）　b　基本土層（地点⑩）（西から）
c　基本土層（地点⑫）（北西から）　d　基本土層（地点③）（西から）

７　１号住居跡全景（西から）



８　１号住居跡細部

a　カマド全景（西から）　b　カマド断面（南から）
c　遺物出土状況（西から）　d　掘形全景（西から）

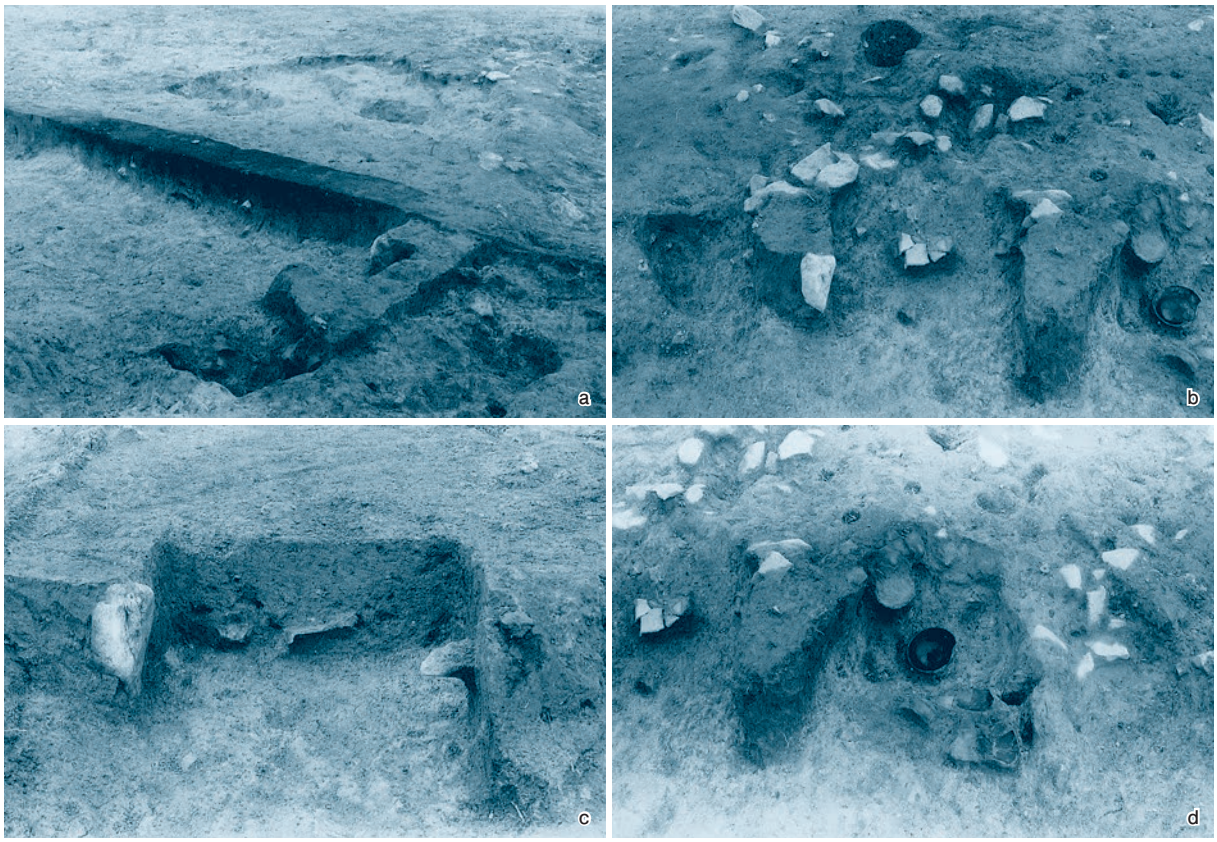


9　２号住居跡全景（南東から）

10　２号住居跡細部

a　断面（南から）　　b　カマド全景（南から）
c　カマド断面（南から）　d　Ｐ１全景（南から）

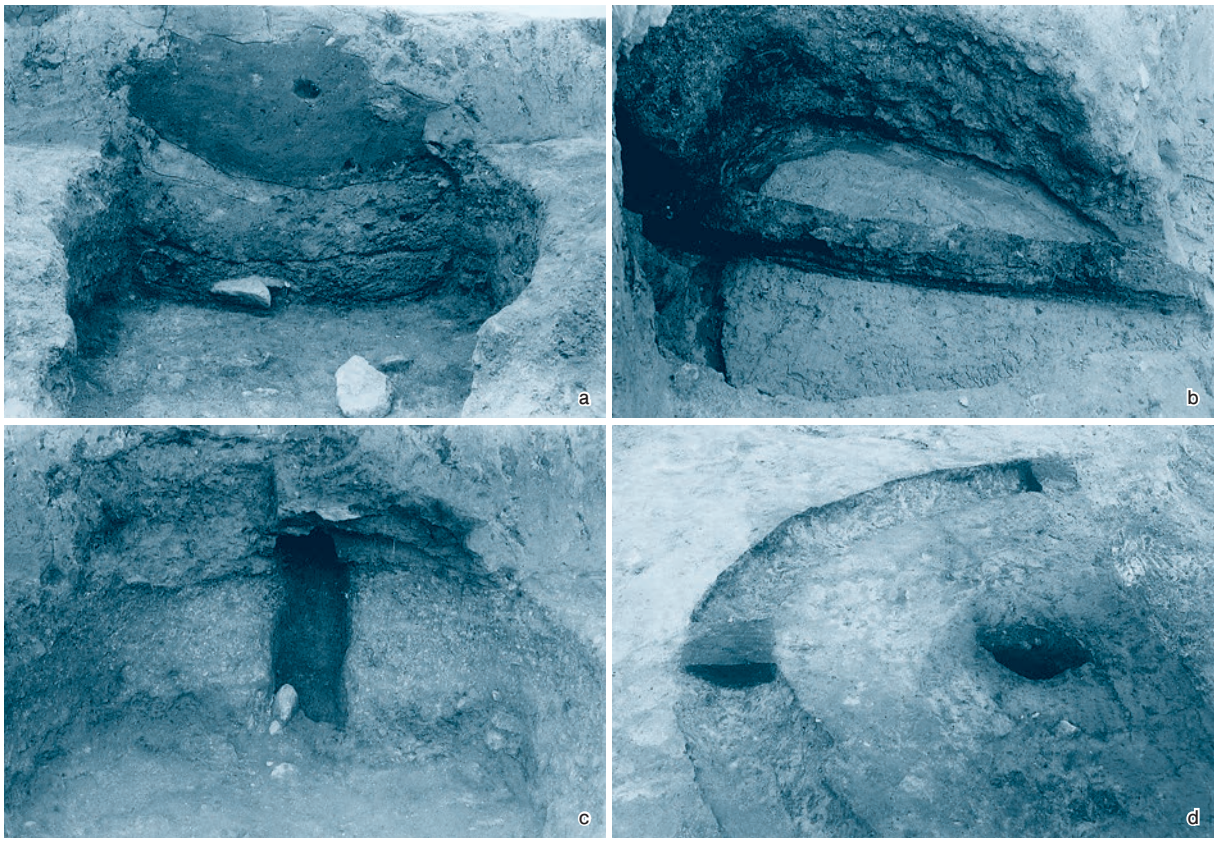
11　３号住居跡全景（西から）



12　３号住居跡細部

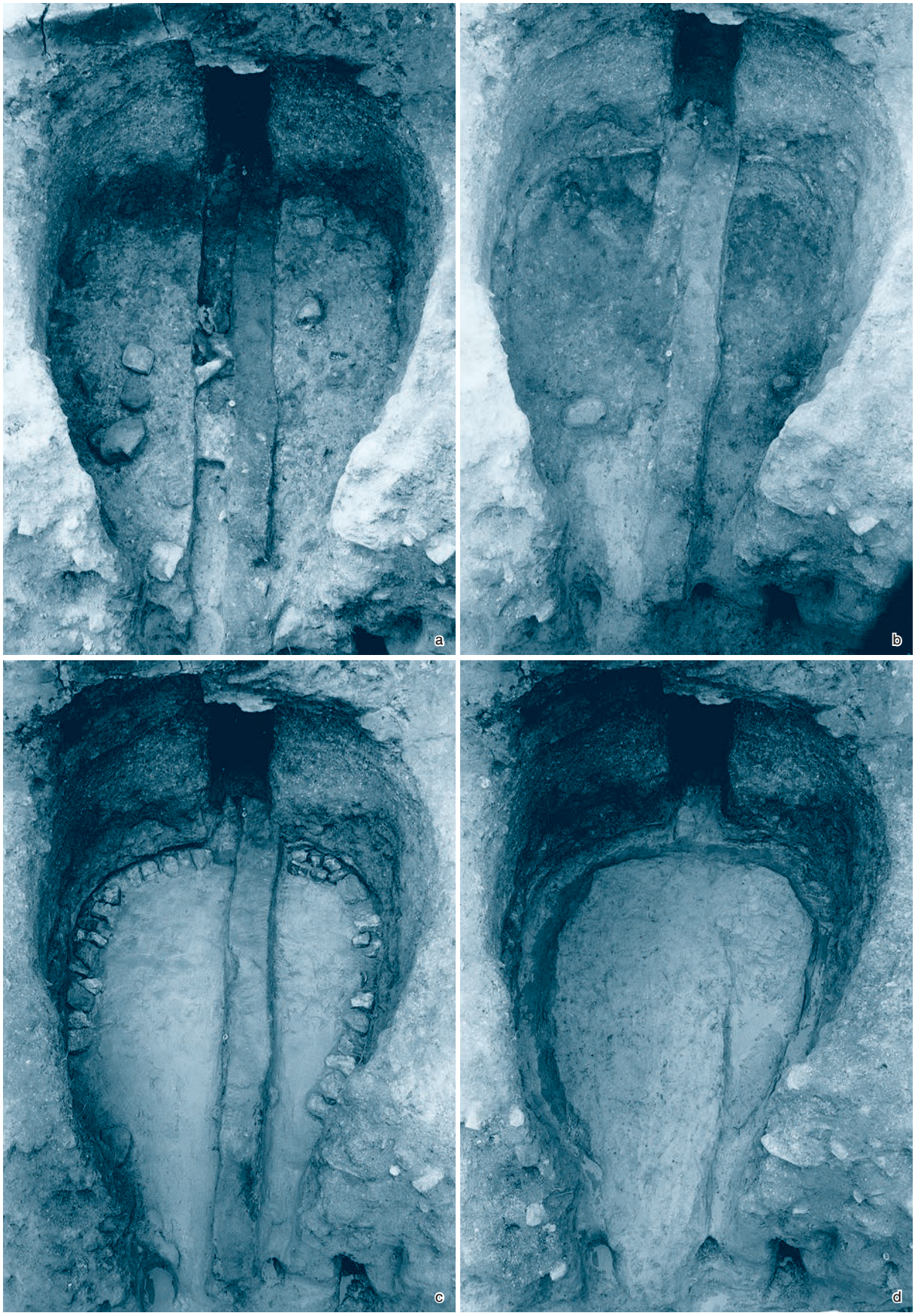
a　断面（北東から）　　b　カマド全景（西から）
c　カマド断面（西から）　d　Ｐ１遺物出土状況（西から）

13　１号木炭窯跡全景（第１操業面）（南東から）



14　１号木炭窯跡細部

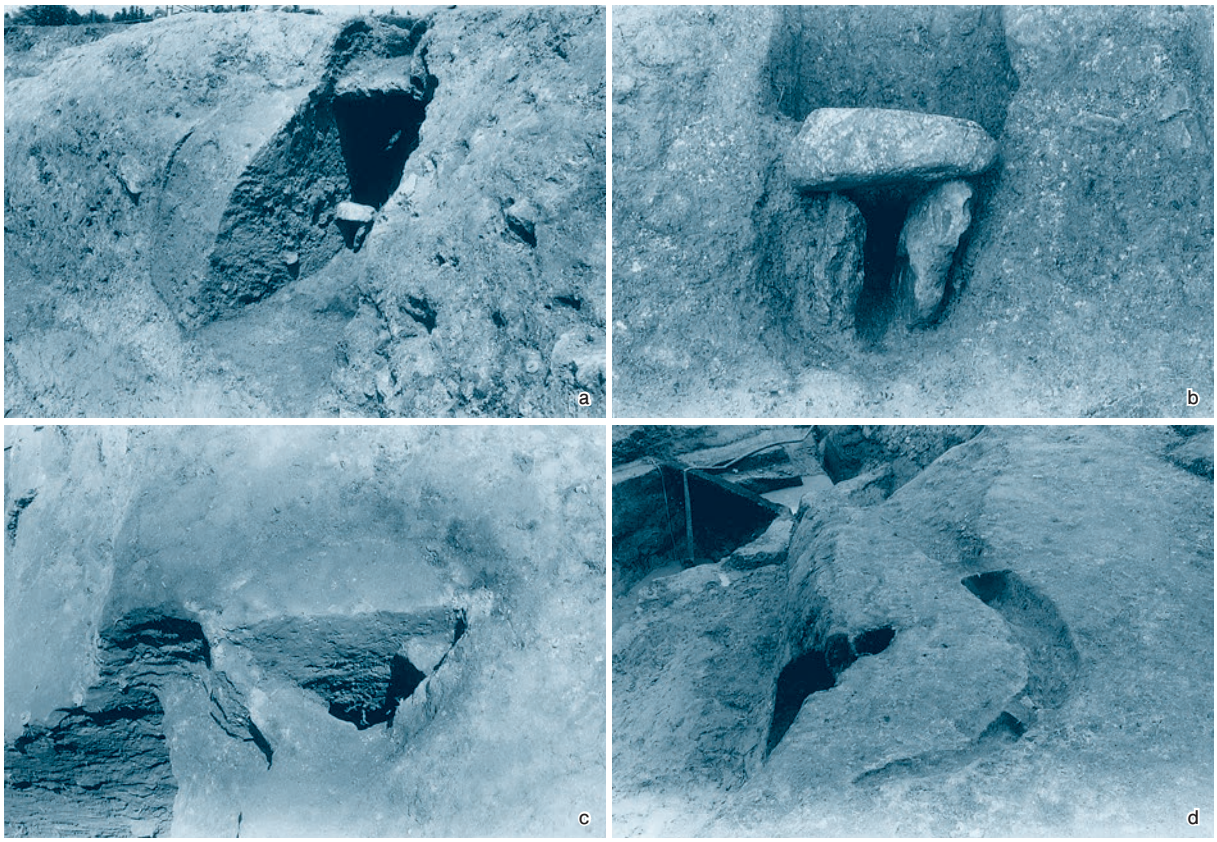
a　断面（南から）　b　床面断面（西から）
c　奥壁（南東から）　d　煙出しと周溝断面（西から）



15　１号木炭窯跡各操業面

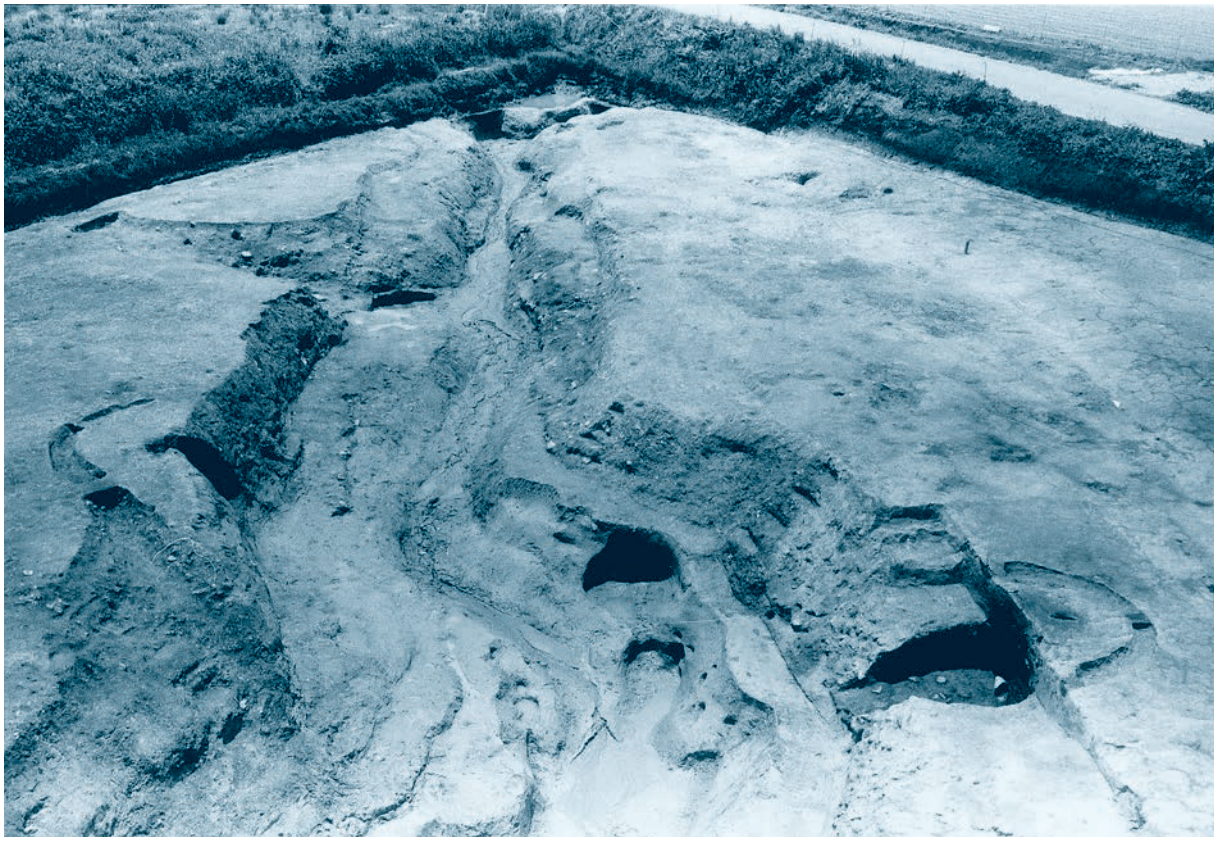
a　第２操業面（南東から）　　b　第３操業面（南東から）
c　掘形・暗渠溝検出（南東から）　　d　完掘状況（南東から）

16　２号木炭窯跡全景（北から）

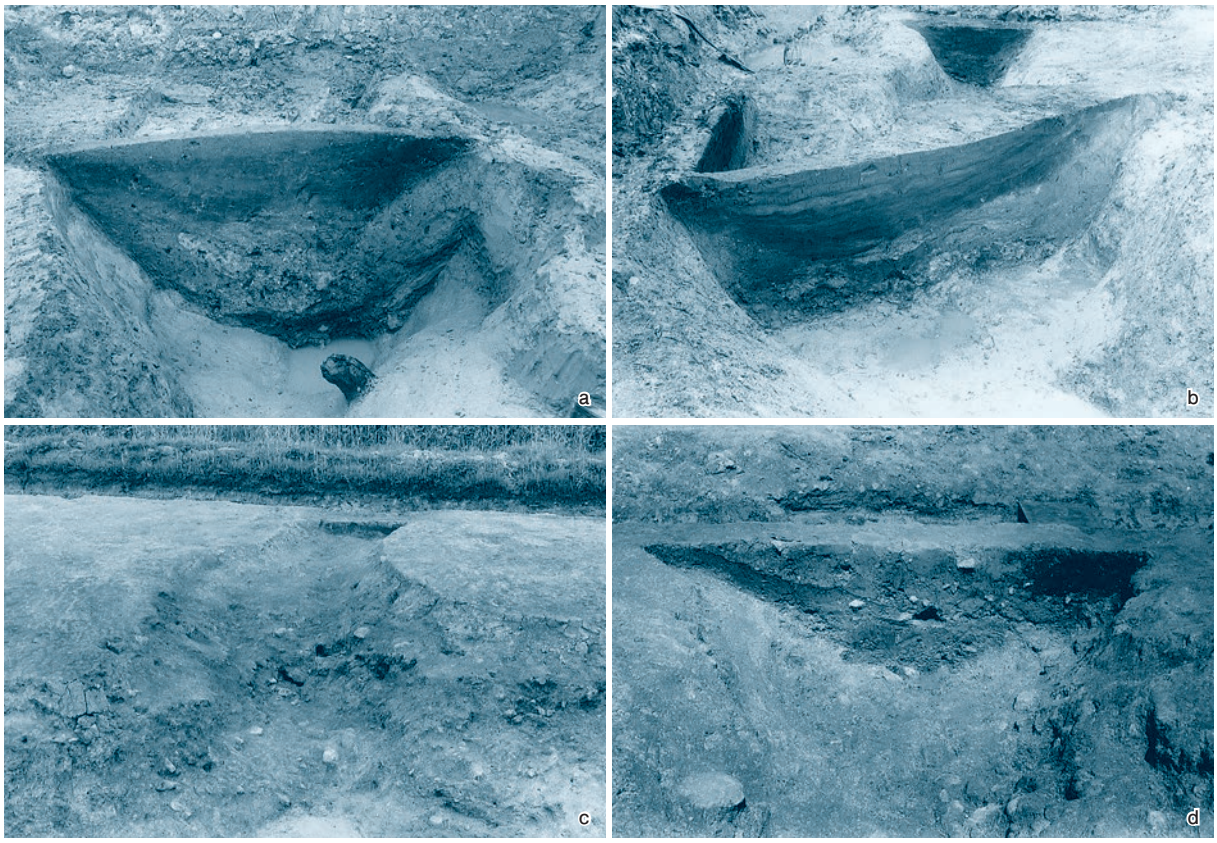


17　２号木炭窯跡細部

a　断面（西から）　b　煙道（北東から）
c　煙出し穴断面（南から）　d　周溝全景（南から）



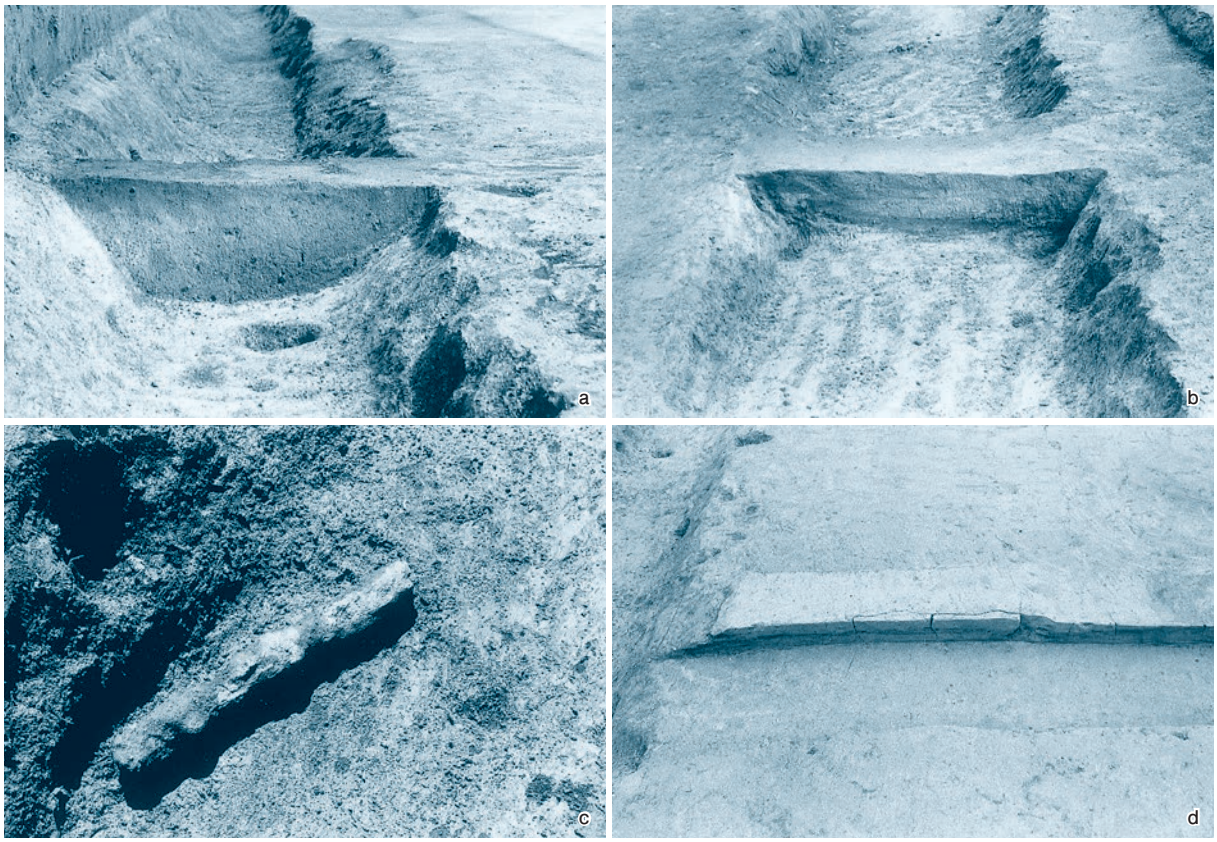
18　１号溝跡全景（北東から）



19　１号溝跡細部

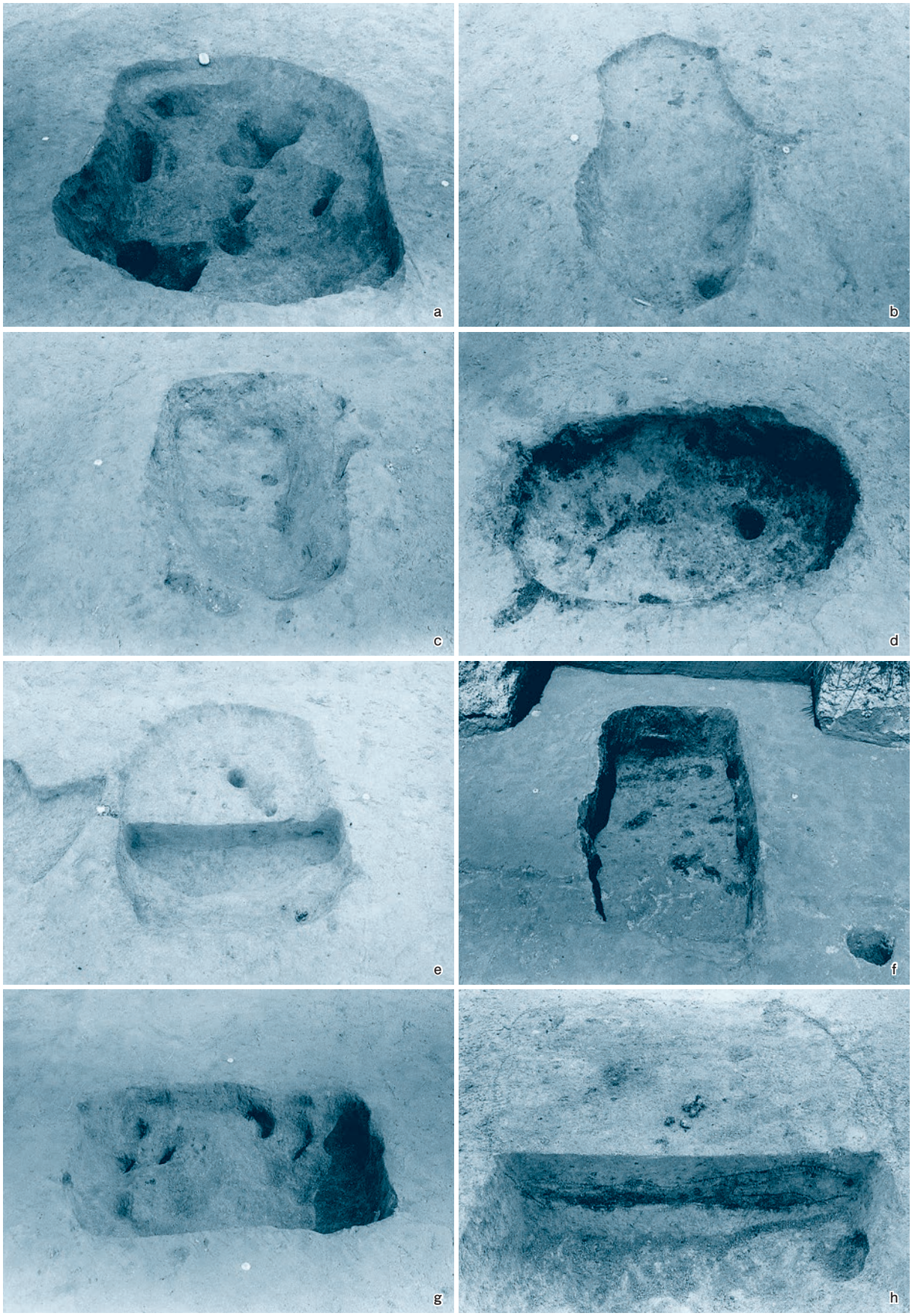
a　ＤＤ′断面（西から）　　b　ＣＣ′断面（東から）
c　全景（ＢＢ′付近）（北西から）　　d　ＢＢ′断面（南から）

20　1号道跡完掘状況(北から)



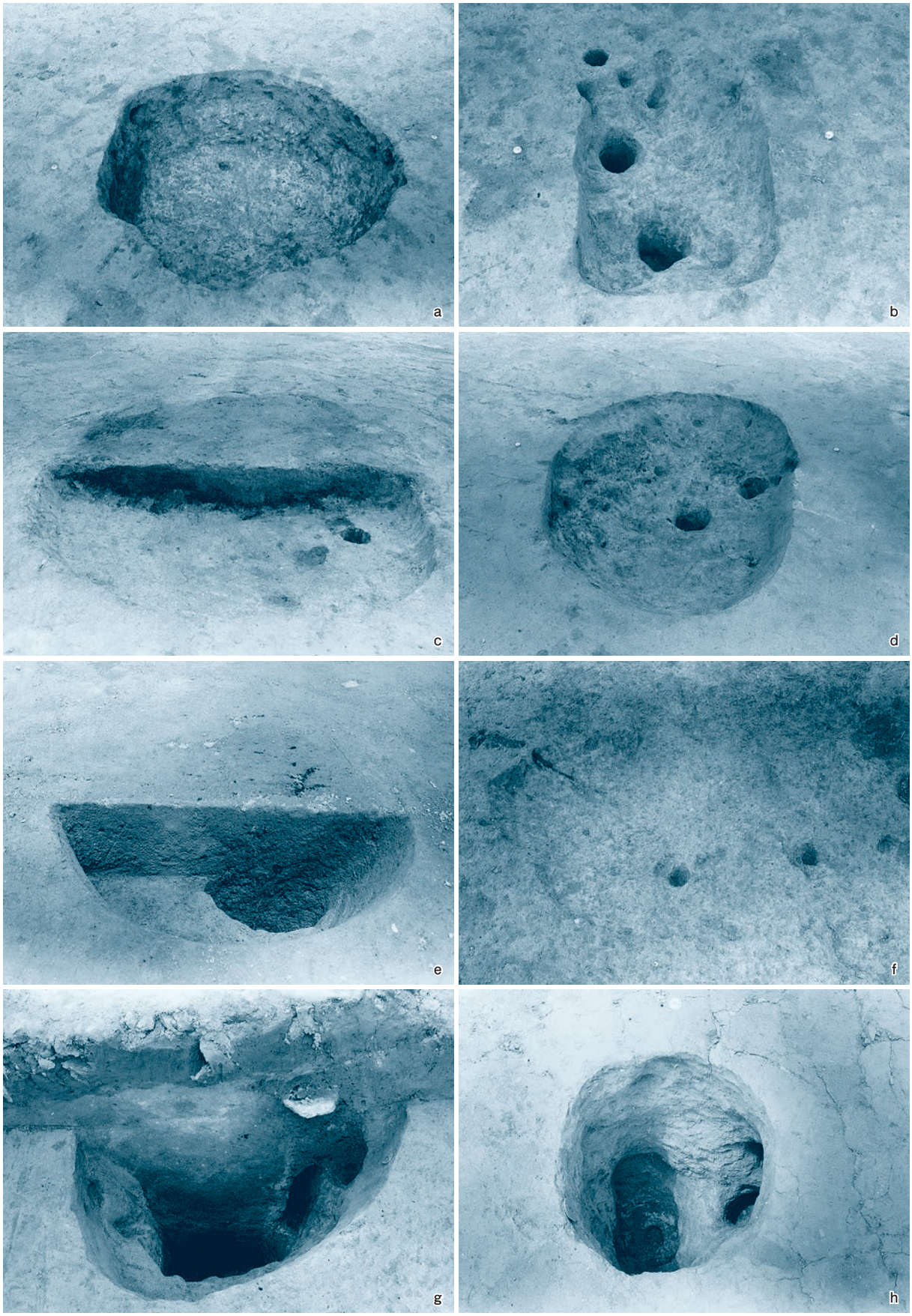
21　1号道跡細部

a　西溝断面(南から)　b　東溝断面(南から)
c　遺物出土状況　d　掘形断面(南から)



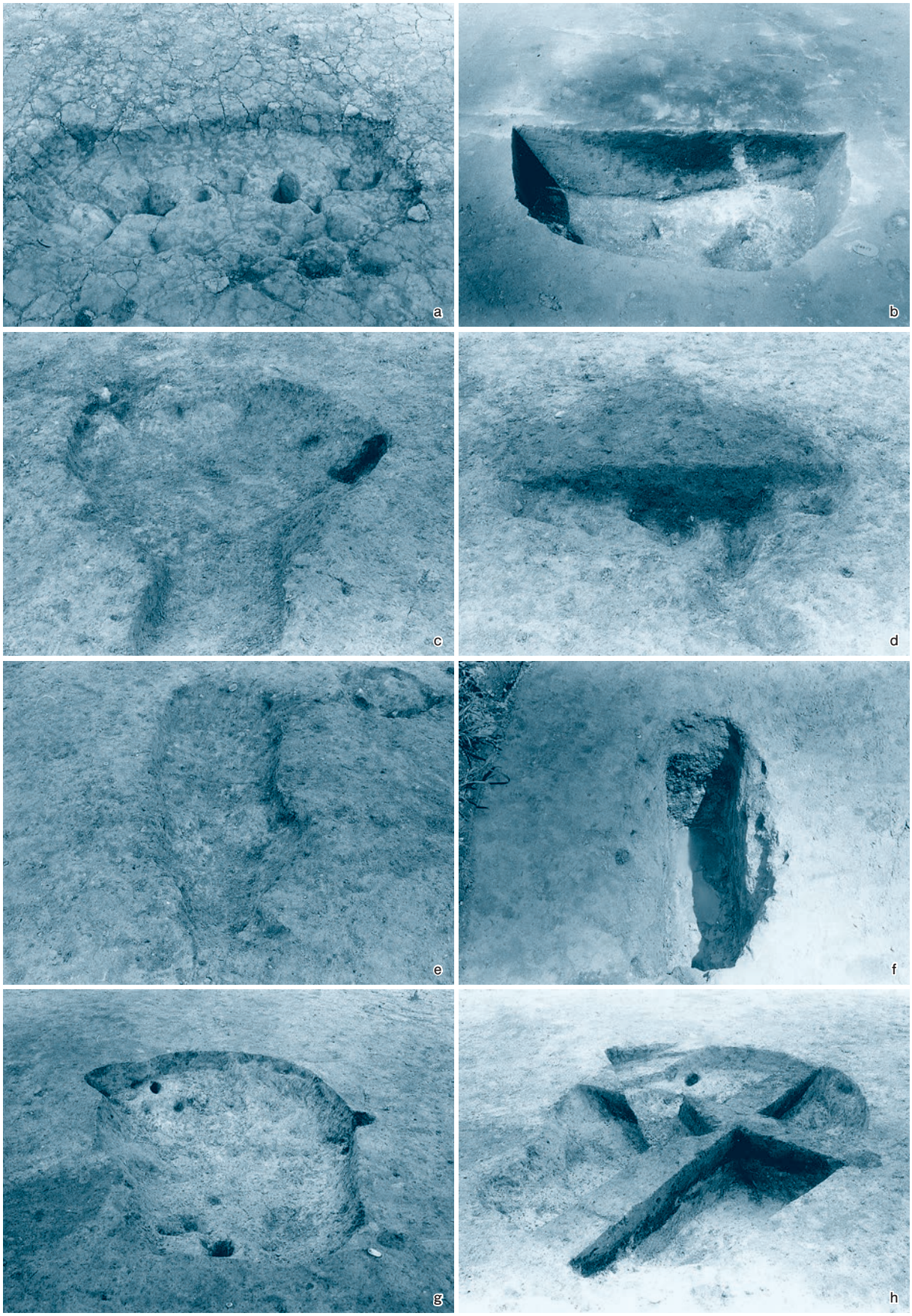
22　１～７号土坑

a　１号土坑全景（西から）　b　２号土坑全景（南から）　c　３号土坑全景（南から）
d　４号土坑全景（北東から）　e　５号土坑断面（南から）　f　６号土坑全景（南から）
g　７号土坑全景（西から）　h　７号土坑断面（南から）



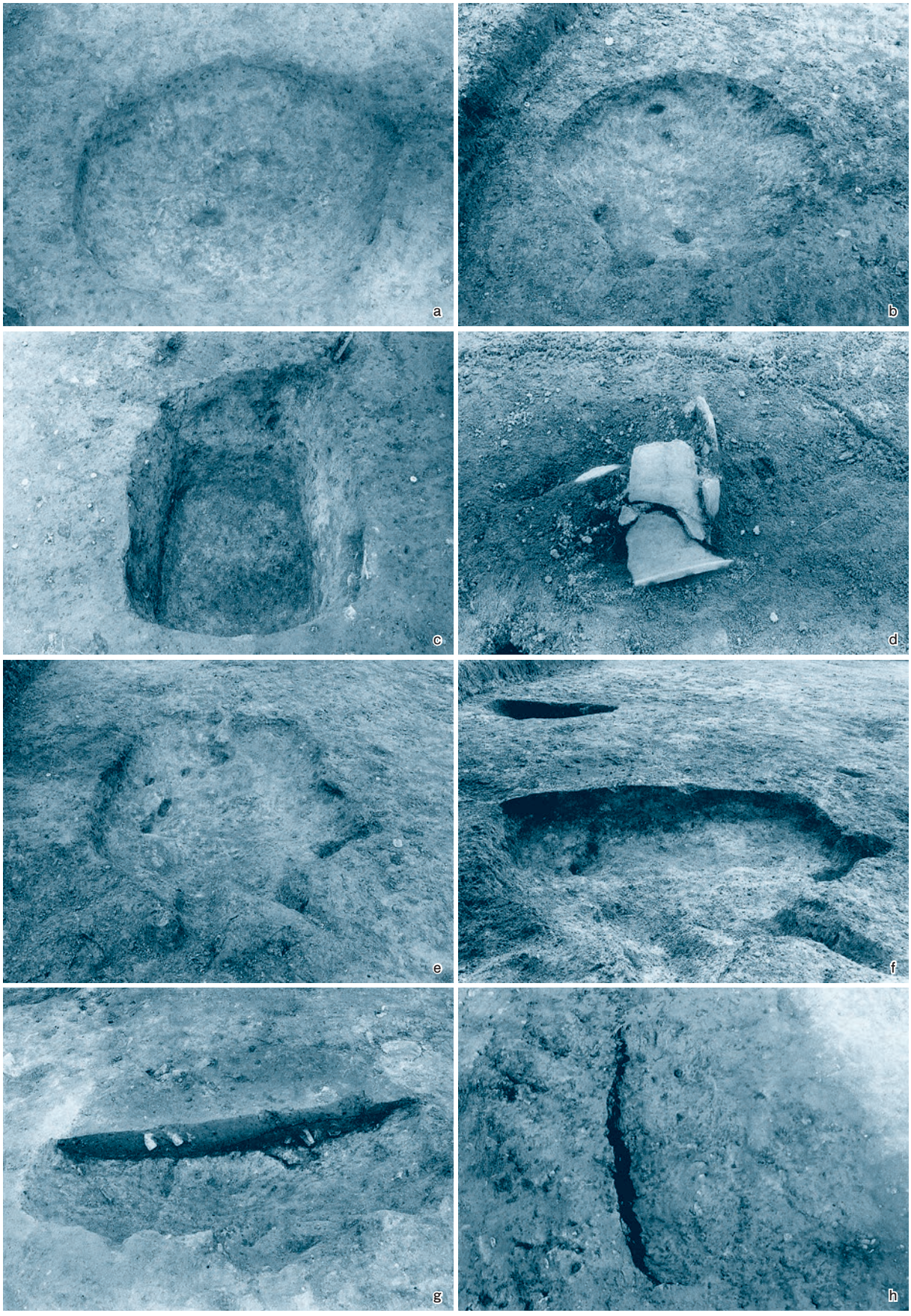
23　8～15号土坑

a　8号土坑全景（南から）　b　9号土坑全景（西から）　c　10号土坑断面（南から）
d　11号土坑全景（南東から）　e　12号土坑断面（南から）　f　13号土坑全景（南から）
g　14号土坑断面（東から）　h　15号土坑全景（東から）



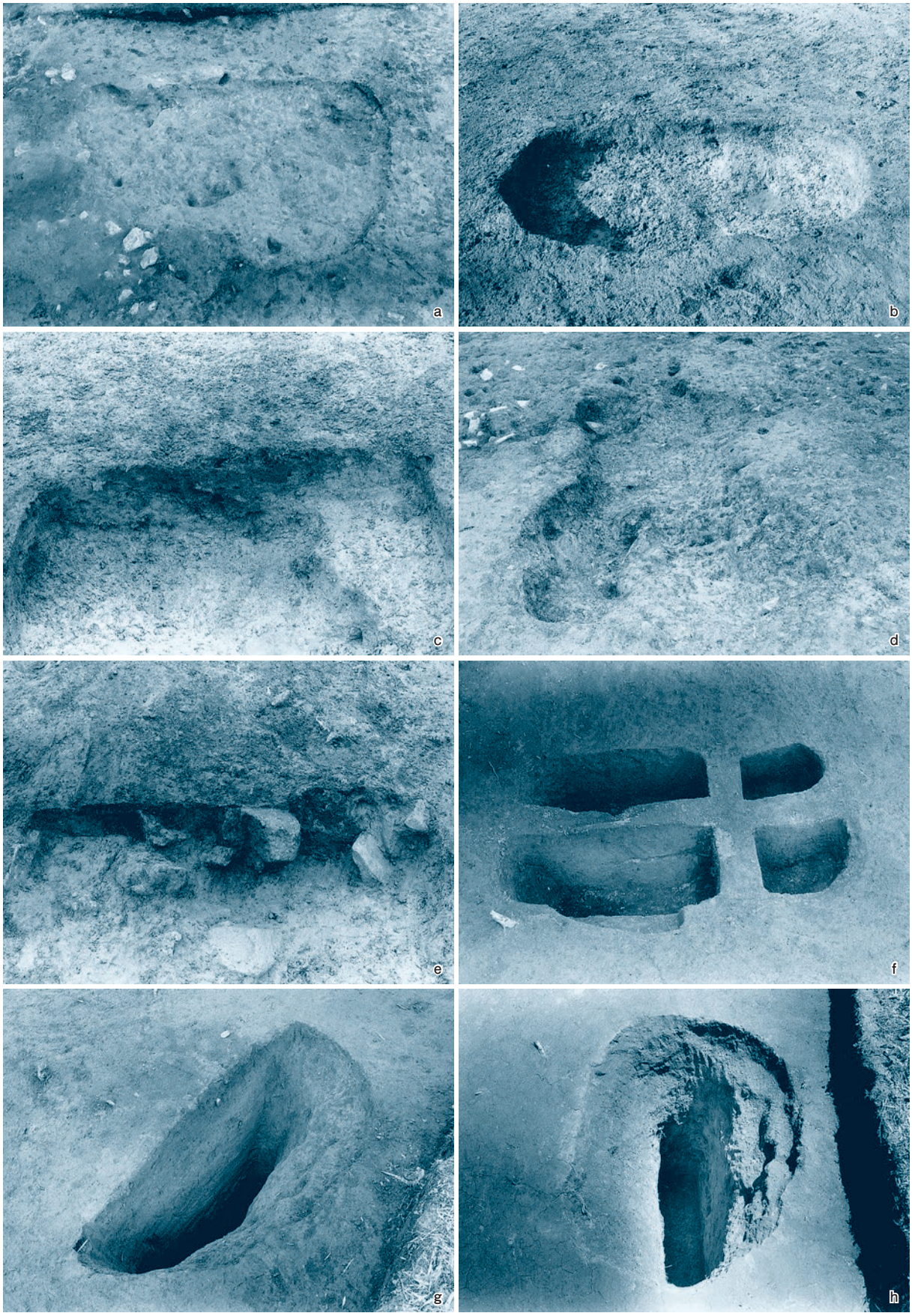
24　16～22号土坑

a　16号土坑全景（南から）　b　17号土坑断面（南から）　c　18号土坑全景（南から）
d　19号土坑断面（南から）　e　20号土坑全景（東から）　f　21号土坑断面（北から）
g　22号土坑全景（北東から）　h　22号土坑断面（北から）



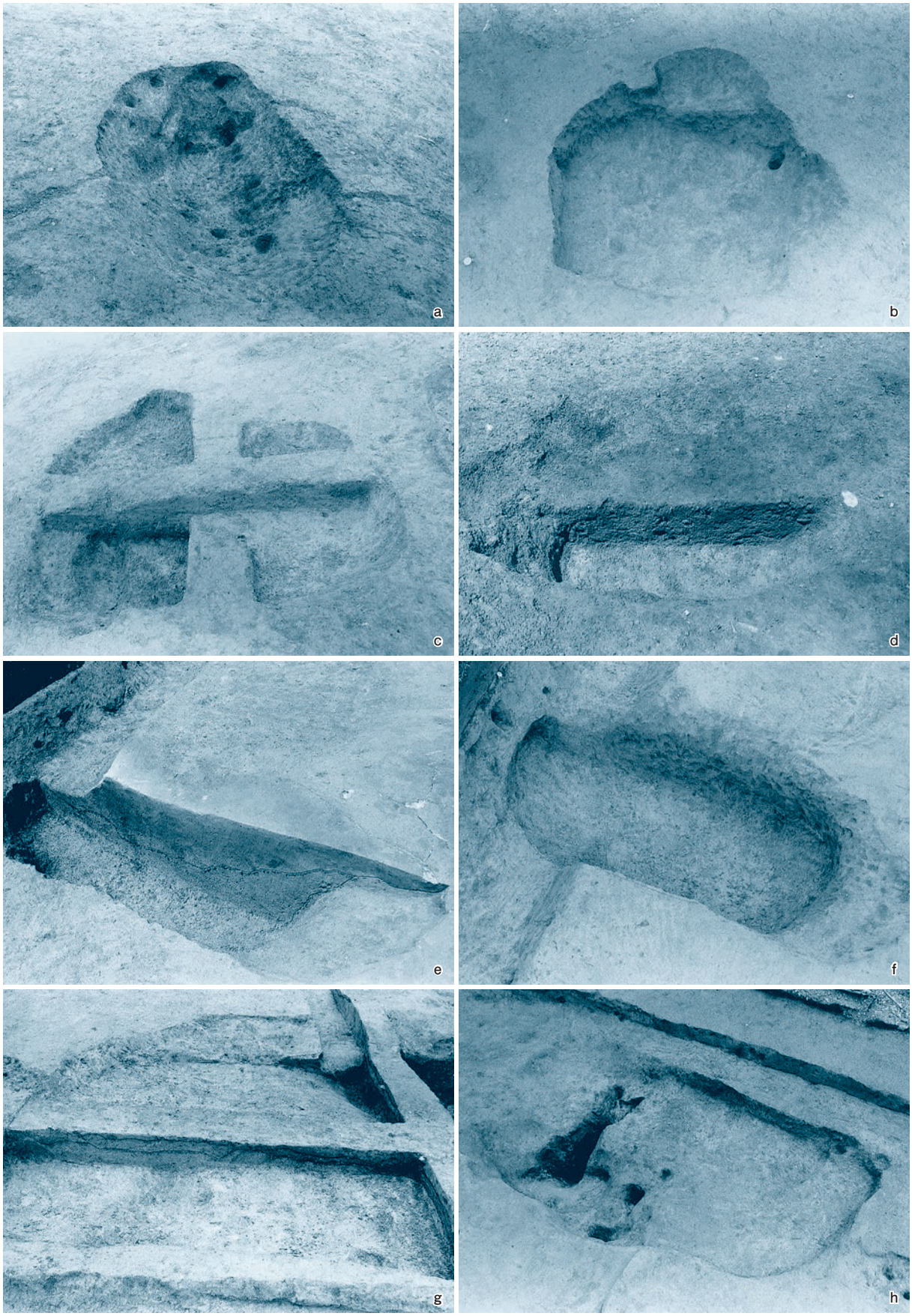
25　23～28号土坑

a　23号土坑全景
b　24号土坑全景（東から）
c　25号土坑全景（北西から）
d　25号土坑遺物出土状況（西から）
e　26号土坑全景（東から）
f　26号土坑断面（東から）
g　27号土坑断面（南から）
h　28号土坑全景（南から）



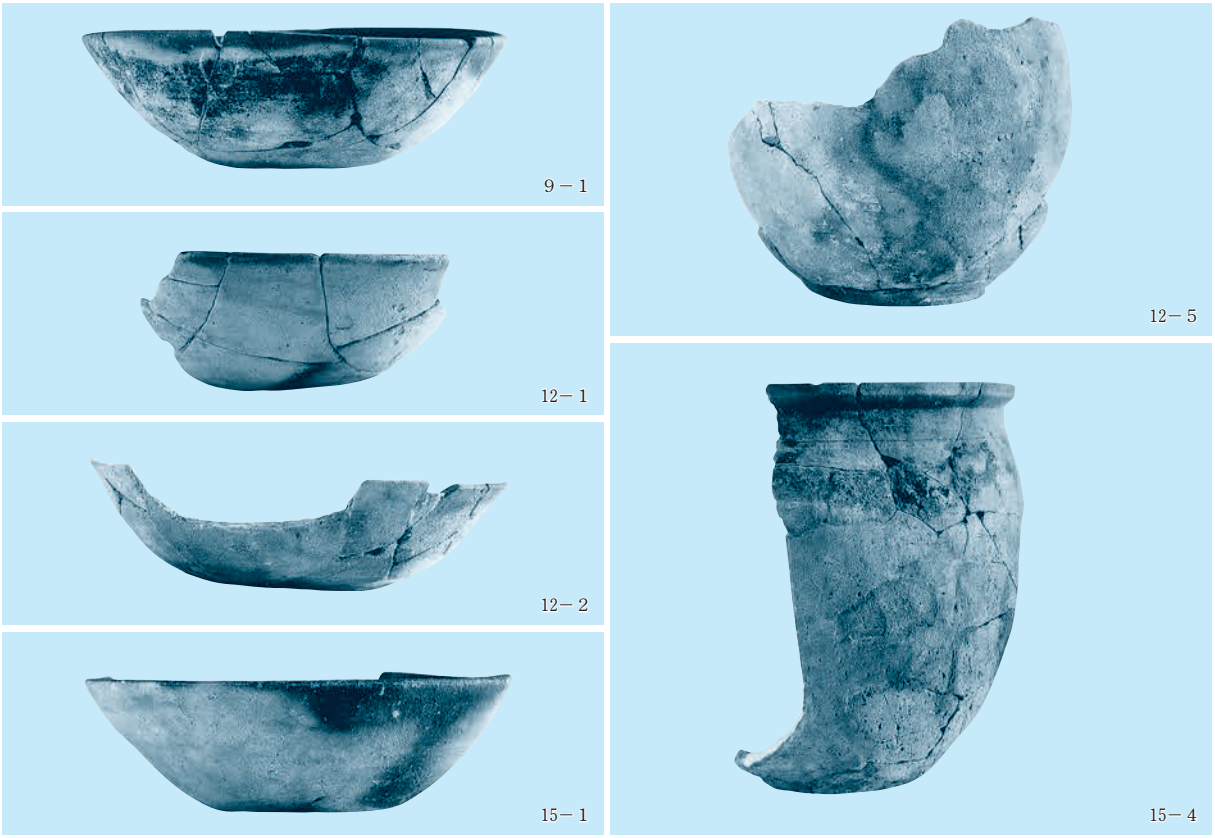
26　29～35号土坑

a　29号土坑全景（北から）　b　30号土坑全景（南から）　c　30号土坑断面（東から）
d　31号土坑全景（西から）　e　32号土坑断面（東から）　f　33号土坑断面（北東から）
g　34号土坑断面（南西から）　h　35号土坑全景（南から）

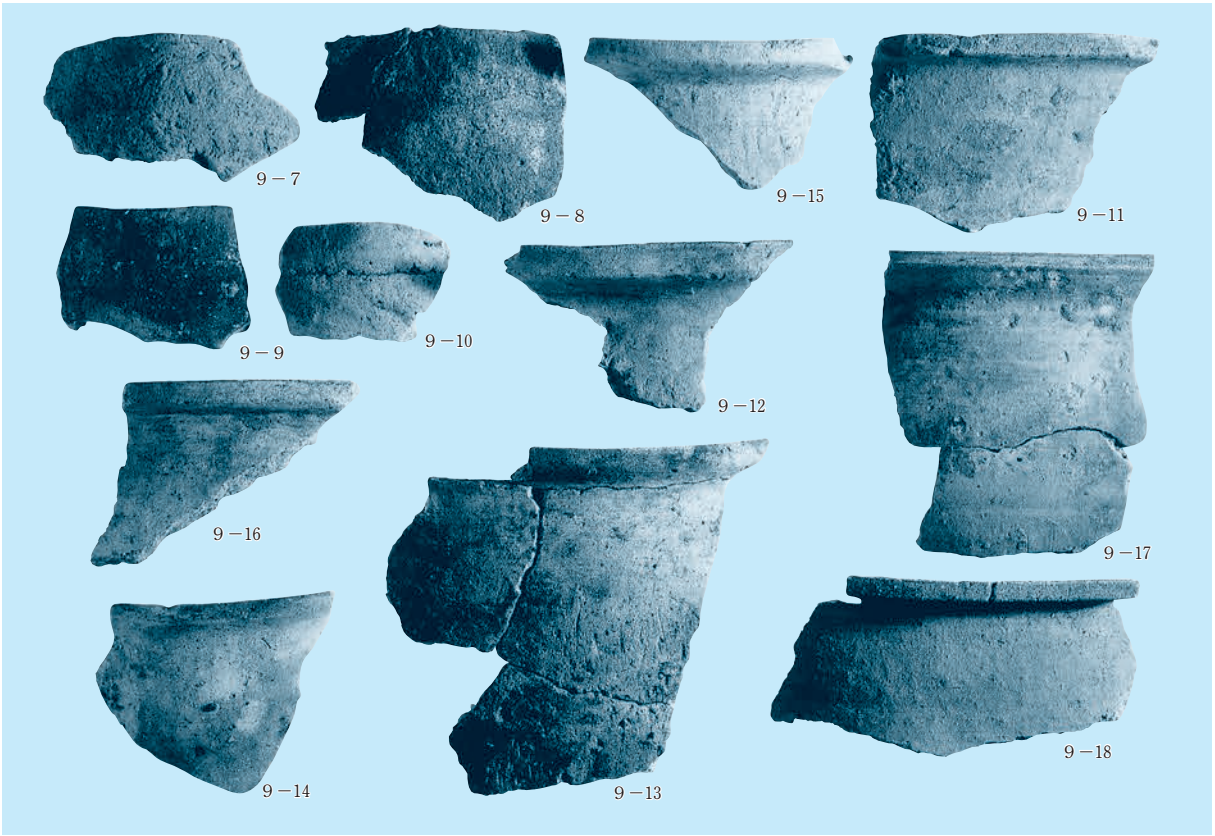


27　36～39号土坑，１号特殊遺構

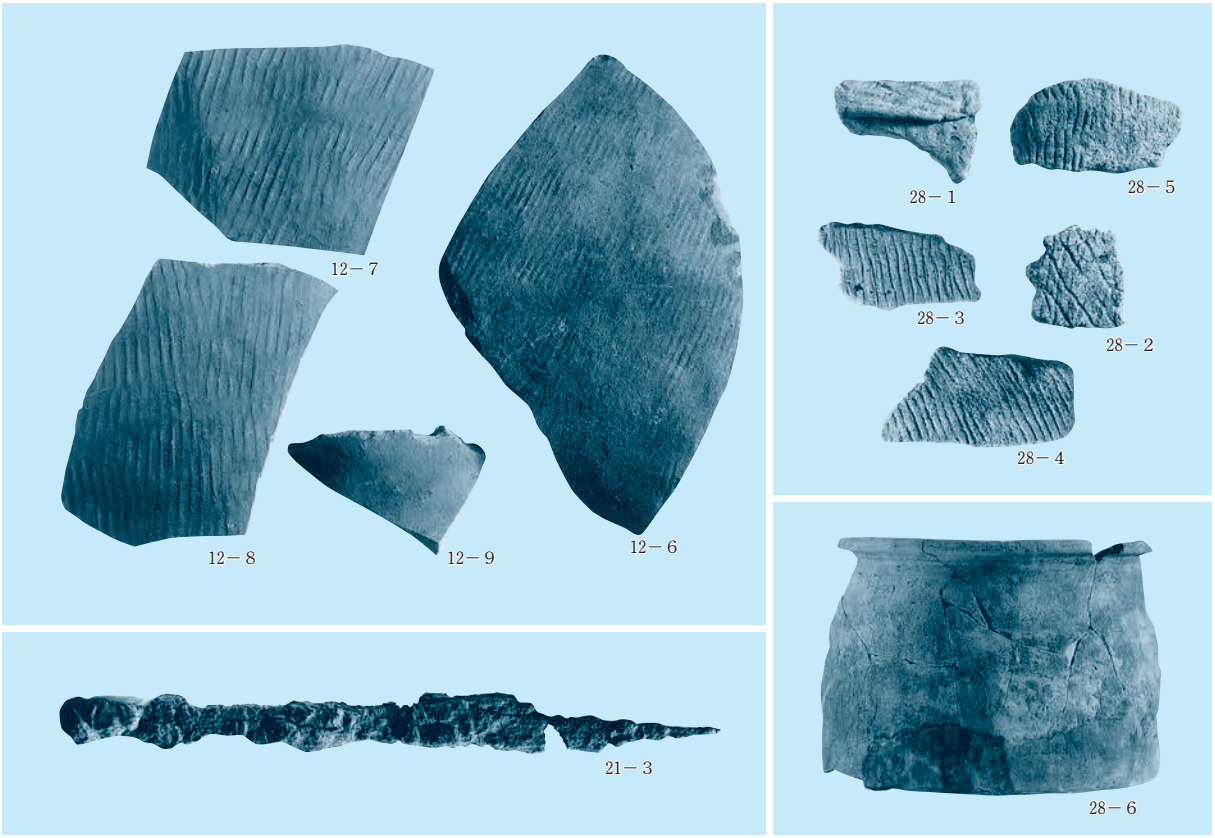
a　36号土坑全景(北東から)　b　37号土坑全景(北東から)　c　37号土坑断面(西から)
d　38号土坑全景(東から)　e　39号土坑断面(南から)　f　39号土坑全景(南から)
g　１号特殊遺構掘形断面(東から)　h　１号特殊遺構全景(西から)



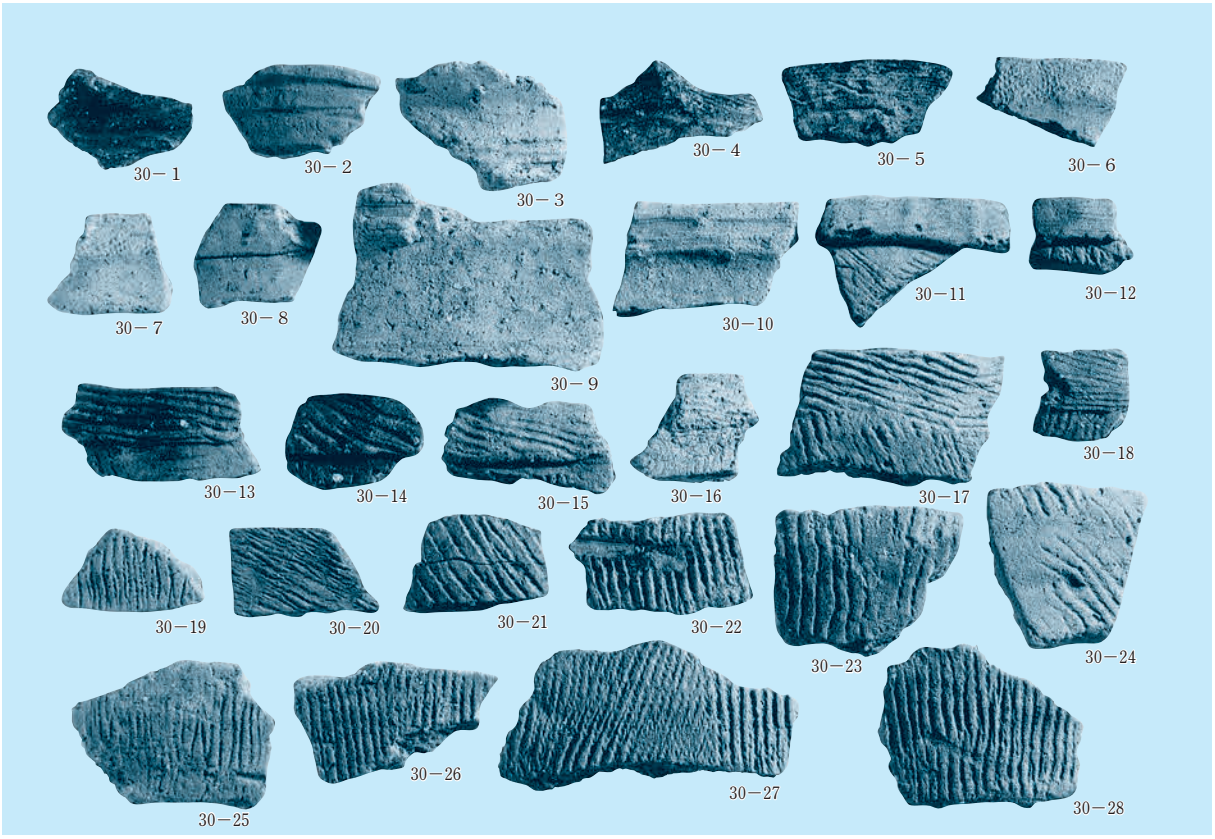
28　１～３号住居跡出土土師器



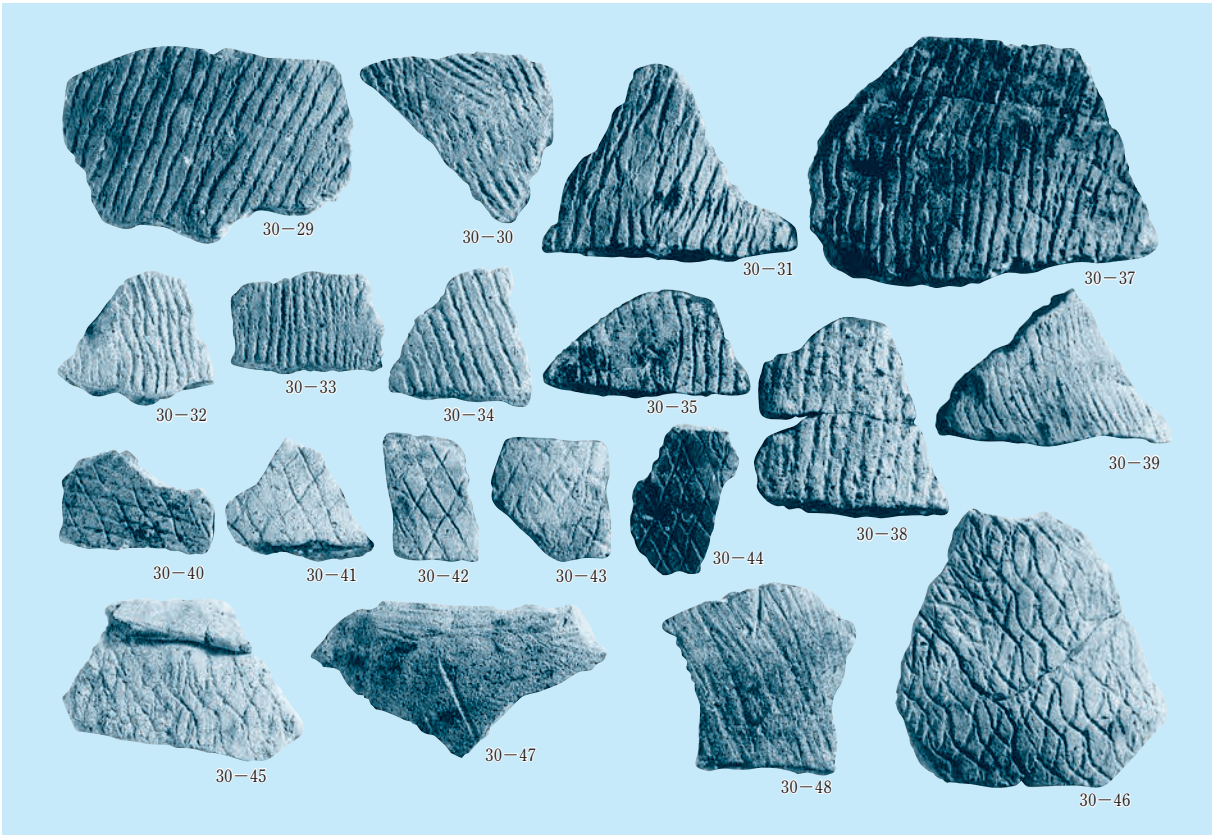
29　１号住居跡出土土師器



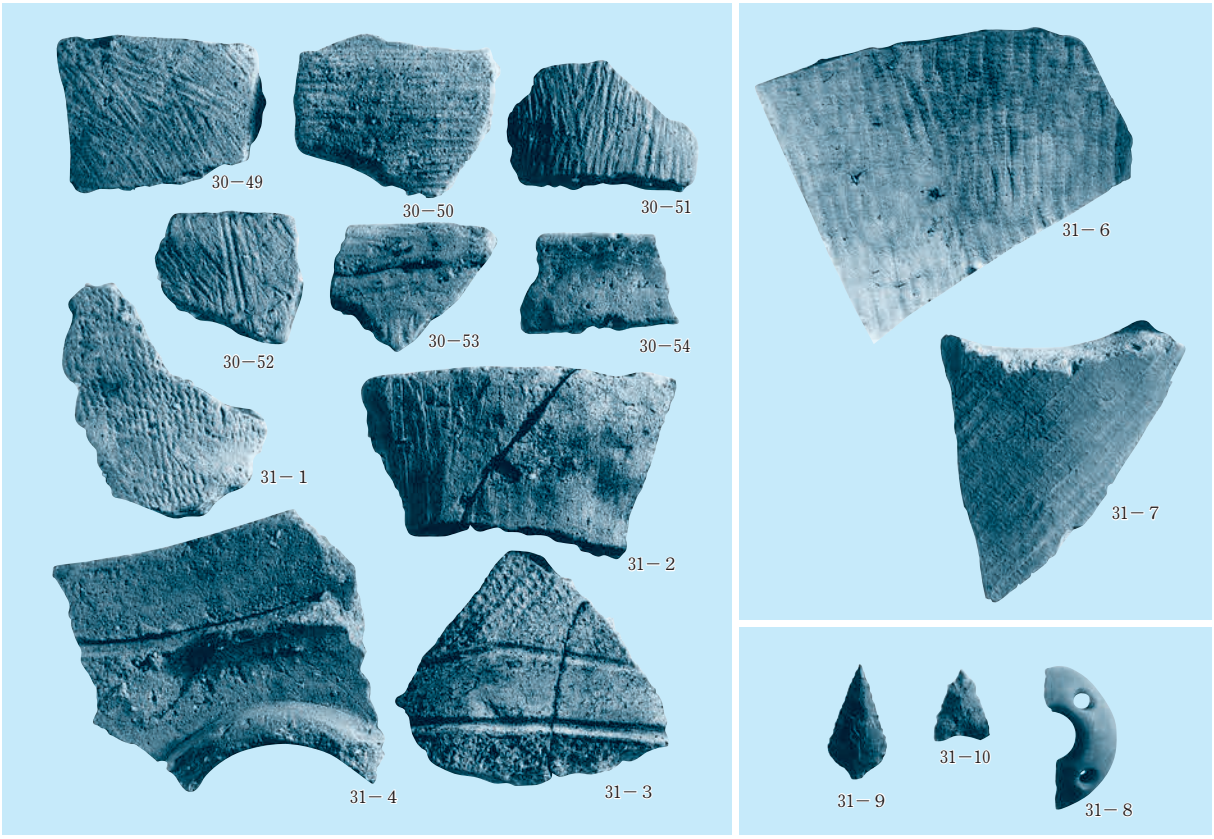
30　２号住居跡，１号道跡，20・25号土坑出土縄文土器・土師器・須恵器・鉄製品



31　遺構外出土縄文土器(1)



32　遺構外出土縄文土器(2)



33　遺構外出土縄文土器・須恵器・石器・石製品

報 告 書 抄 録

ふ り が な	じょうばんじどうしゃどういせきちょうさほうこく
書 名	常磐自動車道遺跡調査報告46
シ リ ー ズ 名	福島県文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第441集
編 著 者 名	安田　稔・吉田　功・国井秀紀・青山博樹・門脇秀典・小河厚子・佐藤　洋・管野和博・中野幸大・鈴木裕一郎・関根昌毅
編 集 機 関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査グループ 〒960-8115　福島県福島市山下町１-25　TEL024-534-2733
発 行 機 関	福島県教育委員会 〒960-8688　福島県福島市杉妻町２-16　TEL024-521-1111
発 行 年 月 日	2008年２月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
原（はら） B	福島県南相馬市原町区馬場字原	206	00288	37°36′50″	140°55′40″	2006/4.11~8.11	5,200㎡	道路（常磐自動車道）建設に伴う事前調査
大田切（おおたぎり）	福島県南相馬市小高区大富字大田切	563	00135	37°33′55″	140°56′60″	2006/4.11~8.10 2007/4.12~5.15	8,100㎡ 500㎡	

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
原（はら） B	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土坑 焼土遺構 土器埋設遺構 特殊遺構 ピット	13軒 39基 23基 ２基 ２基 ６基	縄文土器 土製品 石器	縄文早期末葉～前期最初頭，縄文中期前葉の集落跡である。これらの集落は，時期の違いにより分布域が異なる。出土遺物は，縄文早期末葉～前期最初頭では撚糸文土器が主体に見られ，縄文中期前葉では，大木７b式土器に関東系の阿玉台Ⅰa式土器が共伴することが確認されている。
大田切（おおたぎり）	集落跡	縄文時代 平安時代 近・現代	竪穴住居跡 木炭窯跡 溝跡 道跡 土坑 特殊遺構	３軒 ２基 １条 １条 39基 １基	縄文土器 石器・石製品 土師器 須恵器 炉壁片 鉄製品 かわらけ 陶磁器	平安時代の竪穴住居跡からは製鉄炉の炉壁片が複数確認され，近接の遺跡からの搬入品と考えられる。

福島県文化財調査報告書第441集

常磐自動車道遺跡調査報告46

原（はら） B 遺 跡
大田切（おおたぎり）遺跡

平成20年２月29日発行

編　集　財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査グループ

発　行　福島県教育委員会　（〒960－8688）　福島市杉妻町２－16

財団法人福島県文化振興事業団　（〒960－8116）　福島市春日町５－54

東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所　（〒976－0042）　相馬市中村字塚の町65－16

印　刷　株式会社日進堂印刷所　（〒960－2194）　福島市庄野字柿場１－１